

佐久市

NISHICHIKATSU

# 西近津遺跡群

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

－佐久市内2－

第1分冊（本文編）

2015.3

国土交通省関東地方整備局  
長野県埋蔵文化財センター

## はじめに

中部横断自動車道は、静岡県静岡市を起点に、山梨県甲斐市を經由して長野県小諸市に至る延長約 132km の高速自動車国道です。中部横断自動車道により、新東名高速道路、中央自動車道及び上信越自動車道が接続され、周辺地域における生活、産業、観光面の活性化、水害時の交通寸断の改善、地震災害時の緊急輸送路の機能向上、高次医療施設への迅速な移動が可能となるなど、様々な効果が期待されます。

今回、報告する西近津遺跡群は長野県佐久市に所在する集落遺跡です。古くは縄文時代から集落が営まれ、弥生時代には地域で最大規模の集落となります。全長 18m を測る国内最大級の超大型竪穴住居跡の発見は、高度な建築技術を基礎として計画的な集落形成と運営が行われていたことを教えてくれます。

古代に目を向けますと、有力者の象徴である銅印や皇朝十二銭、「美濃国」刻印土器をはじめとする文字を記した土器が多数発見されました。そうした文字資料は、ここに集落が営まれた意味や地域内での勢力の大きさ、他地域との交流の広さと深さを、今を生きる私たちにはっきりと伝えてくれます。

この地域史における新資料が、今・未来における地域の在り方を考える一助となることを願っています。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局の方々、長野県教育委員会や佐久市・佐久市教育委員会、地権者や区長をはじめとする地元住民の皆さま、そして発掘作業や整理作業に従事協力いただいた多くの方々に、心から敬意と感謝の意を表す次第であります。



## 例 言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する<sup>にしちかついせきぐん</sup>西近津遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』23～31で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系を用いている。

- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導を得た。（敬称略）

### ○業務委託

測量・空中写真撮影	：（有）エアロサービス（平成18年度） （有）測地（平成18年度） （株）協同測量社（平成19年度） 新日本航業（株）（平成19年度） 地図測量（株）（平成19年度） （株）みすず総合コンサルタント（平成19年度） （有）写真測図研究所（平成20年度）
空中写真合成	：新日本航業（株）（平成20年度）
全体図トレース	：（有）アルケリサーチ
遺物洗浄・注記	：第一合成（株）（平成20・21年度） （株）歴史の杜（平成20年度）
微細遺物抽出	：（株）歴史の杜（平成23年度）
土器実測・トレース	：大成エンジニアリング（株）（平成21・26年度） アルカ（株）（平成23年度） パスコ（株）（平成23年度）
金属製品保存処理・分析	：（株）文化財ユニオン（平成23・24年度）
金属製品成分分析	：住友金属テクノロジー（株）（平成21年度）
鍛冶関連遺物分析	：JFEテクノリサーチ（株）（平成25年度）
須恵器産地推定分析	：（株）古環境研究所（平成23年度）
自然科学分析	：パリノ・サーヴェイ（株）（平成18・20・21・23年度） （株）パレオ・ラボ（平成21年度）

年代測定・樹種同定：パリノ・サーヴェイ（株）（平成 21 年度）

（株）加速器分析研究所（平成 25 年度）

黒曜石産地推定分析：（株）パレオ・ラボ（平成 25 年度）

遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）（平成 26 年度）

#### ○調査指導

遺跡・遺構調査指導：東北芸術工科大学教授 宮本長二郎

（平成 18 年度当時・19 年・20 年・25 年度）

京都大学教授 金田章裕（平成 19 年度当時）

奈良文化財研究所遺跡整備研究室室長 山中敏史（平成 19 年度当時）

人骨・動物骨調査指導・鑑定：京都大学名誉教授 茂原信生（平成 19 年～26 年度）

総合研究大学院大学准教授 本郷一美（平成 22 年～26 年度）

獨協医科大学技術職員 櫻井秀雄（平成 23 年～26 年度）

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長 松井章（平成 24 年度当時）

石材調査指導・鑑定：信州大学教授 原山 智（平成 26 年度）

弥生土器調査指導：長野県考古学会員 小山岳夫（平成 25 年度）

土器・陶硯調査指導：國學院大學教授 吉田恵二（平成 23 年度当時）

文字資料調査指導：人間文化研究機構理事 平川 南（平成 19 年・26 年度）

弥生時代資料調査指導：大阪府狭山池博物館館長 工楽善通（平成 25 年度）

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表す。（敬称略）

赤澤徳明、姉崎智子、石川日出志、稲森幹大、岩木智恵、牛嶋 茂、大寫正之、金関 恕、桐原 健、久野正博、倉澤正幸、小泉祐紀、合田幸美、清水重敦、篠原和大、鈴木康二、須藤隆司、高島英之、田中弘志、千野 浩、寺沢 薫、傳田伊史、富沢一明、中村一郎、中村由克、中山誠二、欄宜田佳男、箱崎和久、馬場 基、濱 修、原 明芳、久田正弘、福島正樹、藤澤良祐、保坂和博、保坂康夫、山田昌久、山本崇、渡辺晃宏、佐久市教育委員会、佐久考古学会

長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充則、工楽善通、丸山敏一郎、高橋龍三郎）

長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会（小野 昭、笹澤 浩、会田 進）

- 8 第 4 分冊巻頭写真 5 に使用した佐久市長土呂地区の航空写真は新日本航業株式会社より提供を得た。

- 9 発掘調査・整理作業の担当者等は第 1 章第 2 節に記載した。

- 10 本書全体の編集は柳澤亮が行い、調査第 2 課長岡村秀雄が校閲し、調査部長大竹憲昭が総括した。

執筆・編集分担は下記のとおりである。

岡村 秀雄 第 7 章第 2 節 1～5

長谷川 桂子 第 2 分冊編集、遺構観察表作成

寺内 貴美子 第 3 分冊編集、土器観察表作成

若林 卓 第 7 章第 2 節 6、第 3 節 1（方形周溝墓 SM8001 出土の土器群）

高津 希望 第9章第1～6節、第7節5、遺物観察表作成

廣瀬 昭弘 第5章第3節1

第9章第6節1、2、3は茂原信生氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏より、第9章第6節4は覚張隆史氏より玉稿を賜った。

柳澤 亮 上記以外

11 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。

本報告PDF、写真カラーデータ、自然科学分析報告書、観察表、その他

## 凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付してある。発掘調査で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、遺物種ごとに登録番号を付してある。本報告の本文・図表・写真では共通して遺物番号を用いている。遺物番号は下記のとおりである。

土器 No.00001 から始まる五桁の通し番号  
土製品 No.10001 から始まる五桁の通し番号  
石器・石製品 No.20001 から始まる五桁の通し番号  
金属製品・鍛冶関連遺物 調査年ごとに登録番号を付けている。表記は左から調査年（西暦年）の下2桁の次に、金属の英訳 Metal の頭文字 M を冠し、通し番号を付す。  
(例) 06M081 2006年調査の金属製品No.81  
骨・骨製品 金属製品同様、調査年ごとに登録番号を付けている。表記は左から調査年（西暦年）の下2桁の次に、骨の英訳 Bone の頭文字 B を冠し、通し番号を付す。  
(例) 08B14 2008年調査の骨No.14
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
  - (1) 遺構実測図  
竪穴住居跡・竪穴状遺構、掘立柱建物跡 1:80 古墳・周溝墓 1:40～1:120  
土坑・遺物集中 1:40～80 柵列 1:80  
溝跡 1:80～1:100 遺構内部施設・遺物微細 1:40
  - (2) 遺物実測図  
土器・土器拓影・陶磁器 1:4 縄文土器拓影 1:3 大形土器 1:6  
石鏃等小形石器・装身具・原石 2:3 石核・石斧・磨石・敲石など 1:3  
台石・石皿など 1:6 金属製品 2:3～1:2 骨製品・骨 1:2
  - (3) 遺物写真  
縄文土器 1:3～1:4 弥生土器 1:4  
土器 供膳具 1:3 煮沸具・貯蔵具・瓦 1:4～1:6 土製品 2:3～1:2  
石器・石製品 1:1～1:6 金属製品 1:2～2:3  
ガラス小玉 1:1 鉄滓・羽口 1:3 木製品 1:3 骨製品 2:3
- 4 遺物の器種名については細分せず、過去の埋文センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。
- 5 基本層序および遺構埋土の色調と土器の色調は「新版 標準土色帖 2005年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局 監修）」による。
- 6 実測図中の記号・トーンなどについては、第2分冊（遺構図版編）、第3分冊（遺物図版編）の凡例を参照されたい。

第1分冊 (本文編)

第2分冊 (遺構図版編)

第3分冊 (遺物図版編)

第4分冊 (写真図版編)

第1分冊 (本文編) 目次

はじめに

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査に至る経緯

第1節 事業の概要と保護協議	1
1. 中部横断自動車道の事業計画	1
2. 埋蔵文化財の保護協議と調査	1
3. 文化財保護法の手続き	5
第2節 発掘作業と整理作業の体制	5

第2章 調査の経過

第1節 発掘作業の経過	7
1. 発掘作業の方法	7
(1) 遺跡名称と遺跡記号 (2) 遺構名称と遺構記号 (3) 調査区(グリッド)の設定と呼称	
(4) 区割りと呼称 (5) 遺構の発掘 (6) 測量と写真 (7) 遺跡の公開 (8) 調査指導	
(9) 調査の検討会 (10) 超大型竪穴住居跡の現地保存	
2. 日誌抄	11
第2節 整理作業の経過	13
1. 整理作業の方法	13
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業 (3) 報告書の作成 (4) 資料の収納	
2. 日誌抄	14

第3章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	17
第2節 歴史的環境	21

第4章 遺跡の概観と調査の概要

第1節 遺跡の概観	29
第2節 調査の概要	31
第3節 基本層序	33

## 第5章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 概観	35
第2節 遺構	35
1. 竪穴住居跡	35
2. 土坑	36
3. 遺物集中	36
4. 柱穴群	36
第3節 遺物	37
1. 土器・土製品	37
2. 石器	39

## 第6章 弥生時代の遺構と遺物

第1節 概観	41
第2節 遺構	41
1. 竪穴住居跡	41
2. 円形周溝墓・方形周溝墓	76
3. 土坑墓・木棺墓	80
4. 土坑	82
5. 遺物集中	86
6. 溝跡	86
第3節 遺物	87
1. 概観	87
2. 土器	88
(1) 弥生時代中期の土器 (2) 弥生時代後期の土器 (3) ミニチュア土器 (4) 人形土器	
3. 土製品	90
(1) 匙形土製品 (2) 土製紡錘車 (3) 土製玉類 (4) 土器片加工板 (5) 不明土製品	
4. 石器・石製品	92
(1) 磨製石鏃 (2) 磨製石斧 (3) みがき石 (4) 石製玉類 (5) 小形砥石 (6) 大形砥石 (7) 磨石 (8) 敲石 (9) 台石 (10) 石皿	
5. 金属製品	94
(1) 銅釧 (2) 銅鏃 (3) 鉄釧 (4) 鉄鏃 (5) 鉄剣 (6) 刀子 (7) 工具 (8) 鉄片・集合鉄片	
6. ガラス製品	96
7. 骨角製品・未製品	96
8. 炭化物	97

## 第7章 古墳時代～古代の遺構と遺物

第1節 概観	98
第2節 遺構	98
1. 竪穴住居跡	98

2.	掘立柱建物跡	157
3.	柵列	157
4.	土坑墓（木棺墓）	157
5.	土坑	158
6.	方形周溝墓	163
7.	溝跡	165
8.	方形区画状遺構	167
第3節	遺物	167
1.	土器	167
2.	土製品・瓦	169
3.	石器・石製品	169
4.	金属製品	170
5.	骨	172
6.	炭化物	172
第8章 中世・近世の遺構と遺物		
第1節	概観	173
第2節	遺構	173
1.	竪穴状遺構	173
2.	土坑墓	174
3.	井戸跡	174
4.	土坑	174
5.	溝跡	174
第3節	遺物	178
1.	土器・陶磁器	178
2.	石器・石製品	178
3.	金属製品	179
4.	骨	179
5.	木製品	179
6.	炭化物	179
第9章 科学分析・鑑定		
第1節	概要	180
第2節	土器に関する分析	181
1.	須恵器の胎土分析	181
2.	土器付着物の分析	185
第3節	石器に関する分析	188
1.	黒曜石の産地推定分析	188
第4節	金属製品・加工に関する分析	192
1.	銅印の分析	192

2.	鍛冶関連遺物の分析	197
3.	その他金属製品の分析	200
第5節	炭化物・木製品に関する分析	206
1.	年代測定	206
2.	樹種同定	210
3.	微細物分析・種実同定	218
第6節	土壌に関する分析	224
1.	土壌分析	224
第7節	出土骨に関する分析	236
1.	西近津遺跡群出土の人骨について	236
2.	西近津遺跡群出土の動物骨について	239
3.	西近津遺跡群出土のウシ・ウマ骨について	246
4.	西近津遺跡群出土ウマの安定同位体分析	266
5.	西近津遺跡群出土ウマ骨の年代測定	272
第10章	総括	
1.	縄文時代	274
2.	弥生時代	274
3.	古墳時代	280
4.	奈良・平安時代	280
5.	中世	284
	引用・参考文献	286
	付表	292
	抄録	

－ 挿 図 目 次 －

第 1 図	中部横断自動車道と調査対象遺跡…	3	第 27 図	銅印の赤色顔料とベンガラ ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )の IR スペクトルの 重ね書き図……………	194
第 2 図	調査区 (グリッド) の呼称方法 と区割り……………	9	第 28 図	銅印の赤色顔料とケイ酸塩の IR スペクトルの重ね書き図……………	194
第 3 図	中部横断自動車道 (佐久小諸 JCT ～佐久南 IC) と調査対象遺跡……………	18	第 29 図	銅印の顕微鏡観察写真……………	195
第 4 図	佐久周辺の地質図……………	19	第 30 図	住居跡出土赤色顔料の蛍光 X 線 分析結果……………	196
第 5 図	佐久平北部の田切り・低地と遺跡 範囲図……………	20	第 31 図	精錬滓と鍛冶滓の分類……………	199
第 6 図	周辺の遺跡分布図……………	24	第 32 図	$\text{FeO}_n\text{-SiO}_2\text{-TiO}_2$ 系鉄滓の 平衡状態図……………	199
第 7 図	西近津遺跡群と周辺遺跡の 調査状況……………	30	第 33 図	輔羽口の耐火度と粘土成分の 関係……………	199
第 8 図	基本層序……………	34	第 34 図	石製腰帯飾具の線状金属 (20001) の蛍光 X 線分析結果……………	202
第 9 図	土器片加工板の平面形状と 周縁加工……………	91	第 35 図	線状金属付着粘着テープの蛍光 X 線分析結果……………	202
第 10 図	土器片加工板の大きさと 周縁加工……………	92	第 36 図	刀子 (07M060) の装着金具の 蛍光 X 線分析……………	202
第 11 図	西近津遺跡群出土須恵器の $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 分布図……………	184	第 37 図	同定試料採取位置……………	203
第 12 図	主な窯跡の須恵器胎土の $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 分布図……………	184	第 38 図	金属製品付着木質 (1)……………	204
第 13 図	西近津遺跡群出土須恵器の $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 分布図……………	184	第 39 図	金属製品付着木質 (2)……………	205
第 14 図	主な窯跡の須恵器胎土の $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 分布図……………	184	第 40 図	SK6062 の主要珪藻化石群集の 層位分布……………	233
第 15 図	西近津遺跡群出土須恵器の $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 分布図……………	184	第 41 図	SK6063 の主要珪藻化石群集の 層位分布……………	233
第 16 図	主な窯跡の須恵器胎土の $\text{K}_2\text{O-CaO}$ 分布図……………	184	第 42 図	SK8149 の主要珪藻化石群集の 層位分布……………	234
第 17 図	西近津遺跡群出土須恵器の $\text{Rb}_2\text{O-SrO}$ 分布図……………	184	第 43 図	SK8210 の主要珪藻化石群集の 層位分布……………	234
第 18 図	西近津遺跡群出土須恵器の $\text{CaO/K}_2\text{O-SrO/Rb}_2\text{O}$ 分布図……………	184	第 44 図	西近津遺跡群出土ウマの炭素・ 窒素安定同位体比……………	271
第 19 図	黒色付着物および生漆の赤外線 分光スペクトル図……………	186	第 45 図	超大型堅穴住居跡 SB0067 建替状況……………	277
第 20 図	炭素・窒素同位体図……………	186	第 46 図	弥生時代後期の大溝 (SD3006・4006) 想定方向……………	277
第 21 図	転用硯 (00324) 赤色部の蛍光 X 線分析結果……………	187	第 47 図	弥生時代後期の大溝 (SD3006・4006) 遺物出土状況……………	279
第 22 図	転用硯 (00325) 赤色部の蛍光 X 線分析結果……………	187	第 48 図	古代の主な文字資料……………	281
第 23 図	転用硯 (00325) 白色部の蛍光 X 線分析結果……………	187	第 49 図	「美濃国」刻印須恵器と刻印部の 復元……………	283
第 24 図	黒曜石産地推定判別図 (1)……………	191	第 50 図	「美濃国」刻印土器の分布状況……………	283
第 25 図	黒曜石産地推定判別図 (2)……………	191			
第 26 図	銅印および印面赤色顔料の蛍光 X 線分析結果……………	194			

－ 挿 表 目 次 －

第 1 表	佐久小諸 JCT ～佐久南 IC 間 事業と保護協議・調査の経過……………	2	第 33 表	植物珪酸体含量 (3)……………	231
第 2 表	佐久小諸 JCT ～佐久南 IC 間 調査経過……………	4	第 34 表	植物珪酸体含量 (4)……………	231
第 3 表	文化財保護法手続き……………	5	第 35 表	灰像分析による珪化組織片の 産状および植物珪酸体含量 (1)………	232
第 4 表	調査体制……………	5	第 36 表	灰像分析による珪化組織片の 産状および植物珪酸体含量 (2)………	232
第 5 表	周辺遺跡一覧……………	25	第 37 表	花粉分析結果……………	235
第 6 表	西近津遺跡群の調査一覧……………	30	第 38 表	リン酸・腐植分析結果……………	235
第 7 表	石錘の平均値と標準偏差、 変動係数……………	170	第 39 表	西近津遺跡群から出土した 人骨と歯……………	238
第 8 表	科学分析・鑑定一覧……………	180	第 40 表	西近津遺跡群から出土したヒト の上顎歯の計測値と比較資料………	238
第 9 表	蛍光 X 線分析用試料一覧……………	182	第 41 表	西近津遺跡群から出土したヒト の下顎歯の計測値と比較資料………	238
第 10 表	各分布図の領域区分とそこに 含まれる試料……………	183	第 42 表	出土動物骨部位別一覧……………	241
第 11 表	黒色付着物の炭素・窒素安定 同位体比、炭素・窒素含有量、 C/N 比 (00323)……………	186	第 43 表	出土動物骨時代別一覧……………	243
第 12 表	転用硯の蛍光 X 線分析結果……………	187	第 44 表	時代別動物骨一覧 (点数)……………	245
第 13 表	黒曜石分析対象一覧……………	189	第 45 表	イノシシとニホンジカの部位別 出土状況 (点数)……………	245
第 14 表	黒曜石産地 (東日本) の判別群 名称……………	189	第 46 表	西近津遺跡群出土のウシ……………	252
第 15 表	測定値および産地推定結果……………	190	第 47 表	西近津遺跡群出土のウマ (1・2 区)……………	254
第 16 表	器種別の産地推定結果……………	190	第 48 表	西近津遺跡群出土のウマ (3～6・8 区)……………	254
第 17 表	蛍光 X 線分析結果……………	193	第 49 表	西近津遺跡群出土のウマ (7 区)………	260
第 18 表	鍛冶関連遺物試料と調査項目……………	198	第 50 表	西近津遺跡群出土のウマ四肢骨 計測値……………	261
第 19 表	鍛冶関連遺物試料の調査結果……………	199	第 51 表	西近津遺跡群出土のウマ上顎歯 計測値……………	264
第 20 表	石製腰帯飾具の線状金属の蛍光 X 線分析結果……………	202	第 52 表	西近津遺跡群出土のウマ下顎歯 計測値……………	264
第 21 表	分析資料および樹種同定結果……………	202	第 53 表	骨コラーゲンの炭素・窒素安定 同位体分析結果一覧……………	271
第 22 表	放射性炭素年代測定結果および 暦年較正結果……………	208	第 54 表	歯ハイドロキシアパタイトの 炭素・ストロンチウム同位体 分析結果一覧……………	271
第 23 表	樹種同定結果……………	214	第 55 表	骨コラーゲンの放射性炭素 年代測定結果一覧……………	271
第 24 表	時代別樹種構成……………	217	第 56 表	放射性炭素年代測定結果および 暦年較正結果……………	273
第 25 表	微細物分析結果 (1)……………	220			
第 26 表	微細物分析結果 (2)……………	221			
第 27 表	微細物分析結果 (3)……………	222			
第 28 表	微細物分析結果 (4)……………	222			
第 29 表	種実同定結果……………	223			
第 30 表	土壌分析試料一覧……………	229			
第 31 表	植物珪酸体含量 (1)……………	230			
第 32 表	植物珪酸体含量 (2)……………	230			

# 第1章 調査に至る経緯

## 第1節 事業の概要と保護協議

### 1. 中部横断自動車道の事業計画

中部横断自動車道は、日本列島の中央部を横断するように静岡県から山梨県を経て長野県を結ぶ国土開発幹線自動車道である。静岡県静岡市を起点とし、山梨県甲斐市を經由し、中央自動車道と一部重複し、長野県小諸市に至る、延長約132kmが高速自動車国道として整備される。これにより上信越自動車道を介して日本海側地域と太平洋側地域が高速自動車道網で結ばれると共に、上信越自動車道・北関東自動車道と一体となり、東京から放射状に延びる東名・新東名高速道路・中央自動車道・関越自動車道・東北自動車道・常磐自動車道と接続した「関東大環状連携軸」のネットワークが形成される。

中部横断自動車道の長野県内分は約45kmで、小諸市の佐久小諸ジャンクション（以下JCT）で上信越自動車道と連結する。

中部横断自動車道の事業経緯や埋蔵文化財の保護・調査などについては第1表にまとめた。

本事業は、昭和62年6月に高規格幹線道路網として閣議決定され、同年9月、静岡県清水市（現静岡市）～長野県佐久市の間が国土開発幹線自動車道の新規追加路線として決定された。平成3年12月に長野県八千穂村（現佐久穂町）～佐久市の約23km間が基本計画決定され、平成8年12月、佐久南インターチェンジ（以下IC）～佐久小諸JCTの約8km間が上信越自動車道の追加インターとして整備計画決定された。

整備計画の決定を受け、平成10年4月、日本道路公団（当時）に対し同区間の施工命令が出され、事業が本格化した。また、同年12月には同区間を含む八千穂村から佐久市間の整備計画が決定された。その後、平成15年12月の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、新直轄方式に切り替わる区間の整備計画の変更が審議・議決され、翌16年1月八千穂IC（仮称）～佐久小諸JCT間は新直轄方式での整備計画に変更された。新直轄方式の整備計画では国が4分の3、地方が4分の1の負担により、国土交通省が直轄事業として高速自動車道を整備し、完成後は無料開放される。

この整備計画の変更により日本道路公団への施工命令は撤回され、平成18年度からは国土交通省関東地方整備局の直轄事業として事業は進められている。平成23年3月、中部横断自動車道長野県内分としては初めて佐久南IC～佐久小諸JCT間の供用が開始された。この供用開始に伴い佐久市街地の交通混雑の緩和などの効果が上がっている。尚、八千穂IC（仮称）～佐久南IC間は埋蔵文化財の調査と並行して本体工事も実施されている。

### 2. 埋蔵文化財の保護協議と調査

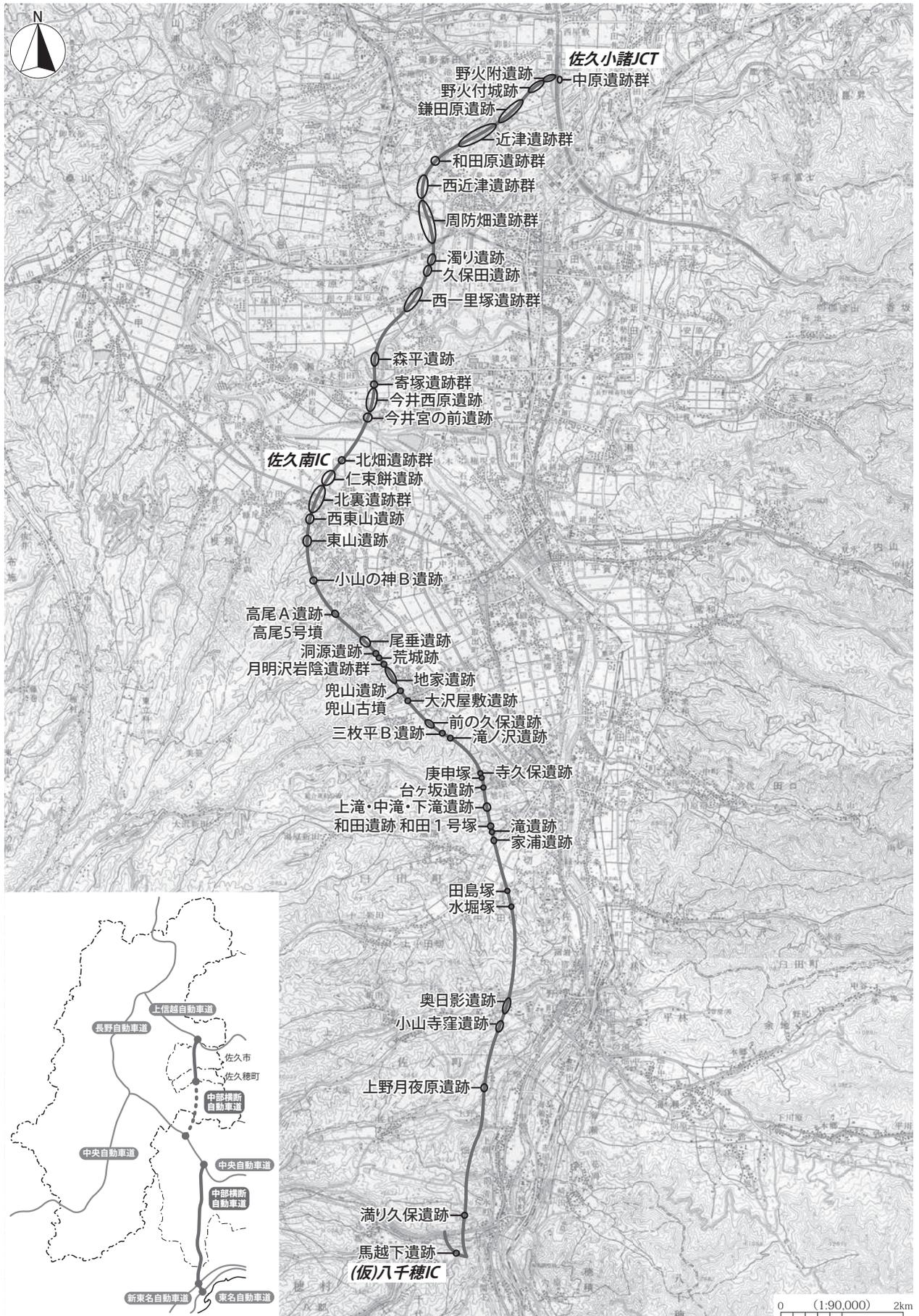
長野県教育委員会（以下 県教委）は平成3年の中部横断自動車道八千穂村～佐久市間の基本計画決定を受け、平成6年度から建設予定地内の埋蔵文化財保護のため、予想されるルートの幅1km前後を関係市町村教育委員会（以下 教委）の協力のもと、遺跡の位置確認などの詳細分布調査や遺跡隣接地での試掘調査等を実施した（県教委1997・2000・2003・2007）。

佐久南IC～佐久小諸JCT間の埋蔵文化財については、平成11年日本道路公団と文化庁、日本道路公団と県教委との保護協議により、記録保存が決定された。これに伴う発掘調査は県教委が日本道路公団か

第1章 調査に至る経緯

第1表 佐久小諸JCT～佐久南IC間 事業と保護協議・調査の経過

	事業	埋文	調査遺跡	整理遺跡	契約先
S 62 (1987)	6/30 高規格幹線道路網として閣議決定				
S 62 (1987)	9/1 静岡県清水市（現静岡市）～長野県佐久市 L 132km 国土開発幹線自動車道の新規追加予定路線として決定				
H 3 (1991)	12/20 八千穂村（現佐久穂町）～佐久市 L 23km基本計画決定				
H 6 (1994)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮) 八千穂IC～佐久小諸JCT			
H 8 (1996)	12/27 佐久南IC～佐久小諸JCT L 8km 整備計画決定 <上信越自動車道の追加ICとして>				
H 9 (1997)	2/5 山梨県長坂町（現北杜市）～八千穂村（現佐久穂町） L 38km 基本計画決定				
H 10 (1998)	4/8 佐久南IC～佐久小諸JCT L 8km 施工命令 <日本道路公団へ> 12/25 八千穂村（現佐久穂町）～佐久市 L 23km 整備計画決定（佐久南IC～佐久小諸JCT間含む）	県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮) 八千穂IC～佐久小諸JCT			
H 11 (1999)		佐久南IC～佐久小諸JCT 埋蔵文化財保護協議 (日本道路公団、文化庁、県教委) 日本道路公団：文化財保護法第57条の3通知 (東建用管第462号 H11.12.13) 文化庁：勧告<記録保存の決定> (委保第45の2 H12.2.7)			
H 12 (2000)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 (仮) 八千穂IC～佐久南IC 試掘調査（野火附遺跡隣接地 遺跡範囲拡大）			
H 13 (2001)		県教委 中部横断道建設予定地遺跡詳細分布調査 山梨県境～（仮）八千穂IC 試掘調査（野火附遺跡隣接地 遺跡範囲拡大）	鎌田原遺跡		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H 14 (2002)		県教委 試掘調査（北畑遺跡群隣接地 遺跡範囲拡大）	野火附遺跡 野火付城跡 鎌田原遺跡		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H 15 (2003)	12/25（第1回国幹会議）新直轄方式に切り替わる区間とする整備計画一部変更議案の審議・議決	県教委 試掘調査（西一里塚遺跡群隣接地 遺跡範囲拡大）	野火附遺跡 北畑遺跡群		(県教委) 日本道路公団 東京建設局
H 16 (2004)	1/30八千穂IC（仮）～佐久小諸JCT L 23km 整備計画の変更 (新直轄方式へ) <日本道路公団への施工命令撤回>	(仮) 八千穂IC～佐久小諸JCT埋蔵文化財保護協議 (国土交通省関東地方整備局、日本道路公団東京建設局、 県教委) 発掘調査における行政手続きについて確認書締結 <日本道路公団が責を負う> 4/1 日本道路公団、県教委、文化振興事業団（埋蔵文化財センター）で協定書締結 埋文センターと道路公団との契約に変更 県教委 試掘調査（森平遺跡新発見）	中原遺跡群 野火附遺跡 野火付城跡 西一里塚遺跡群 寄塚遺跡群 今井西原遺跡		日本道路公団 東京建設局
H 17 (2005)	10/1 日本道路公団民営化 (東日本高速道路株式会社が権利義務を継承)	県教委 試掘調査（濁り遺跡隣接地 久保田遺跡新発見）	西一里塚遺跡群 森平遺跡		日本道路公団 東京建設局 (東日本高速道路株式会社)
H 18 (2006)	国土交通省関東地方整備局による直接事業化	国土交通省：文化財保護法第94条の通知<佐久南IC～ 佐久小諸JCT間含む>（長国調第14号 H18.4.5） 県教委：勧告<記録保存> (18教文第18-33号H18.6.8) 国土交通省・県教委・文化振興事業団3者協定締結 (H18.4.18) H18年度より国土交通省関東地方整備局との契約に変更 県教委（仮）八千穂IC～佐久南IC 現況確認・現地踏査	和田原遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群 森平遺跡 今井宮の前遺跡		国土交通省 関東地方整備局
H 19 (2007)		佐久南IC以南の調査着手	近津遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 濁り遺跡 今井宮の前遺跡 北畑遺跡群		国土交通省 関東地方整備局
H 20 (2008)			近津遺跡群 西近津遺跡群		国土交通省 関東地方整備局
H 21 (2009)		佐久南IC～佐久小諸JCT本格整理作業開始	鎌田原遺跡 近津遺跡群 周防畑遺跡群	西近津遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H 22 (2010)	2011/3/26 佐久小諸JCT～佐久南IC間 供用開始			近津遺跡群 西近津遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H 23 (2011)				近津遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 西一里塚遺跡群他	国土交通省 関東地方整備局
H 24 (2012)				近津遺跡群 西近津遺跡群 周防畑遺跡群 森平遺跡他	国土交通省 関東地方整備局
H 25 (2013)				西近津遺跡群 周防畑遺跡群 森平遺跡他	国土交通省 関東地方整備局
H 26 (2014)				西近津遺跡群 地家遺跡他	国土交通省 関東地方整備局



第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡

ら委託を受け、(一般財団法人)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター(以下 埋文センター)に再委託して実施することとなり、平成13年度から発掘調査が開始された。平成16年、整備計画の変更に伴い国土交通省関東地方整備局・日本道路公団・県教委の三者による保護協議がもたれ、発掘調査における行政手続は日本道路公団が責を負うことが確認された。これを受けて、日本道路公団・県教委・埋文センターの三者により、中部横断自動車道(佐久～佐久南)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書が締結され、同年度から日本道路公団と埋文センターが契約を結ぶことに変更された。平成17年10月、日本道路公団の民営化により、権利義務は東日本高速道路株式会社に引き継がれた。

平成18年4月、中部横断自動車道建設事業を国土交通省関東地方整備局が直轄で実施することに伴い、佐久小諸JCT～八千穂IC(仮称)間の埋蔵文化財について文化財保護法第94条の通知が提出され、県教委により記録保存が決定された。合わせて、国土交通省関東地方整備局・県教委・埋文センターとで中部横断自動車道(佐久JCT～八千穂IC)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施に関する協定書が結ばれ、当年度から国土交通省関東地方整備局と埋文センターが契約を結ぶこととなった。

中部横断自動車道佐久小諸JCT～佐久南IC間約8kmでは、16遺跡が調査対象とされた(第1図)。調査は平成13年度の鎌田原遺跡から着手され、用地取得の終了した遺跡や工事工程が急がれる遺跡から随時調査が進められた。毎年数遺跡の調査を実施し、同区間の調査は平成21年度に全て終了した。

整理作業は平成21年度から着手し、濁り遺跡・久保田遺跡・西一里塚遺跡群の3遺跡については平成23年度、鎌田原遺跡・近津遺跡群・和田原遺跡群については平成24年度、周防畑遺跡群および森平遺跡・寄塚遺跡群・今井西原遺跡・今井宮の前遺跡については平成25年度に報告書を刊行している(第2表)。

なお、佐久小諸JCT～小諸御影料金所間は東日本高速道路株式会社の事業区間とされ、この間に所在する中原遺跡群・野火附遺跡・野火付城跡の3遺跡については同会社事業として整理作業を行い、報告書を刊行している(埋文センター2009)。

また、佐久南IC～八千穂IC(仮称)間に所在する遺跡については平成19年度から調査を着手している。

第2表 佐久小諸JCT～佐久南IC間 調査経過

遺跡名	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	
中原遺跡群															
野火附遺跡															JCT～小諸御影料金所間、東日本高速道路㈱報告書刊行済
野火付城跡															
1 鎌田原遺跡															[中部横断道1] 刊行済
2 近津遺跡群															
3 和田原遺跡群															
4 西近津遺跡群															[中部横断道2] 本報告
5 周防畑遺跡群															[中部横断道3] 刊行済
6 濁り遺跡															[中部横断道4] 刊行済
7 久保田遺跡															
8 西一里塚遺跡群															
9 森平遺跡															[中部横断道5] 刊行済
10 寄塚遺跡群															
11 今井西原遺跡															
12 今井宮の前遺跡															
13 北畑遺跡群															

■ 調査      ■ 整理

## 3. 文化財保護法の手続き

西近津遺跡群の文化財保護法に基づく届け出等の手続きは以下の表のとおりである。

第3表 文化財保護法手続き

	発掘届		県教委指示		発見届		文化財認定	
	文書番号	日付	文書番号	日付	発見届	日付	文書番号	日付
西近津遺跡群 (H18)	18長埋第1-3号	H18.5.19	18教文第4-15号	H18.5.24	18長埋第2-22号	H18.12.22	18教文第6-131号	H19.1.5
西近津遺跡群 (H19)	18長埋第1-15号	H19.3.7	18教文第4-29号	H19.3.9	19長埋第9-19号	H19.12.25	19教文第6-111号	H20.1.11
西近津遺跡群 (H20)	19長埋第8-9号	H20.2.29	19教文第4-11号	H20.3.25	20長埋第2-17号	H20.12.25	20教文第26-124号	H21.1.16

## 第2節 発掘作業と整理作業の体制

西近津遺跡群に関する調査・整理体制は以下の表のとおりである。

第4表 調査体制

発掘・整理	発掘作業				整理作業				
	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	H 26
所長	仁科松男	仁科松男	仁科松男	仁科松男	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄	窪田久雄	会津敏男
副所長	根岸誠司	根岸誠司	丑山修一	阿部精一	阿部精一	阿部精一	会津敏男	会津敏男	多城 哲
管理部 部長補佐							佐藤国昭	佐藤国昭	
管理課長						窪田秀樹	窪田秀樹	村山清治	村山清治
調査部長	市澤英利	平林 彰	平林 彰	平林 彰	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭	大竹憲昭
担当課長	上田典男	寺内隆夫	寺内隆夫	大竹憲昭	岡村秀雄	岡村秀雄	岡村秀雄	岡村秀雄	岡村秀雄
担当調査 研究員	寺内隆夫	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮	柳澤 亮
	白沢勝彦	寺澤政俊	岡村秀雄	市川隆之		寺内貴美子	寺内貴美子	寺内貴美子	若林 卓
	寺澤政俊	上田 真	寺澤政俊	鶴田典昭			市川桂子	長谷川桂子	寺内貴美子
	河西克造	西 香子	上田 真	藤松慎一郎					長谷川桂子
	櫻井秀雄	川崎 保	川崎 保	古賀弘一					高津希望
	柳澤 亮	藤松慎一郎	藤松慎一郎	内堀 団					
	土屋哲樹	古賀弘一	古賀弘一						
		内堀 団	*黒坂禎二						
調査員		石丸敦史	*田中広明						
		高野晶文							
	鈴木時夫								

\* 埼玉県埋蔵文化財調査事業団より派遣

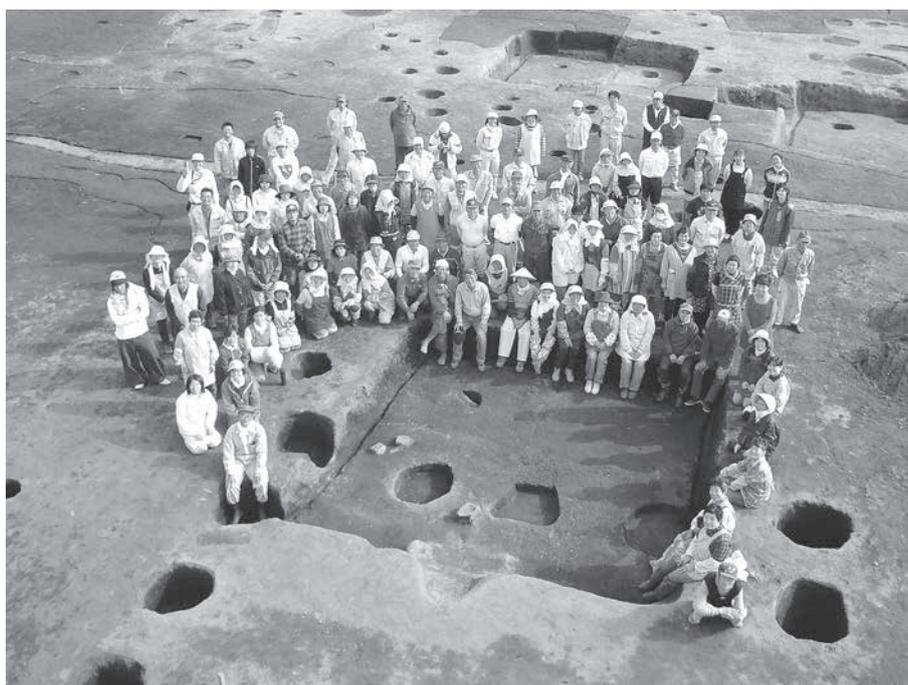
発掘作業員：

相澤昭二 青木成蒔 青木睦子 赤尾香苗 赤岡敬巳 浅沼君子 阿部正雄 飯田喜美江 五十嵐志麻  
井澤正子 市川明子 市川あつ子 市川渚 市川乙吉 井出治 井出袈裟美 井出功雄 稲垣豊 井上清  
今井章子 今井みさ子 岩間保次 上田邦雄 上野栄二 上原幸子 上原秀樹 上原祐子 上原勇三郎  
植松和則 大井隆之 大池永春 大澤正吾 大塚和美 大塚忠義 大橋国三 大橋たか子 荻久恵  
荻原行男 小倉栄子 奥平潔 小野沢里子 小宮山鈴代 片桐登志子 金井聡芳 川井次子 川上淳子  
川瀬まつ子 河原田憲子 木内一夫 木内節雄 木内隆男 木内福次 木内由美子 菊地朝光 菊池洋祐  
北村亨 熊谷大輔 小泉けさみ 小井戸厚子 小井戸秀元 神津良太郎 幸田千津 小桜一雄 小林治

小林功一 小林まさ子 小林路子 小林勇一 小宮山登志幸 坂本晴子 桜井重治 桜井英臣 桜井房子  
桜井マキ子 佐々木記代 佐々木正 佐々木久子 佐藤明美 佐藤和男 佐藤京子 真田陽平  
佐藤志げ子 佐藤純一郎 佐藤直治 佐藤春美 佐藤美枝子 清水佐知子 清水末子 清水正人  
清水正弘 篠原綾子 篠原一人 篠原けさい 篠原知恵 篠原宗次 鈴木春彦 鷹野晃 高塚一江  
高塚幸平 高塚好也 高橋梅子 高橋幸造 高橋徹雄 高橋三好 高橋弓子 高見澤泰明 高見澤千代  
竹鼻恵子 竹花道夫 田中章雄 田中宏幸 田畑恵子 田原和之 千野浩 塚田真砂子 土屋由美子  
東城辰男 徳富信義 伴野武夫 中澤啓子 中澤登 中島アキ代 中嶋操 中嶋良造 中原晴美  
中村梅子 中村輝夫 中村寛 中村豊 中山カズ子 野口淳 野々村百合 秦茂夫 原澤令子 久田辰夫  
比田井和子 日向武夫 平林文樹 廣岡祐一 穂川邦子 細井蔵次郎 細萱和美 松本日出子 丸山好子  
三浦邦夫 三浦綾子 緑川うめ子 翠川力 峯岸良江 宮崎等 宮崎未枝子 山田英輝 柳沢茂夫  
柳沢敏春 山浦あけみ 山浦孝子 山浦豊子 山浦基邦 山越常夫 山崎達浩 山田和子 山根知子  
横山道子 依田和江 依田純子 依田俊 依田道一 渡辺和男 渡辺忠男 渡辺はつ子

整理作業員：

赤尾香苗 阿部高子 池田豊一 石田多美子 市川ちず子 猪俣万里子 臼井博子 大林久美子  
金澤未玲 柄沢登紀子 川上淳子 神林貴子 窪田順 倉島由美子 小池美香 小林愛 小林知子  
塩野入奈菜美 島田由美 篠原知恵 清水秋子 清水栄子 清水玲子 下倉武 下平光秋 相馬麻織  
高野和子 高橋康子 高松美法 田中邦男 塚田春美 鳥羽仁美 永澤千春 中村智恵子 西島典子  
西村はるみ 日向富美子 藤井裕子 藤丸薫 堀内通子 松本眞行 待井聖 町田隆三 丸山千夏  
緑川うめ子 柳原澄子 山崎みな子 山下千幸 山本和美 涌井智明 渡辺恵美子



平成19年度 調査スタッフ

## 第2章 調査の経過

### 第1節 発掘作業の経過

#### 1. 発掘作業の方法

埋文センターでは調査の統一を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成しており、今回の調査もこれに準じた。

##### (1) 遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は以下のとおりである。

西近津遺跡群（にしちかついせきぐん） 遺跡記号 DNC

遺跡記号は、記録の便宜を図るために大文字アルファベット3文字で表記する埋文センター独自のものである。頭文字の「D」は長野県内を9地区に分割したうちの佐久地区を示し、2番目・3番目の文字は遺跡名のローマ字表記の一部から採ったものである。各種台帳や遺物の注記には、この記号を使用している。

##### (2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、遺構の形状及び特徴で区分した。

遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては整理段階で新たに付けている。

今回の発掘調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

SA：SBより小さな落ち込みが列として配置するもの。

###### 【柵例】

SB：おおむね、一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘り込み。

###### 【竪穴住居跡、竪穴状遺構】

SD：带状の掘り込み。【溝跡、自然流路跡】

SK：単独もしくは他の掘り込みとの関係が認められないSBよりも平面形が小さな掘り込み。

###### 【土坑、井戸跡、土坑墓】

SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛り上がり。

###### 【周溝墓、土坑墓】

ST：SBよりも平面形が小さな掘り込みが一定間隔で方形、長方形、円形に配列されるもの。

###### 【掘立柱建物跡】

SQ：遺物が集中する箇所。【遺物集中】

なお、SB内の柱穴・貯蔵穴等やSTを構成する個々の掘り込みにはピット（P）を付した。

##### (3) 調査区（グリッド）の設定と呼称（第2図）

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（X = 0.0000、Y = 0.0000）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査

グリッドを設定し、「大々地区」、「大地区」、「中地区」に区画した。

大々地区は、200 × 200 mの区画で、北から南へⅠ・Ⅱ・Ⅲのローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を40 × 40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を8 × 8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準単位としたのが、この中地区である。

現場におけるグリッド設営は、業者委託で実施した。標高は公共水準点を利用し、ベンチマークを設定した。

グリッド名の実際の表記においては、読み取りやすさを考え、各地区番号の間に適宜ハイフンを挿入することがあり、本書中でもそうした表記になっている場合がある。

座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、西近津遺跡群では世界測地系の座標値を用いていることにご留意願いたい。

#### (4) 区割りと呼称 (第2図)

調査区(グリッド)とは別に、調査進捗に合わせて調査範囲を8区画に分割した。1区画は3,000～4,000 m<sup>2</sup>程度で、調査着手年の早い南側から1区、2区、3区…8区と呼称する。挿図には①、②、③…⑧と○記号で記す場合がある。なお平成19年度調査当初、北端区を9区と分割したが、工程上8区と並行して調査を進めたため、整理段階で8区と統合している。

#### (5) 遺構の発掘

西近津遺跡群では、遺跡の性格を把握するために本格調査にはいる前段階で、確認調査として重機によるトレンチを入れた。遺構検出は1面で、Ⅳ層とした地山となる浅間第一軽石流堆積層上面で各時期の遺構を検出した。出土した遺物については包含された層位名またはグリッド名あるいは遺構名を付して取り上げた。検出された遺構の調査には、平面形で重複関係を把握してから掘り下げ作業にかかった。精査する順番は、重複関係の新しい遺構から古い遺構へ、という流れで行った。遺構はそれぞれ土層を観察し、記録した。掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行ったが、遺物の出土状況に特徴のあるものなどは、調査途中の状況も、写真と測量の記録を行った。また、縦穴住居跡では、掘り上がった状態で写真撮影と測量の記録を行った後に床面下(掘方)の状況を確認して調査を終了した。

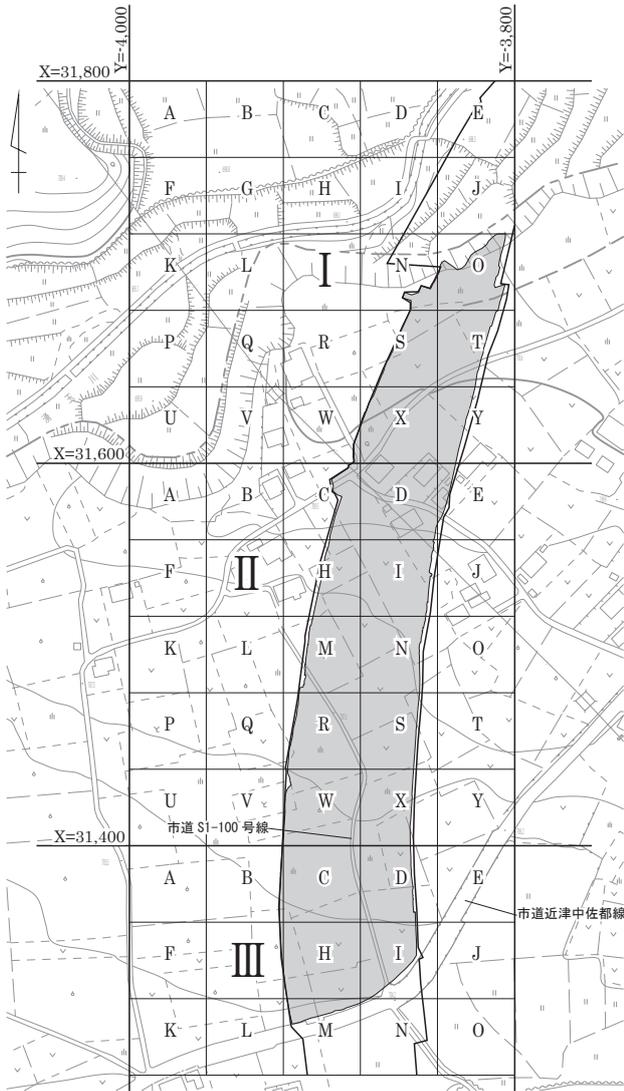
#### (6) 測量と写真

遺構の測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘作業員が行った。前記の測量基準杭を基準とする簡易遣り方測量を基本としたが、業者委託の空中写真測量や単点測量も併用した。遺構測量は、中地区(8 × 8 m)単位に区切った割り付け図を基本としたが、必要に応じて縦穴住居跡などは個別の遺構図を作成した。遺構測量の縮尺は1:20を基本とし、溝などは1:40、カマドや遺物集中など微細な図については1:10で実測した。

発掘中の遺構等の撮影は、マミヤRB・ペンタックス(6 × 7)とニコンFM2(35mm)を併用し、ともにモノクロネガフィルム(ネオパン100)とカラーリバーサルフィルム(フジクローム100F)で撮影した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼き付けは業者委託とした。また、空中写真撮影による調査区の遺構全体写真を業者委託により実施した。

#### (7) 遺跡の公開

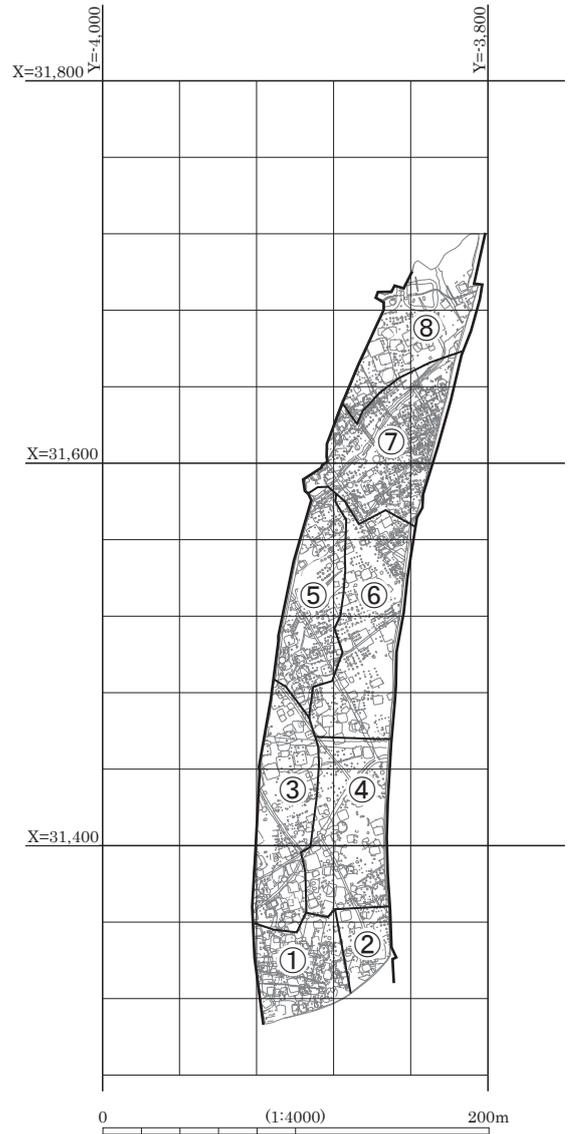
西近津遺跡群では、平成18年9月16日を最初として、毎年度現地説明会を実施し、最大で250名の参加者が集まり、関心の高さを実感した。平成19年9月25日には「銅印」についての報道公開を現地で実施している。



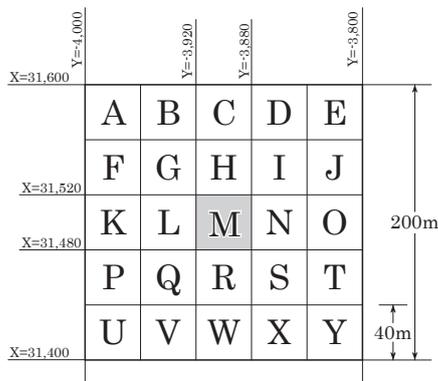
西近津遺跡群 調査対象地

大々地区 (200×200mグリッド) : I・II・III

基準線と地区 (グリッド) の設定

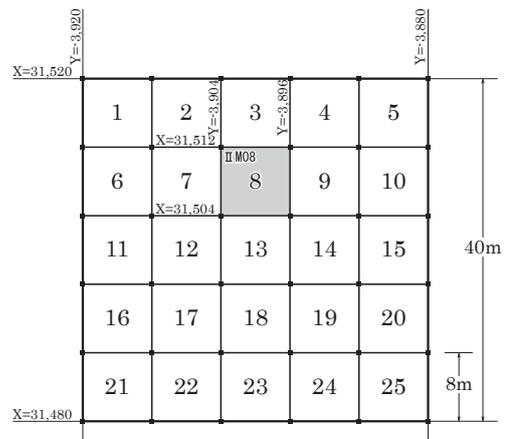


調査区の区割り図



大地区 (40×40mグリッド) : A・B・C…Y

例 : II M グリッドの座標位置



中地区 (8×8mグリッド) : 1・2・3…25

例 : II M08 グリッドの座標位置

第2図 調査区 (グリッド) の呼称方法与区割り

展示については、埋文センターが長野県立歴史館および長野県伊那文化会館にて開催している速報展にもパネルや遺物などを展示した（長野県埋蔵文化財センター速報展「長野県の遺跡発掘 2004」以降随時）。また、「長野県の遺跡発掘」の関連行事として遺跡報告会でも調査成果を発表した。

#### (8) 調査指導

発掘作業と整理作業の期間中に、複数の指導者を招聘し、遺跡や遺構、遺物について具体的な調査指導を得た。指導内容は作業と本報告に反映させた。招聘者は例言に記している。

#### (9) 調査の検討会

発掘作業期間中に、有識者および市町村教委の職員並びに埋文センター担当職員による、現地検討会を実施した。

東北芸術工科大学宮本長二郎教授（当時）による調査指導にあわせた「西近津遺跡群の超大型竪穴住居跡に関する情報交換会」を、平成18年12月12日（火）、西近津遺跡群現地にて開催した。

出席者：長野市立博物館千野浩氏、千曲市教育委員会寺島孝典氏、上田市教育委員会尾見智志氏、佐久市教育委員会富沢一明氏、森泉かよ子氏、御代田町教育委員会小山岳夫氏、茅野市教育委員会守矢昌彦氏、小林深志氏、小池岳史氏、埋文センター上田典男、寺内隆夫、柳澤亮

目的：

- ①西近津遺跡群で検出され、調査中である超大型竪穴住居跡を実際に見て、その規模や構造を理解する。
- ②参集市町村の弥生時代後期集落と大型住居跡に関する情報から、長野県内における状況を把握する。
- ③西近津遺跡群の弥生時代後期集落や超大型竪穴住居跡についての意見交換から、その性格や特徴を見出す機会とする。また今後の調査方法を検討する。

概要：以下のような、意義がまとまった。

- ①弥生時代に限定すると、日本国内最大規模の竪穴住居跡であること。
- ②縄文時代から古代・中世まで、竪穴住居が建造される時代を通じて、県内最大規模の竪穴住居跡であること。
- ③残存状況が良好であり、上屋構造も含めた住居構造を研究する上で、良好な資料であること。
- ④西近津遺跡群では、4～5m台の小型住居から、6～7m代の中型住居、8～10m台の大型住居、14mを超える超大型住居（SB0067とSB0110）といった規格の違う住居跡が存在する。これらの配置や時期変遷を検討することにより、当時の集落配置や構造を考察できること。

調査指導：宮本長二郎氏の指導では、以下のような指摘をいただいた。

- ①実際に見た印象：けた外れの大きさである。これほどの大きさの家を4本柱で支えるという構造が大変興味深い。
- ②この住居の造られた意味：集落の首長の住まいか、あるいは祭殿と考えられる。14m台のSB0110が時期的に古いとすると、それをモデルにして、より巨大なSB0067を建造した可能性がある。
- ③集落における位置：佐久平北部の弥生集落では最も高台に位置することは、集落や水田域などを見下ろす場所を選んだのではないか。
- ④住居の構造：壁建ちの上屋構造であり、屋根の高さは8～9m規模と考えられる。柱は断面長方形加工された加工材を用いていたと考えられる。柱の高さは床面から3～4m程度。柱は抜きとられている可能性がある。残存状況が良好であり、調査データから上屋構造や内部構造の復元（想像図・模型など）が充分可能である。

**(10) 超大型竪穴住居跡の現地保存**

今回発見された、弥生時代の超大型竪穴住居跡については、平成18年12月20日（水）4者協議（国土交通省関東地方整備局長野国道事務所中部横断自動車道推進室、ネクスコ東日本関東支社佐久工事事務所、県教委事務局文化財生涯学習課、埋文センター）において、調査終了後、年度内に遺構を砂等で覆い保護したうえで、盛り土工事に入ることとなった。埋め戻し方法については以下の点に留意し、実施した。

- ①学術的に貴重な竪穴住居跡の保護を目的とし、住居の形状および住居内の諸施設が崩壊しないような工法をとる。
- ②埋め戻し作業当初は、住居の変形を防ぐため重機の乗り入れは行わない。住居内に砂を搬入する際には、住居外の調査面から1m程度かさ上げした搬入路を作り、この搬入路上からバックフォアによって住居内に砂を慎重に投入する。この際、住居壁が崩落することを防ぐため、壁から2m程度離れた位置から行う。投入後の砂を均等にならす作業は小型のバックフォアが、場合によっては人手で行う。

**2. 日誌抄****平成18年度**

6月12日 現地状況確認、調査準備  
 6月21日 1区表土剥ぎ開始  
 6月22日 作業員作業開始  
 6月27日 1面目の溝跡調査終了  
 7月6日 2区調査開始  
 9月16日 現地説明会開催（周防畑遺跡群と同時開催193名参加）  
 9月20日 3区調査開始  
 9月29日 1・2区南半部空撮実施（北半部、3区は12/7に実施）  
 10月27日 市道下調査開始  
 11月16日 県遺跡調査指導委員会調査指導  
 12月15日 大型住居跡のデジタルオルソ図作成のため空撮実施  
 12月22日 今年度調査終了、基礎整理作業開始  
 1月22日～ 調査終了地区の埋め戻し  
 2月6日

8月9日 6区表土掘削開始  
 8月10日 8区南東地区の自然流路跡内より、白鳳～奈良時代の平瓦片出土  
 8月22日 8区方形周溝墓は2基と確認  
 8月27日 京都大学茂原信生名誉教授調査指導（4区他の古代～中世溝跡内の動物骨について）  
 8月29日 6区表土掘削、遺構検出・調査の開始  
 8月30日 3・5区（1）RCヘリによる空中写真撮影実施  
 8月31日 4区平安時代の竪穴住居跡SB4001より銅印（私印）出土  
 9月5日 銅印について、信濃国分寺資料館倉澤正幸館長の指導を請う  
 9月7日 昨晩来の台風9号の影響により、調査区内に浸水箇所多く復旧に努める。区外への流出なし  
 9月11日 8区委託測量RCヘリによる空中写真撮影実施  
 9月20日 4区銅印出土住居跡の近くで平安時代の木棺墓発見、墨書土器が副葬されていた  
 9月25日 銅印発見について、現地で報道公開を実施  
 9月26日 6・8区の奈良期の大型土坑について、埋土サンプリング実施する  
 9月27日 8区ほか、高所作業車による写真撮影実施。3区調査完了。  
 9月28日～ 銅印を上田市に貸し出し（信濃国分寺資料館特別展に出展）  
 11月5日 8区平安時代の木棺墓発見  
 9月28日 銅印のレントゲン写真撮影実施（長野県立歴史館）  
 10月3日 8区皇朝十二銭「隆平永寶」出土  
 10月4日 西近津遺跡群にて調査部会開催、デジタル空中写真測量の研修会併催  
 10月5日  
 10月17日 6区高所作業車による写真撮影実施  
 10月25日 8区RCヘリによる空中写真撮影実施  
 10月29日 6区「郡」刻書須恵器出土  
 11月2日 8区前期古墳検討会（佐久市教育委員会富沢氏、埋文センター若林、櫻井、川崎、石丸、柳澤）。8区委託測量中距離レーザースキャン機器による方形周溝墓の詳細地形測量実施  
 11月8日 別府大学客員教授宮本長二郎氏調査指導（古代遺構について）  
 11月11日 現地説明会開催。見学者212名  
 11月12日 奈良文化財研究所山中敏史氏調査指導（古代の建物跡について）。6区に群立する建物群は下級役人程度の地元有力豪族居宅跡と指摘。郡衙跡は近津神社辺りか  
 ～13日  
 11月12日 長野県考古学会会長田進氏、長野県遺跡調査指導委員丸山

**平成19年度**

4月3日 調査準備  
 4月10日 3・5区第1期表土掘削開始  
 4月15日 京都大学金田教授調査指導（埋文センターにて）  
 4月18日 作業員作業開始  
 4月19日 3区遺構検出作業完了し、遺構調査開始。6区先行トレンチ調査  
 4月24日 7・8区先行トレンチ調査実施。遺構の分布状況を確認する  
 5月11日 3・5区（1）地形測量実施。散水車借り上げし、水散布開始  
 5月12日 3・5区高所作業車による写真撮影実施（以下、随時実施）  
 5月16日 3・5区（1）空中測量実施  
 6月7日 5区並列する掘立柱建物跡検出  
 6月11日 8区重機による掘削開始  
 6月15日 3・5区（1）ラジコンヘリコプター（以下、RCヘリ）による空中写真撮影実施  
 6月20日 8区遺構検出。竪穴住居跡30～40軒、円形周溝墓2基、湧玉川崖上に古墳と考えられる周溝跡1基を確認  
 6月27日 4区南側から表土掘削開始  
 7月5日 北側より調査完了部分の埋め戻し開始  
 7月6日 3・5区（2）空中測量実施  
 7月9日 現地協議（ネクスコ東日本、JV、センター）  
 7月18日 4区遺構検出開始

## 第2章 調査の経過

	敵一郎氏、上田市信濃国分寺資料館長倉澤正幸氏、岡谷市教育委員会山田武文氏現地視察	9月11日	RCヘリによる空中写真撮影
11月14日	7区重機による表土掘削開始（20年度調査区）	9月18日	宮本長二郎氏調査指導
11月15日	4区RCヘリによる空中写真撮影実施	10月17日	当初の調査区分、すべて引き渡し完了。用地買収された230㎡と市道調査開始
11月16日	宮本長二郎氏調査指導（6区の方形区画状遺構について）	11月5日	JVと工事範囲と進入路確認の現地協議
11月21日	6区RCヘリによる空中写真撮影実施	12月1日	凍結のため、水道管破裂、復旧工事
11月22日	8区調査終了	12月3日	RCヘリによる空中写真撮影、高所作業車による撮影
11月26日	7区表土中より「大井」刻書土器発見	12月8日	市道拡張部分調査、同日埋め戻し
12月7日	4・6区高所作業車による写真撮影実施	12月12日	高所作業車による撮影
12月19日	4区調査終了	12月22日	調査終了
12月20日～	基礎整理作業	12月24日	国交省現地協議。基礎整理作業開始
3月31日			
3月10～	20年度調査区の表土掘削		
14日			

### 平成20年度

4月～5月	既調査資料整理、調査準備
5月7日	国交省調査協議（今年度調査について）
5月22日	調査開始
6月2日	作業員雇用開始
6月5日	7区遺構検出作業、遺構重複顕著
6月19日	溝跡の高所作業車による撮影
7月4日	現地協議。調査期間9月末まで延長決定
8月9日	RCヘリによる空中写真撮影
8月22日	宮本長二郎氏調査指導
8月27日	竪穴住居跡、建物跡の高所作業車による撮影
9月4日	東日本道路株式会社と現地協議。工事優先箇所引き渡しを9月下旬とした。以後順次引き渡し
9月7日	現地説明会開催。見学者250名
9月10日	国交省、佐久市と市道境界確認の立会協議



大型住居跡の盛土保存作業1（シートの被覆）



大型住居跡の盛土保存作業2（砂による被覆）



大型住居跡の盛土保存作業3（砂による被覆）



大型住居跡の盛土保存作業4（保護土による被覆）

## 第2節 整理作業の経過

### 1. 整理作業の方法

#### (1) 基礎整理作業

発掘調査年度の冬季に基礎整理作業として図面整理、写真整理、遺物洗浄及び注記等の作業を行った。

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、堅穴住居跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原図作成まで行った。遺構写真については、モノクロ写真はベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムについては、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納している。写真の注記は、35mmカラーリバーサルはマウントに、その他はアルバムに、遺跡記号・地区・撮影内容・撮影方向を記している。遺物は、洗浄・注記を行い、取り上げ袋ごとに台帳登録した。金属製品については、長野県立歴史館にてX線透過写真撮影を実施し、本格整理作業に備えた。

#### (2) 本格整理作業

報告書作成に向けて、記録類相互を調整して遺跡の所見を総合し、調査成果を公表できるように整備する作業を平成21～26年度に実施した。

遺構図面類は、基礎整理作業で作成した修正図や2次原図をもとに、個別遺構図、土層図、遺構配置図(全体図)などを作成し、描画ソフトIllustratorを用いてデジタルトレースで作成した。

遺物は、土器・土製品、石器・石製品、金属製品、その他の遺物に大別して整理作業を進めた。土器・土製品については、接合・復元・補強を行い、報告書掲載遺物を抽出し、遺物管理台帳を作成した。遺構単位に観察し、全体像を把握した後に遺構内外の出土遺物ともできる限り図化・掲載した。実測は手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。また必要に応じて拓本も行った。トレースは埋文センターにおいて製図ペンを用いた手作業で実施し、一部に委託業者による描画ソフトIllustratorを用いたデジタルトレースもある。掲載した土器・土製品については、観察表を作成した。

石器・石製品は分類を行いながら、報告書掲載遺物を抽出した。実測はすべて手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。トレースはすべて製図ペンを用いた手作業で埋文センターにおいて実施した。掲載した石器・石製品については、観察表を作成した。

金属製品は、各時代を通じて出土量、内容共に豊富である。整理作業当初の肉眼観察とX線透過写真撮影の結果から、内在する金属部の残存率が高いことが確認された。その影響で鉄製品に関しては取上げ時より錆化が進み、亀裂や剥落などの劣化が顕在化した。記録作業のためのクリーニングと劣化防止のための応急的保存処理の必要性が高いと判断し、平成23・24年にその大半について保存処理業務を外部委託した。図化は埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で行い、製図ペンで手作業にてトレースした。銭貨については拓本を行った。

動物骨では骨製品と加工痕のある骨・角について、手作業で実測・トレースを実施した。木製品では中世の井戸跡から出土した板状の杭2点について、手作業で実測・トレースを行った。

トレースした遺物図は、画像編集ソフトphotoshopを用いてデジタルスキャンと画像修正を行い、描画ソフトIllustratorと組版ソフトIndesignを用いて、デジタル図版データを作成した。

遺物写真撮影は業者委託により実施した。撮影には巻頭カラー図版用に6×7判カラーリバーサルフィルム、モノクロ写真図版用には一眼レフデジタルカメラ画像を使用した。DVD収録の遺物写真は極力カラーデータを用いている。

なお、平成22年1月19日、「美濃国印須恵器」発見について、報道公開を実施した。

### (3) 報告書の作成

報告書の作成に向けての最終編集作業は平成26年度から着手した。報告書は、本文編、遺構図版編、遺物図版編、写真図版編の4分冊に分けてまとめ、総合的な成果を本文編にまとめた。

写真図版については、遺構は遺構種別（竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土坑等）、遺物は遺物種別（土器、石器等）に掲載した。

### (4) 資料の収納

今回の発掘調査で得られた出土品および実測図面・写真等の記録類は、報告書刊行後、長野県立歴史館を経て、佐久市教育委員会に移管し、保管される。

遺物は、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、土器・土製品は出土遺構・地区別に、石器・石製品は器種別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図面は、手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真収納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に収納した。

## 2. 日誌抄

### 平成21年度

4月13日 作業員雇用開始  
 5月22日 調査写真フィルムのスキャニング開始  
 5月27日 出土骨のクリーニング開始  
 6月2日 出土土器・石器の一次分類開始  
 6月26日 全体図作成開始  
 8月17日 骨のセメダイン含浸補強作業完了  
 8月19～21日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける  
 9月11日 CADデータのIllustrator変換の実施  
 10月26日 調査所見のパソコン入力開始  
 11月13日 遺物分類作業中、1区検出面から「美濃国印須恵器」発見される  
 11月19日 土器の接合開始  
 12月15日 土器復元開始  
 12月11～1月5日 金属器のX線透過撮影を実施(長野県立歴史館にて)  
 1月5日 土器実測委託の実施(大成エンジニアリング株)  
 1月12日 弥生土器の接合開始(5・6区から)  
 1月19日 「美濃国印須恵器」の報道公開を実施

9月5日 弥生土器の実測業務委託開始  
 9月14日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける  
 10月11日 金属器X線フィルムデジタルスキャン開始  
 10月27日 静岡市立登呂博物館稲森幹大学芸員資料調査。赤彩土器6点貸出。特別展「赤い土器の世界」において展示公開  
 12月8日 植物遺体科学分析を実施(パリノ・サーヴェイ株)  
 12月9日 金属器保存処理委託を実施(株文化財ユニオン)  
 12月20日 微細物抽出業務委託を実施(株歴史の杜)  
 12月21日 土器胎土分析業務委託を実施(株古環境研究所)  
 12月26日 古代土器実測業務委託を実施(株アルカ)  
 2月17日 微細物抽出業務委託中間検査  
 2月28日 吉田恵二國学院大学教授から陶硯などについての調査指導を受ける  
 3月2日 資料調査を実施(静岡市、横浜市)  
 3月5日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授から出土人骨・動物骨鑑定調査指導を受ける  
 3月22日 通年整理作業員雇用終了

### 平成24年度

4月9日 作業員雇用開始  
 4月13日 古代遺構デジタル継続、縄文土器の分類、古代土器接合・登録。弥生土器トレース開始。石器実測図スキャン  
 4月20日 縄文土器分類・選別終了  
 4月22日 奈良文化財研究所松井章氏から動物骨などに関する整理指導を受ける  
 4月27日 遺物分布図作成に遺構実測支援システム導入開始。古代土器接合・登録  
 6月8日 佐久市旧公園と現公園、遺構全体図との照合作業実施  
 6月29日 石川県埋蔵文化財センター久田正久氏、弥生時代の遺構遺物視察  
 7月11日 設楽博己東京大学教授研究視察  
 7月13日 土製品、ミニチュア土器、弥生中期土器実測開始  
 7月20日 弥生土器トレース開始。石器の登録作業  
 7月27日 古代土器の実測開始  
 7月30日～8月3日 長野工業高等専門学校4名(インターンシップ対応)  
 8月6日 信州大学学生1名(県教委インターンシップの一環で見学)  
 8月10日 古代遺構の1/200全体図作成開始。弥生土器トレース図のデジタルスキャン開始  
 8月24日 弥生土器実測図に拓影貼り込み開始。金属器保存処理委託実施(株文化財ユニオン)

### 平成22年度

4月12日 作業員雇用開始。20年度調査の遺構図修正、19年度4区の弥生土器整理。調査写真スキャン・仕分け作業継続  
 5月27日 弥生土器復元開始(5・6区)  
 8月12日 20年度調査の遺構図修正終了  
 8月24日 調査写真スキャン・仕分け作業終了。デジタル全体図修正着手  
 9月15日 弥生遺構図のデジタルトレース(以下、デジトレ)8区着手  
 11月29日 遺構図修正4区終了、1・2区着手  
 2月7～9日 茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける

### 平成23年度

4月6日 作業員雇用開始。遺構図修正、デジトレ、弥生土器接合の再開。土器データ入力開始  
 6月9日 22年度委託分の土器実測図トレース開始  
 6月20日 弥生土器接合終了、古代土器接合開始  
 7月11日 弥生土器の復元再開。古代竪穴住居跡の図面修正開始  
 8月26日 弥生土器の復元終了。石製品の計測作業開始。計測後実測に移る

9月13日	銅印撮影実施（㈱文化財ユニオン）		
9月21日	砥石と分類していた中から、中世の温石を確認した	1月24日	鍛冶関連遺物の実測とトレース終了
9月25日	上條信彦弘前大学准教授の研究資料としてマメサンプルを貸し出す。古代土器復元開始	1月27日	年代測定業務委託実施（㈱加速器分析研究所）
10月12日	分析を実施しない採取土壌の篩作業開始	1月30日	科学分析業務委託実施（㈱パレオ・ラボ）
10月19日	弥生土製品トレース開始。採取土の篩餞別。SB5060灰層から焼けた小骨片、貝片出土	1月29日	土器図版仮組開始
10月29日	石器実測開始	2月6日	青銅製品・銭貨の実測とトレース終了
11月19～21日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける	2月13日	御代田町小山岳夫氏から弥生土器の調査指導を受ける
11月30日	弥生土器遺構別レイアウト開始	2月21日	骨製品、加工痕のある骨・角の実測開始
12月11日	福井県埋蔵文化財センター赤澤氏ほか2名の弥生土器見学	3月5～7日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける
12月19日	御代田町小山岳夫氏による弥生土器整理指導	3月13日	宮本長二郎氏から弥生大型堅穴住居跡、掘立柱建物跡に関する調査指導を受ける
1月25日	石製品・石器実測トレース、玉類トレース終了。小形砥石の実測開始	3月20日	石器類実測・トレース終了。金属製品、石器実測は次年度へ継続
2月27日～3月1日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける		
<b>平成25年度</b>		<b>平成26年度</b>	
4月5日	整理作業員開始。古代土器トレース、小形砥石実測トレース再開。版組、古代遺構図の修正・デジトレ、古代土器の接合再開	4月1日	整理作業開始
5月10日	石器・石製品の登録と、数値入力アクセス形式で作成	4月7日	土器・金属器実測トレース、遺構図修正・デジタルトレース、仮版組再開
5月15日	弥生土器実測図に記入した観察内容をデータ化、PC入力開始	5月1日	班内打合せ。報告書分冊・頁数、作業進捗について
6月9日	埼玉弥生土器観覧会が長野県埋蔵文化財センターの弥生時代資料調査	5月30日	弥生土器図版仮組、撮影個体数特定完了
6月12日	版組、石器トレース図のスキヤニング開始	7月2・3日	平川南人間文化研究機構理事から出土文字資料に関する指導を受ける
9月5日	鉄滓、鞆羽口、石皿、大形砥石の分類観察	7月25日	金属器・木製品トレース図のデジタルスキャン終了
10月4日	縄文土器拓本実測開始	8月1日	高津調査研究員が整理班に異動。土器復元を担当する
10月20日	日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集で小山岳夫氏が西近津遺跡群について扱う	10月8日	遺物写真撮影業務委託開始（信毎書籍印刷㈱）
10月22～24日	中学生職場体験の対応（川中島、篠ノ井東中学校）	10月8～10日	中学生職場体験の対応（犀後、広徳、松代中学校）
11月5日	古代土器接合作業は全地区で終了。以後、集計と取納作業へ移行	11月13日～12月25日	土器実測図トレース業務委託実施（大成エンジニアリング㈱）
11月11～13日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員から出土人骨・動物骨鑑定整理指導を受ける	11月20日	文化庁 福宜田主任調査官視察・指導
11月14日	鍛冶関連遺物の分類・計測を再開	12月3日	原山信州大学教授から石器石材鑑定に関する指導を受ける
11月18日	掘立柱建物跡の図面修正を開始	12月15～17日	茂原信生京都大学名誉教授、本郷一美総合研究大学院大学准教授、櫻井秀雄獨協医科大学技術員から出土人骨・動物骨報告に関する指導を受ける
12月5日	鍛冶関連遺物の計測分類終了。実測開始	12月19日	遺物写真撮影終了
1月10日	鍛冶関連遺物科学分析業務委託実施（JFEテクノリサーチ	1月9日	印刷・製本業者決定
		3月27日	報告書刊行



平成26年度 整理スタッフ

第2章 調査の経過



## 第3章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

西近津遺跡群は千曲川右岸の佐久平北部に位置する（第3図）。佐久平は、北に浅間山、東に荒船山や八風山などの関東山地（佐久山塊）、南に蓼科山・八ヶ岳の山々に囲まれた標高700m前後の高原性盆地である（註1）。その中央部を甲武信岳に源を発する千曲川が周囲の山々から流れ出る濁川や湯川、滑津川、片貝川などの中小河川を集めながら、南から北へ貫流している。

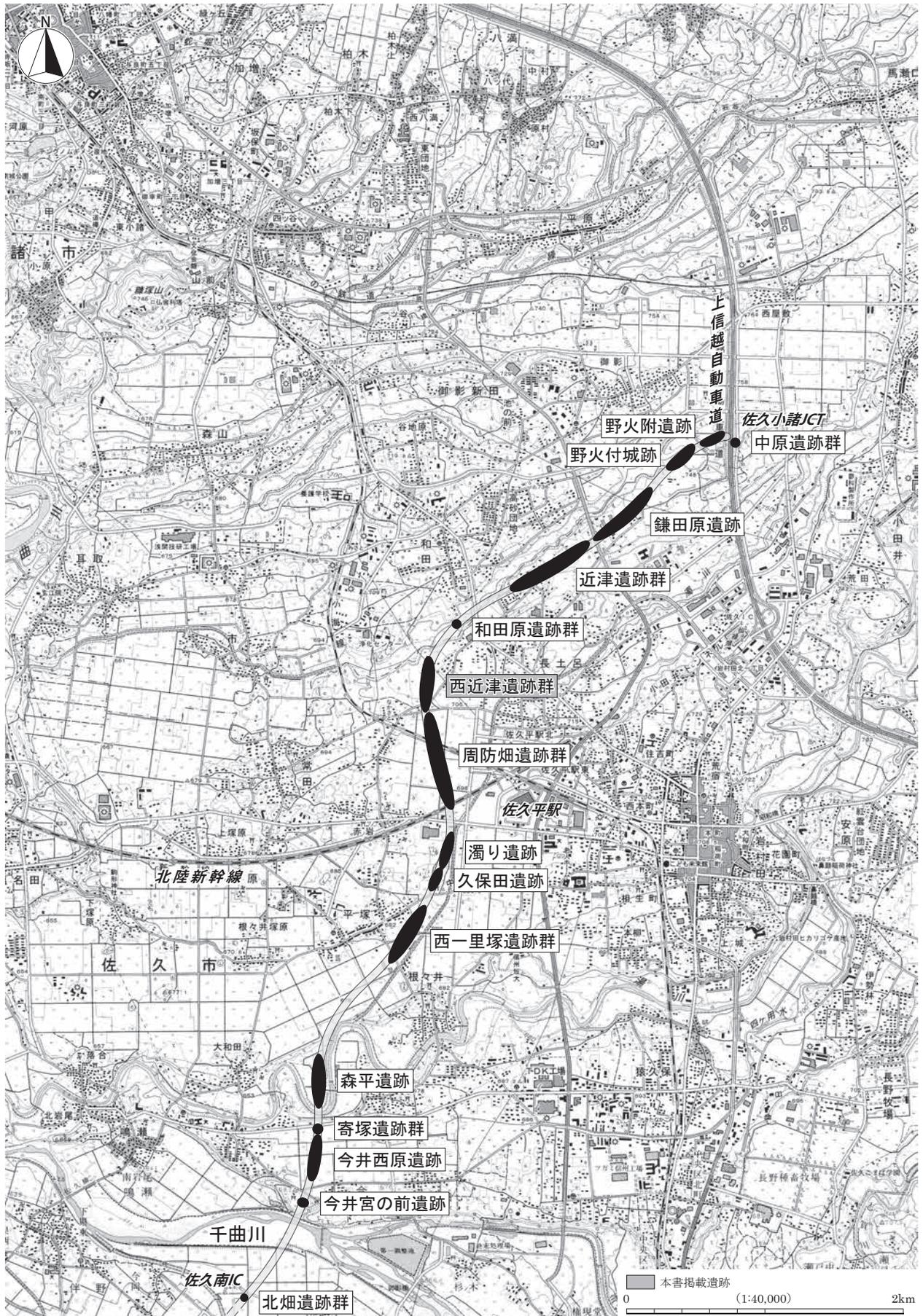
佐久平の地形は千曲川の右岸と左岸で大きく異なる。このうち、遺跡が位置する千曲川右岸の佐久平北部の地形形成には、北の上信国境にそびえる浅間山の活動が大きく関わっている。浅間山は黒斑山・仏岩・前掛山の3つの火山の集合からなる。浅間山は10万年ほど前から火山活動を開始し、もっとも古い山体である黒斑山が約23,000年前に大規模な水蒸気爆発した。その際に黒斑山の東半分が大規模な山体崩壊を起こし、土石なだれとなって北麓の群馬県側と南麓の長野県側を流走した。南麓の御代田町から佐久市北部にかけて流下したものは「塚原土石なだれ（塚原泥流）」と呼ばれ、佐久平中央部の低地にはその名残である「流れ山」と呼ばれる小高い塚状の丘が多数残されている。

その後、二度にわたる大規模な噴火による軽石流と呼ばれる火砕流が佐久平北部の山麓を覆った。最初の約13,000年前に起きた規模の大きな軽石流は「浅間第一軽石流」と呼ばれ、10m以上の厚さで堆積して御代田町から小諸市、佐久市にかけて火砕流台地を形成した。次の約11,000年前の爆発による軽石流は「浅間第二軽石流」と呼ばれ、御代田町から小諸市街地を覆っている（第4図）。

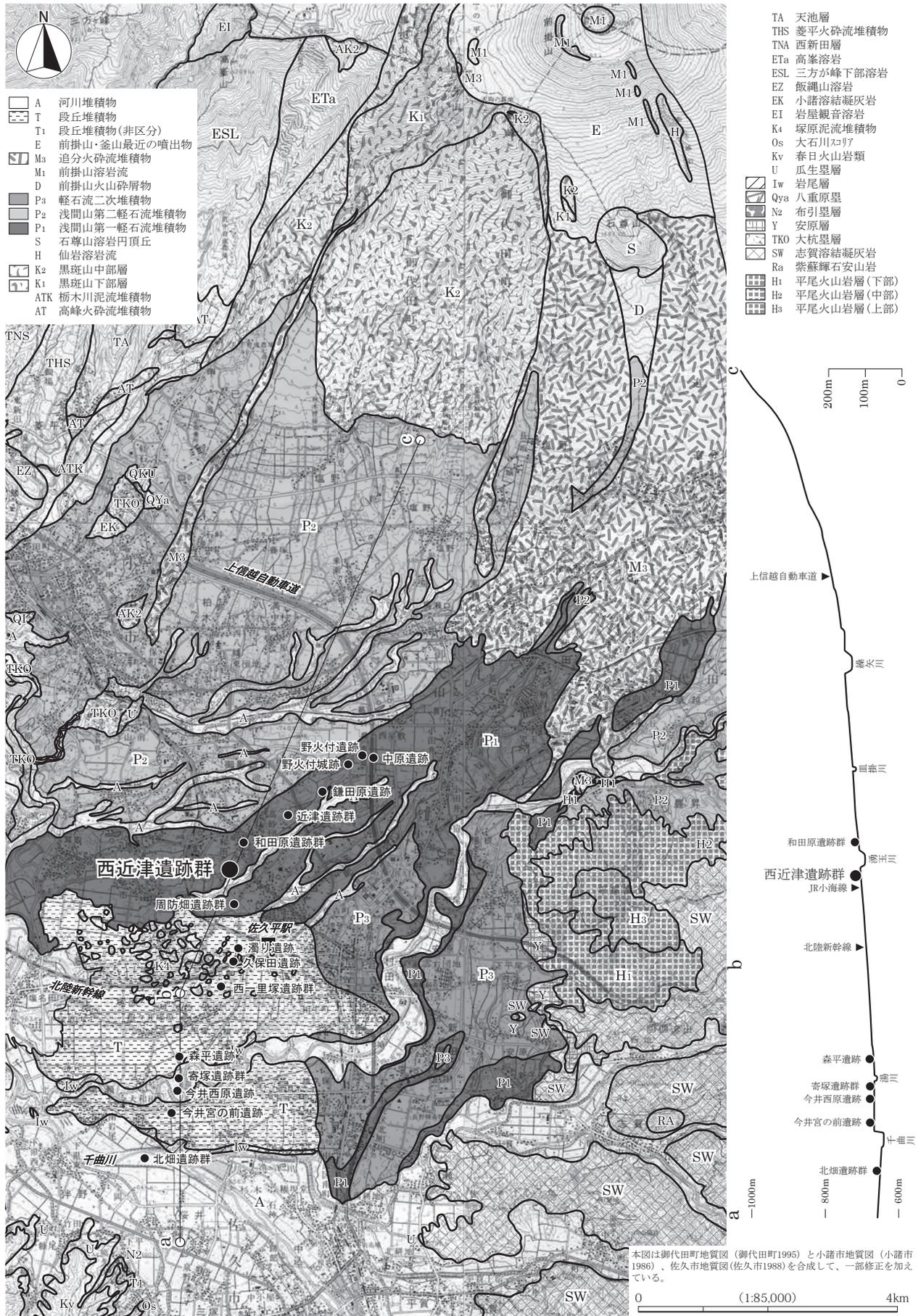
浅間第一軽石流による火砕流台地は比較的平坦で、北東から南西に緩やかに傾斜する高燥な台地である。この台地の地層は固結度が弱いため河川の浸食を受けやすく、浅間南麓から樹枝状に浸食谷が形成され、この地帯には火山山麓特有な「田切り地形」と呼ばれる箱形に切り立った地形が発達している（註2）。

石尊山の東麓に源を持つ濁川は、深い田切り地形をつくりながら流下し、火砕流台地末端の佐久市長土呂地区で流路を拡散し、氾濫低地を形成する。氾濫低地は度重なる土砂の流出により扇状地状に広がり、緩やかに傾斜を弱めながら千曲川に向かう。そのため、田切り地形は台地末端の岩村田市街地北東のJR小海線付近でみられなくなり、千曲川までの佐久平中央部には低地と微高地、流れ山の残丘が組み合わさった地形が広がる。

こうした田切り地形と遺跡の立地には密接な関係があると考えられる。第5図には田切りと低地、遺跡範囲を示した。火砕流台地は図右上の佐久市と御代田町の境付近から末端部にかけて、まさに樹枝状に広がる田切り谷に区切られた、幅100～500m程度の細長い台地となる。田切りの谷には湧玉川や濁川のように広く深い谷を形成するものもあれば、浅く狭い谷が台地に消えてしまうものもある。台地の末端は標高710m付近で、そこから南側には濁川の氾濫による低地部が広がる。この付近では、田切り地形により区切られた台地ごとに巨大な集落遺跡が広がる。これは弥生時代以降、山麓湧水地下水の流下水路となった田切り谷と湿地帯の広がる氾濫低地を生産域として、その周辺の乾いた台地上は早くから集落として利用されていった結果と考えられる。



第3図 中部横断自動車道（佐久小諸JCT～佐久南IC）と調査対象遺跡



第4図 佐久周辺の地質図



## 第2節 歴史的環境

佐久地域（小諸市・佐久市・軽井沢町・御代田町・立科町・佐久穂町・小海町・北相木村・南相木村・南牧村・川上村）では約 2,500 箇所以上の遺跡が残されている。ここでは本書掲載の西近津遺跡群が所在する佐久平北部の御代田町、小諸市、佐久市を中心として、周辺遺跡について概観する（第6図、第5表）。

### 旧石器時代

図中に旧石器時代の遺跡は今のところ存在しない。これは、前節でも記したように佐久平北部では約 13,000～11,000 年前に噴出した軽石流の堆積により、それ以前の遺跡は厚い軽石流の下に埋没しているか、あるいは押し流されてしまった可能性が高いことによる。

佐久地域で最も古い遺跡は、蓼科山麓から伸びる尾根上に立地する佐久市立科 F 遺跡と香坂川流域の八風山Ⅱ遺跡、香坂山遺跡であり、約 30,000 年前の後期旧石器時代初頭にさかのぼる。3 遺跡ともに始良丹沢火山灰（AT）下層からの出土である。AT 以前の遺跡は、中部横断自動車道関係で調査した蓼科山麓の高尾 A 遺跡も含めた 4 遺跡をあげるに過ぎないが、AT 以降の後期旧石器時代後半期には遺跡が急増する。この時期の遺跡は 100 箇所を超えるが、南牧村野辺山高原や川上村などの高原地帯に集中する。野辺山高原では、国内ではじめて細石刃文化が発見された国史跡の南牧村矢出川遺跡や中ッ原遺跡、川上村では馬場平遺跡、三沢遺跡、柏垂遺跡などがある。なお、平成 25 年度に埋文センターで発掘調査が実施された矢出川第Ⅷ遺跡では、AT 降下以前、25,000 年をさかのぼる石器群が発見され、新たな所見が得られている。

また後期旧石器時代終末から縄文時代草創期にかけては、ガラス質安山岩（無斑晶質安山岩）の産地に近い香坂川流域の下茂内遺跡では槍先形尖頭器を大量に製作していたことが明らかとなった。中部横断自動車道建設関係の調査では佐久穂町の満り久保遺跡で槍先形尖頭器、細石刃等が出土している。

### 縄文時代

縄文時代も佐久平の中央部には遺跡が少なく、周縁部に多い傾向がうかがえる。千曲川右岸では浅間山麓などに、千曲川左岸では蓼科山麓からのびる尾根先などに遺跡が立地する。

草創期の遺跡はわずかで、御代田町東荒神遺跡（2）で微隆起線文土器の出土が知られ、佐久市寺畑遺跡群（281）では爪形文土器が出土している。早期の押型文土器の時期になると、小諸市三田原遺跡群（107）など浅間山麓の遺跡だけでなく、佐久平北部の周防畑遺跡群（200）辻の前遺跡や枇杷坂遺跡群（232）下穴虫遺跡など弥生時代や古墳時代の集落遺跡から少量の土器の出土が知られるようになるが、住居跡などの遺構はみつからない。本書掲載の西近津遺跡群（220）においては寺畑遺跡群と類似した爪形文土器のほか、早期の押型文土器の高山式土器が出土し、明確に把握できるものとしては佐久地域初といえる。前期では御代田町塚田遺跡（34）や下弥堂遺跡（37）で前期初頭の羽状縄文系土器の集落が検出されている。

中期から後期にかけては浅間山麓に大規模遺跡が多く認められる。御代田町川原田遺跡は浅間山の豊富な湧水地帯に営まれた中期中葉の集落跡で、出土の焼町土器は国の重要文化財に指定されている。同じく小諸市郷土遺跡（56）は中期後半を主体とした竪穴住居跡 100 軒を超す集落跡である。後期では小諸市三田原遺跡群や岩下遺跡などで敷石住居跡などが検出されている。また本書掲載の西近津遺跡群では、近年の調査によって縄文集落の具体像が明らかになりつつある。埋文センター調査区内で発見された縄文時代中期後半の竪穴住居跡 2 軒に続いて、西側に隣接する佐久市教委調査の 2 地点（西近津遺跡群Ⅳ・Ⅷ）では縄文時代後期前半の竪穴住居跡がそれぞれ 1 軒調査されている（佐久市教委 2013・2014a）。そのうちⅧ地点の竪穴住居跡は敷石住居跡である。墓坑とみられる土坑群も存在し、遺物も豊富で当該期の土器・石器

のほか土偶や石棒、石剣といった祭祀具も出土している。埋文センター調査区より東側には遺物の出土はあるが、当該期の遺構は発見されていない。これまでの表採資料などから予想されてきた、JR 小海線中佐都駅北方の鷺林城から東方に展開する広範囲な縄文時代集落の東端が確認されてきたといえよう。

関東山地側では佐久市寄山遺跡群（354）に中期の集落跡がある。また、千曲川左岸では蓼科山麓の榛名平遺跡群で前期から中期の集落跡が検出され、この山麓線の尾根上には小規模な縄文集落が点在するようである。晩期は資料が少なく、千曲川左岸の小諸市氷遺跡は縄文晩期後半の氷式土器の標式遺跡である。浅間山麓では小諸市石神遺跡群（62）で後期から晩期にかけての配石遺構や多彩な遺物の出土がある。

集落遺跡とともに陥し穴の検出事例も増加している。長土呂地籍の長土呂遺跡群（202）、近津遺跡群（199）、周防畑遺跡群などである。八ヶ岳西南麓で見られるような一遺跡で数十単位の陥し穴が検出される事例はないが、佐久平北部の平坦部は狩猟場となっていたことが推測できよう。

### 弥生時代

佐久平の中央部が本格的に人々の生活の場として利用されるようになるのは弥生時代中期になってからである。佐久市北西の久保遺跡（275）では竪穴住居跡 100 軒ほどからなる弥生時代中期後半の大規模集落が台地上に広がる。隣接する岩村田遺跡群（243）西一本柳遺跡や鳴澤遺跡群（274）五里田遺跡でも同時期の大規模な集落跡が確認され、濁川の氾濫低地を囲むように高台の台地上に集落が営まれるようになる。また、湯川に面した低位段丘面に立地する森平遺跡（371）でも同時期の集落跡が中部横断自動車道に伴う調査で検出されている。現在のところ明確な弥生時代水田跡は確認されていないが、佐久平中央部に広がる低地部を生産域とした集団による開発が行われたと考えられる。

弥生時代後期になると段丘上や低地に臨む台地縁辺部にも進出し、遺跡数は拡大する。中部横断自動車道関係で調査した本書掲載の西近津遺跡群や周防畑遺跡群などもこうした大規模集落の一つである。西近津遺跡群には全長 18 m を超える国内最大級の竪穴住居跡の検出もある。これ以外にも枇杷坂遺跡群円正坊遺跡・同清水田遺跡、岩村田遺跡群西一本柳遺跡なども同様な集落遺跡である。こうした弥生時代後期の集落跡のほとんどが火砕流台地の末端部の標高 720 m 程度までに止まり、そこより高い地域には広がっていない。但し、御代田町細田遺跡（32）と下荒田遺跡（33）は標高 820 m の浅間山麓の細い尾根上に立地する遺跡で、この二つの集落は現在でも冷害にあわない優良水田地帯となっている浅間山の伏流水が湧き出る谷地を生産域とした集落と考えられている。

### 古墳時代

弥生時代後期の大規模集落は古墳時代に入ると解体し、河川や田切り谷の低位段丘や台地縁辺部に小規模集落が点在するようになる。集落遺跡としては小諸市和田原遺跡群（175）や野火附遺跡（193）、久保田遺跡（161）、大塚原遺跡群（145）、佐久市栗毛坂遺跡群（203）、近津遺跡群、腰巻遺跡（237）、下小平遺跡（241）、周防畑遺跡群辻の前遺跡、松の木遺跡（279）、深堀遺跡群（353）、浅科村砂原遺跡（376）や中平・田中島遺跡（380・381）などもこうした集落遺跡で、周溝墓なども検出されている。また、浅間山麓にも小諸市石神遺跡、御代田町塚田遺跡などの小規模集落がみられる。

古墳時代中期後半には岩村田遺跡群西一本柳遺跡や北西久保遺跡、長土呂遺跡群下聖端遺跡などで集落跡が検出されているが、遺跡数は比較的少ない。後期になると、今まであまり利用されてこなかった火砕流台地上にも大規模集落が登場してくる。佐久市長土呂遺跡群聖原遺跡、芝宮遺跡群（201）、小諸市中原遺跡群（181）などは、平安時代前半まで続く大規模集落跡となる。本書掲載の西近津遺跡群も集落としては弥生時代後期で一旦途絶え、古墳時代中期後半から再び集落が形成され、後期から平安時代にかけて再度大規模な集落となる。

墳墓については、流れ山を利用した佐久市根々井大塚古墳（283）が佐久地方最古の墳丘墓に位置づけ

られ、千曲川左岸では前方後方型墳丘墓の瀧の峯1号墳・2号墳がみられる。他には藤塚古墳(222)や今回報告する西近津遺跡群で検出された3基の方形周溝墓が前期古墳として理解されるのみであり、佐久地域では前期古墳は稀少である。中期古墳も数は少なく、調査されたものとしては北西の久保古墳群(289)をあげる程度である。古墳の築造が爆発的に増大するのは後期の6世紀後半から7世紀代である。

佐久地域に約500基ある古墳の大半が後期以降の古墳である。そのなかには径約30mという佐久地方最大の三河田大塚古墳(342)、金銅製馬具の優品が出土した佐久市東一本柳古墳(288)、長野県内では珍しい埴輪が多量に出土した北西の久保17号墳などがある。また祭祀遺跡としても軽井沢町入山峠祭祀遺跡や立科町雨境峠祭祀遺跡群がみられ、これらを結ぶルートは古東山道として理解されている。

### 古代(奈良・平安時代)

古代佐久郡の郡衙は佐久平北部の台地上に存在した可能性が高いと考えられている。御代田町から小諸市・佐久市にかけて広がる鋳師屋遺跡群の御代田町前田遺跡(20)・十二遺跡(21)・根岸遺跡(22)や佐久市前田遺跡群(195)などの他、佐久市長土呂遺跡群聖原遺跡、芝宮遺跡群、栗毛坂遺跡群、小諸市中原遺跡群などで9世紀代まで続く大規模な集落が火砕流台地状に広がる。小諸市宮ノ反A遺跡群(141)では溝に囲まれたなかに大形の掘立柱建物跡が並び、駅家に関する倉庫群との見方もある(田中2009)。

西近津遺跡群では古墳時代後期から平安時代にかけての多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡などと共に、銅印や円面硯などの他、刻書・墨書土器などの資料も多く出土している。同じく周防畑遺跡群では獣脚風字硯が出土している。また西近津遺跡群のある長土呂地籍を中心とした佐久平北部からは「大井」と記された墨書・刻書土器が出土する事例が数多くみられ、ここが「大井郷」であった可能性も極めて高くなっている。このように繁栄をみせた平安時代の遺跡も、律令体制の崩壊する10世紀以降は集落規模が縮小し、各地に小規模な集落が散在する様相に変わっていく。

### 中世(鎌倉時代・室町時代・戦国時代)

中世では、御代田町前藤部遺跡(28)、佐久市栗毛坂遺跡群前藤部遺跡で、鎌倉時代から室町時代にかけての竪穴状遺構や土坑が多数検出され、国産陶器や中国舶載陶磁器などが出土している。大井城跡(242)は大井氏の城とされ、同じ台地上の岩村田遺跡群北一本柳遺跡の竪穴状遺構や土坑などは漆や鉄製品の生産に関する集落の可能性が指摘されている。佐久市金井城跡(367)は、戦国時代16世紀代の城跡で、湯川の断崖上に造られている。調査では堀で画された郭が同心円状に広がり、郭内にはおびただしい竪穴状遺構や掘立柱建物跡、土坑などが検出されている。小諸市和田原遺跡群古屋敷遺跡や油久保遺跡でも中世の竪穴建物跡が多数検出されており、近接する東城に関わるものと推測されている。西近津遺跡群においては、古代集落の埋没後、平安時代末から鎌倉時代に土地を区画する溝が掘削され、その埋土から解体されたウマやウシの骨が発見されている。その年齢構成から近隣にウマの生産地が存在した可能性も示唆されてきている。

(註1) 市川健夫氏は、地形学的に厳密な意味での佐久盆地は、佐久市白田から野沢・中込・桜井・岸野の沖積扇状地に限られるとし、「岩村田・小諸・追分原などは浅間山から噴出した火砕流が堆積したシラス台地であり、地形学的にみると盆地とはいえない」ことを指摘する(市川2007)。

(註2) 軽石流堆積物は固結度もゆるく縦に割れやすいので、ごく小さい河川により垂直に侵食される。そして浸食された谷がその堆積物の底の地下水位まで達すると下刻はとどまる。そして両側の谷壁も浸食により切り崩され、谷底を広げていく。この作用により田切り地形は形成される(小諸市1986)。



第6図 周辺の遺跡分布図

第5表 周辺遺跡一覧

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
1	西荒神	御代田町	1	塩野	○			○		
2	東荒神	御代田町	2	塩野 他	○			○	○	
3	滝沢	御代田町	6	塩野	○					
4	上藤塚	御代田町	12	塩野	○					
5	東二ツ石	御代田町	13	塩野	○					
6	湧玉	御代田町	14	塩野	○					
7	細田塚古墳	御代田町	15	塩野			○			
8	塚田古墳群	御代田町	16	塩野			○			
9	馬場	御代田町	17	塩野	○					
10	めがね塚古墳群	御代田町	18	馬瀬口			○			
11	下原古墳群	御代田町	19	馬瀬口			○			
12	小田井城跡	御代田町	20	御代田					○	
13	児玉	御代田町	28	児玉				○		
14	塩野西原	御代田町	29	塩野	○					
15	上西田	御代田町	30	塩野	○					
16	西畠	御代田町	32	塩野		○				
17	弥堂	御代田町	33	塩野	○					
18	下藤塚	御代田町	37	塩野	○					
19	野火付	御代田町	40	小田井				○	○	
20	前田	御代田町	41	小田井			○	○		
21	十二	御代田町	42	小田井				○		
22	根岸	御代田町	43	小田井				○		
23	根岸古墳	御代田町	44	小田井			○			
24	金井城跡	御代田町	45	小田井					○	
25	中金井	御代田町	46	小田井					○	
26	曾根城跡	御代田町	53	小田井					○	
27	跡坂	御代田町	54	小田井					○	
28	前藤部	御代田町	55	小田井			○	○	○	
29	聖原II	御代田町	56	小田井			○	○	○	
30	西向原	御代田町	57	馬瀬口				○		
31	塩野城跡	御代田町	60	塩野					○	
32	細田	御代田町	61	塩野		○				
33	下荒田	御代田町	62	塩野		○		○		
34	塚田	御代田町	63	塩野	○		○			
35	谷地城跡	御代田町	65	荒町					○	
36	馬瀬口城跡	御代田町	66	馬瀬口					○	
37	下弥堂	御代田町	67	塩野	○					
38	中屋際	御代田町	68	塩野	○			○		
39	関屋	御代田町	69	塩野	○			○		
40	下大宮	御代田町	71	塩野	○			○		
41	下ノ平	御代田町	72	塩野	○					
42	北原	御代田町	73	塩野	○					
43	辰場	御代田町	74	馬瀬口	○					
44	長倉城跡	御代田町	75	小田井					○	
45	戸谷城跡	御代田町	76	小田井					○	
46	鶴巻	御代田町	79	児玉					○	
47	一本木	御代田町	81	児玉				○		
48	腰巻	御代田町	82	児玉				○		
49	下児玉古墳	御代田町	83	児玉			○			
50	藤塚経塚	御代田町	84	御代田					○	
51	小諸城跡	小諸市	78	丁					○	○
52	鹿島古墳	小諸市	79	丁			○			
53	東沢城跡	小諸市	81	甲					○	
54	松井古墳	小諸市	82	甲			○			
55	北霞古墳群	小諸市	83	甲			○			
56	郷土	小諸市	84	甲	○					
57	郷土古墳群	小諸市	85	甲			○			
58	中松井城跡	小諸市	86	甲					○	
59	古熊野堂古墳	小諸市	87	甲			○			
60	熊野裏A	小諸市	88	甲	○	○		○		
61	堰下古墳群	小諸市	89	甲			○			
62	石神遺跡群	小諸市	90	八満	○			○		
63	長畝	小諸市	91	八満				○		
64	沼辺	小諸市	92	八満				○		

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
65	牛冷	小諸市	93	八満				○		
66	牛冷塚古墳	小諸市	94	塩野			○			
67	宮崎城跡	小諸市	95	塩野					○	
68	善仁古墳	小諸市	96	塩野			○			
69	中大宮	小諸市	97	塩野	○					
70	下荒田	小諸市	98	塩野						○
71	七五三掛城跡	小諸市	108	甲					○	
72	万才海土古墳	小諸市	109	甲			○			
73	万才海土	小諸市	110	甲				○		
74	北菊田	小諸市	115	丁					○	
75	与良平古墳	小諸市	116	甲			○			
76	与良城跡	小諸市	117	甲					○	
77	要畑	小諸市	118	甲				○		
78	六道A	小諸市	119	甲				○		
79	六道B	小諸市	120	甲				○		
80	野岸	小諸市	121	甲	○	○		○		
81	熊野裏B	小諸市	122	甲				○		
82	東野岸	小諸市	123	甲				○		
83	袖川原	小諸市	124	加増					○	
84	与良古墳	小諸市	126	甲			○			
85	加増遺跡群	小諸市	127	加増	○		○	○	○	
86	加増古墳群	小諸市	128	加増			○			
87	日向	小諸市	129	加増				○		
88	乙女城跡	小諸市	130	加増					○	
89	源太谷地5号墳	小諸市	131	加増			○			
90	峯	小諸市	132	加増				○		
91	加増城跡	小諸市	133	加増					○	
92	八子屋塚古墳	小諸市	134	加増			○			
93	唐松一里塚	小諸市	135	甲						○
94	大塚遺跡群	小諸市	136	加増	○		○	○		
95	唐松古墳群	小諸市	137	加増			○			
96	古屋敷	小諸市	138	柏木	○			○	○	
97	柏木北城跡	小諸市	139	柏木					○	
98	柏木南城跡	小諸市	140	柏木					○	
99	前原古墳	小諸市	141	柏木			○			
100	柏木原遺跡群	小諸市	142	柏木			○	○		
101	坪ノ内	小諸市	143	柏木			○	○		
102	稲田A	小諸市	144	柏木			○	○		
103	久保田	小諸市	146	平原			○	○		
104	久保田古墳群	小諸市	147	平原			○			
105	平原城跡	小諸市	148	平原	○				○	
106	北原遺跡群	小諸市	149	平原	○			○	○	
107	三田原遺跡群	小諸市	150	平原	○			○		
108	三子塚遺跡群	小諸市	151	平原	○	○	○	○		
109	寺裏塚古墳	小諸市	152	平原			○			
110	乗寄古墳	小諸市	153	塩野			○			
111	上三田原城跡	小諸市	154	平原					○	
112	十石城跡	小諸市	155	平原					○	
113	三子塚1号墳	小諸市	156	平原			○			
114	赤沼	小諸市	158	平原	○			○		
115	中村	小諸市	166	山浦					○	
116	大洞	小諸市	167	甲				○		
117	北原田	小諸市	169	甲				○		
118	西原田	小諸市	170	甲				○		
119	池久保	小諸市	171	甲					○	
120	菖蒲沢	小諸市	172	山浦	○					
121	上塩川	小諸市	173	甲					○	
122	塩川城跡	小諸市	174	甲					○	
123	下塩川	小諸市	175	甲				○		
124	立原	小諸市	176	甲	○			○		
125	八幡在家古墳	小諸市	177	甲			○			
126	八幡在家	小諸市	178	甲					○	
127	北ノ城跡	小諸市	179	耳取					○	
128	九唐松	小諸市	180	甲				○		

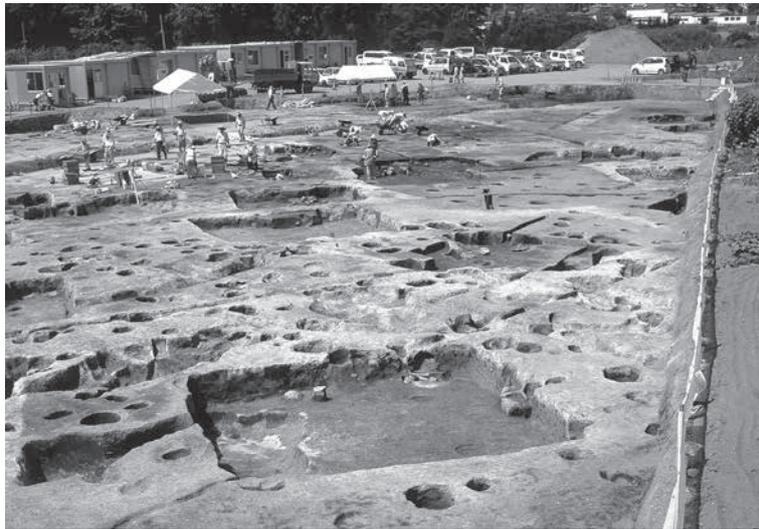
第3章 遺跡の位置と環境

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
129	前原田	小諸市	181	甲				○		
130	繰矢川城跡	小諸市	182	甲					○	
131	乙女古墳	小諸市	183	甲			○			
132	上鶴巻	小諸市	184	甲				○		
133	南諸山	小諸市	185	甲				○		
134	北諸山	小諸市	186	甲				○		
135	上山ノ前	小諸市	187	甲				○		
136	山ノ前	小諸市	188	甲			○	○		
137	関口B	小諸市	189	甲			○	○		
138	関口A	小諸市	190	甲			○	○		
139	釜神	小諸市	191	御影新田			○	○		
140	山神	小諸市	192	森山			○	○		
141	宮ノ反A遺跡群	小諸市	193	御影新田			○	○		
142	舟窪	小諸市	194	御影新田			○	○		
143	宮浦	小諸市	195	森山			○	○		
144	柏原遺跡群	小諸市	196	森山			○	○		
145	大塚原遺跡群	小諸市	197	御影新田			○	○		
146	三弘法山城跡	小諸市	198	平原					○	
147	一ツ谷大塚	小諸市	199	御影新田			○			
148	舟窪館跡	小諸市	200	御影新田					○	
149	谷地原遺跡群	小諸市	201	御影新田	○	○	○	○		
150	長野原	小諸市	202	平原	○		○	○		
151	長野原塚古墳	小諸市	203	平原			○			
152	宮ノ反B	小諸市	204	御影新田			○	○		
153	鑄物師屋	小諸市	205	御影新田			○	○		
154	宮沢道下	小諸市	208	山浦					○	
155	砦城跡	小諸市	209	耳取					○	
156	大林	小諸市	210	耳取			○	○		
157	長林	小諸市	211	耳取				○		
158	耳取城跡	小諸市	212	耳取	○		○	○	○	
159	玄江院館跡	小諸市	213	耳取					○	
160	宮ノ北	小諸市	214	耳取	○	○	○	○		
161	久保田	小諸市	215	耳取	○	○	○	○		
162	西城跡	小諸市	216	森山					○	
163	森山城跡	小諸市	217	森山					○	
164	天神前	小諸市	219	森山				○		
165	萩久保	小諸市	220	森山				○		
166	中原	小諸市	221	耳取				○		
167	牛原	小諸市	222	耳取				○		
168	十字塚古墳群	小諸市	223	耳取			○			
169	五ヵ城	小諸市	224	市		○	○	○	○	
170	芝宮	小諸市	225	市				○		
171	北裏A	小諸市	226	市				○		
172	北裏B	小諸市	227	市					○	
173	耳取大塚古墳	小諸市	228	耳取			○			
174	北市古墳	小諸市	229	市			○			
175	和田原遺跡群	小諸市	230	和田	○	○	○	○		
176	入北原	小諸市	231	和田			○	○		
177	和田原A	小諸市	232	和田				○		
178	和田原B	小諸市	233	和田				○		
179	香久保	小諸市	234	和田				○		
180	鎌田原	小諸市	235	御影新田			○	○		
181	中原遺跡群	小諸市	236	御影新田			○	○		
182	野火付城跡	小諸市	237	御影新田					○	
183	野火付古墳	小諸市	238	御影新田			○			
184	宮下古墳	小諸市	239	耳取			○			
185	宮ノ前	小諸市	240	耳取				○		
186	宮ノ前古墳	小諸市	241	耳取			○			
187	五領A	小諸市	242	耳取					○	
188	五領B	小諸市	243	耳取		○	○	○		
189	五領C	小諸市	244	耳取					○	
190	秋葉山古墳群	小諸市	245	市			○			
191	藤塚古墳	小諸市	246	市			○			
192	東城跡	小諸市	247	和田					○	

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
193	野火附	小諸市	252	御影新田			○	○		
194	下前田原遺跡群	佐久市	1	小田井	○			○		
195	前田遺跡群	佐久市	2	小田井		○	○	○		
196	鑄師屋遺跡群	佐久市	3	小田井		○	○	○		
197	曾根城	佐久市	4	小田井	○	○	○	○		
198	下前田原古墳群	佐久市	5	小田井			○			
199	近津遺跡群	佐久市	6	長土呂		○	○	○		
200	周防畑遺跡群	佐久市	7	長土呂	○	○	○	○		
201	芝宮遺跡群	佐久市	8	長土呂	○	○	○	○		
202	長土呂遺跡群	佐久市	9	長土呂	○	○	○	○	○	
203	栗毛坂遺跡群	佐久市	10	小田井		○	○	○		
204	跡坂	佐久市	11	小田井		○	○	○		
205	中金井遺跡群	佐久市	12	小田井		○	○	○		
206	皎月古墳	佐久市	13	小田井						
207	島原古墳	佐久市	14	小田井			○			
208	からむし古墳	佐久市	15	横根			○			
209	芋の原遺跡群	佐久市	17	横根	○	○	○	○		
210	上の原遺跡群	佐久市	18	横根	○	○	○	○		
211	上長坂遺跡群	佐久市	20	横根	○	○	○	○		
212	唄坂	佐久市	21	小田井	○	○	○	○		
213	横根古墳群	佐久市	22	横根			○			
214	矢口古墳群	佐久市	23	横根			○			
215	平古墳群	佐久市	24	横根			○			
216	塩名田幅	佐久市	25	常田		○	○	○		
217	藤塚	佐久市	26	塚原		○	○	○		
218	前田遺跡群	佐久市	27	塚原		○	○	○		
219	常田居屋敷遺跡群	佐久市	28	常田		○	○	○		
220	西近津遺跡群	佐久市	29	長土呂	○	○	○	○	○	
221	鷺林城址	佐久市	30	常田					○	
222	藤塚古墳群	佐久市	31	塚原			○			
223	姫小石古墳群	佐久市	32	塚原			○			
224	家地頭古墳群	佐久市	33	常田			○			
225	大豆塚古墳群	佐久市	34	塚原			○			
226	下大豆塚古墳群	佐久市	35	長土呂			○			
227	東池下古墳群	佐久市	36	常田			○			
228	鷺林古墳群	佐久市	37	長土呂			○			
229	下蟹澤	佐久市	38	長土呂		○	○	○		
230	濁り	佐久市	39	塚原						
231	長土呂館跡	佐久市	40	長土呂					○	
232	枇杷坂遺跡群	佐久市	41	岩村田		○	○	○		
233	中久保田	佐久市	42	岩村田		○	○	○		
234	西赤座	佐久市	43	岩村田		○	○	○		
235	上岩子	佐久市	44	岩村田				○		
236	新城	佐久市	45	岩村田		○	○	○		
237	腰巻	佐久市	46	上平尾		○	○	○		
238	西大久保遺跡群	佐久市	47	上平尾	○	○	○	○		
239	棧敷	佐久市	48	安原				○		
240	上小平	佐久市	49	岩村田				○		
241	下小平	佐久市	50	岩村田		○	○	○		
242	大井城跡	佐久市	51	岩村田		○	○	○	○	
243	岩村田遺跡群	佐久市	52	岩村田		○	○	○	○	
244	潰石	佐久市	53	上平尾		○	○	○		
245	潰石古墳	佐久市	54	上平尾			○			
246	棧敷古墳	佐久市	55	安原			○			
247	東大久保遺跡群	佐久市	56	上平尾	○	○	○	○		
248	十二前	佐久市	57	上平尾				○		
249	矢澤	佐久市	58	上平尾				○		
250	宮の前	佐久市	59	下平尾				○		
251	北山寺	佐久市	60	下平尾				○		
252	木田橋	佐久市	62	下平尾				○		
253	白岩城跡(里古城)	佐久市	67	上平尾					○	
254	塚畑古墳	佐久市	71	上平尾			○			
255	宿古墳	佐久市	72	上平尾			○			
256	宮の西古墳	佐久市	73	下平尾			○			

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
257	猫田遺跡群	佐久市	75	鳴瀬	○	○	○	○		
258	熊の堂	佐久市	78	鳴瀬	○	○	○			
259	尼塚遺跡群	佐久市	79	鳴瀬	○	○	○			
260	新城	佐久市	80	塚原	○	○	○			
261	宮の前田	佐久市	82	塚原		○	○	○		
262	中溝	佐久市	83	塚原		○	○	○		
263	堰添	佐久市	85	常田		○				
264	宮の前	佐久市	86	塚原					○	
265	道添	佐久市	87	塚原					○	
266	塚原屋敷添	佐久市	88	塚原					○	
267	宮の塚古墳	佐久市	89	塚原				○		
268	狐塚古墳	佐久市	90	塚原				○		
269	龍子田	佐久市	91	塚原					○	
270	西一里塚遺跡群	佐久市	92	岩村田		○	○	○		
271	日向屋敷	佐久市	93	根々井		○	○	○		
272	根々井居屋敷	佐久市	94	根々井		○	○	○		
273	根々井氏館跡	佐久市	95	根々井						○
274	鳴澤遺跡群	佐久市	96	根々井	○	○	○	○		
275	北西の久保	佐久市	98	岩村田		○	○	○		
276	中西の久保遺跡群	佐久市	99	岩村田		○	○	○		
277	中鳴澤遺跡群	佐久市	100	岩村田		○	○	○		
278	上砂田	佐久市	101	岩村田		○	○	○		
279	松の木	佐久市	102	岩村田		○	○	○	○	
280	諏訪分遺跡群	佐久市	106	根々井		○	○	○		
281	寺畑遺跡群	佐久市	107	根々井		○	○	○		
282	根々井東原館跡	佐久市	108	根々井						○
283	根々井大塚古墳	佐久市	109	根々井				○		
284	姫宮塚古墳	佐久市	110	根々井				○		
285	上鳴澤古墳群	佐久市	111	根々井				○		
286	喜平治山古墳	佐久市	112	岩村田				○		
287	国蔵山古墳	佐久市	114	岩村田				○		
288	東一本柳古墳	佐久市	115	岩村田				○		
289	北西の久保古墳群	佐久市	116	岩村田				○		
290	下信濃石	佐久市	118	岩村田					○	
291	蛇塚遺跡群	佐久市	119	新子田						○
292	東内池	佐久市	121	新子田						○
293	野馬窪遺跡群	佐久市	122	猿久保		○	○	○		
294	猿久保屋敷添	佐久市	123	猿久保		○	○	○		
295	岩井堂	佐久市	124	岩村田		○	○	○		
296	野馬窪古墳	佐久市	125	猿久保				○		
297	蛇塚古墳群	佐久市	126	安原						
298	戸屋敷遺跡群	佐久市	127	安原					○	
299	猫久保遺跡群	佐久市	128	安原					○	
300	高師町遺跡群	佐久市	129	新子田	○	○	○	○		
301	筒畑遺跡群	佐久市	130	安原					○	
302	東村遺跡群	佐久市	131	下平尾	○	○	○	○		
303	筏室遺跡群	佐久市	132	安原宇				○	○	
304	宿上屋敷	佐久市	133	安原宇					○	
305	大角	佐久市	136	下平尾		○	○	○		
306	燕城址	佐久市	139	安原						○
307	安原大塚古墳	佐久市	141	安原				○		
308	粕田	佐久市	202	鳴瀬					○	
309	曇畑	佐久市	203	鳴瀬		○	○			
310	落合居屋敷	佐久市	204	鳴瀬		○	○	○		
311	鳴瀬宮の前	佐久市	205	鳴瀬		○	○	○		
312	岩尾城跡	佐久市	206	鳴瀬						○
313	下北古屋	佐久市	207	鳴瀬					○	○
314	倉瀬	佐久市	209	伴野	○				○	
315	合浜田	佐久市	217	根岸					○	
316	唐松坂	佐久市	218	伴野					○	
317	休石	佐久市	219	伴野		○	○	○		
318	舞台場	佐久市	220	伴野		○	○	○		
319	下県屋敷遺跡群	佐久市	221	伴野	○	○	○	○		
320	東窪井戸	佐久市	222	伴野		○		○		

地図 番号	遺跡名	市町村名	遺跡 番号	所在地	時 代					
					縄 文	弥 生	古 墳	奈 平	中 世	近 世
321	火の雨塚古墳	佐久市	223	伴野				○		
322	鳴瀬神明	佐久市	224	鳴瀬		○	○	○	○	
323	北道見	佐久市	225	鳴瀬		○	○	○	○	
324	大和田屋敷遺跡群	佐久市	226	鳴瀬		○	○			
325	大和田遺跡群	佐久市	227	鳴瀬	○	○	○			
326	上平遺跡群	佐久市	228	鳴瀬		○	○	○		
327	鳴瀬中屋敷遺跡群	佐久市	229	鳴瀬		○		○	○	
328	白山遺跡群	佐久市	230	鳴瀬	○	○	○	○		
329	寄塚遺跡群	佐久市	231	横和		○	○	○	○	
330	鍛冶田	佐久市	232	横和		○	○	○	○	
331	北久保	佐久市	233	横和				○	○	○
332	今井西原	佐久市	234	今井				○	○	○
333	今井宮の前	佐久市	235	今井					○	○
334	今井城跡	佐久市	236	今井						○
335	落合神明館跡	佐久市	237	鳴瀬						○
336	道見塚古墳	佐久市	238	鳴瀬				○		
337	寄塚古墳	佐久市	239	横和				○		
338	宮の上遺跡群	佐久市	240	横和	○	○			○	
339	中原遺跡群	佐久市	241	今井	○	○	○	○	○	○
340	赤石河原	佐久市	242	根々井		○	○			
341	土堂古墳	佐久市	243	三河田				○		
342	三河田大塚古墳	佐久市	244	三河田				○		
343	蟹ヶ沢古墳	佐久市	245	中込				○		
344	富士塚古墳	佐久市	246	猿久保				○		
345	西妻神	佐久市	247	中込				○		○
346	番屋前遺跡群	佐久市	248	猿久保		○		○		
347	大塚遺跡群	佐久市	249	中込		○		○		
348	馬瀬口遺跡群	佐久市	250	瀬戸		○		○		
349	梨の木 I	佐久市	251	中込						○
350	仲田	佐久市	252	猿久保				○	○	
351	和田	佐久市	253	瀬戸	○	○	○	○		
352	鷺の宮	佐久市	254	瀬戸	○				○	
353	深堀遺跡群	佐久市	255	瀬戸	○	○	○	○	○	
354	寄山遺跡群	佐久市	256	瀬戸	○			○	○	
355	中城峯城跡	佐久市	257	瀬戸						○
356	中城峯古墳群	佐久市	258	瀬戸				○		
357	御経塚古墳	佐久市	259	猿久保				○		
358	金比羅塚古墳	佐久市	260	猿久保				○		
359	和田上古墳	佐久市	261	瀬戸				○		
360	寄山古墳	佐久市	262	志賀				○		
361	戸坂遺跡群	佐久市	263	新子田		○	○	○	○	
362	家の前	佐久市	267	新子田		○	○	○		
363	清水窪	佐久市	271	志賀					○	
364	鳥坂城跡	佐久市	275	新子田						○
365	中糸峯	佐久市	337	瀬戸	○			○	○	
366	延寿城跡	佐久市	539	横根						
367	金井城跡	佐久市	540	小田井						○
368	曾根新城	佐久市	541	岩村田						○
369	浅井城跡	佐久市	545	新子田						○
370	四つ塚古墳	佐久市	552	新子田				○		
371	森平	佐久市	593	横和				○		
372	久保田	佐久市	594	塚原	○	○		○	○	
373	荘山古墳	佐久市	595	塚原				○		
374	洞口古墳	佐久市	811	塩名田				○		
375	五領城跡	佐久市	812	塩名田						○
376	砂原	佐久市	813	塩名田	○	○	○	○		
377	山王	佐久市	814	塩名田						○
378	下川原	佐久市	815	塩名田						○
379	屋敷裏遺跡群	佐久市	816	塩名田					○	
380	中平	佐久市	818	御馬寄					○	
381	田中島	佐久市	819	御馬寄	○	○	○	○		
382	御馬寄城跡	佐久市	820	御馬寄						○
383	下平	佐久市	821	御馬寄					○	
384	熊野	佐久市	822	御馬寄					○	



## 第4章 遺跡の概観と調査の概要

### 第1節 遺跡の概観

西近津遺跡群は小諸市と境を接する佐久市北西部の長土呂・常田地区に所在する（第7図）。その範囲は、東は旧国道141号線沿いから西は県道小諸中込線（139号）付近までと長大である。東西長約1.8km、南北最大幅約0.6km、およそ55万㎡に及ぶ。

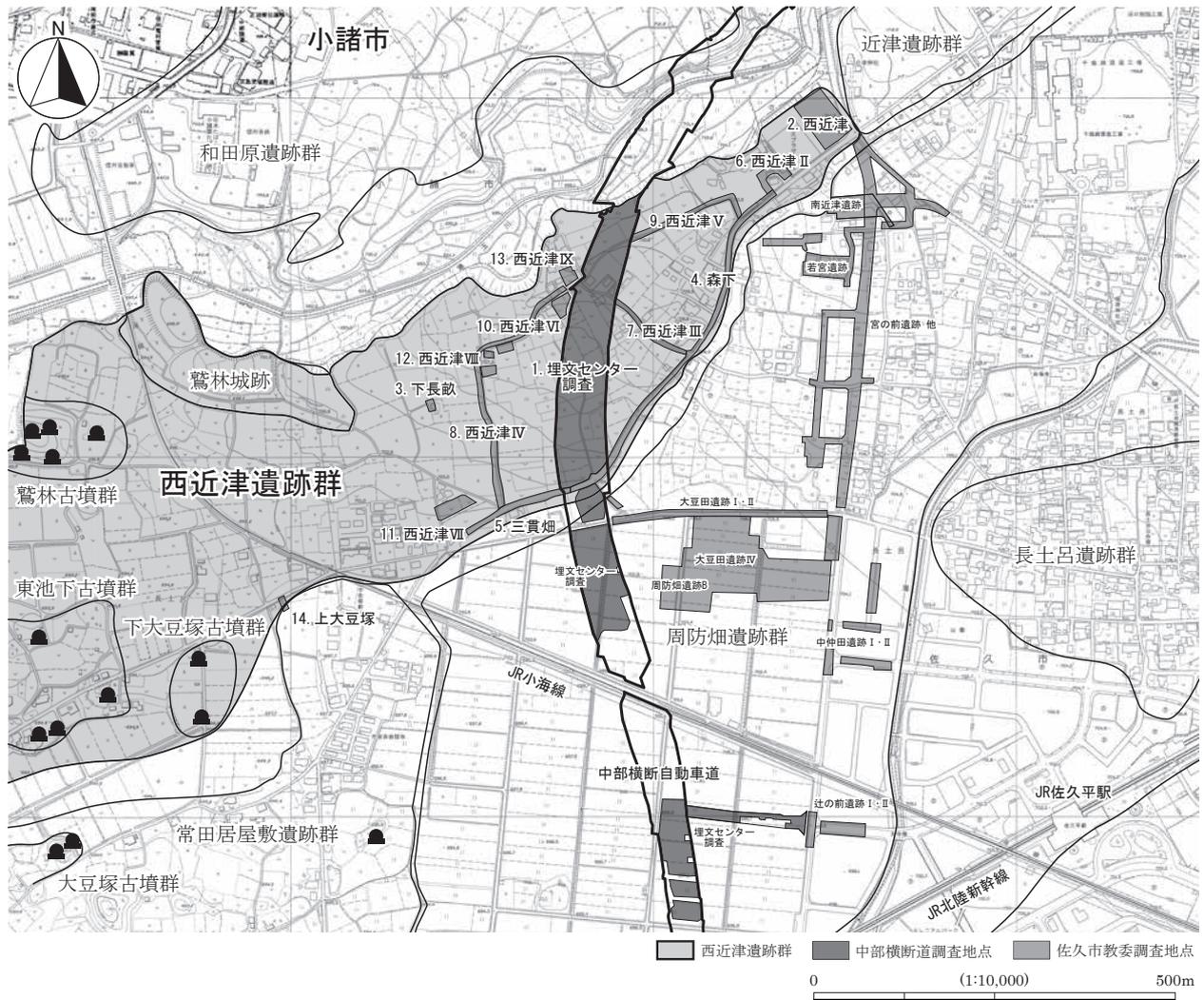
この地域は浅間山麓の裾野に厚く堆積した浅間第一軽石流により形成された火砕流台地の末端部分にあたる。緩やかに南西方向に傾斜する台地は表面起伏が少ない平坦な地形となり、大小の河川が台地を浸食することにより「田切り地形」と呼ばれる特有な地形が発達する。台地末端に近い遺跡周辺では「田切り地形」が特に顕著にみられ、台地を画する田切り谷が傾斜方向に合わせて北東から南西方向に樹枝状に広がっている。西近津遺跡群の立地する台地もこうした浸食谷に画された台地の一つで、北東から南西に細長く延びる。台地北側を画する湧玉川の田切り谷は幅30～50mで、台地と谷底との比高は15m以上あり、垂直または内側にえぐられたような急崖で弱く蛇行している。一方、南側の田切りは幅20m程と狭く、標高720m付近では明瞭な谷地形であるが、旧国道141号線辺りから浅くなり、標高700mのJR小海線辺りでほとんど埋没してしまう（第3章第5図参照）。

本遺跡群と同じ台地の上方に近津遺跡群、南は周防畑遺跡群、北は湧玉川を挟んで小諸市和田原遺跡群といった大規模な遺跡群が隣接する。『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』（佐久市教委1984）によると、西近津遺跡群は長土呂字西近津・下大豆塚・三貫畑・小金井・森下・下長畝・東鷲林・常田字鷲林・東池下、塚原字大豆塚に跨って分布する縄文時代から平安時代の集落跡とある。また本遺跡群内の南西には古墳群がある。鷲林古墳群5基、下大豆塚古墳群2基、東池下古墳群4基、家地頭古墳群2基はいずれも円墳といわれている。中世城址としては湧玉川が北側に蛇行し台地が張り出した部分に鷲林城址がある。

本遺跡群は今回を含め14地点14件の緊急発掘調査が行われている（第6表）。埋文センターが担当した中部横断自動車道建設用地以外は全て佐久市教委が調査を担当している。調査年度は昭和46年度から平成24年度に渡り、市道改修など公共工事に関わる5カ所と民間工事に関わる8カ所、中部横断自動車道1カ所であり、調査地点はJR小海線付近から東に偏る。

いずれの地点からも竪穴住居跡（竪穴状遺構）が発見され、調査総数は750軒を超える。竪穴住居跡の時期は縄文時代中後期、弥生時代後期、古墳時代～奈良・平安時代、中世に分類され、複合する集落跡が広く包蔵されていることがわかる。中部横断自動車道建設用地内は調査面積が広ばかりでなく、縄文時代から中世までの遺構が濃密に重複している。また路線が田切り台地を南北に横断するように設定されているため、北の断崖から南の氾濫低地に向かう緩斜面まで、地形環境の差異と遺構群の分布について検討することに適している。

また佐久市教委が小規模な民間開発や狭長な市道改修について、丹念に進めてこられた調査成果と統合して遺跡群を把握する機会ともなった。西近津遺跡群のみならず、長土呂地区に所在する近津遺跡群、周防畑遺跡群においても中部横断自動車道関連の発掘調査に前後して進められている、基盤整備事業や民間開発などに関わる発掘調査で得られた成果について、総合的に評価すべき時機が近付きつつあるといえよう。



第7図 西近津遺跡群と周辺遺跡の調査状況

第6表 西近津遺跡群の調査一覧

No	遺跡名	所在地	調査年度	検出遺構等
1	西近津遺跡群	長土呂森下・西近津	平成18～20年度	住居跡548（縄文2、弥生後期110、古墳～平安432、中世4）、掘立柱建物跡122、円形、方形周溝墓22、土坑2474、溝跡43
2	西近津遺跡	長土呂西近津	昭和46年度	住居跡4（古墳3）、溝跡8
3	下長畝遺跡	長土呂下長畝	昭和60年度	住居跡4（弥生2、不明2）、土坑7、溝跡3
4	森下遺跡	長土呂森下・若宮・西近津他	昭和63年度	住居跡20（弥生4、古墳5、奈良1、平安6、不明3）、土坑29、溝跡6他
5	三貫畑遺跡	長土呂三貫畑	平成2年度	住居跡4（弥生1、古墳1、奈良1、平安1）
6	西近津遺跡Ⅱ	長土呂西近津	平成15年度	住居跡6（古墳5、奈良1）、堅穴状1、土坑1
7	西近津遺跡Ⅲ	長土呂西近津・森下	平成18年度	住居跡29（古墳～平安）、土坑20、溝跡2
8	西近津遺跡Ⅳ	長土呂森下	平成19・20年度	住居跡53（古墳～平安）、掘立柱建物跡3、土坑58、溝跡13
9	西近津遺跡Ⅴ	長土呂西近津	平成19年度	住居跡19（弥生後期2、古墳11、奈良～平安6）、古墳1、土坑10、溝跡7
10	西近津遺跡Ⅵ	長土呂森下	平成20年度	住居跡10（古墳5、奈良1、平安1、不明3）、掘立柱建物跡溝跡2、土坑4、溝跡4他
11	西近津遺跡Ⅶ	長土呂三貫畑	平成20年度	住居跡26（弥生後期7、古墳2、奈良3、平安9、不明5）、掘立柱建物跡2、土坑12、溝跡2他
12	西近津遺跡Ⅷ	長土呂森下	平成22年度	住居跡25（縄文1、弥生後期3、古墳6、奈良8、平安3、奈良～平安1、不明3）、円形周溝墓3、土坑37、溝跡3他
13	西近津遺跡Ⅸ	長土呂西近津	平成23年度	住居跡4（古墳3、不明1）、掘立柱建物跡1他
14	西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群・大豆塚遺跡	長土呂	平成24年度	住居跡2（弥生後期2）、土坑2、溝跡1、ピット5

## 第2節 調査の概要

今回の調査前に、調査区南側に隣接する市道近津中佐都線が佐久市教委によって調査されており（森下遺跡・三貫畑遺跡）、弥生～平安時代にかけての集落跡が確認されている。

**全体の調査計画** 調査は平成18年より20年度までの3カ年計画で進められた。調査総面積は23,950㎡である。調査区は南北に長く、延長400mに及ぶ。18年度は南側の調査区4,000㎡について調査を実施した。19年度は中央部から北側の湧玉川崖際まで16,550㎡の調査を実施した。20年度は未買収地、市道分など3,400㎡の調査を実施した。

**区割り**（第2章第2図参照） 調査地区は1区画3,000～4,000㎡程度の8区画に分割した。18年度は1区と2区、3区西側部分、19年度は3区東部分、4～6区、8区について調査を実施した。20年度は6区と8区の間にある7区について行った。なお平成19年度調査当初、北端区を9区と分割したが、調査工程上8区と並行して調査を進めたため、整理段階で8区と統合している。

**18年度の調査** 調査区南側の市道近津中佐都線にかかるボックス工事範囲、および調査区中央を南北に通過する市道S1-100号線の切り替え工事部分を優先して行った。便宜的にボックス工事範囲中央を通る市道S1-100号線の西側を1区、東側を2区、当該市道の切り替え工事先部分を3区とした。

調査の方法は、大きな堆積状況の違いがなかったため全地区ともに共通する手順でおこなった。まず、重機を用いて耕作土を除去した。この時点で砂を覆土に持つ溝跡が検出された部分について、第1面目の調査を行った。溝跡には年代を決定できる資料が含まれていなかったが、後に下層調査時にみつかった鎌倉時代の井戸跡を壊していたことが判明し、少なくとも鎌倉時代以降の溝跡であることが判明した。

次に溝跡の周辺は人力によって、それ以外の範囲については重機を使って、遺構検出面となるIV層（黄褐色土・浅間第一軽石流堆積物）上面まで面剥ぎをおこなった。この遺構確認面までは表土から30～100cm程度であった。ただし遺構確認面までに多量の遺物が出土した地点については、上層で重機による掘削を止め、人力による掘削と精査作業に切り替えた。

遺構確認面では、遺構のない部分がほとんどない状況を呈していた。時代別では、弥生時代後期、古墳時代後期～平安時代、鎌倉時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が密集していた。このため、複雑に重なり合った遺構を時代毎、遺構毎に切り分ける作業に通常の遺跡以上に時間をかけた。

遺構測量は手取り実測と業者委託による単点測量を行い、地形測量はデジタル測量を委託して行った。また貴重な資料である弥生時代後期の超大型竪穴住居跡2軒（SB0067・SB0110）については、将来的にCGなどで復元可能とするため、RCヘリコプター（以下RCヘリ）による空中写真撮影とデジタルオルソ図化を委託した。このほか遺跡の全体像を視覚的に確認し記録化するために、RCヘリによる空中写真の撮影とビデオ撮影を2回委託して行った。

**19年度の調査** 19年度の調査は2期に分けて進めた。1期（4月3日～7月31日）は3区東部分と5区を主に調査し、一部4区、8区も着手した。2期（8月1日～12月20日）は3区北側と5区にプレハブと駐車場を移設し、4区、6区、8区の調査を実施した。排土処理は調査区内に仮置き後、工事用地（和田・長土呂工区）へ搬出した。20年度調査予定の7区では、買収の完了した用地のみ表土掘削を19年12月と20年3月に実施し、次年度に備えた。

調査は区ごとに重機による表土掘削、人力による遺構検出、遺構掘削の順に作業を進めた。掘削の各段階で出土遺物の取上げと、測量・写真撮影などの記録作業を実施した。遺構の平面測量は、ポール先端に設置したデジタルカメラによる小規模なデジタル写真測量を委託した。また遺構掘削の進捗にあわせ、

RCヘリによる空中写真撮影を各区で1～2回委託した。必要に応じて高所作業車を使用した担当者による撮影も行った。

**20年度の調査** 調査した7区(3,400㎡)は、19年度調査の5・6区と8区をつなぐ部分で、調査前には宅地と畑地に利用されていた。また工事範囲内の市道部分も調査対象とした。調査工程は、本体工事の工程と調整しながら進めた。まず市道ボックス工事に必要な南半分を優先的に調査し、9月26日に事業者へ引き渡した。次に北半分について10月17日に調査完了し、事業者へ引き渡した。同日、買収の遅れていた230㎡と隣接する市道部分の調査を開始した。12月22日にすべての調査が完了し、出土資料と器材を搬出した後、事業者へ引き渡し、3年間の発掘調査が終了した。

調査は重機による表土掘削、除去、人力による遺構検出、遺構掘削、図化記録、写真記録の順に作業を進めた。遺構の平面測量は単点測量とデジタルトレスまで業者に委託した。調査の進捗状況に合わせてRCヘリによる空撮を3回委託して行った。高所作業車を使用した担当者による撮影も行った。調査完了後、地区ごとに分割されている地形測量図と空中写真については、全地区分をデジタル合成する作業を委託し、調査範囲の全体像把握を可能にした。



## 第3節 基本層序

第3章第1節に記載したとおり、西近津遺跡群は浅間第一軽石流堆積物によって形成された火砕流台地上に立地している。地形は比較的平坦で、北東から南西に緩やかに傾斜する高燥な台地である。今回の調査範囲は現状では畑地と宅地、市道に利用されている。

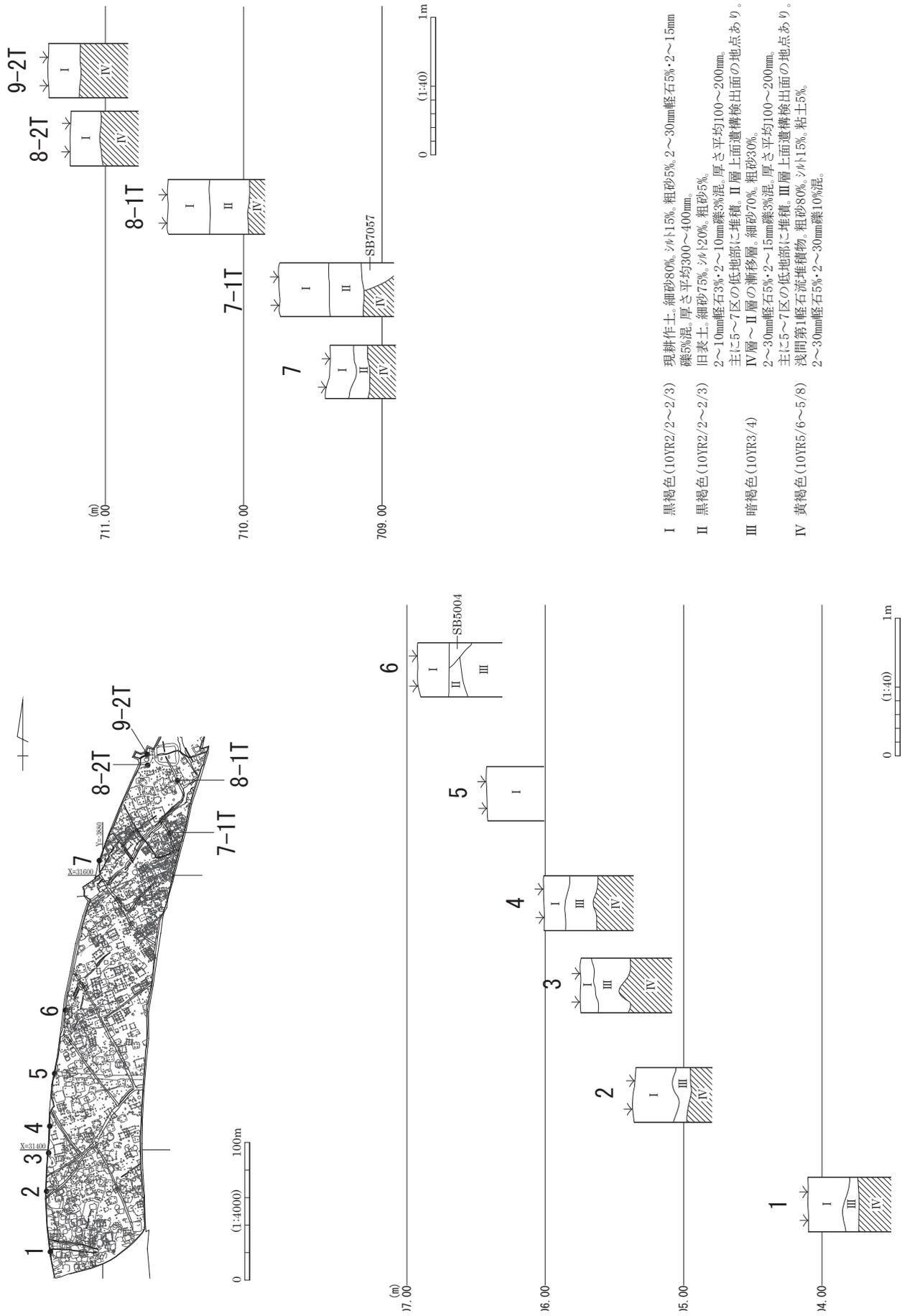
調査では基本層序をⅠ～Ⅳ層の四層に分けている。現旧表土であるⅠ・Ⅱ層下には漸移層であるⅢ層を挟んで、すぐに浅間第一軽石流堆積物の上層部分であるⅣ層が露出する。Ⅳ層は固結度が低い軽石流堆積物であり、Ⅰ～Ⅲ層や遺構埋土の構成物や含有物の大半はⅣ層に起因している。各層の土質は以下の通りである。また地区ごとの堆積状況は第8図と第4分冊 PL1 に示した。

Ⅰ層は現耕作土である。厚さは平均30～40cmで色調は黒褐色。構成物は細砂が主体を成し、シルトと粗砂を含む。含有物としては径2～30mmの軽石や小礫と6cm以下の土器小片がある。調査区の大半を占める畑地ではⅠ層が最上層になる。市道や農道、6・7区にあった宅地ではⅠ層の上に造成土が乗る場合がある。また基礎工事で大きく掘削や削平を受けてⅠ層が消失している場所もある。

Ⅱ層は旧表土である。5～7区の旧地形が低い部分に見られる。厚さは10～20cmと浅く、色調は黒褐色。構成物はⅠ層とほぼ同じで、シルトがやや増している。含有物の軽石、小礫ともにⅠ層より粒径が小さく、量も少ない。断面観察ではこのⅡ層上面で遺構の落ち込みを確認できる場合があるが、平面的に遺構を検出することは難しい。本層上面に縄文時代後期の土器片が集中する箇所が確認されていることから、遅くも縄文時代には堆積していたと考えられる。

Ⅲ層はⅣ層からⅡ層への漸移層と位置付ける。厚さは10～20cmで色調は暗褐色。構成物は細砂が主体で、粗砂も含まれる。含有物はⅣ層とほぼ同様である。Ⅱ層同様、5～7区の地形的に低い部分や耕作の影響が少ない場所に残る。Ⅲ層上面で遺構検出ができる場合がある。しかし色調が遺構埋土に近いことからの確な検出や重複関係を明確にすることは困難である。

Ⅳ層は浅間第一軽石流の上層部分と考えられる。色調は黄褐色で、粗砂が主体を成し、シルトと粘土が加わる。含有物には径2～30mmの軽石と径2～30mmの小礫が僅かにある。基本的に全地区に渡って、Ⅳ層上面が遺構検出面となる。大形土坑や井戸跡の調査、自動車道の本体工事による掘削法面を観察すると浅間第一軽石流自体は少なくとも表土下に5m以上続いている。調査でⅣ層とした黄褐色土は厚さ1～2mほど続き、その下位は色調が褐灰色や赤灰色などに変化したり、軽石礫の含有率が増加したりしている。井戸跡の深さは検出面から2.3～3.1mで、いずれも黄褐色土を掘り抜いている。黄褐色土は固結度が低く透水性が極めて高い。それに比較して黄褐色土下位には固結度の高い部分があり、調査時点では井戸底辺りに地下水が湧出している場面もあった。



第8図 基本層序

## 第5章 縄文時代の遺構と遺物

### 第1節 概観

縄文時代の遺構は少なく、竪穴住居跡2軒のほか土器埋設土坑1基などが検出されている。竪穴住居跡は出土土器や住居形態からいずれも縄文時代中期後葉に帰属すると考えられる。屋外埋設土器は後期前葉に属する深鉢形土器がほぼ正位で埋設されている。また縄文時代の遺物としては縄文土器、土器片加工板、土偶、石器が出土している。縄文土器の時期は草創期から後期にまで及び、出土量は中期後葉から後期前半の土器が大半を占める。近年、本遺跡群については中部横断自動車道建設用地以外の開発行為に関わる発掘調査を佐久市教委が複数地点で実施している。そのうち中部横断自動車道地点の西側にある2カ所(西近津遺跡Ⅳ・Ⅷ)で縄文時代後期の集落跡が確認されている。

今回の調査では草創期まで遡る縄文土器の発見から、縄文時代のごく早い段階から本遺跡群が生活領域の一部として利用されていることが明らかとなった。また佐久市教委の調査した縄文時代後期の集落範囲が本地点にまで及んでいることも確認された。さらに後期集落より一、二段階古い中期後葉には、すでに竪穴住居跡を伴う集落が営まれていたという新知見が得られた。

### 第2節 遺構

#### 1. 竪穴住居跡

SB7067 [遺構:図版 2-2・PL2、土器:図版 3-1・PL163]

**位置**: 7区、I X 17・22 グリッド。 **検出**: IV層上面にて埋設された縄文土器を検出。土器の上面はすでに削平され、熱を受け劣化が著しい。削平された竪穴住居跡の炉と判断し、周囲を検出して柱穴状ピット2基を確認した。重複関係: なし。 **埋土**: 削平により不明。 **構造**: 柱穴2基の直径は30～40cmで、間隔は1.88m。炉は柱穴間のやや南東寄りにある。柱穴には粘土質シルトが堆積する。炉と柱穴の配置から、直径3m前後で2本柱構造の小規模な竪穴住居跡を想定する。 **炉**: 土器埋設炉。深鉢形土器下半部が正位に設置されている。土器は強く熱を受け脆い。内部には柱穴同様に粘土質シルトが堆積する。掘り方は炉体土器を隙間なく設置する大きさと形状である。 **出土遺物**: 炉体土器のみ。 **時期**: 炉体土器より縄文時代中期後葉前半とする。

SB7076 [遺構:図版 2-2・PL2]

**位置**: 7区、I X 12・17 グリッド。 **検出**: IV層上面にて略円形の落ち込みを確認。南東壁に攪乱を受ける。 **重複関係**: SB8001、ST7010、SK7891・7949に切られる。 **埋土**: 粘性の強い黒褐色土が堆積。炉上部には炉埋没後に被覆した焼土がある。 **構造**: 平面略円形を呈し、柱穴を持たない。周溝は東側では連続し、南西側では長さ60～70cmで少し途切れる。周溝底面は凹凸が激しく、ここに上屋構造材を設置していた可能性もある。南壁際の周溝が途切れる部分にある浅いピットは入口に関わる痕跡と推測される。 **炉**: 石組炉。床面中央やや北寄りに1基。板状の角礫5枚を切り炬燵状に組む。南側1枚の設置角度は他より緩やかで、焚口部の機能を考える。底面は地山のままで被熱赤化する。 **出土遺物**: ほとんどない。 **時期**: 住居や炉の構造から、縄文時代中期後葉前半とする。

## 2. 土坑

SQ4001 [遺構:図版 2-2・PL2、土器:図版 3-1・PL163]

**位置**: 4区、ⅡS 21・22 グリッド。 **検出**: IV層上面にて上面が破断された土器1個体分を確認。周囲を精査したが床面や柱穴などは検出されなかったため、単独で土器を屋外に埋設した土坑と判断した。 **重複関係**: なし。 **埋土**: 土器内部の埋土の記録はない。土器の外側にはIV層土主体のにぶい黄褐色土がある。 **構造**: 平面円形で、掘り鉢状の土坑中央に深鉢形土器が埋設されている。土器より土坑の方が一回り大きい。土器は底部を下にし、やや南西方向に傾く。本来、完形土器を埋設したと想定される。土坑の内面や土器自体に被熱した部分はなく、炉としての機能はないと考える。 **出土遺物**: 平底で、大きく開く胴部には縦ケズリ痕が明瞭に残る粗製で無文の深鉢形土器。底部外面には網代痕がある。 **時期**: 埋設土器から、縄文時代後期前半とする。

## 3. 遺物集中

SQ5001 [遺構:図版 2-2、土器:図版 3-1・PL163]

**位置**: 5区、ⅢH 13・14 グリッド。 **検出**: Ⅲ層下位からIV層直上において、土器小片が面的に分布する範囲を確認。周囲を精査したが、床面や柱穴などはなく、土器分布範囲も明瞭な落ち込みは確認されないため、遺物集中として扱う。 **重複関係**: なし。 **埋土**: なし。 **構造**: 分布範囲は東西150×南北30cm。縄文土器の小破片が散漫に分布する。 **出土遺物**: 土器は深鉢形土器の小破片で、接合しない。複数個体からなる。 **時期**: 出土土器から、縄文時代後期末から前期初頭とする。

SQ5002 [遺構:図版 2-2、土器:図版 3-1・PL163]

**位置**: 5区、ⅢM 03 グリッド。 **検出**: Ⅲ層下位からIV層直上において、土器小片と石器の計3点がほぼ同一の高さで出土。周囲を精査したが、床面や柱穴などはなく、遺物分布範囲も明瞭な落ち込みは確認されないため、遺物集中として扱う。 **重複関係**: なし。 **埋土**: なし。 **構造**: 分布範囲は東西100×南北10cm。出土地点の高さはほぼ同一。 **出土遺物**: 土器は堀之内2式の深鉢形土器の口縁部片である。 **時期**: 出土土器から、縄文時代後期前半とする。

## 4. 柱穴群

SA8001 [遺構:図版 2-2]

**位置**: 8区、ⅠT 08 グリッド。 **検出**: IV層上面で同規模のピット群を確認。半截したところ深さも同規模であり、何らかの施設に伴う柱穴群と理解した。検出時点において上部は深く削平されている可能性が高い。 **重複関係**: 柱穴群の中央に溝状の落ち込みSM8004がある。当初、弥生時代後期の小規模な円形周溝墓の周溝と想定し、SM番号を振ったが、調査の結果、断面形状などから周溝とはいえない。本跡との関連性も不明である。 **埋土**: P9には暗褐色の砂混じりシルト質土、その他のピットには黒褐色から暗褐色で粘性のある粘土混じりのシルト質土が堆積する。 **構造**: 小ピットは10基ある。ピットは円弧状に並び、全体で北東-南西方向に長軸を持つ530×340cmの不整楕円形を呈する。東側は北から南へ4・3・2・1の4基が北東に張り出す円弧状に並ぶ。ピット間は120～130cm間隔である。西側には北からP6～9の4基が南西に張り出す円弧状に並ぶ。ピット間は80～140cm間隔である。北西と南東にはピットが検出されていない。また、P5が北東隅のP4から北西方向に140cm外側の位置にあり、P10がP3から南西方向に150cm入った位置にある。ピットの形状は北東隅のP4と南西隅P9が不整楕円形であり、他は円形である。断面形状は円筒状が大半で、P4は不整形である。深さはP9が26cmと最も深く、他

は10cm内外と浅い。**出土遺物**：なし。**時期**：埋土が弥生時代以降の遺構に多い粘性の少ないシルト質ではなく、粘性の強いシルト質土であること。遺構検出面ではピットの底部付近が残存するのみで、本来の掘削面（生活面）は弥生時代以降より高いと想定されること。本跡のある8区には縄文時代早期の土器や石器の分布があること。本跡のような不整形に並ぶ小ピット群は弥生時代以降の遺構として本調査区では確認されていないこと。以上の点から本跡は広く縄文時代の範ちゅうにある、何らかの施設の一部と想定しておく。

## 第3節 遺物

### 1. 土器・土製品 [図版2-1、3-1～4、PL163・164]

前項のとおり、縄文時代に属する遺構とそれに伴う遺物は少ないが、遺跡全体では54kgを越す縄文土器が出土している（図版2-1）。時期別にみると、後期土器が全体の約6割を占め、次に中期土器が2割を超える。この二時期に比べて他の時期は極端に出土量が少なくなり、早期が約1kg、草創期と前期は十数グラムである。縄文土器の時期別出土分布を大地区単位（40×40m）に概観すると、場所によって時期別の出土率に違いのあることがわかる。北側の湧玉川沿いの地区（I・N、O区）では早期の土器がほぼ半数を占める。この付近では特殊磨石も複数出土し、早期集落が存在していた可能性がある。また中期の竪穴住居跡2軒が検出されたI・S、X区やその周辺地区では中期土器の占有率が高い。この地区より南側では後期土器の出土量、占有率ともに増加し、当該期の土器埋設土坑や遺物集中などの遺構分布とも重なる結果となっている。以下に図化掲載した土器について記す。

05373はSB7067の炉に埋設されていた土器で、中期加曾利E式の深鉢胴下半部。縄文を地文とし、垂下するU字状の沈線が施されている。04230はSQ4001に埋設された状態で出土。深鉢の胴下半部で口縁部を欠く。無文で器面には縦位や斜位の整形痕が観察される。底部には網代痕がつく。後期前葉頃か。05179～05252は遺物集中のSQ5001出土。05179～05182は同一個体の中期加曾利E式で、無文の口縁下に隆帯と沈線で楕円状の区画を表出する。区画内には縄文が施される。05217は低い隆帯が2本貼付され、隆帯に沿って沈線が加えられている。破片上部には縄文が施されている。05184は渦巻き状の隆帯が貼付される。05252は隆帯で楕円状や垂下する区画を表出し、区画内には縄文が施される。垂下する隆帯の両端には刺突が加えられている。05394・05395は遺物集中SQ5002出土。後期堀之内2式の深鉢片で、05394は口縁下に楕円状の区画を持ち、区画周囲は円形の刺突や刻みが加えられている。胴上部は沈線による三角形の区画文が表出され、区画内には縄文が施される。05395も同様な胴部片で、細い沈線による三角形の区画文をもち、区画内には縄文が施される。

05100～05457は包含層や時期が異なる遺構から出土した縄文土器である。縄文草創期から後期までの土器があり、後期堀之内式期のものが最も多い。以下時代順に概述する。

05100・05474は草創期の爪形文土器。右下がりの爪形文が多段に施文される。内面には指頭圧痕が残る凹凸がみられる。

05103～05121は早期の押型文土器。05103・05102は山形押型文で、05103は縦位の山形文が狭い無文部を持って帯状に施文される。05102の山形押型文は横位に施文され、破片上部には無文部がみられる。05121は横位の山形文と細かい格子目文が併用されている。05101は粗大な楕円押型文が施される高山寺式土器で、内面には太く深い沈線が口縁に対して斜めに施される。高山寺式土器として明確に把握できるものとしては佐久地域初である。05120は撚糸文が施された土器で、押型文土器に伴うものかもしれない。

05104・05106は貝殻沈線文系土器。細い沈線を鋸歯状に施し、沈線内に貝殻腹縁文が加えられている。

05104 は口唇部にも貝殻腹縁文が施される。いずれも薄手で内面が平滑に整形されている。

05131～05122 は早期条痕文系の鶴ヶ島台式土器。05131・05137 は口縁部に狭い無文部を持ち、細い隆帯で区画した中に格子状の沈線が施されている。口唇部には刺突が加えられる。05137 の垂下する隆帯には刻みが加えられている。内面には粗い横位の条痕文が部分的にみられる。05140 は胴部の屈曲部片で、屈曲部より上部には刻みを加えた隆帯による区画文が施され、屈曲部より下部には粗い条痕文が横位に施される。内面にも同様な条痕文が施される。05151・05152 は細い沈線による区画内に刺突状の押し引きを施文したもので、05128 は隆帯による区画もみられる。内面には粗い条痕文が横位または斜位に施される。05122 は円形の沈線文の周囲や内部に刺突文が加えられ、縦位の条痕文が施される。内面にも粗い条痕文が施される。05117～05108 は粗い条痕文が器内外面に施された土器片で 05131～05122 に伴うものであろう。これらの土器はいずれも胎土に繊維を混入する。

05165 は前期諸磯 b 式土器で、横位の浮線文が貼付される。浮線文には段毎に方向を変えた刻みが加えられている。05162～05166 は半截竹管による沈線文が施文される土器で、05165 と同時期頃と考えられる。

05201～05225 は中期後半の土器である。05201～05176 は加曾利 E 式土器で、05201～05204 は口縁部を無文帯とし、以下に横位や垂下する低い隆帯による区画を行い、区画内には縄文が施文される。05194～05172 は口縁下から沈線で区画し、区画内は縄文が施文される。05174～05176 は同様な胴部片で、低い隆帯や沈線による区画を行い、区画内には縄文を施文している。05212 は隆帯の脇にナデが加えられている。05219～05225 は在地の郷土式土器で、垂下する沈線で区画し、その脇に短沈線が弧状に施される。

05239～05259 は後期称名寺式土器。沈線で区画された中に細かい縄文が施される。05261・05253 は波頂部の口唇部に沈線が施され、刺突文も加えられている。05249 は波状口縁の頂部に粘土紐を逆「の」の字状に貼付し、中央部は貫通する孔となっている。

05415～05428 は圧痕隆帯文土器。口縁下に太い隆帯を貼付し、押しつぶすように圧痕が加えられている。05428 は隆帯が口縁部に取り付く。称名寺式土器に伴うものと考えられる。

05356～05314 は後期堀之内 1 式土器。05356 は外反する口縁で、屈曲する口縁下に沈線が廻る。05342 は内面に沈線で弧状の文様を表出する。05317 は口縁部の内外面に短沈線で弧状の文様を描き、文様中央部には刺突が加えられる。05302 は大きく外反する波状口縁で波頂部は貫通孔となる。口縁に沿って沈線が施され、波底部から細い隆帯が垂下する。内面は波頂部に弧状の沈線、口縁下から口唇部にかけても沈線が加えられている。05272～05349 は口縁下が屈曲するもので、05272 は屈曲部に刻みが付けられ、突起状になる部分に刺突文が加えられる。内外面とも丁寧に研磨された土器である。05331～05290 は胴部で屈曲する土器で、屈曲部下には沈線で渦巻き文や曲線文が施される。05307 は刻みを加えた隆帯を垂下させ、その両側は対称的に沈線で弧状や曲線的な区画文を描き、弧状の中央部に刺突を加える。区画内には縄文が施される。05359・05330 は沈線で区画した中に縄文が施される土器で、05359 は直線で三角形の区画となるが、05330 では曲線的な区画文となっている。05298～05314 は 2 本または 3 本単位の沈線で胴部の区画文を表出するもので、05298・05309 は区画内に縄文が施される。

05397～05372 は後期堀之内 2 式土器。05397～05410 は口縁下に刻みを加えた隆帯が貼付されるもので、05245 は隆帯下が三角形の区画文となる。05410 は隆帯が剥がれ、胴部は細い沈線で区画され、区画内には非常に細かい縄文が施文される。05383 は 3 本単位の沈線を 2 段に施し、その間に波状の沈線を施している。口縁部には突起が付く。07446～05372 は沈線で三角形や曲線的な区画を表出し、その中に細かい縄文が施文される。

05455～05458 は後期加曾利 B 1 式土器。05455～05465 は沈線で区画された帯縄文が多段に施され、口縁内面にも沈線が加えられている。05469・05471 の口唇部には刻みが加えられる。05461～05458 は沈

線による区画内に綾杉状の沈線が施文されている。

05462～05457は後期加曾利B2式。05462・05468は丁寧な研磨が施された精製土器。05462は沈線で区画された帯縄文を区切るように短沈線が加えられ、屈曲する口縁部には粘土紐が貼り付けられる。05468は沈線で区画された帯縄文を弧状の短沈線で区切るようにしている。口縁内面にも沈線が施される。05467は口唇部に大きな刺突が加えられ、内面には沈線が施される。05457は細い沈線が横位に施文され、器面上部は丁寧にナデ整形される。

05478～05481は土器片を再加工した、いわゆる土製円板と呼ばれる土製品で周縁部は粗い打ち欠きのものが多く、05480・05246は縁が丸みをおびている。05481は上下両面から穿孔を始めているが貫通していない。05475は中央部に焼成前の穿孔を持つ破片で、土製円板とは異なる土製品の可能性がある。

10001は中空土偶の頭部で、粘土紐を貼りつけ眉から鼻を表出し、目や鼻孔・口は刺突で表現している。口は孔が貫通する。頭部は突起状に盛り上げられ、沈線が廻り刺突が加えられている。

## 2. 石器 [図版3-202～206, 234, 235・PL276, 277, 284]

縄文時代の石器は弥生時代以降の遺構や検出作業、I・II層から出土している。縄文時代の遺構出土はなく、整理作業の器種分類において、縄文時代の石器と想定される資料を選択した。そのため縄文時代以降の石器である可能性を残している資料もあり、その逆もある。そうした資料については器種ごとの記載で触れたい。なお石器の詳細は表にまとめた(DVD収録)。

縄文時代の石器としては、原石、石核、楔形石器、打製石鏃、石匙、小形刃器(スクレイパー含む)、石錐、打製石斧、磨石がある。小形の剥片石器の石材としては黒曜石、チャート、黒色安山岩などがある。このうち黒曜石製の石器31点について、産地推定分析を実施し、諏訪エリア星ヶ台群18点などの分析結果が得られている(第9章第3節参照)。

原石と石核は31点あり、大きさが10cmを越す個体は2点のみで、それ以外は平均5cm程度と小ぶりである。石材としては黒曜石が大多数を占め、頁岩、鉄石英、石英、珪質頁岩、チャート、ホルンフェルス、黒色安山岩がある。

楔形石器は37点あり、長さは平均2.4cm程度と小さく、使用石材は原石や石核と同様である。黒色安山岩製の長さ81.6mmを測る大形品も1点ある。

打製石鏃は47点ある。石材としては黒曜石が39点と圧倒的で、チャート、黒色安山岩などがわずかにみられる。残存率が高く、法量を測定、推定できる44点のうち、長さ1～2cmの小形は16点、2～3cmの中形が25点、3cmを越す大形が3点である。基部形態としては平基無茎式3点(20481など)、凹基無茎式30点(20470など)、平基有茎式1点(20446)、凹基有茎式8点(20447など)、凸基有茎式2点(20458など)、基部欠損3点に分けられる。また側辺部が鋸歯状となるタイプが4点(20447など)あり、先端部が細くなるタイプは9点で、そのうち明確に屈曲部を持つタイプが2点(20446・20453)ある。欠損部位は先端部21点、基部21点、茎部のみ6点、先端部のみ残る資料は3点である。また基部中央に矢柄装着に関わると想定される擦痕のある資料は6点(20454など)みられる。

石匙は8点あり、全体形は縦長4点、横長4点である。石材には黒曜石、チャート、黒色安山岩がある。20498は黒色安山岩製で縦長、長さ8.95cmと大形であるが、ほかは小形品である。

小形刃器とした資料は8点ある。そのうち、黒曜石とチャート製の7点は縦長剥片の側縁部を中心に刃部調整がみられる。珪質頁岩製の1点(22448)は横長で厚みのある剥片で、体部にも剥離調整があり、刃部角は非常に厚く、いわゆるスクレイパーとされる石器である。

石錐は2点あり、いずれも黒曜石製で先端部(錐部)のみ残存する。1点は基部(持ち手)のある、錐

部が長い形状と推定され、1点は欠損した凹基無茎式石鏃を再加工した可能性がある。

打製石斧は113点あり、そのうち105点が安山岩などの火成岩である。ほかに片麻岩、緑色片岩、頁岩と分類された資料は残存率が3割以下の破片であり、打製石斧以外の石器剥片である可能性も残る。全体形状のわかる残存率が8割以上の資料は12点と少ない。平面形は長方形が多く、次に台形、体部中央のやや上側が括れるひさご形などがある。大きさは長さ12～15cm程度が多く、10cm以下のやや小ぶりの資料もある。厚さは1cm未満の薄手と2～3cmほどの厚手がある。なお20567については、長さが26cmを超え、重量が1.1kgもある大形品であり、弥生時代の石鏃とも考えられる資料である。

磨石（図版3-234・235）には全体形が略長方形あるいは楕円形で、断面形が楕円形、方形、三角形の棒状を呈す、いわゆる特殊磨石がある（21156・21159・21173・21179・21182）。主要機能面は稜部および側辺部にあり、縦長の摩耗痕が顕著である。機能面の側面観は平坦で、断面観は凸曲面となっている。21173は縦長の摩耗痕が重複している。これらの磨石が集中して出土する湧玉川崖際の8区では、縄文時代土器の時代別出土比率において、早期土器の比率が圧倒的に高い結果が出ている（図版2-1）。

## 第6章 弥生時代の遺構と遺物

### 第1節 概観

弥生時代後期における大規模集落遺跡の中核部を調査したといえる。遺構としては超大型竪穴住居跡2軒を含む竪穴住居跡110軒をはじめ、調査区内を東西に横断する計画的な溝跡、円形・方形周溝墓や土坑墓、木棺墓によって構成される墓域などが発見された。

出土遺物としては大量の弥生時代後期の土器をはじめ、石器・石製品のほか、銅釧、鉄鏃、鉄片といった金属製品、骨製品や加工痕のある骨や角などと種類も豊富である。以下に遺構と遺物について記載する。

### 第2節 遺構

#### 1. 竪穴住居跡

##### 1・2区

**SB0002** [遺構:図版 2-24・PL3、土器:図版 3-6、52・PL165、土製品:図版 3-55・PL195、石器:図版 3-236・PL284]

**位置**: III M 02・03 グリッド。 **検出**: 耕作土下のⅢ層上面で SB0001 に切られる西側と北壁の平面プランを確認した。南側は耕作による掘削と削平が著しい。 **重複関係**: (新) SB0001・003・125。 **埋土**: 削平により上層部は不明。床面付近は黒褐色土主体。北東隅のみ、埋土中に長径 2.3 m ほどの楕円形範囲に炭化物を多く含む層 (2層) が面的に分布する。2層からは焼けた鳥骨やミニチュア土器も出土している。床面とは間層 (3層) を挟むため、炭化物の分布した段階と居住段階に時間差を持つ。 **構造**: 長軸を東西方向に持つ平面隅丸長方形を呈する。壁は垂直に近く、南壁直下に周溝あり。支柱穴 4 基は長方形に配置する。略長方形の P1 以外、上面は略楕円形、下面は長楕円形である。深さは 36 ~ 50cm。南北の壁際にある細い円柱状ピット (P12・13・16・17・18・20・22・23) は深さが 28 ~ 49cm あり、壁体構造に関わる柱穴と考える。東壁際の P10 が貯蔵穴、P11 が出入口施設を設置するピットの一つと考えられる。床面はⅣ層土を整地して敲き締めている。 **炉**: 床面中央に掘り込みのない被熱部分があるが、炉として機能したのか判断できない。西側支柱穴間に本来の炉はあったと考えられるが、SB0001 によって壊されていて明らかにできない。 **出土遺物**: 2層土の分布範囲以外では、床面または 10cm ほど高い位置に弥生時代後期の土器片が散乱する。 **時期**: 床面付近出土土器から弥生時代後期 (箱清水式期前半) と考える。 **本跡以前の住居跡** 本跡中央の床面で検出した P5・6・8・9 も長方形配置をなす。P1 東側に接する長楕円形のピットは出入口部施設の設置するピット、その北側に隣接する P19 は貯蔵穴と考えられる。P19 がⅣ層基質土で上部を埋め戻されていることを根拠として、本跡構築の前段階に軸方向をほぼ同じくする規模の小さな竪穴住居跡が存在したと推定する。

**SB0004** [遺構:図版 2-25・PL3、土器:図版 3-6・PL165、石器:図版 3-211、228、236・PL278、284]

**位置**: III M 03・04 グリッドほか。 **検出**: Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。削平の影響著しく、南側は大きく攪乱されている。 **重複関係**: (旧) SB0037。(新) SB0003・125、SK0002・03・41・42、中世のピット 11 基。 **埋土**: 黒褐色土から暗褐色土の複層。軽石含む。 **構造**: 平面隅丸長方形。同規模の柱穴 4 基 (P1・2・3・4) は底面が楕円形を呈す。残りのよい東壁はほぼ垂直に立ち上がる。旧住居跡 SB0037 と北

東隅の柱穴位置（P1）を同じくして、南西方向に拡張している。**炉**：北側柱穴2基の中間に位置する。土器埋設炉。赤彩の壺上半を逆位に据え、壺周囲と炉底面を同一甕の破片で補強する。炉内部と周辺には炭化物層が分布する。**出土遺物**：床面に土器が散在する。**時期**：炉体土器、出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0007** [遺構：図版 2-26・PL17、土器：図版 3-6, 7・PL165、石器：図版 3-244・PL287]

**位置**：Ⅲ H 25・I 21・M05・N 01 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で平面プランを確認。南東部は攪乱を受ける。**重複関係**：(旧) SB0129。(新) SB0006、SK0005・23。**埋土**：やや細かなレンズ状堆積。東西断面では東壁際の8～10層とそれ以後の堆積土にずれがあり、時間差を認める。**構造**：平面は幅広の隅丸長方形。壁は垂直に近い。長方形に配置するP1・2(またはP16)・3・4を柱穴とする。P1～4は上部が漏斗状に広がり、しまりの悪い黒褐色土(11層)が堆積していて、柱の抜き取り痕といえよう。P16は平面が細長い長楕円形で、抜き取り痕はない。P2とP16は南北に隣接する。南壁際のP8・10が貯蔵穴、P11・13は梯子穴と考える。床は外周部を浅く掘り窪め、Ⅳ層基質土を貼る。中央部は地山を直接敲き締めている。**炉**：北側の床面を壊すSK0005の位置にあったと考えられる。**出土遺物**：住居全体から土器片が出土する。垂直分布は床直上から25cmの範囲にあり、北から南に傾斜するように分布。接合関係も広範に及び、住居廃絶後、ある程度の時間内に廃棄された状況と考える。

**建替えと拡張** 同一床面上で検出した炉とP5～7・9・12・13は配置空間が小さく、主軸線が西にずれていること、炉とP6・9・14上部は埋め戻され、貼床状に敲き締められていることが分かった。これらをSB0007以前の初期住居を構成する施設と判断し、調査途中でSB0129を付した。またSB0007についても支柱配置が2組、貯蔵穴も2基あることから、2時期に分けられると考える。まずやや歪んだ長方形配置の柱穴4基(P1～4)と貯蔵穴P8の段階、次により整った長方形区画となる柱穴4基(P1・16・3・4)とP8外側の貯蔵穴P10の段階である。調査段階の壁や平面形は最終段階の状況である。2回の住居構築(拡張)について整理すると、当初SB0129が構築され、次に南東隅の柱穴位置を同じくして、北東方向に規模を拡張したSB0007を構築。SB0007は更に南壁付近を部分的に拡張したといえる。軸方向が同一であることから全ての住居構築・拡張は規格性を同じくして行われたと推定する。**時期**：出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)とする。

**SB0011** [遺構：図版 2-27・PL3、土器：図版 3-7・PL165、土製品：図版 3-55・PL195、石器：図版 3-209, 210・PL278、金属製品：図版 3-267, 272・PL296, 298]

**位置**：Ⅲ H 18・23 グリッド。**検出**：重機表土剥ぎでSB0018・SB0019と重なる平面プランを確認。トレンチ調査でSB0018・SB0019・SB0130との重複関係を確認する。またSB0019床下にてピット6基を確認。なお南側床面のピット4基は現場にて図化されず、空撮写真から破線復元した。**重複関係**：(旧) SB0130。(新) SB0018・19。**埋土**：暗褐色土の単層。Ⅳ層の土壌化した土質。**構造**：整理段階で新旧2軒を抽出した。新住居は調査時の壁・床面、P1～4の支柱穴、P1南西に隣接する副炉、入口施設として破線復元した4基のうち、南側2基の梯子穴、P5の貯蔵穴により構成される。主炉はSB0019により消失したのだろう。旧住居についてはSB0019床下検出ピットの内側4基を支柱穴、入口施設として破線復元したうちの北側2基の梯子穴、P6の貯蔵穴により構成される。旧住居は新住居より全体形、各施設ともに小ぶりである。壁、床面、炉は残らない。新住居は旧住居と中心軸を同じく壁や支柱穴位置を外側に拡張し、床面も掘り下げて建替えたと理解する。

**新住居** 平面は隅丸長方形。壁はほぼ垂直で長方形に配置する柱穴4基(P1～4)はすべて長楕円形。

南壁際の中央に梯子穴2基、その東隣に貯蔵穴P5がある。床は粗掘りした掘方にIV層土を充填、整地した貼床である。**炉**：主たる炉は北側柱穴間にあったと想定されるが、SB0019により削平されている。南西隅の主柱穴P1の南西床面に副炉1基。赤彩高坏の坏部を正位に埋置する。炉内には炭化物が散見される。**出土遺物**：南側床面に集中する。土器のほか、管玉、鉄製品が出土している。

**旧住居** 平面形は不明だが、新住居と同様に隅丸長方形と推定する。主軸方位は新住居と同じ。規模は新住居より長軸で2m程小ふりと推定する。長方形配置の柱穴4基は略円形から楕円形。梁行方向の柱間距離に新旧住居で差はない。南壁と想定される位置に梯子穴2基が並び、その東隣に貯蔵穴P6がある。壁、床、炉は残らない。**出土遺物**：貯蔵穴P6から土器片が出土。**時期**：新住居の炉体土器、床面出土土器の時期から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。住居中心軸が等しいことから、新旧住居に大きな時間差はないと考える。

**SB0015** [遺構：図版2-28, 29・PL3、土器：図版3-7, 8・PL166、石器：図版3-203, 236, 246・PL284, 288、金属製品：図版3-251, 253, 254, 267, 272・PL290, 291, 296, 298、骨製品：PL311]

**位置**：ⅢH 24・25グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認。遺構重複が著しい地区のため、トレンチ調査などで平面形や重複関係を確認した。**重複関係**：(新) SB0014・16・22・38、SK0008・13・14・17・20・38・58、SD0001・02、SF0001・02。**埋土**：黒色の軽石を含む褐色土。**構造**：ピットの重複関係や位置から、新旧2軒の住居跡を確認した。主軸線はほぼ共通し、主柱穴の位置のずれ方から、旧住居を南北方向に拡張して新住居を構築していると推定できる。旧住居の壁面や床面は新住居構築時に削平されている。

**新住居** 平面は隅丸長方形。長方形配置の主柱穴4基(P1～4)と主軸線上北壁近くに屋内棟持柱P5がある。いずれも底面が楕円形または長方形である。上部が漏斗状に開くが、柱の抜き取り痕かは不明。これらの柱穴のほかに壁際や床面にある小ピットも上屋を支える機能を持っていた可能性がある。南壁際には梯子穴のP7、P11が並び、その東隣に貯蔵穴P19がある。梯子穴の掘方は縦長で北方向に傾斜する。また北東側床面に炭化物が薄く広がる。**炉**：北側主柱穴間に浅いピットを2基検出した。明瞭な被熱はみられないが炉の痕跡であった可能性がある。**出土遺物**：埋土中層から弥生時代後期の土器片が多く出土している。また床面からは鉄釧や鉄製品の出土がある。**時期**：埋土中の土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**旧住居** 新住居の床面および掘方で新住居と軸線を同じくしてやや小ぶりのピットから形成される配置を確認した。壁面・床面・埋土は消失している。**構造**：長方形配置の主柱穴4基と北側主柱穴の北に深さ45cmの小ピットがある。位置からすると屋内棟持柱とみられる。南側には入口施設の梯子穴2基と貯蔵穴が新住居跡のそれらに重複して、やや北側にずれた位置にある。**炉**：北側主柱穴P8・12間にあるP15が炉と考えられるが、被熱などがみられない。**出土遺物**：床下から弥生時代後期の甕片などが出土している。**時期**：SB0015新住居より一段階前の構築といえる。

**SB0017** [遺構：図版2-30～32・PL4、土器：図版3-8, 9・PL166, 167、石器：図版3-244・PL287]

**位置**：ⅢI 16・17・21・22グリッド。**検出**：IV層上面で、SB0025やSB0061などの弥生時代後期住居跡などと重複して検出。先行トレンチ調査などで形状、新旧関係を確認した。**重複関係**：(旧) SB0025・61A・61B。(新) SB0023、SK0260・295・297・309、ST0009。**埋土**：床面近くには灰黄褐色土が全体に堆積する。上層には腐植の進んだ黒褐色土もみられる。**構造**：平面は主軸を南北に持つ、やや歪んだ長方形。壁は垂直気味で、南北方向に主軸を持つ。西壁際には低いテラス状の平坦部があるが、あまり明瞭で

はない。床は全体に貼床である。主柱穴は長方形配置の4基で、屋内棟持柱の柱穴が北壁際中央にある。いずれも平面楕円形。南壁際中央には梯子穴が対に並び、その東隣に貯蔵穴がある。他に北東隅と南西隅に平面は大きい浅いピットがある。性格は不明である。 **炉**：北側主柱穴間に土器埋設炉1基。浅い掘方に大形の赤彩壺底部をやや斜めに設置する。掘方南側が被熱赤化する。 **出土遺物**：住居中央寄りの床面直上に炭化材や炭化物が分布し、その上面から弥生時代後期の土器片がある程度まとまって出土している。南東隅には甕や壺が重なり合って出土している。 **時期**：埋土中の土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0019** [遺構：図版 2-33・PL4, 5、土器：図版 3-9, 10, 11・PL167, 168、土製品：図版 3-54, 55・PL194、石器：図版 3-211, 221, 233, 237・PL278, 281, 285、土製品：PL194]

**位置**：I H 18・23 グリッド。 **検出**：IV層上面にて検出。遺構が密集する地区のため先行トレンチにて重複関係を確認した。 **重複関係**：(旧) SB0011・33・59。(新) SB0020・40、SK0053、SD0001、ピット3基。(不明) SK0199。 **埋土**：南北に堆積状況は連続しない。床面と北壁際、南側を覆う埋土は北側半分で浅い皿状に再掘削され、その内部は非常に細かく分層される堆積状況がみられる。再掘削は床面までは及んでいない。 **構造**：南北に主軸を持ち、平面は北側がやや膨らむ長方形。床は硬く締まる貼床。周溝は全周せず、断続的に残る。南東床面にも直線的な溝が3条ある。主柱穴4基はほぼ長方形に配置し、いずれも平面形は主軸の直交方向に長い楕円形。壁際を中心に検出された複数の小ピットは支柱穴の可能性がある。梯子穴と推定できるピットはなく、南壁際西寄りにある平面円形のピット1は貯蔵穴と考えられる。掘方は浅く、全体に凹凸がある。 **炉**：土器埋設炉を2基検出した。炉1は北側主柱穴間にあり、南側に炉縁石を伴う。炉体は赤彩壺底部2個体分を正位で入子状に重ねる。炉縁は被熱赤化し、周囲床面に炭化物が分布する。炉2は中央やや南側の東壁寄りにある。炉体は無彩壺底部を正位に埋設する。炉内部には炭化物や灰がわずかに残る。 **出土遺物**：北西隅と南西隅の床面には完形に近い状態で赤彩壺が出土する。それ以外は北側上層から大量の土器片や土製勾玉などが出土する。この部分は皿状に再掘削された部分と考えられ、意図的な廃棄行為の痕跡ともみえる。 **時期**：炉体土器、埋土中の土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0024** [遺構：図版 2-34, 35・PL5、土器：図版 3-11・PL168、金属製品：図版 3-254・PL291]

**位置**：III H 14・15・19・20 グリッド。 **検出**：IV層上面にて検出。遺構が密集する地区のため先行トレンチなどから重複関係を確認した。調査段階ではSB0024とSB0045と2軒としたが、同一住居跡と認められるため、まとめてSB0024とした。 **重複関係**：(新) SB0041・46・60・77、SD0003、SK0196・292、ST0007。(不明) SB0026・47。 **埋土**：北側では黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積するが、大半はSB0041に切られて不明な部分が多い。 **構造**：残存部より南北に主軸を持ち、平面は北壁がやや膨らみ隅丸気味の長方形。北側と南側に残る床面は平坦な貼床で掘方は浅い。主柱穴4基は本跡を切るSB0041床下にて確認。長方形に配置し、その上面はSB0041貼床に覆われる。いずれも平面は梁方向に長い楕円形である。西側主柱穴のP19とP14にはそれぞれP30とP6が接する。形状は楕円形で深さは主柱穴に比べてやや浅い。炉南に旧炉の痕跡と推定する掘方があることから、2つのピットは改築前の主柱穴であった可能性がある。また主軸線状の北壁際床面にあるP1は屋内棟持柱と考えられる。南壁際には梯子穴のピット2基が並び、そのすぐ東には貯蔵穴がある。 **炉**：SB0041床下から1基検出。北側主柱穴間に位置する。上面は大きく壊されているが、炉壁に土器片が密着して検出されていることから、土器埋設炉であったと推定する。炉南側床面が被熱赤化する。炉掘方は皿状で浅く、南側に接する浅い窪みは旧炉の痕跡と想定する。 **出土**

**遺物**：炉体土器の小片のほか、北側床面から甕と鉄鏟、南側床面の貯蔵穴内から赤彩高杯。 **時期**：炉体土器、埋土中の土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0025** [遺構：図版 2-30～32・PL4、土器：図版 3-11, 12・PL169、石器：図版 3-221・PL281、金属製品：図版 3-263, 272・PL294, 298]

**位置**：Ⅲ I 11・16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で、SB0025 や SB0061 などの弥生時代後期住居跡などと重複して検出。先行トレンチ調査などで形状、新旧関係を確認した。 **重複関係**：(新) SB0017、ST0009、SQ0001。(不明) SB0061A・B。 **埋土**：副層。床面堆積土はⅣ層土主体で色調が明るい。上部堆積土には炭化物が多く含まれ、色調は黒い。 **構造**：平面は主軸を南北に持つ、やや胴張りで隅丸気味の長方形。床は貼床である。主柱穴は長方形配置の 4 基。北壁側の主軸線上に並ぶ小ピット 3 基のいずれかが屋内棟持柱の柱穴と考えられる。南壁中央寄り床面に梯子穴が並ぶ。北側主柱穴付近にある平面規模が大きく浅い P6・7 の性格は不明である。古墳時代以後の建物跡などの柱穴の痕跡とも考えられる。 **炉**：北側主柱穴間に土器埋設炉 1 基。浅い掘方に赤彩の壺底部をやや斜めに傾けて設置。掘方周囲が被熱赤化する。 **出土遺物**：上部堆積土の炭化物に混ざって、弥生時代後期の土器片が散乱する。 **時期**：炉体土器、埋土中の土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0026** [遺構：図版 2-29、土器：図版 3-12・PL168]

**位置**：Ⅲ H 19・20 グリッド。 **検出**：SB0047 床下にて確認。 **重複関係**：(旧) SB0066A・B。(新) SB0041・46・47、SK0291。(不明) SB0024・48。 **埋土**：SB0047 床下直下に本跡の床面があり埋土は残存していない。 **構造**：主軸を南北に持ち、平面は隅丸気味で胴張りの長方形。主柱穴は 4 基あったと考えられるが、北西側 1 基は SB0047P1 と重なるため、残らない。ほかの 3 基の平面は梁方向に長い楕円形。桁行方向の主柱穴間には、東西ともに小ピットがある。西壁付近床面にも小ピットがある。南壁際中央には梯子穴が 2 基並ぶ。 **炉**：土器埋設炉 1 基。北側主柱穴間に位置。浅い掘方に赤彩壺口縁部を据え、その上に別の赤彩壺底部を入子状に重ねる。 **出土遺物**：炉体土器以外に遺物はない。 **時期**：炉体土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0027** [遺構：図版 2-36・PL5、土器：図版 3-12, 13・PL169、石器：図版 3-210, 237・PL285、金属製品：図版 3-251・PL290]

**位置**：Ⅲ H 16・17・21・22 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で検出。最も遺構が密集する地区で平面精査と先行トレンチにて新旧関係を確認した。 **重複関係**：(新) SB0012・28・30・31・121・124・161・201、SD0001、SK0275。 **埋土**：レンズ状堆積。床面から中層は暗褐色土、上層は黒褐色土になる。 **構造**：南北に主軸を持ち、平面はやや隅丸気味の長方形。床面は平坦で硬く締まる貼床。主柱穴と考えられるピットは 6 基検出した。また南壁際には梯子穴と貯蔵穴がそれぞれ 2 組検出された。住居規模とピットの位置関係から、本跡は主軸線を変えず南側に拡張されたと想定される。旧住居の主柱穴は P1・2・3・7、梯子穴は P14・16、貯蔵穴が P5。新住居の北側主柱穴は旧住居と共通の P1・2、南側は旧住居より南に移動した P4・8。梯子穴の P13・15、貯蔵穴の P6 も南に移動している。北側の主柱穴や炉、屋内棟持柱穴は 1 組であり、拡張した状況はない。旧住居の南側主柱穴は埋土上部を黄褐色土で埋められている。 **炉**：土器埋設炉 2 基。炉 1 は北側主柱穴間に位置する。炉体は壺底部や鉢を重ねている。炉周囲床面に炭化物が堆積する。炉 2 は南西側主柱穴 P8 の南に位置する。赤彩壺口辺部を正位に置き、底部に波状文甕を据えている。 **出土遺物**：中央床面に高杯杯部が逆位で発見される。住居北側から土器、銅釧、骨が出土している。 **時期**：炉体土器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0030** [遺構:図版 2-37・PL6、土器:図版 3-13, 14・PL169, 170、石器:図版 3-205, 228, 244・PL277, 283, 287]

**位置**: III H 12・16・17・22 グリッド。 **検出**: IV層上面で検出。最も遺構が密集する地区のため、先行トレンチと古代遺構の調査過程で遺構規模と重複関係を確認した。 **重複関係**: (旧) SB0027・49。(新) SB0029・31・50・152, SD0002, SF0002, SK0071・352, ST0002・10。 **埋土**: 床面堆積土は弥生時代後期の遺構特有の暗褐色土。上層は黒褐色土が堆積。 **構造**: 南北に主軸を持ち、平面は北壁がやや膨らむ長方形。床は敲き締まる。周溝は全周せず、北壁から西壁、東壁と南壁の一部にある。主柱穴4基は長方形に配置。どれも梁方向に長い長楕円形で、南側の2基 P1・2は上面がやや漏斗状に広がる。南壁際にある複数のピットのうち、P7は規模形状が主柱穴相当で、入口施設に伴う可能性がある。P9は位置と規模形状から貯蔵穴と考える。掘方はごく浅い。 **炉**: 土器埋設炉1基。北側主柱穴間。炉周囲の床面に炭化物が分布する。炉体土器は大形の赤彩壺底部を正位に据える。炉埋土下層には灰が溜まる。 **出土遺物**: 南東隅床面から下半部を欠損した赤彩壺が出土している。北壁と南壁側の床面より高い位置より土器片が出土している。 **時期**: 炉体土器と埋土、床面出土の土器から、弥生時代後期(箱清水式期前半)とする。

**SB0033** [遺構:図版 2-38・PL6、土器:図版 3-15・PL170, 171、石器:図版 3-207, 208・PL277]

**位置**: III H 18・19・23・24 グリッド。 **検出**: 遺構が密集する地区のため、上位遺構の調査を進めながら、床面近くまで掘削して本跡を確認。床下に弥生時代後期住居跡 SB0059がある。 **重複関係**: (旧) SB0059。(新) SB0014・19・20・21・34・35・40, SD0001・02, SK0034・35・36・50・79・199。 **埋土**: 床面近くで検出したため、堆積状況は不明。床面上には暗褐色土が堆積している。 **構造**: 南北に主軸を持ち、平面は隅丸で楕円形に近い長方形。床面は平坦で敲き締まる。掘方はほとんどない。主柱穴6基が長方形に配置。平面は梁方向に長い長楕円から楕円形。P2・4・11には板状の柱痕跡が残る。北壁際の主軸線上床面に屋内棟持柱穴がある。平面は主軸方向の楕円形で、同方向の板状をした柱痕跡がある。主柱穴 P2・3・11には重複するピットがある。いずれも浅く、性格は不明である。北東隅の壁際には柱穴状の P10が検出されている。南壁際には複数のピットがあり、中央寄りのピットは梯子穴、東側のピットは貯蔵穴と考えられる。 **炉**: 土器埋設炉2基。炉1は北側主柱穴間に位置。炉体は大形の赤彩壺底部を正位に据えている。土器は細かく割れ、内部に礫が落ち込んでいる。炉埋土上層に炭化物が多く混じる。炉南側の住居中央付近床面には炭化物が広く分布する。炉2は主柱穴 P3と P12の中間に位置。SB0019に西側を大きく壊されている。東側掘方に土器底部が正位で残存していたことから、土器埋設炉と判断した。炉南側縁辺部は被熱赤化する。 **出土遺物**: 遺物は床面と壁際に集中する。弥生時代後期の土器のほか、大小の磨製石斧も出土している。 **時期**: 炉体土器と床面出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)とする。

**SB0035** [遺構:図版 2-39・PL7、土器:図版 3-15, 16・PL171、石器:図版 3-207, 210, 244・PL277, 287]

**位置**: III H 18・19 グリッド。 **検出**: IV層上面で検出。最も遺構が密集する地区のため、先行トレンチと古代遺構の調査過程で遺構規模と重複関係を確認した。 **重複関係**: (旧) SB0033・41・59・77。(新) SB0031・34・39, SD0002, SK0031・80。 **埋土**: 黒褐色土の複層。1層から土器片や骨片などが比較的多く出土している。 **構造**: 南北に軸を持ち、平面は南北壁がやや歪む長方形。床は平坦で浅い掘方にIV層基質土を貼り敲き締めている。主柱穴4基は長方形に配置する。平面形は副軸方向に長い長楕円形主体。南壁際中央にある P6・7・8が梯子穴、やや西寄りにある P9が貯蔵穴と考える。北壁近くの床面にピット3基が1列に並ぶ部分が2カ所ある。性格は不明である。 **炉**: 土器埋設炉1基。北側主柱穴中央に位置する。炉体土器は甕下半部を正位に置く。甕底部中央には穿孔痕がある。炉内には台石が落ち込んだ状態でみつまっている。炉上と周辺の床面には炭化物が広く分布する。炉掘方は強く被熱する。また中央部の床

面も不整形に赤く焼けた範囲が認められる。**出土遺物**：埋土上層から弥生後期土器片、骨片が多く出土する。古代の土器片も混入している。**時期**：炉体土器と床面出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）とする。

**SB0036** [遺構：図版 2-40, 41・PL7、土器：図版 3-16・PL172, 300、土製品：図版 3-54, 55・PL194, 195、石器：図版 3-207, 210, 211, 219, 237, 238, 248・PL277, 278, 281, 285, 289、金属製品：図版 3-272・PL298、骨製品：図版 3-275・PL301, 310, 311]

**位置**：Ⅲ H 20・I 16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面にて検出。本跡北に重なる弥生時代後期の SB0048 はトレンチ調査から本跡より古いことが判明した。**重複関係**：(旧) SB0048。(新) SK0181。**埋土**：床面までが深く、上部遺構が少ないため、堆積状況がよく観察できる。典型的なレンズ状堆積であり、堆積方向の偏りはない。床面直上には黄褐色土が薄く広がり、その上は黒褐色土、上部には暗褐色土が堆積する。遺物は床面から黒褐色土層までに多い。**構造**：南北に軸を持ち、平面は長方形。西壁がやや膨らみ、南西隅と北西隅は丸みを持つ。掘方は浅く、Ⅳ層土を貼って敲き締めている。主柱穴 4 基は長方形に配置する。平面形は副軸方向に長い楕円形で、南東側の P4 底面は極めて偏平である。南壁際中央に梯子穴 2 基、その東に貯蔵穴が隣接する。北壁際に柱穴状の P8・9 が並ぶ。P8 は主軸線上にあり、屋内棟持穴の可能性がある。東西壁際には小ピットがある。**炉**：土器埋設炉が 1 基。北側主柱穴間に位置する。浅い掘方中央に赤彩壺底部を正位に埋設する。炉体南に河原礫の炉縁石を置く。掘方北側に密着する土器片は炉体本体の赤彩壺に接合する。炉南に並ぶ浅い窪みがある。炉上面と周辺床面には炭化物が分布する。**出土遺物**：遺物量は非常に多い。炉周辺床面には弥生時代後期の土器片と動物骨片が集中する。動物骨は南西側にも分布し、骨角製品と加工痕の認められる未製品も複数含まれている。P4 東脇床面にはほぼ完形の赤彩鉢が出土している。**時期**：炉体土器と床面出土土器から弥生時代後期（箱清水式期後半）とする。

**SB0041** [遺構：図版 2-42, 43・PL8、土器：図版 3-17・PL172、土製品：図版 3-54, 55・PL194、石器：図版 3-221, 238・PL281, 285、金属製品：図版 3-254・PL291]

**位置**：Ⅲ H 14・15・19 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面にて検出。特に弥生時代後期の住居跡が多重する地区のため、トレンチ調査と面的な掘下げを行って重複関係などをみた。**重複関係**：(旧) SB0024・26・47・77・156。(新) SB0035・39・54、SK0054・194・195・261～265・267・270、中世ピット。**埋土**：レンズ状堆積。床面上にはⅣ層土ブロックを含む黒褐色土が堆積。上層には含有物の少ない黒褐色土が堆積する。**構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。東壁両隅はやや丸い。床は貼床で、浅くやや凹凸のある掘方をブロック土で埋めて敲いている。主柱穴 4 基は長方形に配置する。全て底部は梁方向に長い楕円形で、中位は外側に有段状の張り出しを持つ。上面は不整な繭玉形の平面形となる。埋土断面観察では柱痕跡はなく、中位より上に堆積の乱れがある。南東隅の P4 以外の主柱穴周囲床面にはⅣ層土基質のブロック土が分布する。柱の解体と抜き取りに関わる痕跡と推定される。また堆積の乱れは有段部底面までには及ばず、有段部自体は柱建立に伴って掘削された可能性が高い。南壁際には梯子穴 P9・20 が並び、その東に並ぶ P8 は貯蔵穴であろう。壁際には周溝が断続的に巡り、周溝と重複するように小ピットも西壁北寄りに 1 基、北壁に 4 基、東壁に 5 基、南壁に 6 基ほどある。小ピットの平面は長楕円形が多い。屋内棟持柱はない。**炉**：土器埋設炉 1 基。北側主柱穴間に位置する。炉体土器はピット状に掘削された掘方に底部欠損の甕下半部を正位に据え、その内側に口辺部欠損の赤彩壺上半部を逆位に重ねている。炉上面には炉体土器に接して南側に河原礫の炉縁石 2 点が並ぶ。**出土遺物**：完形率の高い弥生時代後期土器が南東隅床面より一括して出土する。ほかに床面よりやや浮いた状態で土器片が多く出土している。**時期**：炉体土器や床面出土土器、重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）とする。

**SB0047** [遺構:図版 2-34, 35・PL5、土器:図版 3-18・PL173、土製品:図版 3-54, 55・PL194, 195、石器:図版 3-221, 238・PL281, 285、金属製品:図版 3-259, 263, 273・PL293, 294, 299]

**位置**: III H 14・15 グリッド。 **検出**: IV層上面にて検出。弥生時代後期の住居跡が密集する地区のため先行トレンチなどから重複関係を確認したが、新旧関係を明らかに出来ない遺構もある。本跡床下に検出されたSB0026は本跡に拡張する前段階の住居跡である。 **重複関係**: (旧) SB0026・66A・66B。(新) SB0041・46・60・77、SK0196・291。(不明) SB0024・48。 **埋土**: 複層。壁際から中央部に向かってレンズ状堆積がみられる。遺物は床面よりやや高い下層から中層に分布する。 **構造**: 南北に主軸を持ち、平面は北側がやや膨らみ隅丸気味の長方形。床は平坦で貼床。支柱穴4基は長方形に配置する。支柱穴の平面形は梁方向に長い楕円形。北壁際床面には主軸線上に屋内棟持柱穴がある。棟持柱穴は主軸方向に長い長楕円形。南東側の支柱穴P10の南側にはほぼ同規模のP11が並ぶ。南壁際中央には梯子穴2基が並び、その東隣に円形の貯蔵穴1基がある。 **炉**: 土器埋設炉1基。北側支柱穴間に位置する。炉周囲の床面には炭化物が分布する。炉体は複数の土器が入子状に重なる。掘方は浅く、炉体土器の形状に沿う。 **出土遺物**: 床面および埋土下層から全体形のわかる土器、土器片加工板、みがき石、鉄鏃が出土している。 **時期**: 炉体土器、埋土中の土器から、弥生時代後期(箱清水式期前半)とする。

**SB0048** [遺構:図版 2-40, 41・PL8、土器:図版 3-18・PL173、土製品:図版 3-55・PL195、石器:図版 3-210]

**位置**: III H 15・20 グリッド。 **検出**: IV層上面にて検出。本跡南に重なる弥生時代後期のSB0036はトレンチ調査から本跡より新しいことが判明した。 **重複関係**: (新) SB0036・47・60、SK0281・282、ST0007。 **埋土**: 複層。床面にIV層基質土が堆積。上層は暗褐色土が堆積する。 **構造**: 南北に軸を持ち、平面は長方形。北・西・南壁がやや膨らむ。床は平坦な貼床。凹凸のある掘方を暗褐色土と黄褐色土で埋めて、敲き締めている。支柱穴4基は長方形に配置する。いずれも梁方向に長い楕円形。SB0036床下検出の北東隅以外の支柱穴際にはやや規模の小さな柱穴が1基ずつある。北壁際中央床面には屋内棟持柱穴がある。上面は漏斗状に広がる。下位は主軸に長い楕円形である。南壁際中央の床面には長楕円形の梯子穴2基が並ぶ。 **炉**: 土器敷炉1基。北側支柱穴間に位置。浅い掘り方に赤彩壺胴部片を置き、南側縁に河原礫の炉縁石がある。炉内部から周辺床面には炭化物を含む黒褐色土が薄く堆積する。 **出土遺物**: 出土量は少なく、炉体土器のほか、床面付近を中心に弥生時代後期土器が出土している。 **時期**: 炉体土器などから弥生時代後期(箱清水式期前半)とする。

**SB0049** [遺構:図版 2-44・PL8、土器:図版 3-19・PL173、土製品:図版 3-56・PL195、石器:図版 3-232, 238・PL283, 285、金属製品:図版 3-272・PL298]

**位置**: III H 12・13・17・18 グリッド。 **検出**: IV層上面。トレンチ調査で壁の立ち上りと遺構の重複を確認した。 **重複関係**: (新) SB0030・51・96・97・153。 **埋土**: 複層。暗褐色土主体で、軽石粒などの大きさや含有率で分層した。北東部埋土上層には炭化物を含む暗褐色土と黒褐色土が部分的にみられる。 **構造**: 南北に軸を持ち、平面は長方形。北壁中央がやや膨らみ、北壁両隅はやや丸い。床は貼床で、浅い掘方にブロック土を充填し上面を敲いている。周溝は東西壁際にあり、連続しない。支柱穴4基は長方形に配置し、平面は梁方向に長い楕円形で、北側の2基上部はやや有段状に開く。柱痕跡はみられない。南壁際中央の床面には梯子穴2基があり、その東に貯蔵穴と考えられるP3・7が南北に並ぶ。梯子穴2基は共に南北に細長く、底面は南北2カ所に小ピット状の落ち込みがある。ピット埋土の所見は無いが、梯子穴と貯蔵穴の位置関係から本跡は南壁部分を拡張している可能性がある。当初の南壁に沿って梯子穴2基底部の北側落ち込みと貯蔵穴P7があり、南壁拡張に伴い、梯子穴と貯蔵穴も南にずらした結果、梯子穴底部の

南側落ち込みと P3 が掘削されたと推定される。 **炉**：土器埋設炉 2 基。炉 1 は北側主柱穴間、炉 2 は南西主柱穴 P4 の南隣に位置。炉 1 はピット状の掘方に赤彩壺胴部上半を逆位に据え、掘方底面に甕片と別の赤彩壺底部を重ねる。炉周辺と住居中央床面には炭化物層が分布する。炉 2 は円形のピット状掘方中央に人頭大の河原礫があり、礫と南壁に接して甕底部片が正位に据えられている。炉 1 と 2 の炉体土器のうち、甕は接合する。 **出土遺物**：南壁際から床面に完形率の高い弥生時代後期の土器がある。 **時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0056** [遺構：図版 2-45、土器：図版 3-19・PL173]

**位置**：Ⅲ H 06・07・11・12 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。弥生時代から古代まで遺構が密集する地区。上部遺構の調査を進めながら、本跡の形状規模を確認した。本跡と重複する弥生時代後期の住居跡の新旧関係は古い順に SB0155、SB0056（本跡）、SB0102 と判断した。 **重複関係**：(旧) SB0155。(新) SB0051・97・98・102・104・105・154。 **埋土**：床面付近に暗褐色土、上部に黒褐色土が堆積する。 **構造**：残存する壁などから東西に軸を持ち、平面は長方形と判断した。床面の残る東側には主柱穴 2 基が棟方向に並ぶ。それと対応するピットは SB0051・104 床下から検出した。北東側主柱穴 P1 周辺には小ピットが 4 基ある。そのうち P2 は形状規模から貯蔵穴の可能性があるが、埋土上面を貼床状に黄褐色土が覆う。 **炉**：地床炉 1 基。床面中央に被熱赤化した範囲を炉と想定した。炉上面には炭化物層が分布する。 **出土遺物**：炉上部から赤彩鉢が出土する。SB0104 床下から出土した赤彩壺は位置から炉体土器の可能性がある。 **時期**：重複関係と住居形態、出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0057** [遺構：図版 2-46、土器：図版 3-20・PL174]

**位置**：Ⅲ H 08・13・14 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。弥生時代から古代までの遺構が密集する地区のため、トレンチ調査と面調査から重複関係や形状規模を確認した。 **重複関係**：(旧) SB0156。(新) SB0058、SK0193。 **埋土**：床面には黒色土が堆積する。上部には黄褐色土、黒褐色土が重なる。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形と推定される。北東隅は丸みがある。南東側は本跡下の SB0156 埋土内で明瞭な形状規模を検出できていない。主柱穴 4 基は長方形に配置し、平面形はいずれも梁方向に長い長方形である。 **炉**：土器埋設炉 1 基。北側主柱穴間に位置する。ピット状掘方に赤彩壺を正位に埋設する。 **出土遺物**：床面に弥生時代後期土器の破片が多く出土する。 **時期**：重複関係と住居形態、出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0061A・B** [遺構：図版 2-30～32・PL4、土器：図版 3-20]

**位置**：Ⅲ I 16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面にて住居跡が複数重複する状態で検出。先行トレンチを設け、SB0017、SB0025、SB0061 の弥生時代後期の住居跡 3 軒を登録した。その後、SB0061 は床下に同規模の住居跡がもう 1 軒確認されたため上位検出住居跡を SB0061A、下位検出住居跡を SB0061B と登録した。 **重複関係**：(新) SB0017、SK0296、SQ0001、ST0009。(不明) SB0025。 **埋土**：SB0061A は床面が高く、床面上部の暗褐色土のみ確認。SB0061B は SB0061A の貼床下に黒褐色土層が堆積。 **構造**：SB0061A は平面長方形でほぼ南北に軸を持つ。床面には浅いピットがあるが、炉、柱穴とも明確ではない。SB0061B は A と軸方向は同じで、やや東にずれている。東側は床下まで SB0017 に壊されているが長方形配置の主柱穴 4 基を確認。いずれも軸方向に直交方向に長い、長楕円形の平面形。南壁際には長楕円形の梯子穴 2 基が並び、東隣に貯蔵穴がある。 **炉**：A・B ともに SB0017 に壊され残存しない。 **出土遺物**：A はほとんどなく、B は南西隅から弥生時代後期の土器片が床面よりやや浮いた状態で出土する。 **時期**：埋土

中の土器から、A・Bともに弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0062** [遺構:図版 2-47、土器:図版 3-20・PL174、石器:図版 3-233・PL284]

**位置**：Ⅲ H 10・11・15・I 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面にて検出。 **重複関係**：(新) SK0236、ST0008。  
**埋土**：レンズ状堆積で細かく分層できる。中央床面付近は炭化物粒を含む黒褐色土主体。埋土上層では黒褐色土と黄褐色土が重なり合う。 **構造**：南北に軸を持ち、平面は長方形。北壁がやや膨らみ、北東隅はやや丸い。床は貼床で壁際を除いて敲击締められている。周溝は南東隅のみにある。支柱穴4基は長方形に配置。4基とも埋土中心に堆積する11層土は柱痕跡の可能性はある。ピット上面の平面形は梁方向に長い楕円形あるいは長方形である。柱穴下面の平面形はP1以外で、更に細長い板状になる。北壁際の主軸より西へずれた位置に円形ピットは屋内棟持柱と推測される。南壁に近い床面中央には梯子穴2基が並び、その東隣に貯蔵穴がある。 **炉**：2基確認した。北側支柱穴間の浅いピットを被熱部分はないが、位置関係と掘方形状から炉と推定する。掘方南肩部にある河原礫を炉縁石と想定する。中央床面には皿状に浅い掘方を持ち、南側底面が被熱赤化する。地床炉と考えられる。 **出土遺物**：床面よりやや高い埋土中から弥生時代後期の土器が散見される。北東隅床面から赤彩鉢が逆位の状態で出土した。 **時期**：埋土中の土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0066A** [遺構:図版 2-48・PL8, 9、土器:図版 3-21・PL174, 175、土製品:図版 3-56、石器:図版 3-229, 244・PL283, 287]

**位置**：Ⅲ H 10・15 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。トレンチ調査から本跡中央部に奈良時代の住居跡SB0065を確認した。 **重複関係**：(旧) SB0066B。(新) SB0026・47・65・67、SK0196・241、ST0008。 **埋土**：中央部は他住居跡に壊されていて不明であるが、南北壁際の観察からレンズ状堆積といえる。床面直上には黒色土、上部には黒褐色土が堆積する。 **構造**：下位SB0066Bと同じ南北に軸を持つ隅丸長方形。SB0066Bを拡張した住居といえる。どの壁面もやや胴張りである。床面は平坦な貼床である。下位のSB0066B埋戻し土上にⅣ層土基質の黄褐色土層を貼る。支柱穴4基は長方形に配置する。南西隅のP4は略円形であり、他の3ピットは梁方向に長い楕円形から長楕円形である。北壁際の軸線上に棟方向に長い長楕円形をした屋内棟持柱穴がある。南壁際床面の中央には梯子穴2基が並び、その東隣には貯蔵穴がある。 **炉**：SB0065に壊され不明。 **出土遺物**：床面に完形率の高い土器や焼土、炭化物が出土する。土器は東壁から南壁沿い、炭化物は西壁沿いに集中する。焼土は北東隅近くにある。特に南東隅では完形の壺が壁にもたれかかるように出土したほか、壺を胴の中程で切断し、上半部が正位に置かれた状態で出土している。 **時期**：床面出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0066B** [遺構:図版 2-48・PL9、土器:図版 3-21・PL175]

**位置**：Ⅲ H 10・15 グリッド。 **検出**：SB0066A床下にて確認。 **重複関係**：(新) SB0026・47・65・67、ST0008。 **埋土**：床上に堆積する砂質シルトは、本跡を拡張したSB0066A構築のための整地土と考えられる。 **構造**：南北に軸を持ち、平面は隅丸長方形。南北壁の中央部でやや膨らむ。床面は地山敲击床。支柱穴のうち北西隅の1基はSB0065に壊され不明。ほか3基は梁方向に長い長楕円形。南壁沿いの床面中央に梯子穴が2基並ぶ。いずれも棟方向に長い長楕円形で、南から北へ斜め方向に掘削されている。その結果、底面は北側にずれている。梯子穴の東に貯蔵穴がある。 **炉**：SB0065に壊され不明。 **出土遺物**：貯蔵穴P3底部付近から完形の赤彩鉢と赤彩高杯脚部が出土している。 **時期**：重複関係と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）とする。

**SB0067** [遺構: 図版 2-49~55・PL9~13、土器: 図版 3-22, 23, 52・PL175, 176、土製品: 図版 5-54, 56、石器: 図版 3-201, 205, 239, 244・PL277, 278, 281, 285、ガラス製品: 図版 3-211・PL278、金属製品: 図版 3-251, 254, 272・PL290, 291, 298]

**位置**: III C 24・25・H 04・05・09・10 グリッド。

**検出**: IV層上面。検出作業により、非常に広い範囲に暗褐色土が分布することを確認。精査すると分布範囲は南北に長い長方形であることが判明。南西隅は古代住居跡に壊されているため、残存状況のよい東壁際に南北トレンチ (N-O ライン)、中央に東西トレンチ (C-D ライン) を設定した。南北トレンチにより南北壁の立ち上りと、本跡埋土内に構築された SB0063 (平安時代) と SB0070 (奈良時代) などを確認した。床面の大部分は平坦であるが、柱穴と考えられるピット 2 カ所周辺で低く盛り上がる部分もある。東西トレンチでは東西壁の立ち上りと平坦な床面、本跡上部を南北に縦断する SD0003 を確認した。トレンチ調査で得られた四方壁の方向、床面の高さ、出土遺物から差し渡し南北 17 m × 東西 10 m ほどもある、弥生時代後期の極めて大規模な竪穴住居跡 1 軒であろうと推測した。南北トレンチで確認された床面の起伏については、埋土掘削と床の面的な精査によって、その意味を明らかにすることとした。本跡を切る遺構の調査を先行させながら、トレンチ横に設定した土層観察ベルトを残して、重複などの影響ない部分では埋土掘削を進めた。

**重複関係**: (古) SB0066・67 (中・古段階)、(新) SB0063・65・66・70・73・74・165、SK0157・176・242・312 ~ 315・318・325、SD0003。

**埋土**: 大規模な竪穴住居跡であるが、堆積状況はほかの弥生時代後期の住居跡と大きな違いはない。東西ベルトの土層断面では典型的なレンズ状堆積がみられる。東西壁際にIV層基質の黄褐色土が堆積し、次ににぶい黄褐色土が中央床面まで覆う。その後、中央部は暗褐色土と黒褐色土が堆積する。最上層の1層は東西ベルト周辺のみ分布し、遺構である可能性も想定したが、面的な調査により埋土表層の窪みに黒褐色土が流れ込んだ痕跡と判断した。南北ベルトの観察では埋土は調査面の傾斜に沿うように、北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。まず北壁直下に黄褐色土、次に黒褐色土が堆積する。北壁際が埋没すると次第に住居中央に向かって堆積土が広がり、北側では埋土上層にあたるにぶい黄褐色土の5層が、中央部から南壁際では床面に接するように堆積している。

**柱穴周辺の床面に分布するブロック土**: 遺構検出に伴う南北トレンチ調査によって確認された主柱穴周辺の床面の起伏について、床面精査と裁ち割り調査によって、平面的な分布範囲と成因状況を確認した。床面精査では長さ 1~3 m 程度の不整形円形、不整形楕円形、不定形のまとまりを 1 単位として、それらが主柱穴と棟持柱穴周辺に分布していることがわかった。それぞれのまとまりの厚さは不均一で、低丘状に盛り上がり、周囲は次第に薄くなっている。P2 周辺では最も厚い部分で 15cm 程度と比較的厚く、P3 周辺では 6cm 程度と薄い。高まりにサブトレンチを設定し、掘削するとその下に本来の床面が現れ、高まり自体は床を構成しないIV・V層基質のブロック土であることが確認された。またブロック土と床面の間には黒褐色土が薄く分布している。また P4 周辺の g-h ラインでは北側の支柱穴の上部を覆うように褐色土が堆積している。こうした堆積状況は、住居使用時 (生活時) とブロック土の堆積にはある程度の時間差があると考えられる。下記の主柱穴埋土の上部再掘削痕跡と関連づけると、柱穴周辺のブロック土は、住居解体時の柱材抜き取りに伴う掘削残土と推察される。

**構造**: 南北に軸を持つ、長方形。北壁中央やや東寄りの壁面は北側に突出する。南壁西側は梁方向よりやや南に開く。床面は平坦な貼床である。掘方は浅い。平面規模は主軸長 18.13 m × 副軸長 9.46 m、床面積 155㎡を測る。主軸方位は N13° E。

**主柱穴**: 4 基がほぼ長方形に配置する。柱穴の上部平面形は梁方向に長い不整形楕円形である。いずれの柱穴も内寄りに最深部を持ち、深さは床下約 100cm を測る。最深部の底部平面をみると、梁方向に長い長方

形であることは共通するが、北側2基は縦横比が小さく、厚みのある長方形であるのに対し、南側2基は縦横比が大きく、偏平な長方形である。底部平面形は埋設された柱の規格と関連すると推測される。柱穴の内側壁は直立するが、外側の壁面は階段状である。埋土観察では柱痕跡はみつからない。埋土上部と下部では堆積状況に違いがあり、上部は再掘削された痕跡がある。再掘削の影響は内壁より外壁側の方が大きい。このことは、外壁の階段形状は再掘削による柱穴掘方の改変だけではなく、住居構築時の柱建立に関わる掘方の可能性もあることを示している。主柱穴の位置関係は棟方向の西側P1-4、東側P2-3を結ぶ線は主軸とほぼ合うが、梁方向の北側P1-2、南側P4-3を結ぶ線は副軸方向とずれが生じている。

**屋内棟持柱：**北壁際の主軸線上に1基ある。上部平面は棟方向に長い長楕円形で、下部平面も棟方向に長い楕円形である。底面中央に最深部があり床下76cmを測る。主柱穴より下部平面形が小さく、深さも浅いことから、使用柱材は支柱と同規模程度と想定される。また掘方断面は南北両側から中央に下がる階段形状である。埋土に柱痕跡はなく、再掘削の痕跡は正確に掴めない。また上面には焼土層と柱抜き取り掘削残土がある。柱穴下部の掘方は南側が直立し、北側は階段状となる。こうした点から建立当初は南壁(住居内側)を直立させ、北側を階段状とし、柱材の抜き取り時に南側を階段状に掘削したと推測する。

**入口施設：**南壁際の中央床面にあるピットが梯子施設と考えられる。棟方向に細長い板状のピット2基が並び、その間を浅い溝が繋いでいる。梯子施設の東隣にある円形ピットは貯蔵穴と想定され、底部から下半部を切断した小型甕1点が出土している。

**支柱穴：**北側主柱穴2基の掘方北壁面に接して1基ずつ楕円形ピットがある。P1北のP33は床下59cm、P2北のP34は床下70cmと深い。また南側主柱穴2基の北側床面にも1基ずつ長楕円形ピットがある。P4北のピットは床下52cm、P3北のピットは床下79cmである。また主柱穴を棟方向に結ぶ床面に、東西とも2基ずつ柱穴が2.4～3.4mの等間隔に並ぶ。いずれも平面形は梁方向に長い長楕円形もしくは長方形で、深さは45～82cmと深い。主柱穴の柱位置と推定する最深部間を棟方向に結ぶ線からは東西とも外側にずれる。また梁方向で対照するピット同士を結ぶ線は副軸とはほぼ一致する。

**壁柱穴：**西壁際には北西隅のP9を含む4基がある。深さは28cm～55cmである。いずれも平面形は長方形で、P9以外は梁方向に長い。東壁際には北東隅から7基がある。深さは17～32cmとバラつきがある。平面形は梁方向に長い長方形が5基、楕円形1基、方形1基である。東西の壁柱穴は北側、P1-2付近、中央部で対照的な位置にある。P4-3付近では東壁にあるが、西壁はSK0325に床面まで壊されているため、不明である。また西壁際中央部の床面には深さ10cmにも満たないごく小さなピットが不ぞろいに並んで検出されている。これらは木舞のような壁の下地を構成する細木を刺した痕跡の可能性を現地調査指導に招聘した宮本長二郎氏より指摘があった。

**周溝：**周溝は北壁の中央部から北東隅までの1カ所、南壁中央の1カ所がある。南壁中央の周溝は溝の両側に小ピットが伴う。すぐ北側に位置する入口の梯子設置ピットに関わる可能性がある。

**炉：**本跡床面にて炉を4基確認した。炉1は北側主柱穴間のやや北寄りに位置する。浅いピットの南壁が被熱赤化している。現状では地床炉であるが、土器埋設炉を解体した可能性も残る。炉の北側床面には炭化物が分布している。炉2・3はP1南側に南北に並ぶ。位置関係からは本跡中段階の住居跡に伴うが、本跡検出時に炉2・3周辺にも炉1同様に炭化物が分布していた点と、炉上に貼床などの人為的な埋土が確認されない点から、本跡構築後も炉として機能していた可能性がある。2基はいずれも土器埋設炉である。北側の炉2は甕底部を正位に埋設している。内部には煤や灰が堆積している。炉体土器と炉掘方の上部は被熱している。炉3は口縁部と底部を切り取った甕を正位に埋設している。炉2に比べ掘方は非常に深い。内部にはしまりの弱い黒褐色土が堆積する。炉掘方肩部は非常に強く被熱し赤化している。炉4はP4北

西側の床面にある。土器埋設炉であるが、西半分をSK0325に壊されている。炉体土器の甕は胴部上半部を正位に埋設している。炉体土器内部には煤状の炭化物が堆積する。炉上面と掘方埋土は強く被熱し赤化している。位置関係から中段階の住居跡に伴う可能性もある。 **出土遺物**：超大型の竪穴住居跡であるが、遺物量は容積比でみると、他の住居跡と変わらず高くはない。床面直上の遺物は少なく、地形傾斜に沿う埋没状況を示す埋土堆積に沿うように、遺物の垂直分布は北側が高く、南側が床近くに多くなる。複数破片が接合した赤彩壺01175も、北側埋土上層と北東隅の埋土中層、P2南側の床面の土器片が接合していて、住居跡の堆積過程を想像させる。このほか、床面出土の遺物としては南壁際から比較的大きなガラス小玉、東壁際から紡錘車片が出土している。 **時期**：炉体土器と埋土出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）とする。

### SB0067（中段階）

**位置**：ⅢH 04・06・09・10 グリッド。 **検出**：SB0067床面精査と床下調査にて検出された落ち込みやピット、炉跡から古い住居跡の存在を確認した。調査では古い住居1軒分として記録図化を行ったが、整理段階でピットなどの位置や重複関係から、古い住居は「中段階」と「古段階」の2時期に分けられることが明らかになった。 **重複関係**：(旧)SB0067古段階。(新)SB0067・73・157・164・165。 **埋土**：床下のため、残存していない。 **構造**：南北に軸を持つ、長方形。南北壁がやや膨らむ。支柱穴4基（P11・12・22・35）は長方形に配置される。平面形は梁方向に長い隅丸長方形または長楕円形である。屋内棟持柱穴は検出されていない。南壁際中央には出入口施設を設置するピット2基とその東隣に貯蔵穴がある。また支柱穴などの役割も持つと考えられるピットが複数検出されている。西壁際の床面には断面長方形で深さのあるピットが5基並ぶ。北東隅から東壁中央寄りまでの壁際にも同様のピットがある。東側桁行きに並ぶ支柱穴P12と22の間にも同様の長方形で深いピット2基が等間隔に並ぶ。ほかに壁際に浅い溝状の落ち込みが巡る部分がある。幅は平均して0.8m、広い部分で1.8m、深さは5～6cmほどで、東西の壁際から北壁の中央部以外まで認められる。埋土は黒褐色土と黄褐色土の混在したブロック土である。新住居跡の床下のため、明確な床面を確認できていないが、本段階住居構築に伴う掘方ではないかと推測される。なお新段階の住居跡は中段階住居跡の西壁を改築の基準線として、ほぼ同じ位置に留め、南北方向および東方向に大きく拡大して構築したことがと考えられる。

**炉**：新段階の床面にて炉2・3を検出した。前述のとおり、新段階で使用された可能性があるが、中段階住居跡の北側支柱穴間のやや北寄りにあり、弥生時代後期佐久地方の竪穴住居跡にみられる炉配置としては一般的である。ここでは二時期にわたる炉継続利用の痕跡と捉えておく。また南西隅の支柱穴ピットの東隣に位置する炉4は新段階の炉として上述しているが、位置的にみると中段階の住居跡に伴う可能性もある。 **出土遺物**：炉体土器のみである。 **時期**：炉体土器と重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）とする。

### SB0067（古段階）

**位置**：ⅢH 04・05・09・10 グリッド。 **検出**：SB0067（中段階）と同じ。 **重複関係**：(新)SB0067（中・新段階）・73・157・164・165。 **埋土**：床下のため、残存していない。 **構造**：床、壁ともに残存していないが、支柱穴などの配置から南北に軸を持つ、平面長方形と推測する。支柱穴4基は長方形に配置。梁方向に長い隅丸長方形または楕円形の平面形である。北側2基はほぼ垂直に掘り込まれているが、南側2基の掘方は内側に傾斜している。柱痕跡はない。北側主軸線上には南北に長い楕円形ピット2ないし3基が重なり合う。いずれも屋内棟持柱穴と考えられる。重複する例は珍しく、柱の建替えなどに伴う可能性がある。

南側には出入口施設を設置するピットと貯蔵穴が並ぶ。梯子穴の東側ピットは南北方向の断面形が南側から住居内側に傾斜している。このほか東壁と想定される付近に小ピットが複数並んでいる。壁柱穴などの役割が予想される。なおSB0067中段階の住居跡は古段階住居跡と主軸線をほぼ同じまま、東西方向、南北方向に住居範囲を拡大させたと推測される。**炉**：北側主柱穴間のやや南寄り床面に非常に小さな炉1基（炉5）がある。炉上部は堅く締まるブロック土で覆われている。中・新段階住居跡の構築時に埋め戻されたと考えられる。炉南側肩部が被熱して赤くなっている。炉体土器の有無は不明である。**時期**：重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）とする。

**SB0075 住居跡** [遺構：図版 2-56, 57、土器：図版 3-23, 24・PL176、石器：図版 3-202, 207, 239・PL276, 277, 285、金属製品：図版 3-254]

**位置**：Ⅲ H 02・03・07・08・13 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。同一面に弥生時代～古代・中世の住居跡などが多重する地点。**重複関係**：(新) SB0058・74・76・78・96・99・175、SK0200・347・348 に壁面や床面を切られる。埋土内も中世ピットや土坑に切られる。北に隣接する弥生住居 SB3082 との新旧は確認できない。

**埋土**：Ⅲ層を基質としたレンズ状堆積。自然堆積と考える。**構造**：南北に軸を持つ隅丸長方形。西側の長辺は直線的、東側の長辺はやや膨らむ。残りの良い北壁はほぼ垂直に立ち上がる。周溝が全周する。北西床面にある弧状の溝は性格不明である。柱穴は P2・3・4・8 と SB0078 床下検出の 1 基を加えて 5 基検出。ピット下位平面形は長楕円形、上部は漏斗状に開く。本来は 6 本柱と考えるが、SB0076・175 に削られていて不明。入口施設は南壁際に対の梯子穴と貯蔵穴が少なくとも 3 時期分ある。順序は不明であるが、梯子穴 P16・17・貯蔵穴 P10、同 P9・13・P15、P12・18・P5 の組み合わせと推測する。床はⅣ層土基質の貼床。壁際 1 m の範囲に凹凸のある掘方がある。**炉**：2 基検出。炉 1 は土器埋設炉。南西床面の柱穴 P8・2 中間に位置。赤彩高杯の杯部を正位に設置。東側に隣接する浅いピット内に炭化物が分布する。炉 2 は地床炉。P2 南床面。小規模な浅い円形。底部がやや被熱する。埋土に炭化物の分布がある。**出土遺物**：炉 1 の炉体土器以外は小片がピット内や床面から出土する程度である。礫石器は入口周辺にある。**時期**：炉体土器などから弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と考える。

**SB0077** [遺構：図版 2-58・PL13、土器：図版 3-24、石器：図版 3-229・PL283]

**位置**：Ⅲ H 14・15・19 グリッド。**検出**：弥生時代後期の SB0041 床面調査にて SB0041 貼床層の貼られた炉やピットを確認。SB0041 以前の竪穴住居跡の存在を想定した。SB0041 床下調査に合わせて、本跡の平面精査を行い、炉と柱穴を備える弥生時代後期の竪穴住居跡と認定した。**重複関係**：(旧) SB0024。(新) SB0041、ST0007。(不明) SB0047。**埋土**：SB0041 床の直下に本跡床面があるため、埋土は確認できていない。**構造**：南北に軸を持つ長方形。南北の壁は上部遺構の掘削により不鮮明である。主柱穴 4 基は長方形に配置する。それぞれのピットはほぼ梁方向に長い楕円形と隅丸長方形の平面形である。北西隅の P24 掘方は垂直であるが、ほかの P22・15・17 の梁方向の掘方は、住居内側にやや傾斜する。また P22 と P15 の掘方東側は階段状に掘削されている。両ピットの埋土上部にはブロック土がみられ、再掘削した可能性がある。北側床面の主軸線上には屋内棟持柱穴がある。平面は主軸方向に長い長楕円形で、主柱穴より浅い。南壁際床面の中央には出入口施設を設置するピットがあり、その東西に 1 基ずつ貯蔵穴がある。また南側主柱穴 P15・17 の北側にはそれぞれ 1 基ずつ円形ピットがある。**炉**：2 基確認し、位置関係から北炉と南炉と呼称する。北炉は北側主柱穴間に位置する。浅いピット状の掘方で内部に炭化物を含む黒色土が堆積する。上面は SB0041 貼床層に覆われる。埋土中位から赤彩壺片が出土。掘方の南北肩部が被熱赤化する。掘方を持つため、土器埋設炉であった可能性がある。南炉は土器埋設炉である。南側主柱穴

間のやや北側床面に位置する。浅い掘方に赤彩壺底部を正位に埋設する。内部には炭化物粒を含む黒色土が堆積し、上面はSB0041 貼床層に覆われる。 **出土遺物**：炉体土器と炉内出土土器のほか、貯蔵穴 P23 より土製紡錘車が出土している。 **時期**：SB0041 拡張前の旧住居跡であり、時期差はさほどないと想定され、弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と考える。

**SB0102** [遺構：図版 2-59, 60・PL13, 45、土器：図版 3-24・PL177、土製品：図版 3-56・PL195、石器：図版 3-207, 232・PL277, 283]

**位置**：Ⅲ H 02・07 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で検出。弥生時代から古代までの遺構が密集する地区のため、平面検出と先行トレンチ調査にて重複関係を確認する。本跡と重複する弥生時代後期の住居跡の新旧関係は古い順にSB0155、SB0056、SB0102（本跡）と判断した。 **重複関係**：(旧) SB0056・155。(新) SB0051・96・101、SK0152・153・276。 **埋土**：複層。黒褐色土がレンズ状に堆積する。 **構造**：南北に軸を持ち、平面長方形。北壁西寄りがやや北に開く。床は貼床で掘方は浅い。主柱穴 4 基は長方形に配置する。平面は梁方向に長い長楕円形。南側主柱穴周辺に複数のピットが重複する。深く柱穴と考えられるピットもあるが、用途は不明である。入口施設と考えられる部分が北壁中央と北西隅に 2 カ所ある。通常南壁中央にあるが、本跡は例外的である。東壁中央には深さ 40cm の P16 のほか、小ピットが並ぶ。西壁中央には深さ 36cm の P14 がある。 **炉**：床面中央部に地床炉と考えられる被熱部分 1 カ所、南東の主柱穴 P2 北東脇に土器埋設炉 1 基（副炉と呼称）を検出した。被熱部分は床面がやや低くなった部分が被熱赤化し、周囲に焼土が分布している。副炉は浅い掘方に壺底部を正位に埋設している。内部には炭化物や骨片を含む黒色土が堆積し、周囲床面には炭化物層が分布している。炉上部は硬く締まるⅣ層土基質のブロック土に覆われていて、炉機能が廃止されていた痕跡とみられる。 **出土遺物**：炉体土器のほか、床面よりやや浮いた位置から弥生時代後期土器が出土している。 **時期**：炉体土器と埋土出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0105 北** [遺構：図版 2-61, 62・PL14、土器：図版 3-25・PL177]

**位置**：Ⅲ H 06・11 グリッド。 **検出**：1 区西壁際のⅣ層上面で検出。弥生時代から古代の竪穴住居跡、中世ピットが重複する地区のため、南北トレンチを設定し重複関係を捉えた。調査時には弥生時代後期の住居跡は 2 軒として、SB0105 と SB0106 を登録した。整理段階で住居壁の位置や柱穴配置、埋土堆積状況から、少なくとも住居跡 4 軒の存在を推定した。4 軒は古い順に SB0106 古、SB0105 南、SB0106 新、SB0105 北と考えられる。 **重複関係**：(旧) SB0106 古・新・0105 南。(新) SB0098・104、SK0126。(不明) SK0089・101・102。 **埋土**：上部遺構や攪乱の影響で堆積状況を捉えにくい、複層でほぼレンズ状堆積とみられる。 **構造**：住居壁は北東隅のみ明確に残る。南壁は西側大きく伸び、SB0106 新の壁である可能性もある。平面形は南北を軸に持つ、長方形または方形と考える。主柱穴は北側 2 基のみ確認。平面形は梁方向に長い長楕円形。 **炉**：北側主柱穴間に 1 基。浅く小さな掘方で南側床面が強く被熱赤化する。炉内の灰層に土器小片や焼骨片が出土。 **出土遺物**：弥生時代後期の土器片が出土している。 **時期**：埋土出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0105 南** [遺構：図版 2-61, 62、土器：図版 3-25・PL177]

**位置**：Ⅲ H 06・11 グリッド。 **検出**：SB0105 北の項に記述。 **重複関係**：(旧) SB0106 古。(新) SB0098・104・105 北・106 新。 **埋土**：検出面から床までが浅く埋土下層のみを確認。南壁際の床面には炭化物片や焼土粒を含む黒褐色土が堆積する。 **構造**：南壁と南半部の床が残る。南壁と以下に記す付帯施設の位置関係から南北に軸を持つ、長方形と想定される。主柱穴は他遺構に切られた状態で 4 基確認。ほぼ長方形

に配置する。柱穴の平面形は梁方向に長い長楕円形。南壁際の床面中央に出入口施設を設置するピット2基が並び、その東に貯蔵穴がある。北壁際床面に円形のP18と19がある。53～65cmと深く、柱穴と考えられる。**炉**：検出されていない。**出土遺物**：南床面上に弥生時代後期の土器が多数出土している。01101波状文甕はSB0106新のP1出土土器と接合関係にある。**時期**：埋土出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB0106 新** [遺構：図版 2-61, 62、土器：図版 3-25・PL177、土製品：図版 3-54・PL194、石器：図版 3-239・PL285、金属製品：図版 3-267・PL296]

**位置**：Ⅲ H 06・11 グリッド。**検出**：SB0105北の項に記述。**重複関係**：(旧)SB0105南・106古・169。(新)SB0098・104・105北、SK0089・101。(不明)SK0160。**埋土**：北壁付近で確認。複層で、レンズ状堆積である。**構造**：北壁と主柱穴の位置から南北に軸を持つ、平面長方形と考えられる。北壁中央はやや膨らむ。床面は地山を敲き締めている。主柱穴は北側2基を確認。柱穴の平面形は梁方向に長く、ごく細い長楕円形。南側は検出できていない。北壁際の床面中央にある円形ピットは屋内棟持柱穴と考えられる。**炉**：北側主柱穴間に土器埋設炉1基。浅い皿状の掘方に大きな土器破片を設置している。**出土遺物**：北東壁際の床面と北壁寄りの埋土中層から弥生時代後期の土器片が多く出土する。01121波状文甕は本跡埋土上層とSB0105北の埋土中層出土土器とに接合関係がある。**時期**：埋土出土土器と重複関係から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB0110** [遺構：図版 2-63～66・PL14～16、土器：図版 3-2, 26・PL177, 178、土製品：図版 3-53, 54, 56・PL194・195、石器：図版 3-233, 239・PL284、金属製品：図版 3-259]

**位置**：Ⅲ C 16・17・21・22・H 01・02 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で検出。複数の住居跡と重複著しく、古代住居跡の調査後に埋土を掘り下げた。**重複関係**：(旧)SB0111・113・117・128。(新)SB0111～117・128・166・167・171、SK0105・130・155～157・278・279・321・324・358、SD0004。(不明)SK0322。**埋土**：複層。レンズ状堆積。床には黒褐色土が厚く堆積する。上部は耕作などの攪乱を強く受けている。**構造**：南北に軸を持ち、平面長方形。南壁がやや膨らむ。床は硬く締まる貼床で、掘方は凹凸あるが深くない。平面規模は主軸長13.6m×副軸長9.14m、床面積119㎡を測り、主軸方向はN14°E。主柱穴4基は長方形に配置する。いずれも深さが100cm以上ある。上部形状は梁方向に長い長楕円形である。東西方向の断面形は有段状で、底面付近では平面形は隅丸長方形となり、柱を設置した痕跡と推測される。柱穴埋土に柱痕跡はない。埋土上部には柱材抜き取りに関わる再掘削痕跡と考えられる堆積の乱れがある。北側主柱穴P1とP8では再掘削の影響は階段状掘り込み部分内側までは及んでいるが、外側までは及んでいない。南側主柱穴ではP2は堆積の乱れは上部のみであるが、下部堆積土27層自体もしまりの悪い暗褐色土であり、柱材抜き取り後の埋没土と推測される。P3では埋土上部の内側寄り(西寄り)に再掘削の痕跡がある。主柱穴周囲にはⅣ層土基質のブロック土が広く分布する。南側では床面と薄く間層を挟む部分もある。このブロック土が柱抜き取り時に排出された残土であると推測する。南壁際中央には出入口施設を設置するピット2基が並ぶ。ピットは極めて細く、住居内側に傾斜する。この出入口施設を設置するピット2基を結ぶ細い溝状の落ち込みがある。同じピットの東には貯蔵穴と考えられる円形ピットがある。支柱穴と想定されるピットは主に東西壁際の床面にあり、ほぼ2.4m間隔で並んでいる。北西隅の1基を例外として、ほかは平面形が梁方向に長い長楕円形または隅丸長方形である。周溝は北西隅から西壁、南西隅に断続的にあり、南東隅から東壁中央までは連続する。周溝以外に南壁の西側にL字形の溝状落ち込みがあり、その西端に柱穴状のP19がある。間仕切りに関わる痕跡と想定する。ほかに入口の出入口施設を設置するピット東隣

からP3に向かって伸びる細い溝状掘り込みがある。屋内棟持柱穴が通常位置する北壁中央床面はSK0358に切られていて不明であるが、北壁が膨らまず直線的であることから、棟持柱は設置されていない可能性もある。 **炉**：土器埋設炉2基確認。北側支柱穴間のやや北寄り床面1基（炉2と呼称）と、南西支柱穴P2の南西側床面1基（炉1と呼称）。炉2は大ぶりの赤彩壺底部を正位に埋設する。炉内部から周囲床面まで炭化物層が分布する。炉1は小ぶりの甕の頸部より上部を正位に埋設する。炉内部には炭化物層が堆積する。また本跡を切るSB0112床下にて中央部床面に被熱赤化する部分を確認した。その南側床面に炭化物分布もある。地床炉が存在した可能性もある。 **出土遺物**：超大型住居跡の容積比からすると遺物量は多くない。床面およびやや浮いた位置から弥生時代後期の土器片が出土している。北壁寄りの床面からは勾玉も出土する。 **時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0111** [遺構：図版2-63～66、土器：図版3-27・PL178、土製品：図版3-56、石器：図版3-240・PL286]

**位置**：ⅢC 22・H 02 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で検出。複数の遺構と重複著しく、平面精査、トレンチ調査を行って重複関係を明らかにしながら埋土を掘削した。 **重複関係**：(旧) SB0113。(新) SB0110・112・166。 **埋土**：東西ベルトの土層観察では、複層のレンズ状堆積である。 **構造**：SB0110に大きく壊され、東壁際部分と支柱穴のみ残る。残存部分より主軸を南北に持つ、平面長方形と判断する。北壁中央がやや膨らむ。床は平坦で地山を敲き締めている。支柱穴4基は長方形に配置する。平面形は北東隅のP1は円形で、ほかは梁方向に長い長楕円形。南東隅床面にあるP3は貯蔵穴と考えられる。 **炉**：検出されていない。 **出土遺物**：南東隅の床面からやや浮いた位置から弥生時代後期の土器と石器がまとめて出土している。 **時期**：出土土器と重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0117** [遺構：図版2-63～66、土器：図版3-27、石器：図版3-210, 239・PL278, 285]

**位置**：ⅢC 16・21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で検出。複数の遺構と重複著しく、本跡より新しい遺構の調査後に本跡掘削を行った。 **重複関係**：(新) SB0110・171、SK0129・351、SD0004。 **埋土**：北側部分の南北方向で堆積状況を観察。標高の高い北側から住居内に埋土が流れ込んでいる。壁際にはⅣ層基質の黄褐色土を多く含む暗褐色土、にぶい黄褐色土が堆積し、炭化物を含む黒褐色土が床面まで覆う。埋土中層に暗褐色土、上層に黒褐色土が堆積する。 **構造**：北西の一部のみ残存するため、構造ははっきりしない。西壁からみると、南北に軸を持つ、平面長方形と推測される。北壁の方向がやや南に傾くが、調査時に当初の壁面を見誤って掘削し過ぎている可能性がある。床は平坦で浅い凹凸のある掘方を整地した貼床がある。唯一検出されたP1は東側をSB0110に壊されている。深さは18cmと浅い。 **炉**：残存していない。 **出土遺物**：床面および埋土より弥生時代後期の土器片が出土している。 **時期**：住居形態と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0128** [遺構：図版2-67・PL17、土器：図版3-27、石器：図版3-210]

**位置**：ⅢG 05・H 01 グリッド。 **検出**：重機による表土掘削にて複数遺構の重複を確認。調査区西壁際に南北方向の先行トレンチ調査を行い、本跡床面を確認した。他遺構の調査を進めていくなかで、本跡は重複する全ての遺構に切られていることを確認した。住居跡全体の北東隅部分のみ調査した。 **重複関係**：(新) SB0107・110、SK0332。 **埋土**：北側の東西ベルトで観察した。検出面から床面までは浅く、主に暗褐色土、褐色土が堆積する。床面上と床面からやや浮いた位置にあるⅣ層土ブロックは支柱穴から柱材を抜き取った際の残土とも推測される。 **構造**：残存する壁と炉、支柱穴から南北に軸を持つ、長方形ないしは隅丸長方形の住居跡と推定される。検出されたピットは北東隅にあり支柱穴と考えられる。断面形は

上面が大きく広がる漏斗状で、上部が再掘削された可能性がある。**炉**：支柱穴の南西横に土器敷炉を1基確認する。浅い掘方に同じ赤彩壺の土器片2片を重ね置く。掘方南側の肩部には炉縁石として河原礫が置かれ、その炉縁石の内側に接して、土器口縁部の一片が立てられている。炉内面と西側床面は被熱して赤化する。炉と周囲の床面上には炭化物層が薄く堆積している。**出土遺物**：炉体土器のほか、弥生時代後期の土器片が埋土から出土している。**時期**：住居形態と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SB0130** [遺構：図版 2-68・PL17、土器：図版 3-27・PL178]

**位置**：Ⅲ H 23・24、M 03・04 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。表土が薄く、攪乱などの影響を強く受けている。重複遺構の調査後に床面と壁面を確認する。**重複関係**：(新) SB0011・13・14・20・21、中世ピット。(不明) SK0075。**埋土**：床面までが浅く、暗褐色土が床面を覆う。北側に堆積状況の乱れがある。2層土の北側立ち上りと4層土の北側立ち上りをそれぞれ住居壁面と認識した。**構造**：小規模な住居跡が新旧2軒重なっていると想定する。北側が古く、南側が新しいと埋土観察で判断した。南側の住居跡は東西に長い不整形長方形である。北側住居跡の北壁はやや北に傾く。床面はほぼ同一標高で、それぞれに浅い掘方のある貼床である。南側住居跡には複数のピットがあるが、支柱穴を峻別できない。北側住居跡にはピットが1基あるが、こちらも柱穴を確定できない。**炉**：南側住居跡西側床面に土器埋設炉1基を確認した。浅い掘方に赤彩壺口辺部片を正位に置き、その内部に別の土器片を平らに置く。炉体土器を外して掘方調査を行ったところ、東側床下に旧炉を確認した。また炉東側床面に被熱赤化した部分もある。炉西側床面には炭化物層が薄く分布している。**出土遺物**：炉体土器のほか、北側住居跡床面から赤彩壺片が出土している。**時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0134** [遺構：図版 2-69・PL17, 18、土器：図版 3-27・PL178、石器：図版 3-221・PL281]

**位置**：Ⅲ I 12・17 グリッド。**検出**：農道付替え工事のため、東側と西側の2回に分けて調査を行い、整理作業で図面を合成した。**重複関係**：(新) SB0011・13・14・20・21、中世ピット。(不明) SK0075。**埋土**：複層。褐色土から黒褐色土がほぼ水平に堆積する。上位ほど色調が黒くなる。**構造**：東西に軸を持つ、平面長方形。床は平坦で地山を敲き締めている。支柱穴は3基確認。南東側の1基はSB0133により削られている。西側の2基はほぼ梁方向に長い楕円形で、北東側の1基は不整形円形の平面形。**炉**：土器埋設炉1基を北側支柱穴間にて検出。赤彩壺の頸～胴上半部を逆位に埋設し、内部に同一個体の底部を正位に置く。土器と掘方の外縁が被熱している。**出土遺物**：炉体土器のほか、床面付近から弥生時代後期の土器が出土する。特殊な脚部を持つ赤彩高杯 01457 の出土が特筆される。**時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0149** [遺構：図版 2-69・PL18、土器：図版 3-28・PL179]

**位置**：Ⅲ D 22・I 02 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。18年度に2区北端で南端部を検出、登録。19年度4区にて全体確認。**重複関係**：(新) SK4006。**埋土**：Ⅲ層を基質とした砂質シルトが堆積。自然堆積と考える。**構造**：北東に主軸を持つ平面隅丸長方形で小型の住居跡である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴はない。入口施設はない。南壁東隅に深さ17cmの円形ピットあり。貯蔵穴と考える。床は地山掘削し平坦な硬化面を形成する。**炉**：土器埋設炉。中央やや北寄りに1基。半割した甕上部を逆位に設置。炉内外が強く被熱する。周囲床面に炭化物分布する。**出土遺物**：炉や壁付近の床面上に壺や甕が散在。完形個体はないが1/4～1/2個体分のまとまりがある状態で出土している。**時期**：炉体土器と、床面出

土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0155** [遺構:図版 2-59, 60・PL14]

**位置**：Ⅲ H 01・02・06・07 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で検出。弥生時代から古代までの遺構が密集する地区のため、平面検出と先行トレンチ調査にて重複関係を確認する。本跡と重複する弥生時代後期の住居跡の新旧関係は古い順にSB0155（本跡）、SB0056、SB0102と判断した。 **重複関係**：（新）SB0056・101～103・154、SK0103・152・153・158。 **埋土**：複層。壁際に暗褐色土が堆積し、黒褐色土が床面を覆う。 **構造**：南側を上部遺構に壊されるが、南北を軸に持つ、平面長方形。北壁がやや膨らむ。床は貼床で、掘方は凹凸がある。主柱穴4基は長方形に配置する。東側2基はSB0102床下にて検出する。平面は梁方向に長い不整楕円形。東西方向の断面形はやや漏斗状に開き、P1は有段状になる。4基とも柱痕跡はない。北壁際の主軸線上には屋内棟持柱穴がある。SB0103とSK0159に上部が壊されている。棟方向に長い不整楕円形で主柱穴より浅い。 **炉**：2基検出する。北側主柱穴間に1基と南西主柱穴北側床面に1基（副炉と呼称）。北側の炉は不定形な浅い掘方内に壺底部を正位に置き、東側に赤彩壺片複数がある。掘方南壁上部は被熱赤化する。調査状況からすると土器敷炉の一種と推測される。副炉は非常に小さなピット状の落ち込み2基が重なり合い、中間の壁上部が被熱赤化する。ピット状の落ち込みと被熱赤化との関係は不明であるが、小規模の炉跡と認識する。 **出土遺物**：炉内以外に弥生時代後期土器が少数出土している。 **時期**：時期決定できる土器は出土していないが、平面形とSB0102に切られることなどから弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0156** [遺構:図版 2-70・PL18、土器:図版 3-28、金属製品:図版 3-251・PL290]

**位置**：Ⅲ H 13・14 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。複数の遺構が重複する地区のため、先行トレンチ調査により重複関係と床や壁面を明らかにした。 **重複関係**：（新）SB0041・54・57・58、SK0082・83・87・193・277・357。 **埋土**：複層。黒褐色土主体であるが、Ⅳ層基質のにおい黄褐色土層や黄褐色土ブロックの分布がみられる。不整合な部分もあり、埋土堆積に人的関与があった可能性がある。 **構造**：南北に軸を持つ、隅丸気味の長方形。床は掘方を整地した貼床。掘方は壁際を浅く溝状に掘り下げている。主柱穴4基は長方形に配置される。平面形はいずれも梁方向に長い長楕円形で上面が漏斗状に開く。漏斗状の開きは柱材抜き取りなどに関わる再掘削に因る可能性が高い。埋土堆積にも乱れがあり、南側2基の内部からは複数の礫が出土する。また北側2基の中位以下の断面形は梁方向の内側に傾く特徴を持つ。次に屋内棟持柱穴は北側主軸上にあり、平面は棟方向に長い長楕円形である。本柱穴も漏斗状に開く。北側主柱穴2基と屋内棟持柱穴の取り囲む床面上にはⅣ層基質の黄褐色ブロック土が面的に堆積する。ブロック土は主柱穴間に位置する炉の内部まで覆う。このブロック土は柱穴の再掘削に伴う排土と推定される。南壁際に出入口施設を設置するピットと考えられるP7がある。P7上部も漏斗状に広がる。P7東隣にあるP6は位置的には貯蔵穴であるが、円筒状に深い。また上面を貼床土で覆われている。 **炉**：主柱穴間に土器埋設炉1基を確認。大型壺底部を正位に埋設する。炉体土器南側が強く被熱赤化し、焚き口と想定される。 **出土遺物**：炉体土器のほか、埋土中～上層から弥生時代後期の土器や銅釧片が出土する。 **時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

### 3区

**SB0306** [遺構:図版 2-71・PL19、土器:図版 3-28・PL179]

**位置**：Ⅲ C 01・02 グリッド。 **検出**：Ⅲ層上面。複数の住居跡と重複し、トレンチ調査で新旧関係をみた。

**重複関係**：(旧) SB0307。(新) SB0305。 **埋土**：Ⅲ層を基質とした砂質シルトが堆積。自然堆積と考えられるが、東壁際に灰層と考えられる堆積がある(4層)。**構造**：南北方向に主軸を持つ平面隅丸長方形。南・東壁はほぼ垂直、北壁は直線的だが傾斜がある。柱穴は3基。北西部にも1基あったと考える。いずれも長楕円形、下部は長方形。東側 P2・3 の軸線は住居短軸線より南に傾く。上部が漏斗状に広がる。柱材を掘り返した可能性あり。南壁東側にある深さ 25cm の長楕円形ピットは貯蔵穴または梯子穴と考えられる。床は地山掘削し平坦な硬化面を形成する。 **炉**：残らない。SB0305 に切られる部分にあったと考えられる。 **出土遺物**：P4 上部に脚部が欠損した小型台付甕 00992 出土。その下位から出土した甑 01001 の破片が、上部の床上 10cm にある複数の破片と接合した。このことから壁際の埋土出土の弥生土器片や大礫は、P4 上部が窪んでいる状態の頃、同時期に廃棄されたと考えられる。 **時期**：P4 および埋土出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB0307** [遺構：図版 2-71・PL19、土器：図版 3-29、52・PL179]

**位置**：Ⅲ C 06・11 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。調査区東壁際に複数の遺構と重複する。平面精査と先行トレンチで本跡がもっとも古い遺構であることを確認。本跡より新しい遺構の調査後、掘削調査を進めた。

**重複関係**：(新) SB0306・310、SK3038、SD0302。 **埋土**：標高の高い北東側から土砂が流入し、埋没している。埋土下～中層は黒褐色土、上層は暗褐色から黒色土が堆積する。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。主軸と副軸長の比が小さく方形に近い。床面は平坦で地山を敲き締めている。主柱穴 4 基はほぼ長方形に配置する。平面形はいずれも梁方向に長い楕円形もしくは長楕円形である。南壁際の床面中央に出入口施設を設置するピット 2 基が東西に並び、両ピットを浅い溝が結ぶ。出入口施設を設置するピットの東に貯蔵穴と想定される円形の P1 がある。 **炉**：土器埋設炉 1 基を北側主柱穴間の床面にて検出。浅いピット状の掘方に甕や壺、鉢などの複数個体の土器片を組み合わせて埋設している。炉南側に小さな河原礫を置く。本炉南側、住居中央床面が不整楕円形状に被熱赤化する。床面はやや低く、地床炉と理解する。 **出土遺物**：埋土上層に少量、床面近くに弥生時代後期の土器がやや多く出土する。 **時期**：炉体土器と出土土器から、弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB0310** [遺構：図版 2-72・PL19、土器：図版 3-30・PL180、石器：図版 3-221・PL281]

**位置**：Ⅲ B 15・C 11 グリッド。 **検出**：3 区西壁際のⅣ層上面で検出。西半分は調査区外にある。弥生時代から古代、中世の遺構と重複する。 **重複関係**：(旧) SB0307・315。(新) SB0309・313、SK3036・38・43・50、SD0302。 **埋土**：北東隅の土層観察では南側に暗褐色土層が厚く堆積し、暗褐色土層を切るように黒褐色土層が堆積する。再掘削などの人的要因の可能性ある。調査区西壁では床面付近は暗褐色土が全体に堆積し、上部は黒褐色土が堆積している。 **構造**：南北に軸を持つ長方形で、北壁が外側にやや膨らむ。床は平坦で、地山を敲き締めている。主柱穴は東側の桁方向に並ぶ 2 基を検出した。2 基ともに梁方向に長い隅丸長方形で、南東側の P1 には北西側に張り出すような掘り込みがある。2 基の配置から本来 4 基が長方形に配置すると判断される。北壁際には主軸方向に長い長楕円形の P3 と浅い円形 P4 が並ぶ。P4 は屋内棟持柱穴と考えられ、上部が漏斗状に広がる。また南壁際には出入口施設を設置するピットと貯蔵穴と考えられる円形ピットが並ぶ。このほか北東隅に長楕円形のピットが 1 基ある。 **炉**：土器埋設炉 1 基を北側主柱穴 P2 の西側床面に確認。その南隣に小規模な地床炉 1 基が並ぶ。土器埋設炉は赤彩壺の頸部～胴上半部を逆位に埋設し、周囲に同一個体の破片を充填している。南側には棒状の河原礫を炉縁石として置く。地床炉は浅いピット状の掘方で底部から南側肩部まで被熱赤化する。 **出土遺物**：炉体土器のほか、南東隅の床面よりやや浮いた状態で弥生時代後期土器が出土する。 **時期**：炉体土器と出土土

器から、弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB0315** [遺構:図版 2-73・PL19、土器:図版 3-30、土製品:図版 3-56、石器:図版 3-229・PL283]

**位置**:Ⅲ C 11・16 グリッド。 **検出**:Ⅳ層上面。遺構が密集する地区のため、平面精査とトレンチ調査から判断した重複関係に沿って調査を進めた。本跡は壁面や床面まで多くの遺構に壊された状態で確認した。

**重複関係**: (旧) SB0316。(新) SB0309・310・313、SK3030・31・33・47、ST0306・307。 **埋土**:複層がレンズ状に堆積する。床面は暗褐色土が多い、その上ににぶい黄褐色土が堆積する。 **構造**:北壁が大きく壊されているが、現状から南北または東西に軸を持つ、やや不整な方形である。床は平坦で地山を敲き締められている。ピットは4基あるが、位置関係は不統一である。南壁際のピットが最も大きく、ピット北壁上部に接して角礫がある。 **炉**:検出されていない。 **出土遺物**:床面とやや浮いた位置から弥生時代後期の土器片が出土している。 **時期**:重複関係と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期後半）と考える。

**SB0316** [遺構:図版 2-73・PL20、土器:図版 3-30]

**位置**:Ⅲ C 11・12・16・17 グリッド。 **検出**:Ⅳ層上面。遺構が密集する地区のため、平面精査とトレンチ調査から判断した重複関係に沿って調査を進めた。本跡は壁面や床面まで多くの遺構に壊された状態で確認した。 **重複関係**: (新) SB0309・311・315、SK3026・29、ST0306。 **埋土**:検出面から床面まで浅く、下層部分のみの観察である。床面中央にはにぶい黄褐色土が堆積する。南壁際は暗褐色土、北壁際は黒色土が堆積する。 **構造**:南北に軸を持つ方形。北壁がやや外側に膨らむ。床は平坦で、凹凸のある掘方を整地した貼床である。支柱穴は3基確認した。本来4基が方形に配置すると考えられるが、北東側の1基はSB0311によって消失している。検出した3基は梁方向に長い楕円形で、P5の上部は漏斗状に開く。南壁よりの中央床面にあるP4は出入口に伴うピット、その東隣にある円形ピットは貯蔵穴と推察される。東側床面に並ぶP1とP2は柱穴状だが、本来別遺構に伴うピットか単独の土坑とも考えられる。 **炉**:土器埋設炉1基を主軸上の北側床面に確認。北東側の支柱穴を失うが、構築時は北側支柱穴間に位置したといえる。無彩壺の頸部より上半を正位に埋設する。西側を重複する遺構に大きく壊されている。 **出土遺物**:炉体土器のほか、炉周辺の床面近くから弥生時代後期の土器が出土している。 **時期**:出土土器から弥生時代後期（箱清水式期後半）と考える。

**SB3029** [遺構:図版 2-73、土器:図版 3-30・PL180、土製品:図版 3-4・PL164]

**位置**:Ⅱ R 11 グリッド。 **検出**:3区西壁寄りのⅣ層上面にて東壁のみ検出。大半は調査区外にある。弥生時代後期の大溝SD3006・4006との重複関係は調査区西壁沿いに設定した先行トレンチにて確認した。

**重複関係**: (新) SD3006・4006。 **埋土**:暗褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積する。床面から中位までは均質な土質であるが、中位から上位はⅣ層土ブロックを多く含む土質に変化する。ある程度自然埋没した後、人為的な掘削土を廃棄した可能性がある。 **構造**:東壁のみ確認。北側が西方向にやや屈曲していることから、南北に軸を持つ、隅丸長方形あるいは方形の住居跡と推察される。床は平坦で、地山を整地している。 **炉**:検出されていない。 **出土遺物**:小形の赤彩甕と壺が出土している。本跡を切る溝跡のSD3006・4006に多く出土している小型の赤彩土器に似る。溝跡からの混入の可能性も否定できない。 **時期**:重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3036** [遺構:図版 2-74・PL20、土器:図版 3-30、31・PL180、石器:図版 3-203・PL276]

**位置**:Ⅱ R 12・13・17・18 グリッド。 **検出**:Ⅳ層上面における検出作業では北西壁と南東壁の一部を検出

したのみで、住居形態や規模は確定できない。SB3031の南側で床面およびその上面から弥生後期土器が出土し、床面の追跡により住居南半を検出した。北半（SD3006・4006北側）はSB3031・SB3032床下の調査により検出。**重複関係**：(新) SB3031・32・38、SD3006・4006。**埋土**：IV層基質の暗褐色～褐色土がレンズ状に堆積する。**構造**：主軸を南北に持ち、平面隅丸長方形。東西の壁はやや外側に膨らむ。南北の壁で残存する部分は少ないが、隅部は角張らず緩やかな弧を描く。床は地山を整地し、敲き締めている。壁はおおよそ床面より直角に屈曲し、まっすぐ立ちあがる。南側の支柱穴2基検出。西側は円形の小ピット、東側は梁方向に長い楕円形。南壁際の床面にある円形ピットは貯蔵穴と推定される。このほか西壁際の床面中央に円形ピットがある。**炉**：住居北側がSD3006・4006に切られていて、検出できない。**出土遺物**：住居南側床面で弥生時代後期の土器が集中して出土している。**時期**：出土土器と重複関係から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3041** [遺構：図版 2-74・PL20、土器：図版 3-31, 32・PL181]

**位置**：II R 09・14 グリッド。**検出**：IV層上面で土質差により平面で検出した。南西部を古代の住居跡や中世の溝跡に大きく壊されている。新しい遺構の調査を進め、東西南北にトレンチを設定、堆積状況と床面を確認し、全体を掘り下げた。**重複関係**：(新) SB3050・51・6068、SK3080・6425・6470、SD3005。**埋土**：複層である。壁から床面上まで比較的均質な黒褐色土に覆われ、その後IV層基質の軽石などを含む黒褐色土が厚く堆積する。**構造**：南北に軸を持つ、隅丸長方形。それぞれの壁は中央部がやや外側に膨らむ。壁際を除く床面は、硬く敲き締められている。壁は床面から垂直に近く立ち上がる。P1・2は東側桁方向に並ぶ支柱穴、北壁際の主軸線上にあるP3は屋内棟持柱穴と思われる。P1は平面楕円形、断面形が挿鉢状で浅い。P2は平面方形、断面形はやや有段状で深い。P3は平面略円形で南側が階段状に掘り込まれていて深い。南壁際にあるP4はSD3005に西側を壊されているが、形状と位置から出入口施設を設置するピットの1つと思われる。なお支柱穴と棟持柱穴は上部が広がる断面形のため柱材抜取りなどに伴い再掘削された可能性がある。**炉**：P1西側の床面に位置する、土器埋設炉である。大形の赤彩高杯の杯部を正位に埋設する。掘方は炉体土器に対し、やや大きく南北に長い楕円形で、南側の埋土上面は赤く被熱している。また炉南側の住居跡中央付近にも、わずかに窪んだ火床が認められ、ここに地床炉が存在していた可能性が考えられる。**出土遺物**：埋土中より弥生時代後期の土器片が出土している。壁際および中央床面から大きめの土器がまとまって出土している。**時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3069** [遺構：図版 2-75、土器：図版 3-32・PL181、石器：図版 3-203, 208]

**位置**：III C 07・08・12 グリッド。**検出**：IV層上面。遺構の重複が密な地区のため、検出用のサブトレンチを設定し、新旧関係と遺構規模などの詳細を確認した。**重複関係**：(旧) SB0312・3075・99。(新) SB0311・3068・74・80、SD3002。**埋土**：床面上には黒色土が薄く堆積し、その上に暗褐色土が堆積する。**構造**：南北に主軸を持ち、隅丸気味の平面長方形。北壁中央が外側にやや膨らむ。支柱穴は6基が長方形に配置される。平面形をみると北側2基は梁方向に長い不整長楕円形である。中央2基のうちP6は不整方形、P13は楕円形である。また南側2基のうち南西側ピットは不整楕円形、南東側ピットは略円形である。北壁寄りの主軸線上床面にあるP10は屋内棟持柱穴と考えられる。南壁際の中央に並ぶ小ピットは出入口施設を設置するピット、その東隣の円形ピット（P1）は貯蔵穴と思われる。ほかに西壁付近の床面に長楕円形のピット2基を検出した。そのうち炉2横のピットは深さが57cmある。**炉**：土器埋設炉を2基検出した。炉1は北側支柱穴間のやや南寄り床面に位置する。無彩の壺上半部を逆位に埋設し、下

位に甕の破片を敷いている。掘方は炉体土器に対して大きく、炉1南にあった旧炉を壊している。旧炉はⅣ層土ブロックを充填して廃棄されている。炉2は住居跡の南西側床面に位置する。甕の頸部から上を正位に埋設し、下位に甕と高杯の破片を敷く。 **出土遺物**：貯蔵穴と考えられるP1より完形の甕1点が出土する。また棟持柱穴付近の床面に弥生時代後期の赤彩土器がまとまって出土した。 **時期**：炉体土器と出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3069 旧住居跡** 旧炉に伴う北側主柱穴と棟持柱穴、周溝を確認した。北壁から西壁を巡るL字状の周溝と北側主柱穴、棟持柱穴は新住居より全体に南にずれていて、旧炉の位置と合う。一方、南側は旧住居跡に伴う主柱穴は新たに検出されず、周溝も新住居の壁直下に一致する。こうした点から、新住居は6本柱の旧住居跡と主軸線を同じくして北側部分を拡張していたことが明らかになった。

**SB3071** [遺構：図版 2-76・PL20、土器：図版 3-32, 103、土製品：図版 3-56、金属製品：図版 3-258・PL292]

**位置**：ⅢC 22・23 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。複数の遺構が重複していたため、先行トレンチを設定し、新旧関係を明らかにした。本跡は全ての遺構に切られていたため、他遺構の調査後、埋土掘削を進めた。

**重複関係**：(新) SB3066・82、SK3300。(旧) SK3284。 **埋土**：北側部分のみ確認した。床面付近には黒褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が細かく堆積している。上部には暗褐色土・極暗褐色土が堆積する。 **構造**：北側以外は他の遺構に壊されている。壁面と床、主柱穴などの位置から南北に軸を持つ、平面長方形または方形の住居跡と推測する。床は地山を整地している。壁はほぼ直立する。主柱穴2基は東西に並ぶ。梁方向に長い楕円形で、西側の1基は上部が楕円状に広がる。 **炉**：主柱穴間の浅い落ち込みが炉跡と推測される。南北に長い不整楕円形で、南側がやや深く、北側がテラス状になる。被熱部分などは確認できない。

**出土遺物**：埋土から弥生時代後期の土器、平安時代の土器が出土している。平安時代の土器は上部遺構などからの混入と考えられる。 **時期**：住居構造と重複関係、出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3082** [遺構：図版 2-76・PL20, 21、土器：図版 3-33, 52・PL182, 194]

**位置**：ⅢC 22・23、H 02・03 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。検出作業で確認した北壁と北西隅をSB3083、南壁と南西隅をSB3082と呼称した。北側と南側それぞれに南北・東西セクションを設定して掘削を行った。床面と壁面を検出するなかで、2軒は同一住居跡と確認し、SB3082に統一した。 **重複関係**：(旧) SB3071。(新) SB3055・61・63・66・77、SK0122・3269。(不明) SK3284。 **埋土**：自然堆積と考えられる。褐色土から黒色土が主体である。目立った埋土の流入方向は確認できない。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。北壁と西壁は直線的で、北西隅は角をもつ。南壁はわずかに湾曲気味になる。床は地山を踏み固めたような硬化面が認められた。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置する。平面形は長軸を梁方向に持つ不整楕円形もしくは隅丸長方形である。断面形は住居内側が有段状になっている。北壁際の主軸線上にある南北に長いピットは屋内棟持柱穴と想定される。また南壁際中央に長軸を南北にもつ柱穴が、2基を1組として4基確認され、その東脇には小ピットが2基確認されている。これらは新旧2軒分の出入口施設を設置するピットと貯蔵穴と推測され、本跡には建て替え行為のあった可能性がある。主柱穴が有段状になる点も建て替えに関わる痕跡と推察される。このほかに西壁に近い床面に円形から長楕円形で深さのあるピットが5基確認された。これらは支柱穴と考えられる。 **炉**：北側主柱穴間に土器埋設炉1基が確認された。赤彩壺の底部を正位に埋設している。 **出土遺物**：炉西側床面から鹿角が出土している。また床面より弥生時代後期の土器が出土している。 **時期**：住居構造と重複関係、炉体土器などから弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB3084** [遺構:図版 2-77・PL21、土器:図版 3-4、33・PL182]

**位置**: III C 08・13・14 グリッド。 **検出**: IV層上面にて平面方形になると想定された。SB3067・72 との新旧関係は検出時に明らかであった。検出当初、住居中央に方形状に区切られる部分があり、内側をSB3084、外側をSB3085と呼称した。掘削を進めるなかで、2軒は同一住居の埋土差であることが明らかとなり、SB3084に統一した。 **重複関係**: (新) SB3067・72・79 **埋土**: 当初SB3084埋土と認識したのは1・6～8層で、黒色土を主体として土器片を含む。SB3085と認識した部分は北側壁際に堆積するIV層土を主体とした層で、土器片も含まない。後者が初期の堆積土であり、前者が二次堆積土と理解される。 **構造**: 南北に軸を持つ、平面長方形。東西壁の南側と南壁の西側は新しい遺構に大きく壊されている。床は地山を整地し、踏み固められたような硬化面が認められた。壁はほぼ直線で床から垂直に立ち上がる。主柱穴は北側の2基を整理段階で確認した。掘削調査はされていないが、梁方向に長軸を持つ長楕円形である。南壁際の円形ピットは貯蔵穴と推察される。 **炉**: 土器埋設炉1基を北側主柱間に確認している。壺上半部を逆位に埋設している。炉内から赤彩鉢片が出土している。 **出土遺物**: 南側床面より弥生時代後期の土器がまとまって出土している。 **時期**: 炉体土器と出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB3087** [遺構:図版 2-78・PL21、土器:図版 3-34、52・PL183、石器:図版 3-22]

**位置**: III C 03 グリッド。 **検出**: IV層上面。 **重複関係**: (新) SB3059、SK3257、SD3002。 **埋土**: 複層。上部層にIV層土が斑状に混じる。 **構造**: 南北に軸を持つ隅丸長方形。東西の壁がやや膨らむ。壁際以外は粗掘りされた掘方を整地して、硬く敲き締められている。壁は床面から垂直に近く立ち上がる。柱穴はない。 **炉**: 地床炉1基を主軸線上の北寄り床面に確認。楕円形の掘方周囲と底面が被熱赤化する。炉内の炭化物層上部にも被熱して赤化した部分があることから、同一地点で複数回造り替えられていると想定される。 **出土遺物**: 南側床面に弥生時代後期土器と石器が集中して出土している。完形の甕00081は床面に付せられている。赤彩小型台付甕00892は南壁際の埋土上層から出土している。 **時期**: 出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB3088** [遺構:図版 2-78・PL22、土器:図版 3-34、53・PL183、195、土製品:図版 3-54、石器:図版 3-221、229・PL281、283、金属製品:図版 3-255・PL291]

**位置**: III C 13・14・18・19 グリッド。 **検出**: IV層上面にて東壁と北東隅、南東隅角を検出した。先行するSB3062の調査後、SB3097との新旧関係を把握するために東西トレンチを設定して掘削を行った。 **重複関係**: (新) SB3062・67・97。 **埋土**: 黒色土～褐色土主体の複層。東方向からの埋土流入が認められる。 **構造**: 南北に軸を持つ平面長方形。東壁はやや膨らむ。南北壁の外側にあるテラス状の張り出し部は本跡以前の別住居の床と壁面の可能性があるが、詳細は不明である。床は地山を整地して、硬化面が認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置する。いずれも平面形は梁方向に軸を持つ長楕円形。南西側の1基は整理段階でSB3062床下にて確認、掘削はしていない。ほかの3基の掘方は南北幅が極めて狭い。北壁際の主軸線上に屋内棟持柱穴である。主柱穴の内側には小径ながら深さのあるピット3基がL字状並ぶ。柱穴の可能性が高い。またSB3062床下にてSB3062P2に南側を壊されている南北に長いピットは本跡入口ピットと考えられる。 **炉**: 土器埋設炉1基を北側主柱穴間で確認された。赤彩壺底部を正位に埋設する。南縁に棒状の河原礫が据えられている。 **出土遺物**: 弥生後期土器が床面から出土している。 **時期**: 炉体土器と出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB3091** [遺構:図版 2-79・PL22、土器:図版 3-35]

**位置**: III C 03・04・08・09 グリッド。 **検出**: 平面検出で南東隅を確認する。複数遺構が重なる部分のため東西トレンチを設定して重複関係の把握に努めた。SB3095 炉体土器が本跡壁掘削により切断されていること、明確な床層が本跡埋土中に見出せないことから、本跡がSB3095を切ると判断した。 **重複関係**: (旧) SB3095。(新) SB3089・90、SD3004。 **埋土**: 黒色土を主体とした埋土が堆積。自然堆積と考える。 **構造**: 南北方向に軸を持つ平面長方形を呈する。壁は傾斜する。柱穴は東側桁行きに2基確認。不整形な横長長方形で深さは北側13cm、南側44cmと差がある。入口施設として、南壁際の円形ピットを貯蔵穴と考える。床は地山成形の硬化面あり。 **炉**: SB3089により破壊され残らない。 **出土遺物**: 床面に赤彩の鉢類が散在する。 **時期**: 床面出土土器から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB3099** [遺構:図版 2-77、土器:図版 3-35]

**位置**: III C 07・08・12・13 グリッド。 **検出**: IV層上面。複数の遺構が密集する地区のため、サブトレンチを設定して新旧関係を確認する。本跡とSB3075は最も古い遺構のため、ほかの遺構の調査後に調査を行った。 **重複関係**: (旧) SB3075。(新) SB3069・74・79・80・93、SD3004。 **埋土**: 重複関係が多く、埋土自体が少なく詳細は不明。残存する埋土からは人為的な堆積はみられない。 **構造**: 北壁、西壁、南壁の一部のみ確認した。壁と支柱穴の位置関係から南北に軸をもつ、平面長方形と推測する。床は地山を整地している。支柱穴は3基確認した。SB3079・93に切られる位置に南東側の支柱穴がもう1基あったと推察されるが消失している。北東側のピットはSB3079の床下から確認している。ピットの平面は梁方向に長い長楕円形で、北西側の1基は上部がやや開く。また支柱穴の組み合わせは別にもう1組確認された。こちらも4基のうち南東側の1基が消失し、3基のみ検出された。主軸が東に傾き、桁方向の柱間距離が短いことから、本跡以前にやや小ぶりの竪穴住居跡が別に1軒あったと予想される。 **炉**: 検出されていない。 **出土遺物**: 弥生時代後期の甕などが床面に潰れた状態で出土。 **時期**: 出土土器から弥生時代後期(箱清水式期)と考える。

#### 4区

**SB4002** [遺構:図版 2-80～83・PL22, 23、土器:図版 3-35～39, 52・PL183～186, 194、土製品:図版 3-56, 57、石器:図版 3-211, 221, 222, 230, 240・PL278, 281, 283, 287、金属製品:図版 3-260, 272・PL298]

**位置**: III D 18・22・23 グリッド。 **検出**: IV層上面。L字ベルトを残し掘削。平面検出で本跡が弥生時代後期の方形周溝墓SM4001を切ると判断し、検証のためトレンチを設定、断面でも確認した。 **重複関係**: (旧) SM4001。(新) SB4001、SK4020・26・30・41・42・44・45・97。 **埋土**: 床面中央を覆う最下層の11層とその上面に堆積する4層との層界面および4層内に完形品を含む弥生時代後期土器の破片が大量に出土。勾玉も同一層で出土している。さらに床直上では完形の土器や石器も出土している。埋土自体はブロック土などの混入が少なく、全体にレンズ状堆積であり、標高の高い北東方向からの流入がやや多い傾向が見られる。こうした状況から最下層堆積後、大量の土器や石器の投棄があり、続いて4層以降が堆積したという段階的な堆積経過が想定される。土器と石器投棄前後の堆積土が自然由来なのか人為的なのかの所見は得られていない。 **構造**: 南北に軸を持つ隅丸長方形。南北壁が緩やかに膨らむ。東西壁は直線的である。床は地山を整地していて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴4基は長方形に配置される。平面は梁方向にやや長い円形および楕円形、断面形は内側壁がやや内傾気味である。また主軸上の北側床面に屋内棟持柱穴が1基ある。南壁際中央の床面には出入口施設を設置するピット2基が並ぶ。いずれも底面が北側に偏り、断面形はやや斜めに掘り込まれている。出入口施設を設置するピットの東脇には円形の貯蔵穴

がある。**炉**：土器埋設炉1基を北側支柱穴間に検出した。浅い掘方に甕下半部を正位に埋設する。炉内底面には炭化物層が堆積する。**出土遺物**：埋土の項で触れたように多量の遺物が出土した。出土状況を捉えるため、1615点の遺物について、単独標高点（三次元座標記録）を測量した。その結果、床面の一角から大形砥石や完形の台付甕、甕、蓋などが放置されたように出土する以外、大半は4層土内から濃密に出土していることがわかる。住居床面が初期堆積土で覆われた後、多種多様の土器や石器が投棄されている。器種ごとの分布状況では、壺と甕の破片が並んで多いものの、器種による分布の差異は見られない。接合状況では1個体あたりの平面的な散らばりはおよそ1m角内に納まり、一部に4m以上離れて接合する個体がある。個体それぞれの接合率が高いことから、完形またはそれに近い状態の土器が多く投棄されていることが想像される。**時期**：出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と考える。

**SB4003** [遺構：図版 2-79、土器：図版 3-39、金属製品：図版 3-258・PL292]

**位置**：Ⅲ D 19・24 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。北東半分は調査区外にある。東西ベルトを残し掘削、SB0145との切り合い確認をみるためのトレンチを設定した。**重複関係**：(新) SB0145、SK4001・02・09・43、ST4001。**埋土**：西側に西壁の崩落に伴うと推定される初期の埋没土4～9層があり、その上を1～3層が覆う。**構造**：南西側の残存状態から、南北に軸を持つ平面長方形と考える。西壁は若干膨らみ、中央部上段が大きく崩落している。床は地山を整地している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。南西隅のP2は支柱穴の一つと考える。底面が小さく、断面形はやや階段状になる。南壁際のP3は出入口施設を設置するピットの一つと推測する。SB4002と主軸方向がほぼ一致し、同規模である。**炉**：調査区内では検出されていない。**出土遺物**：弥生時代後期の土器片が大半で、出土量は少なかった。金属製品では鉄剣1点(07M105)が出土している。**時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期後半（箱清水式期後半）に位置づけられる可能性がある。

**SB4008** [遺構：図版 2-84・PL23、土器：図版 3-39・PL186]

**位置**：Ⅲ D 01 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で平面形を検出。SB4007との切り合いも明確に確認された。**重複関係**：(新) SB4007 **埋土**：黒色土から暗褐色土を主体とした埋土が堆積。下位から中位層はおよそ北側からの流入とみられる。最上層の1層底面が下位層と不整合であり、再掘削された後の堆積土と考えられる。**構造**：南北に軸を持つ平面長方形。南壁は大半が消失するが、南東隅の残存状況からすると、やや外側に膨らむ形状と推察される。柱穴はない。南壁際のP1は貯蔵穴とみられる。**炉**：地床炉1基を住居中央からやや北寄りの床面に検出されている。掘り込みは浅く、焼土が堆積する。炉中央から砂岩系の礫が出土するが、被熱の痕跡は認められない。**出土遺物**：住居中央部の1層中から弥生時代後期の土器片が出土している。特に焼土・炭などは含まれていない。**時期**：出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4016** [遺構：図版 2-84・PL23, 24、土器：図版 3-4, 40・PL186、金属製品：図版 3-251, 263・PL290, 294]

**位置**：Ⅱ S 18・23 グリッド。**検出**：平面検出で土質差からSB4015とSD4005が本跡より新しいことは明らかである。しかしながら本跡周辺はⅢ層（黒色土～暗褐色土）が堆積し、同色系埋土である本跡の平面検出は困難であった。先行するSD4005調査で本跡の形状と規模を確認し、弥生時代後期の大溝SD3006・4006と重なる部分ではセクションベルトを設定し、新旧関係を確認した。**重複関係**：(新) SB4015、SD3006・4006、SD4005。**埋土**：複層。レンズ状に堆積する。暗褐色土～黒褐色土を主体とする。上部ほどⅣ層起源の軽石を多く含む。**構造**：南北に軸を持ち、東西壁が膨らむ隅丸方形。床は地山を整

地し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置する。いずれも平面形は梁方向に長軸を持つ楕円形で、深さは浅い。北側主軸線上の床面に平面長楕円形の屋内棟持柱穴がある。南壁際の中央床面には長軸方向に長いピット2基が並び、ピット間を浅い溝が結ぶ。出入口施設を設置するピットと考えられる。その東隣にある楕円形ピットは貯蔵穴と推察される。入口ピットの西側P7の西脇から北方向に細い溝が2本あり、そのうち西側の1本は主柱穴P4に接続する。間仕切りに関わる溝と予想される。南西隅にあるP6は小径で深さがあり、補助的な柱穴と考えられる。 **炉**：土器埋設炉1基が北側主柱穴間に、地床炉1基が中央床面に確認される。土器埋設炉は浅い掘方に壺下半部を埋設する。炉体土器南側にも浅い掘り込みがある。掘方内部と南側掘り込みは強く被熱し、赤化する。地床炉は主軸方向に長い不整楕円形をした浅い掘り込みがある。その内部も被熱赤化している。 **出土遺物**：土器埋設炉北側と貯蔵穴P5周辺の床面から弥生時代後期の土器が出土している。埋土から銅鏃の出土もある。 **時期**：弥生時代後期の大溝SD3006・4006に切られる点と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**住居拡張の痕跡** 出入口施設を設置するピットと貯蔵穴の調査で、それぞれの北側に前段階の出入口施設を設置するピットと貯蔵穴が重複した状態で確認された。規模と形状は現段階と同じである。床下調査においては現在の壁面より内側にわずかな落ち込みとして古段階の住居形が検出された。主柱穴と棟持柱穴に重複はなく、躯体構造の位置と規模は変えずに壁や床を広げる拡張行為があったと理解する。

**SB4029** [遺構：図版 2-85・PL24、土器：図版 3-40、52・PL186、土製品：図版 3-57・PL195、石器：図版 3-222・PL281]

**位置**：Ⅲ C 20・25・D 16・21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。土坑以外に重複遺構がなく、比較的容易に確認できる。 **重複関係**：(新) SK3302～05・07 **埋土**：黒褐色～暗褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積する。標高の高い北東方向から流入する傾向が強い。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。四隅は角張る。床面は浅い掘方を整地して、貼床としている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置される。平面は梁方向に長軸を持つ不整楕円形あるいは不整隅丸長方形、断面形は長軸方向で階段状となる。ピット上位の埋土には堆積の乱れがみられることから、柱材の抜き取りなどに伴う再掘削に伴い、柱穴上部の外表面が拡張され階段状を呈していると判断する。北壁に近い主軸線上床面にあるP15は屋内棟持柱穴と考えられるが、深さがあまりない。南壁際には南北に細長い形状をした入口ピット2基が並び、その東隣に貯蔵穴P5がある。出入口施設を設置するピット2基の間にある円形の小ピットP16の用途は不明である。また南壁を除く三方の壁際に支柱穴がある。東西の壁際にはそれぞれに3基の円形～楕円形が並ぶ。間隔は西壁北からP17・11・13が2.24 m～2.64 m。東壁北からP10・12・14が2.48～2.16 m。北壁は東からP8・9が2.08 m。壁隅に近い支柱穴は隅から0.90～1.30 m離れている。 **炉**：土器敷炉1基と地床炉1基を確認した。土器敷炉は北側主柱穴間にある。浅い皿状の掘方に甕片数片をほぼ平らに置いている。被熱範囲は確認できない。地床炉は住居中央床面にあり、南北に長い長楕円形に被熱し、南側には炭化物層が堆積している。 **出土遺物**：住居規模に対して出土遺物は少ない。北西隅やP4東側の床面付近から弥生時代後期の土器が出土している。 **時期**：炉体土器と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4030** [遺構：図版 2-86、87・PL24、土器：図版 3-40、41、52・PL187、土製品：図版 3-57・PL195、石器：図版 3-211、245、246・PL278、287、288、金属製品：図版 3-255、271・PL291、骨製品：PL310]

**位置**：Ⅲ D 11・16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。重複遺構との新旧関係は平面精査とサブトレンチ設定により確認した。 **重複関係**：(新) SB4014・28・32、SK4155。 **埋土**：黒褐色～暗褐色土を主体として、おおむねレンズ状の堆積であるが、標高の高い北東方向からの流入が多い傾向である。床面付近～中位に

堆積する7・8層に炭化物や骨類、土器、石器、金属製品の出土が集中する。また北側中央部で埋土内を大きく掘削した痕跡がある。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形である。北壁がやや傾く。床は浅い掘方を整地した平坦な貼床である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は6基あり、長方形に配置される。床面上の平面は梁方向に長い楕円形である。中央東側のP3は上部が不整形に広がる。主柱穴の中位～下位にわずかな段がある。南側2基P4・5では階段状になる。底部はいずれも内側に寄っている。断面形では主柱穴内側の壁面が垂直よりやや内傾していることがわかる。主軸線上の北壁に近い床面にある屋内棟持柱穴は不整楕円形で、断面は底面に向かう程細くなり、深さ62cmと深い。南壁際中央にある有段状のP8は出入り口施設に関わるピットと考えられる。またその東隣に貯蔵穴P9がある。 **炉**：土器埋設炉2基を検出した。炉1は北側主柱穴間に位置する。浅い掘方に赤彩壺の頸部～口縁部を正位に埋設する。炉体土器南側にある楕円形の落ち込みには炭化物や灰が堆積する。本炉に伴う落ち込みか旧炉の掘方か判断できていない。炉2は浅い掘方に壺の胴部片を重ね合わせて埋設する。炉内には灰層が堆積する。 **出土遺物**：北側床面から弥生後期土器や石器、鉄製品などが出土している。南側床面とやや浮いた位置から土器に混じってシカやイノシシの骨や骨片がまとまって出土している。土器は完形率の高い個体があり、シカ骨には加工痕跡のある個体がある。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4032** [遺構：図版 2-88・PL24、土器：図版 3-41・PL187、金属製品：図版 3-255, 262・PL291, 292]

**位置**：ⅢC 15・20・D 11・16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。重複する竪穴住居3軒を通るトレンチを設定し、重複関係を確認した。埋土上部にⅣ層主体の黄褐色土の堆積があつて、住居検出に手間取った。 **重複関係**：(旧) SB4030。(新) SB4034。 **埋土**：壁際から床面には暗褐色土の複層が堆積する。埋土下位～上位にはⅣ層土主体の5層黄褐色土と7層褐色土が厚く堆積する。別の竪穴住居建築に伴う掘削残土を廃棄した状況と想像される。 **構造**：南北に軸をもつ、平面長方形。西壁がやや東に傾く。床は地山を整地している。壁はほぼ垂直である。主柱穴4基は長方形に配置されている。平面形は梁方向に細長い板状である。柱痕跡はない。南壁中央寄りの床面には南北に細長い階段ピットが並ぶ。その東脇に円形の貯蔵穴がある。 **炉**：土器埋設炉1基と地床炉1基を確認した。土器埋設炉は北側主柱穴間に位置する。浅く小さな掘方に甕の上半部を逆位に埋設する。炉北側床面には炭化物の分布がある。地床炉は北側床面の東壁際にある。住居貼床土が円形に被熱する。掘方はない。 **出土遺物**：床面付近から弥生後期土器や石器類、鉄鏃などが出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4035** [遺構：図版 2-89、土器：図版 3-41, 52・PL187, 194]

**位置**：ⅢC 14・15・19・20 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。重複関係は平面精査で明らかとした。重複する全ての遺構に切られているため、他遺構の調査後に本跡を掘り下げた。 **重複関係**：(新) SB3072・73・86、SK3209・4144。 **埋土**：床面から壁際には比較的均質な暗褐色土が堆積する。その上には砂質シルトのブロック土やⅣ層土を多く含む暗褐色土が堆積する。初期堆積後、人為的な埋め戻しがあつたとも想像される。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。北壁がやや膨み、南東隅が突出している。床は地山を整地していて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置している。平面は梁方向に軸を持つ楕円形である。断面形はP1以外播鉢状となり、柱痕跡はない。北壁際の主軸線上に横楕円形のピットがある。屋内棟持柱穴と推測される。南壁際の床面中央には細長い出入口施設を設置するピット2基が並び、その両脇に貯蔵穴が1基ずつある。このほか、小ピットが東西壁際や中央床面、南東側の主柱穴P4西横などにある。用途は不明であるが、大きさと深さから支柱穴と想定する。 **炉**：北側主柱穴間にある浅い皿用

の掘り込みを炉と考える。炉体土器や被熱部分はみられない。**出土遺物**：床面とピット内から弥生時代後期の土器が出土している。00714 甕は東西壁際に離れて出土した土器片が1個体に接合している。**時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4038** [遺構：図版 2-90・PL25、土器：図版 3-42・PL187、土製品：図版 3-54・PL194、石器：図版 3-207, 240・PL277, 286]

**位置**：Ⅲ C 10 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。遺構が密集する地区のため、東西トレンチを設定し、本跡と本跡を切る SB4037 を確認する。**重複関係**：(新) SB4037、SK4239・40・79、ST4017。**埋土**：南側は SB4037 に床面付近まで大きく壊されているため不明である。北側で観察すると、床面から埋土上部までⅣ層土ブロックを多く含む暗褐色～褐色土が堆積し、人為的な埋め戻しと考えられる。また住居中央の東西壁際にある長方形の大形ピット 2 基のうち、東側 P8 の埋土 1 層は本跡床面付近の埋土 8 層を切ると観察したが、上部を SB4037 に大きく壊されていることなどから断定できない。西側 P9 は住居跡と同時に埋没している。**構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。床はごく浅い掘方を整地した貼床であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴 4 基はやや歪んだ長方形に配置する。平面形は P1～3 が梁方向に長軸を持つ不整楕円形で、P4 は隅丸長方形に近い。また P1 の上部は大きく開いている。南壁際中央の床面には階段ピットと考えられるピット 2 基が並ぶ。平面形は主軸方向に長い楕円形と隅丸長方形である。その東隣にある隅丸長方形の P7 は貯蔵穴と推測される。また住居中央の東西壁際には、不整長方形の大形 P8・9 がある。両ピットとも長軸が住居主軸と同じであり、ピット長軸壁面の一方が住居壁と接しているという共通点がある。東側の P8 は長軸 2.04 × 短軸 1.71 m、住居床面からの深さ 36cm の隅丸長方形。西側の P9 は 1.92 × 1.31 m、深さ 14cm。P8 底面は平坦で壁面は南壁がやや緩やかで、他 3 面は垂直に立ち上がる。P9 底面はやや西側に傾斜し、壁の立ち上りは住居壁面と接する西面以外、緩やかに立ち上がる。P8 埋土はⅣ層土ブロックを多く含む層と比較的均質な暗褐色土層が互層になっていて、短期間の埋め戻しであると推察される。**炉**：土器埋設炉 1 基を北側支柱穴間の床面で検出した。浅い皿状の掘方に赤彩壺底部を正位で埋設している。炉南側の床面には炭化物層が分布している。

**大形の長方形ピット** 床面中央部の東西壁際に長方形の掘り込み（ピット）は、今回調査の当該期住居跡には見られない特殊な事例である。本住居跡は貯蔵穴内部に大量の土器片を廃棄後、上面を封土していたり、埋土には人為的な埋め戻しが見られたりするなど、他の住居跡にはない特異な痕跡がある。長方形ピット P8 が本跡床面堆積土を切る可能性もある。長方形ピットの掘り込み面が住居壁面に合っていることも根拠として、本住居跡の埋め戻し途中に住居壁面に沿って長方形のピット 2 基を掘削、一方のピット底面に甕を置いて、すぐに埋め戻すような、住居廃絶に関わる特別な行為の痕跡であったと可能性の一つとして挙げておきたい。

**出土遺物**：床面から弥生後期の土器が出土する。南西隅床面からは完形の甕が横位で出土している。貯蔵穴 P7 は上面がⅣ層土ブロックで埋め戻され、底面に多くの土器片や骨片が出土している。長方形の大形 P8 内からはほぼ完形の甕 00692 が出土している。**時期**：住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期後半）と考える。

**SB4056** [遺構：図版 2-91、土器：図版 3-42・PL188、石器：図版 3-210, 240・PL278, 286]

**位置**：Ⅱ R 24・25 グリッド。**検出**：調査面がⅢ層中にあり、平面検出は困難であった。本跡を切る SB3052 壁面の観察を手掛かりとして、本跡の形状と規模を確認した。**重複関係**：(新) SB3052、SK4282・83。本跡南側は攪乱坑によって床下まで削られている部分がある。**埋土**：壁際の 5～7 層、床面から中位の 3・4 層、上位の 1・2 層の順に堆積する。上位層は耕作の影響を受けている。全体に黒褐色土

で軽石粒を多量に含む。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。北西隅と南東隅はやや丸みがある。南壁はSB3052により大きく消失しているが、南東隅の様子から壁面はやや外側に膨らむ形状と予想される。床は地山を整地して、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置される。底面形はいずれも梁方向に長軸を持つ楕円形である。P8はSB3052によって上部形状は不明であるが、他3基の上部は漏斗状に広がる。ピット内埋土のしまりもなく、柱材の抜き取りなどによって再掘削された可能性がある。南壁の主軸線上にあるP9を屋内棟持柱穴と考える。主軸方向に長い長楕円形で、深さが54cmある。北壁中央には楕円形のピットが3基並ぶ。両側のP5・7が出入口施設を設置するピットとすると、中央のP6は主軸線上にあり、棟持柱穴の可能性もある。 **炉**：地床炉1基を床面中央に検出した。床面が不整楕円形に被熱する。掘り込みはほとんどない。また北側主柱穴間にあるP4は浅い皿状の掘り込みで、被熱部分などはないが、位置的に炉跡であったと考えておきたい。

**住居入口部の付替え** 本跡は入口部が北側、屋内棟持柱が北側にあり、通常の当該期住居と全く逆である。しかしながら、北側主軸線上の屋内棟持柱穴とも考えられるピットがあること、北側主柱穴間の炉は被熱部分がないことから考えると、当初南側に入口部を設けていたが、何らかの段階で北側に付け替えたと推測される。ただ棟持柱の移動や北側炉使用の有無など解決できない点も多く、断定はできない。

**出土遺物**：床面付近と埋土上層から弥生時代後期の土器と石器がまとまって出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB4066** [遺構：図版 2-92・PL25、土器：図版 3-43、52・PL194]

**位置**：Ⅲ C 10・D 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。SB4065 との切り合い確認をかねてベルトを残し掘削した。 **重複関係**：(旧) SB4067。(新) SB4037・63・65、SD0007。(不明) SK4236。 **埋土**：複層。壁際に暗褐色土、床面に黒色土が堆積し、その上に黒褐色土が重なる。 **構造**：隅丸長方形。住居全体が攪乱や新しい遺構に壊されている。床は地山を整地し利用、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置。梁方向に長軸を持つ長方形。 **炉**：検出されていない。 **出土遺物**：遺物量は少ない。北西壁際から完形のミニチュア土器が出土している。主柱穴 P2 内から赤彩壺の口～頸部が納められているような状態に横位で出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SB4067** [遺構：図版 2-92・PL25、土器：図版 3-43・PL188]

**位置**：Ⅲ C 10・D 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。重複する遺構との確認用ベルトを適宜設定した。その後、東西ベルトを残し掘下げた。 **重複関係**：(新) SB4058・66、SK4259、SD0007。(不明) SK4259。 **埋土**：床面までが浅く断定できないが、人為的埋没とみられた。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。床は地山を整地し利用、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴とみられるピットを北東隅床面と南壁際のSB4063床下にそれぞれ1基確認したが、一般的な住居跡のような長方形配置にはならない。どちらも東西に長軸持つ長方形である。 **炉**：検出できていない。 **出土遺物**：南東隅の床面から赤彩無頸壺、脚部が二段の赤彩高杯、甌、甕が出土。本来ほぼ完形の状態であったと考えられるが、上部は検出時点で削平されている。赤彩高杯は正位のまま出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と考える。

## 5区

**SB5047** [遺構：図版 2-93・PL25、土器：図版 3-43、44・PL189、土製品：図版 3-4・PL164、石器：図版 3-203・PL276]

**位置**：Ⅱ M 23・24・R 03・04 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面。まず北側を5区として調査。調査区境界に合

わせてL字型にトレンチを設定し、他遺構との切り合いや床面を確認、南北方向にベルトを残して掘り下げた。次に南側を6区調査時に掘り下げた。**重複関係**：(新)SB5024・36・48・6016・45、SK5003。**埋土**：北側の埋土観察では壁際に一次堆積土(5～10層)があり、その後二次堆積土(1～4層)が全体を覆う状況が捉えられる。**構造**：南北に軸を持つ、平面隅丸長方形。南北壁がやや膨らむ。床は地山を整地して、壁際を除いて硬く敲き締められている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴4基は長方形に配置する。いずれも底面形は梁方向に長い長楕円形であり、SB6045に上面を大きく削られたPA以外の3基は上部が漏斗状に広がる。漏斗状に開く部分の埋土にはしまりのない褐色土やブロック土が堆積している。こうした状況から柱材抜きなどの再掘削があったと推定される。南壁際の床面には中央部に南北に細長い出入口施設を設置するピット2基とその西隣に貯蔵穴P9が並ぶ。また支柱穴と考えられるピットが東壁に3基、南壁南側に1基、西壁南側に1基、支柱穴P2・A間のP2寄りに1基ある。東壁の3基は柱間距離が等しく2.4mである。西壁の1基は東壁の南側1基と梁方向で同線上にある。西壁は他遺構による削平を大きく受けているが、本来東壁と同間隔に3基の支柱穴があったと考える。**炉**：土器埋設炉1基を北側支柱穴間に検出した。壺底部を正位に埋設している。炉内から炭化物がわずかに出土している。**出土遺物**：貯蔵穴P9上層に赤彩壺上半部の破片が一括出土し、その下に完形の甕が横位で出土している。P9横床面からは甕上半部、出入口施設を設置するピットを挟んで反対側の床面から甕1個体が出土する。埋土中からは弥生時代後期の土器片が少量出土と石皿片、土製玉1点の出土がある。**時期**：住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期(箱清水式期前半～後半)と考える。

#### SB5051 [遺構:図版2-94・PL26]

**位置**：ⅡN11グリッド。**検出**：Ⅳ層上面。北側壁際は床下まで攪乱を受けている。**重複関係**：(新)SK5268。**埋土**：複層がレンズ状に堆積する。Ⅱ層土主体とし、Ⅲ・Ⅳ層土粒が混在する。**構造**：南北に軸を持つ、平面隅丸長方形。南西壁は円状を呈す。床は凹凸のある掘方を整地した貼床。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴などのピットはない。**炉**：北部中央、主軸線上に地床炉1基。床面表面がわずかに被熱している程度。**出土遺物**：南東側床面に平石が1点出土している。**時期**：出土遺物がなく、時期を決定できない。本跡南西側にある弥生時代後期(箱清水式期前半)のSB6067と規模形態ともよく似ていることから本跡も同時期と推定される。

## 6区

#### SB6012 [遺構:図版2-94・PL26、土器:図版3-4,44・PL189]

**位置**：ⅡS02・07グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で検出。**重複関係**：(新)SK6061、SD4005、ST6003。**埋土**：複層。壁面から床面には均質な黒褐色土が堆積。中層の4～8層にはⅣ層土ブロックが多く混じる。別遺構の掘削排出土か。**構造**：南北に軸を持つ、隅丸長方形。南北壁が弧状に膨らむ。床は地山を整地し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。支柱穴4基は長方形に配置され、平面形は梁方向に長い楕円形を呈す。P2～4の埋土中央部にはしまりの悪い黒褐色土があり、柱痕跡の可能性はある。南壁際の床面中央には入口施設を設置するピットが2基並ぶ。その東隣に貯蔵穴P7がある。**炉**：土器埋設炉1基を北側支柱穴間の床面に検出した。壺底部を正位に置く。掘方は浅く、土器敷炉という捉え方もできる。南側に炉縁石として棒状の河原礫を置く。炉南側が被熱赤化する。**出土遺物**：全体量は少ない。北西壁隅の床面から赤彩高杯の杯部が出土している。**時期**：住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期(箱清水式期前半)と想定される。

**SB6025** [遺構:図版 2-95・PL26、土器:図版 3-44, 45、土製品:図版 3-53]

**位置**: II R 15・S 06・11 グリッド。 **検出**: IV層上面。先行トレンチを設定し、床面と壁を確認。本跡北東隅を切る SB6023 は斜めに設定した土層ベルトにて確認。 **重複関係**: (新) SB4041・6023。 **埋土**: 複層がレンズ状に堆積する。壁際に黒褐色土、床面から中位までIV層土ブロックを多く含む黄褐色土。上部に黒褐色土が堆積する。 **構造**: 南北に軸を持つ、隅丸長方形。南北壁が弧状に膨らむ。床面は地山を整地していて、壁は床から中位までほぼ直立し、上部は外側に開く。主柱穴4基は長方形に配置される。平面形は円形ないしは方形、楕円形と統一されない。北側床面の主軸線上の P5 は屋内棟持柱穴である。炉と棟持柱穴間にある P6 は浅く、性格不明である。南壁は SB4041 によって床下まで切られているが、SB4041 床下調査で入口施設を設置するピット2基とその東隣に貯蔵穴を検出しているが、図化に至っていない。 **炉**: 土器埋設炉1基を北側主柱穴間の床面に検出する。浅い楕円形の掘方に赤彩壺底部を正位に埋設する。炉内部から南側が被熱し、焼土が溜まる。炉体土器南縁に炉縁石として棒状の河原礫を置く。 **出土遺物**: 出土量は少ない。床面に弥生時代後期の土器が散布する。 **時期**: 住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB6028** [遺構:図版 2-96・PL26、土器:図版 3-45・PL189、石器:図版 3-229, 240・PL283, 286、金属製品:図版 3-256・PL291]

**位置**: II S 07・08・12・13 グリッド。 **検出**: IV層上面。南西壁を他遺構に壊されているが床面の残存状況は良好である。 **重複関係**: (新) SB6011、SD4005。 **埋土**: 複層。壁際の初期堆積後、IV層土ブロックを多く含む土と黒褐色土の互層となり、人為的な埋め戻しと推測される。 **構造**: 南北に軸を持つ、平面長方形。床は凹凸のある掘方を整地した貼床である。壁面は床面から中位までほぼ直立し、そこから上は斜めに開く。主柱穴4基は長方形に配置する。平面形はほぼ梁方向に長い楕円形または長楕円形である。北側の2基はやや北側に傾く断面形である。南壁際の床面中央には出入口施設を設置した細長いピット2基が並び、その東隣に貯蔵穴 P6 がある。 **炉**: 土器埋設炉1基を北側主柱穴間に検出する。赤彩壺胴下半部を正位に埋設する。南側縁部が被熱赤化する。 **出土遺物**: 貯蔵穴 P6 埋土内のほか、南側床面付近に弥生時代後期の土器や石器、金属製品が出土している。 **時期**: 住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB6044** [遺構:図版 2-97・PL26、土器:図版 3-45, 46・PL190]

**位置**: II S 07・12 グリッド。 **検出**: IV層上面で平面形を確認。中央から東側を床面まで古代住居跡に壊されている。 **重複関係**: (新) SB6011・29、SK6058、SD4005。 **埋土**: 消失した中央部以外の観察では、細かなレンズ状堆積であり、全体に黒色～黒褐色土主体で自然堆積と考える。 **構造**: 南北に軸を持つ、隅丸長方形。南壁より北壁の方が長く、逆台形に近い長方形である。南壁以外に三方の壁はやや膨らむ。床は地山を整地していて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴は3基確認。その位置から、本来4基が長方形に配置していたと考えられる。平面形は梁方向に長い長楕円形である。屋内棟持柱穴は北側床面の主軸線上にある。南壁際の中央床面には出入口施設を設置した細長いピット2基が並び、その東隣に円形の貯蔵穴 P5 がある。南西隅には楕円形で浅い窪み状の P6 がある。 **炉**: 北側主柱穴間の床面に浅く不定形に掘り窪められた地床炉1基を確認した。炉底面が被熱赤化し、南側に炉縁石として河原礫が一つ置かれている。 **出土遺物**: 床面の残存する北、南壁際の3カ所に弥生時代後期の土器が出土している。ほぼ完形の土器が数個体ずつ出土する。 **時期**: 住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB6067** [遺構:図版 2-97、土器:図版 3-46, 52・PL190]

**位置**: II R 04・05 グリッド。 **検出**: IV層上面。SB6022 との切り合いは不明瞭だったが、出土遺物から SB6022 が新しいと判断した。 **重複関係**: (新) SB6022・65・66、ST6028。 **埋土**: 複層。全体に黒褐色土が堆積する。床面上には全体に炭化物や焼土が広がることから、焼失住居と考える。 **構造**: 小規模な竪穴住居である。平面は南北に軸を持つ隅丸長方形。床は凹凸のある掘方を整地した貼床。硬く締まる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱穴などのピットは検出されていない。 **炉**: 北側中央床面に地床炉 1 基を検出。掘り込みはなく、床面が小規模に被熱赤化する。 **出土遺物**: 北西隅の床面からほぼ完形の中型甕が出土している。 **時期**: 出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

## 7区

**SB7047** [遺構:図版 2-98・PL27、土器:図版 3-3, 46・PL163, 190]

**位置**: I T 22・23・Y 02・03 グリッド。 **検出**: IV層上面。本跡が重複する全ての遺構より古いため、他遺構の調査後、軸線に沿って十字状に土層ベルトを残し、掘下げる。 **重複関係**: (新) SB4058、SK7605・10～18・77・7718・7877・78・7910。 **埋土**: 複層がレンズ状に堆積する。下位の 5～11 層は自然堆積と考えられるが、4 層は粘土質シルトがブロック状に入り、人為的な埋め戻しの可能性がある。その上位にある 1～3 層は時間差を持って自然堆積したと推測される。 **構造**: 南北に軸を持つ、隅丸長方形。北壁がやや膨らむ。床は掘方を整地した貼床で、壁際以外が敲き締められている。掘方は中央部より周囲をやや深く掘り込んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴 4 基は長方形に配置され、平面形はほぼ円形である。北側の 2 基の掘り込みはほぼ垂直であり、南側の 2 基は内側に傾斜する。特に南西側の P3 の傾斜は顕著である。北側床面の主軸線上にある P8 は屋内棟持柱穴である。南壁際中央に出入口施設を設置するピット 2 基が並び、その東隣に円形の貯蔵穴 P5 がある。 **炉**: 土器敷炉 1 基と地床炉 1 基を北側主柱穴間の床面で検出する。北側にある土器敷炉はごく浅い円形の掘り込みに同じ甕の破片 2 点を内面を上にして敷く。掘り込みの周囲がわずかに被熱赤化する。地床炉は浅く小ぶりの掘り込みの内部に焼土があり、地山も被熱赤化する。 **出土遺物**: 床面に弥生時代後期の土器片が散乱する。また北壁側で埋土上層（2～4 層）内から完形の高杯 1 点が逆位で出土。その近くから小型甕 1 点も出土している。 **時期**: 出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB7074** [遺構:図版 2-99、土器:図版 3-2・PL163]

**位置**: I X 16 グリッド。 **検出**: 表土が薄く、削平の著しい地区である。IV層上面で長方形の落ち込みを想定したが、調査を進めた結果、壁面の立ち上りや硬い床面が検出されていない。床直下の掘方埋土上面が露出している状況と判断した。床は掘形状に沿うやや狭い範囲と掘方を超える広い範囲を想定したが、確定に至っていない。 **重複関係**: (新) SK7925・74、SD7003、ST7011。 **埋土**: 残存していない。 **構造**: 掘方は南北に軸を持つ、不整長方形である。床範囲は平面精査による土質差で想定した。主柱穴と考えられるピット 2 基が南北壁際にある。不整楕円形で深さは 42cm と共通する。掘方は凹凸があり、シルト質土を充填している。 **炉**: 検出されていない。 **出土遺物**: 弥生時代後期の土器が北壁際に一括出土する。 **時期**: 出土土器から弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と想定する。炉がなく、主軸方向 2 基を主柱穴とする特異な形状の竪穴状の建物である。

**SB7077** [遺構:図版 2-99]

**位置**: II C 04・05・09・10 グリッド。 **検出**: 調査区境界間近の IV層上面で削平された被熱部分を検出した。

竪穴住居跡の炉と想定し、周囲に柱穴を探す。その結果SK7956・59・63と土坑登録されたピットを本跡柱穴と推定した。 **重複関係**：(新旧不明)SK7955・57・58・61・62・64。 **埋土**：残存していない。 **構造**：南北に軸を持つ竪穴住居跡を想定する。本来4基あった主柱穴のうち、北東側の1基は調査区外にあると考えられる。ほかの3基は円形ピットである。床、壁は残存しない。 **炉**：円形の被熱部分1カ所。不整円形の掘方を持ち、その埋土上面が焼けている。北西側主柱穴SK7959の東横にある。本来北側主柱穴間に位置していたと考えられる。 **出土遺物**：なし。 **時期**：炉と柱位置から弥生時代後期と想定するが、縄文時代中期の竪穴住居跡も近在し、縄文時代の遺構である可能性も残る。

## 8区

**SB8001** [遺構:図版2-100・PL27、土器:図版3-3、47・PL164、190、土製品:図版3-57・PL195]

**位置**：I X 07・12・13グリッド。 **検出**：北西一角を19年度、残る大半を20年度に調査した。IV層上面。攪乱を強く受けている。 **重複関係**：(旧)SB7076。(新)SK7937・40・44、SD7001・8001・03。 **埋土**：下位は軽石粒を多く含む褐色土、上位は土壌化の進む黒褐色土が堆積する。ブロック土の混在は少ない。 **構造**：南北に軸を持つ、平面隅丸長方形。北壁が南壁より長い為、やや歪んだ形状となる。床の大半は地山を整地している。南壁際から中央部には粘性シルト質土を薄く貼った床が広がる。南東壁直下に浅い周溝があり、壁は全体的にはほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置する。平面規模はごく小さく、梁方向に長い長楕円形または長方形を呈す。掘り込みは南西側のP3はやや内傾し、他の3基はほぼ垂直である。北壁際床面の主軸線上に、南北に長い平面長方形の屋内棟持柱穴P5がある。南壁中央寄りの床面には出入口施設を設置したピット2基が並ぶ。いずれも南北に長い平面長方形で、断面形は内側に傾く。その東隣には貯蔵穴のP8がある。平面略方形である。 **炉**：3基の炉を検出した。炉1は土器敷炉である。浅い皿状の掘り込みに埋め面を上にした甕片を敷き、南側縁部に棒状の河原礫を埋設する。土器下の掘り込み部分全体が被熱する。炉2は住居中央に位置する地床炉である。ごく浅い掘方で南北の側面部が被熱赤化する。炉はIV層主体土で埋め戻されている。炉3は主柱穴P3・4間のやや南寄りの床面にある。不整形の掘り込みで、南側がピット状に窪み、その南東側縁部が被熱赤化する。 **出土遺物**：床面出土遺物は非常に少ない。南壁際床面と炉3内から弥生時代後期の土器片が出土する程度である。 **時期**：住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期(箱清水式期前半)と考える。

**SB8002** [遺構:図版2-101]

**位置**：I X 01・02・06・07グリッド。 **検出**：IV層上面。 **重複関係**：(旧)SM8002。(新)SB7070、ST7012。 **埋土**：初期堆積として、壁際から床面に軽石粒を含む粘性の弱い土(2・3層)が堆積する。次に住居中央に向かって褐色ブロック土を多く含む土(1層)が堆積する。1層は人為的な堆積である可能性がある。 **構造**：南北に軸を持つ、平面方形。床は貼床で、シルト質土を全体に貼っている。壁はやや外傾して立ち上る。主柱穴4基は方形に配置する。南東側のP4は平面円形であるが、ほか3基は梁方向に長い楕円形となる。P1が不整形であるのは、調査時に掘方埋土まで掘り過ぎている可能性が高い。 **炉**：地床炉1基を北側主柱穴間の床面で確認した。掘り込みはなく、床面が楕円形状に被熱赤化する。 **出土遺物**：遺物量は少ない。 **時期**：弥生時代後期の集落内にあることから当該期としたが、住居形態からやや新しい弥生時代終末から古墳時代前期の可能性もある。

**SB8005** [遺構:図版2-102・PL27、土器:図版3-47、52・PL191、194、石器:図版3-229]

**位置**：I X 03・04・08・09グリッド。 **検出**：IV層上面。北東一角を19年度、残る大半を20年度に調査。

**重複関係**：(新) SK7601・60～62、SD7001・8002、ST7006・8006。 **埋土**：中央床面上に被熱赤化した部分と炭化物が広がる。壁際では床面から15cm程の間層を挟んで炭化材が出土している。更にその上部をきめ細かな灰層が10cm程の厚さで住居跡全体を覆っている。こうした状況から一次堆積後、火災あるいは構築材を燃やす行為があったと想定される。 **構造**：南北に軸を持つ、平面長方形。北東隅は丸みが強い。主柱穴4基は長方形に配置する。いずれも平面はほぼ梁方向に長い偏平な楕円形である。断面形はP3以外内側に傾く。北側床面の主軸線上には、主軸方向に細長い屋内棟持柱穴P9がある。南壁際の床面中央には出入口施設を設置したP7・6の2基が並ぶ。いずれも主軸方向に細長い平面形で、断面形は住居内側に傾斜する。その東隣にあるP5は貯蔵穴の可能性のあるもののごく浅い。P7西側にある副軸方向に長い楕円形P8もごく浅い。 **炉**：地床炉2基を北側主柱穴間に確認した。2基は東西に並び合う。2基とも規模は小さく、浅い掘り込み内に被熱した焼土がある。 **出土遺物**：北壁際の床面よりやや高い位置から完形のミニチュア土器（甕）が出土する。また弥生時代後期の土器や礫が床面より5～30cm高い位置から出土している。これらは火災などによって堆積した灰層直上にあたる。 **時期**：住居形態と炉体土器、出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

**SB8027** [遺構:図版2-103、土器:図版3-48,52]

**位置**：I S 19・20・24・25 グリッド。 **検出**：IV層上面。SB8006・08に三方の隅以外床下まで壊されている。ピットはSB8006床下調査で確認した。 **重複関係**：(新) SB8006・08。 **埋土**：残存する部分についてSB8006壁面で観察。暗褐色土と黒褐色土の複層。堆積状況にみられる乱れは、本跡埋没後のSB8006掘削などによる影響も考えられる。 **構造**：南北に軸を持つ、やや隅丸気味の平面長方形。北壁は北西隅の状況から壁面がやや外側に膨らむ形状である可能性がある。床は地山を整地している。壁の立ち上りはやや外側に傾斜する。主柱穴4基は長方形に配置する。平面形はP2を除いて梁方向に長軸を持つ長楕円形、P2は楕円形で底面が段状となる。北壁際床面には屋内棟持柱穴のP7がある。主軸線上に位置し、平面は南北に長い長楕円形を呈す。 **炉**：確認されていない。 **出土遺物**：残存部より弥生時代後期の土器片がわずかに出土している。図化していないが、赤彩装飾高杯の破片も出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SB8029** [遺構:図版2-103、土器:図版3-48、石器:図版3-207,216,248・PL277,289]

**位置**：I S 08・09・14 グリッド。 **検出**：IV層上面。近現代の攪乱と重複遺構の影響で検出は困難であった。他遺構の調査を進めながら本跡の形態と規模を捉えた。 **重複関係**：(新) SB8008・28・30、SK8010・11・8193。 **埋土**：攪乱と上部遺構の影響と検出面から床面までが浅いため、全体の堆積状況は把握できていない。黒褐色から褐色土の複層からなり、IV層土が縞状に堆積する部分があり、人為的な埋め戻し行為があった可能性がある。 **構造**：残存する東壁と北壁、床面の一部から住居構造を考える。平面形は南北に軸を持つ長方形。北壁はやや膨らむ。床は平坦で、地山を整地している。壁は直線状でやや開く。主柱穴の一つが北東側床面にある。その平面形は梁方向に長い長楕円形である。北壁に近い床面には南北に細長いピットがあり、屋内棟持柱穴と考えられる。ほかに施設は検出できていない。 **炉**：検出されていない。 **出土遺物**：埋土より磨製石鏃と弥生時代後期の土器が出土している。 **時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SB8043** [遺構:図版2-104、土器:図版3-48、石器:図版3-234,245・PL288、金属製品:図版3-257・PL292]

**位置**：I T 13・14・18・19 グリッド。 **検出**：IV層上面。調査区境南側で奈良時代の溝跡SD8006の土層

断面を観察した際、SD8006の立ち上がりが不明瞭であったため、先行トレンチを設定した。トレンチを掘下げると、土器などの遺物とSD8006に切られる本跡の床面を確認した。SD8006調査後、土層観察用ベルトを2方向残して掘り下げた。土層観察より東側は古墳時代前期または中期に帰属する方形周溝墓SD8018にも切られていることが分かった。**重複関係**：(新)SD8006・8018。**埋土**：中央部の堆積状況は不整合である。一旦埋没した後、床面直上まで再掘削された可能性がある。再掘削部分の平面形は捉えられず、別の遺構であるかどうかの判断はできていない。また周溝墓の溝に切られていることから、比較的早く埋没したと考えられる。**構造**：残存する南壁と炉、柱穴などから南北に軸を持つ平面長方形と考える。床は地山を整地し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。主柱穴4基は長方形に配置される。平面形は不整な楕円形で、断面形は下位～中位までは円筒状で、中位から上部に向かって大きく開く。埋土からは再掘削があったのか不明である。南壁下にある周溝は西壁までは続かない。また南壁際の中央床面には出入口施設を設置した南北に細長いピット2基が並ぶ。いずれも南北方向の断面形は住居内側に傾斜していて、掘方と同じ斜め方向に板状の柱痕跡が残る。**炉**：土器敷炉1基を北側主柱穴間の床面で検出した。浅い掘り込みに弥生時代後期の壺破片を、内面を上にして敷く。土器片の南側には棒状の河原礫を置く。炉の南側に浅い帯状の落ち込みがある。**出土遺物**：遺物は少ない。床面からかなり高い位置で鉄鏃や土器や平石が出土している。床面からは炉体土器以外にほとんど出土していない。**時期**：住居形態と出土遺物から弥生時代後期（箱清水式期前半）と考える。

## 2. 円形周溝墓・方形周溝墓

**SM3001** [遺構：図版2-105・PL28]

**位置**：3区 II W 02・03 グリッド。**検出**：東部分をIV層上面にて弧状の落ち込みを確認。北側部分は住居跡に切られたわずかな溝跡と検出。連続する溝跡（周溝）と推測した。**重複関係**：(新)SB0301・3002・48 **埋土**：土層記録はないが、暗褐色土の堆積があった。**構造**：円形周溝墓の周溝部と想定する。住居跡に大部分が切られているため、詳細は不明。北側部分は残存長0.53 m、幅0.60 m、深さ0.34 mである。東側部分は2.40 × 0.66 × 0.15 mである。断面形は逆台形で底面はほぼ平滑である。北側部分は深く、東側部分は浅い。溝2カ所を合わせた規模としては南北4.32 m、東西7.04 mを測る。ただそれぞれの位置関係は同一円弧上からややずれているため、溝規模は似るが別の遺構（周溝）である可能性も残す。**出土遺物**：非常に少ない。**時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM3002** [遺構：図版2-105・PL28]

**位置**：3区 II W 09 グリッド。**検出**：IV層上面で検出。本跡周辺には本跡含め溝状遺構が7カ所ある。本跡のような弧状の溝状遺構は5カ所で、そのうち2カ所は同一遺構と想定しSM3004と登録している。また直線的な溝状遺構は2カ所ある。SM3004以外はお互いの関連性が認めにくく、それぞれに登録番号を付けている。溝同士には重複関係はないが、検出面からの深さは非常に浅いことから本来は互いに重複した状態で掘削、構築されていたものとする。**重複関係**：(新)SB3045 **埋土**：IV層土粒や軽石を多く含む明褐色土が堆積する。**構造**：南東側が膨らむ弧状の短い溝跡である。長さ2.73 m、幅0.34～0.44 m、深さは0.12 mで、断面形は逆山形となる。**出土遺物**：ほとんどない。**時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM3003** [遺構：図版2-105・PL28、土器：図版3-48・PL191]

**位置**：3区 II W 08 グリッド。**検出**：IV層上面。**構造**：円形周溝墓の周溝と考える。南東側が膨ら

む弧状の短い溝跡である。長さ 3.07 m、幅 0.38 m、深さは 0.14 m で、断面形は逆台形となる。 **出土遺物**：本跡から 2.2 m 北西に赤彩壺が出土している。検出面とする IV 層上面より 20cm ほど高い位置で出土。本跡を円形周溝墓とすると、土器は墳丘に関わる土中から出土したと考えられる。 **時期**：赤彩壺からすると、弥生時代後期（箱清水式期前半～後半）と考える。

**SM3004** [遺構：図版 2-105・PL28、土器：図版 3-53・PL195]

**位置**：3 区 II W 09・10 グリッド。 **検出**：IV 層上面にて弧状に巡る落ち込みを確認。北東側と南西側とに分かれるが、同じ円弧上にあることから同一の円形周溝墓の周溝部と考えた。 **重複関係**：(新) SB3045。 **埋土**：南西側で観察すると下層は IV 層土主体で黒色土ブロックの混在する明褐色土で、その上部には IV 層土が斑状に混ざる暗褐色土が薄く堆積する。 **構造**：円形周溝墓の周溝部と考える。主体部は残らない。北西部分は北東側が膨らむ弧状で長さ 2.46 m、幅 0.44 m、深さは 0.07 m で、断面形は浅い半円形となる。また東側の溝末端部は不整形円形状に広がり幅 1.17 m となる。南西部分はやや長く、南西側が膨らむ弧状で長さ 5.57 m、幅は北西端で 0.70 m、中間で 0.53 m、南東端で 0.39 m、深さ 0.18 m で、断面形は不整形台形となる。北西と南東には広く周溝がないが、削平の影響が大きく掘削当時の状況は窺い知れない。北東から南西間の計測によると、周溝墓の直径は溝外側立ち上りで 6.49 m、溝の中心部間で 5.91 m を測る。 **出土遺物**：ほとんど出土していない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM3005** [遺構：図版 2-105・PL28]

**位置**：3 区 II W 14 グリッド。 **検出**：IV 層上面で直線的な落ち込みとして検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：IV 層土を多く含む暗褐色土の単層である。 **構造**：方形あるいは円形周溝墓の周溝部と想定しておく。北東から南西に延びる、ほぼ直線的な短い溝跡であるが、南東側壁面がやや弧状に膨らむことから、円弧状の溝跡とする可能性も残す。長さ 1.96 m、幅 0.53 m、深さ 0.06 m。底面は凹凸があり安定しない。削平の影響大きく溝掘削時の形状を復元することはできない。 **出土遺物**：なし。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM3006** [遺構：図版 2-105・PL28]

**位置**：3 区 II W 08 グリッド。 **検出**：IV 層上面で円弧状の落ち込みとして検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：IV 層土ブロックを含む暗褐色土である。 **構造**：円形周溝墓の周溝部と考える。形状は南側が膨らむ弧状の溝跡である。長さ 2.41 m、幅 0.46 m、深さ 0.18 m を測り、断面形は半円形である。 **出土遺物**：なし **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM3007** [遺構：図版 2-105・PL28]

**位置**：3 区 II W 14 グリッド。 **検出**：IV 層上面で直線的な落ち込みとして検出。 **埋土**：IV 層土粒を多く含む、しまりのない暗褐色土の単層である。 **構造**：方形あるいは円形周溝墓の周溝部と考える。平面形は直線的な溝跡であるが、北西壁がやや弧状をなすようにもみられる。検出段階で削平の影響大きく、溝掘削時の状況を復元し得ない。現状で北東から南西方向に長軸を持ち、長さ 2.00 m、幅 0.52 m、深さ 0.06 m を測る。 **出土遺物**：なし。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM4001** [遺構：図版 2-106, 107・PL29、土器：図版 3-48、金属製品：図版 3-257]

**位置**：4 区 III D 12・13・17・18 グリッド。 **検出**：IV 層上面にて略方形に巡る溝状の落ち込みとして検出。

西側の溝が途切れていることは検出段階で明らかであった。弥生時代後期の竪穴住居跡 SB4002 に切られている南側中央部には先行トレンチを設定し、断面観察からも新旧関係を確認した。なお検出段階で墳丘部は確認されていない。 **重複関係**：(新) SB4002・04・05、SK4026・40・42・54・86・4187・4248・49・53・66、ST4002。 **埋土**：北側中央部と東側中央部、南側中央部で土層断面を観察した。北側中央部では5層に分層される。最下層にはIV層主体のにおい黄褐色土(5層)が薄く堆積し、中層には比較的均質な黒褐色土(3層)と北壁際に暗褐色土(4層)が堆積する。上層の壁際には土壌化の進む黒色土(2層)があり、中央部にはIV層土を含む黒褐色土(1層)が堆積する。2層土は墳丘裾部にあたる南側で厚い。東側中央の周溝部はごく浅く、中央部にIV層土を含む黒褐色土(6層)、西壁際にIV層土を多く含む暗褐色土(7層)、東壁際に黒褐色土(8層)がわずかに堆積する。北側周溝部上位に観察される黒色土はない。南側中央はSB4002との重複部分で観察した。底面から北壁面にIV層土を多く含む暗褐色土(11層)が堆積。中央部に黒褐色土(9層)がある。9層下位には細砂がラミナ状に堆積する。SB4002に切られる南壁付近には黒褐色土(10層)が堆積する。ここでも北側周溝部にある黒色土の堆積はない。 **構造**：方形周溝墓の周溝部である。西側に開口部があることから主軸は東西方向で、主軸角度はN 81° Eである。平面規模は周溝立ち上り外側で主軸長 10.2 m、副軸長 11.0 m、溝底部中央で 8.9 m、9.4 m、立ち上り内側で 8.3 m、8.3 mを測り、外側立ち上りではやや横長の方形であるが、内側立ち上りではほぼ正方形であることがわかる。溝の形状は均質ではなく、平面的な広狭や断面形の違いや深浅がある。北側中央部は断面形が中段から上部がやや開く逆台形で、幅 1.2 m、深さ 0.6 mともっとも規模が大きい。北西隅付近から北端部では幅が 0.9 mとやや細くなる。反対側の北東隅は幅 0.5 mと細く、東側北寄りでは幅 0.85 mと広がる。東側南寄りでは幅 0.45 m、深さ 0.2 mともっとも小規模になるが、南東隅は土坑状の落ち込みとなって幅 1.1 m、深さ 0.3 mを測る。南側東寄りは幅 0.7 mとやや細くなるが、中央部やや西寄りでは幅 1.3 mと最も広がる。ただ断面形は低い逆台形で深さ 0.2 mと浅くなる。南東隅はまた 0.5 mと狭くなり、南端部は 0.6 mとやや広がる。底面標高は北西隅 705.26 m、北側中央 705.12 m、北東隅 705.29 m、東側中央 705.57 m、南東隅 705.29 m、南側中央 705.17 m、南側西寄り 705.05 m、南端部 705.36 mである。この数値から、南東隅の土坑状落ち込み部分を除いて、溝幅の狭くなる隅部と東側中央の掘り込みが浅くなる傾向がわかる。西側開口部は南端がSB4004に切られるため、本来の規模は不明であるが、現存長で 4.1 mを測る。墳丘部の痕跡は検出段階で残存していない。周溝北側中央部の埋土上位に観察された黒色土を墳丘部残存時の堆積物と想定すれば、黒色土の残らない東側と南側の周溝部は本来北側と同じ程度の深さを持っていた可能性がある。また溝底部標高には北と南に地形傾斜ほどの数値差がないことから、墳丘部築造には水平面を創出する志向のあったことが想像される。 **出土遺物**：弥生時代後期の土器が南側周溝内で出土している。底面からの高さは直上から 20cmの範囲にあるが、意識的な配置や集積はみられない。また北側周溝出土の鉄鏃(長頸鏃)は埋土1層内の検出面付近にみつかっていて、後世の混入品と考える。 **時期**：弥生時代後期(箱清水式期)、重複関係からSB4002以前と位置付けられる。

#### SM4004 [遺構:図版 2-111・PL31]

**位置**：4区 II S 23・24 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。中世の溝跡合流部分と重なり、大きく壊されている。平面検出で新旧関係は明らかであった。 **重複関係**：(新) SD4002・03・05 **埋土**：北側1カ所と南側2カ所で観察した。3カ所に共通して土壌化の進む暗褐色土(1層)が堆積する。南側2カ所のうち、北寄りの深い部分には底部にIV層土の混在する暗褐色土(2層)が堆積している。 **構造**：中世の溝跡に壊され、3カ所に分割されているが本来同一の溝跡と考える。ほぼ円弧状に巡る点と埋土の性状から弥生時代後期の円形周溝墓の周溝部と推察される。規模は南北 5.5 m、東西 3.0 mを測り、北東方向に膨らむ

不整な弧状を成す。北側は幅 0.4～0.6 m で深さ 0.2 m と浅い。南側の北寄りでは幅 0.9 m、深さ 0.4 m の規模があり、南端部は幅 0.3 m、深さ 0.1 m と小規模となる。墳丘部や主体部、西側の周溝部は検出されていない。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と想定しておく。

**SM4005** [遺構：図版 2-108, 110・PL30, 31]

**位置**：4区 II X 16 グリッド。 **検出**：IV層上面で環状の落ち込みとして検出。 **重複関係**：(新)SB4042のほか、土坑1基。 **埋土**：IV層土ブロックが混在する黒褐色土の単層。 **構造**：円形周溝墓の周溝部と考える。平面形は南北にやや長い円形である。西側は竪穴住居跡などに壊されているが、明らかに溝が途切れている。西を開口部として東西を主軸として、主軸角はN 85° Eとなる。主軸長は溝外側立ち上りで5.1 m、副軸長は5.8 m、溝底部中央で4.8 mと5.3 m、内側立ち上りで4.5 mと4.8 mを測る。西側開口部の長さは現状で2.7 m。墳丘部、主体部は検出されていない。断面形は不整な逆台形で、検出面から溝底面まで深さ9cm程しかない。 **出土遺物**：ほとんど出土していない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）としておく。

**SM4008** [遺構：図版 2-108, 110・PL31]

**位置**：4区 II X 18 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。古墳時代以降の柱穴状の土坑が集中する部分で円弧状の落ち込みを2カ所検出した。 **重複関係**：直接重複する遺構はないが、古墳時代以降の土坑群が周溝部の内外に検出されている。 **埋土**：北側1カ所、東側1カ所で観察。北側は黒褐色土の単層。東側は底面に極暗褐色土、その上部に黒褐色土が堆積する。2カ所とも検出面から底面まで20cm前後と浅い。 **構造**：円形周溝墓の周溝部と考える。北側と東側の2カ所に溝があり西側から南側に溝はない。北側と南側の溝は連続しない。規模は全体で南北5.3 m、東西4.76 m。北側の周溝部は長さ2.2 m、幅0.4～0.7 m、深さ0.2 m。東側周溝部は4.79 m、0.4～0.6 m、0.2 mを測る。北側周溝部の西側は不整形な広がりを持って半円形に閉じる。東側は細長く伸びて半円形に閉じる。東側周溝部は比較的整った溝状で南北の端部は同じように半円形に閉じる。断面形は北側が不整な逆台形、東側が半円形となる。 **出土遺物**：ほとんど出土していない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）としておく。

**SM5001** [遺構：図版 2-111・PL31]

**位置**：5区 II C 20・25・D 16・21 グリッド。 **検出**：Ⅲ～IV層上面で検出。古墳時代以降の土坑群と同一面で検出。西側が開くC字状の落ち込みとして確認した。 **重複関係**：(新)SK5065・66・70・72・76・5320。これ以外に本跡内側に土坑群が重なる。 **埋土**：3カ所で確認。北側は浅く、暗褐色土（1層）の単層である。東側1カ所はIV層主体の褐色土（4層）が底面に堆積し、西側にII層・IV層土の混在する暗褐色土（3層）、上層にII層土主体の暗褐色土（2層）が堆積する。南東側と南側は共通し、3層土が底面に薄く堆積し、2層土がその上を厚く覆う。 **構造**：南西方向が開く円形周溝墓の周溝部と考える。平面形は南北に長い楕円形で、主軸は東西に持ち、主軸角度はN 69° Eである。規模は主軸長が外側立ち上りで6.4 m、副軸長7.7 m。溝底部中央で5.9 mの7.0 m、内側立ち上りで5.3 mの6.3 mを測る。深さは0.1～0.27 mで南側が深い。断面形はほぼ逆台形を呈す。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）としておく。

**SM7001** [遺構：図版 2-112]

**位置**：7区 I X 17・22 グリッド。 **検出**：IV層上面で南北方向に伸びる落ち込みとして検出。古墳時代

以降の竪穴住居跡や土坑群を同一面で確認した。 **重複関係**：(新) SB7055。この他に本跡周囲に土坑群が重なる。 **埋土**：中央部で確認。底面にIV層土を主体とするにぶい黄褐色土、上部には黒褐色土が堆積する。 **構造**：南東方向に膨らむ弧状の溝跡。円形周溝墓の周溝部と考える。南側はSB7055に切られて消失する。幅0.5mで伸び、北側は半円形に閉じる。断面形は半円形で、検出面から底面までは0.2mと浅い。墳丘部、主体部は検出されていない。 **出土遺物**：ほとんど出土していない。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）としておく。

**SM8002** [遺構：図版 2-112・PL31]

**位置**：8区 I X 02・03・07・08 グリッド。 **検出**：IV層上面で環状の落ち込みと中央部に略長方形の落ち込みを確認。古墳時代以降の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が重複し、北側と北西側を大きく消失する。残る部分も土坑や柱穴群によって壊されている。円形周溝墓の周溝部と主体部を想定して調査を進めた。 **重複関係**：(新) SB8002～04、SK7929・31・8006・09・8142・43・51・52・54・57・60、ST7005・07・09。 **埋土**：主体部は黒色土（1層）が主体的で、南西側に黒褐色土（3層）と褐色土（2層）の堆積がある。周溝部北西側は2層が主体で、上部に1層がある。南東側は外壁側に3層があり、1層が主体となる。 **構造**：円形周溝墓と考える。主体部はN 69° Eに主軸を持つ不整な長方形であり、位置は周溝部中心より南西側に偏る。主体部は主軸長3.3mの副軸長1.8mと平面規模は大きいですが、深さは0.2mと浅い。周溝部は円形で、南西側1カ所が掘り残されている。規模は主体部主軸を基線として周溝部外側立ち上りで主軸長7.5m、副軸長7.8m。溝底面中央で6.8mの6.7m、溝内側立ち上りで6.1mの5.9mを測る。幅は北西部が広く1.0m、北東部0.6m、東部0.5m、南部0.7mとなる。深さも北西部が0.4mと深く、南東部は0.2mと浅い。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：形状と重複関係から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM8004** [遺構：図版 2-113]

**位置**：8区 I T 07・08 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。平面検出で溝跡や竪穴住居跡に壊されていることは明らかとなる。北側周溝部は古墳時代の竪穴住居跡床下にて検出した。南側以外の三方に直線的な溝跡を確認し、方形周溝墓の周溝部である可能性を考え、ここに報告する。 **重複関係**：(新) SB8019、SD8003。 **埋土**：検出面から溝底面が浅く、堆積状況は捉えにくい。北側周溝部では底面にIV層土を多く含むにぶい黄褐色土（7層）があり、その上にしまりのわるい暗褐色土（6層）がある。東側周溝部では黒褐色土（2層）の上にIV層土ブロックを含む暗褐色土（1層）がある。 **構造**：調査結果として東西に平行する溝跡2カ所とその直交方向に伸びる北側の溝跡1カ所を確認した。規模は現存長で全体として東西6.6m、南北3.9m。北側周溝部が長さ2.3mの幅0.4m、西側周溝部は1.4mの0.5m、東側周溝部は1.9mの0.4mを測る。溝底部までの深さは20cm内外と浅い。溝の途切れる部分が重複遺構に壊されていたり、溝自体が深く削平されていたりして本来掘り残した部分なのかどうかを判断できない。また周溝部の南側にあるSK8185は位置的に主体部を想定したが、平面形・断面形ともに不定形で、周溝部より非常に深さがあることから、周溝部との関係性は低いと考える。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：弥生時代後期と特定はできない。

### 3. 土坑墓・木棺墓

**SK3284** [遺構：図版 2-116、土器：図版 3-49・PL192]

**位置**：3区 III C 22・23 グリッド。 **検出**：IV層上面 **重複関係**：(新) SB3071・82、SK3072・3273。 **埋土**：暗褐色土主体。 **構造**：東側を大きく壊されているが、本来楕円形か長方形を呈する大形土坑である。

現存長は64cm、幅60cm、深さ46cmを測る。壁面はほぼ垂直で底面は平坦である。**出土遺物**：赤彩の壺00989の頸部より上が、やや斜めに傾いた状態で底部中央から出土している。ほかの破片が見られないことから意図的に切断して埋設した可能性が高い。土坑の大きさから人骨などは確認されていないが土坑墓と想定される。**時期**：出土土器と重複関係から弥生時代後期（箱清水式期）とする。

**SM4002** [遺構：図版 2-108, 110・PL29、ガラス製品：図版 3-211・PL278、金属製品：図版 3-258・PL292]

**位置**：4区 III D 03 グリッド。**検出**：IV層上面で検出。SB4021とST4011と重複する。新旧関係は平面検出で明らかである。本跡から北西約10mに弥生時代の墓坑SM4003・06・07が並ぶ。**重複関係**：(新)SB4021、ST4011。**埋土**：長軸方向に近い場所で観察。西側小口穴内に黒色土主体の極暗褐色土（5層）が堆積。掘り込み全体には黒褐色～極暗褐色土が不連続に堆積している。**構造**：床面の短辺部両側にある溝状掘り込みを小口痕と理解し、組合せ式箱形木棺を埋葬施設とする木棺墓と考える。木棺墓を設置したと考えられる部分に掘り込みなどの痕跡はない。主軸線はN 70°Wにあり、全体の掘り込みは長さ2.1m、幅1.3mの不整楕円形、木棺墓設置部分は小口痕を手掛かりに長さ1.9m、幅0.6mと推定する。西側小口穴は北側を消失して、現存長で幅0.25m、厚さ0.30m、床面からの深さ0.16m。東側小口穴は幅0.55m、厚さ0.25m、深さ0.28mである。小口内に木質や裏込材などはない。**出土遺物**：木棺墓設置部分と想定される範囲の北側東寄りに床面より8cmほど高い位置から鉄剣1点が出土している。鉄製剣部のみで茎部はない。剣の切先は主軸方向を向く。また埋土中からガラス小玉4点が出土している。人骨は出土していない。**時期**：本跡の形状と出土品から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM4003** [遺構：図版 2-108, 109・PL30、土器：図版 3-48・PL191]

**位置**：4区 II X 22 グリッド。**検出**：IV層上面で検出。西側が竪穴住居跡と重複。平面精査で新旧関係は明らかである。本跡の北側に主軸線をほぼ同じくする弥生時代後期の墓坑SM4006・07が1.4～1.6m間隔で並ぶ。**重複関係**：(新)SB4027。**埋土**：長軸方向と短軸方向で確認。底面には黒色土を主体とし、礫や軽石を多く含む褐色土（3層）が堆積し、上部には含有物の少ない黒褐色土（1層）が厚く堆積する。東側壁際のみ極暗褐色土（4層）、北側壁際の1層土下位にIV層土ブロック主体の橙色土（2層）が部分的にある。**構造**：平面は長軸をN 62°Wに持つ、不整な長楕円形である。現存長で長軸1.9m、幅1.4mを測る。底面はやや凹凸があり、整地されていない。**出土遺物**：西寄りの埋土内に完形の赤彩壺が、口縁部を斜め下側に向けて倒れた状態で出土している。床面から人骨などは出土していない。**時期**：出土土器から弥生時代後期末（箱清水式期末）から古墳時代前期と考える。

**SM4006** [遺構：図版 2-108, 109・PL30、金属製品：図版 3-266・PL295]

**位置**：4区 II X 22 グリッド。**検出**：IV層上面で検出。南にSM4003、北にSM4007と同時期の墓坑が並ぶ。**重複関係**：なし。**埋土**：全体の掘り込み部の堆積状況は不明である。北西側の小口痕には黒色土を主体とし、軽石を多く含む極暗褐色土（1層）が堆積し、南東側の小口痕には黒色土を主体とし、軽石や中礫を多く含む黒褐色土が堆積する。どちらも粘性はややあるが、しまりは悪い。**構造**：やや不整な長方形の掘り込みを持ち、床面短辺部両端に小口痕がある。掘り込みの形状から組合せ式箱形木棺を埋葬施設とする木棺墓と考える。床面は平坦である。長方形の落ち込み部は長軸をN 65°Wに持ち、長さ2.1m、幅0.7m、深さ0.07mを測る。北西側小口痕は幅0.57m、厚さ0.40m、床面からの深さ0.34m、南東側小口痕は順に0.58m、0.41m、0.19mを測る。小口痕の底面は丸みがあり、内部に木質や裏込材などはない。**出土遺物**：長方形落ち込みの北側東寄りに床面より7cmほど高い位置から鉄製品1点が出土し

ている。形状から鉄製鑿と推定される。刃部は主軸方向を向く。出土状況はSM4002の鉄剣と酷似する。人骨は出土していない。 **時期**：形態から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SM4007** [遺構：図版 2-108, 109・PL30]

**位置**：4区 II X 22 グリッド。 **検出**：IV層上面出検出。北側を掘立柱建物跡の柱穴に切られていることは平面精査で明らかである。 **重複関係**：(新) ST4004。 **埋土**：長軸方向と短軸方向で観察。西側から北側の底面から壁面に黒色土主体の軽石を多く含む極暗褐色土が部分的に堆積する。それ以外は粘性のややある、均質な黒褐色土が堆積する。 **構造**：南側に土坑墓 SM4003、木棺墓 SM4006 が並び、本跡はそれら2基と長軸方向が等しく、規模形態がSM4003に似るため、弥生時代後期の土坑墓と推測される。長軸をN 70° Wに持ち、平面は不整楕円形を呈す。北側は床下まで掘立柱建物跡の柱穴に壊されている。規模は長さ1.52m、幅0.97m、深さ0.13mを測る。床面中央に深さ17cmの楕円形をした落ち込みがある。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：他の墓坑との関連性から弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

#### 4. 土坑

時期を弥生時代後期と推定される土坑は少ない。推定する根拠は重複関係と出土遺物に則っているが、古墳時代以降の竪穴住居跡や溝跡などによって破壊されたり、消失したりしている当該期の土坑も少なからずあると思われる。また出土遺物が少なく、時期認定が困難な土坑も多い。そうした課題は残るが、ここでは当該期と推定される主な土坑について個別に記載する。

**SK0002** [遺構：図版 2-114・PL32]

**位置**：1区 III M 03・04 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。平面検出とトレンチ観察で弥生時代後期の竪穴住居跡2軒を切ることを確認。 **重複関係**：(旧) SB0004・37。(新) 中世小ピット。 **埋土**：底部は南側からの流入があり、中位からはほぼ水平に堆積する。全体にIV層土ブロックを含むが、底部付近の7・8層、中位の3層は特にIV層土を多く含む。人為的な埋没が考えられる。 **構造**：長さ236cm、幅212cm、深さ71cmを測る円形の大型土坑。断面は逆台形で底面は平坦である。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：底部付近から波状文の甕 06944 の底部破片が出土している。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0051** [遺構：図版 2-114・PL32]

**位置**：1区 III M 05 グリッド。 **検出**：IV層上面で土器上部が露出した状態で確認。 **重複関係**：(旧) SK0052。(新) ST0001。 **埋土**：土器下位はIV層土粒や黒褐色土が混在する。土器内は比較的均質な黒褐色土が堆積する。 **構造**：現存長は40cm、幅38cm、深さ17cmを測る。不整円形の小型土坑である。弥生時代後期の甕 06948 の胴下半部がやや傾いて埋設され、その南西側に同一甕の破片数点が胴下半部に接するように出土している。破片が出土した部分はST0001P3に切られているため、ピット掘削時に本跡土器上部が破壊され南西側に流れ落ちた可能性が高い。本来土器は正位に埋設されていたと考えられる。全体の構造からすると竪穴住居跡の土器埋設炉であるとも推測される。 **出土遺物**：埋設された甕 06948 は胴部上部に最大径を持つ、やや肩の張る器形。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0094** [遺構：図版 2-114・PL32、土器：図版 3-48・PL191]

**位置**：2区 III D 24 グリッド。 **検出**：IV層上面で土器が露出した状態で検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：土器内部に土器片を多く含む粘性のやや強い黒褐色土が堆積。 **構造**：現存長は40cm、幅40cm、

深さ5cmを測る。浅い円形土坑と推測される。壺胴部側辺の一部が横位の状態で出土している。上部は削平されていると考えられ、全体形は不明だが、壺一個体を埋設した土坑の可能性もある。 **出土遺物**：横位で出土した赤彩の壺01572と、その内部でみつかった破片と接合する。また本跡から南西に55mほど離れた位置にある、古墳時代以降の竪穴住居跡SB0153埋土出土破片とも接合する。SB0153は弥生時代後期のSB0049を切っていることから、本来SB0049埋土に含まれていたと考えられる。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0106** [遺構：図版2-114]

**位置**：2区 III I 12・13グリッド。 **検出**：IV層上面。弥生時代後期の竪穴住居跡SB0134と重複して検出。平面と断面観察から本跡が切ることを確認した。 **重複関係**：(旧)SB0134。 **埋土**：ほぼレンズ状堆積。底面にIV層土基質の黄褐色土が堆積し、下位から中位までIV層土を多く含み、上位は比較的均質な黒褐色土が堆積する。 **構造**：長さ240cm、幅146cm、深さ33cmを測る、南北に長い不整楕円形。断面形は半円形で底面は丸みを持つ。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：底部付近から赤彩の壺06951の頸部片2点が出土している。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0246** [遺構：図版2-114・PL32]

**位置**：1区 III H 05・10グリッド。 **検出**：IV層上面で単独で検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：底部に均質な黒色土が堆積。その上位にはIV層土を多く含む灰黄褐色土～褐灰色土が堆積する。上部の2層には弥生時代後期の土器片が多く出土している。 **構造**：長さ174cm、幅172cm、深さ68cmを測る、円形の大形土坑。断面は逆台形で、壁面は底面から丸みをもって立ち上る。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：底面の黒色土に種不明の動物骨片が2点出土する。埋土から土器片加工板2点出土する。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0310** [遺構：図版2-115、土器：図版3-49]

**位置**：1区 III I 21グリッド。 **検出**：IV層上面で単独で検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：底部から上位までIV層土ブロックを含む黒褐色土、上面に暗褐色土が堆積。 **構造**：長さ66cm、幅58cm、深さ18cmを測る、円形の小形土坑。断面形は逆台形。 **出土遺物**：弥生時代後期の甕01567や鉢01568、敲石21376が埋土上部からまとまって出土している。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

**SK0312** [遺構：図版2-115・PL32, 33]

**位置**：1区 III C 24グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。弥生時代後期の超大型竪穴住居跡SB0067との重複は平面精査と断面観察で確定している。 **重複関係**：(旧)SB0067。 **埋土**：埋没過程は少なくとも二段階である。底面から中位まで灰黄褐色から褐色土3～4層が堆積し、そのうち3～5層を再掘削した後、中央部から上位に1・2層が堆積する。2層はIV層土ブロックを含まない褐灰色土である。 **構造**：長さ208cm、幅196cm、深さ71cmを測る、円形の大形土坑。断面形は逆台形で底面は平坦である。底部から壁面の立ち上りには丸みをもつ。屋外の貯蔵穴か。同規模の土坑SK0315が東隣に並ぶ。 **出土遺物**：2層中から台石20992が出土している。 **時期**：SB0067埋没後、弥生時代後期弥生時代後期（箱清水式期後半）と考える。

**SK0315** [遺構：図版2-115・PL32, 33、土器：図版3-49・PL192]

**位置**：1区 III C 24 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。弥生時代後期の超大型竪穴住居跡 SB0067 との重複は平面精査と断面観察で確定している。 **重複関係**：(旧) SB0067。(新) SK0316。 **埋土**：堆積層は細かく分層されるが、埋没過程は大きくは二段階に分けられる。当初の堆積土は南壁際にある15～19層で、底面から上部までほぼ水平に堆積する。底部を覆う19層と上部の15層はIV層土ブロック主体で、16～18層は比較的均質な褐色～灰褐色土である。次にその土層を全て切った状態で、再びレンズ状に細かな堆積層が見られる。底面の北壁際には砂質土が流れ込んでいる。それ以外は比較的均質な黒褐色土とIV層土を多く含む、にぶい黄褐色土、暗褐色土が交互に堆積している。 **構造**：長さ174cm、幅194cm、深さ81cmを測る、円形の大形土坑である。埋土の観察から、一回埋没した後、再度底部まで掘削されていることが分かる。二度目の掘削後は人為的に埋められている可能性が高い。 **出土遺物**：中位の3～7層中から弥生時代後期の赤彩された壺 01565 と赤彩された大形の鉢 01566、自然礫が出土している。壺は底部のみ正位、鉢は七割程遺存して逆位で出土している。 **時期**：SB0067埋没後、弥生時代後期（箱清水式期後半）と考える。

**SK0358** [遺構：図版 2-115・PL33]

**位置**：1区 III C 16 グリッド。 **検出**：IV層上面。複数の遺構が重複するため、平面精査と断面観察で前後関係を確認した。 **重複関係**：(旧) SB0110。(新) SB0114、SD0004。 **埋土**：底面に薄く黒褐色土が堆積し、中位まで灰黄褐色土6層が厚く堆積する。その後5～1層が中央部の中位から上部に堆積する。 **構造**：長さ156cm、幅146cm、深さ99cmを測る、不整形の大形土坑。底面は丸みを持ち、断面形は不整半円形である。埋土の観察から、埋没後に中央部が中位の深さまで再掘削されている可能性がある。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：底面付近から弥生時代後期の大きめの破片が複数出土し、埋土中から弥生時代後期の土器片が多く出土している。 **時期**：SB0110を切ることから弥生時代後期（箱清水式期後半）とする。

**SK3018** [遺構：図版 2-116・PL33、土器：図版 3-49]

**位置**：3区 III C 1 グリッド。 **検出**：IV層上面で単独で検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：ほぼレンズ状に堆積するが、底部から下位の7・8層堆積後、南側中位の壁際には5・6層が前の二層を切って堆積している。暗褐色～黒褐色土主体である。 **構造**：長さ160cm、幅138cm、深さ77cmを測る、南北に長い楕円形の大形土坑である。断面形は逆台形で底面は平坦である。壁面は底面から丸みを持って立ち上る。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：底部を覆う8層から弥生時代後期の赤彩された壺 01570 の頸部付近の大きな破片が出土している。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）とする。

**SK3246** [遺構：図版 2-116、土器：図版 3-49]

**位置**：3区 III C 03 グリッド。 **検出**：IV層上面で検出。平面精査で複数の遺構に切られていることを確認する。 **重複関係**：(新) SD3002、SK3245。 **埋土**：底部から中位にIV層土ブロックを含む黒褐色土、中位から上位に比較的均質な黒褐色土が堆積する。 **構造**：南側をSD3002に底部まで大きく壊されている。現存長は134cm、幅68cm、深さ60cmを測る、不整形の大形土坑。本来は円形に近い平面形と考えられ、断面形は逆台形である。底面は平坦で、壁面は丸みをもって立ち上る。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：2層から弥生時代後期の波状文の甕片が出土している。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）とする。

**SK4036** [遺構：図版 2-116・PL147]

**位置**：4区 II X 04 グリッド。 **検出**：IV層上面で単独で検出。 **重複関係**：なし。 **埋土**：全体に均質な黒褐色土が堆積する。壁際に4・3層が堆積し、底部中央から上部に2・1層が堆積する。 **構造**：現存長210cm、幅200cm、深さ50cmを測る、円形の大形土坑である。断面形は皿状。底面に浅いピット状の落ち込みがある。底面と壁面の境界はない。 **出土遺物**：台石20883が埋土中から出土している。 **時期**：埋土の土質から弥生時代後期の土坑と推定する。

SK4145 [遺構：図版2-116・PL34、土器：図版3-49・PL192]

**位置**：4区 III C05・10 グリッド。 **検出**：IV層上面で単独で検出する。 **重複関係**：なし。 **埋土**：底面に暗褐色土が薄く堆積する。下位から上位までIV層土を主体とする2層が厚く堆積し、上部に黒褐色土の1層が堆積する。2層と壁際の3～5層は人為的な堆積と考えられる。 **構造**：長さ182cm、幅156cm、深さ69cmを測る、隅丸長方形の大形土坑である。底面は平坦で、壁面は底面から丸みを持って繋がり、ほぼ垂直に立ち上がる。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：埋土中から弥生時代後期の土器片が比較的多く出土する。壺00869は胴部中央に最大径を持ち、頸部に櫛描横線文、胴上半に波状文があり、櫛描の縦長楕円文が頸部から胴部上半に4単位ある特殊な文様を持つ。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

SK4162 [遺構：図版2-117・PL34]

**位置**：4区 III D 07 グリッド。 **検出**：IV層上面。平安時代の竪穴住居SB4058床下で西側を確認する。 **重複関係**：(旧)SK4257。(新)SB4058。 **埋土**：堆積過程は大きく二段階に分けられる。西側テラス部に堆積する4・5層を切るように1・2・3層が堆積する。 **構造**：長さ250cm、幅216cm、深さ66cmを測り、西側に三日月形のテラス部を持つ、楕円形の大形土坑である。埋土観察から本跡は再掘削されていることが明らかである。当初はテラス部を底面とする円形土坑であり、その埋没後やや東にずれて再度同規模の円形土坑が掘削されたと理解される。掘削の時間差は明らかではなく、調査上同一土坑として報告するが、2基の土坑とも考えられる。屋外の貯蔵穴か。 **出土遺物**：弥生時代後期の土器片以外の、上面から出土した平安時代の土器片は、本跡を切るSB4058帰属と想定される。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

SK4259 [遺構：図版2-117・PL34、土器：図版3-49, 52]

**位置**：4区 III D06 グリッド。 **検出**：IV層上面。複数の遺構と重複する。平面精査と断面観察で新旧関係を判断した。 **重複関係**：(旧)SB4067。(新)SB4058・63、SK4265。 **埋土**：底面に暗褐色土4層が堆積。その上部に暗褐色土2層が厚く堆積し、北側にはIV層ブロックを多く含む褐色土3層が部分的にみられる。上部は黒褐色土1層が全体を覆う。3層以外全体に均質で自然堆積と判断される。 **構造**：長さ214cm、幅128cm、深さ90cmを測る、楕円形の大形土坑である。断面形は逆台形で上部がやや外側に開く。底面は平坦で、壁面との境界は丸みを持つ。 **出土遺物**：底面から弥生時代後期の大きな土器片が出土している。また埋土中から弥生時代後期の甕片と粗製で小形の鉢片が出土している。甕00874は波状文施文で内面が赤彩されている。鉢00875は小形で輪積痕跡が明瞭な粗製品である。 **時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

SK4301 [遺構：図版2-117・PL33]

**位置**：4区 II S 18・19 グリッド。 **検出**：IV層上面。弥生時代後期の大溝SD3006・4006との重複関係は断面観察で明らかにした。 **重複関係**：(旧)SD3006・4006。 **埋土**：暗褐色土が堆積。四層に分層する。

底面から下位に堆積する3・4層は北側からのIV層土などの流れ込みがあるが、中位から上位の1・2層は比較的均質である。土層断面に記録はないが、底面の4層には灰と焼土が認められる。**構造**：長さ130cm、幅126cm、深さ110cmを測る、円形の大形土坑である。断面形は基本的に逆台形で、平坦な底面の中央は円筒状に窪む。**出土遺物**：なし。**時期**：形状と埋土から弥生時代後期（箱清水式期）と想定しているが、奈良時代の大形土坑とも形態が似ているため、該期に属する可能性もある。

**SK4302** [遺構：図版2-117]

**位置**：4区 II S 18 グリッド。**検出**：IV層上面。弥生時代後期の大溝SD3006・4006との重複関係は断面観察で明らかにした。**重複関係**：(旧)SD3006・4006。**埋土**：暗褐色土が堆積。土質から四層に分総する。底面には比較的均質な4層土があり、下位から上位に3・2層が堆積する。1層は2層を切るように南側上位に堆積する。**構造**：長さ150cm、幅126cm、深さ112cmを測る東西に長い楕円形の大形土坑である。断面形は有段形となる。当初逆台形状に掘削し、底面を円筒状に掘削している。**出土遺物**：なし。**時期**：形状と埋土から弥生時代後期（箱清水式期）と想定しているが、奈良時代の大形土坑とも形態が似ているため、該期に属する可能性もある。

## 5. 遺物集中

**SQ0001** [遺構：図版2-113、土器：図版3-48]

**位置**：1区 III I 16 グリッド。**検出**：IV層上面にて、住居跡検出時に、住居跡埋土上面にて炭化物や土器片の集中箇所を確認した。分布範囲の直下には弥生時代後期の住居跡3軒が重複している。全ての住居跡埋没後に本跡が形成されたと判断した。**重複関係**：(旧)SB0017・25・61。(新)SK0260・304・305。**埋土**：全体に炭化物を含み、最上部には炭化物層とシルト質土と薄い層状に堆積する。炭化物のなかには焼けた動物骨片や土器片が混在する。**構造**：炭化物範囲は不整な楕円形状に広がる。明確な掘方は持たず、底面中央部がやや窪み、全体に南東方向に落ち込んでいる。**出土遺物**：弥生時代後期の土器片と焼けた動物骨片が出土する。**時期**：弥生時代後期（箱清水式期）と考える。

## 6. 溝跡

弥生時代後期と認定される溝は1条である。調査区の中央からやや南寄り調査区を東西に横断する、規模の大きな溝跡である。既に埋没している弥生時代後期前半期の住居群を壊して計画的に掘削されている。集落形成や変遷を考察する上で非常に重要な意味を持つ溝跡といえる。以下に詳細を記す。

**SD3006・4006** [遺構：図版2-118～121・PL1, 34～36、土器：図版3-4, 49, 50, 195・PL164, 192, 193、土製品：図版3-57・PL195、石器：図版3-203, 207, 231・PL276, 277、金属製品：図版3-263・PL294]

**位置**：3・4区 II R 17・18・19・20、S 16・17・18・19 グリッド。

**検出**：IV層上面にて検出。調査工程上、3区、4区の順に作業を進める。3区では古墳時代から中世の遺構を調査する段階で、調査区4区寄り帯状に広がる砂質土を確認する。調査区西壁際のトレンチ調査と、先行トレンチ調査から東西に延びる溝跡と判断し、SD3006と登録し、調査を進めた。4区では平面精査で溝跡と判断し、SD4006と登録。他の遺構と重複する部分にはトレンチ調査などを付加し、正確な形状と遺構間の前後関係の把握に努めた。3区、4区それぞれに調査を進め、最終的に一本に繋がる溝跡と確定した。調査段階で出土遺物は各登録番号で取上げているため、整理段階で登録番号をSD3006・4006と統合した。

**重複関係**：(旧) SB3029・36・4016・70。すでに埋没した弥生時代後期の竪穴住居跡4軒(上記)を壊して掘削されている。(新) SB3031・32・34・42・57・4015・41・64、SK3069・4230・4300～03、SD4004・05。そのうちSK4301・02の大形土坑2基の時期は弥生時代後期の可能性がある。

**埋土**：堆積時期は大きく三段階に分かれる。一段階として、底部と底部壁際にはIV層土ブロックを多く含むにぶい黄褐色土～褐色土シルト(19～23層)が堆積する。堆積方向については東側(A-B、C-D断面)では南北にほとんど差がみられないが、西側(E-F、G-H断面)では北側の堆積が厚くなる。

二段階として土壌化した褐色シルト(6～18層)が溝内全体に厚く堆積する。レンズ状堆積であり、溝跡の両側から堆積したと考えられる。なお西壁(G-H断面)のみ北方向からの流入が多く、上部に堆積層の乱れがある。本段階の土質は竪穴住居跡の埋土と似て、周囲の土により段階的に埋没した段階と考えられる。

三段階として埋土最上部には砂層土や砂質シルト(1～5層)が堆積している。その分布は東側が厚く、西側に向かうに従い薄くなって途絶え、西壁(G-H断面)には観察されない。こうした堆積状況から溝跡が完全に、あるいは若干の窪みを残す程度埋没した段階で地形的に上方の東側から自然流水が埋土を浸食し、そこに砂層土や砂質シルトを残していった状況が推測される。

**構造**：調査区をほぼ直線的に東西に横断する。調査部分の長さは63.6m。東から西に向かう縦断勾配は2.3%で、検出面の地形傾斜とほぼ同数値である。溝の断面形状は通して逆台形で、その規模は上端幅3.2～3.4m、下端幅1.7～1.8m、深さ0.97～1.24mである。

**出土遺物**：溝全体にわたって、2段階目の埋土から弥生時代後期の土器が多数出土した。完形の個体は少ないが、いずれも磨滅はなく、ある程度のまとまりをもって出土している。土器の器種としては小型赤彩土器が目立つ。重量割合でみると、溝埋土の総土器量のうち小型赤彩土器は10%を占めている。因みに土器を多量出土した住居跡(SB4002)では、小型赤彩土器は0.8%しかない。他の住居跡でも同程度の割合と考えられ、溝からの小型赤彩土器の出土割合が極めて突出している。器種は壺、甕、高坏、鉢があり、いずれも住居跡から出土する一般的な土器の4分の1以下の大きさであるが、形や文様は丁寧に整えられ、赤く磨かれている。溝の東側では広範囲にわたって、地山主体の褐色土ブロックが北側から溝内部に向かって堆積している。そして、褐色土ブロックより上位に小型赤彩土器が分布する特徴がある。褐色土ブロックは溝北側から崩落または流れ込んだような堆積状況を示している。褐色土ブロックと小型赤彩土器の調査状況は、溝の掘削土を溝北側の肩部に堤状に積み上げていたこと、その付近で小型赤彩土器を用いた祭祀行為が執行されていたことなどを推察させる。

**時期**：重複関係と出土土器より、弥生時代後期(箱清水式期後半)に掘削、埋没したと考えられる。

## 第3節 遺物

### 1. 概観

前節に記した弥生時代後期の遺構内だけでなく、それらを壊している古墳時代以降の遺構埋土、検出面から当該期の遺物が多数出土している。その大半は弥生時代後期の土器で、土製品、石器・石製品の出土量も多い。更に脆弱な金属製品、骨製品や骨類が比較的良好な残存状態でみつまっている。これは地理的に高燥な台地上に立地する遺跡環境が好影響を与えているといえよう。以下に遺物の種類ごとに記載する。紙幅の都合上、全てを網羅した記述はできないため、個々の遺物については付表及びDVDに収録した観察表をご覧ください。

## 2. 土器

### (1) 弥生時代中期の土器 [図版 3-5]

出土量は少なく、小破片が主体をなす。当該期の遺構はなく、すべて他時期の遺構や表土、検出作業中に出土している。器種は壺と甕が認められる。観察表は DVD に収録した。

### (2) 弥生時代後期の土器 [図版 3-6 ~ 53・PL165 ~ 195]

出土量は非常に多い。器種は壺、甕、台付甕、甑、鉢、高杯、蓋、小型土器、ミニチュア土器と多様である。竪穴住居跡では炉体土器として再利用される例や床面に据え置かれたような例、埋土下層に一括廃棄されるような例など、遺構の構造や廃棄行為などを考察し得る出土状態を示す場合もみられる。人形土器は破片資料であるが、同じ中部横断自動車道関連で調査した佐久市西一里塚遺跡群出土品との関連性が問われる（埋文センター 2012）。土器について、詳細は付表 5 にまとめた。人形土器の観察表は DVD に収録している。ここでは特記すべき個体についてのみ記載する。

他地域からの搬入あるいは影響を受けた可能性の考えられる土器がある。00615 (SD3006・4006) は縄文施文された小型甕である。口辺部から頸部が残存する。頸部はくの字状に屈曲し、口辺部は短くやや外反する。外面は口縁部まで単節 LR 縄文が施文され、粘土帯積上げ痕が残る。頸部欠損部は粘土帯の接合面にあたる。内面はナデ整形後、丁寧に横ミガキされている。内面のみ赤色塗彩が施されている可能性がある。胎土は他の甕類と比べ、極めて緻密である。赤井戸式あるいは吉ヶ谷式土器の範ちゅうに入る甕型土器と理解される。西近津遺跡群では本調査区から南西 400 m の上大豆塚遺跡にて、弥生時代後期後半とされる竪穴住居跡から同型式の小型甕が出土している（佐久市教委 2014b）。佐久地方ではこれまでに佐久市北部の 5 遺跡で同系統の土器 7 点が確認されているに過ぎず、関東地方北部からの搬入品と理解されている（久保 2014）。また、01269 (SB0047) や 01184 (SB0067)、00772 (SB4002) は赤彩された小型の壺であり、口縁部が有段で北陸地方の影響が考えられる土器である。

高杯には当該期の佐久地域では類例の少ない特殊な器形がある。01457 (SB01457) は赤彩された高杯脚部の破片である。杯部と脚部の最下端部を欠く。杯部接合部直下の脚柱部には低い突帯上を細い沈線が 1 条巡る。脚裾部は大きく広がり、下端部は内側に強く屈曲する。透かし孔は 5 カ所と考えられ、面取りされた突起状の小脚が同じく 5 カ所ある。また脚部裏面中央には判読不明の記号文が焼成前に線刻されている。杯部と最下端部を欠くため全体形を捉えにくい。鳥取県青谷上寺地遺跡にある弥生時代後期の木製高杯のうち、脚部 I と分類される脚部下面周縁に突起を作り出した器形に似る（鳥取県埋文センター 2005）。土器胎土は箱清水式土器よりやや白っぽい色調である。01449 (SB0061B) と 01515 (SB0019) にも杯部と脚部の接合部直下にある低い突帯上を細い沈線が 1 条巡る。

00705 (SB4067) はやや大型の高杯脚部である。高脚で裾部がやや外反する脚部内側に、一回りほど小径で短い脚部が接合され、二段の脚部を呈する。上段は箱清水式期では一般的な脚部であり、下段は当該期の甕口辺部を逆位にしたような形状である。赤彩は上段外面全体と下段下側外面に施され、横および斜め上方から見た際に隠れてしまう接合部にはない。類例としては碓氷峠を越えた群馬県松井田町人見大谷津遺跡の古墳時代前期とされる竪穴住居跡 16 号住居跡出土の完形で赤彩された高杯がある（松井田町教委 2002）。

また口縁部が二段あるいは二重となる可能性が高い高杯に 00373 (SB8027) がある。破片が部分的で接合しないため図化掲載されていない。接合しない破片 6 片からなる。杯部の口縁部から上半部、脚部の中位部が残存する。杯部は大きく開き、口縁部は内側に屈曲して短く立ち上る。屈曲部外面には外反する鐙

部が全周する。脚部は長脚で、縦長の透かし孔がある。透かし孔の形状と数は不明である。杯部内外面、脚部外面は丁寧なミガキ調整で赤色塗彩が施されている。脚部内面は横ハケナデ調整される。杯部の胴部から口縁部、鏝部の破断面を観察では杯胴部から鏝部が一体成形され、内側に屈曲する口縁部を接合した後にナデ、ミガキ調整されていることがわかる。このような口縁部の成形方法と形状は、天地方向が逆転するものの、西一里塚遺跡群の弥生時代後期とされる竪穴住居跡 SB10 出土の蓋型土器受部と似ている（埋文センター 2012）。

壺では 06920（SB3069）の口縁部内面に疑似縄文が施されている。詳細に観察した結果、文様原体は縄文ではなく、オオバコ穂先と考えられる。口縁部内面のみオオバコの穂先を下にして回転施文し、施文部下位と外面は赤彩されている（PL181 に部分拡大写真あり）。類例としては佐久市森平遺跡出土の栗林 3 式とされる壺口縁部と口辺部の外面にオオバコの穂先を原体とした文様があり、「オオバコ文土器」と称されている（埋文センター 2014b）。

### (3) ミニチュア土器 [図版 3-52・PL194]

42 点をミニチュア土器とした。そのなかには日常使用する土器を忠実に小型化した土器と形状や文様を省略した土器、日常使用する器種にはない小形土器がある。日常使用する土器を小型化した土器には甕形（00941・00736・00807・00270 など）、鉢形（00098・00108・00519・00835 など）がある。形状と文様を省略した土器には甕形（03426・00888 など）、鉢形（03422・01579 など）、高杯形（01574 など）がある。また日常使用する器種にない土器として、手づくねの鉢形（00090・03419・03421 など）がある。この土器は平底で胴部が短く開く器形で、赤彩はされず、焼成は良好であるが胎土は砂礫が目立つ場合が多い。内外面ともに粘土紐の積上げ痕跡と指オサエ痕跡をあえて明瞭に残している。粘土紐は螺旋状に積み上げている場合が多い。胎土や調整痕跡は次項に記す人形土器とよく似ている。

### (4) 人形土器 [図版 3-53・PL195]

人の形を模した赤彩土器である。今回の調査では 18 点出土している。本遺跡の南 2km に位置する佐久市西一里塚遺跡群では中部横断自動車道建設に伴う発掘調査で弥生時代後期に属する全体像のわかる赤彩された人形土器が出土している（埋文センター 2012）。今回はすべて破片であるが、西一里塚遺跡群とはほぼ同類の人形土器と理解している。胴体部（胴部）破片が最も多く 14 点、次に腕 2 点、頭部（鼻のみ）1 点、底部 1 点である。出土状況は弥生時代後期の竪穴住居跡ばかりではなく、すべて破片の状態で見つかっている。小破片が多く同一個体か否か判断できない場合が多いが、集落内で少なくとも 6 個体以上は製作または利用されていたと想定される。以下に個々の特徴を記す。

10003 は胴体部で最も残りのよい個体で、胴部上半部で全周する。残存高 6cm、胴部最大径 8.6cm を測る。腹側が大きく膨らみ、背側は直立気味で、肩は張らず、中心より背側にずれた位置に左右の腕がつく。腕は欠損するが、右腕基部の状況から斜め上方に腕を広げている状況が読み取れる。腹側の上部には幅 2cm ほどの穴が空いている。上部が欠損しているため穴の全体形状は不明であるが、残存する下部は歪んだ弧状を呈し、端部がごくわずかに外側に張り出している。この穴は西一里塚遺跡群の人形土器における、胸部の開口部になるのか、群馬県有馬遺跡の人形土器における口部となるのか確定できない。開口部は腕部より上にあり、有馬遺跡例と共通するが、有馬遺跡例のように唇部を突出させて強調していない。西一里塚遺跡群例は開口部の下部が欠損していて本例と比較できない。製作方法をみると焼成は良好であるが胎土は砂礫が目立つ場合が多い。内面の仕上げは極めて粗雑で、輪積み痕跡や指オサエ痕跡が明瞭に残り、腕部装着には円形の穴を開け、粘土紐を整形した腕を差し込んでいる状況がわかる。外面にはミガキ調整が

施されるが、指などのオサエ痕跡も残り、赤色塗彩の発色もあまりよくない。通常の赤彩土器にみられる緻密な調整技法を用いていない点は人形土器全体に共通する。10005も10003と同規模の胴部破片で、よく似た開口部（下部）を持つ。10006は胴部の小破片で、上記2例よりやや下がった位置に、丸みのある開口部がみられる。10002は小ぶりの右腕部の破片で、断面は略円形で、先端が平らに加工され手指が3本付く。10004は大ぶりの右腕部で、断面は不整楕円形で、先端はやや平たく加工されているが、手指部は欠損する。10017は頭部の鼻が剥落した破片である。鼻筋が明瞭で先端は欠けるが二つの鼻孔が確認できる。鼻孔は貫通していない。よく似た鼻を持つ頭部（顔面部）破片が佐久市中佐都小学校に保管展示されている（堤2012）。10010は人形土器の底部と考えられる。平底でやや丸みをもって胴部につながる。

### 3. 土製品

実用の紡織具として土製紡錘車の紡輪部がある。装身具や祭祀具としては勾玉、丸玉、匙形土製品が出土している。このほか、土器片を再加工している土器片加工板が大量に出土している。詳細は表にまとめた。

#### (1) 匙形土製品 [図版3-54・PL194]

弥生時代後期の竪穴住居跡SB0106から1点（10020）出土している。柄部はすべて欠損している。匙部は平面楕円形で椀状に深い。内面はナデ調整、外面は細い縦ミガキ調整が密にみられる。当該期の土器調整とよく似る。

#### (2) 土製紡錘車 [図版3-54・PL194]

紡錘車の紡輪部である。土器同様に焼成されている。弥生時代後期に該当すると推察される9点のうち、3点が焼成前に赤彩されている。9点ともに直径4～6cmの平面円板状で、中央に紡軸を刺すための穿孔がある。孔径は0.6cmほどで、すべて焼成前に穿かれている。上面は平滑で下面は中心部が膨らむ。特に10033は断面形が扁平な半円形に近い形状である。完形品の重量は20～34gで古墳時代以降の土製紡錘車にくらべると径も小さく軽量である。調整は全体にミガキ調整で、穿孔部内はナデ調整である。

#### (3) 土製玉類 [図版3-54・PL194]

弥生時代後期に属すると考えられる土製玉類は4点である。形状は勾玉形3点と丸玉形1点で、すべて完形品である。勾玉形のうち2点（10387・10388）は長さ23mmとほぼ同規模の小形品で、外面調整がやや粗く、10388は焼成時のひび割れが目立つ。10287は長さ34mmとやや大きく、尾部が二股に分かれている。くの字状に屈曲し尾部に対して頭部が大きい。頭部は丸く、腹部下位から二股に分かれる。分かれた尾部はどちらも断面円形で接している。小形品の2点に比べて調整は全体に丁寧なナデ調整である。頭部の穿孔部は不整な楕円形で、一方から細い串などで焼成前に穿かれていることがわかる。丸玉形は直径11mmほどでやや不整な丸形で中央部に穿孔がある。孔部は二股の勾玉形同様に一方から穿かれている痕跡が残る。土製玉類は紡錘車や匙形に比べて、調整、焼成ともにやや粗雑な印象がみられる。

#### (4) 土器片加工板 [図版3-55～57・PL195]

前章に記した縄文時代の土製円板同様に、土器片を再加工している土製品である。平面形状が多様であること、土器片を素材としていることを考慮して土器片加工板と呼ぶこととしたい。なお埋文センターが調査した長野市篠ノ井遺跡群（弥生時代後期）では土器片製品、佐久市森平遺跡（弥生時代中期後半）では土器片加工円板と呼称している（埋文センター1997b・2014b）。

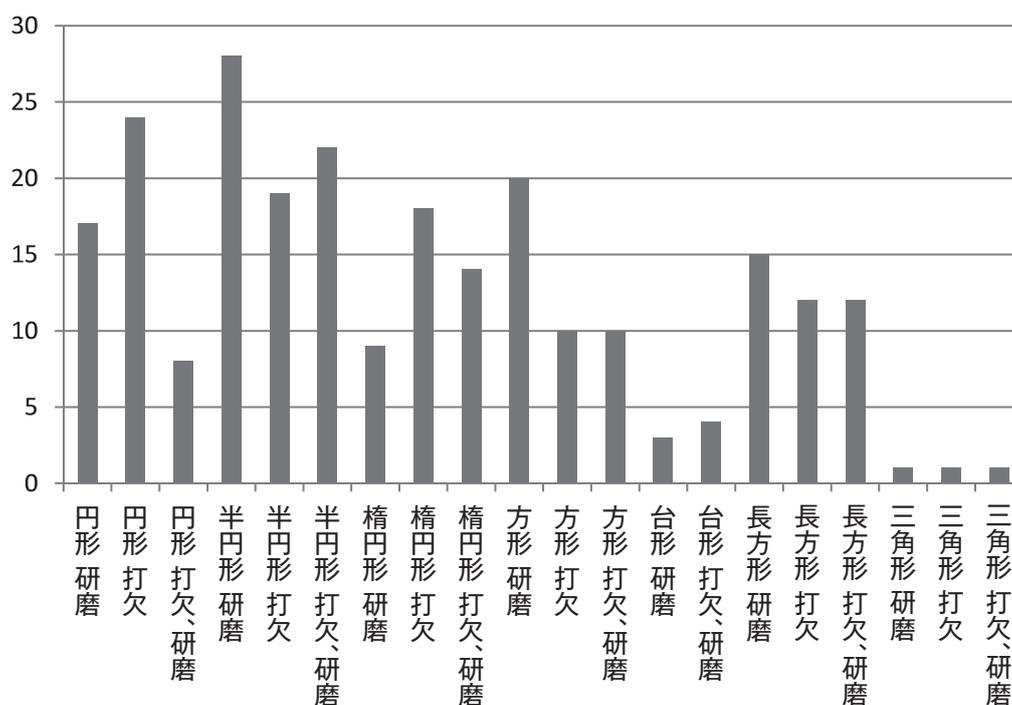
今回の調査では、弥生時代後期の土器を再加工または再利用した土器片加工板は376点出土している。

当該期の土器と同様に遺構内ばかりではなく、古墳時代以降の遺構内や検出作業中からも出土している。弥生時代後期の竪穴住居跡で出土量が多い住居跡は大量の土器が廃棄されたSB4002で37点、超大型竪穴住居跡のSB0067で17点、同SB0110で12点である。使用される土器としては壺が6割以上、特に赤彩壺が5割以上を占めている。甕は2割程度、壺以外の赤彩土器が1割以上と赤彩された土器を使用する割合が多い。使用部位としては完形品51点のうち、胴部が48点と圧倒的であり、口辺部が3点、底部は使用されていない。平面形状が確認できる248点の内訳は半円形69点、円形49点、楕円形41点、方形40点、長方形39点、台形7点、三角形3点である。周縁の加工あるいは何らかの作業による痕跡は打ち欠き（敲打）と研磨（摩耗）がある。打ち欠き、研磨のみ残る場合と両者ともに残る場合がある（第9図）。個体の大きさと加工（作業）痕跡との関係をみると打ち欠き（敲打）のみの資料より打ち欠きと研磨（摩耗）の両者が残る資料、研磨のみ残る資料の方が、大きさのバラつきが少なくなり、研磨のみ残る資料は長さが3～5cmの範囲にまとまる傾向が強いことがわかる（第10図）。

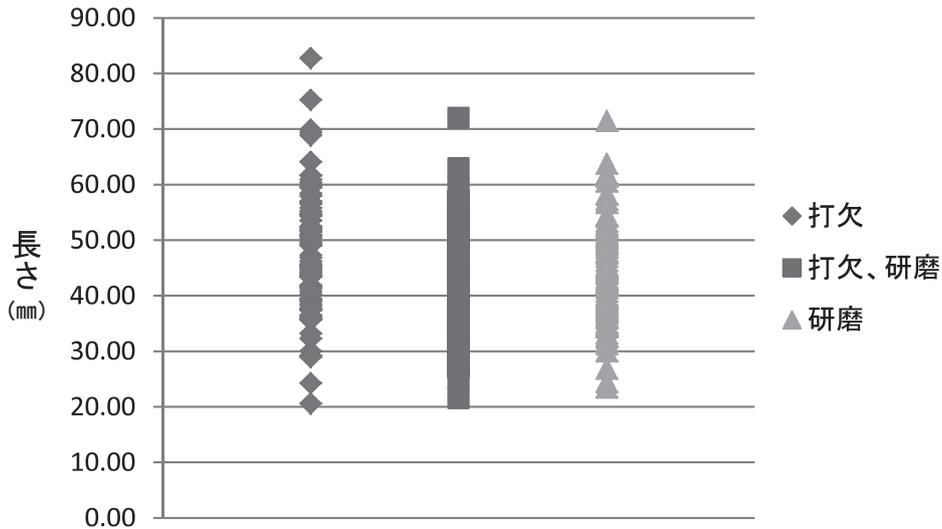
また各個体を観察すると、当初の平面形から明らかに再加工あるいは追加作業によって最終的な形状が変わっている資料が複数確認される。形状変化の考えられる53点のうち、残存率8割以上の29点について当初形状と最終形状をみると、当初形状が円形の場合が最も多く、円形から最終形状が半円形に変化10点、長方形7点、方形6点、三角形1点、台形1点、楕円形1点である。長方形から楕円形に変化した資料も3点ある。これらの資料すべてが周縁の研磨（摩耗）によって、新たな面が作出されていることが特筆される。

周縁の加工（作業）痕跡以外に穿孔痕跡が観察される資料が13点ある。そのうち貫通している資料は2点のみで、他は表面や裏面の中央付近に棒状品による研磨（摩耗）痕跡として断面半円形に抉られた部分が残る。森平遺跡出土品についても、穿孔のない個体、穿孔貫通する個体、未貫通の個体が併存している。

この土器片加工板の使用目的については前述の篠ノ井遺跡群において断定はしていないが、加工具としての利用を想定している。縄文時代中期の土製円板については東京都多摩ニュータウンNo.471遺跡出土品



第9図 土器片加工板の平面形状と周縁加工



第10図 土器片加工板の大きさと周縁加工

について骨角器を対象とした研磨具を想定する研究がある（小栗1990）。同じ縄文時代中期の茨城県於下貝塚出土品については穿孔痕跡についても対象物端部を研磨加工する際の痕跡と捉えている（柳澤1992）。

本跡出土品についても研磨具としての利用を想定しておく。当初形状と最終形状が変化している個体は、研磨作業による消耗した結果と理解する。土器片は粘土や砂礫などの砥料を豊富に含み、対象物に合わせた粗密差の選択や形状加工が容易であることから、時代を問わず研磨具として再利用されていったことが想定される。

縄文時代から弥生時代中期後半までは土製円板、または土器片加工円板と呼称されるように平面形が円形や円形に近い場合が多いが、弥生時代後期になると殊に千曲川流域の集落では半円形や方形、長方形といった周縁に平坦部をもつ個体が多くみられる。研磨具としての機能を考えると、集落内における金属製品の再加工や修繕など、新たな対象物への対応としての変化も推察される。

#### (5) 不明土製品 [図版3-53]

用途不明な土製品が3点ある。すべて焼成前に赤彩されている。そのうち2点（06936・06960）は平面台形で断面は板状を呈す小形品である。2点は形状規模ともよく似ている。上下2面は平滑で、側面のうち3面は面取り加工が施され、1面は剥落面である。赤彩は上面全面と側辺部の上側に限られ、下面にはない。土器や土製品の把手や耳部などの剥落した部分である可能性が高い。01575は縦長の板状で外面と側面に赤彩がある。これも把手部の一部と考えられる。

### 4. 石器・石製品

石器としては磨製石鏃、磨製石斧、敲石、磨石、台石がある。石製品としては勾玉や管玉などの玉類、砥石がある。詳細は表にまとめた。

#### (1) 磨製石鏃 [図版3-207・PL277]

7点出土している。石材はすべて粘板岩で、色調は暗緑色・緑色、黒色に分かれる。全体形は長さに対し、幅が広いタイプと、幅が狭く細長いタイプがある。基部は弧状に浅く窪み軸線上に穿孔が1カ所ある。断面形は扁平な紡錘形で中軸線上に稜線がある個体は複数あるが、20648以外は明瞭ではない。全体に研磨調整の痕跡がよく残る。なお20649は黒色粘板岩の破片であり、全体に研磨痕跡が残る。磨製石鏃の素材

あるいは未製品の可能性がある。

## (2) 磨製石斧 [図版 3-207 ~ 209・PL277, 278]

16点出土している。すべて両刃形で、石材は火成岩、変成岩が主体を成す。大形で胴部断面形が楕円形または隅丸長方形のいわゆる太型蛤刃石斧と、大形から小形まで法量差があり、胴部断面形が偏平な長方形の石斧がある。後者のうち、20652は変性作用進む流紋岩製で、刃部には使用による細かな剥離がみられ、胴部正面にねずみ歯錐によってできるような穿孔痕が2カ所並んでいる。穿孔痕はどちらも浅く未貫通である。20658は長さ2.3cm、重量2.2gと非常に小さく、全体を丁寧に研磨調整されている。石材は透緑閃石岩の可能性が高い。なお太型蛤刃石斧の欠損品を再利用した、石槌とも呼称される磨石も出土している(21082・105)。

## (3) みがき石 [図版 3-210・PL278]

弥生時代後期に属する、対象物を磨く(polish)作業に使用されることを想定される石器である。擦る(mill)、研ぐ(whet)とは違い、艶や光沢を出したり、滑らかにしたりする作業が考えられる。石材としては小ぶりで球形や偏平の硬質なチャートなどの河原礫を選択する。指4本で摘める大きさが多く、指2本でしか摘めない小形品もある。表面は光沢があり、細かな線状痕が観察される。作業の内容や進行から、機能面間に稜線が明瞭となる個体もある(21022・035・050・059)。対象物によって大きさや石材、形状が異なる可能性が考えられる。対象物としては土器や皮革製品などが想定される。21050には部分的にベンガラと思われる赤色顔料が付着していることから、赤彩土器製作に使用する研磨具の可能性が高い。

## (4) 石製玉類 [図版 3-211・PL278]

弥生時代後期に属するのは勾玉(20040)、垂飾り(20058)、管玉(20031・20032)、丸玉(20043)がある。勾玉は埋土内に大量の土器や石器が廃棄された状態で出土したSB4002埋土内から出土している。コの字形で頭部がやや大きい。色調は琥珀色で、斑状に黄褐色と暗茶褐色が混ざる。柔らかい石材である。

## (5) 小形砥石 [図版 3-221 ~ 222・PL281, 282]

手持ち砥石と想定される石器である。弥生時代から古代、中世の遺構や検出作業から出土している。弥生時代の遺構から出土した15点を図化した(20655・673・674・685・693 ~ 696・705・709 ~ 711・713・720・734)。形状には板状と柱状があり、石材は軽石と砂岩である。SB4002出土の4点(20709 ~ 711・713)のうち、20711はやや偏平な柱状で、側面が砥ぎ面として利用され、鋭利な金属製品によるような線状痕跡が複数残る。

## (6) 大形砥石 [図版 3-228 ~ 230・PL283]

置き砥石と想定される石器である。小形砥石同様に弥生時代から古代、中世の遺構や検出作業から出土している。弥生時代の遺構から出土した15点を図化した9点を図化した(20802・806・809・811・812・818・821・826・827)。20802・809・812・826の4点は砥面が複数作出され、加えて砥面に重複するように敲打痕跡が無数に残る。砥石と敲石との併用か、敲石への転用と考えられる。20827(SB4002)は良質な砂岩製で、長さ37.5cm、幅19.4cm、厚さ16.0cm、17.2kgという極めて大形の砥石である。断面長方形で四側面が砥面として作出されている。両端部などに金属製の工具などによるケズリ痕が残る。砥面にも鋭利な線状痕があり、対象物として金属製品を想定される。

(7) 磨石 [図版 3-228 ~ 230・PL284]

弥生時代後期に属する7点を図化した(21082・105・159・273・275・276・445)。2点(21082・105)は太型蛤刃石斧の欠損品を再利用した、石槌とも呼称されている磨石である。欠損面は磨製石斧の中軸線の直交方向に平坦面を作出している。平坦面は中央部が凸面状にわずか膨らむ。線条痕が無数に残り、光沢もみられる。21273と21275も磨製石斧転用品同様、端部に作出された平坦面を持つ。平坦面は極めて平滑で、線条痕が無数に観察される。21276は三側面と一端部に敲打痕があり、一端部に摩耗面がある。21159は一側面に摩耗面があり、そこにベンガラと考えられる赤色顔料の付着がみられる。

(8) 敲石 [図版 3-236 ~ 240・PL284 ~ 287]

弥生時代後期に属する27点を図化した。21337と21443は磨製石斧の欠損品を転用している。21337は断面長方形でやや小形の磨製石斧欠損品である。敲打混は粟粒状に窪む部分と幅7~8mmほどの線状に窪む部分がある。21443は太型蛤刃石斧の欠損品を再利用した磨石(石槌)を更に敲石に転用したと理解される。上記2点以外はやや偏平な河原礫を使用する場合と柱状の河原礫を使用する場合に分かれる。偏平な河原礫は面積の広い表裏二面を主要な使用面とし、端部や側面も活用されている。柱状の河原礫は端部を主体的に使用している。使用痕跡は21337にあるような幅7~8mmほどの線状に窪む部分が観察される個体が多い(21224・254・491・497・643)。このような痕跡は弥生時代後期の台石にも観察されている。線状に窪む部分は非常に鋭利で硬質な対象物が使用面に当たったことによって生じていると考えられる。また敲打痕と共に摩耗痕も残る個体が多く、磨石としても兼用されていたことが分かる(21191・186・254・317・399・454・490・517・647)。そのうち21254の側面にある敲打と摩耗痕には、ベンガラと考えられる赤色顔料が明瞭に付着し、顔料加工に関わる作業に用いられていたといえる。

(9) 台石 [図版 3-244, 245・PL287, 288]

弥生時代後期に属する11点を図化した(20829・830・845・850・858・873・876・891・977・979・990)。板状礫や偏平な河原礫の平坦面を使用面としている場合が多い。使用痕は摩耗痕と敲打痕があり、両者が併存する場合もある。磨石や敲石と組み合わせた作業に用いられていたと想定される。20858と20873は厚みのある柱状といえる形状をした礫を使用している。いずれも緻密な泥岩(または砂岩)であり、重量は20858が4.1kg、20873が5.9kgと非常に重い。特に20858は三側面と一端部に幅7~8mmほどの線状に窪む敲打痕が観察される。どの面も水平に据えることが非常に困難であり、一端部を設置する場合は反対側を床面に埋設するなどの造作が必要であったと考えられる。

(10) 石皿 [図版 3-246・PL288, 289]

弥生時代後期の竪穴住居跡内から出土した3点のうち、2点を図化した(21001・002)。いずれも破片である。21001は偏平な河原礫を加工し、凹面を形成している。凹面には擦り痕が残り、裏面の自然面には敲打痕が複数ある。21002も偏平な河原礫を利用している。凹面は浅く、使用により形成された可能性がある。凹面の擦り痕の上に敲打痕が重なる。裏面はほぼ全面に敲打痕がある。

## 5. 金属製品

弥生時代の青銅製品は11点である。いずれも百余軒の大集落を成した弥生時代後期の所産と考えている。器種の内訳は銅釧9点、銅鏃2点である。鉄製品として鉄鏃と鉄剣、刀子、鉄釧、工具(鑿など)、鉄片が出土している。詳細は表にまとめた。

**(1) 銅釧** [図版 3-251・PL290]

銅釧 9 点は腐朽・欠損し小さくなった資料が多いが、往時の光沢と金属色を残す資料もある。銅釧はすべて破片であり、主に弥生時代後期の竪穴住居跡の埋土から出土する。特別な出土状態を示す資料はない。

形態はいわゆる帯状円環型の鑄造品である。本来の大きさには幅が約 10mm で推定径 60mm 前後のもの (06M013・064・099・100・186・07M056) と幅が約 6mm で推定径 44～52mm の小ぶりなもの (06M015・031・135) がある。円弧状の形状を留めている資料が大半であるが、故意に平らに延ばされている資料 (06M013・135) もある。また欠損した部分に折り曲げによる切断痕とみられるわずかな膨らみが見受けられる資料 (07M056) や、小孔を穿っている資料 (06M186) もある。いずれも使用後に再加工された状況を示すものである。特に伸ばされたり、切断されたりした状態は銅釧の補修に伴う加工痕というより、新たな製品へ再生させるための痕跡と考えられる。集落出土の銅釧片については、本来の連結装着された装身具の役割から脱し、集落における新たな役割、例えば祭祀具などとして利用、廃棄したとする研究がある (白居 2000)。当遺跡南に隣接する周防畑遺跡群の中中部横断自動車道用地内で検出された土坑墓では連結装着された銅釧が出土している。佐久平は銅釧の出土数が多いことで知られている地域である。居住域と墓域で異なる出土事例は、弥生時代後期におけるこの地域での銅釧の流通、利用、再生を考える上で、新たな発見といえよう。

**(2) 銅鏃** [図版 3-251・PL290]

銅鏃 は 2 点出土している。06M117 は先端部と基部、茎部が欠損する。鏃身部の中軸線に稜を持つ。凹基に茎部が付く基部形状と思われる。07M297 は先端部がわずかに欠損する。鏃身部は柳刃形を呈す。

**(3) 鉄釧** [図版 3-262・PL292]

1 点出土している (07M250)。歪んだ円形で、2 分の 1 が欠損する。直径 6.3cm、厚さ 0.4cm。断面形状は浅いくの字形で外面中央に明瞭な稜を有する。

**(4) 鉄鏃** [図版 3-254～258・PL291, 292]

弥生時代後期の鉄鏃と考えられる 9 点を図化した (06M020・030・063・137・07M113・145・249・251・280)。無茎鏃が 7 点で、有茎鏃が 2 点ある。無頸鏃のうち 06M020 に 2 カ所、07M113 と 251 に 1 カ所、鏃身部に穿孔がみられる。有茎鏃 2 点は鏃身部が細く柳刃形を成す。07M145 と 249 は茎部に木質が残存する。

**(5) 鉄剣** [図版 3-258・PL292]

弥生時代後期と考えられる鉄剣が 4 点出土している。そのうち竪穴住居跡内出土が 2 点 (07M146・205)、木棺墓 SM4002 内出土が 1 点 (07M304)、グリッド検出作業中の出土が 1 点 (07M268) である。やや小形の 07M146 と 268 は基部が欠損する。剣部がやや長い 07M205 と 304 には基部に目釘孔がある。07M205 は剣部下端の中軸線上に孔が 1 カ所ある。07M304 は茎部まで残存し、孔は 2 カ所残る。また剣部に木質が残る 2 点のうち、07M304 の木質はヒノキ科と同定されている。分析の詳細は第 9 章を参照されたい。

**(6) 刀子** [図版 3-259, 260・PL293]

弥生時代後期の竪穴住居内から出土した刀子と考えられる 4 点を図化した (06M050・139・155・07M204)。そのうち 1 区の竪穴住居跡 (SB0047・110) 内から出土した 3 点については、古墳時代以降の遺構と重複

の著しい地区のため、弥生時代後期と特定できるか疑問が残る。07M204 (SB4002) は当該期の土器や石器などが大量に廃棄された中でも、床面に近い位置から出土している。刃部片と考えられる。細く薄い形状で、砥ぎ減りしていると推定される。

(7) 工具 [図版 3-266, 267・PL295]

鑿と想定される 1 点と工具の可能性のある 4 点を図化した。いずれも弥生時代後期に属すると考えられる。鑿とした 07M198 は木棺墓 SM4006 長方形落ち込み内の北側東寄り、床面より 7cmほど高い位置から出土し、刃部は主軸方向を向いている。残存長 12.5cm で刃部先端部をわずかに欠く。刃部は短く推定長 3cm で、やや柳刃形で、片刃の可能性もある。基部の断面形は厚い長方形で端部はやや潰れている。基部中央付近に残る木質は樹種同定からヒノキ科と分析されている。弥生時代中後期の金属製品や木製品、骨製品を大量にした鳥取県青谷上寺地遺跡では本鉄製品と形状の似た鉄製品を「耳かき状鉄器」と呼称している(鳥取県埋文センター 2011)。ほかの 4 点のうち、06M016 はやや不整形で細長い板状で一端が片刃状を呈す。06M009-2 と 018 は幅 6～8mm の細長く小さな板状を呈し、明瞭な刃部はみられない。06M138 は断面長方形で一端部が薄く刃部状となる。前掲の青谷上寺地遺跡では「正面形状が縦長で、棒状のフォームをなす鉄器片」という分類に留まる資料の一群に対し「棒状鉄器」という名称を付している。こうした鉄製品には超小型鑿などの小型工具としての機能を有する可能性を指摘している。ここで扱う 4 点についても、幅 7～8mm ほどの線状に窪む敲打痕のみられる敲石や台石などと組み合わせて使用された工具と想定しておきたい。

(8) 鉄片・集合鉄片 [図版 3-272・PL298]

弥生時代後期の竪穴住居跡から平面は不整形で、板状の小鉄片が出土している。そのうち 8 点を図化した(06M009-1・019・053・061・062・151・157・245)。06M151 は複数の鉄片が重なり合っている状態で、集合鉄片と呼称している。銹化が進んでいるため、鉄片同士が鍛打加工などにより人為的に接着しているのか、重なり合う鉄片が埋没後の自然作用で密着しているのか判断できない。鉄片自体はほぼ平らで、一部切断されたような切り込みがある。このほかの 7 点は大きさ 2～5cm、厚さ 1～3mm (銹化部分除く) の不整形な板状である。やや歪みがあるような形状の個体(06M009-1・053・061) や、鑿などの工具で切断されたような直線的な側面のある個体(06M019・07M245) がある。なお 06M019 出土の SB0015 からは上述した小型工具と推測される 06M016 と 018、半割された銅釧 06M015 や加工痕跡のある 06M013 が出土している。また 07M245 出土の SB4002 からは大小の砥石(20709・710・711・827) や線状の敲打痕を持つ台石(20873) のほか、加工具と考えられる土器片加工板が 37 点出土している。

6. ガラス製品 [図版 3-211・PL278]

ガラス小玉 9 点出土し、8 点を図化した。20059 は超大形竪穴住居跡 SB0067 入口側の床面から出土した。法量は最も大きく、直径 8.1mm、厚さ 7.4mm を測る。20063～20066 は木棺墓 SM4002 埋土中から出土している。

7. 骨角製品・未製品 [図版 3-275・PL301]

弥生時代後期の竪穴住居跡から動物骨や角を加工した製品と未製品、加工痕や解体痕のあるシカ頭骨などが出土している。これ以外にもシカやイノシシを中心に動物骨も出土している。動物骨に関する分析と鑑定の結果は第 9 章を参照されたい。

弥生時代後期の竪穴住居跡 SB0036 からシカの骨と角、イノシシの骨があわせて 20 点余出土している。

そのうち、骨製品と加工痕跡のある未製品類 11 点を図化した。06B120-3 はいわゆる骨鏃とされる骨製品である。種は不明であるが中手骨または中足骨を素材とする。鏃身部は先端を欠き、細く断面形が正三角形に近い。鏃身部と茎部の境目には段を持ち、茎部は断面円形で、茎端部が僅かに膨らむ。全体に研磨され、茎部には縦方向のケズリ痕が残る。前掲の青谷上寺地遺跡では三稜式の鏃形骨角器と分類される骨角器によく似た形態である（鳥取県埋文センター 2010）。06B121 はシカ中足骨を用いた半製品で、細長く縦割りした先端部に研磨痕がある。シカ頭骨 06B81-1 は頭蓋骨を縦方向と斜め方向に割り、角を角座から削り取っている。角座には刃痕がよく残る。06B85-1-1 は枝角を切断していて、先端部にはケズリ痕がある。またシカ角を切断したり、縦割りしたりした剥片も複数ある（06B85-1-2・120-1-1～5）。シカ中手骨 06B85-1-3 には骨端部に刃痕がある。SB0036 はこれらの骨角資料と合わせて、敲石やみがき石、土器片加工板も出土している。こうした状況から本跡は骨角製品の製作に関わる住居である可能性を考えている。

## 8. 炭化物

竪穴住居跡の炉内やピット内から炭化物が採取されている。小片が多く、木製品と考えられる資料はみられない。一部について科学分析を実施している。分析結果は第9章にまとめた。

## 第7章 古墳時代～古代の遺構と遺物

### 第1節 概観

当該期の遺構は竪穴住居跡 431 軒、掘立柱建物跡 122 棟をはじめとして、ほぼ調査区全域から検出されている。遺構内から出土する遺物は多種多様である。土器は一括性、完形率の高い個体が多い。石器も一定量出土していて、この地域においては古墳時代以降も石器を利器として活用していることがわかる。また銅印、焼印をはじめとする金属製品も非常に保存状態が良好である。動物骨、人骨も少なからず出土し、詳細な分析を可能としている。以下に遺構と遺物について記載する。

### 第2節 遺構

#### 1. 竪穴住居跡

##### 1・2区

**SB0001** [遺構:図版 2-138・PL37、土器:図版 3-58・PL196、金属製品:図版 3-271・PL298]

**位置**: III M 02・07 グリッド。 **検出**: 西側農道付替えに伴い、2回に分けて調査。表土直下でカマド周辺から土器片が複数出土。南側の削平は深く、南壁は攪乱を受けて消失する。 **重複関係**: 本跡上部に SB0009 の貼床部分が残る。SB0002 を切る。 **埋土**: 炭化物粒をわずかに含む黒褐色シルト質土が堆積する。 **構造**: 平面隅丸方形。同規模の柱穴 2 基が床面中央にて東西に並ぶ。カマド手前のみ貼床を持つ。本跡四隅の床下に直径 1 m 前後で略円形や略方形の土坑状の落ち込みがある。内部から土器片などが出土するが性格は不明である。 **カマド**: 北壁中央やや西寄りに 1 基。左袖に袖石（やや丸みのある角礫）が残るが、原位置をとどめない。中央に支脚石が残る。煙道は幅広で傾斜は緩やかである。 **出土遺物**: カマド周辺や床下ピットから土師器片、須恵器片多数出土。 **時期**: 出土土器から平安時代 10 世紀前半とする。

**SB0003** [遺構:図版 2-138・PL37、土器:図版 3-59・PL196]

**位置**: III M 03 グリッド。 **検出**: IV 層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**: (旧) SB0002・0004・0125、SK0025・0039。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸方形。床は貼床で、掘方を持つ。床下でピットを確認した。SK0025 は本跡に伴うと考えられる。 **カマド**: 北壁中央にある。袖が残る。 **出土遺物**: 焚口部からの出土が多い。 **時期**: 平安時代 10 世紀前半とする。

**SB0005** [遺構:図版 2-139・PL37、土器:図版 3-59]

**位置**: III M 04・05 グリッド。 **検出**: IV 層上面で黒褐色土を確認した。一部攪乱を受ける。 **重複関係**: (旧) SD0006、ST0001。(新) ピット 2 基(中世)。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸方形。床は貼床で互層にして敲き締めてある。掘方を持つ。 **カマド**: 北壁中央にある。灰褐色土の構築材による袖が残る。火床が残る。 **出土遺物**: カマド周囲に散乱する。 **時期**: 平安時代 (10 世紀前半)。

**SB0010** [遺構:図版 2-140・PL38、土器:図版 3-59, 60・PL196、金属製品:図版 3-252・PL290]

**位置**: III H 22・M 02 グリッド。 **検出**: 表土剥ぎ中に、カマド袖石、煙道部を確認した。東側のみの検出。西側は他住居跡に壊されている。 **重複関係**: (旧) SB0018、SK0056。(新) SB0012・0126、SK0007。(不明) SB0124。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。中間に炭化物層がある。 **構造**: 平面隅丸方形か。床は南半分にやや堅い床が残る。掘方を持つ。主柱穴は1基ある。周溝は北・東壁で検出された。 **カマド**: 東壁南隅寄りにある。袖は左右袖石が残る。 **出土遺物**: 落下した天井石の下に土器片が多く出土している。 **時期**: 平安時代 (10世紀後半)。

**SB0013** [遺構:図版 2-141・PL38、土器:図版 3-60・PL196、石器:図版 3-222]

**位置**: III H 24・M 04 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**: (旧)SB0130。(新) SB0014・0021。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸方形。床は貼床で、締まりよい。掘方を持つ。主柱穴は4基ある。周溝はカマド部を残し、全周する。 **カマド**: 北壁中央にある。袖は黒色～黒褐色土と袖石で構築される。 **出土遺物**: カマド周囲に散乱する。 **時期**: 古墳時代末～奈良時代 (7世紀末～8世紀前半)。

**SB0014** [遺構:図版 2-142・PL38、土器:図版 3-60, 61・PL196, 197、石器:図版 3-222, 236・PL281, 285、金属製品:図版 3-254・PL291]

**位置**: III H 23・24 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認した。カマド部分は明瞭だが、ほかの遺構と重なる部分は推定部分が多い。 **重複関係**: (旧) SB0013・0015・0019・0021・0033・0038・0059、SK0055・0076・0077・0037。(新) SB0020、SD0001、SK0034・0036・0054。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面形不明。床は不明瞭である。 **カマド**: 東壁南隅寄りにある。右袖に芯材が残る。 **出土遺物**: カマド南側に土師器類が多出する。 **時期**: 平安時代 (10世紀後半)。

**SB0016** [遺構:図版 2-143・PL38、土器:図版 3-61・PL197]

**位置**: III H 25 グリッド。 **検出**: IV層上面で暗褐色土を確認した。 **重複関係**: (旧) SB0015。(新) SB0022、SD0001、SK0012・0013・0016・0015・0009・0010・0011。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。床は全体に貼床が施される。 **カマド**: 北壁中央にあり、火床が残る。IV層主体の構築材による袖が残る。天井石が崩れている。 **出土遺物**: カマド周囲、東壁際に多い。 **時期**: 平安時代 (9世紀後半)。

**SB0018** [遺構:図版 2-142・PL38、土器:図版 3-61, 62・PL197]

**位置**: III H 22・23 グリッド。 **検出**: 重機による表土剥ぎでプランを確認した。カマド付近で土器片が多く出土していた。 **重複関係**: (旧) SB0011。(新) SB0010。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。カマド付近で堅固な貼床が残っていた。 **カマド**: 北壁中央に設置。燃焼部に火床、灰、炭化物、構築材の堆積が確認できた。 **出土遺物**: カマド東側に甕類が出土している。カマド周囲の床には炭化物が分布する。 **時期**: 平安時代 (9世紀後半)。

**SB0020** [遺構:図版 2-143、土器:図版 3-62・PL197, 198、金属製品:図版 3-266・PL295]

**位置**: III H 23・24 グリッド。 **検出**: IV層上面で暗褐色土を確認した。 **重複関係**: (旧) SK0034、SD0001。(新) SB0019・0021・0033・0059、SK0035・0053・0078・0079。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。埋

土は浅い。 **構造**：平面長方形。中央カマド寄りに、IV層土ブロックの貼床があるがしまり弱い。南側に床下ピットを確認したが、切り合う住居跡に伴う可能性もある。 **カマド**：北壁中央やや東寄りにあり、火床が残り、灰がのっていた。 **出土遺物**：床面から食器類や鉄製品が出土している。 **時期**：平安時代（11世紀前半）。

**SB0022** [遺構：図版 2-144・PL39、土器：図版 3-62, 63・PL198、金属製品：図版 3-258, 268, 271・PL293, 296, 298]

**位置**：Ⅲ H 20・25 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認した。 **重複関係**：(旧)SB0015・0016。(新)SD0002・0001、SK0015・0016・0012・0018・0017。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は貼床で掘方を持つ。周溝は部分的に途切れ、全周する。柱穴は4基あり、当初SK番号を付けてある。 **カマド**：東壁の南寄りにある。火床と袖石が残る。 **出土遺物**：北側に炭化物と骨や鉄滓などが集中する。 **時期**：平安時代（11世紀前半）。

**SB0023** [遺構：図版 2-145・PL39、土器：図版 3-63、金属製品：図版 3-258]

**位置**：Ⅲ I 16・17 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**：(旧)SB0017。(新)SK0297。 **埋土**：浅く残るのみ。 **構造**：平面方形。床は貼床で掘方を持つ。 **カマド**：東壁南寄りにある。火床が残る。 **出土遺物**：北東壁、床面に土師器、灰釉椀片が出土した。 **時期**：平安時代（10世紀中頃）。

**SB0028** [遺構：図版 2-145・PL39、土器：図版 3-63、石器：図版 3-206]

**位置**：Ⅲ H 21・22 グリッド。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**：(旧)SB0027・0124。(新)SB0012、SK0275。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。炭化物を多く含む。 **構造**：平面方形。床には地山の硬化した部分が残る。 **カマド**：北壁中央やや東寄りにある。形状を残さないが、東側袖の芯材と火床は残る。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。 **時期**：古墳時代（7世紀後半）。

**SB0029** [遺構：図版 2-145・PL39、土器：図版 3-64・PL198]

**位置**：Ⅲ H 17・22 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色～黒褐色土を確認した。平面で東壁ラインを確認し、トレンチで南北壁を確認した。 **重複関係**：(旧)SB0030、ST0002。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。床面から20cmに硬化した土の塊を確認した。 **構造**：平面長方形。床は下位遺構埋土上面を敲いている。貯蔵穴がカマド両側にある。 **カマド**：東壁南寄りある。支脚石が残る。火床は残らない。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。 **時期**：平安時代（10世紀前半）。

**SB0034** [遺構：図版 2-146・PL39、土器：図版 3-64, 65・PL198, 199、金属製品：図版 3-258, 271・PL293, 298]

**位置**：Ⅲ H 18・19 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色～黒褐色土を確認した。床面付近のみ検出となる。 **重複関係**：(旧)SB0033・0035・0039・0059・0040。(新)SD0002。(不明)SK0088。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は掘方埋土上面を敲き締めている。掘方を持つ。カマド南に方形で浅いピット（貯蔵穴）がある。 **カマド**：東壁南寄りにある。袖石が両側に残るが、上部削平により全体像が掴みづらい。 **出土遺物**：カマドと貯蔵穴中心に多出する。 **時期**：平安時代（10世紀中頃）。

**SB0038** [遺構：図版 2-147・PL39、土器：図版 3-65・PL199、金属製品：図版 3-259]

**位置**：Ⅲ H 19・24 グリッド。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認した。床面付近のみ検出となる。 **重複関係**：(旧)SB0015。(新)SB0014・0021、SD0002、SK0038・0031、SF0002。(不明)SB0015。 **埋土**：黒

褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は黄褐色土を敲き締めている。掘方を持つ。カマド東側にピットがある。**カマド**：残らない。**出土遺物**：床面中央に角礫が投棄されていた。貯蔵穴（P1）内に土師器類がまとまる。**時期**：平安時代（10世紀前半）。

**SB0039** [遺構：図版 2-147・PL40、土器：図版 3-65]

**位置**：Ⅲ H 18・19 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認した。**重複関係**：(旧) SB0035。(新) SB0034・0040。(不明) SK0086・0088。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形か。床は掘方埋土上面を敲き締めている。周溝は東壁下で断続的で、他壁下では全周する。SK0088 は本跡に伴う可能性もある。**カマド**：残らない。**出土遺物**：東側で炭化物が分布する。**時期**：平安時代（10世紀前半）。

**SB0042** [遺構：図版 2-147、土器：図版 3-66、石器：図版 3-222・PL281]

**位置**：Ⅲ H 16 グリッド。**検出**：調査区南西隅の遺構が密集する地区。調査区西壁際にて、弥生時代の竪穴住居跡 SB0052 を掘削中に、本跡カマドの下位部分のみ壁直下に検出した。そのため壁や埋土の詳細な調査は行っていない。埋土は西壁面にて観察している。**重複関係**：(旧) SB0052。(不明) SK0274。**埋土**：黒褐色土が厚く堆積する。床面付近にはカマド由来の炭化物や煤を含む土が薄く堆積する。**構造**：東壁付近とカマドのみの調査で全体形は不明である。西壁面では SB0052 床上 2～3cm で堅固な床面を確認した。貼床かどうかは不明。柱穴は北東隅に 1 基。当初 SB0052P2 として調査したが、整理段階で本跡へ振り替えた。本跡床面の直下に SB0052 床面がある。**カマド**：東壁南隅近くにあり。袖部の角礫が残る。燃焼部が突出した形態と考えられる。カマド内部や南側には大きめの土器片などが散乱する。また灰や炭化物、煤などの広がりがカマド手前に薄く広がる。**出土遺物**：上記カマド以外に特筆する遺物はない。**時期**：平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0043** [遺構：図版 2-148・PL40、土器：図版 3-66]

**位置**：Ⅲ I 07・12 グリッドほか。**検出**：SB0172 の埋土内に構築され、SB0135 を切る。**重複関係**：(旧) SB0135・0172、SK0353。(新) SB0148。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形。床は一部に貼床が残り、掘方埋土上面を敲いている。**カマド**：東壁南寄りに火床が残る。**出土遺物**：わずかに床面から出土する。灰釉陶器片は混入と考える。**時期**：奈良時代（8世紀後半）。

**SB0050** [遺構：図版 2-148・PL40、土器：図版 3-66・PL199、石器：図版 3-220・PL281、金属製品：図版 3-264、270・PL294、297、298]

**位置**：Ⅲ H 11・12 グリッド。**検出**：遺構が多重する地点。上面は削られ残り悪い。**重複関係**：(旧) SB0053・0055・0152。(新) SB0097・0159・0160、SK0071・0352。(不明) SK0363。**埋土**：暗褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形か。床は貼床が一部に残る。**カマド**：炭化物等の分布から、東壁中央にあったと推測する。**出土遺物**：床面からシカ角、鋤先や土器類が出土している。**時期**：平安時代（10世紀前半）。

**SB0051** [遺構：図版 2-149・PL40、土器：図版 3-67・PL199、金属製品：図版 3-263・PL292]

**位置**：Ⅲ H 07・12 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認した。埋土中央部に SB0097 が造られていた。**重複関係**：(旧) SB0049・0056・0096・0102。(新) SB0159・0097。(不明) SB0055。**埋土**：黒褐色土を主体とする。SB0097 の埋土が入る。**構造**：平面方形。床は北側の一部に貼床が確認できた。

周溝はカマド以外で全周する。柱穴は4基ある。 **カマド**：北壁中央にある。袖にはにぶい黄褐色土の構築材が残る。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代末～奈良時代（7世紀末～8世紀前半）。

**SB0053** [遺構：図版 2-150・PL40、土器：図版 3-67・PL199]

**位置**：Ⅲ H 16・17 グリッド。 **検出**：1区西端の遺構が密集する地点。Ⅳ層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**：(旧) SK0052。(新) SB0055・0050、SK0091・0214・0215・0230・0355・0363。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。中央に炭化物の混入する層がある。 **構造**：平面隅丸方形。床は掘方埋土上面を敲いている。周溝はカマド以外ではほぼ全周する。P1、P2は貯蔵穴か入口施設の可能性がある。 **カマド**：北壁中央にある。袖には褐色土の構築材と芯材が残る。支脚石は据えられたまま残る。 **出土遺物**：床面に散乱する。 **時期**：古墳時代（7世紀代）。

**SB0055** [遺構：図版 2-151・PL41、土器：図版 3-68]

**位置**：Ⅲ H 11・16 グリッドほか。 **検出**：遺構が多重する地点。検出面直下で床面が露出していた。 **重複関係**：(旧) SB0053。(新) SD0002、SK0091。(不明) SB0050。 **埋土**：締まりの良くない黒褐色土を主体とする。 **構造**：掘方埋土上面を床とする。比較的堅固である。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：平安時代（10世紀前半）。

**SB0058** [遺構：図版 2-151・PL41、土器：図版 3-68]

**位置**：Ⅲ H 08・13 グリッド。 **検出**：遺構が多重する地点。黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0057・0075・0156。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。床面に炭化物と焼土が分布する。 **構造**：平面隅丸方形。床はⅣ層土主体の貼床である。周溝はカマド以外で全周する。床下にピットがある。 **カマド**：北壁中央東寄りにある。両袖部に板状の角礫を据えている。その上部は構築材で成形されている。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。 **時期**：奈良時代（8世紀後半）。

**SB0060** [遺構：図版 2-151・PL41、土器：図版 3-68・PL199, 200]

**位置**：Ⅲ H 15 グリッド。 **検出**：遺構が多重する地点。黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0047・0026・0048。(新) SB0046。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。上部は削られている。 **構造**：平面隅丸長方形。床は中央部で、SB0047埋土上部のみに貼床を施す。貯蔵穴はカマド北側に径60cmのP2があり、小型の食器類が出土している。 **カマド**：東壁中央南寄りにある。左袖部に軽石を据え、右袖から煙道まで構築材を利用している。 **出土遺物**：カマド内から羽釜が出土する。P2西側床面に食器類が並置されている。 **時期**：平安時代（11世紀前半）。

**SB0065** [遺構：図版 2-152・PL41、土器：図版 3-69・PL200、石器：図版 3-207・PL277、金属製品：図版 3-268・PL296]

**位置**：Ⅲ H 10・15 グリッドほか。 **検出**：SB0066埋土内に灰黄褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0066・0067。(新) ST0008。 **埋土**：灰黄褐色土と黒褐色土を主体とする。埋土下位には灰、炭化物が分布する。 **構造**：平面隅丸方形。床は褐色土の貼床で硬く締まる。柱穴は4基ある。周溝は全周する。南壁際に小ピットがあり、出入口施設の可能性がある。 **カマド**：北壁中央にある。袖部は礫と白色土を構築材として成形されている。火床は残る。煙道部は潰れた状態で検出されている。 **出土遺物**：カマド周辺に集中する。 **時期**：奈良時代（7世紀末～8世紀前半）。

**SB0068** [遺構:図版 2-153・PL42、土器:図版 3-69・PL200、石器:図版 3-205・PL277]

**位置**: III I 01 グリッド。 **検出**: IV層上面ににぶい黄褐色土が落ち込む。 **重複関係**: (新) SK0249。  
**埋土**: IV層が混じる土を主体とする。埋め戻しか。 **構造**: 平面隅丸長方形。床はIV層と黒褐色土の混じる貼床で硬く締まる。カマド手前の中央部に一段高い床面がある。掘方がある。 **カマド**: 北壁中央にある。袖は地山を削り残した芯部に地山土を貼る。火床と支脚石が残る。 **出土遺物**: カマド周囲に須恵器杯蓋などが集中する。 **時期**: 古墳時代 (7世紀後半)。

**SB0070** [遺構:図版 2-153・PL42、土器:図版 3-69・PL201、石器:図版 3-207・PL277、金属製品:図版 3-273]

**位置**: III H 04・05 グリッドほか。 **検出**: IV層上面に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**: (旧) SB0067。(新) SD0003。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸長方形。床はにぶい黄褐色土の貼床で硬く締まる。下位のSB0067P2と本跡P1の間には強固な埋め戻し層がある。 **カマド**: 北壁東寄りにある。火床が残る。 **出土遺物**: 少ない。 **時期**: 平安時代 (9世紀後半)。

**SB0073** [遺構:図版 2-154, 155・PL42、土器:図版 3-70・PL201、石器:図版 3-222, 241・PL281, 286、金属製品:図版 3-259]

**位置**: III H 08・09 グリッド。 **検出**: 調査区で遺構の重複が最も激しい地点の一つ。遺構検出面とする黄褐色のIV層がほとんどない状況で黒褐色土を主体とする遺構埋土内に繰り返し遺構が構築されている。平面検出では各遺構範囲や新旧関係を捉えきれないため、先行トレンチを各所に入れた。本跡はこの地点で最も新しい遺構である。 **重複関係**: (旧) SB0074・0157・0164・0165・0176。 **埋土**: 黒褐色土がレンズ状に堆積。床面付近には炭化物が分布する。 **構造**: やや東西に長い長方形。床は貼床。比較的の地山が残る外周部分で確認した。実際は中央部にも床があった可能性があるが、下位遺構埋土部分のため、明確ではない。柱穴は検出できていない。掘方は全体に深さ10cm程度荒掘りされている。カマド部分は特に掘り込みが深く、IV層土を含む黒褐色土で埋められている。周溝は北西隅の壁際にL字状に確認した。本来全周していた可能性が高い。出入口施設として西壁際中央寄りにある隅丸長方形のピットを考える。規模は東西1.34×南北0.81×深さ0.30mと大きい。調査時点では本跡に東壁を壊されているSB0074P1としているが、土層観察では本跡に属するか、単独の土坑である可能性がある。本跡に属するとすると、出入口部横に設けられた貯蔵穴と想定できる。 **カマド**: 北壁中央やや東寄りに1基。火床は燃焼部にわずかに残る。煙道部は半紡錘形に突出する。カマド材には扁平な角礫を多く用いている。煙道部壁面にはやや小ぶりの礫が貼られている。両袖部には大ぶりの礫を立つ。燃焼部奥から煙出口までの天井部には横長の礫3枚を並べている。全体に原位置をずれていて、手前1枚は内部に落ち込む。礫は芯材であり、その周囲を固めていた褐灰色シルトが袖部外側に残存する。カマド内部は炭化物を多く含む黒色土が堆積する。袖及び天井部の上には逆位に置いた土師器杯2点があるほか、カマドの周辺に杯や甕の比較的大きな破片がまとまって廃棄されている。 **出土遺物**: 上述した遺物のほか、カマド前庭部から西側床面には炭化物が分布し、その周囲に器形の分かる土器や角礫、鉄滓、動物骨や歯が出土している。カマド廃棄あるいは住居廃絶などに関わる遺物と考えられる。また炭化物の状況から火災を受けたともいえる。 **時期**: カマドおよび周囲床面出土土器により、平安時代 (10世紀前半) と考える。

**SB0076 (0173)** [遺構:図版 2-155・PL43、土器:図版 3-71・PL201, 202]

**位置**: III H 08 グリッド。 **検出**: 遺構重複の著しい1区の中でも最も遺構密度の濃い地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。なお、SB0076北東隅を調査時SB0173と別登録していたが、同一遺構と認定しSB0076(0173)とした。 **重複関係**: (旧) SB0075・0078・0175。(新)

SB0074、SK0197・0200。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸長方形。床はIV層基調の貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基確認したが、床面では検出できず、下位遺構床面で再検出した。P3はSK0200床面で確認した。柱痕は平面では確認できず、断面で観察された。 **カマド**：北壁中央寄りにある。火床は燃焼部全体に残る。両袖部は角礫を芯材として、粘性の強い黄褐色土が上面を覆う。 **出土遺物**：床面中央と北東隅に完形に近い須恵器杯や土師器甕が集中する。 **時期**：出土土器と重複関係から、奈良時代（8世紀中頃）と考える。

SB0078 [遺構：図版 2-157, 158・PL43、土器：図版 3-71, 72・PL202、金属製品：図版 3-254, 268・PL291, 296]

**位置**：Ⅲ H 03・08 グリッドほか。 **検出**：遺構重複の著しい地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧) SB0075・0100・0175・3082。(新) SB0076・0079・3055、SK0350。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸長方形。床は下位 SB0100埋土または埋め戻し土上にIV層土を基調とする土を薄く貼る。本跡独自の掘方はない。柱穴は4基確認した。周溝はカマドを除き全周する。 **カマド**：北壁東寄りにある。火床は残る。袖部芯材と煙道右壁に扁平礫が据えられる。構築材は白色粘土とIV層を用いる。 **出土遺物**：床面直上の出土は少ない。カマド燃焼部上位に土器片が分布する。 **時期**：出土土器と重複関係から、古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

SB0079 [遺構：図版 2-158・PL44、土器：図版 3-72・PL202、石器：図版 3-230、金属製品：図版 3-268・PL296]

**位置**：Ⅲ H 03・08 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で方形の落込みを確認、竪穴住居跡と推定した。北側と西側が他住居跡と重複するが、平面観察で本跡が最も新しいと確定し、掘削調査に入る。 **重複関係**：(旧) SB0078・3055。 **埋土**：床面には北壁から中央部にかけて、北壁カマド寄りの床面直上にはカマド起因の炭化物を含む黒色土や焼土を含む暗赤褐色土が薄く堆積している。その上部から中央部床面にかけて、IV層土主体の黄褐色ブロックを多く含む土が堆積する。更に上層には黒褐色土が本跡全体を厚く覆う。床面近くの黄褐色土ブロックは、近隣で新築された住居の掘削土とも想定される。 **構造**：南北に長い長方形である。東西壁はわずかに胴張りである。床は貼床。黄褐色土と黒褐色土を混ぜた床材がほぼ全体に貼られている。非常に硬く締まる。掘方は全体に荒掘りされている。特に南側は床面から30cmも深く掘削されている。柱穴は北壁寄りの東西隅に長楕円形のピット2基がある。どちらも住居主軸にはほぼ沿うように南北に長く、長軸1m、幅0.6m、深さ0.4m程。底面は平坦で、黒褐色土主体の埋土が四つに分層され、ほぼ水平に堆積する。西側のP2上面は住居床面と同じ高さに固く締まった黄褐色土が薄く貼られている。この2基以外ピットはなく、形状とカマド両脇に位置することから貯蔵施設と考えられるが、柱穴である可能性も残る。周溝はカマドとその両脇以外、東西壁から南壁直下に巡る。幅15cm、深さ5～10cm程。 **カマド**：北壁中央に1基。壁から半円形に突出するように掘り込まれている。煙道部は不明。両袖には構築土と角礫が一部残る。燃焼部内と手前床面には角礫や土器片が散乱する。住居閉鎖時に破壊した状況と考える。 **出土遺物**：カマド以外にも床より10～20cm程高い位置で土器片が散乱する。黄褐色土ブロック層との前後関係は捉えられていない。 **時期**：カマドおよび埋土出土土器の検討から、平安時代（10世紀中頃）と考える。

SB0091 [遺構：図版 2-159・PL44、土器：図版 3-73・PL202、石器：図版 3-242・PL286、金属製品：図版 3-273・PL299]

**位置**：Ⅲ C 17・18 グリッドほか。 **検出**：複数の竪穴住居跡が重複する地点。平面精査により、本跡が最も新しい遺構と判断した。 **重複関係**：(旧) SB0155・0174。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は下位 SB0174埋土中に構築する。明瞭な貼床はないが、SB0174埋土上層にIV層ブロッ

クを含む土が堆積し、本跡構築のための埋め戻しの可能性がある。周溝はカマドを除きほぼ全周する。  
**カマド**：東壁南隅寄りにある。袖は残らない。火床はわずかに残る。燃烧部上面を中心に炭化物が分布する。  
**出土遺物**：埋土3層と4層間に完形土器や30cmほどの平石などが分布する。南壁際中央寄りには杯・椀・甕がやや集中する。床直上出土といえるのは北壁寄りにある平石のみ。  
**時期**：出土土器と重複関係から、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0096** [遺構:図版 2-159・PL44、土器:図版 3-73・PL203]

**位置**：Ⅲ H 07・08 グリッドほか。  
**検出**：Ⅳ層上面に黒褐色土が落ち込む。  
**重複関係**：(旧) SB0102・0075・0049。(新) SB0099・0051・0097。(不明) SK0348。  
**埋土**：黒褐色土を主体とする。  
**構造**：平面隅丸長方形か。床は掘方埋土上にⅣ層土を貼る。柱穴は4基ある。周溝は南東隅の壁際のみにある。  
**カマド**：北壁中央にカマド材が分布するが、明確には残らない。  
**出土遺物**：ほとんどない。  
**時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

**SB0097** [遺構:図版 2-160、土器:図版 3-73・PL203、石器:図版 3-230、金属製品:図版 3-262, 266・PL292, 295]

**位置**：Ⅲ H 12 グリッド。  
**検出**：遺構が密集する地点の最上部にあたり、中央部を表土剥ぎ時に削っている。Ⅳ層上面に黒褐色土が落ち込む。  
**重複関係**：(旧) SB0051・0096・0159・0049。(不明) SB0050。  
**埋土**：黒褐色土を主体とする。  
**構造**：平面隅丸方形か。床はⅣ層土基調の床材をSB0051埋土上部に貼る。硬くない。  
**カマド**：北壁中央にある。両袖部に袖石芯材抜き取り痕が残る。中央に火床が残る。  
**出土遺物**：カマド周囲と壁際に散乱。  
**時期**：奈良時代（8世紀中頃）。

**SB0098** [遺構:図版 2-161、土器:図版 3-74・PL203、金属製品:図版 3-259]

**位置**：Ⅲ H 06・11 グリッド。  
**検出**：遺構が密集する地点にあたり、先行トレンチで形状を確認した。  
**重複関係**：(旧) SB0104・0056・0105・0106。(新) SB0154。  
**埋土**：黒褐色土を主体とする。  
**構造**：平面隅丸方形。床はSB0104の床上にⅣ層基調の貼床を施し、北・東・南壁を拡張して建て直したと考えられる。  
**カマド**：北壁中央やや東寄りにある。カマド構築材と考えられる角礫がカマド内に一括して廃棄されている。火床は残る。  
**出土遺物**：床面に近い埋土中に土器や金属製品が散布する。  
**時期**：平安時代（10世紀後半）。

**SB0101** [遺構:図版 2-162・PL44、土器:図版 3-74・PL203]

**位置**：Ⅲ H 07 グリッド。  
**検出**：Ⅳ層上面で黒色土が落ち込む。  
**重複関係**：(旧) SB0102・0155。  
**埋土**：黒色土を主体とする。  
**構造**：平面隅丸長方形。床は掘方埋土上面を敲いている。周溝は北東隅を除き全周する。カマド東に貯蔵穴がある。南壁際中央床面に小ピットがある。  
**カマド**：北壁中央東寄りにある。袖はにぶい黄褐色土を構築材として、わずかに両袖が残る。  
**出土遺物**：カマド内外に大きな甕片が重なって出土した。  
**時期**：古墳時代（7世紀前半～中頃）。

**SB0103** [遺構:図版 2-162・PL44, 45、土器:図版 3-74・PL203]

**位置**：Ⅲ H 01・06 グリッドほか。  
**検出**：複数の竪穴住居跡が重複する地点。Ⅳ層上面が検出面であるが、本跡範囲は大半が旧遺構の埋土上面に当たり、色調の差でプランを確定した。床面までは浅い。  
**重複関係**：(旧) SB0107・0155、SK0154・0159。(新) SK0103・0104。  
**埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土堆積は薄い。  
**構造**：平面不整形。床は中央部に貼床がある。周溝はカマドのある北壁と西壁及び東壁

の北側にある。**カマド**：北壁中央にある。袖の基部は地山を掘り残している。**出土遺物**：カマド上部およびその周囲床面に土師器杯類が複数個体出土している。カマド東側には杯2枚が重ねて置かれている。**時期**：出土土器と重複関係から、平安時代（10世紀中頃）と考える。

**SB0104** [遺構：図版 2-161、土器：図版 3-74・PL203、石器：図版 3-206・PL277]

**位置**：Ⅲ H 06・11 グリッド。**検出**：SB0098 床下で入れ子状に検出された。SB0105、0106 との切り合いは不明確で、出土遺物から新旧を決めている。**重複関係**：(旧) SB0105・0056・0106。(新) SB0154・0098。**埋土**：SB0098 掘方掘削により不明瞭である。**構造**：平面隅丸方形。床は中央部のみ貼床が残る。柱穴は2基とするが、別の遺構に帰属する可能性もある。周溝は東壁で明瞭であった。**カマド**：北壁中央にある。SB0098 カマド直下にあたり、火床の一端が残るのみである。**出土遺物**：少ない。**時期**：平安時代（9世紀後半）。

**SB0107** [遺構：図版 2-163, 164、土器：図版 3-74, 75・PL203, 204、石器：図版 3-222・PL281]

**位置**：Ⅲ G 05・H 01 グリッドほか。**検出**：工程上、調査が2回に分かれた。西側は調査区外である。**重複関係**：(旧) SB0128・0169・0163。(新) SB0103。**埋土**：黒色土とⅣ層ブロックが重なる状況である。埋没過程に自然堆積と人為堆積を繰り返していた可能性がある。**構造**：平面方形か。床はⅣ層と黒褐色土を混ぜた貼床で敲き締めている。柱穴は4基あり、住居軸と同じ配置である。周溝は本来全周すると考えられる。北東隅のP4から東壁に向かい間仕切り状の直線的な溝が確認されている。**カマド**：北壁中央にある。袖の先端両側に扁平な角礫が立ち、その上に大きく厚みのある天井石を架ける。その周囲から住居壁際までを粘性の強い暗褐色土の構築材で覆う。火床は検出できていない。**出土遺物**：極めて少ない。**時期**：出土土器から、古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB0112** [遺構：図版 2-165・PL45、土器：図版 3-75・PL204、金属製品：図版 3-254]

**位置**：Ⅲ C 21・22 グリッド。**検出**：同一検出面に弥生時代から中世までの遺構が重複する地点。本跡は弥生時代後期の超大型堅穴住居跡、SB0110の東壁と床の一部を壊している。本跡部分は検出段階でⅣ層ブロックを多く含む土が集中していた。**重複関係**：(旧) SB0110・0111。(新) SB0115、SK0105・0279。**埋土**：床面付近と壁際は黒色および黒褐色土を主体とした均質な層である。東壁際のみⅣ層ブロックの入る土が床面を覆う。中央部はⅣ層ブロックを含む黄褐色土と含有物の少ない黒褐色土が厚さ10cmほどで重なり合う。この堆積は別の堅穴住居などを掘削する際に排出した残土を複数回にわたり廃棄した結果と推測する。**構造**：平面長方形。床はⅣ層と黒褐色土を混ぜた貼床で締めやや強い。柱穴は下位で入れ子状に重なるSB0166の調査にて方形配置のピット4基を検出し、本跡で再利用したと考えた。掘方はSB0166を埋め戻したもの。**カマド**：北壁中央にある。火床は強く被熱している。袖は左袖部に構築材の平坦礫が残存する。燃焼部上面およびカマド左側前庭部には土器片や礫、構築材が散乱する。**出土遺物**：住居中央部、北壁から動物骨等の出土がある。出土位置は床上5～40cmと幅がある。**時期**：出土土器と重複関係から、古墳時代末～奈良時代（7世紀末～8世紀前半）と考える。

**SB0114** [遺構：図版 2-166・PL45、土器：図版 3-75、石器：図版 3-242・PL286]

**位置**：Ⅲ C 16・17 グリッドほか。**検出**：大半がSB0015に壊されているが床面は確認できた。**重複関係**：(新) SB0116・0115・0112・0167。**埋土**：観察できた範囲では黒色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形。床は不明瞭である。周溝はカマド部を除き全周する。P1が貯蔵穴と考えられる。**カマド**：

北西壁ほぼ中央にある。火床が残り、上には炭化物が分布する。 **出土遺物**：床面に散乱する。 **時期**：古墳時代後期（7世紀前半）。

**SB0115** [遺構：図版 2-167・PL45、土器：図版 3-76・PL204、石器：図版 3-220・PL281、金属製品：図版 3-259・PL293]

**位置**：Ⅲ C 17・22 グリッド。 **検出**：遺構重複の著しい地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧) SB0114・0112・0174。(新) SB0116・0167・0091、SK0356。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は貼床である。柱穴は4基ある。P5・6が棟持柱の可能性もある。掘方で確認されたP12は断面観察から埋め戻され、上面に貼床の及んでいることが分かる。P9は底面に焼土がみられた。P10は貯蔵穴の可能性もある。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。右袖に袖石の抜き取り痕があり、構築材として黒褐色土が利用されている。火床は残る。 **出土遺物**：金属製品、骨が出土している。 **時期**：奈良時代（8世紀中頃）。

**SB0116** [遺構：図版 2-168・PL46、土器：図版 3-76・PL204, 205]

**位置**：Ⅲ C 17・22 グリッド。 **検出**：遺構重複の著しい地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧) SB0110・0114・0115・0167。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床はⅣ層と黒褐色土を混ぜた貼床で、壁際では締まり弱い。下位にある同軸でやや小ぶりのSB0167を埋めて構築している。 **カマド**：東壁中央南寄りにある。両袖は構築した土が低く残り、左袖には角礫が芯材として入る。火床は残る。 **出土遺物**：カマド上面と周囲から角礫や土器片が集中する。 **時期**：カマド付近出土土器と重複関係より、平安時代（9世紀中頃）と考える。

**SB0119** [遺構：図版 2-168・PL1, 46、土器：図版 3-77、石器：図版 3-211・PL278]

**位置**：Ⅲ M 01・02 グリッド。 **検出**：SB0120の上位に位置する。床面と焼土を検出した。 **重複関係**：(旧)SB0120・0122・0123・0151・0162。(新)SB0121。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は掘方埋土上面となる。柱穴は4基ある。 **カマド**：東壁中央北寄りの焼土跡がカマドと推測される。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：出土土器と重複関係より、奈良時代（8世紀代）と考える。

**SB0120** [遺構：図版 2-169・PL46、土器：図版 3-77・PL205]

**位置**：Ⅲ M 01・02 グリッドほか。 **検出**：西壁際の住居跡が多重する地区にある。 **重複関係**：(旧) SB0151・0162・0123・0122。(新) SB0121・0119。(不明) SB0161。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床はⅣ層と黒褐色土を混ぜた貼床で締まり強い。柱穴は3基ずつ組み合せて6基ある。周溝は一部で確認した。P5は入口施設に関連するものか。 **カマド**：北壁中央にある。左袖がわずかに残る。黒褐色土を構築材として利用する。 **出土遺物**：カマド東側には埋設土器がある。 **時期**：カマド付近出土土器と重複関係より、奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB0121** [遺構：図版 2-170, 171・PL46, 47、土器：図版 3-77・PL205、石器：図版 3-219・PL280、金属製品：図版 3-254・PL291]

**位置**：Ⅲ H 21・M 01 グリッド。 **検出**：西壁際の住居跡が多重する地区にある。黒褐色土の下位で堅固な床面とカマド袖石を確認した。西半分は調査区外である。切り合いの判断は難しかった。 **重複関係**：(旧) SB0027・0120・0161・0168・0151・0162・0122・0123。(新) SB0119、SK0275。 **埋土**：暗～黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床はⅣ層と黒褐色土を混ぜた貼床でカマド前が堅固である。柱穴は1基ある。 **カマド**：北壁中央にある。両袖はⅣ層基調土を利用し、両袖石が列状に残る。 **出土遺物**：カ

マド内と周辺の床面に食器類や骨片が集中する。 **時期**：カマド付近出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0125** [遺構：図版 2-171・PL47、土器：図版 3-78・PL206、金属製品：図版 3-259・PL293]

**位置**：ⅢM 03・08 グリッド。 **検出**：上部をSB0003に削られていて、黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0002・0004。(新) SB0003。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：カマドは同じ場所で、3回造り替えがある。住居跡の平面形も軸をずらして重なるが、拡張等の判断はつかなかった。床はカマド前の方に貼床がある。 **カマド**：東壁南隅にある。袖等は残っていないが、火床の有り様から、3回の造り替えが認められた。 **出土遺物**：カマド内に散乱している。 **時期**：出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀中頃）と考える。

**SB0126** [遺構：図版 2-172、土器：図版 3-78・PL206]

**位置**：ⅢH 22・M 02 グリッド。 **検出**：切り合いが著しく、カマドを頼りに調査を進めた。 **重複関係**：(旧) SB0010・0123・0124・0009。(新) SB0012。 **埋土**：暗褐色土にⅣ層の混じる床を検出、整地面はあるが軟弱である。 **構造**：平面長方形。 **カマド**：東壁南寄りにあり、破壊が著しい。 **出土遺物**：カマド内に散乱する。 **時期**：出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀中頃）と考える。

**SB0132** [遺構：図版 2-173・PL47、土器：図版 3-78・PL206]

**位置**：ⅢI 12・13 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(不明) SK0132。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は不明瞭で、掘方を持つ。 **カマド**：東壁中央やや南寄りにある。袖は左袖石と構築土が残る。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：奈良時代（8世紀中頃）

**SB0133** [遺構：図版 2-173・PL48、土器：図版 3-78・PL206]

**位置**：ⅢI 12・17 グリッド。 **検出**：Ⅳ層に暗褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0134。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形か。床はⅣ層土を基調とする貼床で、締まりやや弱い。柱穴は2基確認された。 **カマド**：北壁中央やや西寄りにある。火床は残る。袖にはⅣ層土基調の灰黄褐色土が両袖基部に残る。袖石が周囲に散乱している。 **出土遺物**：カマド内と床面に散乱する。 **時期**：出土土器と重複関係より、古墳時代末～奈良時代（7世紀末～8世紀前半）と考える。

**SB0136** [遺構：図版 2-174・PL48、土器：図版 3-79・PL206、石器：図版 3-211・PL278、金属製品：図版 3-252, 263・PL290, 294]

**位置**：ⅢI 13・14 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層に黒褐色土が落ち込む。南東側は調査区外である。 **重複関係**：(旧) SK0362。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。上部が削られていて浅い。 **構造**：平面方形か。床は掘方埋土上面が敲き締まる。柱穴は3基確認された。 **カマド**：北壁中央にある。火床は残る。袖にはⅣ層土基調土と袖石が残る。 **出土遺物**：カマド周辺に散乱する。 **時期**：出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0137** [遺構：図版 2-175・PL48、土器：図版 3-79・PL206、石器：図版 3-236・PL284、金属製品：図版 3-254, 259・PL291, 293]

**位置**：ⅢI 08・09 グリッドほか。 **検出**：SB0137はⅣ層に暗褐色土が落ち込む。SB0138は、SB0137に切られ、一部を残すのみである。 **重複関係**：(旧) SB0138。(新) SB0139、SD0007。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は貼床で、カマドから中央部にかけてよく残る。柱穴は4基確認

された。南壁の中央がやや外に膨らみ、コの字状に並ぶピットがあり、出入口施設の痕跡と考えられる。カマド西側のP1が貯蔵穴と考えられる。 **カマド**：北壁中央にある。火床は残る。袖は白色土の構築材で袖石の抜き取り痕が残る。 **出土遺物**：床面に多い。 **時期**：出土土器と重複関係より、奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB0139** [遺構：図版 2-176・PL48、土器：図版 3-80・PL206, 207]

**位置**：Ⅲ I 08・09 グリッドほか。 **検出**：SB0137埋土内に暗褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0137、SK0171。 **埋土**：暗～黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形を呈する。床は貼床で、SB0137埋土内に厚く堆積する。周溝は北側のみで、地山掘削部分にある。 **カマド**：東壁中央南寄りにある。右袖に袖石が並んで残る。 **出土遺物**：カマド内に多い。 **時期**：出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0140** [遺構：図版 2-176・PL48, 49、土器図版 3-80]

**位置**：Ⅲ I 01 グリッド。 **検出**：北側で検出され、切り合いはない。 **重複関係**：なし。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形を呈する。床は掘方埋土上部を整地している。 **カマド**：北壁中央にある。袖は芯材の礫が両側にあり、天井石が崩落していた。 **出土遺物**：カマド内に多い。 **時期**：出土土器と重複関係より、平安時代（9世紀代）と考える。

**SB0141** [遺構：図版 2-177・PL49、土器：図版 3-80・PL207]

**位置**：Ⅲ I 03 グリッド。 **検出**：Ⅳ層に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0143。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形を呈する。床は貼床で、全面にⅣ層基調の土を貼る。柱穴4基を確認した。貯蔵穴はカマド西横に1基ある。南壁際に小ピット2基あり、出入口施設跡と考えられる。 **カマド**：東壁中央南寄りにある。左袖には芯材の袖石が残る。 **出土遺物**：鉄製品の出土がある。 **時期**：出土土器から、奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB0143** [遺構：図版 2-178, 179, 180・PL49, 50、土器：図版 3-81・PL207]

**位置**：Ⅲ I 03・04 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土のやや方形の広がりを確認。北東側の一部は調査区外にある。他遺構との重複が顕著のため、平面精査後、遺構番号を付す。当初本跡と重複する竪穴住居跡としてSB0141・0142・0147を付したが、本跡調査の結果、SB0142は遺構ではないこと、0147は本跡西壁の一部と判明し、登録を抹消した。なお当初、重複するST0004・0005の存在に気付かずに掘削したが、本跡土層ベルトなどでそれらが本跡より新しい遺構であると認識した時点から、上記建物跡の調査を先行した。 **重複関係**：(新) SB0141、ST0004・0005、SK0203 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形で東西壁は胴張りである。床は貼床で、Ⅳ層基調の土を貼り堅く締まる。柱穴3基を確認し、調査区外に1基あると推測される。P4が出入口施設跡と考えられる。掘方調査により柱穴群がみつかり、複数回の造り替えがあったことがわかる。 **カマド**：北壁中央にある。袖には芯材の礫と構築土が残る。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：出土土器の検討から、奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB0148** [遺構：図版 2-182、土器：図版 3-81・PL207]

**位置**：Ⅲ H 06・07 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB0043・0135・0172、SK353。 **埋土**：上部が削られて埋土は浅い。 **構造**：平面隅丸方形。床は下位遺構

の埋土にIV層基調土を貼っている。カマド南側の住居隅に浅いピットがある。カマド：東壁中央にある。火床が残る。出土遺物：カマド内に多い。時期：平安時代（10世紀前半）。

**SB0150** [遺構：図版 2-181・PL50、土器：図版 3-82・PL207, 208、石器：図版 3-222・PL281、金属製品：図版 3-264・PL294]

**位置**：Ⅲ D 21・22 グリッド。 **検出**：IV層上面に暗褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(新)ST4007。 **埋土**：床面には黒褐色土が落ち込む。 **構造**：平面長方形。床は貼床で、ほぼ平坦である。柱穴は4基ある。周溝はカマド部、入口部を除き全周する。出入口施設として南壁際の床面中央のP5を考える。掘方を持つ。 **カマド**：北壁中央やや西寄りにある。袖は両側とも地山を一部掘り残し、その手前に板状の角礫を2列に重ねて芯材とする。西袖外側に構築材が一部残る。火床は残る。 **出土遺物**：カマド材と同質礫がカマド内部および床面中心に分布する。 **時期**：カマド内出土土器により、奈良時代（8世紀後半）と考える。

**SB0152** [遺構：図版 2-182・PL51、土器：図版 3-83・PL208]

**位置**：Ⅲ H 17 グリッド。 **検出**：IV層上面に暗褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧)SB0030。(新)SB0031・0050、SK0071、ST0002、SD0002。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は掘方埋土上面を叩いているが堅固でない。北側に円形ピットがあり貯蔵穴と考えられる。 **カマド**：東壁南寄りにある。火床が残る。黄褐色土の構築材がわずかに確認できた。 **出土遺物**：ピットから鉄滓が出土している。 **時期**：平安時代（10世紀前半か）。

**SB0164** [遺構：図版 2-154, 155・PL42、土器：図版 3-83・PL208]

**位置**：Ⅲ H 08・09 グリッド。 **検出**：遺構重複の著しい1区の中でも最も遺構密度の濃い地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧)SB0067・0157・0165・0176。(新)SB0073・0074。 **埋土**：ほぼ同位置に重なるSB0176掘方が本跡床面近くまで及び、SB0074が西壁付近を床下まで壊しているため、床面付近まで不明である。 **構造**：平面隅丸長方形。床はIV層基調の貼床で、掘方を持つ。カマド北脇床面に小ピットP1がある。上層には焼土や灰などが堆積する。 **カマド**：東壁中央やや南寄りにある。火床は残る。 **出土遺物**：火床面付近で土師器甕の破片が多く出土する。 **時期**：出土土器と重複関係から、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0165** [遺構：図版 2-183・PL51、土器：図版 3-83, 84・PL208、石器：図版 3-219・PL281]

**位置**：Ⅲ H 09 グリッド。 **検出**：遺構重複の著しい地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧)SB0067。(新)SB0073・0074・0164。 **埋土**：ほぼ同位置に重なるSB0073、0164が本跡床面まで及んでいるため全体は不明瞭である。床面付近は褐灰色土が堆積する。 **構造**：平面長方形。床はIV層と黒褐色土を混ぜた貼床で硬く締まる。P2は掘りすぎの可能性がある。 **カマド**：東壁中央南寄りにある。火床は残らない。カマド手前の左右には粘土ブロックがあり、カマド袖部を構築した痕跡と考える。 **出土遺物**：カマド及び手前床面、P1・P2内で遺物が集中する。 **時期**：出土土器と重複関係により、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0167** [遺構：図版 2-168・PL46、土器：図版 3-84]

**位置**：Ⅲ C 17・22 グリッド。 **検出**：SB0116カマド掘方調査で、下位に別の火床を認識し、SB0116の入れ子状にある遺構として本跡を確認した。 **重複関係**：(旧)SB0110・0114・0115・0158。(新)SB0116。 **埋土**：床上にはSB0116床層よりやや明るい灰黄褐色土が堆積する。SB0116構築時の埋め戻しの可能性

がある。**構造**：平面方形。床は下位 SB0115 埋土中に、黒色粘質土を若干混ぜた貼床がある。表面はやや堅い。カマド前面は硬い。**カマド**：東壁中央南寄りにある。燃焼部の残存部に火床があり、その上面に炭化物とともに土器片が集中する。**出土遺物**：カマド周辺に土器片が集中する。**時期**：カマド付近出土土器と重複関係より、平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0170** [遺構：図版 2-183・PL51、土器：図版 3-84]

**位置**：Ⅲ H 11 グリッド。**検出**：調査区南西の壁際にてカマド部分と南東隅部分を検出。本跡の大半は西側の調査区外に残る。**重複関係**：(旧) SB0105。**埋土**：カマド部分のみの調査であるため、全体の状況はわからない。カマド部分は別項にて触れる。**構造**：調査可能な南東隅部分からすると、平面方形あるいは長方形と考える。南東隅には明瞭な床面がない。明瞭な掘方もない。柱穴は確認できていない。**カマド**：東壁の南隅寄りに 1 基。燃焼部は壁からやや突出し、煙道部は短く燃焼部と一体化する。右袖は乱雑に組み合わせた角礫により形成される。左袖には角礫が一つだけ自立する。燃焼部中央には柱状の角礫が埋設され自立する。支脚石の役割を想定する。火床は残らず、底面は灰と煤に覆われる。燃焼部内には焼土粒を含む暗褐色土とともに大ぶりの土器片や大礫が重なり合う。本来あった天井部などは破壊され、構築材や土器片を投棄した痕跡と考える。**出土遺物**：カマド内の土器片は甕が接合するが、杯類は接合しない。須恵器の杯はわずかであり、土師器杯 A 類が主体で、暗文風のタテミガキがある。甕はロクロ成形である。**時期**：カマド出土土器の検討から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB0171** [遺構：図版 2-172・PL47、土器：図版 3-85・PL209]

**位置**：Ⅲ B 25・C 21 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土が落ち込む。**重複関係**：(新) SB0127・0117・0110。**埋土**：黒色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形か。床は堅固な貼床が中央に残る。周溝は南壁で確認した。**カマド**：北壁中央にある。袖は地山削り出しで、支脚石が残る。火床が残る。**出土遺物**：カマド内に倒れ込んでいる甕内に完形の鉢が入れ子状に入る。**時期**：古墳時代後期～奈良時代初頭（7世紀後半～8世紀初）か。

**SB0172** [遺構：図版 2-184、土器：図版 3-85、石器：図版 3-230]

**位置**：Ⅲ I 11・12 グリッドほか。**検出**：SB0043 により上部を壊されている状況で検出した。**重複関係**：(旧) SK0353。(新) SB0148・0043・0135・0146、SK0257。**埋土**：SB0043 調査後、床面を確認したため、埋土は不明瞭となった。**構造**：平面隅丸方形。床は貼り床が残るが全容は不明。柱穴は 4 基あり、柱穴掘削後床が貼られた状況が断面から観察できた。**カマド**：北壁中央にある。火床が残るのみである。**出土遺物**：わずかに出土した。**時期**：平安時代（9世紀後半～10世紀前半）。

**SB0174** [遺構：図版 2-185・PL51、土器：図版 3-85・PL209]

**位置**：Ⅲ C 17・18 グリッドほか。**検出**：調査区南西区。重複する複数の堅穴住居跡を同一検出面で確認する。平面検出から新旧関係を判断し、掘削調査を進める。なお本跡東壁側の調査は 19 年度に委ねた。**重複関係**：(新) SB0091・0115・3060・3062。**埋土**：本跡北西部から中央部の壁から覆土中位まで SB0091 に破壊されているため、全体の堆積状況は確認できない。比較的残りの良い南側から覆土下位の観察によると、1～5層に分けられる土がレンズ状に堆積する。そのうち 2層と 4層はⅣ層土ブロックを多く含み、その前後層は比較的均質な褐色土である。こうした状況から、埋没過程で最低 2回は人為的な埋戻しがあったと想定される。**構造**：平面方形と推定する。床は全体に平滑である。柱穴は床面では確認できな

い。北西隅のSB0115P2を本跡ピットに振り替えた。円形で深さ10cmの皿状。柱穴ではない。 **カマド**：北壁中央に1基検出した。壁際に燃焼部を持ち、煙道部のみ短く突出する。両袖は粘性のある土で構築され、基部のみ残る。火床部奥に角礫が立つが、掘り込みはなく支脚石としての原位置を保っていない。カマド西側床面にある角礫3点は構築材の可能性がある。燃焼部上には灰や焼土を含む土が幾層も確認されている。やや大ぶりの土器片も散乱していることから、人為的な廃棄行為があったと考えられる。 **出土遺物**：カマド内と周辺に土師器の鉢や甕、壺の破片が散乱する。 **時期**：カマド内と周辺出土の土器および重複遺構との新旧関係から、古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB0175** [遺構：図版 2-185、石器：図版 3-222, 232, 242・PL283, 287]

**位置**：ⅢH 08 グリッド。 **検出**：遺構重複の著しい地点である。複数遺構を通した先行トレンチを設けて、新旧関係を明らかにした。 **重複関係**：(旧) SB0075・0075。(新) SB0074・0076(0173)、SK0197・0200。 **埋土**：SB0075床面を掘り込んで構築している。黒褐色土を主体としてSB0076 (SB0173) 構築の際、埋め戻されている。 **構造**：平面長方形。床はⅣ層上面を利用している。 **カマド**：北壁中央にある。直上にSB0076 (SB0173) のカマドが重なり、上部は大きく壊されている。火床は残る。袖は黄褐色土で構築する。 **出土遺物**：極めて少ない。 **時期**：重複関係により、奈良時代（8世紀中頃）以前と考える。

### 3区

**SB0301** [遺構：図版 2-186, 187・PL52、土器：図版 3-86・PL210、石器：図版 3-203, 220, 222・PL276, 281、金属製品：図版 3-259・PL293]

**位置**：ⅡW 01・02 グリッドほか。 **検出**：旧表土下で黒褐色土の落込みを確認。重複する土坑などとの新旧を確認するため、面的な掘り下げ、トレンチ調査を行った。 **重複関係**：(旧)SB0317、SK3013。 **埋土**：全体に締まりの悪い褐色～黒褐色土が複数層レンズ状に堆積する。ブロック土の目立つ土層はなく、自然堆積と考えられる。 **構造**：やや主軸方向に長いが、ほぼ方形である。平面規模が8m近くある、やや大型の住居跡である。壁面は床から直線的に開く。壁下には周溝が全周し、北壁にはカマド両脇に小ピットが3基ずつ周溝内に並ぶ。柱穴は4基を確認。平面形は副軸方向に長い長方形から楕円形。東西方向に半截したところ、全体にⅣ層土ブロックを多く含み、締まりの良い土が入る。柱痕は確認できない。完掘した底面形は長方形から楕円形で、弥生時代後期の堅穴住居跡の柱穴に似た形状である。床は全体に掘方埋土の上面が硬く、貼床を呈する。特に中央部が堅固である。主柱穴4基より外周の掘方は床面より30cm以上深い。柱穴内側は浅く、全体に粗掘りした痕が残る。また西側の主柱穴P1とP2南側に接して、柱穴2基を検出した。いずれも平面楕円形である。東側には検出されていないことから、この2基は旧主柱穴というよりP1とP2主柱の支柱穴と考えられる。本跡より古いSB0317の掘方と柱穴も本跡掘方で検出された。 **カマド**：北壁中央に1基。壁面を半円形に掘り込み、両側に角礫を芯とした袖を築き、中央奥は煙道部の機能を持たせている。燃焼部は住居壁内側にあり、やや浅く窪む。火床は強く被熱赤化し、中央に支脚石を抜いた小ピットがある。調査時にはカマド上部は崩れ、被熱し黒色化した粘土(14層)が全体を覆っていた。カマド手前には芯材らしき角礫が散乱しているが、床面より高い位置にあり、断定はできない。 **出土遺物**：覆土下位から中位に堆積する3層に上述した礫のほか、土器片が散見される。本層は中央部で床面に接することから、堆積時期は本跡廃絶後さほど時期を空けないと考えられる。鉄製品(刀子など)も出土している。 **時期**：土師器および須恵器杯などから奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB0305** [遺構：図版 2-189・PL52、土器：図版 3-87・PL211、石器：図版 3-223・PL281]

**位置**：ⅢC 06 グリッドほか。 **検出**：調査区南西側の農道切り回し部分にあたる。西壁際のⅣ層上面で方形プランの東側を確認。西半分が調査区外にある竪穴住居跡と推定し、東西ベルトを残し掘削。堅固で平坦な床面を確認し、住居跡と認定した。 **重複関係**：(旧) SB0306。 **出土遺物**：調査区境にある西壁の土層観察では、典型的なレンズ状堆積と捉えられる。南北壁際には黒褐色～暗褐色土(8・9層)が三角状に堆積し、その後黒褐色土(7層)がそれらを覆い、次に中央部床面を黒褐色土(6層)が薄く堆積する。中位には色調や含有物で分けられるにぶい褐色～黒褐色土(2～6層)がほぼ水平に堆積し、上位には黒褐色土(1層)が厚く覆う。1層上には20cm程の厚さでⅠ層がある。人的堆積といえる土はみられない。この状況は東西ベルトの土層観察でも共通する。 **構造**：平面方形または長方形と推定する。壁は、北東隅と南壁は直線的でやや外に開き、東壁は中央部がやや胴張り状に開く。壁直下の周溝は直線的であることから本跡が壊している弥生時代の住居跡(SB0306)埋土が本跡構築時あるいは以後に崩落したといえる。床は南半分に貼床がある。掘方埋土の上部に混合土を薄く貼り、硬く敲き締められている。周溝は東壁、南壁直下に連続する。深さ10～15cm。断面は逆台形から逆三角形。柱穴は南東隅の床面に1基確認。略円形で底面は2カ所あり、西が77cm、東が76cmとどちらも深い。柱痕跡はなく、埋土はしまりがなことから柱の抜き取りも考えられる。本ピットを含んで方形配置する支柱穴の残り3基は調査区外に想定される。掘方は床下全体にある。凹凸が著しい。中央付近はやや浅く、外縁部は20cm以上に掘り込まれている部分もある。また南壁直下の床上で検出された周溝から北にずれた部分に同方向で同規模の溝がある。平面図化はされていないが、本跡の旧段階の周溝跡と想定される。支柱穴の底部が2カ所あった点も加味すると、旧段階から南側に規模を拡大した可能性がある。 **カマド**：調査区では検出されていない。北壁の調査区外にあると想定する。 **出土遺物**：床面上に土器片、礫が散見される。南壁付近にやや集中する傾向ある。00059は完形の須恵器蓋杯である。蓋部か身部か再検討が必要である。 **時期**：00059須恵器蓋杯から古墳時代後期(7世紀前半)と考える。

**SB0309** [遺構:図版2-189・PL53、土器:図版3-87・PL211]

**位置**：ⅢC 11 グリッド。 **検出**：弥生時代以降の遺構重複が最も激しい地点の一つ。Ⅳ層上面での平面精査により本跡が最も新しいと判断し、東西トレンチ掘削後、床面まで掘り下げた。 **重複関係**：(旧) SB0310・0315・0316、ST0306。 **埋土**：締まりの悪い黒褐色土が全体に堆積する。カマド付近は炭化物の混入差などから複数層に分けられる。 **構造**：やや隅丸の正方形で、特にカマド南東隅は緩やかな丸みを持つ。床は貼床が中央付近に厚さ2～3cmで広がる。壁際では地山を敲いて床にしている。柱穴は中央西南寄りに1基。円形で底部に向かって細くなる断面形で深さ47cmと深い。床下はすぐ地山で、掘方はない。カマド燃焼部付近のみ不整形な形状に掘り込まれている。燃焼部中央の下部では深さが30cmもある。 **カマド**：東壁東寄りに1基。壁をやや外側に突出させている。煙道ははっきりしない。火床は残らない。袖の構築には角礫を用いる。カマド上部とその周囲には土器や礫が散乱していた。カマド上部には須恵器や土師器の甕片がややまとまり、カマド右側の南壁付近には食器類がまとまって出土した。 **出土遺物**：上述した遺物が出土した以外、特筆する出土品はない。調査時に本跡に帰属するとしていた鉄鏃(06M109)は平面範囲から外れ、ST0306P5内からの出土と判断した。 **時期**：カマドおよび周囲床面出土土器により、平安時代(10世紀前半)と考える。

**SB0313** [遺構:図版2-190・PL53、土器:図版3-88・PL211]

**位置**：ⅢC 11・16 グリッド。 **検出**：調査区南西際の遺構の重複が著しい部分。平面検出とトレンチ調査で範囲確認を行ったが、カマドのある東壁の南隅を切るST0307P1を同時に掘削してしまった結果、範囲

を見誤って本来より東に広いプランとして調査した。また西側は調査区外のため、北西隅から西壁全体について調査できていない。プランと重複関係は整理作業で点検し修正した。 **重複関係**：(旧) SB0310・0314・0315。(新) ST0306・0307、SK3032・3033。 **埋土**：調査区境の西壁の土層観察では、IV層と旧表土間のぶい黄褐色土層を切るように本跡の北壁立ち上がりが確認できる。埋土はしまりの悪い黒褐色～暗褐色土がレンズ状に堆積。床に近い下位ほどIV層土起因の黄褐色土ブロックや軽石粒があり、やや明るい色調になる。調査時掘方として認識した部分にはST0307P6が存在した可能性もあるが、確定できない。 **構造**：平面長方形。貼床と考える。凹凸のある掘方を埋めて敲き締めていたと想定される。柱穴は床面に3基確認。深さ30～36cmの円筒形。本来調査区外の西側にもう1基あり、4本柱配置であったと考えられる。周溝はカマドのある東壁際以外、壁際で検出。深さ6～7cm程度。断面逆台形。掘方は全体に深さ10cm程度荒掘りされ、凹凸が激しい。 **カマド**：東壁中央に1基。両袖部を掘り残し、燃烧部から煙道部を掘り込んでいる。両袖部ともに手前に偏平な角礫が据えられた状態で残る。その焚口部付近の床面にある横長の板状礫は本来、両袖上に架けられた天井石といえる。燃烧部は縦長の楕円形に掘り窪められ、その中央に支脚を据えた小ピットが残る。煙道部は幅20cmほどで、底面は燃烧部から斜めに傾斜する。煙道上部は検出段階で削られ開放している。煙道部に土師器杯がある。燃烧部から煙道部には焼土や灰の混入した黒褐色土が堆積する。 **出土遺物**：カマド手前に角礫や土師器杯、甕などが散乱する。炭化物も床面にある。それ以外は極めて遺物が少ない。 **時期**：カマドおよび周囲床面出土土器により、古墳時代後期（6世紀中頃）と考える。

**SB3002** [遺構：図版 2-191, 192・PL53、土器：図版 3-88, 89・PL211、石器：図版 3-230・PL283]

**位置**：II R 22・23 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3044、SM3001。(新) SB3038。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形、同規模の柱穴4基が並び、貼床を持つ。壁際にほぼ等間隔で小ピットが並び、上屋構造を検討する好資料である。 **カマド**：北壁中央に1基。SB3038に破壊され、火床を確認した。 **出土遺物**：少ない。床面に土器が散在する。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀前半）とする。

**SB3020** [遺構：図版 2-193・PL53、土器：図版 3-89・PL211、石器：図版 3-217、金属製品：図版 3-254, 264・PL291, 294]

**位置**：II M 22・23 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黄褐色土の混入が多い黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3022・6015。(新) SD3005、SK6438。 **埋土**：IV層起源の黄褐色土が混入する黒褐色土(2層)と黒褐色土(4層)を主体とする複層。2層は埋め戻し土と考えられる。 **構造**：平面隅丸方形。同規模の柱穴4基は中段にテラスを持つ2段構造である。貼床ではなく、地山を利用した床と考えられる。周溝は北東隅を除いて廻る。 **カマド**：北西壁ほぼ中央にあるが、SD3005によって壊され、一部が残る。燃烧部起源の焼土が広範囲に広がっていた。 **出土遺物**：床面上で鉄製品等が出土している。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀後半）とする。

**SB3022** [遺構：図版 2-194・PL53, 54、土器：図版 3-89・PL211、石器：図版 3-212]

**位置**：II R 02 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3023。(新) SB3020・3024。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は3基あり、一つは調査区外と考えられる。P5は出入口施設の痕跡か。床下にはSB3023があり、これを埋めて貼床をしていると考えられるが、残存状況が悪く、不明瞭であった。 **カマド**：北西壁ほぼ中央にある。袖部は残るが、火床は確認できなかった。P4は貯蔵穴と考えられる。 **出土遺物**：カマド周辺の床面上で土

器が出土している。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀中頃）とする。

**SB3024** [遺構：図版 2-195・PL54、土器：図版 3-90・PL212、石器：図版 3-217・PL280]

**位置**：Ⅱ R 02・03 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3022・3023。(新) SB3025、SD3005。 **埋土**：2・3層が硬質で、埋没過程は段階的であった可能性もある。黒褐色土を主体とする複層。 **構造**：平面隅丸方形か。柱穴はない。床面は西側に傾斜気味で、床を掘りぬいた可能性もある。 **カマド**：北壁にあり、煙道部に礫が貼られていた。天井石などの構築材が住居中央部の床面上で出土している。 **出土遺物**：カマド周辺部に多い。石製紡錘車が出土している。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀前半）とする。

**SB3026** [遺構：図版 2-196・PL54、土器：図版 3-90・PL212]

**位置**：Ⅱ R 07・08 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黄褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3027。 **埋土**：黄褐色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸不整形。柱穴はない。床は地山を整地したもの。 **カマド**：北西壁中央にあり、袖土が残る。火床は残る。 **出土遺物**：カマド上部の上層に流れ込みの土器片が出土している。南西壁際には須恵器高杯が出土した。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀後半）とする。

**SB3028** [遺構：図版 2-196・PL54, 55、土器：図版 3-91・PL212]

**位置**：Ⅱ R 08 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) SB3026。 **埋土**：黄褐色土を主体とする複層である。カマド構築材の崩落土が広範囲に広がっている。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴はない。床は黒褐色土を使用した貼り床。カマド東側には、甕を埋設した貯蔵施設がある。 **カマド**：北壁中央やや東寄りにあり、袖の芯材となる角礫が左右に残る。 **出土遺物**：カマド周辺に散在する。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀中頃）とする。

**SB3030a** [遺構：図版 2-196・PL55、土器：図版 3-91・PL212、石器：図版 3-203・PL276]

**位置**：Ⅱ R 12・13 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黄褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3030b。(新) SB3032。(不明) SB3050。 **埋土**：黄褐色土の単層を基本とする。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴が4基ある。床は貼床。カマド西側にあるピットは袖石の抜き取り痕跡か。北東壁際に周溝がある。南東壁際には痕跡が残る。 **カマド**：北壁中央にあり、火床が残る。 **出土遺物**：埋土中に土器片がみられたが、床上での出土はない。 **時期**：古墳時代後期（6世紀代）。

**SB3031** [遺構：図版 2-197・PL55、土器：図版 3-91・PL212]

**位置**：Ⅱ R 12・17 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3036、SD3006。(新) SB3032。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面方形。柱穴は3基検出し、南東側の1基はSD3006の埋土内で検出ができなかった。床は貼床で、掘方を持つと推測されるが、SD3006の埋土と明確に区別できなかった。 **カマド**：北壁中央にあり、袖石、天井石、支脚石が残る。支脚石上には土師器甕が自立した状態で検出された。 **出土遺物**：カマド部およびその周辺からの出土が多い。カマド東側床面からは、完形の土師器杯が一括出土した。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀前半）とする。

**SB3032** [遺構:図版 2-198・PL55、土器:図版 3-92・PL213]

**位置**: II R 12・13 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3036・3031、SD3006。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸長方形。柱穴は4基ある。床は貼床で、掘方を持つと推測されるが、SD3006埋土と明確に区別できなかった。このため、北西側は床を掘り抜いた可能性が高い。 **カマド**: 北壁中央にあり、袖土が一部残る。火床は明確である。 **出土遺物**: 床面からの出土が多い。 **時期**: 出土土器から奈良時代(8世紀中頃)とする。

**SB3038** [遺構:図版 2-200、土器:図版 3-93・PL213、石器:図版 3-209, 223・PL278, 282]

**位置**: II R 17・18 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3002・3036。(不明) SB3039。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸長方形。柱穴はない。床はカマド前で貼床を確認したが、掘方はない。 **カマド**: 北壁中央にあり、火床は残る。左袖には袖石が残る。カマドに利用されたと考えられる礫がカマド前面から出土している。 **出土遺物**: 南壁際で磨製石斧が床面上で出土している。混入か。 **時期**: 出土土器から奈良時代(8世紀中頃)とする。

**SB3042** [遺構:図版 2-201・PL55, 56、土器:図版 3-93・PL213, 214、石器:図版 3-212]

**位置**: II R 18・19 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。北側は床を掘り下げ過ぎていた。 **重複関係**: (旧) SB4070、SD3006。(新) SB3043。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸長方形。柱穴は2基ある。床は地山を利用し、掘方はない。 **カマド**: 北壁中央にあり、袖石、天井石、袖土、火床が良好に残る。 **出土遺物**: カマド周辺に甕、杯などがほぼ完形で出土している。 **時期**: 出土土器から古墳時代後期(7世紀前半)とする。

**SB3043** [遺構:図版 2-202・PL56、土器:図版 3-93・PL214、金属製品:図版 3-254・PL291]

**位置**: II R 23・24 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3042・4070、SD3006。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸長方形。柱穴は4基あり。床は地山を利用、掘方はない。 **カマド**: 北壁中央西寄りにある。火床は残っていない。カマドに利用されたと考えられる礫が出土している。 **出土遺物**: 床面に散乱する。 **時期**: 出土土器から平安時代(9世紀前半)とする。

**SB3045** [遺構:図版 2-203・PL56、土器:図版 3-94・PL214、石器:図版 3-223・PL282、金属製品:図版 3-259]

**位置**: II W 04・09 グリッド。 **検出**: IV層上面で住居形とカマドを確認し、十字ベルトにて土層の堆積状況の把握を行った。 **重複関係**: (旧) SB3046・3047 **埋土**: 黒色土を主体とする土が堆積し、床面直上は黄褐色土を主体とする。自然堆積と考える。 **構造**: 平面長方形を呈する。南壁東側に方形の突出部が認められる。北壁はSB4046埋土を切って構築しているが、その他は地山成形。東西壁は床面より斜位に立ち上がる。柱穴はカマド前面に1基のみ確認した。床はわずかな硬化面を持つ。 **カマド**: 北壁中央にあり、両袖石および煙道部が残存する。火床も確認された。袖から奥壁に至るまで礫が並ぶ。 **出土遺物**: カマド付近と壁際より出土する。 **時期**: 出土土器から平安時代(10世紀前半)と考える。

**SB3046** [遺構:図版 2-203・PL57、土器:図版 3-94、石器:図版 3-204・PL276、金属製品:図版 3-273・PL299]

**位置**: II W 03・04 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3047・3048・3052・3054。(新)SB3045。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸長方形。

柱穴は確認されない。床は地山を踏み固めて利用。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床は残る。袖石および袖構築材が残る。 **出土遺物**：カマド周辺から出土している。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀中頃）とする。

**SB3047** [遺構：図版 2-204, 205・PL57、土器：図版 3-94, 95・PL214, 215、石器：図版 3-232・PL283、金属製品：PL299]

**位置**：II W 03・08 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3048。(新) SB3046。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基確認された。南壁中央にピットがあり、出入り口施設に伴うものか。床は貼床で、掘方を持つ。床下で方形に配置された柱穴4基を検出した。壁際に周溝がめぐり、P3・4に向かって間仕切状の溝が延びる。床下の小規模な方形配置するピット4基は未知の住居跡に伴う柱穴と考えられる。 **カマド**：北壁ほぼ中央と右隣りにあわせて2基検出される。 **出土遺物**：カマド周辺と床下から出土している。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀中頃）とする。

**SB3048** [遺構：図版 2-205・PL57、土器：図版 3-95・PL215]

**位置**：II W 03・08 グリッド。 **検出**：IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) SB3046・3047。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は2基確認され、SB3047の床下ピットと併せて、4基のピットで構成される。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖が一部残る。 **出土遺物**：P1等から出土している。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀後半）とする。

**SB3049** [遺構：図版 2-206、土器：図版 3-95・PL215、金属製品：図版 3-251・PL290]

**位置**：II R 14・19 グリッド。 **検出**：IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) SD3005。 **埋土**：黒色土を主体とし、地山の黄褐色土粒を含む複層。 **構造**：平面隅丸方形か。柱穴は2基確認された。貼床で掘方はない。南壁中央付近のピットは出入口施設の可能性がある。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床、袖、天井石が残る。 **出土遺物**：南側中央の床面上から土師器甕2点が潰れて出土している。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀中頃）とする。

**SB3050** [遺構：図版 2-207、土器：図版 3-96・PL215]

**位置**：II R 08・13 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3051・3030、SK3080。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基確認された。柱穴の底面形は長楕円形である。カマド部分のみ貼床が施され、床下には掘方がある。 **カマド**：北壁中央にある。袖石、構築材が一部残る。火床は確認された。 **出土遺物**：床面に散見される。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀前半）とする。

**SB3052** [遺構：図版 2-208・PL57、土器：図版 3-96・PL216、石器：図版 3-210・PL278、金属製品：図版 3-259・PL293]

**位置**：II W 04・05 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3054。(新) SB3046。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基確認された。貼床が施され、掘方がある。周溝は南東隅で確認できた。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖石、構築材は残らない。火床は確認された。 **出土遺物**：カマド上部及び南東隅床面から出土する。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀前半）とする。

**SB3055** [遺構:図版 2-209・PL58、土器:図版 3-97・PL216、金属製品:図版 3-260, 263, 272・PL293, 294, 298]

**位置**: III H 03 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3082・3083・3066。(新) SB0078・0079・3061。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面隅丸方形。柱穴は掘方調査時に4基確認された。貼床が施され、掘方がある。南壁中央に外側に膨らむ箇所がある。 **カマド**: 北壁ほぼ中央にあり、煙道が残る。袖や火床は確認できないが、住居中央部に袖石利用と推定される礫が出土している。 **出土遺物**: カマド手前の床面に多い。 **時期**: 出土土器から奈良時代(8世紀中頃)と考える。

**SB3056** [遺構:図版 2-210・PL58、土器:図版 3-97, 98・PL216、金属製品:図版 3-260・PL293]

**位置**: III C 19 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3070・3057。(不明) SB3220。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする単層である。人為埋没か。 **構造**: 平面隅丸方形。柱穴は3基確認された。床は硬質な部分が一部あるが分かりづらく、結果的にSB3070の床面まで掘り下げている。 **カマド**: 東壁中央よりやや南にあり、袖石や火床が残る。燃焼部に炭化物・灰・焼土を多量に含んでいる。 **出土遺物**: カマド部とカマド南側床面に集中する。 **時期**: 出土土器から平安時代(10世紀前半)と考える。

**SB3059** [遺構:図版 2-211, 212・PL21, 58、土器:図版 3-99・PL216, 217、金属製品:図版 3-254]

**位置**: II C 02・03 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3087, ST3001, SK3241。(新) SK3197。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面方形。柱穴は4基あり、床は貼床で、掘方がある。周溝は西壁側で確認された。 **カマド**: 北壁中央にあり、煙道は攪乱を受けている。袖は角礫を芯材として黒褐色土を貼り付けている。火床が確認できた。 **出土遺物**: 埋土中から鉄製品の破片が出土している。 **時期**: 出土土器から奈良時代(8世紀中頃)と考える。

**SB3060** [遺構:図版 2-212・PL59、土器:図版 3-99・PL217、石器:図版 3-211・PL278]

**位置**: III C 18 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。立ち上り部分が不明瞭な部分がある。 **重複関係**: (旧) SB3097・3062・0174。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 平面方形。柱穴はない。床はカマド前面に硬化面がある。 **カマド**: 東壁ほぼ中央にある。袖は部分的に残る。火床が確認できない。 **出土遺物**: 床面に散在する。 **時期**: 出土土器から平安時代(10世紀前半)と考える。

**SB3061** [遺構:図版 2-213・PL59、土器:図版 3-99, 100・PL217]

**位置**: III C 22・23 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SB3055・3082。(新) SB3071。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 他遺構との重複で平面形は不明瞭であるが隅丸長方形か。柱穴はない。床は不明瞭である。 **カマド**: 東壁中央よりやや南にある。袖石が部分的に残り、天井石がある。火床が確認できない。 **出土遺物**: カマド内と前面から出土している。 **時期**: 出土土器から平安時代(10世紀前半)と考える。

**SB3065** [遺構:図版 2-215, 216・PL59、土器:図版 3-101・PL217, 218、石器:図版 3-206, 245・PL277, 288、金属製品:図版 3-260・PL293]

**位置**: II C 03・04 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧)

SK3251。(新)SD3001・3002・3003・3004、SK3252・3186・3232。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面方形。柱穴は4基ある。床は貼床であるが、中心部の掘方はほとんどない。周溝は全周し、カマド両袖の外側にピットが確認されている。 **カマド**：北壁中央よりやや東にある。袖はわずかに住居内に地山が突き出るようであり、火床は残る。 **出土遺物**：カマドの東側周溝沿いに長胴甕が正位で埋置されている。カマド部前面に集中する。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀前半）と考える。

**SB3067** [遺構：図版 2-217・PL60、土器：図版 3-102・PL218, 219、石器：図版 3-205, 220, 223・PL281, 282]

**位置**：Ⅲ C 13・18 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧)SB3081・3084・3088・3097。(新)SK3279。 **埋土**：黒色土を主体とした複層である。 **構造**：平面方形。柱穴は4基検出された。床は不明瞭で、掘方を持たない。南壁中央のP4は出入口施設か。 **カマド**：北壁ほぼ中央と考えられる。火床が残り、周辺では礫が散在する。 **出土遺物**：カマド部前面に集中する。 **時期**：出土土器には奈良時代（8世紀）と平安時代（10世紀）が混在するが平安時代とする。

**SB3070** [遺構：図版 2-218・PL60、土器：図版 3-103・PL219]

**位置**：Ⅲ C 19・20 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧)SB3057。(新)SB3056。(不明)SK3220。 **埋土**：黒色土を主体とした複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基ある。床は黄褐色土を主体とした貼床で、掘方を持たない。周溝は全周しない。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖石、黄褐色土の袖土、火床が残る。 **出土遺物**：カマド内外で土師器甕、壺、杯等がまとまって出土している。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB3072** [遺構：図版 2-219・PL60、土器：図版 3-103・PL219]

**位置**：Ⅲ C 13・14 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧)SB3086・3084・3088・4035。(新)SB3073。 **埋土**：黒色土と地山を主体とした複層である。 **構造**：平面方形。柱穴は4基ある。床は僅かな硬化面を床とし、貼床はないが、掘方を持つ。周溝は全周しない。南壁中央のピットは出入口施設に関連すると思われる。 **カマド**：北壁ほぼ中央に煙道部が確認された。付近で焼土層が検出されているが明確な火床とまではならない。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀前半）と考える。

**SB3080** [遺構：図版 2-221・PL61、土器：図版 3-104、金属製品：図版 3-255・PL291]

**位置**：Ⅲ C 12・13 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧)SB3074・3069・3099。(新)SD3004。 **埋土**：黒色土を主体とした層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴はない。床は地山整地で顕著な硬化面は確認されない。 **カマド**：北壁ほぼ中央に構築材の広がりが出土している。西側の袖の一部が残り、火床の痕跡は認められなかった。 **出土遺物**：鉄鏃4点が出土している。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀）と考える。

**SB3081** [遺構：図版 2-221・PL61、土器：図版 3-104・PL219、石器：図版 3-223, 224・PL282、金属製品：図版 3-260]

**位置**：Ⅲ C 12・13 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧)SB3097・3098・3098b。(新)SD3067・3004。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面不整形で、南東側が張り出す。柱穴は掘方調査時に5基確認した。床は明瞭でない。周溝は一部にある。 **カマド**：北壁ほぼ中央にあり、袖土、袖石、火床が認められた。 **出土遺物**：北東隅の柱穴周辺で出土し

ている。 **時期**：出土土器から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB3086** [遺構：図版 2-222・PL61、土器：図版 3-105・PL219、金属製品：図版 3-253・PL290]

**位置**：Ⅲ C 09・14 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を主体として黄褐色土を多量に含む土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4035。(新) SD3072、SB4036。 **埋土**：黒褐色土を主体として黄褐色土を多量に含む複層である。 **構造**：平面方形で、柱穴はない。床は黄褐色土を主体とした土の貼り床であるが、硬質部は少ない。 **カマド**：北壁ほぼ中央にあり、袖土、袖石、火床が認められた。 **出土遺物**：カマド崩落土内に甕の破片が出土した。 **時期**：出土土器から奈良時代（8世紀後半）以降と考える。

#### 4区

**SB4001** [遺構：図版 2-223・PL62、土器：図版 3-106・PL220、金属製品：図版 3-252, 255・PL290, 291]

**位置**：Ⅲ D 22・23 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4002、SK4246・4247。(新) SD0007。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**：平面隅丸方形で、柱穴はない。床は全体に薄い貼り床である。 **カマド**：不明。 **出土遺物**：床面よりやや高い位置から銅印が出土している。 **時期**：出土土器から平安時代（9世紀末～10世紀前半）と考える。

**SB4004** [遺構：図版 2-223・PL62、土器：図版 3-106・PL220、金属製品：図版 3-267・PL296]

**位置**：Ⅲ D 17 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SM4001、ST4008、SK4247・4187・4157・4166・4237・4238。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形で、柱穴はない。床は地山を敲いている。北側に大形のピットが2基ある。 **カマド**：東壁中央にあり、地山掘り残しの袖と天井石、火床がある。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。右袖寄りに土師器杯類が多く出土した。 **時期**：出土土器から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB4005** [遺構：図版 2-224・PL62, 63、土器：図版 3-106・PL220]

**位置**：Ⅲ D 12・17 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SM4001、SK4147・4231・4266。 **埋土**：黒色土を主体とする。人為的埋没か。 **構造**：平面不整形方形で、柱穴はない。床は貼床である。 **カマド**：東壁中央にある。左袖の地山掘り残し部分のみ残存する。掘方ではカマド左脇が一段高く残る。 **出土遺物**：全体の出土量は少なく、南東隅付近とカマド内に土師器類がややまとまる。 **時期**：出土土器から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB4006** [遺構：図版 2-224、土器：図版 3-106, 107・PL220]

**位置**：Ⅲ D 13 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) ST4002。(不明) SK4156。 **埋土**：黒色土を主体とする。礫の出土状況から人為的埋没。 **構造**：平面隅丸方形で、柱穴はない。素掘りで地山上面が床になる。 **カマド**：南東壁隅にあり、火熱を受けた破碎礫が散乱している。 **出土遺物**：カマド周囲で土師器類が出土している。 **時期**：出土土器から平安時代（9世紀後半）と考える。

**SB4007** [遺構：図版 2-225・PL63、土器：図版 3-107・PL220]

**位置**：Ⅲ D 01・06 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4008、SK4173。(新) SD0007。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面長方形で、柱穴はない。

床は地山敲きで硬化面は認められない。貯蔵穴と推測されるピットが2基確認された。 **カマド**：東壁中央よりやや南寄りにあり、火床は薄く、袖石が一部残る。床下調査時に袖石、支脚石の抜き取り痕跡を確認した。 **出土遺物**：P1埋土中上位で完形の黒色土器が出土した。 **時期**：出土土器から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB4009** [遺構：図版 2-225・PL63、土器：図版 3-107, 108・PL220]

**位置**：Ⅱ X 23・24 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4021、SK4023。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形で、柱穴はない。床は地山敲きで硬化面は認められない。 **カマド**：北壁ほぼ中央にあり、火床は残らない。袖石の残りは良い。 **出土遺物**：カマド内および周囲からの出土が多い。中央部床面から火熱を受けた礫がまとまって出土している。須恵器大甕片もみられる。 **時期**：出土土器から平安時代前期（9世紀前半）と考える。

**SB4010** [遺構：図版 2-226・PL63、土器：図版 3-108・PL221]

**位置**：Ⅱ W 25・X 21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4012、SK4203。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面不整形で、柱穴はない。床は地山敲きで硬化面は認められない。 **カマド**：東壁中央よりやや南寄りにあり、火床は残らない。袖石と天井石の残りは良く、支脚石が自立している。 **出土遺物**：カマド周囲からの出土が多い。カマド前面から灰釉陶器が出土している。 **時期**：出土土器から平安時代後期（10世紀前半）と考える。

**SB4011** [遺構：図版 2-226・PL64、土器：図版 3-109・PL221]

**位置**：Ⅱ X 06・07 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) SD4002、ST4006。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面不整形で、柱穴はない。床に貼床はなく、地山の整地か。 **カマド**：東壁南寄りにあり、火床は残らない。袖石と天井石の残りは良く、袖石の抜き取り痕跡も得られた。 **出土遺物**：カマド周囲からの出土が多い。 **時期**：出土土器から平安時代後期（10世紀前半）と考える。

**SB4012** [遺構：図版 2-227・PL64、土器：図版 3-109・PL221、金属製品：図版 3-255, 260・PL293]

**位置**：Ⅱ W 25・X 21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4062。(新) SB4010・4061、SD0007・4002。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面方形で、床は貼床で、掘方を持つ。主柱穴は4基で構成され、他のピットは建て替えに伴う柱穴の可能性もある。周溝が北壁に部分的に残る。 **カマド**：北壁中央に煙道と考えられる突出部が2カ所ある。カマドの造り直し。袖、火床は残らない。 **出土遺物**：遺物量は少ない。 **時期**：出土土器から古墳時代後期（6世紀後半から7世紀初め）と考える。

**SB4014** [遺構：図版 2-228・PL64、土器：図版 3-109]

**位置**：Ⅲ D 16・17 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4030。(新) SD0007、ST4008。 **埋土**：黒色土を主体とする複層で、カマド前面に袖土と同様の構築土が広がっていた。 **構造**：平面長方形で、柱穴はない。床は掘方埋土上面で、やや硬化している。周溝は東壁・南壁で確認された。 **カマド**：北壁東寄りにある。袖、煙道部の残りは比較的良い。袖土は被熱赤化し、トンネル状の煙道が確認された。 **出土遺物**：床面からの出土。 **時期**：出土土器から古墳時代

後期（7世紀前半）と考える。

**SB4015a・b** [遺構：図版 2-229, 230・PL64, 65、土器：図版 3-109, 110・PL221、石器：図版 3-217, 224, 242・PL280, 282, 287、金属製品：図版 3-255, 268, 271・PL296]

**位置**：Ⅱ S 17・18 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。当初一軒として調査にあたり、カマドが2基確認されたところから、住居の拡張を想定した。**重複関係**：(旧) SB4016、SD4006。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面不整形で、柱穴は4基ある。床は貼床で、深い掘方を持つ。**カマド**：北壁ほぼ中央とその西側にもう1基ある。西側のカマドが古い。**出土遺物**：床面から多くの土器、石器、鉄製品が出土。**時期**：出土土器から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB4020** [遺構：図版 2-231・PL65, 66、土器：図版 3-110, 111, 112、金属製品：図版 3-260]

**位置**：Ⅱ X 18・19 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(新) SB4019。(不明)ST4003。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面方形か。柱穴は4基で、掘方調査で確認した。床は貼床の硬化面がある。周溝は北西隅付近にのみ確認できた。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖石、火床が残る。**出土遺物**：カマド内および周囲にまとまっている。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀前半）と考える。

**SB4024** [遺構：図版 2-233・PL66、土器：図版 3-112、金属製品：図版 3-273]

**位置**：Ⅱ X 11・16 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：なし。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基ある。床は一部に硬化面が確認され、掘方を持つ。北壁の一部に周溝が残る。**カマド**：北壁ほぼ中央にあり、袖は地山削り出しで残る。火床は確認されず、支脚石を据えた跡が検出された。**出土遺物**：ごくわずか。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（6世紀後半）か。

**SB4025** [遺構：図版 2-234、土器：図版 3-113・PL222、金属製品：図版 3-263, 266・PL294, 295]

**位置**：Ⅲ D 04・09 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(新) SD4001。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面方形か。柱穴は1基を確認した。床は貼り床で、掘方を持つ。北壁際に小ピットが検出された。**カマド**：北壁にあり、袖は地山削り出しで残る。火床は確認されず、燃焼部が窪む。**出土遺物**：北西隅から焼印が出土している。**時期**：出土遺物から平安時代(9世紀前半)とする。

**SB4026** [遺構：図版 2-235・PL66、土器：図版 3-113・PL222、石器：図版 3-212、金属製品：図版 3-252・PL290]

**位置**：Ⅱ X 07・12 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：なし。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面方形。柱穴は4基を確認した。床は一部に硬化面が観察された。掘方を持つ。**カマド**：北壁ほぼ中央にあり、袖石が残る。火床はわからない。**出土遺物**：P1内から石錘がまとめて検出され、耳環が埋土中から出土している。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（6世紀中頃）か。

**SB4027** [遺構：図版 2-236、土器：図版 3-113, 114・PL222、金属製品：図版 3-266, 273・PL295, 299]

**位置**：Ⅱ X 22 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(旧)

SM4003。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面方形。柱穴はない。床は地山敲きで、掘方はない。P2の底から焼土層が認められた。 **カマド**：確認されない。 **出土遺物**：東壁際の床直上に、土師器、骨などが出土している。 **時期**：出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考える。

SB4028 [遺構：図版 2-237・PL66、土器：図版 3-114・PL222、石器：図版 3-211・PL278]

**位置**：Ⅲ D 16・21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土と黄色土のブロックが混入する土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4030。 **埋土**：黒色土と黄色土のブロックが混入する土が主体の複層である。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴はない。床は中央部のみ堅く、掘方は浅い。 **カマド**：北西壁中央のやや西寄りにある。袖等は残らない。 **出土遺物**：ごくわずか。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀代）と考える。

SB4034 [遺構：図版 2-236、土器：図版 3-114、石器：図版 3-245]

**位置**：Ⅲ C 10・15 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4032。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面方形。柱穴はない。床は硬化面が認められず、掘方は浅い。カマド右横に貯蔵穴と考えられるピットが検出された。 **カマド**：北西壁中央のやや北寄りにある。黒色土を利用した袖が残り、掘方調査時に、袖石の抜き取り痕跡が認められた。火床は残る。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。 **時期**：出土遺物から奈良時代（8世紀）と考える。

SB4036 [遺構：図版 2-237・PL67、土器：図版 3-114, 115・PL222, 223]

**位置**：Ⅲ C 09・10 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(新) SK4286・4256。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面長方形。ピット3基は柱穴かどうか不明である。床はカマド周辺に硬化面が認められた。掘方は浅い。 **カマド**：北西壁中央のやや北寄りにある。火床は認められない。袖は地山掘り残しに、褐色土を利用した袖土と角礫の袖石が残る。 **出土遺物**：床面に散在する。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（6世紀中頃）と考える。

SB4037 [遺構：図版 2-238・PL67、土器：図版 3-115・PL223、金属製品：図版 3-255, 264, 271, 273, 274・PL294, 298, 299]

**位置**：Ⅲ C 10・D 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB4038・4066・4063。(不明) SK4279。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面方形。柱穴はない。床は硬化面が認められた。掘方はSB4038埋土上面がそれにあたり、上端が硬化している。焼土を伴うピットが2基検出され、鍛冶炉と判断した。 **カマド**：東壁中央より南寄りにある。火床は認められたが、袖は残っていない。 **出土遺物**：鉄滓、羽口、鉄製品が出土している。炉との関連から、鍛冶工房跡と考えられる。灰釉陶器碗や土師器類も出土している。 **時期**：出土遺物から平安時代(10世紀中頃)と考える。

SB4039 [遺構：図版 2-239, 240、土器：図版 3-115, 116, 117・PL223, 224、石器：図版 3-247・PL288、金属製品：図版 3-253, 260, 264, 265・PL290, 293, 294, 295]

**位置**：Ⅲ C 04・09 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB3095。(新)SB3090,SD3004。(不明)SK3206・4278。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面長方形。柱穴は4基確認できる。床に明確な貼床はなく、わずかな硬化面を確認した。南壁中央部では壁が外へ張り出すとともに、付近に2基のピットとこれらを繋ぐ溝跡が残り、出入口施設の痕跡と考え

られる。また、掘方があり、方形に並ぶピット4基を検出したため、別遺構が存在した可能性が考えられる。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床、袖、煙道が残る。周溝はカマドを除き全周する。**出土遺物**：北東隅に土器がまとまって出土している。**時期**：出土遺物から奈良時代（8世紀中頃）と考える。

**SB4040** [遺構：図版 2-241・PL67, 68、土器：図版 3-117・PL224、石器：図版 3-212, 245・PL288]

**位置**：Ⅱ W 15・20 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で褐色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(新) SB4168。**埋土**：褐色土を主体とする複層である。**構造**：平面長方形。柱穴は2基確認できる。床は明確でない。また、竪穴住居跡の外周に柱穴が14基確認されている。床下に径2m程度の土坑が確認された。**カマド**：東壁中央よりやや南寄りにある。地山削り残しの袖と火床が残る。袖の内側が一部焼けている。**出土遺物**：カマド周囲と床面に集中する。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀中頃）と考える。

**SB4041** [遺構：図版 2-242・PL68、土器：図版 3-118・PL224, 225、石器：図版 3-224、金属製品：図版 3-255・PL291]

**位置**：Ⅱ S 16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で褐色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(旧) SB6025、SD4006。(新) SK4170。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面長方形。柱穴は4基確認できる。床は掘方埋土上面となる。周溝はカマドを除き全周する。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床、袖が残る。構築材は灰褐色土である。**出土遺物**：カマド周囲に集中する。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB4042** [遺構：図版 2-243]

**位置**：Ⅱ X 16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**：(旧) SM4005。**埋土**：黒色土を主体とする複層である。**構造**：平面長方形。柱穴はない。床は地山で、硬化面は認められない。**カマド**：なし。**出土遺物**：ごくわずか。**時期**：奈良時代以降か。

**SB4047** [遺構：図版 2-245・PL68、石器：図版 3-249]

**位置**：Ⅱ W 14・19 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。**重複関係**：(新) ST4010。**埋土**：黒色土を主体とする。**構造**：平面長方形。床はあまり硬化していない。柱穴は4基か。**カマド**：北壁中央東寄りにある。袖は暗褐色土で構築され、火床は残る。周溝は一部で途切れるが、ほぼ全周する。**出土遺物**：少ない。**時期**：時期不明。

**SB4057** [遺構：図版 2-246、土器：図版 3-118・PL225、金属製品：図版 3-252, 255・PL290]

**位置**：Ⅱ R 19・20 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土と黄褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SD4006。**埋土**：黒色土と黄褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形。床は不明。柱穴は4基確認された。南壁際中央に検出されたピットは出入口施設に関連すると考えられる。P4と西壁間の溝は、間仕切りの可能性がある。**カマド**：北壁中央東寄りにある。袖は残らず、焼土が散見されるが、明確な火床は確認できない。周溝はほぼ全周する。**出土遺物**：耳環が出土している。**時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀代）と考える。

**SB4058** [遺構：図版 2-247、土器：図版 3-119・PL225]

**位置**：Ⅲ D 07 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土を確認する。一部床面が露出していた。**重複関係**：

(旧) SB4067・4063、SK4162・4257・4258・4259。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は不明。柱穴はない。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖石が一部残る。火床は確認できない。 **出土遺物**：カマド内に集中する。 **時期**：出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB4059** [遺構：図版 2-248・PL68、土器：図版 3-119、120]

**位置**：Ⅱ W 20・X 16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SK4299。(新) SD4002、SK4235。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は地山を敲きしめたもの。柱穴は4基確認された。南壁中央が張り出し、出入口部と考えられる。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖石や天井石が残る。火床は確認された。 **出土遺物**：カマド西側に土師器甕・壺、須恵器甕が並置されている。 **時期**：出土遺物から奈良時代（8世紀初め）と考える。

**SB4061** [遺構：図版 2-250・PL69、土器：図版 3-120・PL225]

**位置**：Ⅱ W 25 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。南側をSD4002に大きく壊されている。 **重複関係**：(旧) SB4012。(新) SD0007・4002。(不明) SK4235。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形か。床は不明瞭である。柱穴はない。 **カマド**：東壁南寄りにある。袖石が確認されたが、火床は認められない。 **出土遺物**：カマド周囲にまとまって出土している。 **時期**：出土遺物から平安時代（10世紀前半）と考える。

**SB4063** [遺構：図版 2-249、250・PL69、土器：図版 3-121・PL226、石器：図版 3-217、219・PL280、281、金属製品：図版 3-271]

**位置**：Ⅲ D 06・07 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB4066・4067、SK4257。(新) SD0007。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床である。柱穴は4基確認された。南壁中央が張り出し、出入口部と考えられる。周溝は西壁、南壁にある。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。左袖石が残るが、火床は認められない。 **出土遺物**：石製紡錘車や土器類が出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀代）と考える。

**SB4064** [遺構：図版 2-250・PL69、土器：図版 3-121・PL226、石器：図版 3-234、金属製品：図版 3-265・PL295]

**位置**：Ⅱ R 20 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SD4006。(新) SD4004。 **埋土**：暗褐色土を主体とし、砂礫が多く混じる。 **構造**：平面方形。床は不明瞭である。柱穴はない。南壁際中央にピット2基が検出され出入口施設に関連すると考えられる。P3に土師器甕が埋置されている。 **カマド**：北壁ほぼ中央と推測する。袖石と思われる整形された軽石を検出した。火床は認められない。 **出土遺物**：床面に散乱する。 **時期**：出土遺物から奈良時代（8世紀代）と考える。

## 5区

**SB5002** [遺構：図版 2-252、土器：図版 3-122・PL226]

**位置**：Ⅱ M 17・18 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SD5007・5008。(新) SB5002、ST5008、SK5022・5023・5025。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で、壁際を除く床面が硬く締められている。柱穴は2基を確認した。 **カマド**：北西壁中央にある。左袖が残り、石を芯材とし、暗褐色の粘土を貼りつけて構築している。 **出土遺物**：少量出土。 **時期**：出土遺物から奈良時代（8世紀前半）か。

**SB5007** [遺構:図版 2-257・PL72、土器:図版 3-52, 124、石器:図版 3-212, 224, 249・PL279, 289、金属製品:図版 3-271・PL298]  
**位置**: II M 18・19 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧)SB5008・5037。(新)SK5006。(不明)SK5255。 **埋土**: 黒褐色土の単層。 **構造**: 平面長方形。床は住居中央部・カマド付近が硬く、他は明確でない。 **カマド**: 北壁中央にある。破壊を受けているが、火床が認められた。 **出土遺物**: 小形砥石、敲石が出土している。東隅に面取りされた軽石が出土し、カマド支脚石と考えられる。 **時期**: 出土遺物から奈良時代(8世紀後半)と考える。

**SB5008** [遺構:図版 2-258・PL72、土器:図版 3-124、石器:図版 3-211・PL278、金属製品:図版 3-268・PL296]  
**位置**: II M 18・19 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**: (旧)SB5037。(新)SB5007、SK5225。 **埋土**: 黒色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。柱穴は4基確認され、床は壁際を除き硬い。周溝は西半分で検出された。 **カマド**: 北東壁中央やや東寄りにある。黒褐色の粘土がカマド付近で堆積していた。破壊を受けているが、火床が認められた。 **出土遺物**: カマド内から台石、床直上で須恵器杯蓋が出土している。 **時期**: 出土遺物から奈良時代(8世紀)と考える。

**SB5009** [遺構:図版 2-259、土器:図版 3-125・PL227、石器:図版 3-217・PL280]  
**位置**: II M 24・25 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土と褐色土を確認する。 **重複関係**: (新)SB5007、SK5105・5021・5024。 **埋土**: 黒色土と褐色土を主体とする。 **構造**: 平面長方形。柱穴は1基確認され、床は壁際を除き、床面は硬く敲き締められている。 **カマド**: 北東壁中央東寄りに位置する。破壊されたカマドの構築材が広がる。袖は地山削り出しである。 **出土遺物**: カマド周囲にはほぼ完形の土師器杯が出土している。石製紡錘車あり。 **時期**: 出土遺物から古墳時代後期(6世紀)か。

**SB5011** [遺構:図版 2-261・PL74、土器:図版 3-126・PL228、石器:図版 3-210, 212, 217, 219, 224・PL279, 282、金属製品:図版 3-260, 263・PL293, 294]  
**位置**: II C 24・25 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**: (旧)SB5012、SK5019・5082・5333。 **埋土**: 黒色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。柱穴は4基確認され、床は貼床である。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。袖は地山削り出しで、袖石と火床が残る。支脚石が残存している。周溝は全周する。 **出土遺物**: 刀子が周溝から出土している。 **時期**: 出土遺物から古墳時代後期(7世紀)か。

**SB5012** [遺構:図版 2-262・PL74、土器:図版 3-126・PL228、石器:図版 3-212, 220・PL281、金属製品:図版 3-260・PL293]  
**位置**: II C 24・H 04 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土を確認する。調査区外へ広がる。 **重複関係**: (新)SB5011。 **埋土**: 黒色土を主体とする。 **構造**: 平面方形か。柱穴は3基確認され、平面形は長方形である。床は貼床で、周溝がめぐる。 **カマド**: 北壁ほぼ中央部と推定。 **出土遺物**: 石錘が南壁際でまとめて出土している。 **時期**: 出土遺物から古墳時代後期(7世紀後半)と考える。

**SB5013** [遺構:図版 2-263・PL74、土器:図版 3-127・PL228、金属製品:図版 3-269・PL297]  
**位置**: II H 18・19 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒色土と褐色土を確認する。 **重複関係**: なし。 **埋土**: 黒色土と褐色土を主体とする。明褐色からにぶい橙色の粘土がカマド構築材と利用され、埋土中で確認できる。 **構造**: 平面長方形。柱穴は5基確認され、床は貼床である。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。支脚石が残存するが、火床は残らない。 **出土遺物**: 北東隅で埋土中層に土師器甕・杯、須恵器杯蓋など

が出土している。そのほか鉄鎌が出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期(7世紀末)と考える。

**SB5015** [遺構:図版 2-264・PL74, 75、土器:図版 3-128・PL229]

**位置**：Ⅱ H 23・24 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で灰黄褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5056・5046・5032・5052。(新)SB5016、SD5001。 **埋土**：灰黄褐色土と黒色土を主体とする複層である。 **構造**：平面方形。柱穴は4基確認され、床は貼床である。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖土は褐灰色土である。焼土は残らないが、灰が分布している。 **出土遺物**：カマド東側に土師器甕などが5～6点、南西隅の床下から磨石2点が出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期(6世紀後半)と考える。

**SB5016** [遺構:図版 2-267・PL75、土器:図版 3-128・PL229、石器:図版 3-203・PL276]

**位置**：Ⅱ H 23・24 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で灰黄褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5015・5032・5046・5056・5052。(新) SD5001。(不明) SD5007。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。柱穴は3基確認される。床は貼床で、中央部で明瞭である。 **カマド**：北壁ほぼ中央に灰褐色の構築土が広がる。火床はわずかに検出されている。 **出土遺物**：P3から須恵器壺が出土している。 **時期**：出土遺物から奈良時代(8世紀前半)と考える。

**SB5017** [遺構:図版 2-265・PL75、土器:図版 3-129、石器:図版 3-224, 249, 250・PL282, 289、金属製品:図版 3-256, 261, 269, 271・PL298]

**位置**：Ⅱ M 13・14 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5018・5050・5058・5301・5331、SD5007、SK5327。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。柱穴は8基確認され、床は壁際を除いて貼床で、SB5018を埋めて床を造っている。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。カマド内には、構築材として利用された礫が残り、支脚石2本が検出され、その中央に火床がある。 **出土遺物**：カマド内と床面からの出土が多い。 **時期**：出土遺物から奈良時代(8世紀中頃)と考える。

**SB5018** [遺構:図版 2-266・PL75、土器:図版 3-129、金属製品:図版 3-256, 261]

**位置**：Ⅱ M 13・14 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5050・5058。(新) SB5017、SK5289・5301。(不明) SD5007。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。柱穴は4基確認され、床は貼床で、中央部およびカマド前部分で硬い。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。カマド東側に袖石の抜き取り痕があり、火床が残る。 **出土遺物**：埋土中からの出土が主である。鉄鎌が出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期(7世紀後半)と考える。

**SB5019** [遺構:図版 2-267・PL75, 80、土器:図版 3-52, 129・PL229]

**位置**：Ⅱ M 14・15 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5020・5053・5057、SK5207・5208。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。柱穴は確認されない。床はカマド前が硬い貼床である。 **カマド**：北壁中央東寄りに位置する。袖石と面取りされた軽石製の支脚石が残存する。火床は検出された。 **出土遺物**：須恵器の高杯が出土している。 **時期**：出土遺物から奈良時代(8世紀前半)と考える。

**SB5021** [遺構:図版 2-268・PL76、土器:図版 3-130]

**位置**：Ⅱ C 19・20 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土と黄褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB5022。(新)SK5015・5016。**埋土**：黒色土と黄褐色土の互層からなる。人為的な堆積と考える。**構造**：平面方形。柱穴は2基確認された。床は貼床で、掘方埋土上面に貼っている。**カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は地山削り残しを芯として、先端に袖石を配置する。構築材に褐色～暗褐色土が使われ、支脚の痕跡と火床が残る。カマド掘方底面に褐灰色の粘土が貼りつけてあった。**出土遺物**：カマド内から周辺にかけて、土師器甕5個体以上が潰れて出土した。**時期**：出土遺物から古墳時代後期(7世紀中頃)と考える。

**SB5022** [遺構：図版 2-269, 270・PL76, 77、土器：図版 3-130, 131・PL229, 230、石器：図版 3-212, 224、金属製品：図版 3-252, 256・PL290]

**位置**：Ⅱ C 15・20 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SB5021、ST5001、SK5016・5108・5110・5202・5124。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面方形。柱穴は4基確認され、いずれも断面で柱痕が観察された。床は貼床で、掘方埋土上面を貼っている。南壁中央が外側に張り出し、中央にピットが造られる。**カマド**：北壁中央に位置する。両袖石、天井石がたみ置かれた状況で解体されている。袖は地山削り残しで、先端に袖石を配置する。支脚石痕と火床上面に灰層堆積、焼骨が多数出土している。カマド部は掘方が浅く、掘削段階からカマド位置を決めていたと考えられる。**出土遺物**：カマド内と床面に集中する。床面上で青銅製の鎖、P2内から石錘が出土した。**時期**：出土遺物から古墳時代後期(6世紀中頃)と考える。

**SB5023** [遺構：図版 2-271, 272、土器：図版 3-131・PL230]

**位置**：Ⅱ H 19・20 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黄褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SD5006・5007。**埋土**：黄褐色土を主体とする複層。**構造**：平面方形。柱穴は4基確認された。床は地山敲きで、掘方はない。**カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。礫を芯として、粘土を貼りつけた袖で、カマド前面の床上に天井石と考えられる礫が出土している。火床が残る。**出土遺物**：カマド内および周囲から出土している。P5から土師器壺が出土し、貯蔵穴と考えられる。南西部から石錘(こも網石)が集中して出土した。**時期**：出土遺物から古墳時代(6世紀後半)と考える。

**SB5024** [遺構：図版 2-273、土器：図版 3-132、石器：図版 3-210、金属製品：図版 3-263・PL294]

**位置**：Ⅱ M 23・24 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB5036・5047・5048・6045。(新) SK5003・6073。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面方形。柱穴は5基確認された。床はSB6045、SB6047、SB5048の埋土中に造られた部分が多く、一部に掘方が認められたが、床自体は不明瞭である。**カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖石、天井石の残りが良く、石に黒褐色の土を貼りつけた袖である。火床が残る。**出土遺物**：カマド内や床面から出土している。**時期**：出土遺物から奈良時代(8世紀前半)と考える。

**SB5027** [遺構：図版 2-275, 276・PL77、土器：図版 3-132、金属製品：図版 3-269・PL297]

**位置**：Ⅱ M 20・N 16 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。**重複関係**：(新) SD5001、SK5020・5149。**埋土**：黒色土を主体とする複層。中央部、床面よりやや上位に炭化物を多く含む部分がある。**構造**：平面隅丸方形。柱穴は4基確認された。床は貼床で、掘方がある。南壁がやや外側に張り出す。周溝は一部を除き全周する。**カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖石の残りが良く、石に

灰黄褐色～暗褐色の土を貼りつけている。火床が残る。 **出土遺物**：出土は少ない。住居外であるが鉄鎌が出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB5029** [遺構：図版 2-276・PL77, 78、土器：図版 3-133]

**位置**：Ⅱ M 10・15 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(新) SK5030・5031・5032・5053・5103。(不明) SK5365。 **埋土**：黒色土を主体とする複層。 **構造**：平面隅丸方形。柱穴は P1 の 1 基が確認された。床は貼床で掘方を持つ。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。カマド西側に焼土と炭化物が分布し、火床がわずかに残る。カマド前に 3 基検出された小ピットは、支脚石の抜き取り痕跡か。 **出土遺物**：埋土中から少量出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀代）と考える。

**SB5030** [遺構：図版 2-277・PL78、土器：図版 3-133・PL230、石器：図版 3-211, 212・PL278]

**位置**：Ⅱ M 04・09 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(新) SD5001。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層。 **構造**：平面方形。主柱穴 4 基が確認された。床は貼床で掘方を持つ。南壁際に小ピットがあり、出入り口施設に関連すると考えられる。周溝は、一部途切れるがほぼ全周する。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖先端に袖石を配置し、黒褐色土を貼りつけている。火床は残る。 **出土遺物**：床面から滑石製白玉、土師器小形甑などが出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB5031** [遺構：図版 2-278、土器：図版 3-133・PL230, 231、石器：図版 3-231・PL283]

**位置**：Ⅱ M 05・10 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5054・5055、ST5007。 **埋土**：黒色土を主体とするほぼ単層。検出面から 10cm 程度と掘り込みは浅い。 **構造**：平面隅丸長方形。柱穴はない。床は SB5054 の埋土中に床を造り、その他は地山敲きを床とする。 **カマド**：北壁中央東寄りに位置する。床面に火床、炭化物、灰が一部残る。壁際にはカマドに利用されたと考えられる礫が 2 点残されていた。 **出土遺物**：カマド周囲に集中していた。 **時期**：出土遺物から平安時代（9世紀後半）と考える。

**SB5033** [遺構：図版 2-279・PL78、石器：図版 3-224]

**位置**：Ⅱ C 25・H 05 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SK5306・5307・5308・5309・5310・5311・5312・5318・5319。 **埋土**：黒褐色土を主体とする単層。北西壁が一部残存し、他は埋土が残っていない。 **構造**：平面隅丸方形か。柱穴はない。床面は全面貼床である。 **カマド**：南東、南西隅に火床を検出し、両者の前庭部に灰かき出しと考えられるピットが伴う。2 基のカマドに時間差があるのかは不明である。 **出土遺物**：ごくわずか出土している。 **時期**：出土遺物から平安時代（11世紀）と考える。

**SB5034** [遺構：図版 2-279・PL78, 127、土器：図版 3-134・PL231、石器：図版 3-212]

**位置**：Ⅱ H 25・I 21 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。 **重複関係**：(新) ST5002・5007。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層。 **構造**：平面方形。柱穴は 4 基確認された。床面は全面貼床で、掘方埋土の上面が硬化している。周溝は全周し、間仕切り溝が検出された。 **カマド**：北壁中央やや西寄りに位置する。袖は地山削り残しを芯とし、黒褐色の粘質土を貼っている。 **出土遺物**：石錘、磨石、

滑石製白玉などが出土している。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀前半）と考える。

**SB5035** [遺構：図版 2-280, 281・PL78, 79, 127、土器：図版 3-134・PL231、金属製品：図版 3-262, 267・PL292, 296]

**位置**：Ⅱ I 16・21 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土に地山Ⅳ層ブロックの混じる土を確認する。  
**重複関係**：(旧) ST6025、SK6413。 **埋土**：暗褐色土に地山Ⅳ層ブロックの混じる土を主体とする複層。  
**構造**：平面方形で、柱穴は4基確認された。床面は掘方埋土の上面が硬化した面となる。周溝は一部途切れるが、全周する。東壁側に間仕切り溝が検出された。南壁中央に周溝を切るピットがあり、出入口施設に関連すると考えられる。北東隅には貯蔵穴がある。 **カマド**：北壁ほぼ中央とやや西寄りとで2基を検出した。中央のカマドは袖石と構築材の白色土が残り、新しいと考えられる。一方、旧カマドとした西寄りのカマドは煙道部と火床、袖石の抜き取り痕が認められた。両者に切り合いはないが、構築材の分布が、旧カマドになかった。 **出土遺物**：鉄斧の基部が出土している。出土量が少ない。 **時期**：出土遺物から古墳時代後期（7世紀後半）と考える。

**SB5036** [遺構：図版 2-281、土器：図版 3-134・PL231]

**位置**：Ⅱ M 23・24 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。SB5024に大半を削られている。  
**重複関係**：(旧) SB5047・5048。(新) SB5024、SK5003。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。柱穴は検出されない。床面はSB5047の埋土中に貼床を施したものの。 **カマド**：北壁に位置する。袖石の一部が残る。支脚石抜き取り痕と火床が残る。 **出土遺物**：カマド周囲に集中して出土している。  
**時期**：奈良時代（8世紀前半）。

**SB5039** [遺構：図版 2-282・PL79、土器：図版 3-135]

**位置**：Ⅱ I 11・16 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で褐色土を確認する。 **重複関係**：なし。 **埋土**：褐色土と黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。柱穴は検出されない。床面は貼床と思われる、掘方がある。カマド部を除いて周溝が廻る。 **カマド**：北壁の西寄りに位置する。支脚石と火床が残る。構築材の黒褐色～灰色の土がカマド内に確認された。 **出土遺物**：ごく僅か出土している。 **時期**：古墳時代後期（7世紀後半）か。

**SB5043** [遺構：図版 2-283、土器：図版 3-135]

**位置**：Ⅱ H 10・Ⅰ 06 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5044、SD5006。(新) ST5006。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層。 **構造**：平面方形。柱穴は中央に1基ある。床面は貼床と思われる。 **カマド**：北壁中央に位置すると考えられる。ST5006に破壊されていて全体は不明である。焼土と構築材が周囲に広がっていた。 **出土遺物**：カマド周囲などに集中する。  
**時期**：古墳時代後期（6世紀後半）か。

**SB5045** [遺構：図版 2-284、土器：図版 3-135・PL231]

**位置**：Ⅱ M 10・N 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で灰褐色土を確認する。 **重複関係**：(新)攪乱。 **埋土**：灰褐色土を主体とする。 **構造**：平面楕円形。柱穴はない。床面は明確な貼床で、掘方があり、三面の硬化面が確認された。 **カマド**：北壁中央に位置する。カマド東側の一部を攪乱で、煙道中心部をSKで破壊されている。 **出土遺物**：ごく僅かに出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀代）か。

**SB5048** [遺構:図版 2-285・PL79、土器:図版 3-135・PL231]

**位置**: II M 23・24 グリッド。 **検出**: IV層上面で暗褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧) SB5047。(新) SB5024・5036。 **埋土**: 暗褐色土を主体とする。床面に焼土ブロックの集中、東壁沿いに炭化物の集中する部分がある。 **構造**: 平面横長方形。柱穴は2基ある。床面は明確でなく、一部に浅い掘方がある。 **カマド**: 北壁中央やや東寄りに位置する。暗褐色土の袖の一部と火床がある。支脚石の抜き取り痕跡が残る。カマド煙道部底の掘方に、暗褐色土を貼りつけた痕跡がある。 **出土遺物**: ごく僅かに出土している。 **時期**: 古墳時代後期 (7世紀後半)。

**SB5054** [遺構:図版 2-287・PL80、土器:図版 3-136・PL231, 232、石器:図版 3-212, 243, 249・PL287, 289]

**位置**: II M 05・10 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧) SB5055。(新) SB5031、ST5007。 **埋土**: 黒褐色土を主体とするが、ブロック土の混入があり、一部人為埋没の可能性がある。南西隅付近の床面から炭化物が検出された。 **構造**: 平面横長方形。柱穴は床下で1基検出されている。床面は貼床で、中央付近は硬く、掘方がある。貯蔵穴と考えられるピットが2基ある。周溝は一部を除き全周する。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。袖は地山削り残しを芯とし、にぶい赤褐色土を貼りつけ、左右の袖の先端には礫を配置している。カマド前に袖石に利用されたと考えられる角礫が出土している。カマド燃焼部から煙道部の壁は焼けて赤色化している。 **出土遺物**: カマド内および周囲に集中する。 **時期**: 古墳時代後期 (7世紀前半)

## 6区

**SB6001** [遺構:図版 2-288・PL1, 80、土器:図版 3-137]

**位置**: II S 14 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧) ST6002。 **埋土**: 黒褐色土を主体とし、埋土中にわずかに炭化物、灰の混入が認められた。 **構造**: 平面方形か。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴はない。 **カマド**: 北壁に位置する。袖は地山削り残しで、火床は残らない。 **出土遺物**: カマド内に土師器甕が出土している。南西部に石錘が集中する。 **時期**: 古墳時代後期 (7世紀前半)

**SB6002** [遺構:図版 2-288・PL81、土器:図版 3-137・PL233、石器:図版 3-225、金属製品:図版 3-256・PL291]

**位置**: II N 24・S 04 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: なし **埋土**: 黒褐色土を主体とし、床面に炭化物・材が広がることから、焼失住居か。 **構造**: 平面長方形か。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴はない。周溝は検出の範囲内で一部途切れて確認された。 **カマド**: 不明。調査区外に存在か。 **出土遺物**: 刀子などが出土している。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀代) か。

**SB6003** [遺構:図版 2-289・PL81、土器:図版 3-137・PL233]

**位置**: II S 03・04 グリッド。 **検出**: IV層上面で暗褐色土を確認する。 **重複関係**: (新) SK6025。 **埋土**: 暗褐色土を主体とする複層。 **構造**: 平面方形。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。周溝は北東部を除いて確認された。床は貼床で、カマド前で敲き締められている。掘方を持つ。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。左袖が部分的に残存する。左右袖石の抜き取り痕跡がある。構築材はにぶい黄褐色土が利用されている。火床が残る。支脚石の痕跡がある。 **出土遺物**: 埋没途中に灰層があり、そこに土器を廃棄しているように出土した。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀後半)。

**SB6004** [遺構:図版 2-290・PL82、土器:図版 3-137・PL233、石器:図版 3-225, 232, 243・PL283, 287]

**位置**: II N 23・24 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (新)ST6001。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする複層。 **構造**: 平面長方形。床は掘方埋土上面が床となるが、貼床かどうか不明瞭である。掘方を持つ。柱穴は中央に縦に並んで2基確認された。カマド南脇に貯蔵穴が1基ある。南壁中央の浅いくぼみは出入り口施設の痕跡か。 **カマド**: 東壁中央南寄りに位置する。地山削り残しを芯として、石組にして粘土を貼る。袖石の抜き取り痕がある。 **出土遺物**: カマド周囲と床面に散在する。北西隅に台石が出土した。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀代)。

**SB6005** [遺構:図版 2-291、土器:図版 3-137, 138・PL233]

**位置**: II D 11・12 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。調査は2年度にわたり行った。 **重複関係**: (新) SB7009・7006、SK7298。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。床面は不明瞭である。柱穴は4基あり他と比較して小規模である。断面では壁際に窪みがあり周溝があった可能性がある。南壁中央のピットは出入り口施設に関連するものか。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。黒褐色土を構築材として袖石に貼り付けている。火床は残らない。 **出土遺物**: カマド周辺では、ほぼ完形の土師器杯、鉢、甕が出土している。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀初め)。

**SB6006** [遺構:図版 2-292, 293・PL82、土器:図版 3-138, 139・PL234、石器:図版 3-207, 249・PL289]

**位置**: II S 07・08 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (新) SD4005、ST6003、SK6057。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。床面は不明瞭で、掘方上面が床となり、わずかに締まりがある。柱穴は4基ある。北東壁側に周溝を確認している。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。黒褐色土を構築材として袖石に貼り付けている。 **出土遺物**: 埋土中の遺物量は少ない。カマド周辺では、ほぼ完形の土師器杯、鉢、甕などが出土している。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀後半)。

**SB6008** [遺構:図版 2-294、土器:図版 3-139・PL234]

**位置**: II I 12・13 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧) SB6047・6046。(新) SK6063。 **埋土**: 黒褐色土と黄褐色土を主体とする複層。 **構造**: 平面隅丸方形。床面は貼床で、黄褐色土を硬く敲き締めていて、浅い掘方がある。柱穴は4基ある。周溝はカマド部分を残し全周する。 **カマド**: 北東壁ほぼ中央に位置する。黄褐色土の構築材がカマド前に広範囲に広がっていた。袖は石と構築材土を利用したものである。火床が残る。 **出土遺物**: 埋土中の遺物量は少ない。南壁側に炭化物が散らばる。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀)。

**SB6009** [遺構:図版 2-295, 296・PL83、土器:図版 3-139, 140・PL234, 235]

**位置**: II N 22・S 02 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (新) SD4005。 **埋土**: 黒褐色土と黄褐色土を主体とする複層。 **構造**: 平面長方形。掘方上面が床で、中央部はやや硬い。柱穴は2基ある。周溝は南側で不明である。南東隅のピットは貯蔵穴か。 **カマド**: 北東壁中央南寄りに位置する。袖は地山削り残しの上に石と構築材の粘土で形成する。天井石が残り、支脚石の抜き取り痕跡がある。火床が残る。 **出土遺物**: 住居南東部から多く出土している。P3から小型の直口壺が出土している。 **時期**: 古墳時代後期 (6世紀中頃)。

**SB6011** [遺構:図版 2-296・PL83、土器:図版 3-140、金属製品:図版 3-269]

**位置**：Ⅱ S 07・12 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB6044・6028・6029。(新)SD4005。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。床面では炭化物と焼土の広がりが見られ、焼失住居の可能性はある。**構造**：平面隅丸方形。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。**カマド**：北壁中央東寄りに位置する。火床が残る。**出土遺物**：遺物は床面に集中する。鉄鎌が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀）。

SB6013 [遺構：図版 2-297・PL83、土器：図版 3-140]

**位置**：Ⅱ I 01・02 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SD5006。(新) ST5005。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面方形。床面は2面あり、掘方埋土上面で、焼土の広がりが見られ、それを被覆してさらに貼床を設けている。柱穴は4基あり、掘方調査時に確認された。周溝はカマド部を残して全周する。**カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。火床は床の状況と同じく2面がある。**出土遺物**：カマド周囲に集中している。**時期**：古墳時代後期（7世紀）。

SB6014 [遺構：図版 2-298・PL83, 84、土器：図版 3-140・PL235、石器：図版 3-220, 249・PL281]

**位置**：Ⅱ N 09・14 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB6018。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面長方形か。床面は貼床で、掘方を持つ。周溝は途切れながら、西半分をほぼ全周している。**カマド**：北壁に位置する。袖は先端に礫を配置し、褐色粘土で成形する。カマド前には天井石が転落している。火床は残る。**出土遺物**：カマド内から円面硯の破片が出土している。**時期**：奈良時代（8世紀前半）。

SB6015 [遺構：図版 2-299・PL84、土器：図版 3-141・PL235、石器：図版 3-217・PL280]

**位置**：Ⅱ M 22・23 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SD5008。(新) SB3020、SD3005。**埋土**：黒褐色土を主体とする複層。**構造**：平面不整円形である。床面は貼床で、貼り床が薄く地山を敲き締めている場所もある。住居中央部で締まりが良い。掘方を持つ。柱穴は4基あり。**カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。西側の褐色土の袖が残存し、袖石の抜き取り痕跡が認められた。火床は残る。**出土遺物**：カマド周囲に集中する。石製紡錘車が出土している。**時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

SB6016 [遺構：図版 2-300、土器：図版 3-141]

**位置**：Ⅱ R 03・04 グリッドほか。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB5047・6045・6066。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形である。住居中央部では地山が床面になっている。柱穴は4基あり。北西隅のピットは貯蔵穴の可能性はある。**カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。左袖に袖石と思われる角礫が存在し、その礫を据える埋土が袖状に残存している。火床は残る。**出土遺物**：ごく少ない。**時期**：奈良時代（8世紀）。

SB6018 [遺構：図版 2-303・PL84、土器：図版 3-141]

**位置**：Ⅱ N 14 グリッド。**検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SB6014。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形か。床面は硬くはないが貼床であり、掘方を持つ。柱穴は2基確認され、他は東側の調査区外にあると推測される。周溝は平面では確認できなかったが、断面からは壁際に落ち込みが認められた。**カマド**：北壁に位置する。袖は暗褐色土と礫で造られている。天井石

と袖石、火床は残る。掘方には袖石や支脚石の抜き取り痕跡と考えられる小さな落ち込みが認められた。煙道部には袖土と同じ土が貼られている。 **出土遺物**：カマド周囲に集中するが、遺物の全体量は少ない。南西部の床面上で石錘が14点出土した。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

**SB6019** [遺構：図版 2-301・PL84、土器：図版 3-141・PL235、石器：図版 3-206・PL277]

**位置**：Ⅱ N 11・12 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) ST6007。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。やや締まりのある床面で貼床でなく、掘方埋土上面が床となる。柱穴はない。北東隅に貯蔵穴と考えられるピットがあり、土師器甕が出土している。周溝は床面を掘りすぎたために一部途切れているが、本来はほぼ全周すると考えられる。南壁際中央の小ピットは出入り口施設に関連するか。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は黒色土で造られている。袖石、天井石が残るが、火床は残らない。掘方には支脚石の抜き取り痕跡が検出された。 **出土遺物**：カマド内から土師器杯・甌が出土する。 **時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

**SB6020** [遺構：図版 2-302, 303・PL84, 85、土器：図版 3-141, 142・PL235, 236、石器：図版 3-203, 212、金属製品：図版 3-256, 263・PL292]

**位置**：Ⅱ N 06・07 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SD6001、ST6013、SK6467・6475。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床面はやや締まりのある面で貼床でなく、掘方埋土上面が床となる。柱穴は4基ある。周溝は途切れて、東側にはほとんどない。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は石組に褐色土の構築材でつくられる。袖石、支脚石、転落した天井石、火床が残る。 **出土遺物**：カマド内および床面から多出する。 **時期**：古墳時代後期（7世紀初め）。

**SB6021** [遺構：図版 2-304, 305, 306・PL85, 91、土器：図版 3-142, 143・PL236、石器：図版 3-212, 217, 234・PL279, 280, 284、金属製品：図版 3-262・PL292]

**位置**：Ⅱ N 07・08 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SD6001、ST6009。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。間仕切り溝は13本検出され、2本で一組になることも考えられる。南壁の一部が突出し、中央にピットがあり、出入り口施設の痕跡と考えられる。周溝はほぼ全周する。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖は石組に黒褐色土の構築材でつくられる。袖石、天井石、火床が残る。なお、西側に隣接して、カマド煙道部の張り出しと床下で火床が見つかった。カマドの造り替えと考えられる。 **出土遺物**：カマド周囲および南側床面に集中する。特に滑石製白玉や鉄鐸、鉄鐸舌、土師器の粗製鉢などの祭祀具が多く出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀中頃）。

**SB6022・6022b** [遺構：図版 2-307, 308、土器：図版 3-143・PL236、石器：図版 3-212]

**位置**：Ⅱ R 04・05 グリッドほか。 **検出**：SB6022はⅣ層上面で黒褐色土を確認する。SB6022bはSB6022の床下で検出された。 **重複関係**：(旧) SB6067。(新) SB6065・6066、SK6471・6472。 **埋土**：SB6022は黒褐色土を主体とする。SB6022bは黒褐色土を主体とするが、埋土上面がSB6022の床となる。 **構造**：平面長方形。貼床で、SB6022bが掘方を持つ。柱穴は各4基あり、一部で重なる。SB6022bでは、間仕切り溝が4本検出されている。各南壁際の中央にピットがあり、出入り口施設の痕跡と考えられる。周溝は両者ともほぼ全周する。 **カマド**：SB6022は位置が北壁中央付近と想定した場合、SB6055によって破

壊された可能性があり、火床も残らない。SB6022b は北壁中央に位置する。袖は地山削り残し部分が確認され、袖石の抜き取り痕跡と火床が残る。 **出土遺物**：出土量は少ないが、SB6022b の南東部床面上で石錘がまとまって出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀中頃）。

**SB6023** [遺構：図版 2-309・PL85, 86、土器：図版 3-143, 144・PL236, 237、石器：図版 3-243, 249・PL287、金属製品：図版 3-261, 264, 265]

**位置**：Ⅱ R 05・10 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6025、SK6424。(新) SK6074。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。南壁の中央にピットがあり、出入り口施設の痕跡と考えられる。周溝はほぼ全周する。南西隅のピットは貯蔵穴の可能性もある。 **カマド**：北壁中央に位置する。袖は石組に黒褐色土の構築材でつくられる。袖石、支脚石2点、火床が残る。カマド煙道部に土師器甕と須恵器杯が置かれていた。 **出土遺物**：カマド内および周囲に集中する。 **時期**：奈良時代（8世紀中頃）。

**SB6024** [遺構：図版 2-310・PL86、土器：図版 3-144・PL237、石器：図版 3-212, 249・PL289]

**位置**：Ⅱ R 14・15 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。南西部をSD4004に壊される。 **重複関係**：(旧) SK6437・6331。(新) SD4004, SK6075。 **埋土**：黒褐色土を主体として、黄褐色土がブロック状に混じる。カマド前面には、灰黄褐色土のカマド構築材が広がっている。 **構造**：平面方形か。貼床で、浅い掘方を持つ。柱穴は4基ある。南壁の中央付近の周溝が大きく内側に窪み、出入り口施設の痕跡とも考えられる。周溝は東壁、南壁際で検出されている。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖は地山削り残しを芯材として、灰黄褐色土を一部に貼っている。袖石の抜き取り痕跡が両袖に確認され、支脚石がカマド内に外されて出土した。この灰黄褐色土は煙道奥壁にも貼られていた。火床が残る。 **出土遺物**：カマド内および壁際の床面から出土する。滑石製白玉が散見される。 **時期**：古墳時代後期（7世紀前）。

**SB6026** [遺構：図版 2-311、土器：図版 3-144, 145・PL237, 238、石器：図版 3-204, 225・PL276, 282、金属製品：図版 3-256, 261・PL293]

**位置**：Ⅱ S 06・07 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6025・6027。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。明瞭な貼床、掘方を持つ。柱穴は4基ある。 **カマド**：北壁中央西寄りに位置する。袖は褐灰色土で造られている。火床が残る。 **出土遺物**：床面からほぼ完形の土器群が出土する。小形の砥石と刀子が出土している。 **時期**：古墳時代後期(6世紀後半～7世紀初)。

**SB6027** [遺構：図版 2-312・PL86、土器：図版 3-145・PL238、金属製品：図版 3-256・PL291]

**位置**：Ⅱ S 06・07 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SB6026。 **埋土**：黒褐色土と褐灰色土を主体とする層からなり、埋め戻しの可能性がある。 **構造**：平面長方形。明瞭な貼床、掘方を持つ。柱穴は1基ある。南壁中央にピットがあり、出入り口施設に係わる痕跡と考えられる。なお、P1内側の床面に高さ5cmほどの褐灰色土の締まった盛り上がりがあり、P1を囲む意図的な周堤状の高まりの可能性もある。 **カマド**：北西壁ほぼ中央に位置する。袖は地山削り残しで、褐灰色土で造られる。火床は残らない。袖の崩れが外側に広がる。 **出土遺物**：床面上からわずかに出土。 **時期**：古墳時代後期（7世紀代）。

**SB6034** [遺構：図版 2-316、土器：図版 3-147]

**位置**：Ⅱ D 20・25 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。重複するSKの一部は検出面ではみつけれず、住居跡調査中に確認された。 **重複関係**：(新)SK6155・6156・6157・6159・6160・6156。(不明)SK7038。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴はP2と床下ピットの2基と考えられる。周溝はほぼ全周する。 **カマド**：北壁中央やや西寄りに位置する。袖は石組粘土カマドと推測されるが、大部分が後世の攪乱を受けている。火床は残る。 **出土遺物**：少量出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀中頃）か。

SB6035 [遺構：図版 2-317、土器：図版 3-148]

**位置**：Ⅱ D 25・Ⅰ 05 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。東隅は調査区外である。 **重複関係**：(新)SK6114・6115 (ST6014)・6154 (ST6034)・6180・6181・6016・6178・6104。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床面は貼床で、掘方を持つ。柱穴は2基で、周溝はほぼ全周する。 **カマド**：北西壁中央やや北寄りに位置する。袖は黒色土で構築され、内側は被熱で赤色化している。火床は残り、上部に灰が分布する。支脚石の抜き取り痕跡が検出されている。 **出土遺物**：少量出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

SB6038 [遺構：図版 2-321・PL88、土器：図版 3-148]

**位置**：Ⅱ I 03・04 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。一帯は遺構の重複が著しく、その前後関係が不明瞭な部分もある。SB6057埋土上面内に造られている。 **重複関係**：(旧)SB6057。(新)SD6002、ST6021。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土上部に焼土・灰が流れ込んでいた。 **構造**：平面長方形。床は不明瞭で下位のSB6057埋土との境が不明瞭であった。柱穴は確認できず。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は構築材が一部残り、袖石が散在している。火床は残る。 **出土遺物**：カマド内に集中する。 **時期**：奈良時代（8世紀後半）。

SB6039 [遺構：図版 2-322・PL88、土器：図版 3-148, 149、金属製品：図版 3-263・PL292]

**位置**：Ⅱ I 04・05 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新)SB6040・6041、SK6395・6373・6396・6374・6209・6451・6450。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土中央部に焼土と灰の分布がみられた。 **構造**：平面方形か。床は暗褐色土と黄褐色土のブロックからなる貼床で、浅い掘方がある。柱穴は4基を確認した。 **カマド**：北西壁ほぼ中央に位置する。袖は地山削り残しで、褐色土を貼りつけている。火床が残る。 **出土遺物**：カマド周囲に集中、東袖外に土師器甕が出土している。 **時期**：古墳時代（6世紀後半）。

SB6041 [遺構：図版 2-323・PL89、土器：図版 3-149・PL240]

**位置**：Ⅱ I 04・05 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧)SB6039。(新)SD6002、SB6042。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は貼床で、掘方はカマド部で確認されている。柱穴は4基確認された。周溝は南壁にないが他は廻る。 **カマド**：北西壁中央やや西寄りに位置する。袖は暗褐色土の構築材が残る。火床は明確ではない。奥壁および袖の内側は良く焼けている。 **出土遺物**：床面で出土。 **時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

SB6042 [遺構：図版 2-324, 325・PL89, 90, 95、土器：図版 3-149、金属製品：図版 3-256・PL291]

**位置**：Ⅱ I 10・15 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で褐灰色土を確認する。一帯は遺構の重複が著しく、そ

の前後関係が不明瞭な部分もある。 **重複関係**：(旧) SB6072・6069・6041。(新) SB6043、ST6038・6022・6037、SK6219・6213・6214。 **埋土**：褐灰色土と灰黄褐色土を主体とする。埋め戻し土と考える。 **構造**：平面方形か。床は貼床で、掘方は浅い。柱穴は4基確認された。周溝は調査範囲内でほぼ全周する。 **カマド**：北西壁に位置する。袖は黒褐色土の構築材が残る。袖石抜き取り痕跡が確認された。火床が残る。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

**SB6045** [遺構：図版 2-325・PL90、土器：図版 3-149・PL240]

**位置**：Ⅱ R 03・04 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB5047。(新) SB5024・6016、SK6069・6065・6070。 **埋土**：暗褐色土と黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は貼床であるが、締まりの良い部分はない。掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝は南半分に連続し、北壁の西半分の一部検出された。 **カマド**：北壁東寄りに突き出す部分をカマド痕跡と考える。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代後期（7世紀中頃）。

**SB6046** [遺構：図版 2-326・PL90、土器：図版 3-149, 150・PL240, 241、石器：図版 3-249, 250・PL289]

**位置**：Ⅱ I 13 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6047。(新) SB6008。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は不明瞭で、掘方を持つ。 **カマド**：北東壁中央東寄りに位置する。袖は黄褐色土の構築材が残る。カマド内に支脚石が残る。 **出土遺物**：カマド周囲に須恵器甕片等が散在する。 **時期**：奈良時代（8世紀中頃）。

**SB6048** [遺構：図版 2-327, 328・PL91、土器：図版 3-150, 151・PL240, 241、石器：図版 3-213・PL279、金属製品：図版 3-261・PL293]

**位置**：Ⅱ I 13・14 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6049・6047。(新) ST6039・6026。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で、掘方がある。柱穴は4基を確認した。周溝は平面では捉えきれなかったが、断面観察から存在が推測される。北東隅に貯蔵穴と推測されるピットがある。 **カマド**：北西壁ほぼ中央に位置する。袖はにぶい褐色土を構築材として利用し、袖石の残りが良い。カマド外の左右壁際に小ピットがあり、カマドに関連する施設の痕跡と考えられる。火床は残る。カマド掘方調査のなかで、焼土層が検出されたため、カマドは造り替えられたと考えられる。 **出土遺物**：カマド内および床面に集中する。刀子が出土している。 **時期**：奈良時代(7世紀末～8世紀初)。

**SB6050** [遺構：図版 2-329, 330・PL91, 92、土器：図版 3-151, 152・PL241、石器：図版 3-213・PL279]

**位置**：Ⅱ N 04・05 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SD6001、ST6017・6020、SK6201・6202。 **埋土**：黒褐色土および暗褐色土を主体とする。褐色土がブロック状に混じるため人為埋没と自然埋没の混在したものか。 **構造**：平面方形。床は貼床で、掘方がある。柱穴は4基確認された。周溝はほぼ全周する。南壁の中央部が張り出し、内部にピットがある。床面で掘り込みが明瞭な間仕切り溝が15本検出されている。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は地山削り残しの周りにカマド構築材の黒褐色土を貼る。袖石は残らないが、抜き取り痕跡がある。 **出土遺物**：カマド周囲に多い。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）

**SB6051** [遺構：図版 2-331・PL92、土器：図版 3-152]

**位置：**Ⅱ I 24・25 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係：**(新) SK6203・6255・6204・6370・6256、ST6015・6018、SD6001。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**構造：**平面長方形か。床は貼床で、掘方がある。柱穴は3基確認され、南東の1基が調査区外にあると推定される。床下のピットは柱穴とはずれていることから、建て替えがあったと考えられる。周溝は北・南壁に沿って検出された。**カマド：**北壁ほぼ中央に位置する。袖はにぶい黄褐色土の構築材を使用して残る。支脚石の抜き取り痕跡がある。構築材を穿つようにして、トンネル状の煙道が残る。**出土遺物：**ごくわずか。**時期：**古墳時代後期(7世紀前半)。

SB6052 [遺構：図版 2-332・PL93、土器：図版 3-152]

**位置：**Ⅱ I 17・18 グリッドほか。**検出：**Ⅳ層上面で暗褐色土を確認する。**重複関係：**(新) SB6053。**埋土：**暗褐色土およびにぶい黄褐色土の互層を主体とする。人為埋没か。**構造：**平面長方形。床は貼床で硬く明確である。浅い掘方がある。**カマド：**北東壁ほぼ中央に位置する。袖はにぶい橙色の構築材が崩れて残存していた。火床が残り、袖石の抜き取り痕跡が認められた。トンネル状の長い煙道が残る。**出土遺物：**ごくわずか。**時期：**古墳時代後期(6世紀後半)。

SB6053 [遺構：図版 2-333・PL93、土器：図版 3-152・PL242]

**位置：**Ⅱ I 17・18 グリッドほか。**検出：**Ⅳ層上面でにぶい黄褐色土と黒褐色土を確認する。**重複関係：**(旧) SB6052。(新) SB6054、ST6025・6016、SK6399・6392。**埋土：**黒褐色土を主体とするが、検出面ではにぶい黄褐色土層が確認されている。**構造：**平面方形。床は不明瞭で、掘方がある。柱穴は4基で構成される。周溝は全周し、P3から西へ間仕切り溝がのびる。**カマド：**北壁ほぼ中央に位置する。袖は明確には残らず、左袖の残存が断面で推測された。火床は不明瞭で、カマドの前面に焼土粒や灰が広範囲に広がる。**出土遺物：**ごくわずかであるが、北壁際に土師器甕が出土している。**時期：**古墳時代後半(6世紀中頃)。

SB6054 [遺構：図版 2-332・PL93、土器：図版 3-152・PL242、石器：図版 3-213]

**位置：**Ⅱ I 18・23 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係：**(旧) SB6053、SK6053。(新) SK6392。**埋土：**黒褐色土を主体とする。**構造：**平面隅丸方形。床は不明瞭で、掘方埋土上面が締めりがあるので、敲き締めたか。**カマド：**北壁中央より東に片寄る。左右の袖には袖石の抜き取り痕跡が認められた。火床が残る。**出土遺物：**ごくわずか。**時期：**古墳時代後期(7世紀)。

SB6055 [遺構：図版 2-334、土器：図版 3-153]

**位置：**Ⅱ I 17・22 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係：**(新) ST6025、SK6400・6398。**埋土：**黒褐色土を主体とするが、検出面ではにぶい黄褐色土層が確認されている。**構造：**平面長方形。床は不明瞭である。小ピットが7基検出されているが、柱穴か。**カマド：**北壁中央よりやや東に位置する。袖は地山削り残しを芯として、褐灰色土を構築材とする。火床は残る。トンネル状の煙道天井部分が一部焼けて赤色化している。**出土遺物：**ごくわずかである。**時期：**古墳時代後期(7世紀)。

SB6056 [遺構：図版 2-335・PL93、土器：図版 3-153]

**位置：**Ⅱ I 23 グリッド。**検出：**Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係：**(旧) SB6062。(新)

ST6016。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸長方形。床は締まりの良い部分があり、貼床か。柱穴は2基確認された。 **カマド**：北壁中央やや東に位置する。袖は地山削り残しを芯として、袖石の抜き取り痕跡がある。火床は残る。 **出土遺物**：ごくわずかである。 **時期**：古墳時代後期（7世紀）。

**SB6057** [遺構：図版 2-321・PL93、土器：図版 3-153]

**位置**：Ⅱ I 03・04 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒色土を確認する。一帯は遺構の重複が著しく、その前後関係が不明瞭な部分もある。 **重複関係**：(旧) SB6070。(新) SD6002、SB5037・6038・6039、ST6021・6035・6021。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。検出面で焼土の広がりを確認した。 **構造**：平面方形。床は貼床であるが、掘方はない。柱穴は床面を剥いだところで4基を確認した。周溝はSD6002に破壊された部分以外、全周する。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。火床が残る。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代後期（7世紀）。

**SB6058** [遺構：図版 2-336・PL93、94、土器：図版 3-153・PL242、石器：図版 3-205・PL277]

**位置**：Ⅱ I 21・N 01 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) ST6010・6013、SK6207・6208・6253・6254。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床はカマド前面で硬く、他はわずかに締まりがある程度である。柱穴は4基確認された。周溝は北壁東側を除いて全周する。 **カマド**：北壁ほぼ中央やや東に位置する。袖は袖石抜き取り痕跡が認められ、周囲に黒色の構築材が分布する。火床は残らないが、焼土と炭化物ブロックを埋土とする窪みがある。 **出土遺物**：ごくわずかである。 **時期**：奈良時代（8世紀）か。

**SB6059** [遺構：図版 2-337・PL94、土器：図版 3-153・PL242、金属製品：図版 3-268・PL296]

**位置**：Ⅱ D 23・24 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6032。(新) SB6070、SD6002、SK6447。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は貼床で、掘方を持つ。掘方調査時に床下ピット1基を確認した。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖は袖石抜き取り痕跡が認められ、地山削り残しを芯に灰白色土を構築材として利用する。火床は残る。燃焼部から煙道にかけて灰白色の構築材を貼り、一部が残存していた。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。鉄製の苧引具が出土している。 **時期**：古墳時代後期（7世紀）。

**SB6061** [遺構：図版 2-338・PL94、土器：図版 3-153、154・PL242、石器：図版 3-213、245]

**位置**：Ⅱ N 16・21 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SB6063、SD4005・5001。(不明)SK6469。 **埋土**：黒褐色土と褐灰色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝は全周する。P3・P4と壁周溝間に間仕切り溝がある。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖は地山掘り残しと角礫を芯材とし、黒褐色土の構築材を貼っている。支脚の抜き取り痕跡がある。火床は小規模ながら残る。 **出土遺物**：カマド右袖横に土師器甕が埋めて据え付けられていた。滑石製白玉等が出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀）。

**SB6063** [遺構：図版 2-339・PL94、土器：図版 3-154、金属製品：図版 3-269]

**位置**：Ⅱ N 16・21 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SB6061、ST6008。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は掘方埋土上面で一部締まりが良い部分がある。掘方を持つ。径1.8mの土坑が床面で確認された。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置

する。袖は構築材が残る。角礫がカマド内から出土し、カマド構築の材と考えられる。火床は小規模ながら残る。 **出土遺物**：ピットから鉄鎌と鉄滓が出土している。 **時期**：平安時代（9世紀後半）。

**SB6064** [遺構：図版 2-339・PL94]

**位置**：Ⅱ N 17・22 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：なし。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土中に焼土層が認められた。 **構造**：平面長方形。床は不明瞭である。掘方を持つ。 **カマド**：なし。 **出土遺物**：少量出土している。 **時期**：不明。

**SB6065** [遺構：図版 2-339・PL95、土器：図版 3-155・PL243]

**位置**：Ⅱ R 04・05 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB6022・6066・6067。(新) ST6028。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床である。SB6022 埋土内に床がある。柱穴は4基ある。 **カマド**：北壁ほぼ中央に位置する。袖は左袖のみ残り、黒色土が構築材として利用される。火床は残る。 **出土遺物**：少量出土している。 **時期**：奈良時代（8世紀前半）。

**SB6070** [遺構：図版 2-318, 319、土器：図版 3-155・PL243]

**位置**：Ⅱ D 24・Ⅰ O 04 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。一帯は遺構の重複が著しく、その前後関係が不明瞭な部分もある。 **重複関係**：(旧) SB6059。(新) SB6036・6037・6057・6071、ST6034、SK6021・6269・6270・6282。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸長方形。床面は不明瞭で、掘方はない。柱穴は8基を推定した。4基ずつの組み合わせで建て替えがあったと考えられる。P1は貯蔵穴の可能性があり、上面に土師器が集中する。 **カマド**：北西壁ほぼ中央に位置する。袖は暗褐色土で構築され、火床が残る。 **出土遺物**：柱穴周囲の床面に土器片、礫等が認められた。埋土中から刀子・鉄鏃等の鉄製品が出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

**SB6072** [遺構：図版 2-340・PL95、土器：図版 3-155]

**位置**：Ⅱ I 10・15 グリッド。 **検出**：SB6042の貼床下に入れ子状に検出され、埋土はほとんど残っていない。 **重複関係**：(新) SB6042、ST6037、SK6213・6214・6217。 **埋土**：にぶい黄橙色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は貼床で、掘方はある。 **カマド**：北西壁北寄りに位置する。焼土、炭化物、灰が分布するが火床は明確でない。 **出土遺物**：埋土がほとんど残っておらず、ごくわずかに出土した。 **時期**：古墳時代後期（7世紀以前）。

## 7区

**SB7001** [遺構：図版 2-341, 342、土器：図版 3-156・PL244、石器：図版 3-231・PL283、金属製品：3-264・PL294]

**位置**：Ⅰ X 25・Ⅰ Y 21 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で黒褐色土を確認する。なお、カマド部では構築材の広がり認められた。 **重複関係**：(新) SK7705・7158・7159・7160・7161。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土中層に礫の散乱が認められた。 **構造**：平面長方形。床は明褐色土の貼床で、2面確認されたことから、貼り替えた可能性がある。掘方は中央部に柱穴を四隅に置くような方形の浅い落ち込みがある。柱穴は4基あり、周溝はほぼ全周する。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床は厚く堆積していた。袖は袖石抜き取り痕跡と暗褐色～褐色土の構築材が認められた。 **出土遺物**：土器片がカマド内と周辺に集中する。東壁北側で土層に沿うように傾斜して礫剥片がまとまって出土している。台石の破片や砥石などが出土している。 **時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

**SB7002** [遺構:図版 2-343・PL95、土器:図版 3-156・PL244、石器:図版 3-225・PL282]

**位置**: I X 24・25 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。なお、カマド部では構築材の広がり認められた。 **重複関係**: (旧) SB7015。(新) SB7016、SK7167・7169・7291・7292・7174・7175・7176・7293。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸方形。床は明褐色土の貼床である。掘方は中央部が高く、壁際で低くなる。柱穴は4基あり、周溝はほぼ全周する。 **カマド**: 北西壁ほぼ中央に位置する。ST7025P9に一部破壊されている。火床は支脚石手前が赤化する。袖は袖石が残る。構築材の灰色土が散逸しているが、支脚石が残る。 **出土遺物**: カマド周囲および床面に出土する。 **時期**: 古墳時代後期(7世紀後半)。

**SB7003** [遺構:図版 2-344・PL96、土器:図版 3-157・PL244]

**位置**: I X 24・II D 04 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: なし。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面隅丸方形。床は貼床を確認する。掘方を持つ。柱穴は4基で構成される。周溝はほぼ全周する。 **カマド**: 北東壁中央東寄りに位置する。火床は支脚石の抜き取り痕跡手前が赤化する。袖は黄橙色土の構築材で造られ、崩落土がカマド全面に広がる。 **出土遺物**: カマド埋土に土器片が散乱する。カマド右側に胴下半を打ち欠いた甕が埋設されていた。 **時期**: 古墳時代後期(7世紀後半)。

**SB7005** [遺構:図版 2-345・PL96、土器:図版 3-157・PL244、石器:図版 3-213・PL279]

**位置**: II D 07・08 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。SB7050の掘り込み平面プランの確認が難しかった。なお、SB7078の切り合い関係を遺構確認面で確認できなかった。 **重複関係**: (旧) SB7078。(新)SB7050・7053、SK7233・7234。 **埋土**: 黒褐色土を主体とした腐植土層の自然堆積。 **構造**: 平面方形。床は貼床で中央部を中心に、カマド手前も硬化している。掘方を持つ。柱穴は掘方調査時に4基確認された。 **カマド**: 北壁中央東寄りに位置する。袖は左袖部に礫のみ残る。燃烧部外に甕がある。白色粘土で構築されていたと考えられるが粘土の量は少ない。 **出土遺物**: カマド手前などに土器片、礫、構築材の粘土が散在する。滑石製白玉が出土している。 **時期**: 古墳時代後期(7世紀代)。

**SB7006** [遺構:図版 2-346・PL97、土器:図版 3-157, 158・PL245、石器:図版 3-213, 243・PL287]

**位置**: II D 11・12 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (新) SD6002。 **埋土**: 黒褐色土を主体とした腐植土層の自然堆積。 **構造**: 平面方形。床は貼床である。掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝はほぼ全周し、P4に繋がる間仕切りの溝が認められた。 **カマド**: 北壁ほぼ中央に位置する。袖は両袖に礫が残り、黒褐色土を主とする構築材で成形されている。支脚石が残る。 **出土遺物**: 床面より土師器類が出土している。 **時期**: 古墳時代後期(6世紀中頃)。

**SB7007** [遺構:図版 2-347・PL96、土器:図版 3-158]

**位置**: II D 13・14 グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**: (旧) SK7755・7756。(新) SD7002、SK7197・7198・7229・7230ほか。 **埋土**: 黒褐色土を主体としたもので、南壁際に炭化材と焼土層があり、埋没過程での燃烧あるいは被熱廃棄行為があったと考える。 **構造**: 平面方形。床は不明瞭である。カマド部のみ掘方を持つ。柱穴は4基確認され、平面形が横長楕円形で、柱が五平材(角材)である可能性がある。周溝は南西隅のみ確認した。 **カマド**: 北壁東寄りに位置する。袖は袖石の両面に粘土を貼って成形される。にぶい黄褐色土を主とする構築材で成形され、溝状に掘り込んだ後、煙道天井

部をブロック土で構築している。**出土遺物**：カマド周囲に散在する。**時期**：古墳時代後期(6世紀中頃)か。

**SB7008** [遺構:図版 2-348・PL96、土器:図版 3-158、石器:図版 3-213]

**位置**：II D 04・05 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SD7002、SK7016・7220・7019・7122・7744・7015。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面長方形。床は貼床で、黄褐色土を呈し、厚さは1cmほどある。掘方を持つ。柱穴は3基検出できたが、南西部でSK7015により破壊されたと推測され、本来は4本柱構成と考えられる。周溝はカマド以外で全周する。**カマド**：北壁中央に位置する。袖は砂質シルトの構築材である。焚口部に火床が残る。**出土遺物**：埋土に土器片が散在する。滑石製白玉、赤色顔料が出土している。南東隅の埋没土内に炭化物が集中する範囲がある。**時期**：古墳時代後期(6世紀後半)。

**SB7011** [遺構:図版 2-349・PL96, 97、土器:図版 3-158・PL245、石器:図版 3-204・PL276、金属製品:図版 3-261・PL293]

**位置**：I Y 11・12 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。平面プランは判別し難い箇所もあり、何回か再検出を行った。**重複関係**：(旧) SB7038・7060。(新) SD8003。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形か。不整形である。床は黄褐色土混じりの黒褐色土の硬化した平坦な面を床としたが、北東部を一部掘りすぎた。床下には下位の住居のプランが確認できた。柱穴は1基もしくはない。**カマド**：東壁北寄りに位置する。火床は張り出し部に残る。袖石らしき礫がカマド前庭部に床から浮いた状態で出土している。**出土遺物**：カマドおよび埋土中に散在。鉄滓、鉄製品(刀子)が出土した。**時期**：平安時代(9世紀後半)。

**SB7012** [遺構:図版 2-350・PL97、土器:図版 3-158・PL245]

**位置**：II D 17・18 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。住居内は攪乱が入り込む。**重複関係**：(旧) SB7051。(新) SD6002、SK7188、ST7040。**埋土**：上層を広く攪乱されている。それを除くと、黒褐色土を主体とする埋土が現れる。**構造**：平面方形か。床は黄褐色土と黒褐色土の混合土で貼床されている。柱穴は4基ある。**カマド**：北壁中央に位置する。火床は残る。両袖部と考えられる位置に黒褐色土～黒色土が分布し、構築材の残りと考えられる。**出土遺物**：少ない。**時期**：古墳時代後期(7世紀末)。

**SB7014** [遺構:図版 2-351, 352・PL1, 97、土器:図版 3-158, 159・PL246、石器:図版 3-225・PL282、金属製品:図版 3-261, 263・PL294]

**位置**：I W 25・X 21 グリッドほか。**検出**：IV層上面で灰黄褐色土を確認する。中央部がSD7002により壊されている。**重複関係**：(旧) SB7055。(新) SD6002・8006、SK7951。**埋土**：褐灰色土と灰黄褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は住居跡の中央を中心に貼床を確認。カマド手前にも硬化面を確認。柱穴は4基が四隅にある。周溝は壁際を全周する。また、P1・P3と周溝を結ぶ間仕切り溝が存在する。南壁中央の、二本の並行した溝は出入り口施設に伴う痕跡か。特にP3と西壁を結ぶ間仕切り溝の土層断面からは間仕切り溝上部に盛土があり、柵等の間仕切り施設を支えた痕跡と推測する。**カマド**：北壁中央に位置する。燃焼部が円形に強く被熱する。袖は灰色土の構築材で造られている。両袖の外側とカマド手前に小ピットがあり、カマド部分の上屋を支える柱穴か。掘方からは旧カマドの袖(地山削り出し)が検出された。貯蔵穴としてはカマド東側、住居北東隅に長方形の浅いピットがあり、埋土上部から土器

の出土がある。 **出土遺物**：カマド構築材内に土器片が多く混じる。その他、埋土中からの出土が多い。  
**時期**：古墳時代後期（7世紀末）。

**SB7015** [遺構：図版 2-353・PL98、土器：図版 3-159・PL246、石器：図版 3-204, 211, 226, 248・PL276, 278, 289]

**位置**：I X 23・24 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SB7002、SK7175～7182。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。上層にIV層がブロック状に混じることから、人為的な埋め戻しと推定される。 **構造**：平面方形。床は黄褐色土で硬く、地山敲きと一部貼床となる。掘方は部分的にある。柱穴は4基が四隅にある。周溝はカマド以外全周する。 **カマド**：北壁中央に位置する。支脚の抜き取り痕跡があり、その手前が強く被熱する。袖は黄褐色土の構築材で造られている。 **出土遺物**：石錘等が散在する。床より高い位置での出土が大半である。P3で土師器杯2点出土し、柱痕が残ることから、築造時に廃棄したものか。 **時期**：古墳時代後期（7世紀中頃）。

**SB7017** [遺構：図版 2-354、土器：図版 3-160・PL246、石器：図版 3-220・PL281、金属製品：図版 3-264・PL294]

**位置**：II E 11・16 グリッド。 **検出**：III層中で黒褐色土を確認する。攪乱を受け、一部は調査区外である。 **重複関係**：(新) SK7043・7046。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。埋土中にIV層をあまり含まない。下位ほど炭化物、焼土を含む。 **構造**：平面長方形。床はIV層土主体の貼床で、カマド全面はより硬化が進む。掘方を持つ。柱穴は2基あり、床面では確認できず、掘方内で検出した。周溝は西壁南側から南壁にかけてL字形に廻る。 **カマド**：北壁西寄りを掘り込んでカマドを構築している。右袖部は自然流路跡の砂礫層を掘削しているため、崩落防止に角礫を側面に積み上げている。明褐色土の構築材を利用し、亜円礫がカマド前に散乱する。 **出土遺物**：埋土内に散在する。鉄製品、小型石鉢等が出土している。 **時期**：奈良時代（7世紀末～8世紀初）。

**SB7018** [遺構：図版 2-355、土器：図版 3-160]

**位置**：II D 15・16 グリッドほか。 **検出**：III層中で黒褐色土を確認する。中央部を斜めに水道管埋設溝により壊されている。 **重複関係**：(新) SK7030・7035・7036・7037・7041・7042・7055・7057。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。中位ほど炭化物層がある。 **構造**：平面隅丸長方形。床はIV層土主体の貼床で、掘方を持つ。周溝はカマド部以外全周する。 **カマド**：北壁東寄りに位置する。火床は両袖の中間にある。右袖は地山削り出し、左袖は礫を芯材とする。地山を半円形に掘り込み、その壁面に白色粘土を貼り、袖や天井も同じ土で構築し、L字形の煙道をつくっている。 **出土遺物**：南東隅の一角に完形に近い土師器や礫や粘土がまとまって出土している。その分布は壁際が高く、住居中央に向かって傾斜している。カマド材と食器や煮炊具を一括廃棄している状況である。このため、出土遺物は本遺構の使用時のものか、別遺構からの持ち込みか検討を要する。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

**SB7019** [遺構：図版 2-356・PL98, 99、土器：図版 3-161・PL247, 248、石器：図版 3-213]

**位置**：II D 14・15 グリッド。 **検出**：III層中で黒褐色土を確認するが最終的にIV層で精査となる。 **重複関係**：(旧) SB7062。(新) SB7020、SK7205・7458・7459・7204・7221・7128・7216。 **埋土**：上面およびカマドが攪乱を受けている。壁際床面に焼土と炭が何箇所かまとまって出土した。焼失住居か。 **構造**：平面方形。床は黒褐色～黄褐色土の混合した貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。床面の四隅に配置。周溝はカマド部以外全周する。カマド東側のP5が貯蔵穴と考えられる。 **カマド**：北壁中央に位置する。攪乱を受け、火床、袖等は不明である。構築材の褐色土がカマド前底部床面に広がっていた。 **出土遺物**：

カマド東側 P1 上部及びその南側床面に土師器甕・壺類が出土している。石錘が南東隅と南西隅でまとまって見つかった。 **時期**：古墳時代後期（6世紀中頃）。

**SB7024** [遺構：図版 2-359・PL100、土器：図版 3-163]

**位置**：I Y 21・II E 01 グリッド。 **検出**：IV層中で黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧)SB7025。(新)SB7023、SK7427・7428・7750・7287・7288・7284・7253・7252・7251・7285・7286。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は黒褐色～黄褐色土の混合した貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基ある。床面の四隅に配置。周溝はカマド部以外全周する。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。火床は厚く残る。袖は黄褐色土で構築される。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代後期（6世紀後半）。

**SB7025** [遺構：図版 2-360、土器：図版 3-163・PL249、石器：図版 3-213, 218・PL280]

**位置**：I Y 21・22 グリッドほか。 **検出**：IV層中で黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(新)SB7023・7024、SK7256・7254・7244・7261・7695・7704・7703・7715・7247・7282・7255・7693・7694・7245・7246・7248・7249・7257・7258・7278・7279・7280・7281。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は地山敲き締めと思われるが、明確でなかった。柱穴は4基ある。床面の四隅に配置。周溝は南壁際に存在した。カマド西側の P5 が貯蔵穴か。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床は燃焼部の手前側にあるが薄い。袖は地山削り出しの上に黒褐色土を貼り付けて構築される。 **出土遺物**：カマド部内外に多い。 **時期**：古墳時代後期（6世紀中頃）。

**SB7026** [遺構：図版 2-361、土器：図版 3-163・PL249、金属製品：図版 3-252, 274・PL290]

**位置**：I Y 16・21 グリッド。 **検出**：IV層表面に褐色土から黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧)SB7027・7028。(新)SB7069、SK7263・7266・7268・7770・7237～7241・7264・7267・7768・7769・7265。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床はにぶい黄褐色土の貼床である。柱穴は4基ある。周溝はカマド周囲のみで確認した。掘方で炭化物の入る落ち込みがある。南壁中央に出入り口施設に伴うピットがある。 **カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。火床は焚口から煙道まで広がる。袖は黒褐色土を貼り付けて構築され、左袖は袖石抜き取り痕跡、右袖は袖石が残る。 **出土遺物**：帯金具、鉄滓等が出土している。 **時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7028** [遺構：図版 2-364・PL100、土器：図版 3-164]

**位置**：I Y 16・17 グリッドほか。 **検出**：IV層表面に褐色土から黒色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧)SB7027。(新)SB7026・7029～7031・7069、SK7264・7237・7238・7267・7240・7268・7242・7243・7273～7276。周辺は重複する住居跡が多く、全体を把握するのは困難であった。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は残存部分では貼床が及ぶ。柱穴は掘方で4基を確認するが、SB7029の柱穴と重複していた。周溝は北・西壁の一部に残る。 **カマド**：SB7069に切られているため全体を把握できない。北壁中央に位置する。火床は残る。左袖は袖石が、右袖は袖石の抜き取り痕跡が残る。構築材に褐色土を利用する。 **出土遺物**：埋土中からの出土が多い。 **時期**：奈良時代（8世紀後半～9世紀初）。

**SB7029** [遺構：図版 2-363, 364・PL100、土器：図版 3-164・PL249、金属製品：図版 3-261, 272・PL293, 298]

**位置**：I Y 17・22 グリッドほか。 **検出**：IV層表面に褐色土から黒色土が落ち込む。東側は調査区外となる。大型住居跡と想定される。 **重複関係**：(旧)SB7026。(新)SB7030、ST7042、SK7275・7277・7276・

7719・7260・7262・7717・7242・7243・7716・7761。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は貼床で、中央部が堅固である。柱穴は1基を確認し、大型で段掘りがある。周溝はカマド以外の調査範囲を全周する。 **カマド**：北壁中央に位置する。カマド3基が並び、西側1基が古く、残り2基は併存した可能性がある。火床は西側2基に残る。袖は地山掘り残し部分がわずかに残る。支脚石の痕跡が残る。灰褐色土の構築材が前庭部に流失していた。 **出土遺物**：西壁際床面に板状鉄製品が出土する。 **時期**：奈良時代（8世紀中頃）。

**SB7031** [遺構：図版 2-365・PL100、土器：図版 3-164・PL249]

**位置**：I Y 16・17 グリッド。 **検出**：IV層表面に褐色土から黒色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB7069・7027・7066・7028。(新)SK7272・7271・7270・7269・7311。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床はやや軟質の貼床である。柱穴は掘方調査時に4基を確認した。周溝はカマド以外にほぼ全周する。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床は両袖中央に残る。袖石が残り、黒色土の構築材が使われる。 **出土遺物**：須恵器類が多く出土している。 **時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7032** [遺構：図版 2-366、土器：図版 3-164、金属製品：図版 3-271]

**位置**：I Y 17 グリッド。 **検出**：IV層表面に黒褐色土が落ち込む。東側は調査区外にある。 **重複関係**：(新) SB7030、ST7042。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。調査区境界の東壁面観察では、I層直下にST7042に伴う可能性が高い炭化物分布があり、本跡埋土はその下位で確認した。 **構造**：平面方形と考える。床は貼床である。柱穴は明瞭ではない。床面で確認したピットは非常に浅く、使用目的は不明である。 **カマド**：北壁中央に位置する。袖材として扁平な礫を両側に立てている。火床は両袖中央に残る。住居壁面を浅く半円形に掘り込んでいる部分は煙道基部に相当すると考える。 **出土遺物**：埋土内には角礫や土器などが散乱する。カマドから鉄釘、土師器杯や甕が出土している。 **時期**：平安時代（9世紀中頃）。

**SB7033** [遺構：図版 2-367・PL100, 101、土器：図版 3-165]

**位置**：I X 20・25 グリッドほか。 **検出**：IV層表面に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧)SD5005。(新) ST7014、SK7218・7216。(不明)SK7512・7699・7700・7845・7508。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は黄褐色土の硬化した貼床である。柱穴は4基を確認した。周溝はカマド以外で全周する。 **カマド**：北壁中央東寄りに位置する。火床は両袖中央に残る。袖は地山を削り残して、その上に灰黄褐色土の構築材が使われる。カマド奥に支脚石の抜き取り痕跡と考えられる小ピットがある。 **出土遺物**：少ない。 **時期**：古墳時代後期（7世紀代）。

**SB7034** [遺構：図版 2-368、土器：図版 3-165・PL249, 250]

**位置**：I X 15・20 グリッド。 **検出**：IV層表面に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**：(新) SD8002、SB7035、SK7509・7510。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は貼床で比較的明瞭である。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床は中央に残る。右袖に黒褐色土の構築材が残る。 **出土遺物**：埋土中からの出土が多い。 **時期**：平安時代（9世紀中頃）。

**SB7035** [遺構：図版 2-369・PL101、土器：図版 3-165, 166・PL250、石器：図版 3-226、金属製品：図版 3-267・PL296]

**位置**：I X 15・20 グリッド。 **検出**：IV層表面に褐色から黒色土が落ち込む。上層には灰褐色土のやや硬い層がみられ、SD8002に伴う道跡か。 **重複関係**：(旧) SB7035・7073・7040・7041。(新) SD8002。 **埋**

土：黒褐色土を主体とする。床面上に焼土粒子を含む炭化材の広がり認められた。焼失住居跡と考えられる。**構造**：平面方形。床は貼床で比較的明瞭である。柱穴は4基ある。周溝はカマド周囲と南西壁にある。**カマド**：北東壁の東隅に壁から突出するように位置する。火床が残る。袖は残らないが、前面に礫が散在し、袖石と推測される。**出土遺物**：建築部材と考えられる炭化材が床に広がる。羽釜などの土器片とともに動物骨が出土している。**時期**：平安時代（10世紀後半）。

**SB7036** [遺構：図版 2-370・PL101, 102、土器：図版 3-166, 167・PL250, 251、石器：図版 3-203、金属製品：図版 3-256, 261, 269, 271・PL292, 297, 298]

**位置**：I Y 11・16 グリッドほか。**検出**：IV層表面に褐色から黒色土が落ち込む。**重複関係**：(旧) SB7027・7037・7066。(新) SD8002、SK7187・7721・9001。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形、やや下膨れである。床は貼床で中央部で硬く、比較的明瞭である。柱穴は貼床下で確認し、4基ある。周溝はカマド周囲と西および南壁で確認された。北東隅のピットは貯蔵穴か。**カマド**：北壁中央に位置する。火床がよく残る。袖は芯材に角礫を使い、黒色土を貼る。**出土遺物**：鉄鏃、刀子などが出土している。**時期**：平安時代（8世紀末～9世紀前半）。

**SB7037** [遺構：図版 2-371、土器：図版 3-167・PL251、石器：図版 3-211, 213, 214・PL278]

**位置**：I Y 11・16 グリッドほか。**検出**：IV層表面に褐色から黒色土が落ち込む。**重複関係**：(旧) SB7040・7060・7061・7066。(新) SB7035・7036、SK7322。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面長方形か。床は貼床で、比較的明瞭である。柱穴は貼床下で確認し、4基ある。周溝はカマド以外全周したと推測される。**カマド**：北壁東寄りに位置する。火床は残らず、カマド内から右袖側に焼土分布している。袖は左袖とその西側に白色土の広がり認められた。**出土遺物**：滑石製白玉等が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀前半）。

**SB7039** [遺構：図版 2-372・PL102、土器：図版 3-167・PL251、石器：図版 3-202, 226, 248・PL276、金属製品：図版 3-252・PL290]

**位置**：I Y 12 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SB7011・7038、SD8003、SK7915・7317・7724・7752。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面長方形。床は黄褐色土の硬化した貼床で、平坦である。柱穴は4基ある。柱穴周囲の床面にある黄褐色ブロック土は柱材抜き取りの残土と推測される。**カマド**：北壁中央に位置する。燃焼部が強く焼け、煙道下部まで繋がる。袖は黄褐色土の構築材でつくられ、両袖と天井部奥側が残る。**出土遺物**：南東隅床面に石錘9点集中し、南西隅に金銅製耳環1点が出土している。**時期**：平安時代（9世紀後半）。

**SB7040** [遺構：図版 2-373・PL102, 103、土器：図版 3-167・PL251、石器：図版 3-226、金属製品：図版 3-261, 269]

**位置**：I X 10・Y 11 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SB7011・7038、SD8003、SK7915・7317・7724・7752。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は黒褐色土の貼床で、特に床面中央は硬くしまる。柱穴は掘方で確認され、4基あるが、うち2基が扁平な掘方を持つ。周溝はカマド以外で全周する。**カマド**：北壁中央に位置する。燃焼部の残りは良い。袖は黒褐色土の構築材と角礫で造られる。**出土遺物**：鉄鏃・刀子など鉄製品4点が出土している。**時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7041** [遺構：図版 2-374・PL103、土器：図版 3-167, 168・PL251、石器：図版 3-202, 214, 226・PL276, 279、金属製品：図版

3-265・PL294]

**位置**：I X 10・15 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB7042・7040、SK7350。(新) SB7035、SK7846・7847・7896。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形。床は強固な貼床で、床面の中央を中心に貼られる。周溝は北西隅に認められた。**カマド**：北壁中央に位置する。袖は礫と黒褐色土で構築される。火床は掘方埋土上面が赤化する。柱穴は西壁に2基認められた。**出土遺物**：鉄製紡錘車がカマド右脇から出土している。カマド内から土器が多出する。**時期**：平安時代(9世紀中頃)。

**SB7042** [遺構：図版 2-375, 376・PL103、土器：図版 3-168, 169・PL252、石器：図版 3-211・PL278、金属製品：図版 3-256, 261, 264・PL294]

**位置**：I X 10・15 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(新) SB7040・7041、SK7343・7346～7348・7337。(不明) SK7697・7698。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は比較的強固な貼床である。とくに床面中央は硬く締まる。柱穴は4基を確認し、柱材の抜き取りによる残土を床面で確認した。周溝はカマド以外でほぼ全周する。掘方調査時に東西方向の間仕切り溝が確認されている。**カマド**：北壁中央に位置する。袖はにぶい黄橙色～にぶい黄褐色土と両袖最前部に柱状礫を立てて構築される。煙道はU字状に掘り込んだ後に、構築土を用いて造られる。火床は掘方埋土上面が赤化する。**出土遺物**：カマド左脇に正位に埋設した長胴甕1点とカマド天井部の芯材として甕2点が出土している。鉸具、刀子などの鉄製品が出土している。**時期**：古墳時代後期(7世紀前半)。

**SB7043** [遺構：図版 2-377、土器：図版 3-169, 170・PL252, 253、石器：図版 3-226・PL282、金属製品：図版 3-256, 263・PL292]

**位置**：I Y 06・07 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB7068・7057。(新) SB7044・7063、SD8003、SK7899・7917・7879。**埋土**：暗褐色～黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は掘方埋土上面を敲いた床で、SB7068との床面との区別はあいまいである。掘方は浅い。柱穴は4基を確認し、P5も柱穴の可能性はある。周溝はカマド以外でほぼ全周する。**カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。袖は地山をやや削り出し、礫を芯材として、構築土を用いて造られる。火床は右袖寄りに赤化した部分が残る。**出土遺物**：カマド東脇に正位に埋設された甕が出土している。**時期**：古墳時代後期(7世紀後半)。

**SB7044** [遺構：図版 2-376・PL103, 104、土器：図版 3-170・PL253、石器：図版 3-249・PL289]

**位置**：I Y 06 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB7068・7057。(新) SB7044・7063、SD8003、SK7899・7917・7879。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床の東半分は下位 SB 埋土内に床面があり、平坦面を造っているが、貼り床か不明。床の西半分は地山を敲いて造られる。周溝は西壁から南壁西側で確認された。**カマド**：北壁東寄りに位置する。袖は礫を芯材として黒色土で構築している。火床は両袖間の燃焼部が強く赤化する。**出土遺物**：カマド部および周辺に集中する。**時期**：平安時代(9世紀後半)。

**SB7045** [遺構：図版 2-378、土器：図版 3-170・PL253、金属製品：図版 3-271・PL298]

**位置**：I Y 07・08 グリッドほか。**検出**：IV層上面で暗褐色土を確認する。南東側は調査区外となる。**重複関係**：(旧) SB7058。(新) SK7632、ST7919。**埋土**：暗～黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形か。床は黄褐色土混じりの黒褐色土の硬化した平坦な面を呈する。掘方を持つ。柱穴は不明確で

ある。北東壁際と西、南壁際に直径5～10cmの小ピットが30～40cm間隔で検出された。調査時に降雨による土砂が入り、不明となってしまったが、平面位置のみ記録した。周溝は北東隅で確認された。**カマド**：北西壁中央に位置する。袖は礫を芯材として黒色土で構築している。両袖部に楕円形の袖石抜き取り痕跡が1対ある。火床は残る。**出土遺物**：「大井」の墨書土器片がカマド内から出土している。**時期**：平安時代（9世紀中頃）。

**SB7046** [遺構：図版 2-379・PL104, 105、土器：図版 3-171・PL253、石器：図版 3-219, 226, 231, 249・PL281, 282, 289、金属製品：図版 3-256, 261・PL292, 293]

**位置**：I Y 02・03 グリッド。**検出**：IV層上面で暗褐色土を確認する。南東側は調査区外となる。**重複関係**：(旧) SB7058・7047。(新) SK7702・7877・7878・7885。(不明) SK7701。**埋土**：暗褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形。床はSB7058埋土内に床を設け、黄褐色土混じりの黒褐色土の硬化した平坦な面を造るが、明確な貼床ではない。柱穴は明瞭なものを確認していない。P6は入口施設に伴うものか。**カマド**：北西壁中央に位置する。袖と天井石は角礫を設置する。袖石の上部は折れて、カマド内より出土した。火床は支脚手前の燃焼部が強く赤化する。**出土遺物**：カマド燃焼部内外で数個体分の土器片、鉄製品、砥石等が出土している。床面上で鉄鏃や刀子が出土している。**時期**：平安時代（9世紀中頃）。

**SB7050** [遺構：図版 2-381、土器：図版 3-171・PL254]

**位置**：II D 08 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。SB7005 先行トレンチ調査で本跡カマドが検出されている。また、床面検出段階で、SB7053の床面を検出した。**重複関係**：(旧) SB7005・7078。(新) SB7053・7004。(不明) SK7222・7848・7861。SB7078は、図面整理の段階で新たに確認した。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は軟弱な貼床でやや不明瞭、カマドの前面が比較的硬く貼られている。柱穴は掘方調査時に確認した。南壁際中央に長方形のピットがあり、出入り口施設の可能性がある。周溝は西・南壁にかけてL字形にある。掘方を持つ。**カマド**：北壁西寄りに位置する。火床は残る。カマド全体を半円形に壁から突出させ、礫を芯材として、にぶい黄褐色土で構築している。燃焼部全体が強く被熱している。**出土遺物**：完形に近い杯類が出土している。埋土中からの出土が多い。**時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7052** [遺構：図版 2-381・PL105、土器：図版 3-171・PL254]

**位置**：II D 08・09 グリッド。**検出**：SB7004埋土除去中に検出した。当初土坑と判断したが、北側に石組みカマドを確認し、竪穴住居跡として調査を進めた。**重複関係**：(旧)SB7004。(新)SK7020。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形。床は軟弱な貼床で、カマドの前面が比較的硬い。カマド右の土坑は、貯蔵穴の可能性がある。炉跡1基が床面で確認され、鍛冶炉と考えられる。また、床面に浅い不定形の窪みが観察され、鍛冶炉と関連する作業場などが想定される。**カマド**：北壁中央やや東寄りに位置する。火床は残る。北壁に白色粘土と礫を用いて構築する。カマド上部及び右側窪みに廃棄された礫が出土している。**出土遺物**：炉跡内の採取土から小さな鉄滓類が出土している。**時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7055** [遺構：図版 2-382, 383・PL105、土器：図版 3-171, 172・PL254、石器：図版 3-226・PL282、金属製品：図版 3-253・PL290]

**位置**：I X 21・22 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。南東隅が攪乱を受けている。**重**

**複関係**：(新) SB7014、SK7952。(不明) SK7838・7840・7841。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は硬くしっかりした貼床で、床面上で柱穴を確認した。南壁際中央床面の P1 は出入り口施設と考えられる。周溝は残存する範囲で全周し、新カマド下位には旧カマド使用時の周溝が埋没していた。柱穴は4基あり、北側の柱穴2基と周溝を結んで、間仕切り溝が検出された。 **カマド**：北壁中央に旧カマド、東壁中央に新カマドを持つ。旧カマドには火床が残り、袖は残らない。新カマドでは、火床が支脚手前で赤化し、袖石を1対の埋設と支脚石が残り、黒色粘土で奥壁、天井、煙道を構築している。カマド上部及び右側窪みに廃棄された礫が出土している。 **出土遺物**：新カマド支脚石上に壺が正位で重なる。その上面と南側に土師器が一括出土している。北西隅床面には炭化材がまとまって出土している。北西柱穴内から敲石が出土した。北西隅で台石、石錘、小形砥石が出土している。 **時期**：古墳時代(5世紀後半)。

**SB7056** [遺構:図版 2-383]

**位置**：I X 17 グリッド。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認する。 **重複関係**：(旧)SK7781。(新)ST7707。(不明) SK7782。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は貼床で不明瞭である。掘方がある。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床が残る。 **出土遺物**：床面下に灰釉陶器の食器類を一括投棄した土坑 (SK7782) を確認した。 **時期**：平安時代 (9世紀前半) か。

**SB7057** [遺構:図版 2-384・PL105, 106、土器:図版 3-172、金属製品:図版 3-269]

**位置**：I Y 06・07 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認する。SD8003の埋土を除去したところ、SB7043とともに底面にカマドを確認した。住居が5軒と重複していた。 **重複関係**：(新)SB7043・7063・7044・7068、SK7884・7334・7336、SD8003。(不明) SK7341。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で硬く明瞭に確認でき、カマドの前面は強固であった。掘方がある。柱穴は4基あり、四隅に配置される。周溝はカマド部を除いて全周する。東壁際中央にある P5 が出入り口施設の可能性がある。 **カマド**：北壁中央東寄りに位置する。火床が残り、燃焼部が強く赤化している。袖は地山を削り出し、白色と黄色褐色土で構築する。 **出土遺物**：遺物は少なく、埋土中からの出土が多い。鉄鎌が出土している。 **時期**：古墳時代後期 (7世紀代) か。

**SB7058** [遺構:図版 2-385・PL104, 105, 106、土器:図版 3-173・PL254、金属製品:図版 3-256]

**位置**：I Y 02・03 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。南東側半分は調査区外にある。 **重複関係**：(旧) SB7047。(新) SB7046・7877・7878・7692。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は貼床で、掘方がある。柱穴は3基あり、調査区外に1基あると想定される。 **カマド**：北壁中央に位置する。火床は支脚石手前が強く赤化する。袖は主に黄褐色土で構築する。 **出土遺物**：カマド東床面に土師器類と鉄鎌が出土している。 **時期**：古墳時代後期 (6世紀中頃)。

**SB7060** [遺構:図版 2-386・PL107、土器:図版 3-173・PL255]

**位置**：I Y 11・12 グリッドほか。 **検出**：SB7038埋土中に入れ子状態で確認する。同住居跡の埋土掘り下げ時に本跡のカマドを確認し、そこから平面プランを確定した。壁の立ち上がりは不明瞭であったが、周溝を確認したことにより、全体像を明らかにした。西壁の一部は破壊されている。 **重複関係**：(旧)SB7037・7038・7066。(新) SB7011、SK7321。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は貼床で不明瞭。柱穴は4基あり、すべて床面では確認できず、貼床下で確認した。周溝はカマド以外全周する。 **カマド**：東壁中央にある。火床は残る。右袖部の小ピットは、袖石の痕跡と考えられる。

**出土遺物**：カマド内および床面で出土している。 **時期**：平安時代（8世紀末～9世紀前半）。

**SB7061** [遺構：図版 2-387、土器：図版 3-173・PL255、石器：図版 3-246・PL288]

**位置**：I Y 11・12 グリッド。 **検出**：IV層上面で褐色土から黒色土を確認する。SB7037・7038 との重複関係は不明瞭であった。 **重複関係**：(新) SB7037・7038・7060・7011・7039、SK7323・7329。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。上層の大半が削平されている。 **構造**：平面隅丸方形か。床は貼床で不明瞭。柱穴は4基あり、北側2基は床面上、南側2基は掘方調査による。残存部分で、周溝はカマド以外全周する。 **カマド**：北壁中央にある。火床は燃焼部が円形に残り、右袖側に被熱範囲が延びる。天井石が被熱部に転落する。 **出土遺物**：カマド手前で土器片が散乱する。 **時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB7063** [遺構：図版 2-386・PL107、土器：図版 3-173・PL255、金属製品：図版 3-263・PL294]

**位置**：I Y 06 グリッド。 **検出**：SB7043・7044・7057 の調査中に遺構の存在を確認したが、不明瞭であった。一帯は竪穴住居跡5軒の重複がある。 **重複関係**：(旧) SB7043・7057・7068。(新) SB7044、SK7334、SD8003。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で硬く締まるが、明確な掘方がない。周溝はカマド部と破壊された部分以外は全周するが、明瞭ではなかった。 **カマド**：東壁中央にある。SD8003 に壊されている。火床は壁際に半円形に赤化した部分がある。 **出土遺物**：カマド周囲の床面上から土師器片等がまとまって出土している。ウマ歯、鉄製品2点も出土した。 **時期**：平安時代（9世紀中頃）。

**SB7065** [遺構：図版 2-388・PL107、土器：図版 3-173・PL255、金属製品：図版 3-257]

**位置**：I Y 01・02 グリッド。 **検出**：IV層上面で極暗褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SK7561・7687。(不明) SK7890・7889・7886・7905・7600・7888・7887。 **埋土**：極暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。掘方上に床土を貼り、硬く締まる。浅い掘方がある。柱穴は西側床面に1基のみ確認した。カマド左床面に浅いピットがある。 **カマド**：北壁中央にある。火床は焚口左寄りにあり、貼床が赤化していた。袖は左右に袖石の抜き取り痕跡を確認した。カマド上部および周辺に黒色土の構築材が残る。 **出土遺物**：カマド上から左側に土器片が散乱していた。鉄鏃が出土した。 **時期**：平安時代(9世紀前半)。

**SB7068** [遺構：図版 2-388・PL107、土器：図版 3-174、石器：図版 3-211・PL278]

**位置**：I Y 06・07 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認するとともに、SB7043 の埋土除去中、遺構の存在を確認した。 **重複関係**：(旧) SB7057。(新) SB7043・7044・7063。SK7334・7879・7917、SD8003。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で、硬く締まる。掘方上に床土を貼る。柱穴は掘方調査時に4基確認した。周溝は残存部ではほぼ全周する。 **カマド**：東壁中央やや南寄りにある。SB7043 周溝などに大半が壊されている。半円形に被熱部分が残る。煙道部が突出している。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：古墳時代か。

**SB7069** [遺構：図版 2-389・PL108、土器：図版 3-174・PL255]

**位置**：I Y 16・17 グリッド。 **検出**：SB7031 の床面精査中に平面プランを確認した。重複する住居の床面に本跡の壁ラインを確認した。 **重複関係**：(旧) SB7026・7027・7028。(新) SB7031、SK7273・7271・7268。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は貼床で、硬く締まる。浅い掘方がある。柱穴は床面上では確認できず、掘方調査時に浅いピットが2基確認された。周溝は北壁以外3面で確認し

た。カマド：北壁中央にある。火床は残る。SB7031に壊されているため煙道の張り出しはわずかである。袖はにぶい黄橙色土で構築された両袖が残る。 **出土遺物**：ほとんどない。 **時期**：平安時代(9世紀代)。

**SB7070** [遺構：図版 2-389・PL108、土器：図版 3-174・PL255、石器：図版 3-249、金属製品：図版 3-261・PL293]

**位置**：I X 06・07 グリッド。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認した。 **重複関係**：(旧)SB8002、SK7976、ST7012。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面やや長方形。床は暗褐色土の貼床で、やや硬く締まる。浅い掘方がある。南東壁床面にピット2基あり、東側のP5は貯蔵穴の可能性がある。西側のピットが出入り口施設か。周溝は一部途切れるが、ほぼ全周する。 **カマド**：北西壁中央にある。火床は燃焼部が強く赤化する。袖は黒色土で構築され、袖石の抜き取り痕跡が検出された。 **出土遺物**：南東壁際の2基のピットからほぼ完形の須恵器杯が出土した。 **時期**：平安時代(9世紀前半)。

**SB7071** [遺構：図版 2-390・PL109、土器：図版 3-174・PL255、石器：図版 3-208, 226]

**位置**：I X 06・11 グリッド。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認した。北東隅にカマドの重複が認められた。住居の北西部は調査区外となる。 **重複関係**：(旧)ST7012・7013、SK7985・7986・7996・7997・7998。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸やや長方形。床は暗褐色土の貼床で、やや硬く締まる。南床がやや高く、段差を持つ。周溝は南西壁の一部に残存する。 **カマド**：住居の東隅に2基確認された。旧カマドは北東壁に直交する軸を持ち、新カマドは住居隅同士の対角線と同軸である。旧カマドの上に、新カマドが構築された。旧カマドは袖石を抜き取られ、新カマドは袖石が多く残る。火床は旧カマドと新カマドで残る。袖は旧カマドで構築材の白色土が分布する。新カマドは角礫が両袖に並ぶ。 **出土遺物**：カマド構築材の礫と土器片が新カマド内外に散乱する。 **時期**：平安時代(11世紀前半)。

**SB7072** [遺構：図版 2-391・PL109、土器：図版 3-174、石器：図版 3-203、金属製品：図版 3-257・PL292]

**位置**：I X 16・11 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で褐色土～黒色土を確認した。 **重複関係**：(旧)SK7974。(新)ST7013、SK7946・7947、SD7003 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は暗褐色土の貼床で、硬く締まる。浅い掘方を持つ。周溝は断続的に残存する。南西床面に皿状のピットがあり、中央部から鉄鏝が出土し、東肩部に焼土がある。貯蔵穴か。中央床面に焼土塊が出土している。 **カマド**：北壁中央にある。燃焼部の突出部まで焼土が堆積している。右袖基部に角礫、袖先端部と左袖基部に抜き取り痕跡がある。 **出土遺物**：ピット内から鉄鏝が出土している。 **時期**：古墳時代後期(7世紀代)。

## 8区

**SB8004** [遺構：図版 2-392・PL110、土器：図版 3-175・PL255、石器：図版 3-227・PL282、金属製品：図版 3-257, 272・PL292, 298]

**位置**：I X 02・03 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧)SB8003・8011、ST7005・7009・8006、SM8002。 **埋土**：遺構の重複により明確にできなかった。 **構造**：平面隅丸長方形。床は薄い貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基確認された。北東隅付近に浅いピットがあり、貯蔵穴の可能性がある。P7・P8は出入り口施設の可能性がある。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。構築材が残る。焼土、炭化物は認められない。 **出土遺物**：東壁中央付近床面から砥石、鉄鏝が出土している。 **時期**：平安時代(9世紀後半)。

**SB8006** [遺構：図版 2-393・PL110, 111、土器：図版 3-175・PL255, 256、石器：図版 3-203、金属製品：図版 3-262, 269・PL297]

**位置**：I S 19・24 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8008・8027、SK8208・8211。**埋土**：暗褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は貼床で明確であった。掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝はカマド部分を除き全周する。**カマド**：北壁中央やや東寄りにある。石組粘土貼り付けカマドで、褐色土を構築材として使用する。**出土遺物**：刀子、鎌等が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

SB8007 [遺構：図版 2-394・PL111, 112、土器：図版 3-175・PL256、石器：図版 3-202, 203, 214・PL276]

**位置**：I S 14・19 グリッド。**検出**：IV層上面で暗褐色～黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8008。(新) SK8194。**埋土**：南東隅、北東隅に炭化物（屋根材か）が集中する。床面には焼土ブロックが多く残る。**構造**：平面長方形。床は貼床で中央部が硬化する。掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝は北壁の東側を除き全周する。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。地山削り残しを芯とし、袖先端に礫を配置する。灰黄褐色土を構築材として利用している。**出土遺物**：壁際の床面から出土する。**時期**：古墳時代後期（7世紀前半）。

SB8008 [遺構：図版 2-395・PL112、土器：図版 3-176・PL256]

**位置**：I S 14・19 グリッドほか。**検出**：IV層上面で暗褐色～黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8027・8029。(新) SB8006・8007・8028、SK8194・8058・8051・8070・8071。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基確認された。周溝は遺構の重複部分以外は全周する。南壁付近に方形のP5があり、土師器甕類が出土した。**カマド**：北壁ほぼ中央にあり、基部は破壊されている。黒色土を構築材として利用し、袖先端に袖石を配置する。**出土遺物**：北西・南東部から土器片が多く出土した。付近の床面には、焼土・炭化物が分布する。カマド内から焼骨が出土した。**時期**：古墳時代（5世紀後半～末）。

SB8009 [遺構：図版 2-396・PL112、土器：図版 3-177・PL257]

**位置**：I T 06・07 グリッドほか。**検出**：IV層上面で暗褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8019・8009。(新) SB8015。**埋土**：暗褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形。床は貼床で、掘方を持つ。柱穴は4基確認された。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。黒色土を構築材として利用し、左袖が良く残る。支脚石の手前に火床がある。**出土遺物**：カマド周辺などから土器が出土した。**時期**：古墳時代後期（7世紀末）。

SB8011 [遺構：図版 2-397・PL113、土器：図版 3-177・PL257, 258、石器：図版 3-211, 234・PL278, 284、金属製品：図版 3-257, 265・PL292, 295]

**位置**：I X 02・03 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8036。(新) SB8004・8012。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面やや長方形。床は貼床で明瞭であった。掘方を持つ。柱穴は4基確認された。P3は貯蔵穴の可能性はある。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖の先端に礫を配置する。にぶい黄橙色土を構築材として利用している。煙道はトンネル状に検出された。**出土遺物**：カマド内およびP3周辺からの出土が多い。鉄製紡錘車、鉄鎌、石製丸玉等が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

SB8012 [遺構：図版 2-398・PL113, 114、土器：図版 3-178・PL258]

**位置**：I S 22・X 02 グリッド。**検出**：IV層上面で褐灰色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8011。**埋土**：褐灰色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形、やや不整形。床は貼床で薄く、一部不明瞭であった。掘方を持つ。周溝は南壁の一部で検出した。**カマド**：北壁中央やや東側にある。袖石と天井石の残りが良い。灰褐色土を構築材として利用している。**出土遺物**：袖石に台石を転用している。**時期**：平安時代(9世紀前半)。

SB8013 [遺構:図版 2-398・PL114、土器:図版 3-178・PL258]

**位置**：I T 11 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8016・8014・8021。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形、やや不整形。床は不明瞭で、掘方はない。柱穴は1基ある。周溝は西・南壁で検出した。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。袖は崩落しているが、煙道上部に天井石が残る。黒褐色からにぶい黄褐色土を構築材として利用している。**出土遺物**：少ない。**時期**：奈良時代(8世紀後半)。

SB8014 [遺構:図版 2-399・PL115、土器:図版 3-178・PL258, 259、石器:図版 3-205]

**位置**：I T 06・11 グリッド。**検出**：IV層上面で暗褐色～黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8016。(新)SB8013・8021。**埋土**：ブロック土を多く含む埋土で、大きく上下2層に分かれる。**構造**：平面方形か。柱穴は5基あり、P5はSB8021床面調査で検出された。**カマド**：北壁中央東寄りにある。燃焼部から煙道部にかけて焼土、炭化物、灰を混入する褐色土がみられるが、明らかな火床ではない。袖は地山削り残しで、先端に袖石を配置する。暗褐色土を構築材として利用する。**出土遺物**：カマド前につぶれた土師器甕が出土している。**時期**：奈良時代(8世紀前半)。

SB8015 [遺構:図版 2-400・PL114、土器:図版 3-179、石器:図版 3-227、金属製品:図版 3-257・PL292, 299]

**位置**：I T 07・12 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8010・8017・8021。**埋土**：黒褐色土と黒色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形。不整形。床は地山を利用している。柱穴は3基確認された。**カマド**：南東隅にある。火床は残り、燃焼部内には炭化物が広がる。暗褐色土を構築材として利用し、袖石の残りは比較的良い。**出土遺物**：鉄鏃、鞆羽口が出土している。**時期**：平安時代(11世紀前半)。

SB8016 [遺構:図版 2-401、土器:図版 3-179・PL259、石器:図版 3-214、金属製品:図版 3-257]

**位置**：I S 10・15 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。埋土はほとんど残っておらず、床面で検出となった。**重複関係**：(旧) SK8191。(新) SB8009・8013・8014、SK8041・8042・8043。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床は不明瞭であったが、掘方を持つ。柱穴は14基確認され、このうちP2・4・7・8の4基が主柱穴か。周溝は東壁北東隅に一部確認された。床面に焼土が分布する。**カマド**：不明。**出土遺物**：鉄鏃と滑石製白玉が出土している。**時期**：古墳時代(5世紀末～6世紀前半)か。

SB8018 [遺構:図版 2-402、土器:図版 3-179・PL259]

**位置**：I T 02・07 グリッド。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8019。(新) SD8003。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面隅丸方形か。床は貼床で、比較的明瞭であった。**カマド**：北壁ほぼ中央か。火床は残る。黒褐色土を構築材として利用し、袖石・天井石の残りは比較的良

い。 **出土遺物**：カマド内の出土が多い。 **時期**：奈良時代（8世紀後半）。

**SB8019** [遺構：図版 2-403, 404・PL114、土器：図版 3-179・PL259、石器：図版 3-211, 214, 215・PL278, 279]

**位置**：I T 01・02 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒色土を確認する。埋土はほとんど残っておらず、床面で検出となった。 **重複関係**：(旧) SM8004。(新) SD8003・8010・8018。 **埋土**：黒色土を主体とするが、埋土は薄い。 **構造**：平面方形。床は埋土の色調が黒色から黄色褐色土主体に変わった部分を床と判断したが、不明瞭であった。柱穴は26基あり、このうち主柱穴はP3・8・14・16か。壁際のピットは壁体構造の痕跡か。 **炉**：不明。 **出土遺物**：検出時に遺物が散布している状態である。勾玉形模造品、滑石製白玉、ガラス玉が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀後半～末）。

**SB8021** [遺構：図版 2-404・PL115、土器：図版 3-179・PL259、石器：図版 3-227]

**位置**：I T 11・12 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。SB8014との切り合い判断は難しかった。 **重複関係**：(旧) SM8014。(新) SB8015(SB8017)。 **埋土**：黒色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は不明瞭であった。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床は残るが、全体的に破壊されて、残りが悪い。 **出土遺物**：カマド内外で出土した。 **時期**：平安時代（9世紀前半）。

**SB8022** [遺構：図版 2-405、土器：図版 3-180、石器：図版 3-203・PL276、金属製品：図版 3-262, 272・PL293, 298]

**位置**：I S 15 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SB8022。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面隅丸方形。床は掘方埋土上面が硬く締まる。柱穴は4基確認された。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床は残る。灰褐色土を構築材とした袖と支脚石が残る。 **出土遺物**：鉄製品が出土している。 **時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

**SB8023** [遺構：図版 2-406・PL115、土器：図版 3-180]

**位置**：I S 20・T 16 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で褐色から暗褐色土を確認する。 **重複関係**：(旧) SK8186。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形。床は掘方埋土上面。柱穴は4基確認された。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床は残る。黒褐色土を構築材とした袖が残る。一部礫が残る。 **出土遺物**：カマド内外から土師器類が出土している。 **時期**：奈良時代（8世紀）。

**SB8024** [遺構：図版 2-407, 408・PL115, 116、土器：図版 3-180, 181・PL259, 260、石器：図版 3-211, 215, 216, 227, 231・PL278, 279, 282, 283]

**位置**：I S 20・25 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認する。 **重複関係**：(新) SD8003・8006。(不明) SK7681。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。地形の傾斜に沿って、北から埋没している。 **構造**：平面方形。床は地山のにぶい黄褐色土が貼られ、硬く締まる。柱穴4基は四隅に確認された。掘方があり、柱穴間には直線的な溝がある。この溝と壁との間にも間仕切り溝が認められた。周溝は全周する。P5が貯蔵穴と考えられる。 **カマド**：2基あり、北壁中央(旧)と東壁中央やや南寄り(新)とがある。旧カマドは火床が残らず、破壊され、埋め戻されている。新カマドは黒色土を構築材とし、礫を組んだカマドである。支脚石が残る。 **出土遺物**：土製勾玉等が出土した。 **時期**：古墳時代（5世紀後半）。

**SB8025** [遺構：図版 2-409・PL116, 117、土器：図版 3-181, 182・PL260, 261、石器：図版 3-203]

**位置**：I S 15 グリッドほか。 **検出**：IV層上面で黒色土を確認する。耕作の影響でSB8022との切り合

いは明確でなかった。**重複関係**：(新)SB8022、SK8145・8187。**埋土**：黒色土を主体とする。**構造**：平面隅丸長方形。床は掘方埋土の上面が硬化している。柱穴は4基確認された。周溝は全周すると考えられる。**カマド**：北壁中央やや西寄りにある。袖は地山を削り残し、暗褐色土を構築材とし、袖先端に礫を置いていた。支脚石は外された状態でカマド内から出土した。構築材の土は床面にも広がっていた。**出土遺物**：カマド内に集中し、完形の長胴甕が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀後半）。

SB8028 [遺構：図版 2-410, 411・PL117、土器：図版 3-182、石器：図版 211, 227・PL278, 282]

**位置**：I S 13・14 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒色土を確認する。**重複関係**：(旧) SB8008・8029、SK8129。**埋土**：黒色土を主体とする。床面上に炭化物を含む薄い層が認められた。**構造**：平面方形。床は貼床で、明瞭である。柱穴は4基確認された。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。全体に破壊を受け、袖は明瞭でない。火床が2面あり、下位の火床と煙道を埋め戻して、上位の火床、煙道を造りだしている。**出土遺物**：砥石と台石が出土している。**時期**：古墳時代後期（7世紀代）。

SB8030 [遺構：図版 2-412・PL117、土器：図版 3-183・PL261、石器：図版 3-205, 247・PL288]

**位置**：I S 09・10 グリッドほか。**検出**：周辺は耕作による攪乱を受けていて、本跡は北壁とカマド煙道部で確認された。SB8029との新旧関係は出土土器の違いで判断した。**重複関係**：(旧) SB8029・8031・8038。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面方形。床はカマド前が貼床で、他は掘方埋土上面となるが硬くない。柱穴は10基確認されたが、主柱穴を判断できなかった。貯蔵穴はP2に可能性がある。周溝は一部途切れるが全周する。**カマド**：北壁中央東寄りにある。廃棄時に壊されていて、構築材の黒色土と礫が散在する。**出土遺物**：カマド内外で大量に出土した。石錘、敲石、石皿が出土している。**時期**：奈良時代（8世紀前半）。

SB8031 [遺構：図版 2-411、土器：図版 3-183]

**位置**：I S 09 グリッド。**検出**：IV層上面で暗褐～黒褐色土を確認する。カマド煙道先端で土器片の集中がみられた。切り合いは断面観察による。**重複関係**：(旧) SB8030。(新) SB8038。**埋土**：暗褐色土を主体とする。**構造**：平面長方形。床は貼床で、全体に硬化する。貯蔵穴はP1か。**カマド**：北壁中央やや西寄りにある。赤褐色の構築材で造られた袖が残存している。火床は残る。燃焼部から煙道部にかけて赤褐色の天井崩落土が堆積していた。**出土遺物**：煙出口部で土器の出土がみられた。**時期**：古墳時代後期（6世紀前半）。

SB8038 [遺構：図版 2-413、土器：図版 3-183・PL261、石器：図版 3-203・PL276]

**位置**：I S 09・10 グリッド。**検出**：IV層上面で北壁の直線ラインと煙道出口の焼土を確認した。南半分は耕作によって攪乱される。**重複関係**：(新)SB8030、SD8031。**埋土**：褐灰色土を主体とする。**構造**：平面方形か。床は掘方埋土上面が硬化したもの。**カマド**：北壁ほぼ中央にある。カマド前面に角礫が散在することから、石組として利用されたものか。火床が残る。天井はドーム状に残り、赤褐色土が構築材として利用される。**出土遺物**：ごくわずかである。**時期**：古墳時代後期（6～7世紀代）。

SB8039 [遺構：図版 2-415・PL117, 118、土器：図版 3-183・PL261、石器：図版 3-231, 234・PL284]

**位置**：I O 24・I T 04 グリッドほか。**検出**：IV層上面で黒褐色土を確認した。表土を剥ぐと検出面である。**重複関係**：(旧) SK8220。(新) SD8013。**埋土**：黒褐色土を主体とする。**構造**：平面形長方

形。床は掘方埋土上面が硬化したものか不明瞭である。掘方を持つ。支柱穴は4基で、平面形は方形を呈する。P1は出入り口施設か。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床が残る。角礫の袖石を両袖手前に配置し、灰褐色土（黒褐色と黄褐色土のブロック）を構築材に用いる。 **出土遺物**：カマド内から土師器杯類が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀末～6世紀前半）。

**SB8040** [遺構：図版 2-416、土器：図版 3-184・PL262、石器：図版 3-216・PL279]

**位置**：I O 23 グリッド。 **検出**：IV層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**：(新) SD8013。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は掘方埋土上面が硬化したもので不明瞭である。掘方を持つ。支柱穴は4基で、底面で方形を呈する。P7は貯蔵穴か。 **カマド**：北壁ほぼ中央にある。火床が残る。袖は地山削り残しで、構築材は残存しない。 **出土遺物**：滑石製白玉等が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀後半）。

**SB8041** [遺構：図版 2-417・PL1, 118、土器：図版 3-184・PL262、石器：図版 3-227, 231]

**位置**：I O 20・25 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認した。北西隅は攪乱を受ける。東側は調査区外である。 **重複関係**：(新) SD8013。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は掘方埋土上面が硬化したもので不明瞭である。掘方を持つ。支柱穴は2基で、調査区外に他の柱穴があると推測される。 **カマド**：北壁にある。火床が残り、上部に灰が分布していた。袖は黒褐色土を含む黄色褐色土で基部を作り、袖石を配置して、暗褐色～黒褐色土で袖を形成している。天井石も床面数cm上位に落下していた。 **出土遺物**：カマド内から土師器類が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀末～6世紀前半）。

**SB8042a** [遺構：図版 2-418・PL118、土器：図版 3-184]

**位置**：I O 24・25 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認した。当初、1軒の竪穴住居跡として調査し、土層観察や平面形、特にカマドの切り合いで判断し、最終的に3軒として修正した。東側は調査区外である。 **重複関係**：(旧) SB8042b・c。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面長方形か。床は貼床で硬化している。支柱穴は1基を確認した。 **カマド**：北壁ほぼ中央か。火床はぼんやりと赤く残るが、焼土か不明瞭である。燃焼部中央に支脚石の抜き取り痕跡もある。 **出土遺物**：少量が出土している。 **時期**：古墳時代後期（6世紀前半）。

**SB8042b** [遺構：図版 2-418・PL118、土器：図版 3-184]

**位置**：I O 24 グリッド。 **検出**：SB8042aを参照。 **重複関係**：(新) SB8042a・c、SK8241。 **埋土**：褐色土を主体とする。 **構造**：不明。床は埋土と同質で硬化面はないが、焼土、炭化物の分布から床面と判断した。 **カマド**：西壁か、煙道と推測される張り出しがみられた。北西隅に焼土・炭化物を多く含む極暗褐色土が分布し、カマドに関連するものか。 **出土遺物**：少量が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀後半）。

**SB8042c** [遺構：図版 2-418・PL118、土器：図版 3-184、石器：図版 3-246・PL288]

**位置**：I O 24・25 グリッド。 **検出**：SB8042aを参照。 **重複関係**：(旧) SB8042b。(新) SB8042a。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形か。床は不明瞭である。柱穴は1基確認した。周溝は検出された範囲で全周する。床面で、北西隅に周溝を繋ぐような形で斜めに溝が検出された。 **カマド**：北壁ほぼ

中央か。袖や構築材、火床はなく煙道の痕跡だけである。煙道埋土に炭化物、灰が認められた。 **出土遺物**：少量が出土している。 **時期**：古墳時代（5世紀後半）。

**SB8044a** [遺構：図版 2-419・PL118, 119、土器：図版 3-184, 185・PL262, 263、石器：図版 3-216, 227・PL279]

**位置**：I O 19 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認した。SB8044b は床下調査で確認された。東壁は攪乱を受けていた。 **重複関係**：(旧)SB8044b。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。 **構造**：平面方形。床は不明瞭である。柱穴は3基確認し、南西側は確認できなかった。 **カマド**：北壁中央。袖は地山削り残しの袖である。 **出土遺物**：北東隅に土器集中がある。勾玉形模造品が出土した。 **時期**：古墳時代(5世紀後半)。

**SB8045** [遺構：図版 2-417・PL119、土器：図版 3-185・PL263]

**位置**：I O 14・15 グリッド。 **検出**：IV層上面で暗褐色土を確認した。北西隅は攪乱を受ける。東側は調査区外である。 **重複関係**：なし。 **埋土**：暗褐色土を主体とする。床面からその上位に炭化物が分布する。 **構造**：平面方形か。床は不明瞭である。柱穴は1基確認した。 **カマド**：北壁中央か。袖は地山削り残しで、構築材を貼る。 **出土遺物**：カマド周囲に集中する。 **時期**：古墳時代(5世紀後半～6世紀初)。

## 2. 掘立柱建物跡 [遺構：図版 2-420～505・PL120～143]

竪穴住居跡と同じく、各地区で検出される。規模的には柱間が2間や3間の建物跡が多い。総柱と側柱では、総柱が少ない。時期の詳細は、出土遺物や遺構間の重複関係で、帰属時期を判断した例もあるが、多くは判断し難い。分布状況を概観してみると、長軸方向に5～6間の柱間を持つ比較的大型の掘立柱建物跡が調査区内で4棟調査されている。これらは、100m程度の一定の間隔を持ち、周囲に総柱の建物がセット関係を持つように配置されている。時期的な確定は難しいが、視点を広げてみた場合、一定の範囲のなかに、掘立柱建物がまとまる地点が存在することになる。これが竪穴住居跡と組み合わせ、まとまりになる場合、それらは共時的な関係か、時間差があるのかは更なる検討が必要である。なお、遺構の詳細は、付表3としてまとめた。

## 3. 柵列 [遺構：図版 2-531～533]

7区において、掘立柱建物跡の柱穴もしくは小ピット規模の土坑が直線状に並ぶ状況を複数確認した。7区は掘立柱建物跡が多数検出されているため、建物跡の柱穴となるかどうか検討したが、矩形に配列する状況はなく、柱穴が列状に並ぶ柵列の痕跡と想定した。確認された柵列は5列である。列方向はいずれも東西方向に近く、南北方向はない。規模は長さが3～7mと比較的小規模なSA7004・7005と、10mに近いSA7001、11～13mのSA7002・7003という大規模なものがある。規模の大きなSA7002・7003はSD5002・8006の南側に位置し、両者は中央部より西側で交差している。柱穴の規模は大きく、柱痕跡が確認される場合もある。SA7002とSA7003の前後関係や時期を特定できないが、SD5002・8006と関連している可能性も考えられる。

## 4. 土坑墓（木棺墓）

4区と8区に平安時代の土坑墓（木棺墓）と考えられる土坑6基を検出した。木質は残存していない。ヒトの骨や副葬品と考えられる完形の土器や陶器が出土する場合がある。また木棺に使用した可能性のある鉄釘が出土した土坑もある。木棺墓の確認された地点の周囲には同時期と考えられる竪穴住居跡や掘立

柱建物跡も分布していることから、集落の一角に墓地が設けられていたとも理解できる。

**SK4051** [遺構:図版 2-512・PL147、土器:図版 3-190・PL266、金属製品:図版 3-271・PL298]

**構造**: 平面形は長方形を呈し、底部は平坦である。木質は残存しないが形状から木棺墓の掘方と考える。

**出土遺物**: 底部北側に歯列が確認できるヒトの頭骨が出土している。掘方際に墨書土器が出土しているが、木棺墓の棺外に副葬されたと考える。このほか鉄釘は棺に伴う可能性があるが、判断し難い。 **時期**: 平安時代 (10 世紀前半)。

**SK4270** [遺構:図版 2-512・PL148、土器:図版 3-190・PL267]

**構造**: 平面形は長方形を呈し、壁面は垂直で、底部は平坦である。木棺墓の掘方と考えられる。 **出土遺物**:

底面付近から、ヒトの頭骨などが出土。北東隅壁際底部に完形の灰釉陶器皿が横向きで出土している。棺外に副葬されたと考える。 **時期**: 平安時代 (10 世紀前半)。

**SM4011** [遺構:図版 2-513・PL146]

**構造**: 平面形は長方形を呈し、壁は垂直、底部が平坦である。長軸は東西方向である。 **出土遺物**: 東側底面からヒトの頭骨、北壁際に四肢骨片が出土している。ヒト 1 体分を埋葬した木棺墓と考える。土器等の出土はない。 **時期**: 平安時代と考える。

**SK8188** [遺構:図版 2-518・PL151]

**構造**: 南北に軸を持つ。上面は不整楕円形、底面が長方形。底面は平坦で、断面は逆台形。西側上面がややテラス状に広がる。長方形の掘方との関係は明瞭ではない。木棺墓の可能性はある。 **時期**: 平安時代か。

**SK8204** [遺構:図版 2-518・PL151、土器:図版 3-193・PL269]

**構造**: 平面形はやや角の丸い長方形、底面は平坦。ほぼ東西に軸を持つ。木棺墓と考えられる。 **出土遺物**:

東側底面にヒトの歯、南側壁際に完形の土師器杯、灰釉陶器椀、皿がやや傾いた状態で並ぶ。木棺周囲に副葬された状態と推定される。 **時期**: 平安時代 (9 世紀末頃か)。

## 5. 土坑

調査区全域から多数の土坑が検出された。規模形状は多様であり、時期も弥生時代から鎌倉時代に及ぶ。位置や形状、規模については観察表を DVD に収録した。ここでは遺構図・遺物図を掲載した古墳時代～古代に該当する代表的な土坑について触れる。

**SK0001** [遺構:図版 2-507、土器:図版 3-187・PL264]

**構造**: 小形で平面形は楕円形を呈す。 **出土遺物**: 土師器杯と灰釉陶器が一括出土。 **時期**: 平安時代 (10 世紀)。

**SK0004** [遺構:図版 2-507・PL144]

**構造**: 大形で平面形は隅丸長方形。 **出土遺物**: ウマ 1 体分の骨。 **時期**: 特定できない。第 9 章に分析鑑定結果を掲載している。

**SK0034** [遺構:図版 2-507・PL144、土器:図版 3-187・PL264、石器:図版 3-231]

**構造**:小形で平面形は円形。SK0035 を切る。 **出土遺物**:完形の土師器杯。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0035** [遺構:図版 2-507]

**構造**:小形で平面形は円形。SK0034 に切られる。 **出土遺物**:敲石片。 **時期**:古代か。

**SK0037** [遺構:図版 2-507・PL144、土器:図版 3-187・PL264]

**構造**:小形で平面形は楕円形を呈す。 **出土遺物**:完形の土師器杯。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0053** [遺構:図版 2-507、土器:図版 3-187]

**構造**:大形で平面形は円形を呈す。 **出土遺物**:土師器杯、骨片。 **時期**:平安時代(9世紀)。

**SK0057** [遺構:図版 2-507・PL144、土器:図版 3-187・PL264]

**構造**:小形で平面形は円形。大形土坑 SK0056 と切り合う。 **出土遺物**:土師器杯。 **時期**:平安時代(9世紀)。

**SK0071** [遺構:図版 2-508・PL144、土器:図版 3-187・PL264]

**構造**:大形で平面形は円形。 **出土遺物**:土師器杯、灰釉陶器椀。 **時期**:平安時代(9世紀末～10世紀前半)。

**SK0082** [遺構:図版 2-508・PL144、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**:中形で平面形はほぼ円形を呈す。 **出土遺物**:須恵器杯、土師器杯。 **時期**:平安時代(9世紀)。

**SK0120** [遺構:図版 2-508・PL145、土器:図版 3-188、PL265]

**構造**:中形で平面形は不整楕円形。 **出土遺物**:上層から土師器椀。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0126** [遺構:図版 2-508・PL145、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**:中形で平面形は不整円形を呈す。SK0120 と似る。 **出土遺物**:上層から小形の土師器杯。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0191** [遺構:図版 2-508、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**:中形で平面形は楕円形。 **出土遺物**:土師器杯、埋土中位に大礫。 **時期**:平安時代(9～10世紀)。

**SK0196** [遺構:図版 2-508・PL145、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**:中形で平面形は円形。埋土中位に焼土と炭化物の堆積あり。 **出土遺物**:小形の土師器杯、椀。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0200** [遺構:図版 2-509・PL145、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**:中形で平面形は不整楕円形。 **出土遺物**:埋土中位より土師器杯、椀、甕。 **時期**:平安時代(10世紀)。

**SK0241** [遺構:PL145、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**：中形で平面形は長方形。土坑墓に近い形状。 **出土遺物**：土師器甕底部片など、少ない。 **時期**：平安時代か。

**SK0275** [遺構:図版 2-509、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**：中形で平面形は円形。 **出土遺物**：埋土上層に完形の土師器食器類。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0277** [遺構:図版 2-509・PL145、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**：小形で平面形は円形。 **出土遺物**：底部より小形の土師器杯が完形で出土。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0325** [遺構:図版 2-509、土器:図版 3-188・PL265]

**構造**：大形で平面形は円形。 **出土遺物**：埋土上層より土師器杯などの食器類、刀子、鉄鏃、不明鉄片、シカ足根骨など出土。「井」とヘラ書のある須恵器壺片も出土。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0331** [遺構:図版 2-509・PL145、土器:図版 3-189・PL265]

**構造**：小形で平面形は円形。 **出土遺物**：埋土中層から上層で土師器食器類、灰釉陶器段皿などが完形に近い状態で出土。椀形鍛冶滓も出土。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0332** [遺構:図版 2-509]

**構造**：大形で平面形は円形。調査区境界で確認。逆台形状の断面。埋土上層は埋め戻されたような黄褐色土層がある。 **出土遺物**：なし。 **時期**：時期不明。古代の可能性はある。

**SK0347** [遺構:図版 2-510・PL145、土器:図版 3-189・PL265, 266]

**構造**：ごく小形で平面形は円形。 **出土遺物**：埋め戻されたような埋土内から小形の土師器食器類が完形に近い状態で出土。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0349** [遺構:図版 2-510、土器:図版 3-189・PL266]

**構造**：ごく小形で平面形は円形。 **出土遺物**：埋土上層から完形の土師器杯と角礫。 **時期**：平安時代（9世紀代）。

**SK0350** [遺構:図版 2-510、土器:図版 3-189]

**構造**：ごく小形で平面形は楕円形。 **出土遺物**：埋土上層から完形の土師器杯。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK0363** [遺構:図版 2-510、土器:図版 3-189・PL266]

**構造**：中形で平面形は円形。 **出土遺物**：灰釉陶器椀、土師器杯、シカ骨。 **時期**：平安時代（10世紀）。

**SK3006** [遺構:図版 2-510・PL146、土器:図版 3-189・PL266、石器:図版 3-246]

**構造**：大形で平面形は略方形。底部はやや平坦である。 **出土遺物**：埋土中層から須恵器杯などが一括出

土。 **時期**：奈良時代（8世紀）。

**SK3007** [遺構：図版 2-510・PL146、土器：図版 3-189、金属製品：PL299]

**構造**：ごく大形で平面形は円形。擂鉢状の断面形を呈す。 **出土遺物**：須恵器杯蓋、土師器高杯等。 **時期**：奈良時代（8世紀）。

**SK3016** [遺構：図版 2-511・PL146、土器：図版 3-189]

**構造**：ごく大形で平面形は円形。断面形は逆台形。 **出土遺物**：須恵器杯蓋、壺、土師器杯。 **時期**：7世紀後半から8世紀。

**SK3080** [遺構：図版 2-207, 511・PL146、土器：図版 3-189・PL266]

**構造**：大形で平面形は隅丸長方形。断面は皿状。 **出土遺物**：底部より完形の長胴甕が横位で出土している。 **時期**：古墳時代後期（7世紀）。

**SK3255** [遺構：図版 2-511・PL147]

**構造**：やや大形で平面形は長楕円形。底面は平坦である。 **出土遺物**：なし。 **時期**：古墳時代～古代。

**SK3279** [遺構：図版 2-511・PL146、土器：図版 3-190・PL266、金属製品：図版 3-257・PL292]

**構造**：やや大形で平面形は隅丸長方形。西側が方形に深く掘り込まれている。 **出土遺物**：掘り込まれた部分の底面から完形の小形土師器杯2点。埋土上層から鉄鏃などが出土。 **時期**：平安時代（9世紀代）。

**SK4037** [遺構：図版 2-511・PL147]

**構造**：大形で平面形は隅丸長方形。底面は平坦。 **出土遺物**：奈良時代から平安時代の土器片が出土する。 **時期**：奈良～平安時代。

**SK4144** [遺構：図版 2-512・PL148、土器：図版 3-190・PL266]

**構造**：大形で平面形は円形。断面形は半円形。 **出土遺物**：底部に動物骨出土。埋土内に古墳時代から平安時代の土器片出土。 **時期**：平安時代。

**SK4168** [遺構：図版 2-512]

**構造**：大形で平面形は不整形円形。擂鉢状の断面形。 **出土遺物**：ウシ骨出土。 **時期**：奈良時代か。

**SK4246** [遺構：図版 2-512・PL148、土器：図版 3-190・PL267]

**構造**：小形で平面形は方形。 **出土遺物**：底部より墨書のある土師器椀出土。 **時期**：平安時代(10世紀)。

**SK5002** [遺構：図版 2-513・PL148, 149、土器：図版 3-191・PL267]

**構造**：ごく大形で平面形は略円形。擂鉢状の断面形。底面は小さくやや平坦。 **出土遺物**：埋土全体から8世紀代の須恵器などが多量に出土。埋土中層下位に焼土と炭化物で構成される薄い層がある。ある程度埋没した窪みで火を燃やした痕跡と考えられる。底部付近ではウシ・ウマの生骨が出土している。 **時期**：奈良時代（8世紀）。

**SK6062** [遺構:図版 2-514・PL149、土器:図版 3-191]

**構造**: ごく大形で平面形は円形。播鉢状の断面形で底部は小さい。**出土遺物**: 埋土全体から8世紀代の須恵器が一定量出土している。近接するSK6063とよく似る。**時期**: 奈良時代(8世紀)。

**SK6063** [遺構:図版 2-514・PL149、土器:図版 3-192・PL267]

**構造**: ごく大形で平面形は円形。播鉢状の断面形で底部は小さい。**出土遺物**: 埋土全体から7世紀後半から8世紀代の比較的残存率の高い土師器と須恵器が一定量出土している。近接するSK6062とよく似る。**時期**: 古墳時代末から奈良時代(7世紀後半～8世紀)。

**SK7015** [遺構:図版 2-514・PL149]

**構造**: ごく大形で平面形は円形。半円形の断面で底部は丸みがある。**出土遺物**: 7世紀代の土師器と須恵器が出土している。**時期**: 古墳時代後期(7世紀)。

**SK7020** [遺構:図版 2-514・PL149、石器:図版 3-246・PL288、金属製品:図版 3-264、271・PL298]

**構造**: ごく大形で不整楕円形。皿状に浅く、SB7052を切る。**出土遺物**: 大量の礫と共にウマ骨が出土する。**時期**: 平安時代。

**SK7021** [遺構:図版 2-515・PL149、土器:図版 3-192・PL268]

**構造**: ごく大形で平面形は円形。底面は平坦で、上部に大きく開く形状。**出土遺物**: 埋土中層を中心に、残存状態の比較的よい須恵器杯類、ウシ骨などが出土している。**時期**: 奈良時代(8世紀)。

**SK7023** [遺構:図版 2-515・PL150、土器:図版 3-192・PL268]

**構造**: ごく大形で平面形は略円形。底面は丸く、上部に向かって大きく開く形状。**出土遺物**: 埋土中層を中心に、残存状態の比較的よい須恵器杯類、ウシ骨などが出土している。「大井」とヘラ書のある須恵器杯も出土している。**時期**: 奈良時代(8世紀)。

**SK7211** [遺構:図版 2-517、土器:図版 3-192]

**構造**: ごく大形で平面形は不整円形か。南西側はSD6002に切られている。浅く底面は平坦。**出土遺物**: 土師器杯と須恵器杯。**時期**: 奈良時代(8世紀)。

**SK7719** [遺構:図版 2-516・PL150]

**構造**: 大形で平面形は楕円形あるいは略長方形か。北東部分が調査区外のため全体形は不明。底面はほぼ平坦。**出土遺物**: 底面付近からウマ1頭分の下肢骨と上肢骨の一部が出土。四肢骨が接するように横たえられた状態で埋葬されているといえる。骨付近の埋土が断面繭形に黒味が強い。ウマの胴体部分の影響か。**時期**: 重複関係から古墳時代以降と考える。年代測定などの分析鑑定結果は第9章に掲載した。

**SK7782** [遺構:図版 2-516・PL150、土器:図版 3-193・PL268]

**構造**: ごく小形で平面形は円形。底部は平坦で壁はやや膨らむ。**出土遺物**: 底部よりやや上部から中位にかけて、灰釉陶器の皿7点と椀10点が粗く割れて重積した状態で出土。それらを封鎖するように埋土上層には黄褐色土主体土が覆う。皿2点の底部外面には「苗」の墨書あり。椀には大中2種類の規格差が

ある。ほぼ完形に復元され、割れ目が鋭利なこと、小片が多数あることから、土坑内へ陶器を投げ入れて破砕した行為を予想させる。 **時期**：平安時代（9世紀後半から10世紀前半）。

**SK7996** [遺構：図版 2-517・PL150]

**構造**：ごく小形で平面形は円形。底部はやや凹凸がある。 **出土遺物**：埋土上面よりシカ角出土。 **時期**：古墳時代～古代。

**SK8149** [遺構：図版 2-517・PL150, 151、土器：図版 3-193・PL269、金属製品：図版 3-270・PL297]

**構造**：ごく大形で平面形は円形。底部は平坦で上部に向かって開く逆台形の断面。 **出土遺物**：埋土中層に須恵器類やウシ骨がまとまって出土している。 **時期**：古墳時代～奈良時代（7世紀末～8世紀前半）。

**SK8210** [遺構：図版 2-518・PL151、土器：図版 3-194、石器：図版 3-208、金属製品：図版 3-253・PL290]

**構造**：ごく大形で平面形は不整形。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形。 **出土遺物**：埋土上位に隆平永寶1点出土。上～中位に須恵器類、ウマ・ウシ骨、礫がまとまって出土。 **時期**：奈良時代（8世紀）。

## 6. 方形周溝墓

方形周溝墓は調査範囲の北端部で SM8001、SM8003、SD8018 の3基が検出された。湧玉川の崖際に前二者が並び、それより南にやや離れて後者が位置する。このうち、ほぼ全域を調査できたのは SM8001のみである。出土遺物から古墳時代前期後葉の築造と考えられる。他2基については、SM8001に近接した時期の所産と推測するが、部分的な調査に留まったため、形態把握や時期的位置付けに不明確なところがある。主体部および墳丘が確認されたものはない。

**SM8001** [遺構：図版 2-519～521・PL152・153、土器：図版 3-194・PL269・270・275、石器：図版 3-202・204・235・PL276・284、金属図版 3-264・PL294]

**位置**：8区。I N 20・25、O 16・17・21・22、T 01・02。約2m西側に SM8003 が隣接する。

**重複関係**：(新) SD8003・8012・8015・8016、SK8210・8212・8213・8218・8221。

**検出**：IV層上面の検出である。北西隅の外縁部がわずかに調査区外となるものの、ほぼ全域を調査した。

**堆積状況**：周溝埋土は八層に分けられるが、すべて断面レンズ状ないし三角形状堆積であり、ブロックが目立つ土層はなく、自然堆積と考えられる。南辺部では、後述するテラス状平坦部上に断面三角形状の黒褐色土8層が確認され、これが層位的には最下となるが、その上を黒褐色土7層が底面から斜面を覆う。東辺部ではにぶい橙色土6層が最下層、北辺部から西辺部では暗褐色土4層が最下層となる。4層は全域的に周溝の下位から中位を埋積している。5層は6層あるいは4層の局部的変化である可能性があろう。さらに、漸移層的な様相の3・2層が形成され、全域的に黒褐色土1層が上位を埋積する。

**構造**：主体部および墳丘は失われている。平面形は西辺がやや短い台形気味の形状を呈する。中軸を東西および南北にほぼ正しく向ける。墳丘部分の規模は中軸上で東西長12.8m、南北長11.5m、周溝を含めた規模は東西長17.6m、南北長16.3mを測る。周溝は途切れることなく全周する。内縁ラインは直線的であるが、外縁ラインは隅部では丸みを帯びる。幅は各辺中央部で2.2～2.6m、隅部ではやや狭く1.4～1.7mである。北西隅から2mほど東側で最も狭くなっており、幅は1mに過ぎない。掘り込みの断面形は逆台形ないしU字形を呈する。深さは最も浅い北西隅で25cm、最も深い東辺部中央で100cmを測る。溝底レベルは、西・南・東辺部は両端が高く、中央に向かって20～65cm低くなる。その間に段差は認め

られない。一方、北辺部は、西端から東端へと単調に低くなり、明瞭な低部がない。

南辺部墳丘側の斜面下位には、東西長 8.2 m、幅最大 60cm のテラス状平坦部が認められる。周溝内に付設された棚状の施設である可能性が推測される。ただし、この部分にのみ存在する埋土 8 層が 7 層下面に切られるようにもみえることから、周溝がある程度埋没した段階で改修が行われ、その際の改変が及ばなかった旧溝底の残存であることも考えられる。周溝内から 20～30cm 大の礫が検出されたが、量が少なく、分布も限られており、崩落した葺石と見なし得る状況ではない。

**遺物**：周溝埋土から復元率が高い土器が比較的多く出土した。南辺部中央で壺（00293・06836）・小型壺（06835）・器台（06840）が、そのやや西側で高杯（06838）、やや東側で片口鉢（06833）が出土している。西辺部では、北寄りで小型甕（00296）・鉢（06832）が出土した。中央やや南寄りに位置する近世の土坑墓 SK8218 から出土した小型鉢（00322）は、本来、西辺部の埋土に含まれていたものと判断される。北辺部では、中央で壺（00295）・小型甕（00294・00297）が、そのやや西側で小型壺（06834）が出土している。

各土器は、完形に近い形状で、あるいは、ほぼ完形に復元される破片がまとまって出土した個体も多い。前者は、横倒れ状態の場合が多く、上下逆で出土した例もある。こうした様相は各土器が墳丘から転落してきたことを示すと考えられる。南辺部の片口鉢（06833）は底面付近から出土したが、その他は中位～上位にあたる 3～1 層で検出された。とくに 4 層との境付近に多い。ただし、壺（06836）については、壺（00293）のほぼ直下から出土しており、4 層に含まれる可能性もある。ほとんどの個体は周溝がある程度埋没した後に転落している。その他の遺物として、土製紡錘車 1 点（10023）、鉄製品 1 点（07M166）が出土している。鉄製品（07M166）は南辺部の 1 層から出土した。

**時期**：出土土器の様相から、本周溝墓の築造は古墳時代前期後葉と考える。ただし、古墳時代中期と思われる土器片も若干検出されており、中期まで埋葬が行われていたか、あるいは、何らかの祭祀ないし儀礼行為が継続していた可能性も考えられる。

**SM8003** [遺構：図版 2-519・521・PL152・153]

**位置**：8 区 I N 20・24・25、S 04・05。約 2 m 東側に SM8001 が隣接する。

**検出**：IV 層上面の検出である。大部分が調査区外となり、確認したのは周溝東辺部から南辺部にかけての一部である。広範囲に及ぶ耕作（トレンチャー）痕などの攪乱により遺存状況は悪い。

**重複関係**：（新）SD8017a・8017b、ST8002、SK8204・8210・8215・8216・8217・8249・8270。

**堆積状況**：周溝埋土は九層に分けられるが、すべて断面レンズ状ないし三角形状堆積であり、ブロックが目立つ土層はなく、自然堆積と考えられる。底部付近しか残っていない浅い南東隅から東辺部では、底面直上に 8 層が堆積し、その上を 5 層が覆う。深い南辺部では、まず、にぶい黄褐色土 8 層が底面から斜面に堆積する。周溝北側肩部付近のにぶい黄橙色土 9 層は 8 層の局部的変化として理解する。さらに、南側斜面部に黒褐色～暗褐色土 7・6 層が形成され、黒褐色土 5 層が堆積する。残りの凹部を黒褐色～暗褐色土 4～1 層が埋積している。7・6 層も 5 層の局部的変化である可能性がある。

**構造**：主体部および墳丘は確認されなかった。墳丘部分の規模は東西長 10.6 m 以上、南北長 9.5 m 以上、周溝を含めた規模は東西長 13.4 m 以上、南北長 13.7 m 以上である。南北軸を僅かに西に振ると思われる（N 10° W）。周溝は、内縁ラインは直線的であるが、外縁ラインは南東隅部で丸みを帯びる。幅は東辺部で 3.1～2.4 m、南東隅が最も狭く 1.8 m、南辺部では西に向かって外方に広がり、調査区境に至って 4 m を超える。掘り込みの断面形は逆台形を呈し、深さは東辺北側の調査区境で 40cm、南東隅部が最も浅く 30cm、南辺西側の調査区境で最も深く 92cm を測る。南東隅から西 3 m 辺りから深さの度合いが増す。

周溝南辺部の外方に広がる形状から推測すると、瀧の峯 1・2 号墳（佐久埋蔵文化財センター 1987c）などの

ように、南辺部中央に陸橋部を有する可能性も考えられよう。そうなれば、本周溝墓はSM8001に比べ大型で、墳丘規模は東西長20m以上となる。

**遺物**：土器片が散在的に少量検出された。すべて小細片で時期の特定が難しい。古墳時代中期の土器が若干認められる一方で、古代の土器片を僅かに含む。検出された土器には、広範囲で重複する現代攪乱や古代遺構からの発掘時の混じり込みを含む可能性もある。確実に本周溝墓の築造時に伴うものを抽出するのは至難である。

**時期**：出土遺物から築造時期を限定することは難しい。ここでは、SM8001と並列するように隣接する状況から、SM8001に近接した時期を推測しておきたい。SM8001と同様に、築造は前期であっても、中期まで埋葬が行われていたか、あるいは何らかの祭祀ないし儀礼行為が継続していたことも考えられる。

#### SD8018 [遺構:図版 2-523]

**位置**：8区 I T 08・09・13・14。約16m北西にSM8001が存在する。

**重複関係**：(旧)SB8043、(新)SD8006。

**検出**：IV層上面の検出となる。大部分が調査区外となり、確認したのは周溝の北辺部から西辺部である。SD8006に大きく切られて遺存状況は悪い。隣接地の佐久市教委の調査部分で南東隅から南辺部が確認されている(佐久市教委2014a「西近津遺跡V」『西近津遺跡群Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』報告のOT1号墳)。その成果と合わせ、形状・規模をおおよそ捉えることができた。

**堆積状況**：周溝埋土は七層に分けられるが、ブロックの目立つ土層はなく、自然堆積と考えられる。最下部に黄褐色砂(7層)または暗褐色土(6・5層)が堆積し、その上位の黒褐色土(3・2・1層)が周溝内の大部分を埋積している。

**構造**：主体部および墳丘は確認されていない。墳丘部分の規模は、東西長・南北長とも11.5m前後、周溝を含めて15.5m前後と推測される。南北軸をやや西に振る(N20°W)。周溝は断面逆台形に掘り込まれ、幅2.6～1.7m、深さ70～90cmを測る。陸橋部の状況については明らかでないが、今回調査部分および佐久市教委調査部分に存在しないことは確かであろう。

**遺物**：周溝埋土から土器片をごく僅か検出したのみである。古墳時代と思われるが、小細片のため時期の特定は至難である。

**時期**：今回の出土遺物から築造時期の限定はできない。佐久市教委の調査では滑石製白玉、古墳時代中期と思われる土師器杯片、須恵器甕片が出土している。これらの遺物が築造時に伴うものを含むのか、中期以降に行われた埋葬あるいは祭祀の痕跡なのか、現状では判断がつかない。ここでは、前期から中期の幅の中で築造時期を捉えておきたい。

## 7. 溝跡

古墳時代～古代に該当する溝跡は5条と少ない。ほかには平安時代末から鎌倉時代に当てはまる溝跡群である。当該期の溝跡では、7区と8区、5区まで流下するSD8006・5002が最も大規模である。最下層は砂利層であり、溝の形状も不均一であることから自然形成された流路であると推察される。奈良時代以前の多くの遺物を包含することから、奈良時代以降に大規模な降雨などによって流路が発生し、多くの遺構を破壊しながら溝を形成していったと考えられる。その後大きく三段階で埋没した様相が埋土の観察で捉えられる。奈良時代、平安時代の遺構が本溝跡と重複しないことから、当時流路として機能していたか、埋没して道などに利用されていた可能性もある。

**SD5007-1・-2・-3、SD5008** [遺構:図版 2-524・PL154、土器:図版 3-196]

**位置**: 5区、II H 15・19 グリッドほか。**検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。**重複関係**: (旧) SB5002・5003・5005・5006・5017・5023・6015、SK0034・0107。(不明) SB5001・5015・5016・5018。**埋土**: 黒褐色～暗褐色土を主体する砂層で、流水に伴う堆積である。田切方向に沿う。**構造**: 各順に幅 0.2～0.8 m・0.4～0.8 m・0.38～0.6 m・0.4 m、長さ 62.2 m・64.4 m・30.6 m・2 mほど、北東-南西方向に緩やかに弧を描いて延びる。断面形は皿状である。6区との境で切れるが、6区の検出面が下がったことで見落とした可能性もある。SD5007-3はSD5008と連続すると考えている。**出土遺物**: SD5007からは、土師器甕、鉢、ミニチュア土器などが出土している。**時期**: 古墳時代～古代。

**SD7003** [遺構:図版 2-524]

**位置**: 7区、I X 7・11 グリッドほか。**検出**: IV層上面で褐灰色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。**重複関係**: (旧) SB7014・7072・7074・8001、ST7013、SK7852・7973。(新) SD8001。**埋土**: 褐灰色～灰黄褐色土を主体とする複層である。**構造**: 幅 0.24～0.88 m、長さ 24 mほど。北東-南西方向に直線的に延びる。断面形は、浅い皿状である。**出土遺物**: なし。**時期**: 古墳時代から古代。

**SD8006・5002** [遺構:図版 2-525～530・PL154～157、土器:図版 3-196, 197・PL271～275、石器:図版 3-202, 203, 231, 247・PL276, 289、金属:図版 2-253, 258, 262, 264, 271・PL290, 292, 293, 296, 298]

**位置**: 5区・7区～8区、II T 08・09 グリッドほか。**検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。**重複関係**: (旧) SD8018。(新) SD8003・8002・8001・6002。**埋土**: 黒褐色土を主体とする複層である。**構造**: 幅 0.28～4.8 m、長さ 124 mほど。北東-南西方向に直線的に延び、一部屈曲する。断面形は、段を持つ。**出土遺物**: 遺物量は多く、土器は縄文土器から陶磁器まで出土する。石器、鉄製品、銭貨のほかに、ウマ・ウシなどの動物骨が出土している。把手付中空円面硯、平瓦片も出土した。**時期**: 古墳時代から古代。既に埋没している、古墳時代6世紀代の竪穴住居跡を切っていることから古墳時代末以降に形成されたと推察される。

**SD8012・8015** [遺構:図版 2-524]

**位置**: 8区、I O 16・17 グリッドほか。**検出**: IV層上面でいぶい黄褐色土の落ち込みを確認する。SD8012とSD8015は連続すると考えられる。**重複関係**: (旧)SD8013、SM8001。(新)SD8014。**埋土**: 黒褐色土を主体とする複層である。**構造**: 幅 0.36～0.92 mほど、長さ 38.6 m。南西-北東方向に直線的に延びる。断面形は、播鉢状～鍋底状である。**出土遺物**: 陶磁器等が出土している。**時期**: 古代か。

**SD8013** [遺構:図版 2-524、石器:図版 3-204, 216, 228・PL276・279、金属:図版 3-258]

**位置**: 8区、I O 13・18 グリッドほか。**検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。**重複関係**: (新)SD8012・8014。**埋土**: 上部は暗褐色土、下部は黄褐色～褐色土を主体とする。**構造**: 幅 0.36～4.06 m、長さ 30.6 mほど。北西-南東方向に直線的に延びる。南東端部は狭く、北西側は広がり、端部は湧玉川の崖によって削られている。中央部の断面形は鍋底状である。**出土遺物**: 陶磁器、鉄鏃等が出土している。**時期**: 古墳時代～古代。

## 8. 方形区画状遺構 [遺構:図版 2-506]

6区の軽石・砂礫層の広がる地点（Ⅱ D 22・23、Ⅰ 02・03 グリッド）に「田」字状の黒色土ラインが検出され、根太を組んだような建物痕跡の可能性が考えられたが、黒色土と周辺の地山にみられる黒色土と差がなく、溝状に掘り込んでいるかどうかの確認ができなかった。軽石・砂礫と黒色土の関係をみるため、サブトレンチを掘り、断面観察を行った。黒色土が溝状に落ち込んでいる可能性は低く、軽石・砂礫層も非常に薄く、下層の黒色土上に乗っていることを確認した。この状況から建物跡であるかどうか確定できていない。

調査時に指導招聘した宮本長二郎氏から、周辺で軽石・砂礫が分布している範囲はこの部分と、隣接する掘立柱建物内に限られており、いずれも建物内に軽石・砂礫を敷いた可能性が考えられないか、という指摘を受けた。旧地表面は現検出面より、少なくとも20～30cmは高かったと考えられることから、旧地表面を掘り、丸太材などで土台を組み、その中に軽石・砂礫を敷いた可能性も否定できない。その後、削平などによって、土台を組んだ痕跡のみが薄く残存した状況とも推測されるが、現段階では確定できないため、方形区画状遺構と称することとした。

## 第3節 遺物

### 1. 土器 [図版 3-58～198・PL196～274]

長い時期の資料が多数出土している。そのなかで、文字資料、地鎮などのまじないに伴う資料もあり、これらについては、総括で扱う。また図版掲載資料の詳細は付表6にまとめた。ここでは方形周溝墓出土の土器群、硯（陶硯）などについて触れる。

#### 方形周溝墓 SM8001 出土の土器群 [図版 3-194・PL269・270]

SM8001からは比較的まとまった量の土器が出土した。器種は壺・甕・鉢・高杯・器台が認められる。そのうち13点を図示した。赤彩の小型鉢00322は周溝西辺部を切る近世土坑墓SK8218の埋土中から出土したが、本遺構に伴っていたものと判断する。

#### 壺 (00293・00295・06836・06835・06834)

相対的に大型の壺と小型の壺がある。大型の壺(00293・00295・06836)は球形を呈する胴部をもち、胴部最大径は中位にある。00293は外反する単純口縁で、口縁部ミガキ、胴部外面ハケ後ミガキ、内面ハケ調整を施す。00295も外反する単純口縁をもつ。00293・06836に比べて外反がやや弱い。口縁部ヨコナデ後内面ミガキ、胴部外面・内面ともハケ調整後ミガキを施す。06836は上記二者よりひとまわり大形である。外反する口縁部であるが、端部ないし上部を欠失しており、単純口縁か複合口縁か明らかでない。頸部内面の屈曲部は稜をなす。調整は口縁部から胴上半部にハケ調整を行った後に全体にミガキを施している。小型の壺(06834・06835)は非常に端整かつ丁寧な作りである。調整はミガキを緻密に施す。06834の胴部は下膨れの球形を呈する。小さな底面は上げ底状にくぼむ。口縁部の上部は欠失しているが、わずかに内湾する。ひさご壺であろう。06835は球形の胴部をもち、頸部が沈線状に強くくびれ、そこから口縁部がわずかに内湾しつつ立ち上がる。口径と胴部最大径はほぼ等しい。胎土精良で器壁は薄い。底部を欠失するが、小型丸底壺と考える。

#### 甕 (00294・00296・00297)

いずれも「く」字状に屈曲する口縁部と球形の胴部をもつ小型の甕である。胴部最大径は中位やや上にあり、口径とほぼ等しい。00296は、外面は口縁～胴上半部にハケ目を残し、下半部はケズリ後ミガキが

施される。内面はミガキ。胴部中位から上の外面に煤が付着している。00294は00296と同様な調整手法を取るが、成形を含めてより粗雑な印象を受ける。00297は前二者より小形で、粗雑なつくりである。外面にケズリ痕を広く残す。

#### 鉢 (06832・06833・08218)

08218は底部を含めて全面赤色塗彩された小型の鉢である。体部はわずかに内湾する。外面の磨滅が進行しているものの、内外面とも緻密なミガキが観察される。06832は浅めの体部から外傾する口縁部が直線的に立上がる。口縁部と体部の高さはほぼ等しく、頸部は強くくびれる。調整はミガキ。平底ではあるが、小型丸底鉢の範疇に入るものと考ええる。06833は口縁部が内湾する片口鉢である。外面ハケ後ミガキ、内面ミガキを施す。

#### 高杯 (06838)

浅い椀状の杯部を呈し、口縁部はやや内湾する。脚部は上部のみ残存し、形態の詳細は明らかでないが、円形の透し孔が穿たれているようである。外面および杯部内面が赤色塗彩されている。調整はミガキを緻密に施す。

#### 器台 (06840)

器受部を欠失している。ただし、3×4mmほどのわずかな内面が残る。器受部と脚部との間に貫通孔を有する。脚部は「ハ」字状に大きく開き、中位に直径1.3cmの円形の透し孔が4箇所穿たれる。外面および器受部内面に赤色塗彩が施される。脚部の外面調整は緻密なミガキである。

以上、SM8001出土土器群について概述した。壺は、胴部が球形となり、胴下部の屈曲がみられず、赤色塗彩も施されない。甕もハケ調整の球形胴である。そして、壺、甕ともに櫛描文が施文されない。壺、甕の形態は大きく変化しており、弥生時代後期以来の伝統的な様相は認めがたい。また、古墳時代前期になって土器組成中に出現してくる小型精製土器の小型器台、小型丸底壺・鉢が伴っている。本土器群は、在来の箱清水式的色彩が消失し、外来の影響による新たな器種や器形変化が定着した段階の土器群と考えられる。高杯の様相が不明瞭で位置付けに明確さを欠くものの、富沢一明氏による佐久地域の編年(富沢2005)の古墳前期Ⅱ期に相当し、そのなかでも後半にあたと理解しておきたい。宇賀神誠司氏および青木一男氏による編年(宇賀神1993、青木1993)では、Ⅱ期新段階に対比されよう。

**硯(陶硯)** 須恵器製の円面硯は5点出土している。いずれも破片である。00503(SB0065・66)は脚台部に縦長長方形の透かしを持ち、脚外面中央に縦方向のヘラ描き線が装飾される。00504(SB3047)は硯部のほぼ半分が残存する。脚台部は三角形の透かしが連続し、脚部は面取りが施されていて獣脚硯の意匠を模倣している可能性がある。00505(SB6014)の陸部はよく研がれ全面に墨の付着が認められる。脚台部の透かしは4カ所と考えられる。00506(SB7036)も陸部が良く研がれている。脚台部は長方形透かしと考えられる。00507(SD8006)は脚台部の小破片で、円形と長方形の透かしが観察される。00508(SD8006)は本跡唯一の中空円面硯である。小規模な陸部はよく研がれている。海部は浅く外堤部は陸部より低い。把手部は欠損する。内面は製作時のしぼり痕が観察される。硯にはこれら以外に灰釉陶器椀などを再利用した転用硯がある。00324(SB0073)・00325(1区)・03733(3区)は灰釉陶器椀片の底部内面や外面に赤色顔料が残存している。使用面はよく研がれていて硯あるいはパレットとして利用されたといえる。00324の赤色顔料は欠損面にも付着していることから欠損状態で硯として再利用していることがわかる。なお赤色顔料は科学分析からベンガラ(酸化第二鉄)であることが明らかとなっている。

**外来系の土器** 外来系の土器として03770(SB4001)と03771(SB4004)、04102(SB4061)はいわゆる甲

斐型土器の甕に相当すると考えられる。近年佐久地域南部に位置する南相木村で、小規模な平安時代の集落遺跡である大師遺跡から甲斐型土器の杯、甕が一定量出土している（南相木村教委2013）。大師遺跡ほど主体的ではないが、佐久地域北部に位置する本跡の平安時代集落においても日常雑器として甲斐型甕を使用していることがわかる資料といえる。

## 2. 土製品・瓦 [図版 3-200 ~ 201・PL275・299]

土製玉類には勾玉（10389）と管玉（10390）以外に、棗玉に似た形状がある（10395・10396）。また穿孔のない丸玉（10393）と棒状品（10391・10392）もある。土製紡錘車（10023・10034・10035）のうち、古墳時代前期の方形周溝墓 SM8001 から出土した 10023 は、偏平で赤彩塗彩されている形態で弥生時代後期からの系譜上にあるといえる。ほか 2 点（10034・10035）は厚手で断面形が逆台形となる形状である。円筒型土製品（10428）は土師器製の筒状で焼成はあまり良くない。これは山梨県を中心に長野県内にも出土例のある「円筒形土器」の基部にあたと考えられる。

古墳時代後期の SB6021 から土師質の盤状土製品（10432）と鉄斧形土製品（10431）が出土している。同じ住居跡からは粗製の小型土器 6 点（00166 ~ 168・04694 ~ 696）も共伴している。土器はいずれも杯あるいは鉢形である。土製品と土器は胎土、整形方法、焼成ともに不良であることで共通している。SB6021 からは滑石製白玉や鉄鐸といった祭祀遺物も多数出土している。この土製品と土器も祭祀などの目的のために一時的に製作されたものと推察される。

輪羽口（図版 3-201）はいずれも鍛冶業に使用されたと考えられる。耐火度試験の結果は第 9 章に掲載した。瓦 3 点（07044・07045・06583）はすべて平瓦である。そのうち 06583 は SD8006 内の破片数点が接合し、胴部の両端までわかる資料である。3 点ともに凹面調整は縦ナデされ、布目痕と模骨痕がみられる。凸面は陽刻された斜格子目文の残るタタキが施されている。模骨痕が確認されていることから桶巻造の平瓦といえる。同様の瓦類は、本調査地点の北東に近在する周防畑遺跡群内の字渋右エ門地籍から多数採集されている資料にみることができる（小林真寿 2014）。

## 3. 石器・石製品 [図版 3-221 ~ 247・PL279 ~ 289]

石製腰帯飾具、玉類、砥石、敲石などが出土している。観察表は DVD に収録した。以下に特筆すべき資料について記す。

**滑石製模造品** 滑石製模造品は出土数の大半を白玉が占めるが、有孔円板、勾玉形、剣形もわずかにみられる。石製紡錘車は 26 点あり、6 ~ 8 世紀の竪穴住居跡から出土するケースが多い。素材は滑石であり、文様が線刻されている例もある。20029 は大形の軽石製である。

**石製腰帯飾具** 石製腰帯飾具は 2 点出土している。20001 は巡方で、20002 は丸鞆である。いずれも裏面に潜り穴を持つ。20001 は平安時代の巡方である。裏面の潜り穴 1 カ所内には径 0.2mm 程度の極細い線状金属が残存していた。断面円形で両端は切断された状態である。この金属成分を明らかにするため蛍光 X 線分析を実施した。その結果、金属の主成分は Ag（銀）であり、Fe（鉄）、Au（金）の存在も確認された。このことから線状金属は銀線であり、巡方は極細い銀線を用いて革（腰帯）へ装着していたことが明らかとなった。分析結果の詳細は第 9 章に記載している。

**石錘** 竪穴住居跡の床面に偏平で細長い河原礫がまとまって出土する事例がみられた。礫自体に加工された痕跡はほとんどないが、出土状況から編物石（こも編み石）と称される石錘としての用途を推定している。埋土からも同様の河原礫が出土していて、整理作業の段階で住居床面から一括出土している石錘と規模形状が同様な個体は石錘として登録している場合がある。

表7 石錘の平均値と標準偏差、変動係数

遺構名	個数	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重量 g
SB4026	19	96.9	48.8	29.7	205.3
		10.8	7.9	6.1	72.8
		11.1	16.2	20.5	35.5
SB5012	33	120.0	76.2	38.9	505.9
		15.9	13.9	7.3	157.7
		13.3	18.2	18.8	31.2
SB5023	25	98.2	57.2	39.4	283.5
		11.8	7.8	6.9	55.3
		12.0	13.6	17.5	19.5
SB6001	13	134.8	73.2	46.4	692.3
		14.2	11.0	6.8	156.8
		10.5	15.0	14.7	22.6
SB6018	13	125.9	63.2	44.8	465.7
		10.9	7.0	5.7	119.9
		8.7	11.1	12.7	25.7
SB6021	27	103.1	57.2	36.4	293.4
		10.1	7.5	6.3	67.3
		9.8	13.1	17.3	22.9
SB6022b	9	94.1	50.4	32.4	214.6
		9.0	6.5	4.8	38.1
		9.6	12.9	14.8	17.8
SB7039	9	92.6	51.3	39.5	213.2
		17.3	9.0	6.1	110.2
		18.7	17.5	15.4	51.7

\*完形のみ

上段：平均値

中段：標準偏差

下段：変動係数 (%)

8軒の住居跡床面から一括出土した石錘の長さ、幅、厚さ、重量について平均値と標準偏差、変動係数(%)を求めた(第7表)。その結果、重量にはばらつきがあるが、長さは90～100mmにまとまる場合が多く、SB5012、SB6001、SB6018は120～135mmと大きな河原礫を選択していることがわかる。また変動係数をみると、長さではSB7019以外ほぼ10前後にまとまっていて、選択される石のばらつきは少なく、ほぼ同程度であると理解される。幅と厚さ、重量の変動係数は長さに比べて大きく不均一である。こうした数値は、礫の選択基準として長さを揃えることが最優先されていたことを示しているのではないかと推察される。上田市国分寺周辺遺跡群出土資料においても、本跡と同様に長さにばらつきの少ない石を選択して集めていることが明らかとなっている(埋文センター1998c)。また遺跡出土の編物石の平均重量と民具例とを比較した研究によると、200～500g台の例は米俵用、700～900g台の例は大型のスノコ用と想定されている(渡辺2011)。本跡の石錘における平均重量をこの研究成果に当てはめるとSB6001の692.3g以外、いずれも200～500g台にあることがわかる。

**カマド材** 古墳時代から平安時代までカマドを持つ多くの竪穴住居跡について調査を行った。カマドには芯材や支脚石として礫が使用される場合が多い。礫は河川などから採集し、集落内に持ち込まれた自然礫が主体を成すが、整形加工されたカマド材も確認された。石材は加工しやすい軽石や凝灰岩である。支脚石は面取りされ、長さ20～30cm程度の棒状や不整な角錐状に加工されている。加工痕跡から加工作業は金属製と想定される。ほかに天井石や袖石に使用するために長方形に加工された資料もある。被熱変色した部分が観察される場合や構築材の粘土材が付着している場合がある。

#### 4. 金属製品 [図版3-252～272・PL290～298]

当該期の金属製品としては青銅製品と金銅製品、鉄製品がある。青銅製品には腰帯飾具、帯金具、銅印、

鎖、銅製管状品、銅製円板、銭貨がある。金銅製品には耳環、馬具の帯先金具がある。

鉄製品は非常に種類が多い。鉄鏃は多種多様の形態がある。刀子には刃部の砥ぎ減りが顕著な資料が多い。ほかに剃刀、責金具などの金具類、鉄鐸、鉄鐸舌、弓金具、経軸端金具と考えられるもの、馬具、鑷子、鋏、針、紡錘車、焼印、鉄鉗、槍鉋、鋸、楔、工具類、鉄斧、苧引具、鎌、鍬・鋤先、鏝、釘、鉄製容器がある。また鉄製品製作の素材として考えらる長方形板状鉄製品がある。鍛冶炉を伴う堅穴住居跡内などからは鍛錬鍛冶の関連遺物として、鉄器片、鉄塊系遺物、鉄滓が出土している。なお弥生時代後期から中世、近世までの遺構群が重複している遺跡のため、古墳時代～古代に当てはまると判断した資料にも弥生時代後期や中世、近世に該当する資料が混在している場合も考えられる。各資料の観察表はDVDに収録した。ここでは特筆すべき資料について記載する。

**金銅製品** 金銅製品としては馬具の帯先金具（07M201）がある。検出作業中に出土し、その後SK4097上面に位置することがわかった。本資料は金銅の薄板造りで、表面には猪目透かしと細やかな毛彫り表現が施されている。形態は二鉾留めの方形金具である。鉾孔には使用による歪みがあり、裏面や側面は故意に革帯から引き剥がされたような欠損状況を示す。金銅製毛彫馬具が集落内から出土する場合、その多くは単体で馬装としての意義は失われているという指摘がある（白井2002）。また毛彫馬具を保有する集落の多くは飛鳥～奈良時代の交通路の要衝に営まれた拠点的な集落であり、郡衙関連遺跡、あるいはそれらに隣接する大規模な集落であるとも考察されている。本資料についても、そうした研究成果に当てはまる出土状況であると考えられる。

**青銅製品** 青銅製品としては銅印（07M376）がある。平安時代（9世紀末～10世紀初）の小ぶりの堅穴住居跡SB4001の中央付近、床上3cmほどの埋土中から印面を上にした状態で発見されている。銅印全体が緑青に覆われ、鈕部分や印面に植物遺体が付着していることが観察された。

銅印の形態としては鈕の形状は蒼鈕有孔で、印面は方形、印顆は陽刻で彫りの深さ3.5～4.0mm、輪郭は有郭である。法量としては現存高31.2mm、印側高4.2～5.1mm、印面は縦32.6mm、横32.4mmであり、重量は52.02gで、保存処理前には52.00gを計る。表面には鑄造時の鬆が0.2mm程の小孔として全体に観察される。印面の文字周囲の凹部には赤色顔料が残存する。

銅印の鑑定と印字の判読については平川南氏の指導を仰いだ。平川氏によると、銅印は鑄造品で、印文は陽刻であり、その刻みは大変深い。このような刻みの深さが古代印の証拠となり、印字幅が細い点も8～9世紀の銅印の特徴を示している。印面については四文字が陽刻された、いわゆる四文字私印であるとされた。印文の判読については、右一行上の一文字目は「金」偏で、旁はこれまで類例が見当たらない文字であり、二文字目は「子」、左一行は「私印」である。なお右一文字目について「金」偏に「辛」として、「からかね」と判読できないかと推察されている。銅印出土の意義として、発掘調査にて時期の分かる遺構から出土している点が銅印研究において非常に貴重であること。住居跡の埋土内に廃棄されたような状態で出土している点も、私印の使用から処分までの在り方を考察する事例となると評価された。

また銅印については科学分析と保存処理を行った。分析については銅印本体と赤色顔料の成分分析（分析先：住友金属テクノロジー株式会社）と表面付着の植物遺体の分析（分析先：株式会社文化財ユニオン、パリノ・サーヴェイ株式会社）を実施した。その結果、成分分析については蛍光X線分析を実施し、銅印本体はCu（銅）を主とし、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si（珪素）、As（ヒ素）の存在が確認された。印面に残存していた赤色顔料はFeをベースとしたベンガラである可能性が高いと推察された。

表面付着の植物遺体については顕微鏡で観察した結果、付着物の繊維方向が不規則であること、植物組織が残っていることから、植物加工品ではなく植物体であることが判明した。植物遺体はイネ科の可能性

があり、保存状態は悪く、錆によって銅印に癒着している状況である。科学分析の詳細は第9章にある。

保存処理（実施機関：株式会社文化財ユニオン）については、処理前に写真撮影を実施し、クリーニング作業、脱塩・防錆処理作業、アクリル樹脂による強化処理作業を行った。なお銅印の使用時の状況を保存することを目的として、赤色顔料は極力残し、付着植物遺体は除去し、別保管としている。

**出土銭貨** 今回の調査では18点の銭貨が出土している。内訳は日本銭として皇朝十二銭2点、江戸銭4点（うち1点は鉄銭）、輸入銭として北宋銭9点、明銭1点、ほかに不明1点である。

皇朝十二銭は「神功開寶」（08M022・初鑄765年）と「隆平永寶」（07M305・初鑄796年）である。「神功開寶」は台地上を流れた自然流路SD8006・5002の埋土下層の砂層より出土している。流水の影響もあり、やや劣化が進んでいるが字形などは鮮明である。この流路は弥生時代後期や古墳時代後期の竪穴住居跡、古墳時代前期の古墳周溝などを破壊して、田切り地形と同方向に北東から南西へ流下している。流路の形成時期は古墳時代末から奈良時代と想定される。銭貨の出土した下層からは弥生時代後期から平安時代までの土器などが混在しているため、最終的な廃棄の様相は判然としない。

「隆平永寶」は台地最北端の8区で検出されたSK8210より出土している。SK8210は南北2.36×東西1.98m、深さ1.18mときわめて大形の土坑で、底面は小さく挿鉢形を成す。銭は埋土中層より出土し、解体されたウシ・ウマ骨、須恵器横瓶片や杯片なども一緒に出土している。

**鉄製品** 鉄製品としては焼印(07M218)がある。平安時代(9世紀前半)の竪穴住居跡SB4025から出土した。長さ211.4mm、重量43.0g、印面の幅18.4mm、高さ14.0mmを計る鍛造品である。印面と反対側の端部50mm程が、やや屈曲している。この部分の断面形は長方形で、ここに木柄を装着していたと考えられる。屈曲は使用による変形の可能性もある。印面部は芯材となる鉄棒の先端を幅13mmほどに切り延ばして整形している。また柄部のうち、印面から80mmまでは断面形が繭玉状を成し、芯材に補強材として短い鉄棒2本を接着して鍛打していることが推察される。

印字の判読については前掲の平川氏に指導を仰いだ。その結果、本跡出土の墨書土器にある特殊文字の字形である「几」・「八」のやや変形した文字でないかと想定された。印自体は小型品で造りも華奢であることから、ウマやウシに使用する畜産印ではなく、集落内で使用される木椀などの木製品に印を付ける焼印と考えられる。

## 5. 骨 [PL302～306]

人骨のほか、シカやイノシシ、ウマ、ウシ、サケ、コイなどの骨が出土している。詳細は第9章に記述している。

## 6. 炭化物

竪穴住居跡などから、炭化材や炭化種実が出土している。それらについては種同定と放射性炭素年代測定を行った。詳細は第9章に記載した。

## 第8章 中世・近世の遺構と遺物

### 第1節 概観

古代集落は遅くとも11世紀には途絶え、当地から集落は消失する。その後12世紀頃から規格性をもった複数の区画溝が北東から南西方向とその直交方向に軸線を持って掘削されている。それらの断面形は逆台形であり、深度は深い場合もある。部分的に重複する部分もあることから、一定期間使用された後埋没し、再度位置をずらして掘削されている場合もあると推察される。溝跡の埋土からは流水のあったことを示す根拠は得られていない。また溝の埋没する過程で廃棄されたウマやウシの骨が多数出土している。廃棄された地点は調査区全体で複数確認されている。

溝跡に区画された区域内にはっきりとした生活施設はない。溝の時期と合致する可能性のある中世集落は調査区南端（1区）にあり、竪穴状遺構4軒と井戸跡3基の他に、掘立柱建物跡を構成する可能性が高い小ピット群が多数検出されている。

今のところ、この溝の用途や性格は明確に捉えられていない。なお整理作業で溝跡の分布図と明治25年に作成された旧公図を重ね合わせてみると、溝跡と公図内に記載された道や畑地の筆境とが合致する地点が確認されている。こうした点から溝は畑などの耕地を区画する目的で掘削された可能性が出てきている（図版2-544）。

また近世の土坑墓は調査区北端（8区）に1基検出されている。以下に遺構と遺物について記す。

### 第2節 遺構

#### 1. 竪穴状遺構

**SB0006** [遺構:図版2-534・PL157、土器:図版3-199・PL300、石器:図版3-219, 234・PL280、金属製品:図版3-253, 271・PL290, 298]

**位置**: 1区、ⅢH 25・ⅡM 05グリッド。 **検出**: IV層上面で黒褐色土を確認した。 **重複関係**: (古) SB0007。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面不整形。床は地山敲きである。 **カマド**: なし。 **出土遺物**: 埋土2層に炭化物、敲石などが多く出土した。温石、銭貨（天聖通寶・開元通寶）、鉄鏃等が出ている。 **時期**: 中世。

**SB0099** [遺構:図版2-534・PL157、土器:PL300]

**位置**: 1区、ⅢH 07グリッド。 **検出**: IV層上面に黒褐色土が落ち込む。 **重複関係**: (旧) SB0075・0096・0102。(不明)SK0348。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする。 **構造**: 平面方形。床は下位SB上にあり、貼り床を施すが、締まりやや弱い。壁際に浅いピットが並び壁柱穴の可能性はある。 **カマド**: なし。炉の痕跡もみられない。 **出土遺物**: ほとんど伴わない。 **時期**: 中世か。

**SB0131** [遺構:図版2-534・PL158、金属製品:図版3-252, 253, 271・PL290, 298]

**位置**: 2区、ⅢI 18グリッド。 **検出**: 南半分を攪乱されている。IV層上面で黒色土が落ち込む。 **重複関係**: (旧) SK148。(不明)SK0147。 **埋土**: 黒色土を主体とする。 **構造**: 平面方形か。床は地山

敲き締めである。床面中央に4基、北東隅に1基のピットがある。 **出土遺物**：銭貨（太平通寶）、鉄滓が散布していた。 **時期**：中世。

**SB0154** [遺構：図版 2-534・PL158]

**位置**：1区、ⅢH 06 グリッド。 **検出**：Ⅳ層上面に黒色土が落ち込む。 **重複関係**：(旧) SB0155・0056・0098・0104。 **埋土**：周囲に小ブロックを含む黒色土が巡る。 **構造**：平面方形。床は掘方埋土を整地し、締まりがある。柱穴が四隅に配置されている。 **出土遺物**：ほとんどなし。 **時期**：中世の可能性がある。

## 2. 土坑墓

**SK8218** [遺構：図版 2-536・PL158、金属製品：図版 3-253・PL290]

**構造**：平面形はほぼ方形を呈し、底がほぼ平らである。古墳時代前期の方形周溝墓 SM8001 周溝掘り下げ中に検出した。底部付近で永楽通寶などの銭貨6点が出土した。埋土中位から出土した小形赤彩鉢は SM8001 に本来伴うと考える。骨の出土はないが、焼骨を木箱に納めて埋葬した墓跡と考える。 **時期**：近世。

## 3. 井戸跡

**SK0005** [遺構：図版 2-535・PL158、石器：図版 3-219・PL280]

**構造**：平面形はほぼ円形を呈し、2段構造となる。 **出土遺物**：上面から石製帯飾具（丸軛）、埋土より中世陶磁器、最下層より木製杭2点や漆器片などの木製品が出土している。丸軛は周囲の遺構からの混在と考えられる。木製品は樹種同定分析を実施し、その結果は第9章に記載した。 **時期**：中世。

**SK0031** [遺構：図版 2-535・PL159、土器：図版 3-187・PL300]

**構造**：平面形は楕円形を呈し、壁面は2段で、上段が広く、下段は筒状に掘削されている。 **出土遺物**：中世陶磁器と緑釉段皿片。 **時期**：中世。

**SK4235** [遺構：図版 2-536・PL159]

**構造**：平面形はほぼ円形を呈し、他と比べて大型である。平安時代末から鎌倉時代の溝跡を切る。何回か掘り直しがなされ、中断から筒状に掘り下げている様子が埋土観察から伺える。 **時期**：中世以降。

## 4. 土坑

**SK0181** [遺構：図版 2-535]

**構造**：平面形は長楕円形を呈し、南北に細長い。 **出土遺物**：播鉢片、骨、敲石。 **時期**：中世。

## 5. 溝跡

**SD0001** [遺構：図版 2-537・PL159]

**位置**：1区、ⅢH 21・22 グリッドほか。 **検出**：Ⅳ層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**：(旧) SB0011・14・16・19・20・21・22・29・31。SK0034・0107。(不明) SK0014・15。 **埋土**：暗褐色土を主体とする複層である。 **構造**：幅 20～35cm、長さ 17m ほど。東西方向に直線的に延びる。断面形は、浅い半円形からトライ状で一部V字状に窪む部分もあり。 **出土遺物**：土師器杯、須恵器杯蓋、釘状の鉄製品が出土している。 **時期**：中世以降。

**SD0002** [遺構:図版 2-537・PL159、土器:図版 3-195・PL270、石器:図版 3-216・PL279]

**位置**: 1区、ⅢH 16・17 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。調査区境の壁面ではI層(耕作土)下面まで、立ち上がりがみられた。 **重複関係**: (旧) SB0015・22・30・33・34・35・38・40・53・55・152、SF0002、ST0002、SK0050・215・217・220・221・222・223。 **埋土**: 暗褐色土を主体とする複層である。下部ほど砂の含有が多い。 **構造**: 幅 20～40cm、長さ 18.6 mほど。東西方向に直線的に延びる。断面形は、浅い半円形からトライ状である。 **出土遺物**: 黒色土器杯、土師器杯、須恵器高杯・杯・壺、不明鉄片、不明骨等が出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD0003** [遺構:図版 2-537]

**位置**: 1区、ⅢH 04・05 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB0024・63・67、SQ0003。 **埋土**: 砂礫を多く含み、流水があった可能性が高い。 **構造**: 幅 40cmほど、長さ 7 mほど、南北方向に直線的に延びる。断面形は浅い窪みで、底面の凸凹が多い。 **出土遺物**: 不明鉄片が出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD0007** [遺構:図版 2-537・PL159]

**位置**: 1区、ⅡD 01・06 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡等とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB0137・138・4001・4014・4063・4065・4066・4007・4044・4012・4067、ST4008、SK0173・4038・4039・4248。 **埋土**: 黒色土を主体とする。 **構造**: 幅 20～35cm、長さ 17 mほど、北西、南東方向に直線的に延び、北端はSD4002に合流する。南端は消えていくが、本来は調査区外へ延びる。断面形は浅い鍋底状で、一部で段を持つ。 **出土遺物**: 土師器杯・甕・壺、須恵器杯・甕、灰釉陶器椀、鉄鏃、不明歯片など。 **時期**: 中世以降。SD4002と同時期と考えられる。

**SD0301・3001** [遺構:図版 2-537・PL160、土器:図版 3-195・PL270, 271、石器:図版 3-228、金属製品:図版 3-262, 270・PL292, 297]

**位置**: 3区、ⅡW 06・11 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。一部でSD0303・3001と重なり、並行する。 **重複関係**: (旧) SB3058・3065、SD0303・3001、SK3006・3009。(不明) SD3004・0004。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅 0.96～1.50 m、長さ 41 mほど、北西—南東方向に直線的に延び、南東端はSD3004、SD0004と合流する。北西端は調査区外へ延びる。断面形は段を持つ形である。 **出土遺物**: 土師器壺・杯、須恵器甕・鉢・杯蓋・盤、陶磁器、刀子、苧引具など。 **時期**: 中世以降とする。

**SD0302・3002 (SD4002)** [遺構:図版 2-538・PL160]

**位置**: 3区、ⅢC 03・04 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB0307・310・3065・3069・4045・4069・4059・4011・4017、SK3246・3281。(新) SD0301・3001・3004・4003。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅 0.70～1.68 m、長さ 30cmほど 3区では南西—北東方向にほぼ直線的に延び、4区は緩く弧を描く。SD0303・3003と合流する。途中でSD4002と名称を変えて調査した。断面形は鍋底状である。 **出土遺物**: 骨が多量に出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD0303・3003** [遺構:図版 2-538・PL160、土器:図版 3-195・PL271]

**位置**: 3区、II W 06・11 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。SD0301・3001との切り合いは断面観察によった。 **重複関係**: (旧) SB3058・3065、SK3190・3191・3192・3193・3311、SD302・3002・4002。(新) SD0301・3001。 **埋土**: 上部は黒褐色土を主体とし、下部はIV層土主体である。 **構造**: 幅0.68～1.30 m、長さ38 mほど、北西-南東方向に直線的に伸び、南東端はSD0302・3002・4002と合流する。断面形は浅い皿状である。 **出土遺物**: 須恵器蓋・杯、陶磁器、鉄鎌などが出土した。 **時期**: 中世以降。

**SD0004・3004** [遺構:図版 2-538、土器:図版 3-195]

**位置**: 3区、III C 04・08 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB110・117・127・3080・3081・3090・3093・3098、SK0156・0358・3054。(不明)SK3049・3052。 **埋土**: 黒色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅0.8～1.4 m、長さ53 mほど、北東-南西方向に緩くS字状に曲がる。SD0301、SD0007と合流する。断面形は鍋底状、逆台形状である。 **出土遺物**: 土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄斧などが出土。 **時期**: 中世以降。

**SD3005・4004** [遺構:図版 2-541・PL160, 162、土器:図版 3-195]

**位置**: 3区、II M 22・23 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB3020・3024・3025・3041・3049・3051・6015、SD4006、SK6391・6453。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅0.72～1.5 m、長さ65 mほど、北西-南東方向に直線的に伸びる。SD4002と合流する。断面形は鍋底状である。 **出土遺物**: 土師器、須恵器、陶磁器、鉄滓、ウマ骨、台石などが出土した。 **時期**: 中世以降。

**SD4001** [遺構:図版 2-537]

**位置**: 4区、III D 08・09 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB4025。 **埋土**: 黒褐色土を主体とする単層である。 **構造**: 幅0.46～0.68 m、長さ17 mほど、北東-南西方向に直線的に伸びる。断面形は、逆台形からタライ状である。 **出土遺物**: 掲載遺物なし。 **時期**: 中世以降。

**SD4002** [遺構:図版 2-538～540・PL160, 161、土器:図版 3-195、石器:図版 3-202, 203, 211, 218・PL276, 278, 280、金属製品:図版 3-253, 257, 260, 263・PL290, 292, 294]

**位置**: 4区、II S 23・24 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB4017・4042・4045・4059・4061・4065、SM4004、SK4235。(新) SD4003は掘り直しである。 **埋土**: 暗褐色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅1.1～2.5 m、長さ66 mほど、南西-北東方向に緩く弧を描いて伸びる。断面形は鍋底状である。 **出土遺物**: 土器は縄文土器から陶磁器まで幅広く出土する。石器、鉄製品、銭貨のほかに、ウマ・ウシ・シカ・イノシシなどの動物骨が多数出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD4005・5001** [遺構:図版 2-541, 542・PL162、土器:図版 3-195・PL271、石器:図版 3-204, 216・PL276]

**位置**: 4区、II H 18・22 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**: (旧) SB5014・5015・5016・5025・5027・5028・5030・

5052・6006・6009・6061・6012、SK5178・5180。 **埋土**：黒色土を主体とする複層である。 **構造**：幅 0.72 ～ 2.12 m、長さ 96 m ほど、北西－南東方向に直線的に延び、SD4003 と合流する。断面形は鍋底状である。 **出土遺物**：土器は弥生土器から陶磁器まで出土した。石器のほかに、動物骨が多数出土している。 **時期**：中世以降。

**SD6001** [遺構：PL162、土器：図版 3-196]

**位置**：6 区、II N 03・04 グリッドほか。 **検出**：IV 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**：(旧) SB6020・6021・6050・6051、ST6017・6020、SK5142・5143・6145・6146・6256・6418。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**：幅 0.46 ～ 1.3 m、長さ 42 m ほど、南西－北東方向に直線的に延びる。断面形は皿状で、底が凸凹する。 **出土遺物**：土師器、須恵器が出土している。 **時期**：中世以降。

**SD6002** [遺構：PL162、土器：図版 3-196、石器：図版 3-228, 246・PL288]

**位置**：6 区、II D 01・06 グリッドほか。 **検出**：IV 層上面で暗褐色～灰褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**：(旧) SB6031・6032・6036・6037・6038・6040・6041・6057・6059・7006・7009・7012・7014・7051、ST6021・6035、SK7211、SD5002。 **埋土**：暗褐色～灰褐色土を主体とする複層である。 **構造**：幅 1.00 ～ 2.32 m、長さ 64 m ほど、南西－北東方向に直線的に延びる。断面形は一部段を持つところがある。 **出土遺物**：土器は縄文土器から灰釉陶器壺まで幅広く出土する。台石、カマド材、刀子のほかに、動物骨が多数出土している。 **時期**：中世以降。

**SD7002** [遺構：図版 2-543・PL162、土器：図版 3-196、石器：図版 3-247・PL289]

**位置**：7 区、II D 05・09 グリッドほか。 **検出**：IV 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**：(旧) SB7007・7008・7013・7020・7054・7064、ST7029・7036・7038・7039、SD6002。 **埋土**：黒褐色土を主体とする複層である。 **構造**：幅 0.72 ～ 1.16 m、長さ 33 m ほど、北東－南西方向に直線的に延び、SD6002 と合流する。断面形は鍋底状、逆台形状である。 **出土遺物**：土師器、陶磁器、中位で動物骨が多数出土している。 **時期**：中世以降。

**SD7004** [遺構：図版 2-543]

**位置**：7 区、II C 05 グリッド。 **検出**：IV 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**：(旧) SB7014。(不明) SD6002。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：幅 0.20 ～ 0.58 m、長さ 4.4 m ほど、南西－北東方向に直線的に延びる。断面形は浅い皿状である。 **出土遺物**：掲載遺物なし。 **時期**：中世以降。

**SD8001** [遺構：図版 2-543]

**位置**：8 区、I X 07・12 グリッドほか。 **検出**：IV 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認する。重複する竪穴住居跡とは埋土の違いは明確であった。 **重複関係**：(旧) SB8001、ST7001・7012、SD7003・7008。 **埋土**：黒褐色土を主体とする。 **構造**：幅 0.2 ～ 0.78 m、長さ 19 m ほど、北西－南東方向に直線的に延びる。断面形は鍋底状である。なお、南東部分で並行する 2 条の SD をまとめて番号を付けている。 **出土遺物**：掲載遺物なし。 **時期**：中世以降。

**SD8002** [遺構:図版 2-543・PL162、土器:図版 3-196]

**位置**: 8区、I S 17・18 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**: (旧) SB7035・8005・8036・8037、SD8006・7001。(不明)SK7846・7847・7914。 **埋土**: 黒色土を主体とする。下部は、砂質で流水の可能性もある。 **構造**: 幅 0.34 ~ 1.02 m、長さ 104 mほど、北西-南東方向に直線的に延び、途中で直角に曲がる。断面形は鍋底状である。 **出土遺物**: 縄文土器、須恵器、陶磁器など。 **時期**: 中世以降。

**SD8003** [遺構:図版 2-543・PL162、土器:図版 3-196、金属製品:図版 3-270・PL297]

**位置**: 8区、I O 21・22 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で黒色土の落ち込みを確認する。**重複関係**: (旧) SB7039・7057・7068・7057・8018・8019・8024、SD8006、ST7020・7022。(不明) SK7558・7880・8148・8166。 **埋土**: 黒色土を主体とする。全体的に砂礫層からなる。場所により黒褐色土の粘性土がみられる。水流が一端停止していた期間が想定される。 **構造**: 幅 0.52 ~ 1.50 m、長さ 89.4 mほど、北西-南東方向に2度屈曲して延びる。断面形は鍋底状である。SD8002 と T字形に合流する。SD8016 とは不連続であるが、連続していた可能性がある。 **出土遺物**: 縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器のほか鎌・針・鉄滓等の鉄製品や上部からウマの骨が出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD8014** [遺構:図版 2-543、石器:図版 3-203, 216]

**位置**: 8区、II O 18・23 グリッドほか。 **検出**: IV層上面で暗褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SD8012。 **埋土**: 上部は暗褐色土、下部は褐色土を主体とする複層である。 **構造**: 幅 0.28 ~ 0.76 m、長さ 10.8 mほど、北西-南東方向に直線的に延びる。断面形は段を持つ。 **出土遺物**: 陶磁器などが出土している。 **時期**: 中世以降。

**SD8016** [遺構:図版 2-543]

**位置**: 8区、I O 11・16 グリッド。 **検出**: IV層上面で褐色土の落ち込みを確認する。 **重複関係**: (旧) SM8001。 **埋土**: 地山ブロックを含む褐色土主体。 **構造**: 幅 0.30 ~ 0.60 m、長さ 7.8 mほど、南北方向に直線的に延びる。断面形は鍋底状である。SD8003 と連続する可能性がある。 **出土遺物**: 掲載遺物なし。 **時期**: 中世以降。

### 第3節 遺物

#### 1. 土器・陶磁器 [図版 3-199・PL300]

かわらけ、青白磁片。古瀬戸陶器片などが出土している。代表的な資料についてDVDに観察表としてまとめた。

#### 2. 石器・石製品 [図版 3-219・PL280 ほか]

特筆すべき資料として温石がある。竪穴状遺構 SB0006 中央部の1層と2層(床上層)との境界から出土している。板状の結晶片岩を長方形に成形している。上端部側中央に円孔を穿つ。全面ともよく磨かれている。表面が部分的に黒く変色するのは被熱によるものかと考えられる。法量は長さ 106.8mm、幅 73.9mm、厚さ 13.2mm、孔径は表面で 9.8mm、裏面で 8.8mmであり、重量は 186.5 g を計る。本資料の出土した竪穴状遺構では2層から床面にかけて炭化材、礫、土器、陶磁器、鉄製品、銭貨などが散乱した状態で

出土している。銭貨は開元通寶と天聖元寶である。炭化材2点の放射性炭素年代測定によると13世紀後半から14世紀前半の年代が得られている。

県内の温石出土遺跡には、筑北村向六工遺跡、上田市国分寺周辺遺跡群（報告書では石鍋？と記載）、松本市川西開田遺跡などがある。

### 3. 金属製品 [図版 3-253・PL290 ほか]

銭貨、釘等の出土がある。DVDに観察表を収録した。

### 4. 骨 [PL307～309, 311]

平安時代末から鎌倉時代に帰属すると推察される溝跡が埋没する過程で廃棄されたウマやウシの骨が多数出土している。出土地点は調査区全体で複数確認されている。骨が出土する地点には1個体の上下の顎や四肢の一部分の骨がまとまって出土している地点と、年齢が異なる複数個体の骨が混在したり、ウシの骨が混ざっていたりする地点がある。ウマやウシを解体後に溝内に廃棄したと考えられ、比較的原位置を保っている場合と、バラバラになったものが流されるなどして数カ所に溜まっている場合もあったと考えられる。骨についての分析と鑑定結果は第9章に記載している。

### 5. 木製品 [図版 3-274・PL300]

井戸跡と考えられるSK0005から生木の状態で木製品が出土している。SK0005は鎌倉時代頃に造られた素掘りの井戸で、底面付近には湧水が認められる。木製品は底部の湧水中から採取されていて、詳細な位置関係は明らかではない。木製品の出土した埋土は土壌分析をかけ、種実類などが確認されている。

木製品には炭化した漆器片、加工痕が認められる比較的大形の板状を呈するもの2点、薄板状の炭化材、厚さ1mm前後の薄板状を呈する小形の木片が複数ある。樹種同定分析によって、いずれも針葉樹のヒノキ科に同定されている。科学分析結果については第9章を参照されたい。なお現状では木製品は水漬けして保管している。

漆器片はやや湾曲が認められるため、漆器碗とも考えられるが、埋没と炭化の過程で変形したことも推測され、碗以外の器種である可能性もある。

大形で板状を呈する木製品2点はどちらも細長い板状で先端を尖らせている。形状から杭として利用された木製品と考える。1は長さ28.5cm、幅4.2cm、厚さ1.1cmを測り、木取は追根目である。全体に加工痕が観察され、先端部は剣先状にはケズリ痕があり、細く薄く加工されている。胴部表面にはタテケズリ痕が残り、先端部付近には幅5mmほどの浅い溝状のケズリ痕が斜め方向にある。裏面は平滑でケズリ痕は不明瞭である。側面下半部には切り折り痕や基部側に階段状のケズリ痕がある。基部は丸く仕上げている。

2は長さ24.8cm、幅5.4cm、厚さ2.6cmを測る。木取は板目である。基部から胴部上半の表面が炭化している。加工痕が炭化部を切っていることから、炭化材を再加工していることがわかる。調整方法は1とほぼ共通する。先端部には1より細かいケズリ痕があるが、1より厚い板材のため、偏平に整えるための細加工痕と考えられる。一緒に出土したヒノキ科の炭化材や木片はそうした加工に伴う木屑とも考えられる。

### 6. 炭化物

竪穴住居跡などから炭化物が一定量出土している。その中から試料を採取して樹種、種の同定と放射性炭素年代測定を行った。分析結果は第9章に記載した。

# 第9章 科学分析・鑑定

## 第1節 概要

西近津遺跡群の科学分析・鑑定については、対象資料ごとに成果をまとめた。詳細は次節以下に記す。

本遺跡の科学分析・鑑定は複数の機関と個人に委託・依頼している。委託機関・個人については第8表のとおりである。

なお、各分析に関連する未掲載データについては、DVDに収録している。

第8表 科学分析・鑑定一覧

分析実施年度	分析対象資料	掲載節	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	委託先・依頼先(敬称略)
			顕微鏡観察	花粉分析	種実同定	樹種同定	珪藻分析	植物珪酸体分析	微細物分析	リン・腐植分析	灰象分析	窒素・炭素同位体比測定	赤外分光分析	X線回折測定	(化学成分分析)	(X線分析)	(X線分析)	(X線分析)	(X線分析)	(X線分析)	(X線分析)	
23	須恵器	第2節-1																	○			榊古環境研究所
21	灰軸陶器転用硯の赤色顔料	第2節-2											○						○			住友金属テクノロジー㈱
21	灰軸陶器の付着黒色物	第2節-2										○	○									㈱パレオ・ラボ
25	黒曜石製石器ほか	第3節-1																		○		㈱パレオ・ラボ
21	銅印	第4節-1																	○			住友金属テクノロジー㈱
21	銅印付着赤色顔料	第4節-1											○						○			住友金属テクノロジー㈱
21	赤色顔料(参考顔料)	第4節-1											○						○			住友金属テクノロジー㈱
24	銅印付着物	第4節-1	○																			㈱文化財ユニオン
25	鍛冶関連遺物	第4節-2	○											○	○	○						JFEテクノロジー㈱
21	石製腰帯備具の線状金属	第4節-3											○						○			住友金属テクノロジー㈱
23	刀子の装着金具	第4節-3																	○			㈱文化財ユニオン
23	金属製品の木質付着物	第4節-3	○			○																㈱文化財ユニオン
21	住居跡出土炭化物・炭化材	第5節-1, 2	○			○													○			バリノ・サーヴェイ㈱
21	土坑出土炭化物・炭化材	第5節-1, 2	○			○													○			バリノ・サーヴェイ㈱
25	住居跡出土炭化材	第5節-1, 2	○			○													○			㈱加速器分析研究所
18	井戸跡出土漆器椀	第5節-2	○			○																バリノ・サーヴェイ㈱
18	井戸跡出土木材	第5節-2	○			○																バリノ・サーヴェイ㈱
23	採取土壌の微細物(炭化材)	第5節-2	○			○																バリノ・サーヴェイ㈱
18	井戸跡出土種実	第5節-3	○	○																		バリノ・サーヴェイ㈱
21	住居跡採取土壌の微細物	第5節-3	○	○					○													バリノ・サーヴェイ㈱
21	土坑採取土壌の微細物	第5節-3	○	○					○													バリノ・サーヴェイ㈱
21	樹種同定用試料中の種実	第5節-3	○	○																		バリノ・サーヴェイ㈱
21	灰層土壌中の微細物	第5節-3	○						○													バリノ・サーヴェイ㈱
23	採取土壌の微細物(種実・骨片)	第5節-3	○						○													バリノ・サーヴェイ㈱
20	炬・カマド採取土壌の微細物	第5節-3	○		○				○													バリノ・サーヴェイ㈱
20	土坑採取土壌の微細物	第5節-3	○		○				○													バリノ・サーヴェイ㈱
21	住居跡採取土壌	第6節-1	○							○												バリノ・サーヴェイ㈱
21	土坑採取土壌	第6節-1	○							○												バリノ・サーヴェイ㈱
21	灰層土壌	第6節-1	○							○												バリノ・サーヴェイ㈱
23	住居跡採取土壌	第6節-1	○						○													バリノ・サーヴェイ㈱
18	井戸跡採取土壌	第6節-1	○	○																		バリノ・サーヴェイ㈱
20	土坑採取土壌	第6節-1	○	○					○	○												バリノ・サーヴェイ㈱
23	灰層土壌	第6節-1	○						○													バリノ・サーヴェイ㈱
26	人骨	第7節-1																				○ 茂原信生
26	動物骨	第7節-2																				○ 櫻井秀雄
26	ウシ・ウマ骨	第7節-3																				○ 本郷一美
26	ウマ骨	第7節-4										○							○			覚張隆史
25	ウマ骨・歯	第7節-5																	○			㈱加速器分析研究所

## 第2節 土器に関する分析

土器に関する分析では、須恵器の胎土分析と、土器付着物の分析を行った。以下にその詳細を記す。

### 1. 須恵器の胎土分析

#### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では、古墳時代～平安時代まで多くの須恵器が出土している。その中には岐阜県から搬入されたと推測される「美濃国」の刻印がある高台杯や「郡」、「大井」などのヘラ書きされた須恵器もある。こうしたことから、集落で消費された須恵器が在地生産のものと、搬入されたものがあると推測された。産地を科学的に分析することで、西近津遺跡群と佐久郡を含む長野県内の他地域との流通を考える上での科学的資料が得られるとして、須恵器の胎土分析を実施した。

#### (2) 対象資料

対象資料は遺跡出土の甕・杯・高台杯・蓋・壺・円面硯などの須恵器 100 点である（第9表）。その中には、「美濃国」の刻印がある高台杯（00380）、「郡」や「大井」などの刻書がある土器（00429、00459、00458、00465、00490）、窯記号がある土器 18 点、円面硯 4 点などが含まれる。その他、集落内で消費された須恵器の産地が、時期や遺構によって偏りが出る可能性も考えられたため、美濃国の刻印がある土器や、「郡」「大井」などのヘラ書きがある土器と類似した形状の土器、同一遺構または周辺遺構から出土した土器なども分析対象に含めた。

#### (3) 分析の方法

分析は株式会社古環境研究所に委託した。

資料調整として、土器の一部範囲（主に断面）を、ダイヤモンドカッターを用いて研磨・クリーニングし、洗浄・乾燥を行う。

測定はエネルギー分散型の蛍光X線分析装置（日本電子製、JSX-3100R II）を用いて、元素の同定及びファンダメンタルパラメーター法（FP法）による定量分析を行った。測定条件は、測定時間 240 秒、照射径 7.0mm、電圧 30kV、資料室内真空である。定量分析の対象元素は Na、Mg、Al、Si、P、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Zr である。

定量分析値（%濃度）による  $\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$  分布図、 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$  分布図、 $\text{K}_2\text{O-CaO}$  分布図を作成し、主な指標とする。加えて、 $\text{Rb}_2\text{O-SrO}$  分布図、 $\text{CaO/K}_2\text{O-SrO/Rb}_2\text{O}$  分布図を作成し、参考資料とする。また西近津遺跡群の各分布図でドットの分布状況や各分布図との相互関係から A、B、C の各領域（第10表、第11～18図）にグループ分けし、検討を行った。

#### (4) 分析結果

**「美濃国」の刻印がある須恵器** 長野県産と岐阜・愛知県産の須恵器は  $\text{Rb}_2\text{O-SrO}$  分布図により識別できる。長野県領域は岐阜・愛知県領域と比較して Sr の値が高く、Rb の値が低い傾向がある。 $\text{Rb}_2\text{O-SrO}$  分布図では、「美濃国」の刻印がある 00380 を含む A 領域は B 領域と比較して SrO の含量が明らかに低く、 $\text{Rb}_2\text{O}$  の含量が高い傾向が認められる（第17図）。このことから A 領域については、00380 が美濃須恵窯跡群と関連があると推定できる。また、B 領域は SrO の含量が高く、 $\text{Rb}_2\text{O}$  の含量が相対的に低いことから、長野

県内の窯跡と関連している可能性が考えられる。ちなみに、C領域に属した土器は鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)の含量が高く、珪素(SiO<sub>2</sub>)の含量が低いことが特徴だが、各分布図との対比で共通する窯跡群は認められず、現時点での産地の想定は困難である。

**「郡」・「大井」のヘラ書きがある須恵器** ヘラ書きのある須恵器は00429(大?)、00459(井)、00458(郡)、00465(?), 00490(大井)はB領域に含まれる。前述のように、Rb<sub>2</sub>O-SrO分布図により長野県内産の可能性が高い。また、K<sub>2</sub>O-CaO分布図における分布状況(第15図)などから、県内の八重原窯跡群(西峯・姥ヶ沢窯跡)との関連が考えられる。

**周防畑遺跡群との比較** 西近津遺跡群に隣接する周防畑遺跡群でも同時期に蛍光X線による同様の検討が行われた。その結果、各分布図とも西近津遺跡群とおおむね同様の分布状況であった。このことから、西近津遺跡群と周防畑遺跡群では、須恵器の供給源や流通の状況はおおむね同様であったと推定される。

**西近津遺跡群の分析結果と各窯跡群との対比** 各窯跡群の領域図(第12・14・16図)は重複する部分が多く、長野県内の領域は県外の領域にほとんど含まれる。また、参考資料とした千曲市屋代遺跡群の産地推定方法(井上1999)に不明な部分が多いことなどから、現時点では両者の直接的な対比は困難と考えられる。

第9表 西近津遺跡群における蛍光X線分析用試料一覧

分析番号	管理番号	遺構名	器種	備考
1	01715	SB0001	杯	
2	01722	SB0001	壺	
3	01724	SB0001	壺	
4	01605	SB0010	杯A	
5	01606	SB0010	杯B	
6	01621	SB0010	甕	
7	01825	SB0013	杯A	
8	01827	SB0013	杯A	
9	01828	SB0013	壺	
10	01744	SB0016	杯B	
11	01752	SB0016	盤	
12	01704	SB0018	杯A	窯記号
13	01811	SB0020	杯蓋	
14	01965	SB0034	甕	
15	01891	SB0097	杯B	
16	02089	SB0043	甕	
17	02091	SB0043	甕	
18	01897	SB0051	杯A	
19	01978	SB0054	杯A	
20	00396	SB0079	杯A	窯記号
21	01906	SB0096	杯蓋	
22	01887	SB0097	杯A	
23	01888	SB0097	杯A	
24	01889	SB0097	杯	
25	02087	SB0043	杯B	窯記号
26	01894	SB0097	甌	
27	01586	SB0119	壺	
28	01582	SB0120	杯A	
29	01583	SB0120	杯蓋	
30	01584	SB0120	鉢	
31	01660	SB0121	杯A	
32	01661	SB0121	杯A	
33	01662	SB0121	杯B	
34	01664	SB0121	杯	
35	02096	SB0131	杯	未注記

分析番号	管理番号	遺構名	器種	備考
36	02084	SB0132	壺	
37	02085	SB0132	壺	
38	02086	SB0132	壺	
39	00400	SB0133	杯B	窯記号
40	02060	SB0136	甕	
41	00401	SB0137	杯B	窯記号
42	02016	SB0137	杯A	42bで破壊分析
43	02018	SB0137	杯A	
44	02019	SB0137	杯A	
45	02020	SB0137	杯A	
46	02024	SB0137	杯	
47	02025	SB0137	杯	
48	02026	SB0137	杯B	
49	02028	SB0137	杯B	
50	02030	SB0137	鉢	
51	02031	SB0137	高杯	
52	02042	SB0137	甕	
53	02043	SB0137	甕	
54	02044	SB0137	甕	
55	02045	SB0137	甕	
56	02047	SB0137	甕	
57	02048	SB0137	甕	
58	02049	SB0137	壺	
59	02051	SB0137	甕	
60	02052	SB0137	杯蓋	
61	02053	SB0137	杯B	
62	02073	SB0139	甕	
63	02078	SB0148	甕	
64	00448	SB0150	杯A	64bで破壊分析
65	00403	SB0303	杯A	窯記号
66	00404	SB0305	杯B	窯記号
67	00504	SB3047	円面硯	
68	00428	SB3056	杯A	窯記号
69	00429	SB3060	杯A	ヘラ書「大」?
70	00136	SB5013	杯蓋	

分析番号	管理番号	遺構名	器種	備考
71	00459	SB6022	甕	ヘラ書「井」
72	00458	ST6014 Pit5 (SK6115)	杯A	ヘラ書「郡」
73	00460	SB6048	杯A	窯記号
74	00482	SB7001	杯	窯記号
75	00198	SB7003	杯蓋	
76	00483	SB7012	杯	窯記号
77	00203	SB7014	杯蓋	
78	00206	SB7014	杯	
79	00207	SB7014	杯	
80	00209	SB7014	杯	
81	00467	SB7026	杯A	
82	00485	SB7031	杯A	窯記号
83	00506	SB7036	円面硯	
84	01992	ST0007	杯	SB48と接合
85	00407	SK0031	杯A	窯記号

分析番号	管理番号	遺構名	器種	備考
86	01942	SK0071	杯蓋	
87	01981	SK0082	壺	未注記
88	01982	SK0082	杯A	
89	02095	SK0140	提瓶か	
90	00409	SK0214	杯A	窯記号
91	00431	SK3006	杯A	窯記号
92	00465	SK6246	杯A	ヘラ書「？」
93	00490	SK7023	杯A	ヘラ書「大井」
94	01985	SD0001	杯蓋	
95	00406	SD0002	杯A	窯記号
96	00507	SD8006	円面硯	
97	00508	SD8006	中空円面硯	
98	00380	1区検出面	杯B	刻印「美濃国」
99	00411	1区検出面	横瓶	窯記号
100	00414	1区検出面	杯A	窯記号

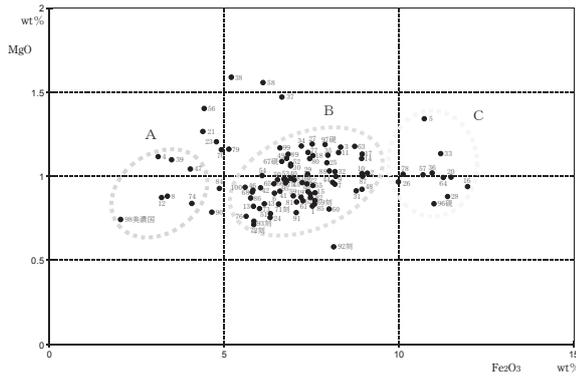
第10表 各分布図の領域区分とそこに含まれる試料

領域	A		B		C	
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> -MgO 分布図 (第11図)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 2.0~4.0%	4, 8, 12, 39, 47, 74, 98 (美濃国)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 5.0~9.0%	下部: 69, 71, 72, (92), 93 上部: 67 (円面硯), 83, 97	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 10~12%	5, 16, 20, 26, 28, 33, 36, 57, 64, 78, 96 (円面硯)
	MgO: 0.7~1.2%		MgO: 0.7~1.3%		MgO: 0.8~1.4%	
SiO <sub>2</sub> -Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 分布図 (第13図)	SiO <sub>2</sub> : 72~75%	4, 8, 12, 39, 47, 74, 98 (美濃国)	SiO <sub>2</sub> : 64~70%	上部: 69, 71, 72, 92, 93 下部: 67 (円面硯), 83, 97	SiO <sub>2</sub> : 57~63%	5, 16, 20, 26, 28, 33, 36, 57, 64, 78, 87, 96 (円面硯)
	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 17~20%		Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 17~23%		Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> : 19~24%	
K <sub>2</sub> O-CaO 分布図 (第15図)	K <sub>2</sub> O: 1.5~2.8%	4, 8, 12, 21, 39, (47), 58, 70, 74, 89, 97 (中空円面硯), 98 (美濃国)	K <sub>2</sub> O: 1.1~1.7%	69, 71, 72, 92, 93 83 (円面硯)	K <sub>2</sub> O: 0.8~1.2%	16, 20, 26, 28, (36), (57), 64, (78), 96 (円面硯)
	CaO: 0.1~0.4%		CaO: 0.9~1.7%		CaO: 0.7~1.3%	
Rb <sub>2</sub> O-SrO 分布図 (第17図)	Rb <sub>2</sub> O: 0.01~0.02%	4, 8, 12, 21, 39, 47, 74, 89, 97 (中空円面硯), 98 (美濃国)	Rb <sub>2</sub> O: 0.01%前後	69, 71, 72, 92, 93		
	SrO: 0.01%以下		SrO: 0.01~0.04%			
CaO/K <sub>2</sub> O-SrO/Rb <sub>2</sub> O 分布図 (第18図)	CaO/K <sub>2</sub> O: 0.3以下	4, 8, 12, 21, 39, 47, 74, 89, 97 (中空円面硯), 98 (美濃国)				
	SrO/Rb <sub>2</sub> O: 0.8以下					

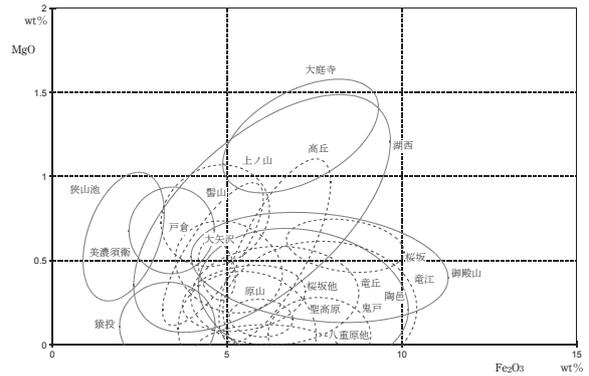
(古環境研究所のデータを編集)

## 引用・参考文献

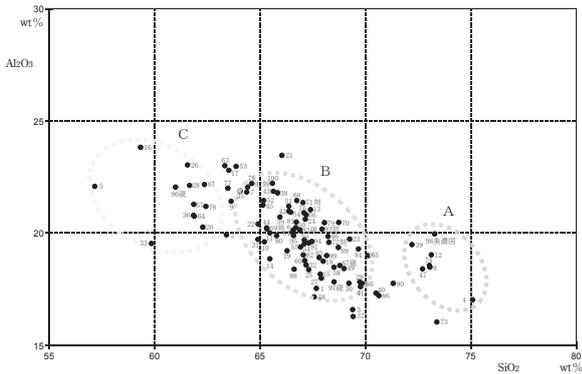
- 井上 巖 1998 「胎土分析から見た須恵器生産体制に関する考察—陶邑・湖西・御殿山窯跡群に共通する現象—」『考古学と自然科学』第37号
- 井上 巖 1999 「胎土分析」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴条里遺跡・屋代遺跡群(含む大境遺跡、窪河原遺跡)—古代1編—本文』県埋文センター



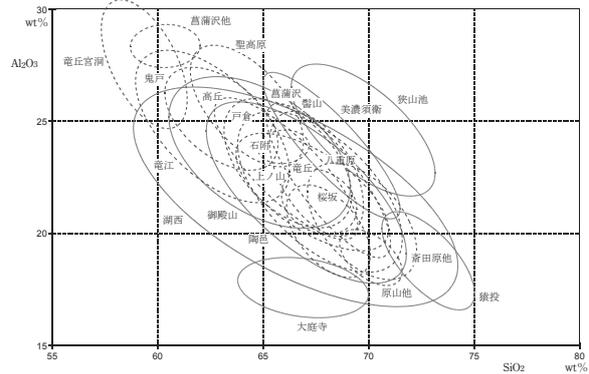
第11図 西近津遺跡群出土須恵器の  $Fe_2O_3$ -MgO 分布図



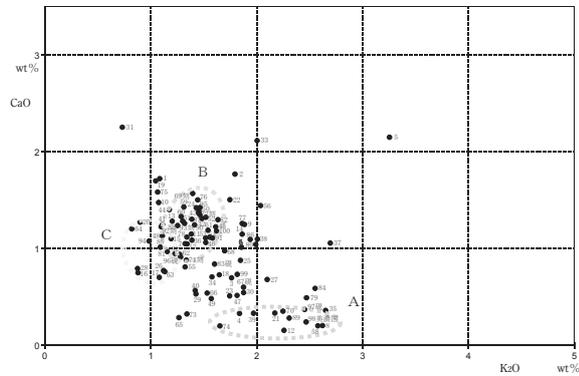
第12図 主な窯跡の須恵器胎土の  $Fe_2O_3$ -MgO 分布図  
(井上(1998,1989)により作成 破線は長野県内、実線は県外)



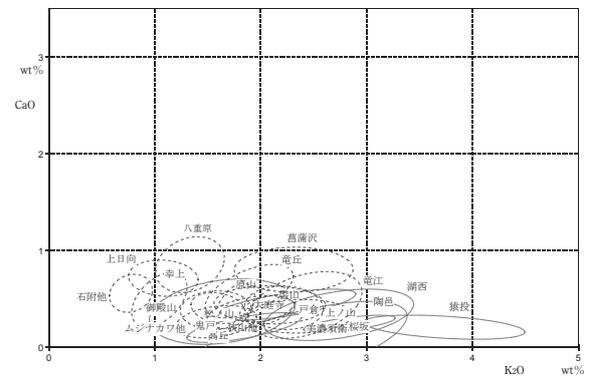
第13図 西近津遺跡群出土須恵器の  $SiO_2$ - $Al_2O_3$  分布図



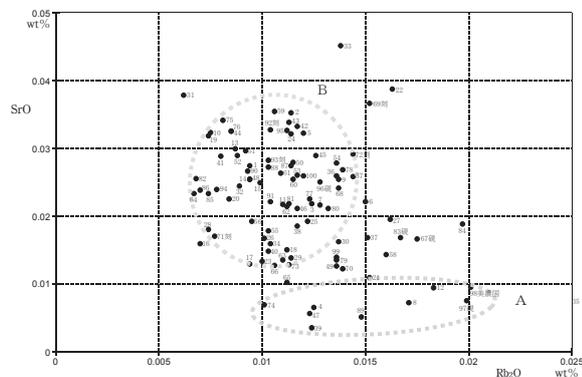
第14図 主な窯跡の須恵器胎土の  $SiO_2$ - $Al_2O_3$  分布図  
(井上(1998,1989)により作成 破線は長野県内、実線は県外)



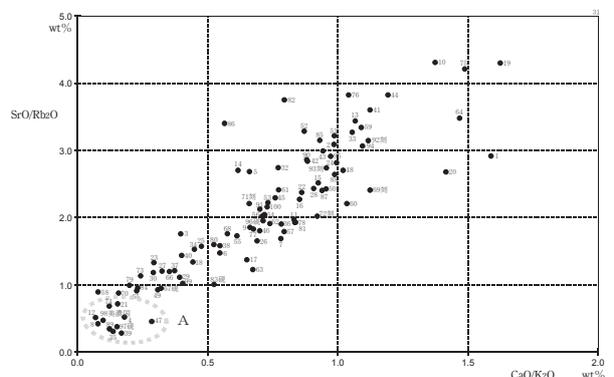
第15図 西近津遺跡群出土須恵器の  $K_2O$ -CaO 分布図



第16図 主な窯跡の須恵器胎土の  $K_2O$ -CaO 分布図  
(井上(1998,1989)により作成 破線は長野県内、実線は県外)



第17図 西近津遺跡群出土須恵器の  $Rb_2O$ -SrO 分布図



第18図 西近津遺跡群出土須恵器の  $CaO/K_2O$ - $SrO/Rb_2O$  分布図

## 2. 土器付着物の分析

### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では土坑 SK0071 から内面全体に黒色付着物のある灰釉陶器の椀が出土した。黒色付着物は漆と推測されたが、物質名を特定することで椀の利用方法を明らかにするため、赤外分光分析、窒素・炭素同位体分析を行った。分析は(株)パレオ・ラボに委託した。

また、遺跡内では赤色顔料が付着した灰釉陶器椀の転用硯も出土している。付着した赤色顔料の材質確認のため、蛍光 X 線分析を行った。分析は(株)住友金属テクノロジーに委託した。なお、別項に記した銅印付着赤色顔料、石製飾具の線状金属、遺構内出土赤色顔料も同時に分析を委託して行った。

### (2) 対象資料

SK0071 出土灰釉陶器椀 (00323) の黒色付着物、灰釉陶器椀転用硯 (00324・00325) の付着赤色顔料を分析対象とした。

### (3) 分析の方法

00323 は赤外分光分析、窒素・炭素同位体分析、00324・00325 は蛍光 X 線分析を行った。

**赤外分光分析** 椀の黒色付着物を 0.2mm 角程度に薄く削り取り、臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟んで、約 7 トンの油圧プレス器で加圧整形したものを測定試料とした。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計 (日本分光(株)製 FT/IR-410、IRT-30-16) を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

**窒素・炭素同位体分析** 炭素含有量および窒素含有量の測定は、156mg 程度を採取し、酸・アルカリ・酸洗浄 (HCl:1.2N, NaOH:1N) を施して不純物を除去した後、EA (ガス化前処理装置) である Flash EA1112 (Thermo Fisher Scientific 社製) を用いて測定した。スタンダード (標準試料) は、アセトニトリル (キシダ化学製) を使用した。

炭素安定同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ ) および窒素安定同位体比 ( $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ ) の測定には、MASS (質量分析計; DELTA V (Thermo Fisher Scientific 社製)) を用いた。スタンダードは、炭素安定同位体比が IAEA Sucrose (ANU)、窒素安定同位体比が IAEA N1 を使用した。

**蛍光 X 線分析** 測定は、XGT-5000WR 型 XRF (堀場製作所製) を用いて、ファンダメンタル・パラメーター法 (FP 法) で行った。測定条件は電圧 50kV、電流 0.480mA、測定時間 300 秒である。

また、00325 は赤色部と母材 (土器) との元素の違いを明確にするため、赤色部以外の白色部をブランク部として測定した。

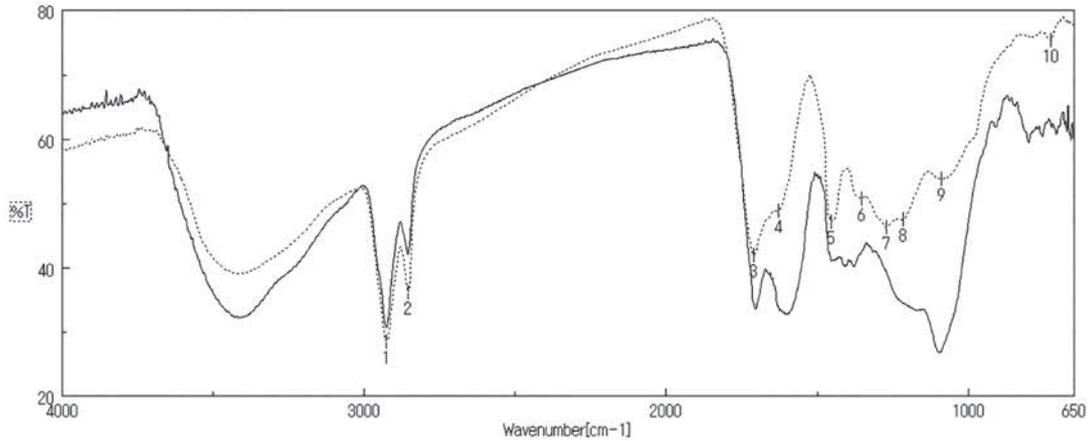
### (4) 分析結果

**00323 の黒色付着物** 赤外分光分析では、14 カ所において明瞭な吸収がみられた。このうち、吸収ピークの No. 2 や No. 3 は未炭化に伴ってみられる有機物由来の吸収ピークであり、No. 9 は劣化に伴うゴム質の吸収ピークである。ただし、漆の成分であるウルシオール (ウルシ) の吸収ピーク No. 6 ~ 8 は、生漆の赤外線吸収位置と一致せず、漆の成分は確認できなかった。(第 19 図)。

一方、炭素および窒素安定同位体比測定では、 $\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$  の値から  $\text{C}_3$  植物に由来する炭質物と推定される (第 11 表、第 20 図)。ただし、 $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$  の値が  $\text{C}_3$  植物の範囲より高い値であることから、加熱による増加と推定される。 $\text{C}_3$  植物のエゴマのように脂質の多い物質では、加熱により脂質が失われるため、 $\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$  の増加が認められた (吉田・宮崎 2007)。種類は特定できないが菜種のように脂質 (油) の多い植物由来の成分である可能性があり、燈明油などが炭質化したことも考えられる。

なお、C<sub>3</sub>植物は、コメやムギなどの主要穀類に加えソバやホウレンソウあるいはジャガイモなどの大多数の食用植物が含まれ、C<sub>4</sub>植物はトウモロコシやモロコシに加え、キビやアワあるいはヒエなどの雑穀類である（赤澤・南川1989）。

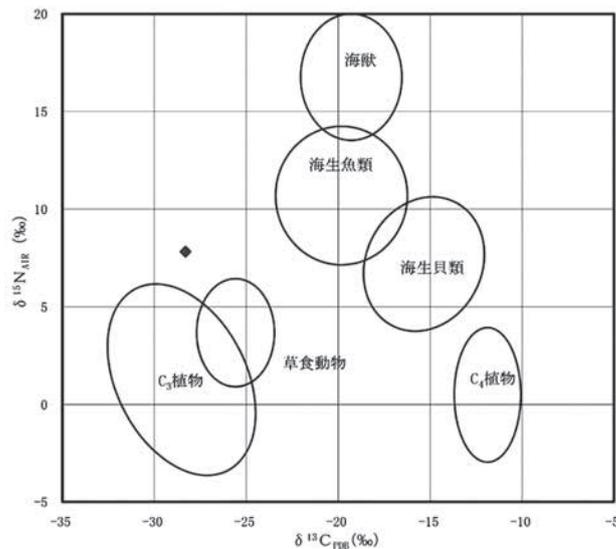
**00324、00325の付着赤色顔料** 朱墨硯の朱部では、ブランク部（白色部）とは異なり、Fe（鉄）の存在量が多かった。なお、この結果は別項に記した銅印付着赤色顔料、遺構出土赤色顔料と傾向が同じであり、他と同様にFeを主体としたベンガラの可能性が高いと推察される。



第19図 黒色付着物（実線）および生漆（点線）の赤外線分光スペクトル図  
（縦軸は透過率、横軸は波数を示す）

第11表 黒色付着物の炭素・窒素安定同位体比、炭素・窒素含有量、C/N比（00323）

試料	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
灰釉陶器内面付着黒色物	-28.3	7.82	63.7	0.632	117.54

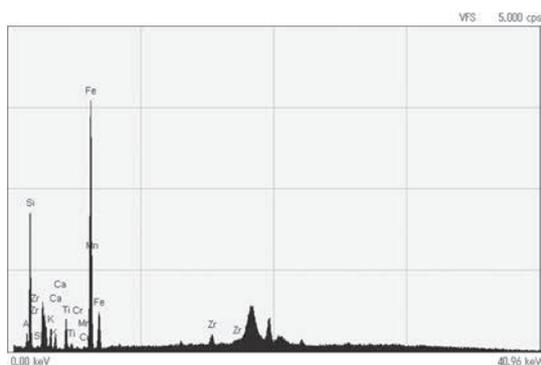


第20図 炭素・窒素同位体図（Yoneda et al. 2002に基づいて作成）

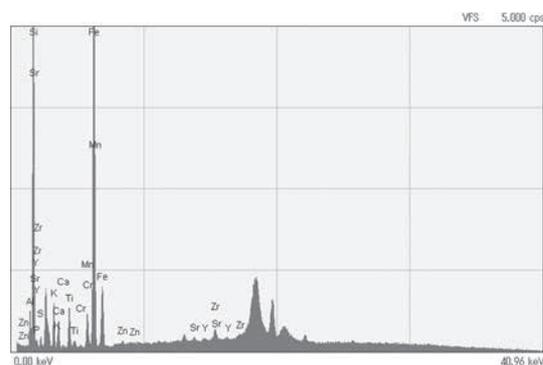
第12表 転用硯の蛍光X線分析結果

試料名	検出元素													
転用硯 赤色部 (00324)	Al	Si		S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe				Zr
転用硯 赤色部 (00325)	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Zn	Sr	Y	Zr
転用硯 白色 (00325)	Al	Si			K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Zn			Zr

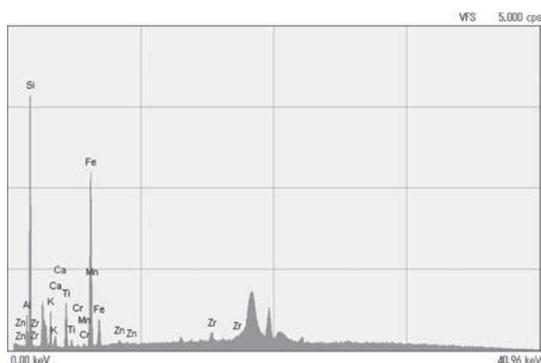
(住友金属テクノロジーのデータを編集)



第21図 転用硯 (00324) 赤色部の蛍光X線分析結果



第22図 転用硯 (00325) 赤色部の蛍光X線分析結果



第23図 転用硯 (00325) 白色部の蛍光X線分析結果

引用・参考文献

赤澤 威・南川政男 1989「炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元」『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』  
 米田 穰 2008「丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析」『丸根遺跡・丸根城跡調査報告書』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第  
 32集  
 吉田邦夫・宮崎ゆみ子 2007「煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究」『日本における稲作  
 以前の主食植物の研究』平成16年度～18年度科学研究費補助金、基盤研究(B1)研究成果報告書

### 第3節 石器に関する分析

石器については、原石を含む黒曜石製の石器の原産地推定分析を行った。以下にその詳細を記す。

#### 1. 黒曜石の産地推定分析

##### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では遺跡内から 218 点の原石を含む黒曜石製の石器が出土した。種類は石鏃、石匙、刃器など多様である。これらの原産地推定は、本遺跡及び佐久地方の縄文時代、弥生時代の黒曜石流通の実態を明らかにする基礎資料として重要であると考え、黒曜石原産地推定分析を実施した。

##### (2) 対象資料

分析対象資料は西近津遺跡群から出土した黒曜石製の石器 31 点である。出土状況はいずれも弥生時代以降の遺構で攪乱されているが、おおむね縄文時代中期後半から後期前半に属すると考えられる。分析対象とした石器の器種は打製石鏃、石匙、刃器、楔形石器、石核、原石である（第 13 表）。なお、原石のうち 2 点（22532、22572）は風化が進み、夾雑物が多く、他の黒曜石と外観上大きな差異が認められた。

##### (3) 分析の方法

分析は(株)パレオ・ラボに委託した。

試料は、測定前にスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。分析装置はエスアイアイ・ナノテクノロジー(株)製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。

測定条件は、測定時間 100 秒、照射径 8mm、電圧 50kV、電流 1000  $\mu$  A、試料室内真空である。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析の X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月 2004 など)。本方法は、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps:count per second) について、指標値を計算する。指標値は Rb 分率 (=Rb 強度  $\times$  100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)、Sr 分率 (=Sr 強度  $\times$  100 / (Rb 強度 + Sr 強度 + Y 強度 + Zr 強度)、Mn 強度  $\times$  100 / Fe 強度、 $\log$  (Fe 強度 / K 強度) である。

これらの指標値を用いて 2 つの判別図を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。

第 14 表に各原石の産地とこれらのエリア、判別群名を示す。第 15 表に測定値より算出された指標値を、第 24・25 図に黒曜石原石の判別図に石器 31 点をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。また、第 16 表に器種別の産地推定結果を示す。

##### (4) 分析結果

分析の結果、4 点が和田エリア鷹山群 WDTY、4 点が和田エリア小深沢群 WDKB、1 点が和田エリア高松沢群 WOTM、18 点が諏訪エリア星ヶ台群 SWHD の範囲にプロットされた（第 24・25 図）。

分析 No.4 と No.6 は、和田エリア土屋橋西群 WDTN に近いものの、両図とも WDTN からやや外れた位置にプロットされ特定できなかった。この 2 点は近い位置にプロットされるため、同一判別群である可能

性がある。ここでは、仮に不明1とした。分析 No.24 と No.27 は、合致する判別群が無く、不明であった。なお、分析 No.24 と No.27 の原石は、夾雑物が多くて光沢が鈍く、典型的な黒曜石とはいえないが、本遺跡の地山にあたる浅間第一軽石流堆積層に含まれている岩石ではないかと推測される。産地の推定できた黒曜石は、いずれも地元信州産であった。

第13表 黒曜石分析対象一覧

分析No	管理番号	遺物名	遺構名等	内容	法量 (mm, g)			
					長さ	幅	厚さ	重量
1	20446	打製石鏃 (平基有茎式)	SB0301	カマド脇	26.0	21.0	4.0	1.3
2	20447	打製石鏃 (凹基有茎式)	SB3030		24.5	17.0	3.5	(1.2)
3	20453	打製石鏃 (凹基有茎式)	SB5028	床面	21.0	13.5	3.0	(0.7)
4	20454	打製石鏃 (凹基有茎式)	SB5047		23.0	14.0	3.0	0.5
5	20456	打製石鏃 (凹基有茎式)	SB7036	北東区	(21.1)	12.6	2.7	(0.5)
6	20458	打製石鏃 (凸基有茎式)	SB8006	床直上No.3	22.3	14.5	4.0	0.7
7	20460	打製石鏃 (凹基無茎式)	SD3006		15.0	13.0	3.5	(0.4)
8	20463	打製石鏃 (凸基有茎式)	II M19	No.1	31.5	15.5	5.0	1.6
9	20481	打製石鏃 (平基無茎式)	SB8025	北西区床下	16.5	13.5	2.5	(0.5)
10	20484	打製石鏃 (凹基有茎式)	SD8006	I X13 A層	30.0	15.0	4.0	(1.1)
11	20492	石匙	SB7011	北東	53.5	26.0	8.0	7.6
12	20493	石匙	7区検出面	(カマド石近く)	26.9	23.2	5.6	2.6
13	20496	石匙	SB0301	掘り方	25.4	16.9	6.2	2.6
14	20500	刃器	SB0150	中央南埋土	36.0	29.1	18.9	11.7
15	20501	刃器	SB6026	トレンチ (西)	38.0	23.5	10.0	4.8
16	20505	刃器	SB8014	トレンチ	(33.3)	(13.9)	(8.6)	(2.2)
17	20509	刃器	SD8015		22.6	34.1	5.9	3.6
18	22476	石核	SB0075	Pit10	65.5	29.8	15.0	19.2
19	22484	石核	SB7041	床下	38.5	28.3	10.9	11.8
20	22514	楔形石器	SB0015	検出面	14.4	15.8	4.1	1.1
21	22521	楔形石器	SB3069		33.4	17.0	9.8	6.2
22	22528	原石	SD4002	石積み	34.1	30.9	17.3	18.1
23	22529	楔形石器	SD4002	II W25	17.5	16.0	6.0	1.4
24	22532	原石 (地山含有物か)	SD5001		24.1	17.0	7.2	3.8
25	22538	楔形石器	SB5016	カマド付近 黒曜石	23.8	28.6	8.3	5.1
26	22557	原石	SB7039	南区	34.7	30.3	26.3	32.9
27	22572	原石 (地山含有物か)		南西壁トレンチ	16.6	21.4	11.9	4.4
28	22581	石核	SB8007	黒曜石	27.7	20.8	20.1	8.8
29	22611	原石	SD8006	I X18 B層	40.8	19.7	17.2	19.6
30	22634	原石		8区検出面	43.3	26.6	20.4	28.4
31	22662	原石	SM8001	試掘トレンチ	45.0	20.8	21.2	26.3

第14表 黒曜石産地 (東日本) の判別群名称 (望月 2004 参照)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂・八号沢露頭・八号沢・黒曜の沢・幌加林道 (36)
		黒曜の沢群	STKY	
	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川 (5)
青森	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸 (10)
	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜 (7)、八森山公園 (8)
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉 (10)
		脇本群	OGWM	脇本海岸 (4)
岩手	北上川	北上折居2群	KKO2	水沢市折居 (9)
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前 (10)
宮城	宮崎	湯ノ倉群	MZYK	湯ノ倉 (40)
		根岸群	SMNG	根岸 (40)
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵 (18)
		秋保2群	SDA2	
	塩釜	塩竈群	SGSG	塩竈 (10)
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場 (10)
	新津	金津群	NTKT	金津 (7)
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢 (22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢 (3)、宮川 (3)、枝持沢 (3)

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地
長野	和田 (WD)	鷹山群	WDTY	鷹山 (14)、東餅屋 (16)
		小深沢群	WDKB	小深沢 (8)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋西 (11)
	和田 (WO)	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢 (20)
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下 (20)
		高松沢群	WOTM	高松沢 (19)
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台 (35)、星ヶ塔 (20)
	蓼科	冷山群	TSTY	冷山 (20)、麦草峠 (20)、麦草峠東 (20)
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯 (20)
		畑宿群	HNHJ	畑宿 (51)
		鍛冶屋群	HNKJ	鍛冶屋 (20)
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀 (20)
		柏峠群	AGKT	柏峠 (20)
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島 (27)
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎 (20)
鳥根	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中 (6)、久見採掘現場 (5)
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸 (3)、加茂 (4)、岸浜 (3)

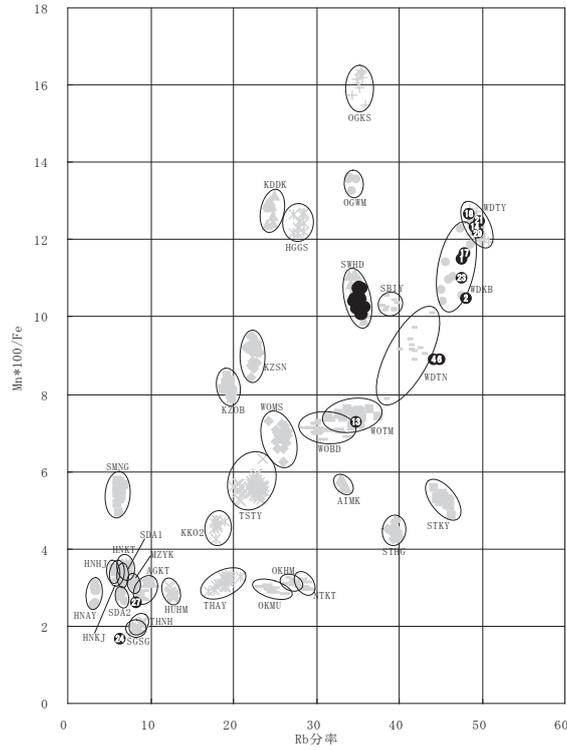
(パレオ・ラボのデータを編集)

第15表 測定値および産地推定結果

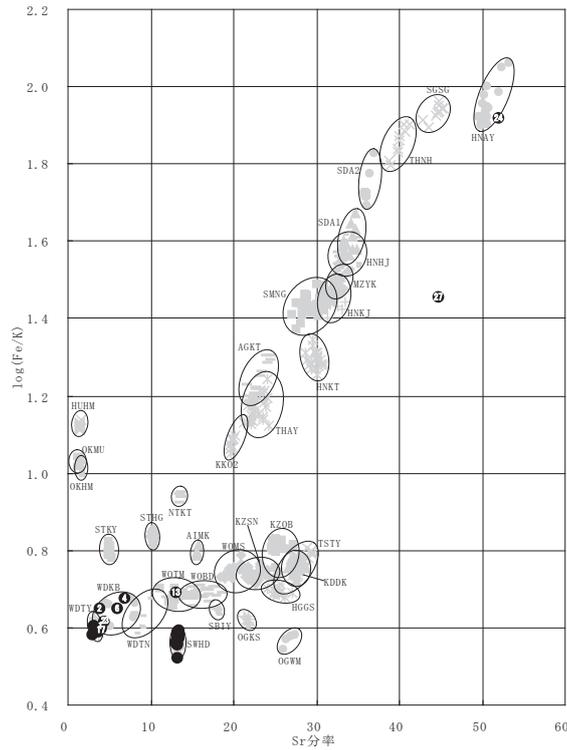
分析№	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	$\frac{Mn^{100}}{Fe}$	Sr分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア
1	331.2	151.0	1316.2	1466.8	123.8	618.2	876.7	47.54	11.47	4.01	0.60	WDKB	和田
2	288.5	134.0	1279.1	1350.9	107.1	546.5	797.0	48.22	10.48	3.82	0.65	WDKB	和田
3	293.7	115.0	1102.3	739.3	279.0	366.4	702.9	35.41	10.43	13.37	0.57	SWHD	諏訪
4	189.7	79.5	894.0	725.7	114.0	293.8	506.8	44.24	8.89	6.95	0.67	不明1	不明
5	270.0	102.4	1008.2	667.5	248.8	329.1	635.7	35.48	10.16	13.23	0.57	SWHD	諏訪
6	296.0	117.2	1316.7	1093.1	144.3	443.9	746.2	45.03	8.90	5.94	0.65	不明1	不明
7	266.3	105.6	1030.2	650.5	239.5	320.7	603.4	35.86	10.25	13.20	0.59	SWHD	諏訪
8	328.9	134.8	1269.0	843.6	324.2	421.3	805.7	35.22	10.62	13.54	0.59	SWHD	諏訪
9	281.2	111.2	1095.8	760.4	289.9	374.3	728.4	35.32	10.15	13.46	0.59	SWHD	諏訪
10	183.2	72.7	697.1	470.3	180.6	235.9	461.2	34.89	10.43	13.39	0.58	SWHD	諏訪
11	232.4	89.5	854.1	546.7	209.1	278.0	543.2	34.67	10.48	13.26	0.57	SWHD	諏訪
12	353.4	132.4	1281.9	816.9	303.7	400.7	782.2	35.46	10.33	13.19	0.56	SWHD	諏訪
13	356.7	126.5	1741.3	1008.9	380.9	430.7	1072.9	34.87	7.26	13.16	0.69	WOTM	和田
14	272.2	134.3	1091.8	1246.5	79.8	514.2	693.5	49.19	12.30	3.15	0.60	WDTY	和田
15	241.1	93.4	929.7	590.2	220.9	288.2	566.0	35.44	10.05	13.26	0.59	SWHD	諏訪
16	221.2	80.6	799.9	525.9	194.2	257.9	499.6	35.59	10.07	13.14	0.56	SWHD	諏訪
17	328.7	150.8	1297.0	1443.5	121.0	605.9	835.8	48.02	11.63	4.03	0.60	WDKB	和田
18	180.9	88.9	702.3	859.4	64.3	367.6	481.5	48.47	12.65	3.63	0.59	WDTY	和田
19	330.2	131.1	1229.2	819.9	308.4	405.7	796.9	35.18	10.67	13.23	0.57	SWHD	諏訪
20	329.8	114.8	1094.8	741.6	276.8	368.6	711.4	35.34	10.48	13.19	0.52	SWHD	諏訪
21	324.2	162.4	1303.4	1581.2	99.2	653.5	845.6	49.73	12.46	3.12	0.60	WDTY	和田
22	265.5	105.3	1013.8	692.3	268.1	350.5	697.2	34.48	10.39	13.35	0.58	SWHD	諏訪
23	232.8	105.4	958.2	975.3	90.4	404.1	580.0	47.58	11.00	4.41	0.61	WDKB	和田
24	134.5	186.2	11156.1	167.8	1350.1	183.7	897.4	6.46	1.67	51.95	1.92	?	不明
25	277.3	107.0	997.1	683.4	257.5	343.4	664.4	35.07	10.73	13.21	0.56	SWHD	諏訪
26	337.9	136.4	1295.8	832.0	317.6	414.2	797.8	35.23	10.52	13.45	0.58	SWHD	諏訪
27	157.2	117.1	4475.6	276.8	1499.8	264.3	1315.0	8.25	2.62	44.69	1.45	?	不明
28	350.0	139.9	1305.4	865.2	326.2	425.0	815.9	35.57	10.71	13.41	0.57	SWHD	諏訪
29	327.9	152.5	1251.7	1509.6	92.1	626.6	821.4	49.50	12.18	3.02	0.58	WDTY	和田
30	283.6	111.2	1034.0	721.0	269.2	360.5	699.5	35.17	10.76	13.13	0.56	SWHD	諏訪
31	288.8	110.4	1080.5	716.9	272.8	359.5	703.0	34.93	10.22	13.29	0.57	SWHD	諏訪

第16表 器種別の産地推定結果

器種	和田				諏訪	不明1	不明	計
	WDTY	WDKB	WOTM	小計				
打製石鏃	平基有茎式	—	1	—	1	—	—	1
	平基無茎式	—	—	—	0	1	—	1
	凹基有茎式	—	1	—	1	3	—	4
	凹基無茎式	—	—	—	0	1	1	2
	凸基有茎式	—	—	—	0	1	1	2
	小計	0	2	0	2	6	2	0
石匙	—	—	1	1	2	—	—	3
刃器	1	1	—	2	2	—	—	4
楔形石器	1	1	—	2	2	—	—	4
石核	1	—	—	1	2	—	—	3
原石	1	—	—	1	4	—	—	5
原石 (地山含有物か)	—	—	—	0	—	—	2	2
計	4	4	1	9	18	2	2	31



第 24 図 黒曜石産地推定判別図 (1) (実線は各判別群を示す)



第 25 図 黒曜石産地推定判別図 (2)

引用・参考文献

望月明彦 1999「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 一上和田城山遺跡篇一』大和市教育委員会

望月明彦 2004「殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書』上尾市教育委員会

## 第4節 金属製品・加工に関する分析

金属製品・加工に関する分析では、銅印と鍛冶関連遺物、石製腰帯飾具の線状金属や金属製品の付着物等について分析を行った。以下にその詳細を記す。

### 1. 銅印の分析

#### (1) 分析の目的

本遺跡では、印面に赤色顔料の付着した銅印が出土している。銅印の発見は長野県内で少なく、貴重である。加えて赤色顔料が付着していることから、銅印使用当時の押印に利用された顔料を明らかにできると期待された。銅印の応急的保存処理を実施する前に、銅印の材質、銅印印面の付着赤色顔料の物質特定のため、材質・成分分析を委託した。

また、銅印には植物遺体と考えられる付着物がみられた。植物を加工した布等で、銅印を包んでいた可能性も想定され、付着物の由来を明らかにするため、顕微鏡観察を委託した。

#### (2) 対象資料

銅印本体、付着物、印面の付着赤色顔料、また比較参考資料として住居跡（SB0028、SB0035、SB5053、SB6044、SB4002、SB7008、SB7002）出土赤色顔料7点を分析対象とした。

付着物の分析は(株)文化財ユニオンに、それ以外の分析は(株)住友金属テクノロジーに委託した。(株)住友金属テクノロジーには同時に、次項に記した石製腰帯飾具の線状金属 20001（分析番号③）、前項に記した灰釉陶器転用硯 00324（分析番号④）・00325（分析番号⑤）の赤色顔料の分析を委託した。

なお、(株)文化財ユニオンには銅印の保存処理業務委託の一環で分析業務を委託した。分析結果の中間報告を受け、処理方法の検討を行い、保存処理業務を実施終了している。

#### (3) 分析の方法

銅印と住居跡出土赤色顔料は蛍光 X 線分析を行った。測定は、XGT-5000WR 型 XRF（堀場製作所製）を用いて、ファンダメンタル・パラメーター法（FP 法）で行った。測定条件は電圧 50kV、電流 0.480mA、測定時間 300 秒である。

銅印印面の付着赤色顔料については、蛍光 X 線分析と赤外分光分析を行った。蛍光 X 線分析の測定機器・条件は銅印と同じである。赤外分光分析では、Spectrum400 型 FT-IR（パーキンエルマー製）を用いて、透過法（KBr 錠剤法）で行った。測定条件は、測定回数 128 回、分解能  $4\text{cm}^{-1}$  である。

銅印の付着物については、マイクロスコープ VHX-1000（キーエンス製）を用いて細かな部分を観察し、必要な部分の写真撮影を実施した。銅印の側面は方向を合わせるため図版作成の際に鏡面反転加工（左右逆転）を施している。

#### (4) 分析結果

**銅印の材質** 蛍光 X 線分析の結果、Cu（銅）を主とし、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、Si（珪素）、As（ヒ素）の存在が確認された（第 17 表、第 26 図）。

**銅印印面の付着赤色顔料** 蛍光 X 線分析の結果、母材である銅印と異なって顕著に確認されたのが Fe（鉄）であった（第 17 表、第 26 図）。

赤外分光分析の結果でも、 $600 \sim 450\text{cm}^{-1}$ において、ベンガラである  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  起因のピークが確認された(第27図)。このことから、銅印印面の付着赤色顔料はFeを主体としたベンガラである可能性が高いと推察された。なお、 $1000\text{cm}^{-1}$ 近傍で確認されたSi-Oのピークはケイ酸塩に起因するものであると推察される(第28図)。

**銅印の付着物(第29図)** 顕微鏡で観察した結果、銅印の付着物は、繊維方向が不規則であること、植物組織が残っていることから、植物加工品ではなく植物体であると思われる。

また単子葉植物の特長である平行な維管束が確認できた。単子葉植物でも体内に珪酸分を蓄積するために強く丈夫であり、残存しやすいイネ科の可能性はある。

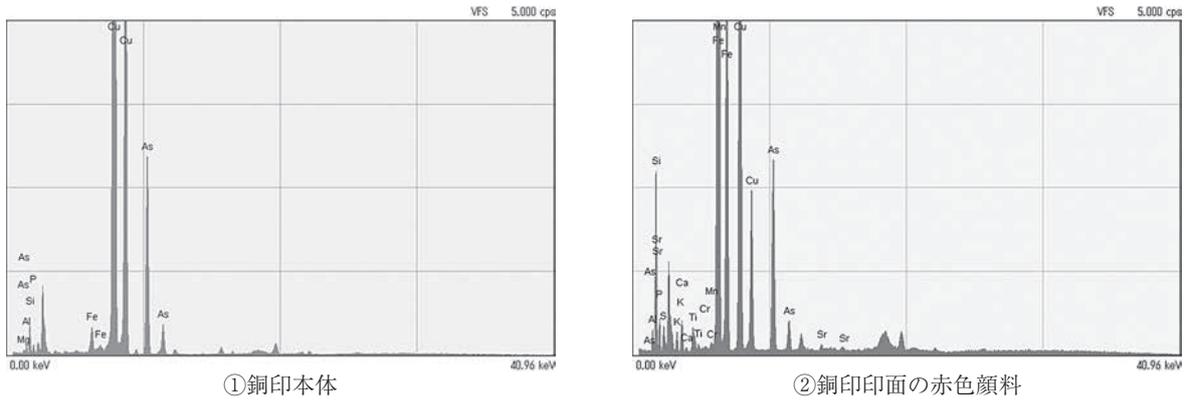
付着物は、密度の違いはあるが、側面、上面、印面ともに付着する。比較的密集する場所が上面から側面にかけて存在し、写真撮影もその特徴的な部分を中心に①～⑧の8カ所を選択して行った(第29図)。①の部分は、側面から印面に向かって折れ曲がるように付着しており、植物遺体によって包まれているように見える。②の部分では、印面の凸部分に植物遺体が付着しており、植物遺体の繊維方向が直交するといった特長をもつ。③の部分でも印面部分に植物遺体が付着する。④の部分は側面に植物遺体が横方向に付着しているように見えるが、印面の反対側に付着した植物遺体も繊維方向がほぼ平行で付着しており、一部は縁にかかっていることから、①と同様に包まれていたように見える。⑤の鈕部分にも植物遺体の付着がみられる。自然条件下において、植物遺体が銅印を包むような状況は想定しにくく、これらのことから、銅印はイネ科植物などの草本類で意図的に包んでいた可能性がある。

**住居跡出土赤色顔料** 蛍光X線分析の結果、⑥～⑫の赤色顔料は、いずれもSi(珪素)、Fe(鉄)を主体していた。外観で赤色が鮮明なものほど、Feの存在量が多い傾向が認められた。このことより、赤色顔料はFeを主体としたベンガラであると推察される。(第30図⑥～⑫)

第17表 蛍光X線分析結果

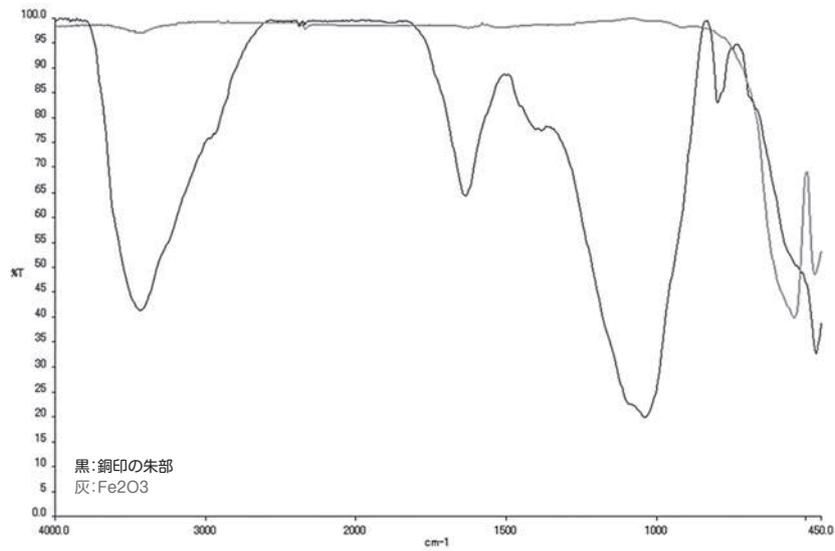
番号	試料名	検出元素													
①	銅印 (07M376)	Mg	Al	Si	P							Fe	Cu	As	
②	銅印印面の赤色顔料 (07M376)	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe	Cu	As	Sr	
⑥	赤色顔料 SB5053 (07 その他01)	Al	Si	P		K	Ca	Ti	Cr	Mn	Fe				
⑦	赤色顔料 SB28 カマド No.3 (06 土15)	Al	Si	P		K	Ca	Ti	V	Cr	Mn	Fe	Zn	Zr	
⑧	赤色顔料 SB0035 (06 土20)	Al	Si	P			Ca	Ti		Mn	Fe			Zr	
⑨	赤色顔料 SB6044 (07 その他03)	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti		Mn	Fe		Sr	Zr	
⑩	赤色顔料 SB4002 (07 その他05)	Al	Si	P	S	K	Ca	Ti		Mn	Fe		Sr	Zr	
⑪	赤色顔料 SB7008 (08 土01)	Al	Si		S	K	Ca			Mn	Fe	Cu	Zn	Sr	Ba
⑫	赤色顔料 SB7002 (08 土03)	Al	Si	P		K	Ca	Ti		Mn	Fe				

太字：FPM定量結果において、10%以上の元素  
(住友金属テクノロジーのデータを編集)

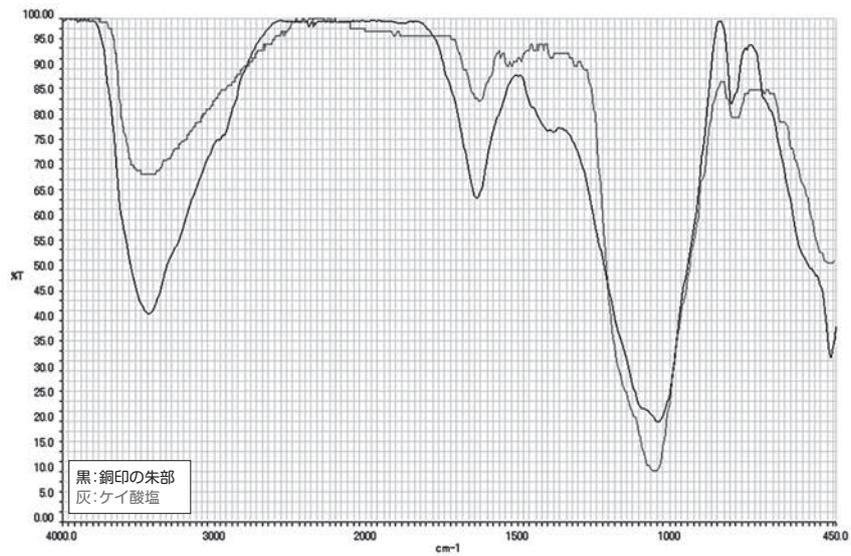


第 26 図 銅印および印面赤色顔料の蛍光 X 線分析結果

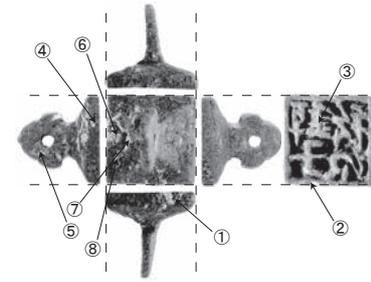
(住友金属テクノロジーのデータを編集)



第 27 図 銅印の赤色顔料とベンガラ (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) の IR スペクトルの重ね書き図

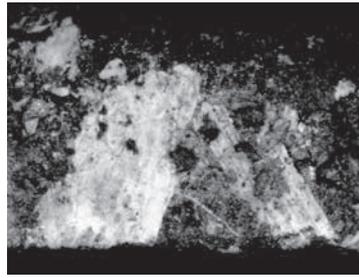


第 28 図 銅印の赤色顔料とケイ酸塩の IR スペクトルの重ね書き図



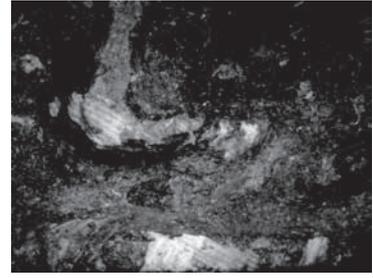
全体写真

1cm



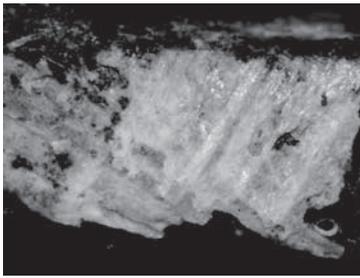
①の拡大写真

1mm



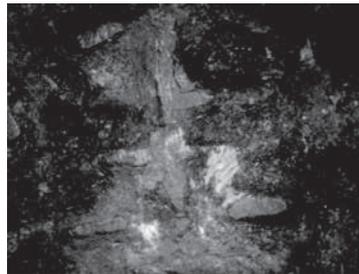
②の拡大写真

1mm



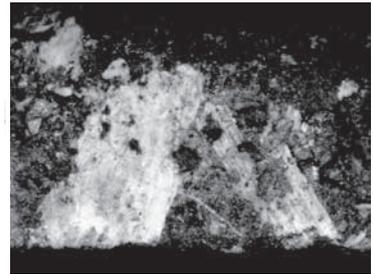
②の拡大写真

0.4mm



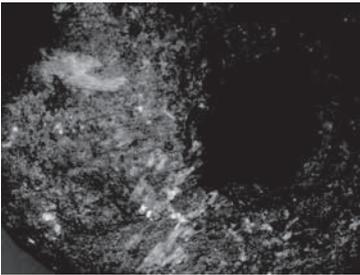
③の拡大写真

1mm



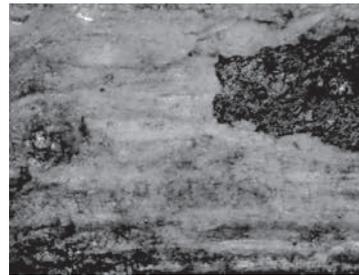
④の拡大写真

1mm



⑤の拡大写真 (1)

1mm



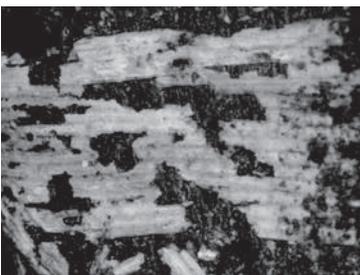
⑤の拡大写真 (2)

0.2mm



⑥, ⑦, ⑧の拡大写真

1mm



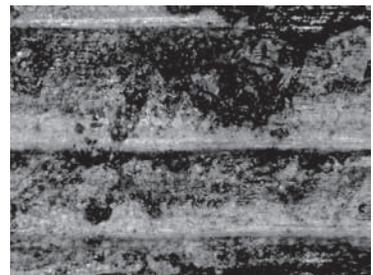
⑥の拡大写真

0.5mm



⑦の拡大写真

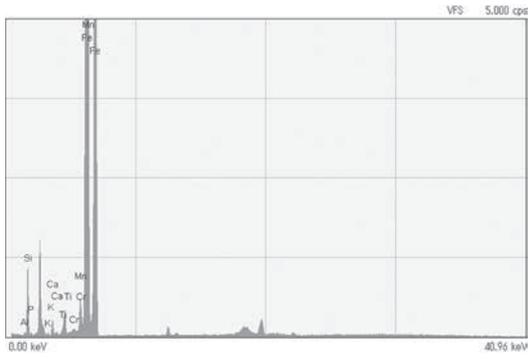
0.5mm



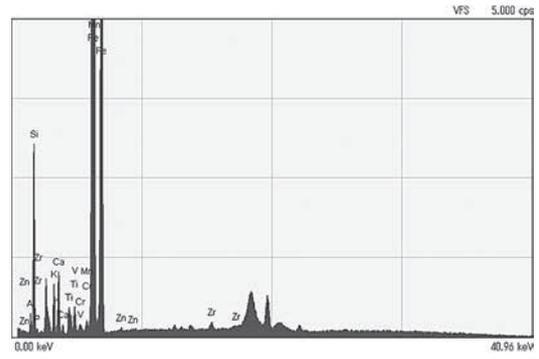
⑧の拡大写真

0.2mm

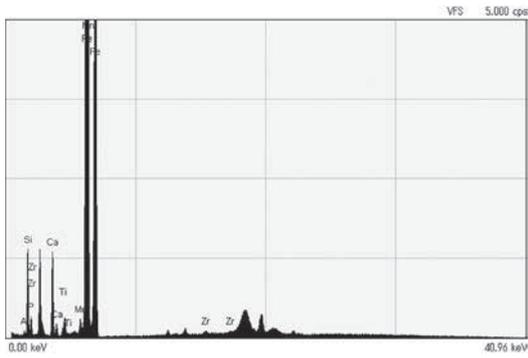
第29図 銅印の顕微鏡観察写真



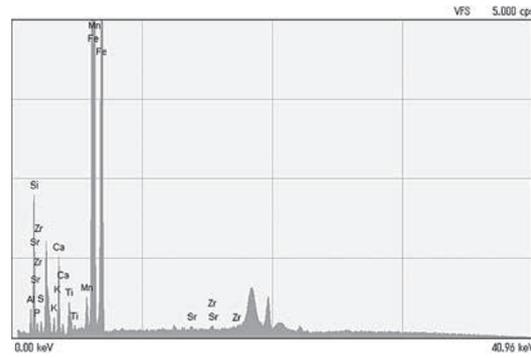
⑥赤色顔料  
SB5053 (07 その他 01)



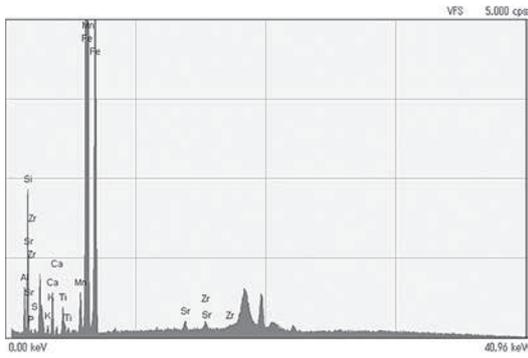
⑦赤色顔料  
SB0028 カマドNo.3 (06 ± 15)



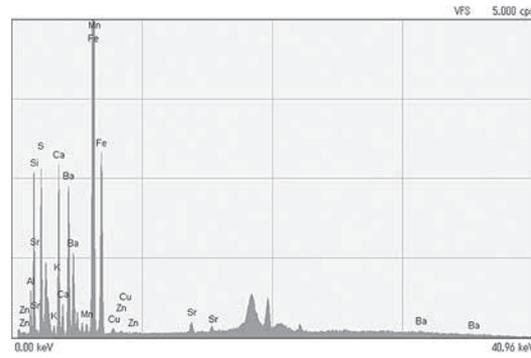
⑧赤色顔料  
SB0035 (06 ± 20)



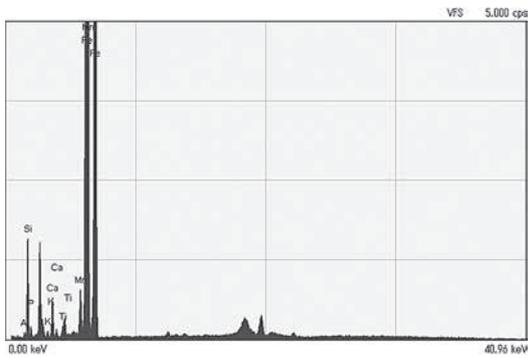
⑨赤色顔料  
SB6044 (07 その他 03)



⑩赤色顔料  
SB4002 (07 その他 05)



⑪赤色顔料  
SB7008 (08 ± 01)



⑫赤色顔料  
SB7002 (08 ± 03)

第30図 住居跡出土赤色顔料の蛍光 X 線分析結果  
(住友金属テクノロジーのデータを編集)

## 2. 鍛冶関連遺物の分析

### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では、鉄滓や鍛造剥片、鞆羽口などの鍛冶関連遺物が出土した。特にSB4037からは鍛冶炉と考えられる遺構が確認されている。集落内で行われていた鍛冶業の様相を明らかにするため、鍛冶関連遺物の成分分析や、加工状況等の分析を委託して行った。

### (2) 対象資料

SB4037（平安時代、10世紀）出土の鉄滓4点、鉄塊系遺物3点、鉄器片1点、鍛造剥片3点、粒状滓3点、鞆羽口1点、SB4027（平安時代、10世紀）出土の鉄滓1点と鉄器片1点、SB5006（古墳時代、7世紀）出土の鞆羽口1点、SB7026（平安時代、9世紀）出土の鉄塊系遺物1点、SB8015（平安時代、10世紀）出土の鞆羽口1点である。各資料とそれぞれ行った分析については第18表にまとめた。

### (3) 分析の方法

分析はJFEテクノリサーチ(株)に委託して行った。

鉄塊系遺物と鉄滓類については原料推定、工程上の位置付け、観察上の特記事項を調査した。鉄製品については、在金属の確認、金属鉄成分の分析、加工状況や観察上の特記事項などを調査した。羽口については、耐火度、粘土成分、観察上の特記事項について調査した。

**化学成分分析** 分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。分析方法は、全鉄(T.Fe)は三塩化チタン還元-二クロム酸カリウム滴定法、金属鉄(M.Fe)は臭素メタノール分解-EDTA滴定法、酸化第一鉄(FeO)は二クロム酸カリウム滴定法、酸化第二鉄(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)計算、化合水(C.W.)はカールフィッシャー法、炭素(C)、イオウ(S)燃焼-赤外線吸収法、ライム(CaO)・酸化マグネシウム(MgO)・酸化マンガニン(MnO)・酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)・珪素(Si)・マンガニン(Mn)・リン(P)・銅(Cu)・ニッケル(Ni)・コバルト(Co)・アルミニウム(Al)・ヴァナジウム(V)・チタン(Ti)はICP発光分光分析法、シリカ(SiO<sub>2</sub>)・アルミナ(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)・酸化カルシウム(CaO)・酸化マグネシウム(MgO)・二酸化チタン(TiO<sub>2</sub>)・酸化リン(P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)・酸化カリウム(K<sub>2</sub>O)はガラスビード蛍光X線分析法、酸化ナトリウム(Na<sub>2</sub>O)は原子吸光法をそれぞれ用いて分析した。

**顕微鏡組織観察** 試料の一部を切り出し、樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上げ)する。羽口や粘土などの鉱物性試料については顕微鏡で観察しながら代表的な鉱物組織などを観察し、その特徴から材質、用途、熱履歴などを判断する。滓関連資料も羽口などと同様の観察を行い、更に特徴的鉱物組織から成分的な特徴に結びつけ、製・精錬工程の判別、使用原料なども検討する。金属鉄はナイトール(5%硝酸アルコール液)で腐食後、顕微鏡で観察しながら顕微鏡組織および介在物(不純物、非金属鉱物)の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。

**X線回折測定** 測定機器は理学電気(株)製ロータフレックス(RU-300型)を用いた。測定条件は、使用X線はCu-K $\alpha$ (波長=1.54178Å)、K $\beta$ 線の除去にグラフナイト単結晶モノクロメーター使用、管電圧・管電流は55kV・250mA、スキャンング・スピードは4.0°/min、サンプリング・インターバルは0.020°、D.S.スリット・R.S.スリット・S.S.スリットは1°、0.15mm、1°、検出器はシンチレーション・カウンターである。

**耐火物及び耐火物原料の耐火度測定** 分析はJIS R 2204(耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法)及びJIS R 8101(耐火度試験用標準コーン)に準拠して測定する。遺物試料を粉碎し、規定(第2種の小型:幅7mm、高さ27mm)のゼーゲルコーンを成型する。なお、ゼーゲルコーンとは耐火度を測定する試料を三角錐の形に成型したものである。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し、毎分5°Cで加熱する。コー

ンの先端が曲がり始め、受台に接触したときの温度を耐火度（溶倒温度）とする。

(4) 分析結果

鉄塊系遺物を含む鉄滓の成分組成を工程別に解析した結果、分析No.1、3～7、9、10、19が砂鉄系鍛錬工程であり、消費地内にある本遺跡では鍛冶炉で製品を供給していたとみられる（第31図）。

また上記の結果に加え、分析No.1の鉄滓中からTiO<sub>2</sub> 鉱物のウルボスピネル組織が観察されている（第32図）。このことから本遺跡で使用された鉄素材の始発原料は砂鉄の可能性が高いと判断された。

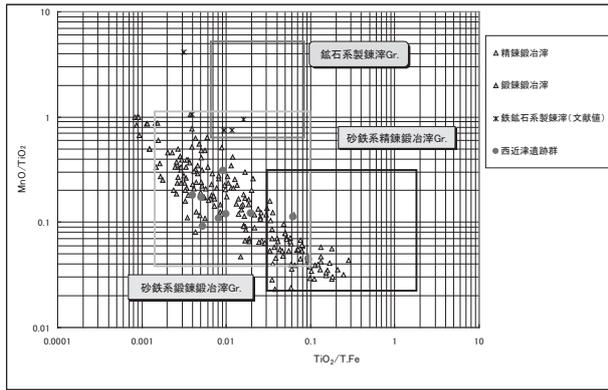
羽口の成分分析の結果から、耐火度に大きく影響した成分はSiO<sub>2</sub> 分量、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 分量、及びアルカリ土類分量とみられた。本遺跡で使用された羽口の推算耐火度は分析No.17が1600℃、No.2、20は1130℃程度とみられた。粘土成分からはAl<sub>2</sub>O<sub>3</sub> 分量とアルカリ土類分量の差異で耐火度の差異が生じたと判断された（第33図）。

なお、各試料の工程上の位置付けなどの調査結果は第19表にまとめた。

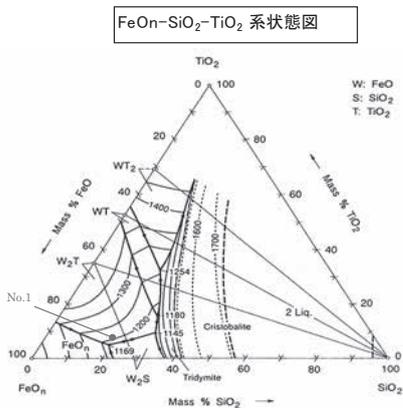
第18表 鍛冶関連遺物試料と調査項目

分析番号	管理番号	遺構名	取上No.地点	出土層位	試料種別	①外観観察	②顕微鏡組織観察	③化学成分分析	④X線回折測定	⑤耐火度測定※	⑥マクロ写真
No1	07M161	SB4037	No4	埋土2	鉄滓（椀型鍛冶滓）	○	○	○			
No2	07M162	SB4037	No1	埋土1	鑪羽口	○	○	○		○	
No3	07M183-1	SB4037		床直上	鉄滓（椀型鍛冶滓）	○	○	○	○		
No4	07M186-1	SB4037	No17		鉄滓（椀型鍛冶滓）	○	○	○	○		
No5	07M188	SB4037	No20		鉄滓	○	○	○			
No6	07M252-1	SB4037	炉1		鉄塊系遺物	○	○	○			
No7	07M270-1	SB4027			鉄滓（椀型鍛冶滓）	○	○	○	○		
No8	07M270-2	SB4027			鉄器片	○	○	○			○
No9	07M326	SB4037			鉄塊系遺物	○	○	○			
No10	07M355	SB4037	南東カド		鉄塊系遺物	○	○	○			
No11	07M421	SB4037	鍛冶炉1	床	鍛造剥片（2mm以下）	○	○				
No12	07M422	SB4037	鍛冶炉1		鍛造剥片（2～4mm）	○	○				
No13	07M423	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓（2mm以下）	○	○				
No14	07M424	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓（2～4mm）	○	○				
No15	07M425	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓（4～7mm）	○	○				
No16	07M528	SB4037	鍛冶炉1		鍛造剥片（4～7mm）	○	○				
No17	07M529	SB5006	No22		鑪羽口	○	○	○		○	
No18	07M532	SB4037		床	鉄器片	○	○	○			○
No19	08M131-1	SB7026	南東区		鉄塊系遺物	○	○2	○	○		○
No20	08M187	SB8015	No5		鑪羽口	○	○	○		○	
						20	21	14	4	3	3

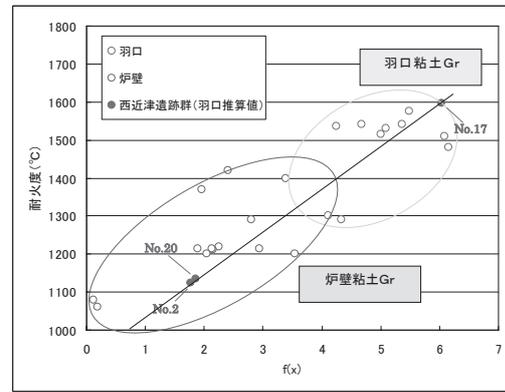
(JFEテクノロジーサーチのデータを編集)



第31図 精錬滓と鍛冶滓の分類



第32図 FeO<sub>n</sub>-SiO<sub>2</sub>-TiO<sub>2</sub>系鉄滓の平衡状態図



$$f(x) = (25.8Al_2O_3 + 5.2SiO_2) / (146MgO + 448MnO + 12.5T.Fe + 10.4TiO_2 + 78.6CaO)$$

種別	分析No.	耐火度 推算(°C)	耐火度増加成分		耐火度低下成分			
			SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	T.Fe	CaO+MgO	TiO <sub>2</sub>	MnO
鞴羽口	No.2	1120	60.7	17.8	7.60	3.00	1.35	0.15
	No.17	1600	65.1	23.7	3.11	0.85	1.01	0.01
	No.20	1130	58.2	19.0	6.88	2.87	1.28	0.16

■ 高い、多い  
□ 並  
□ 低い、少ない

第33図 鞴羽口の耐火度と粘土成分の関係

第19表 鍛冶関連遺物試料の調査結果

分析番号	管理番号	遺構名	出土位置	層位	試料種別	調査結果
No.1	07M161	SB4037	No.4	埋土2	鉄滓(椀型鍛冶滓)	鍛錬工程で生成した椀型鍛冶滓
No.2	07M162	SB4037	No.1	埋土1	鞴羽口	推算耐火度1120°Cの鍛冶炉の羽口
No.3	07M183-1	SB4037		床直上	鉄滓(椀型鍛冶滓)	鍛錬工程で生成した椀型鍛冶滓
No.4	07M186-1	SB4037	No.17		鉄滓(椀型鍛冶滓)	鍛錬工程で生成した椀型鍛冶滓
No.5	07M188	SB4037	No.20		鉄滓	鍛錬工程で生成した鉄滓
No.6	07M252-1	SB4037	炉1		鉄塊系遺物	鍛錬工程で生成した鉄塊系遺物
No.7	07M270-1	SB4027			鉄滓(椀型鍛冶滓)	鍛錬工程で生成した鉄塊系遺物
No.8	07M270-2	SB4027	No.4		鉄器片	Cが0.19%の亜共析鋼組織の鉄器片
No.9	07M326	SB4037			鉄塊系遺物	鍛錬工程で生成した鉄塊系遺物
No.10	07M355	SB4037	南東カド	床	鉄塊系遺物	鍛錬工程で生成した鉄塊系遺物
No.11	07M421	SB4037	鍛冶炉1		鍛造剥片(2mm以下)	鍛錬鍛冶の後期以降に生成した鍛造剥片
No.12	07M422	SB4037	鍛冶炉1		鍛造剥片(2~4mm)	鍛錬鍛冶の中期以降に生成した鍛造剥片
No.13	07M423	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓(2mm以下)	鍛錬鍛冶の中期段階で生成した粒状滓
No.14	07M424	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓(2~4mm)	鍛錬鍛冶の初期~中期の段階で生成した粒状滓
No.15	07M425	SB4037	鍛冶炉1		粒状滓(4~7mm)	鍛錬鍛冶の初期段階で生成した粒状滓
No.16	07M528	SB4037	鍛冶炉1		鍛造剥片(4~7mm)	鍛錬鍛冶の中期以降に生成した鍛造剥片
No.17	07M529	SB5006	No.22		鞴羽口	推算耐火度1600°Cの鍛冶炉の羽口
No.18	07M532	SB4037		床	鉄器片	Cが0.55%の亜共析鋼組織の鉄器片
No.19	08M131-1	SB7026	南東区		鉄塊系遺物	鍛錬工程で生成した鉄塊系遺物
No.20	08M187	SB8015	No.5		鞴羽口	推算耐火度1130°Cの鍛冶炉の羽口

(JFEテクノリサーチのデータを編集)

### 3. その他金属製品の分析

#### (1) 分析の目的

西近津遺跡群から出土した石製腰帯飾具（平安時代）の潜り穴に線状金属がわずかに残存していることがわかった。線状金属の物質特定のため成分分析を委託した。

また、遺跡内からは刀子、鎌、鉄剣等の鉄製品が出土している。そのうち装着金具が残存している刀子は、金具の材質特定のため、成分分析を委託した。木質付着物が確認できた刀子、鎌、鉄剣については、付着物が柄や鞘に由来する可能性があるため、材質検討の資料として樹種同定を委託した。

#### (2) 対象資料

本遺跡から出土した石製腰帯飾具の潜り穴に残存する線状金属、刀子の装着金属、遺構内出土の刀子、鎌、鉄剣の木質付着物 13 点を分析対象とした。

木質付着物はマイクロスコープで観察後、破片を採取して樹種同定の試料とした。

石製腰帯飾具の線状金属は㈱住友金属テクノロジーに、刀子の装着金属、金属製品の木質付着物は㈱文化財ユニオンに委託した。

なお、㈱文化財ユニオンには刀子、鎌、鉄剣等などの保存処理業務委託の一環で分析業務を委託した。分析結果の中間報告を受け、処理方法の検討を行い、保存処理業務を実施終了している。

#### (3) 分析の方法

石製腰帯飾具の線状金属と、刀子の装着金属は蛍光 X 線分析を行った。

石製腰帯飾具の線状金属の測定は、XGT-5000WR 型 XRF（堀場製作所製）を用いて、ファンダメンタル・パラメーター法（FP 法）で行った。試料紛失を防ぐため、ポリ袋内に入れてそのまま測定した。そのため、ポリ袋及び粘着テープのみの測定も合わせて測定を行った（第 35 図）。測定条件は電圧 50kV、電流 0.480mA、測定時間 300 秒である。なお、石製腰帯飾具の線状金属は、前項で記した銅印や赤色顔料、灰釉陶器転用硯と同時期に分析を委託したため、測定機器・条件はそれらと同じである。

刀子の装着金属の測定は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 SEA2120L（セイコーインスツルメンツ株製）を用いて行った。測定条件は電圧 50kV、電流  $8\mu\text{A}$ （0.008mA）、測定時間 300 秒である。

刀子、鎌、鉄剣などの木質付着物は樹種同定を行った。採取した木質付着物の破片を木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

#### (4) 分析結果

**石製腰帯飾具の線状金属** 石製腰帯飾具の線状金属は、蛍光 X 線分析の結果、主に銀（Ag）であり、鉄（Fe）、金（Au）の存在も確認された（第 34 図）。硫黄（S）及びカルシウム（Ca）などは袋及びテープ起因の可能性が考えられた。

**刀子の装着金具** 蛍光 X 線分析の結果、柄部に残る装着金具を中心とした部分から検出された元素は、主として鉄（Fe）と銀（Ag）である。他にマンガン（Mn）と銅（Cu）も認められたが強度は微弱である（第 36 図）。鉄は、金具周囲の鉄錆を反映したものと考えられる。したがって、銀が装着金具の材質を反映した結果と捉えることができ、刀子の柄部装着は銀装によるものと判断される。

**刀子・鎌・鉄剣等の木質付着物** 各試料の樹種同定結果を第 21 表に示す。

器種別にみると、刀子ではムラサキシキブ属、広葉樹（環孔材）、広葉樹（散孔材）、広葉樹、ヒノキ科が認められ、少なくとも4種類の木材が柄等に利用されたことが推定される。長野県内の調査事例では、屋代遺跡群（千曲市）の古代とされる刀子柄にヒノキ科のサワラと種類不明の広葉樹、平安後期～中世とされる刀子らしき金属製品にカラマツ属、中世とされる刀子柄にヤナギ属と種類不明の広葉樹、松原遺跡（長野市）の中世とされる刀子柄にトウヒ属が確認されている（高橋・辻本 1999、松葉 2000、能城・鈴木 2000、高橋・田中 2000）。広葉樹と針葉樹が混在して利用されており、今回の調査結果とも調和的である。

鉄剣は、2点ともヒノキ科であり、加工性の高い木材の利用が推定される。長野県内では、石川条里遺跡（長野市）の古墳時代前期とされる剣鞘にサワラ、榎田遺跡（長野市）の古墳時代前期とされる剣の鞘にヒノキが確認されており（能城・鈴木 1997、鈴木・能城 1999）、今回の調査結果とも類似する。

一方、鎌2点の木質は、いずれもタケ亜科であり、タケ・ササ類が鞘として利用されたことが推定される。この結果から、鉄鎌の柄は刀子や鉄剣と用材が異なることが伺える。鎌柄については、榎田遺跡の古墳時代前期とされる資料にコナラ節、ニレ属、カヤ、屋代遺跡群の古代とされる資料にイヌガヤ、キハダ、針葉樹、中世とされる資料にサワラ、生仁遺跡（千曲市）の奈良～平安時代とされる資料にケヤキが確認されているが、タケ亜科の確認例は報告されていない（鈴木・能城 1999、高橋・辻本 1999、高橋・田中 2000、(株)古環境研究所 2001）。今回の調査結果から、木材と共にタケ亜科も柄として利用していたことが推定される。

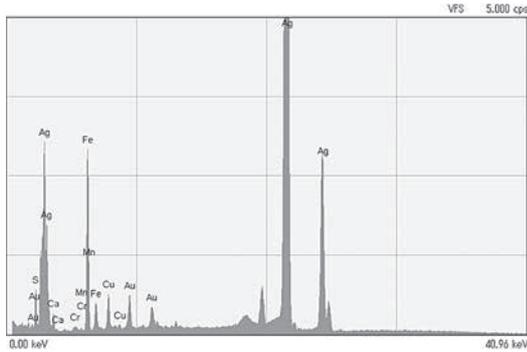
#### 引用・参考文献

- (株)古環境研究所 2001「生仁遺跡出土木材の樹種同定」『生仁遺跡Ⅳ』更埴市教育委員会
- 鈴木三男・能城修一 1999「長野県長野市榎田遺跡出土木製品の樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告 12—長野市内その10—榎田遺跡 第2分冊（本文編Ⅱ）』長野県埋蔵文化財センター
- 高橋 敦・田中義文 2000「木製品・炭化材の樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27—更埴市内その6—更埴条里遺跡・屋代遺跡群—古代2・中世・近世編—』長野県埋蔵文化財センター
- 高橋 敦・辻本崇夫 1999「木製品・自然木、炭化材の樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26—更埴市内その5—更埴条里遺跡・屋代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）—古代1編—本文』長野県埋蔵文化財センター
- 能城修一・鈴木三男 1997「石川条里遺跡出土木製品の樹種」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15—長野市その3—石川条里遺跡 第3分冊』長野県埋蔵文化財センター
- 能城修一・鈴木三男 2000「長野県松原遺跡出土木材の樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5—長野市内その3—松原遺跡 弥生・総論8 総論・自然科学分析』長野県埋蔵文化財センター
- 松葉礼子 2000「出土木製品の樹種同定」『国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 屋代遺跡群』長野県埋蔵文化財センター

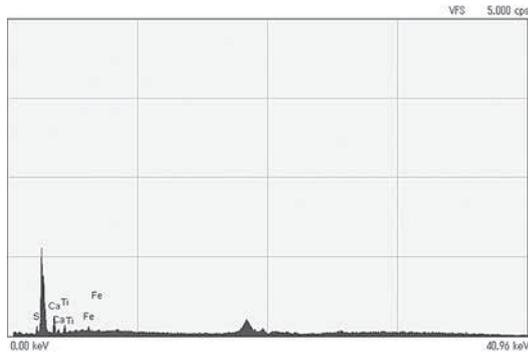
第20表 石製腰帯飾具の線状金属の蛍光X線分析結果

番号	試料名	検出元素								
		S	Ca	Cr	Mn	Fe	Cu	Ag	Au	
③	石製腰帯飾具の線状金属 (20001)									

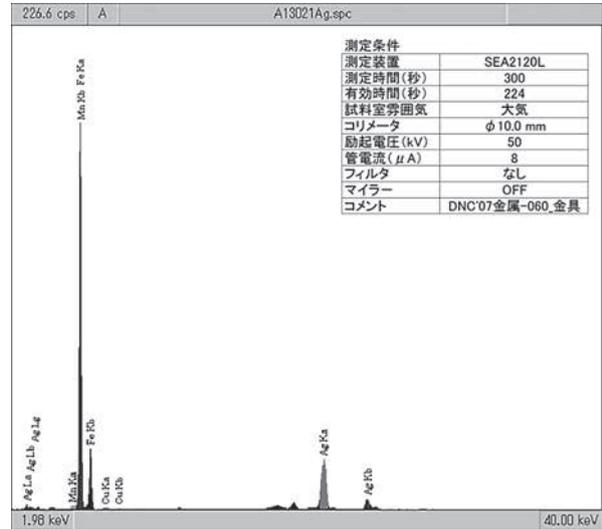
(住友金属テクノロジーのデータを編集)



第34図 石製腰帯飾具の線状金属 (20001) の蛍光X線分析結果  
(住友金属テクノロジーのデータを編集)



第35図 線状金属付着粘着テープの蛍光X線分析結果  
(住友金属テクノロジーのデータを編集)



[結果]

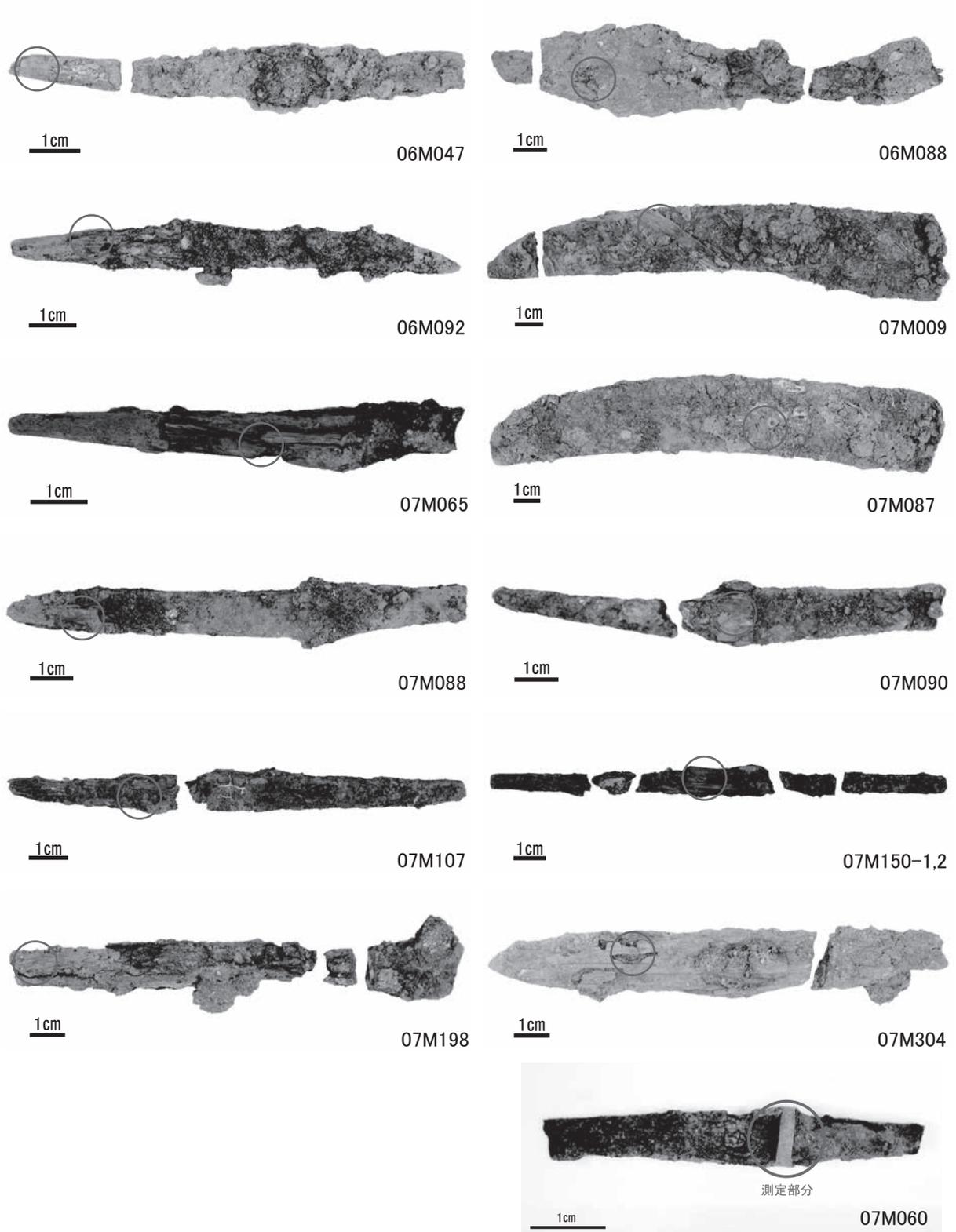
Z	元素	元素名	ライン	積分強度 (cps)	ROI (keV)
25	Mn	マンガン	Kα	15.718	5.75-6.05
26	Fe	鉄	Kα	1433.865	6.25-6.55
29	Cu	銅	Kα	5.086	7.87-8.21
47	Ag	銀	Kα	376.696	21.85-22.35

第36図 刀子 (07M060) の装着金具の蛍光X線分析  
(文化財ユニオンのデータを編集)

第21表 分析試料および樹種同定結果

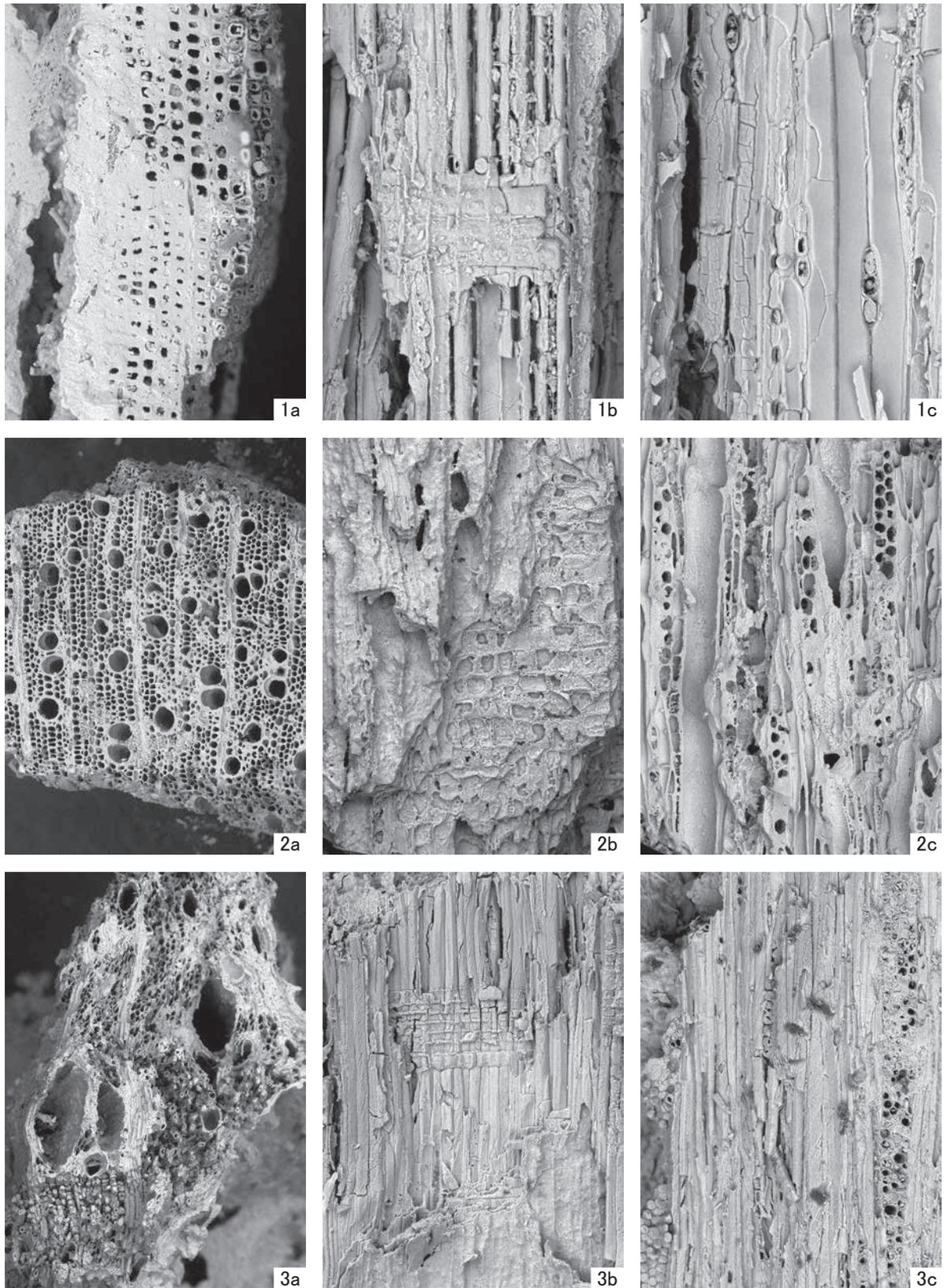
管理番号	分析番号No.	遺物名	遺構	取上No.	位置	時代	分析部分	樹種
06M047	1	刀子	SB0038	28			木質付着物	広葉樹
06M088	2	小刀?	SB0125				木質付着物	不明
06M092	3	刀子	SB0137				木質付着物	ムラサキシキブ属
07M009	4	鉄鎌(曲刃鎌)	SB5013				木質付着物	イネ科タケ亜科
07M065	5	刀子	SB3052				木質付着物	ヒノキ科
07M087	6	鎌	SB8006	No1	床直上		木質付着物	イネ科タケ亜科
07M088	7	刀子	SB8006	No2			木質付着物	ヒノキ科
07M090	8	刀子	SB3065	No1			木質付着物	広葉樹(環孔材)
07M107	9	刀子	SB8003	No2			木質付着物	広葉樹(散孔材)
07M150-1, 2	10	刀子	SB6023		C区		木質付着物	ヒノキ科
07M198	11	鑿	SM4006				木質付着物	ヒノキ科
07M304	12	鉄剣	SM4002			弥生時代	木質付着物	ヒノキ科
07M059	13	刀子	SD3001				木質付着物	不明
07M060	14	刀子	3区南側検出				銀の貴金具	-

(文化財ユニオンのデータを編集)



・丸で示した部分が試料採取位置を示す。

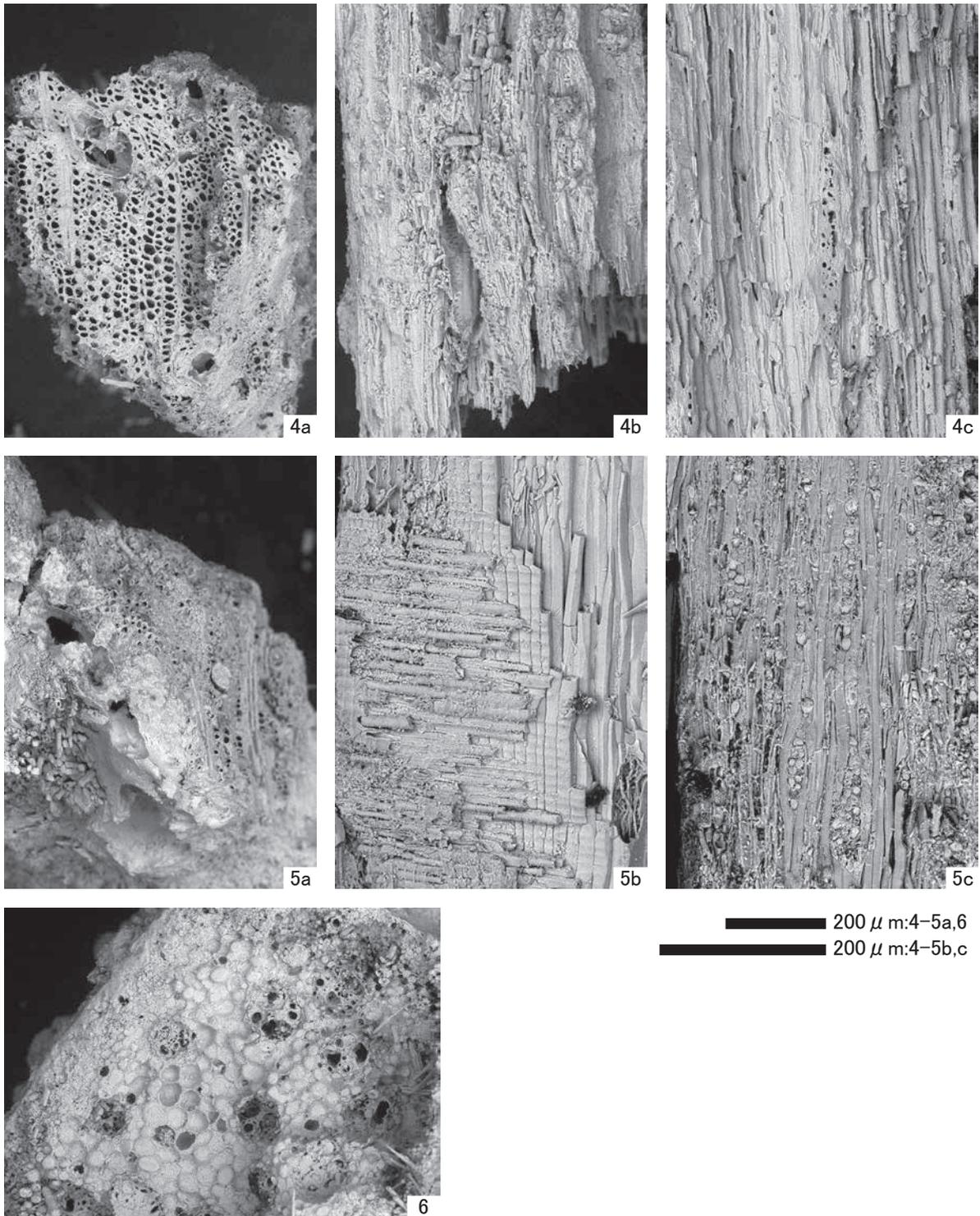
第 37 図 同定試料採取位置



- 1.ヒノキ科(07M065)  
 2.ムラサキシキブ属(07M092)  
 3.広葉樹(環孔材)(06M090)  
 a:木口,b:柾目,c:板目

200 μm:2-3a  
 200 μm:1a,2-3b,c  
 100 μm:1b,c

第38図 金属製品付着木質(1)



4.広葉樹(散孔材)(07M107) a:木口,b:柁目,c:板目  
5.広葉樹(06M047) a:木口,b:柁目,c:板目  
6.イネ科タケ亜科(07M087) 横断面

第39図 金属製品付着木質 (2)

## 第5節 炭化物・木製品に関する分析

炭化物・木製品に関しては、年代測定と樹種・種実同定、微細物分析を行った。以下にその詳細を記す。

### 1. 年代測定

#### (1) 分析の目的

各遺構の年代は出土土器から推測できるが、出土炭化物の放射性炭素量により得られる絶対年代と照合することにより、遺構の年代、またそれをもとに検討される遺跡の性格はより明らかになる。

本遺跡では、出土土器から弥生時代後期と推測される超大型竪穴住居跡（SB0067、SB0110）がみつまっている。また、床面から鍛冶炉や鍛冶関連遺物が出土した住居跡（SB4037）もみつまっている。こちらは出土土器から平安時代（9世紀中頃）と推測される。

これらの遺構は遺跡の性格を特徴づける重要な遺構と考えられる。超大型竪穴住居跡をはじめ、平安時代の鍛冶に関わる竪穴住居跡などの存続時期、埋没年代を明らかにし、遺跡検討の資料とするために年代測定を実施した。

#### (2) 対象資料

弥生時代から古代・中世の竪穴住居跡と土坑出土の炭化物・炭化材26点を分析対象資料とした(第22表)。対象資料のうち23点の分析は(株)パリオ・サーヴェイに、それ以外の3点を(株)加速器分析研究所に委託した。

なお年代測定を行った26点については、同時に樹種同定を行った。その結果は次項に記す。また株式会社加速器分析研究所には、炭化材・炭化物の年代測定と同時に、第7節に記したウマの骨1点、歯1点の年代測定を委託した。

#### (3) 分析の方法

試料は、超音波煮沸洗浄と酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸 1.2N, 水酸化ナトリウム 1N, 塩酸 1.2N）により、不純物を取り除いたあと、グラファイトを合成し、測定用試料とする。

測定機器は、コンパクト AMS・1.5SDH（NEC 製）、<sup>14</sup>C-AMS 専用装置（NEC 製）を用いる。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。測定年代は 1,950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。

暦年較正は、06 木 70、07 木 125、07 木 171 では、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を用いた。標準試料は米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を用いる。これ以外の試料では RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差を用いる。

暦年較正結果は、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$ （ $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。

#### (4) 分析結果

各遺構から出土した炭化材および炭化物の同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）および暦年較正結果を第 22 表に示す。

**超大型竪穴住居跡の年代**  $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果、補正年代（暦年較正用）は、SB0110 出土炭化材 06 木 4 は  $2,032 \pm 21\text{yrBP}$ 、SB0110 炉出土炭 06 木 43 は  $1,995 \pm 23\text{yrBP}$ 、SB0110 ピット 9 出土炭化材 06 木 70 は  $2,084 \pm 24\text{yrBP}$ 、SB0067 ピット 3 出土炭化材 06 木 28 は  $1,904 \pm 22\text{yrBP}$  である。暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、06 木 4 が  $52\text{calBC} \sim 2\text{calAD}$ 、06 木 43 が  $38\text{calBC} \sim 48\text{calAD}$ 、06 木 70 が  $156 \sim 54\text{calBC}$ 、06 木 28 が  $76\text{calAD} \sim 125\text{calAD}$  である。

06 木 70 はおおよそ弥生時代中期頃に相当する値を示している（小林 2009）。06 木 28 もおおよそ弥生時代後期に相当し、出土土器による推定年代と一致する。06 木 4、06 木 43 は 06 木 70 と比べ、やや新しい方に偏る値を示す。06 木 70 が他 2 点と異なる年代校正プログラムを使用したため、算出結果が異なった可能性もある。

これらの結果から、絶対年代では SB0110 が SB0067 に比べやや古い方に偏った値を示しており、SB0110 が SB0067 より先行すると考えられる。

その他の弥生時代後期と推定されていた住居跡（SB0041、SB0102、SB8005）についても、絶対年代は出土土器による推定年代とおおよそ一致した値を示している。

ただし、弥生時代中期と後期の  $^{14}\text{C}$  較正年代は必ずしも明らかでないため（木野瀬ほか 2005）、今後類例と比較検討する必要がある。

**鍛冶関連竪穴住居跡の年代**  $^{14}\text{C}$ 年代測定の結果、補正年代は 07 木 125（SB4037）が  $1,140 \pm 24\text{yrBP}$ 、07 木 171（同）が  $1,220 \pm 23\text{yrBP}$  である。暦年較正年代（ $1\sigma$ ）は、07 木 125 が  $883 \sim 967\text{calAD}$ 、07 木 171 が  $770 \sim 868\text{calAD}$  で各 2 つの範囲で示される。9 世紀中頃と考えられている 07 木 125 と 07 木 171 は、前者がほぼ推定される時期に一致し、後者はやや古い方に偏る値を示した。

#### 引用・参考文献

- 木野瀬正典・小田寛貴・赤塚次郎・山本直人・中村俊夫 2005 「弥生・古墳時代の土器に付着した炭化物の AMS $^{14}\text{C}$  年代測定—愛知・石川県の遺跡から出土した土器について—」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, XVI』
- 小林謙一 2009 「近畿地方以東の地域への拡散」『新弥生時代のはじまり第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代』西本豊弘編 雄山閣

第22表 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

管理番号	試料名		種別 (樹種)	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)				測定番号 (測定機関)
							$\sigma$	cal AD	-	cal AD	
06木01	SB0006	No15	炭化材 (フジキ属)	665±20	-24.72±0.17	663±21	$\sigma$	cal AD 1,286	-	cal AD 1,302	PLD-15390 (パリーノ・サーヴェイ)
							$2\sigma$	cal AD 1,367	-	cal AD 1,382	
							cal AD 1,280	-	cal AD 1,314		
							cal AD 1,356	-	cal AD 1,388		
06木02	SB0006	No38	炭化材 (カエデ属)	755±20	-25.67±0.19	757±21	$\sigma$	cal AD 1,256	-	cal AD 1,279	PLD-15391 (パリーノ・サーヴェイ)
							$2\sigma$	cal AD 1,226	-	cal AD 1,281	
06木04	SB0110	No23	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	2,030±20	-26.18±0.21	2,032±21	$\sigma$	cal BC 52	-	cal AD 2	PLD-15392 (パリーノ・サーヴェイ)
							$2\sigma$	cal BC 104	-	cal AD 25	
							cal AD 44	-	cal AD 46		
06木05	SB0041	炉内炭No1	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,995±25	-25.18±0.14	1,995±23	$\sigma$	cal BC 38	-	cal BC 27	PLD-15393 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal BC 24	-	cal BC 9	
							cal BC 3	-	cal AD 27		
							cal AD 41	-	cal AD 48		
							$2\sigma$	cal BC 44	-	cal AD 58	
06木28	SB0067	pit3	炭化材 (クリ)	1,905±20	-25.19±0.16	1,904±22	$\sigma$	cal AD 76	-	cal AD 93	PLD-15394 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 98	-	cal AD 125	
							cal AD 28	-	cal AD 39		
							cal AD 50	-	cal AD 137		
							$2\sigma$	cal AD 198	-	cal AD 205	
06木31	SB0102	炉炭	炭化材 (クリ)	1,870±25	-28.17±0.15	1,872±24	$\sigma$	cal AD 81	-	cal AD 139	PLD-15395 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 156	-	cal AD 168	
							cal AD 195	-	cal AD 209		
							cal AD 76	-	cal AD 218		
06木32	SB0103	炭No1	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クヌギ節)	1,220±20	-26.42±0.13	1,220±21	$\sigma$	cal AD 772	-	cal AD 829	PLD-15396 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 837	-	cal AD 867	
							cal AD 712	-	cal AD 745		
							cal AD 767	-	cal AD 884		
06木43	SB0110	炉内炭No1	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,995±25	-25.60±0.14	1,995±23	$\sigma$	cal BC 38	-	cal BC 27	PLD-15397 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal BC 24	-	cal BC 9	
							cal BC 3	-	cal AD 27		
							cal AD 41	-	cal AD 48		
							$2\sigma$	cal BC 44	-	cal AD 58	
06木51	SB0131	SB131	炭化材 (マツ属複雑維管束亜属)	110±20	-25.96±0.14	112±20	$\sigma$	cal AD 1,693	-	cal AD 1,708	PLD-15398 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 1,718	-	cal AD 1,727	
							cal AD 1,812	-	cal AD 1,826		
							cal AD 1,832	-	cal AD 1,887		
								-	cal AD 1,919		
							$2\sigma$	cal AD 1,684	-	cal AD 1,734	
								cal AD 1,806	-	cal AD 1,896	
								cal AD 1,902	-	cal AD 1,929	
								cal AD 1,951	-	cal AD 1,953	
07木01	SK5002	炭サンプル C-1	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クヌギ節)	1,170±20	-23.84±0.13	1,169±21	$\sigma$	cal AD 782	-	cal AD 789	PLD-15399 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 811	-	cal AD 846	
							cal AD 856	-	cal AD 893		
							cal AD 778	-	cal AD 898		
							$2\sigma$	cal AD 920	-	cal AD 945	
07木12	SB5010	炭サンプル No4	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クヌギ節)	1,530±20	-25.49±0.13	1,531±20	$\sigma$	cal AD 444	-	cal AD 447	PLD-15400 (パリーノ・サーヴェイ)
								cal AD 464	-	cal AD 482	
							cal AD 533	-	cal AD 573		
							cal AD 434	-	cal AD 492		
							$2\sigma$	cal AD 508	-	cal AD 519	
								cal AD 528	-	cal AD 596	

第5節 炭化物・木製品に関する分析

管理番号	試料名		種別 (樹種)	補正年代 (yrBP)	$\delta 13C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正年代 (cal)						測定番号 (測定機関)		
							$\sigma$	cal	AD	555	-	cal		AD	595
07木17	SB5010	炭サンプル No9	炭化物 (イネ科)	1,500 ± 20	-10.00 ± 0.12	1,498 ± 20	$\sigma$	cal	AD	538	-	cal	AD	615	PLD-15401 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	538	-	cal	AD	615	
07木40	SB6002	炭B	炭化物 (イネ科)	1,520 ± 20	-10.21 ± 0.13	1,519 ± 21	$\sigma$	cal	AD	438	-	cal	AD	487	PLD-15402 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	438	-	cal	AD	487	
07木45	SB6002	炭G	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,540 ± 20	-25.52 ± 0.13	1,541 ± 21	$\sigma$	cal	AD	441	-	cal	AD	484	PLD-15403 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	441	-	cal	AD	484	
07木49	SB8008	炭サンプル No1	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クスギ節)	1,635 ± 20	-26.19 ± 0.13	1,634 ± 20	$\sigma$	cal	AD	392	-	cal	AD	430	PLD-15404 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	392	-	cal	AD	430	
07木55	SK4168	炭サンプル	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,560 ± 20	-26.22 ± 0.17	1,560 ± 21	$\sigma$	cal	AD	349	-	cal	AD	367	PLD-15405 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	349	-	cal	AD	367	
07木60	SB8045	No17	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,700 ± 20	-26.05 ± 0.15	1,701 ± 21	$\sigma$	cal	AD	380	-	cal	AD	442	PLD-15406 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	380	-	cal	AD	442	
07木61	SB6011	炭サンプル A	炭化物 (イネ科)	1,320 ± 20	-24.98 ± 0.17	1,322 ± 21	$\sigma$	cal	AD	436	-	cal	AD	490	PLD-15407 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	436	-	cal	AD	490	
07木94	SB6033	炭サンプル No5	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クスギ節)	1,410 ± 20	-27.95 ± 0.12	1,409 ± 21	$\sigma$	cal	AD	509	-	cal	AD	517	PLD-15408 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	509	-	cal	AD	517	
07木98	SB6033	炭No9	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,425 ± 20	-26.33 ± 0.19	1,424 ± 21	$\sigma$	cal	AD	529	-	cal	AD	541	PLD-15409 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	529	-	cal	AD	541	
08木02	SB7007	南壁際	炭化物 (イネ科)	1,455 ± 25	-27.63 ± 0.15	1,453 ± 24	$\sigma$	cal	AD	264	-	cal	AD	276	PLD-15410 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	264	-	cal	AD	276	
08木06	SB8005	炭No3	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	1,980 ± 25	-25.02 ± 0.12	1,979 ± 25	$\sigma$	cal	AD	332	-	cal	AD	388	PLD-15411 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	332	-	cal	AD	388	
08木28	SB7055	No6	炭化材 (コナラ属コナラ亜属クスギ節)	1,585 ± 20	-27.77 ± 0.12	1,585 ± 21	$\sigma$	cal	AD	258	-	cal	AD	299	PLD-15412 (パリノ・サーヴェイ)
							2 $\sigma$	cal	AD	258	-	cal	AD	299	
06木70	SB0110	Pit9	炭化材 (コナラ属コナラ亜属コナラ節)	2,080 ± 20	-26.19 ± 0.57	2,084 ± 24	$\sigma$	cal	AD	659	-	cal	AD	688	IAAA-133434 (加速器研究所)
							2 $\sigma$	cal	AD	659	-	cal	AD	688	
07木125	SB4037	覆土1層	炭化材 (クリ)	1,140 ± 20	-24.8 ± 0.77	1,139 ± 24	$\sigma$	cal	AD	754	-	cal	AD	758	IAAA-133435 (加速器研究所)
							2 $\sigma$	cal	AD	754	-	cal	AD	758	
07木171	SB4037	鍛冶炉	炭化材 (クリ)	1,220 ± 20	-24.92 ± 0.57	1,216 ± 23	$\sigma$	cal	AD	655	-	cal	AD	713	IAAA-133436 (加速器研究所)
							2 $\sigma$	cal	AD	655	-	cal	AD	713	

- この表はパリノ・サーヴェイ、加速器研究所のデータを編集したものである。
- 補正年代は、同位体効果による補正を行った測定結果である。(補正に $\delta 13C$  (‰)の値を用いる。)
- 暦年較正年代の統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である

## 2. 樹種同定

### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では、弥生時代～中世の竪穴住居跡や竪穴状遺構、掘立柱建物跡、土坑、井戸跡から多数の木材、炭化材などがみつまっている。当時の住居構築材や鍛冶関連遺構の燃料材などの植物資源利用の検討資料とするため、樹種同定を実施した。

### (2) 対象資料

弥生時代、古墳時代、古代、中世の竪穴住居跡・竪穴状遺構から出土した炭化材・炭化物、中世の井戸跡から出土した炭化材・木材・漆器椀、植物遺体が混じる土壌試料、土壌分析用試料の微細物分析の際に抽出された炭化材など、合計147点を対象資料とした。なおSB3047の土壌試料は、中に含まれる植物遺体の樹種同定を行った。

分析は147点のうち135点はパリノ・サーヴェイ(株)に、それ以外の12点は(株)加速器分析研究所に委託した。

また(株)パリノ・サーヴェイには微細物分析・種実同定・土壌分析も同時に委託した。(株)加速器分析研究所には樹種同定の試料3点について、年代測定を委託した。

### (3) 分析の方法

微細物分析のため、試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察する。試料の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産の木材組織配列については、林(1991)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

### (4) 分析結果

樹種同定の結果から、時代ごとの住居構築材や古代の鍛冶炉における燃料材や建築部材などの様相が推測できた。以下にその詳細を記す。

**弥生時代後期の住居構築材** 弥生時代後期では炭化材21点のうちSB8005試料が14点を占める。SB8005試料は、針葉樹のサワラと広葉樹のコナラ節を主体とし、この他にクヌギ節が認められる。SB0110ピット9の試料2点(06木70 No.1, 2)はいずれもコナラ節に同定された。これらの材質は、サワラは木理が通直で割裂性・耐水性が高く、コナラ節およびクヌギ節はいずれも重硬で強度が高い。こうした材質を考慮すれば、コナラ節が主要な部材に利用され、サワラは割裂性を利用した板材に利用された可能性がある。また、SB0015ピット3(06木13)がヤナギ属、SB0067ピット3(06木28)がクリであった。クリの木材は、重硬で強度・耐朽性に優れた材質を有する一方、ヤナギ属は軽軟で強度・保存性が低い。いずれも支柱穴および柱穴から出土していることから柱材の可能性はあるが、SB0015ピット3のヤナギ属の材質を考慮すると、用途については検討が必要である。

佐久市域における弥生時代後期の事例では、後家山遺跡の住居跡出土炭化材にコナラ節を主体として、ヒノキ属、モミ属、カバノキ属、クヌギ節、ニシキギ属、タケ亜科が混じる種類構成が確認されている(㈱古環境研究所2004)。今回のコナラ節が多く、針葉樹が混じる組成を示す点で、類似する傾向が指摘される。

**古墳時代の住居構築材** 古墳時代の試料は、SB5010が12点、SB6033が10点、SB8045が5点で、すべ

て炭化材である。

これらの試料はいずれもクヌギ節とコナラ節が混在する状況が窺われ、SB6033ではサクラ属(07木96)も確認された。サクラ属の木材も重硬であることから、クヌギ節とコナラ節とともに重硬な材質の木材利用が示唆される。クヌギ節やコナラ節は、弥生時代後期の堅穴住居跡の住居構築材にも確認されており、同様の木材利用が継続していたと推定される。なお、SB5010より確認されたイネ科(07木17)は、萱材として利用が推定される。

佐久市および周辺地域における古墳時代の事例では、腰巻遺跡・下聖端遺跡・下芝宮遺跡・円正坊遺跡・西一本柳遺跡・聖原遺跡(佐久市)、関口B遺跡・竹花遺跡(小諸市)等の多くの資料が蓄積されている。これらの調査結果をみると、コナラ節を主体として、クヌギ節、ケヤキ、カエデ属、クリ、ヤマグワ等が混じるという組成が確認できる(パリノ・サーヴェイ(株)1989a・1991・1992・1994a・2002・2005、(株)古環境研究所2003・2005)。今回の分析結果では、遺構ごとに主体となる分類群が異なっているものの、コナラ節とクヌギ節が共に利用される点において、これまでの調査事例と概ね同様の傾向が示唆される。

発掘調査所見で刳物の可能性が想定されたSB5010出土の板状の炭化材(07木109)は、コナラ亜属の樹皮であった。コナラ亜属は、樹皮にコルク層が発達し、日本産広葉樹の中では比較的厚い樹皮を持つ。コナラ亜属の樹皮を利用した木製品は、亀田泥炭遺跡(千葉県)の古代～中世の容器蓋や梅ノ木遺跡(群馬県太田市)の古墳時代の曲物等がある(パリノ・サーヴェイ(株)1994b・1999)。

**古代の住居構築材** 古代の試料のうち、住居構築材試料は計34点である。このうち、SB6002試料が10点、SB7055試料が7点、SB7035試料が5点、SB0022試料が6点であり、この他は1遺構あたり1～2点である。時代別樹種構成では、古墳時代と同様にクヌギ節とコナラ節が主体と占める傾向にある。ただし、遺構別では、SB6002試料はコナラ節のみからなり、SB7035試料やSB7055試料ではクヌギ節とコナラ節が混在する。なお、SB0022の試料は、住居跡床面上に焼土と共に分布する状況が確認されている。同定された分類群は、クヌギ節やイネ科等であり、この他の堅穴住居跡の住居構築材にみられた分類群と類似するという特徴がある。

また、壁材と想定して採取されたSB3047(07その他7)の植物遺体は、複数試料を対象に調査を行ったが、すべて広葉樹の当年性の小径木(枝)であり、中心部の髓が抜け、中空となる状況が観察された。植物遺体の配列はまちまちであり、編物様に重複する状況は確認できなかった。

佐久市および周辺地域の古代の調査事例は、下聖端遺跡・勝負沢遺跡・中原遺跡群・聖原遺跡(佐久市)をはじめとして、十二遺跡・根岸遺跡・広畑遺跡(御代田町)、大塚原遺跡・十石坂上遺跡(小諸市)等がある(パリノ・サーヴェイ(株)1988・1989b・1989c・1992・1994・1995a・1995b・2005、長野県埋蔵文化財センター1999)。このうち、多くの試料が調査された聖原遺跡では、クヌギ節とコナラ節が混在する状況が確認される。また、十二遺跡、根岸遺跡、広畑遺跡、下聖端遺跡、大塚原遺跡等ではコナラ節を主体とする組成、勝負沢遺跡ではクヌギ節を主体とする組成がみられ、中原遺跡群ではクヌギ節とクリが利用される一方、コナラ節が確認されないという特徴が確認される。これらの事例から、遺跡間でも樹種構成に差異があることが看取される。なお、このような異なる樹種構成を示す背景として、各遺跡周辺の局所的な植生等を反映している可能性もある。

**中世の住居構築材** 中世の試料はSB0006試料16点と、SB0131試料2点、SK0005井戸跡の試料7点である。SB0016試料は、発掘調査時に床面に散在する状況が確認されている。また、発掘調査時における炭化材の観察では、芯持丸木(芯持材を含む)や板状を呈する破片が確認されたほか、小破片も多数確認された。分析に供した炭化材は、上記した芯持丸木(芯持材を含む)や板状を呈する破片が主体である。これらの炭化材からは、針葉樹のマツ属複維管束亜属とモミ属、広葉樹のクマシデ属、コナラ節、クリ、モクレン

属、フジキ属、キハダ、カエデ属、スイカズラ属など合計10分類群が確認された。確認された分類群の木材の材質に着目すると、比較的強度の高い分類群（マツ属複維管束亜属、クマシデ節、コナラ節、クリ、カエデ属）、強度は低いが耐朽性の高い分類群（キハダ）、木理が通直で加工は容易であるが、保存性の低い分類群（モミ属）、小径木（スイカズラ属）など多様である。多くは住居構築材として利用可能であるが、スイカズラ属は小径木であることから、住居構築材でも萱材や粗朶木等としての利用、あるいは住居構築材以外に由来する炭化材が混在している可能性も考えられる。

SK0005 井戸跡の試料は、漆器片、先端に杭先状の加工痕が認められる比較的大形の板状を呈する木材、薄板状の炭化材、木屑？（厚さ1mm前後の薄板状を呈する小形の木片）からなり、いずれも針葉樹のヒノキ科に同定された。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、クロベ（ネズコ）といった有用材が含まれており、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性が比較的高い材質を有する種類である。したがって、板状を呈する木材は、割裂性や耐水性を要する用途等に利用されていた木製品等に由来する可能性がある。また、同様の炭化材等が混在することから、利用後の残渣も含まれると考えられる。

長野県内における調査事例では、ヒノキ科はアスナロ、ヒノキ、サワラ、クロベが確認されているが、アスナロとクロベは少なく、サワラ、ヒノキの確認された事例が多い。佐久盆地及び周辺地域では、当該期の調査事例は少ないが、榛名平遺跡の中～近世とされる斎串、折敷、箸、桧扇等にサワラ、ヒノキやヒノキ属、井戸材・加工材等にヒノキ科が認められている（株式会社古環境研究所 2001）。

SK0005 から出土した漆器片は、試料の観察で湾曲が認められたことから漆器碗と考えられた。樹種は上記のとおりヒノキ科である。長野県内では、曲物等の板状を呈する容器にヒノキ科が認められた事例は多数あるが、挽物や刳物容器にはヒノキ科は認められていない。このことに加え、炭化や埋没の過程での変形も考慮すれば、碗以外に由来する器種の可能性も考えられる。

**鍛冶炉の燃料材及び建築部材** 古代の鍛冶関連の竪穴住居跡 SB4037 から出土した炭化材10点の内訳は次のとおりである。07木125（No.3・4）、07木129（No.5）は埋土1層から、07木185（No.12）は床直上から出土した炭化材である。07木171（No.6～11）は、鍛冶炉内から出土した炭化材で、操業時の燃料材と考えられる。

10点の炭化材は、全て広葉樹のクリに同定された。クリは二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度・耐朽性が高い。一般に重硬な木材は燃焼性が低い、クリは製炭すると柔らかく燃焼性が高い木炭になり、民俗事例ではマツ炭と共に鍛冶燃料材に利用される（岸本・杉浦 1980）。このことから、埋土1層出土及び床直上出土の炭化材も、鍛冶炉出土試料と同様クリに同定されたことから、鍛冶燃料材に由来する可能性がある。

鍛冶炉の燃料材にクリが利用されたという同定結果は、民俗事例とも調和的であり、SB4037 内で燃焼性の高いクリ炭を燃料材として利用したことが推定される。また、SB4037 は平安時代（9世紀後半から10世紀前半）と推定されていることから、民俗事例にみられる木材利用が、古代まで遡る事例としても注目される。

また中世の遺構とされる SB0131 も遺構内から鉄滓等が出土していることから鍛冶工房跡としての機能が推定されている。SB0131 試料2点は、いずれもマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は、岩場・湿地等にも生育するほか、極端に伐採が進んだ二次林としても生育し、その木材は強度が高く、構築材として適材である他、マツ炭はクリ炭と共に鍛冶用の木炭として利用される。このことから、SB0131 より出土した炭化材は、鍛冶用燃料材としての利用も推定される。ただし、SB0131（06木51）の時期については前項に記した放射性炭素年代測定で17世紀末～20世紀初頭に相当する暦年代が得られており、鍛冶用燃料材および中世の資料としての評価には課題が残る。

## 引用・参考文献

- 伊東隆夫 1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ 木材研究・資料 31』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ 木材研究・資料 32』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ 木材研究・資料 33』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ 木材研究・資料 34』 京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ 木材研究・資料 35』 京都大学木質科学研究所
- 岸本定吉・杉浦銀治 1980 『日曜炭やき師入門』 総合科学出版
- (株)古環境研究所 2001 「榛名平遺跡出土木材の樹種同定」『榛名平・坪の内遺跡群 榛名平遺跡 第Ⅳ分冊 中世・近世編』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 84 集
- (株)古環境研究所 2003 「西一本柳遺跡Ⅷにおける自然科学分析」『一本柳遺跡群 西一本柳遺跡 Ⅷ』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 109 集
- (株)古環境研究所 2004 「後家山遺跡における樹種同定」『後家山遺跡・東久保遺跡・宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 121 集
- (株)古環境研究所 2005 「佐久市西一本柳遺跡Ⅹ出土試料の自然科学分析」『西一本柳遺跡Ⅹ』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 127 集
- 島地 謙・伊東隆夫 1982 『図説木材組織』 地球社
- 長野県埋蔵文化財センター 1999 「中原遺跡群炭化材樹種」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 18—佐久市内その 4 小諸市内その 2—芝宮遺跡群・中原遺跡群』
- 林 昭三 1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』 京都大学木質科学研究所
- バリノ・サーヴェイ(株) 1988 「十二遺跡出土炭化材の樹種同定」『鑄師屋遺跡群 十二遺跡』 御代田町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ(株) 1989a 「和田原遺跡出土炭化材同定」『長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡』 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 13 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 1989b 「根岸遺跡出土炭化材の樹種同定」『鑄師屋遺跡群・根岸遺跡』 御代田町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ(株) 1989c 「広畑遺跡出土炭化材の樹種同定」『広畑遺跡』 御代田町教育委員会
- バリノ・サーヴェイ(株) 1991 「関口 A・B 遺跡出土材の樹種同定」『関口 A・関口 B・柏原遺跡群下』 小諸市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 1992 「下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告」『芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 芝宮遺跡群上高山遺跡 周防畑遺跡群下北原遺跡 近津遺跡群上宮原遺跡 下蟹沢遺跡 長土呂遺跡群上大林遺跡 長土呂遺跡群下聖端遺跡Ⅰ・Ⅱ (本文編)』 佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 9 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 1994a 「過去の植物利用について」『三子塚遺跡群 東下原・大下原 宮ノ反 A 遺跡群竹花・舟窪 大塚原遺跡群大塚原』 小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 1994b 「亀田泥炭遺跡木材の樹種」『亀田泥炭遺跡』 東総文化財センター
- バリノ・サーヴェイ(株) 1999 「松ノ木遺跡・梅ノ木遺跡から出土した木製品および種実遺体の種類」『松ノ木・梅ノ木・振矢遺跡』 群馬県新田町文化財調査報告書第 18 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 2002 「円正坊遺跡Ⅳの自然科学分析」『円正坊遺跡Ⅳ』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 102 集
- バリノ・サーヴェイ(株) 2005 「聖原遺跡の自然科学分析報告」『長土呂遺跡群聖原 第 5 分冊』 佐久市埋蔵文化財調査報告書第 126 集
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編) 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修) 1998 『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社 [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification]
- Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (編) 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修) 2006 『針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』 海青社 [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification]

第23表 樹種同定結果

管理番号	分析№ または 仮名	出土位置	取上№	時代時期	形状	状態	樹種	備考	分析機関
06木01		SB0006	1	中世	板状(板目)	炭化材	モクレン属		
		SB0006	2	中世	芯持材	炭化材	マツ属複雑管束亜属		
		SB0006	3	中世	芯持丸木	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
		SB0006	4	中世	棒状	炭化材	キハダ		
		SB0006	5	中世	芯持材	炭化材	フジキ属		
		SB0006	9	中世	芯持丸木	炭化材	スイカズラ属		
		SB0006	10	中世	芯持丸木	炭化材	スイカズラ属		
		SB0006	11	中世	芯持材	炭化材	モミ属		
		SB0006	13	中世	芯持丸木	炭化材	フジキ属		
		SB0006	15	中世	芯持丸木	炭化材	フジキ属	*	
		SB0006	24	中世	板状(板目)	炭化材	クリ		
	SB0006	28	中世	芯持丸木	炭化材	クマシデ属クマシデ節			
06木02		SB0006	34	中世	芯持材	炭化材	クマシデ属クマシデ節		
		SB0006	36	中世	板状(板目)	炭化材	モミ属		
		SB0006	38	中世	芯持材	炭化材	カエデ属	*	
		SB0006	40	中世	芯持材	炭化材	クマシデ属クマシデ節		
06木03		SB0022	1	古代		炭化材	コナラ属	当年枝	
		SB0022	2	古代		炭化材	イネ科		
		SB0022	3	古代		炭化材	コナラ属	当年枝	
		SB0022	4	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
	炭化材	SB0022	5	古代	芯持丸木(小径木)	炭化材	広葉樹		
	カヤ状	SB0022	5	古代	カヤ状	炭化物	イネ科		
06木04		SB0110	23	弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
06木05		SB0041 炉内	1	弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
06木13		SB0015 pit3		弥生後期		炭化材	ヤナギ属		
06木28		SB0067 pit3		弥生後期		炭化材	クリ	*	
06木30		SB0073 カマド内	2	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
06木31		SB0102 炉		弥生後期		炭化材	クリ	*	
06木32		SB0103	1	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*	
		SB0103	2	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
06木38		SK0235		弥生後期		炭化材	針葉樹		
06木43		SB0110 炉	1	弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
06木51		SB0131		中世	板状(板目)	炭化材	マツ属複雑管束亜属	*	
06木52		SB0131		中世	板状(板目)	炭化材	マツ属複雑管束亜属		
06木54		SB0152 pit1		古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木01		SK5002	C-1			炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*	
07木03	カヤ状	SB5032 カマド袖		古代	カヤ状	炭化物	イネ科		
07木04		SB5032 カマド		古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木09		SB5010	1		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木10		SB5010	2		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木11		SB5010	3		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木12		SB5010	4			炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*	
07木13		SB5010	5			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木14		SB5010	6		芯持丸木	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木15		SB5010	7		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木16		SB5010	8		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木17	炭化材	SB5010	9			炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
	カヤ状					炭化物	イネ科		*
07木18		SB5010	10		芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木109		SB5010	No.20下		板状	炭化材	コナラ亜属の樹皮		
07木25	炭化材 カヤ状	SB8007	3	古代	板状	炭化材	ケヤキ		
					カヤ状	炭化物	イネ科		
07木28		SB4005 カマド	4	古代	芯持丸木	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		

パリン・サーヴェイ

第5節 炭化物・木製品に関する分析

管理番号	分析No または 仮名	出土位置	取上No	時代時期	形状	状態	樹種	備考	分析機関
07木39		SB6002	炭A	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木40	カヤ状	SB6002	炭B	古代	カヤ状	炭化物	イネ科	*	
07木41		SB6002	炭C	古代	芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木42		SB6002	炭D	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木43		SB6002	炭E	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木44		SB6002	炭F	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木45		SB6002	炭G	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
07木46		SB6002	炭H	古代	芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木47		SB6002	炭I	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木48		SB6002	炭J	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木49		SB8008	炭サンプル No1	古代	板状(柀目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*	
07木50		SB8008	炭サンプル No2	古代	芯持材	炭化材	キハダ		
07木51	カヤ状	SB8007	1	古代	カヤ状	炭化物	イネ科		
07木52		SB8007	2	古代	板状(板目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木55		SK4168		古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
07木56		SB8045	13	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木57		SB8045	14	古墳	芯持丸木	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木58		SB8045	15	古墳	板状(柀目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07木59		SB8045	16	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木60		SB8045	17	古墳	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
07木61	カヤ状	SB6011	炭サンプルA	古代	カヤ状	炭化物	イネ科	*	
07木62	カヤ状	SB6011	炭サンプルB	古代	カヤ状	炭化物	イネ科		
07木69		SB6050	炭No1	古代	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木70		SB6050	炭No2	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木73		SB4040 カマド		古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木75		SB6067	2	弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木86		SK3080	No0	古墳	芯持丸木(小径木)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木91		SB6033	2	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木92		SB6033	3	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木93		SB6033	4	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木94		SB6033	5	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*	
07木96		SB6033	7	古墳		炭化材	サクラ属		
07木97		SB6033	8	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木98		SB6033	9	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木99		SB6033	10	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木100		SB6033	11	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
07木102		SB6033	13	古墳		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節		
07その他7		SB3047		古代		炭化材	広葉樹		木本?
08木01		SB7008		古代		炭化材	イネ科		
08木02	炭化材 カヤ状	SB7007		古代		炭化材	広葉樹		当年性
08木04	針葉樹 広葉樹	SB8005	1	弥生後期	板状(板目)	炭化材	サワラ		
08木05	針葉樹 広葉樹	SB8005	2	弥生後期	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
08木06	針葉樹 広葉樹	SB8005	3	弥生後期	板状(板目)	炭化材	サワラ		
08木07		SB8005	4	弥生後期	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	
08木08	a	SB8005	5①	弥生後期	(ミカン割状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
b	板状(柀目)				炭化材	サワラ			
c	(ミカン割状)				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節			
08木09		SB8005	5②	弥生後期	板状(柀目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
08木10		SB8005	6①	弥生後期	(ミカン割~板状)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		

パリン・サーヴェイ

第9章 科学分析・鑑定

管理番号	分析№ または 仮名	出土位置	取上№	時代時期	形状	状態	樹種	備考	分析機関	
08木11		SB8005	6②	弥生後期	板状(紐目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		バリノ・サーヴェイ(株)	
08木12		SB8005	7	弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木17		SK7782		平安		炭化材	広葉樹(環孔材)			
08木18		SB7035 Pit6	1	古代	芯持材	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節			
08木18		SB7035 Pit6	2	古代	芯持丸木	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節			
08木19		SB7035 Pit7	1	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木20		SB7035 Pit7	2	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木21		SB7035 Pit8		古代	板状(紐目)	炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木23		SB7055	1	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木24		SB7055	2	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木26		SB7055	4	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木27		SB7055	5	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節			
08木28		SB7055	6	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節	*		
08木29		SB7055	7	古代		炭化材	コナラ属コナラ亜属クスギ節			
08木31		SB7055	9	古代		炭化材	イネ科			
	炭化材	SK0005		中世	漆器椀	炭化材	ヒノキ科			
	1	SK0005 井戸底付近湧水中			板状	生木	ヒノキ科	先端加工		
	2				板状	生木	ヒノキ科	先端加工・一部炭化		
	3				木片	炭化材	ヒノキ科			
	4				木片	炭化材	ヒノキ科			
	5				木屑	生木	ヒノキ科			
6			木屑		生木	ヒノキ科				
06土28			SB0110 炉2内	土サンプル	弥生後期	破片	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節		微細物分析の抽出物
06土31		SB0165 カマド	土サンプル	平安	破片	炭化材	サワラ			
	破片				炭化材	オニグルミ				
06土33		SB0136 カマド	炭	平安時代	破片	炭化材	サクラ属			
	破片				炭化材	サクラ属				
06土35		SK0054	炭サンプル	時期不明	丸木状	炭化材	イネ科			
06土36		SK0196	炭サンプル	時期不明	丸木状	炭化材	イネ科			
06木70	No1	SB0110 pit9		弥生後期		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	*	(株)加速器分析研究所	
	No2					炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節			
07木125	No3	SB4037 埋土1層		平安		炭化材	クリ	*		
	No4					炭化材	クリ			
07木129	No5	SB4037 埋土1層		平安		炭化材	クリ			
07木171	No6	SB4037 鍛冶炉		平安		小片	炭化材	クリ		*
	No7					小片	炭化材	クリ		
	No8					小片	炭化材	クリ		
	No9					小片	炭化材	クリ		
	No10					小片	炭化材	クリ		
	No11					小片	炭化材	クリ		
07木185	No12	SB4037 床直上		平安		炭化材	クリ			

\*放射性炭素年代測定試料

(バリノ・サーヴェイ、加速器分析研究所のデータを編集した)

第24表 時代別樹種構成

時代	遺構種別	用途	遺構名	種類													イネ科	合計												
				(木本)					広葉樹																					
				マツ属	スギ属	ヒノキ	サワラ	モミ属	不明	ヤナギ属	クマシデ属	クスギ属	コナラ属	コナラ属	コナラ属	コナラ属	ケヤキ	モクレン属	サクラ属	フジキ属	キハダ	カエデ属	スイカズラ属	環孔材	不明					
弥生時代後期	堅穴住居跡	住居構築材	SB8005			5						1	8															14		
			その他								1		1																3	3
	燃料材	SB0110											3																3	
		SK0235																									1	4	1	
古墳時代	堅穴住居跡	住居構築材	SB5010									8	2	1														1	12	
			SB6033										2	7							1									10
	大型土坑	SB8045											2	3															5	
		SK3080													1														1	
古代	堅穴住居跡	住居構築材	SB6002												9													1	10	
			SB7035											3	2															5
			SB7055											5	1														1	7
			その他			1								2					1		2		1				2		6	15
			炭範囲	SB0022										1		2											1		2	6
	燃料材	SB4037													10													1	10	
		SK5002													3	6												1	10	
土坑	炭化物層	SK5002												1														1		
		SK7782																								1		1		
中世	堅穴状遺構		SB0006			1	2									3		1		1		3	1	1	2			16		
			SB0131			2																							2	
	井戸跡	SK0005																							7			7		
合計						3	2	6	7	1	0	1	3	26	56	6	0	3	1	1	3	3	2	1	2	1	3	12	143	

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

### 3. 微細物分析・種実同定

#### (1) 分析の目的

遺跡内で利用された食糧の種類、燃料材など、遺跡内の生活環境を明らかにするために微細物分析・種実同定を行った。

なお SB5006 の試料については、カマドからの採取灰であり、微細物分析で骨片が確認できたため、食糧として利用された動物の種など、食糧の種類をより詳しく明らかにできると期待し、骨同定も行った。

#### (2) 対象資料

**微細物分析** 超大型竪穴住居跡（SB0067、SB0110）を含む弥生時代後期の竪穴住居跡の炉内堆積物、古墳時代、古代の竪穴住居跡カマドやカマド周辺ピット、柱穴内の灰層、中世の竪穴状遺構の炭化物層、大型土坑および井戸跡から採取された土壌を対象試料とした。

SB0067 炉 2・3・4、SB5047 炉内 3 層灰、SB5022 カマド 5 層、SB7071 カマド内灰の 6 点の試料は、大型土坑 SK6062 5 層・SK6063 4 層（炭化材等が多く混じる層）の微細遺物の産状を比較する参考試料として分析した。

SK6062 5 層、SK6063 4 層の試料とその参考試料、SB0110、SB0164、SB0165、SB0136、SB5006、SK0054、SK0196 の試料は同時に植物珪酸体分析も行っている。詳細は次節に記す。

**種実同定** 樹種同定用試料に含まれる種実試料、井戸跡 SK0005 から採取した土壌内に含まれる種実試料を対象試料とした。

**骨同定** SB5006 カマド灰層の微細物分析の際に確認された骨片を対象に骨同定を行った。

#### (3) 分析の方法

微細物分析・種実同定・骨同定の分析はバリノ・サーヴェイ(株)に委託した。

**微細物分析** 試料を容器に広げ、常温で数日乾燥させる。乾燥後の試料を肉眼やルーペで観察し、炭化物や動物遺存体、土器を拾い出す。乾燥抽出後の試料はフローテーションを行い、粒径 0.5mm の篩に炭化物を回収する。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別に集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定可能な種実や炭化材を抽出する。

なお SK0005、SB0110、SB4037 の土壌試料を微細物分析した際に抽出された木片、炭化材は、樹種同定を行っている。詳細は本節 2 に記した。

**種実同定** 微細物分析で抽出した種実は双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。SB0070 ピット内（06 土 25）、SB3045 カマド（07 土 289）は、炭化または灰化したイネの穎が多量確認されたが、脆く抽出時に破壊するため、シャーレ内で基部の果実序柄の数を数えて表示する。

**骨同定** 微細物分析で骨片を抽出する。肉眼およびルーペで観察し、その形態的特徴から種と部位を同定する。

#### (4) 分析結果

**植物質食料と燃料材** 微細物分析の結果、弥生時代後期の超大型竪穴住居跡（SB0067、SB0110）を含む竪穴住居跡、SB0004、SB6028 の炉からは栽培植物のイネの穎とともに可食部となる胚乳が検出された。

古墳時代および古代については、微細物分析と種実同定の結果、多くの住居跡で、イネ、アワ、ヒエ、マメ類、エゴマ等がみつまっている。特にイネおよびその胚乳はほとんどの住居跡から確認できる。

なおSB5010の多量確認されたマメ類については、カマドやピット等の灰層に伴う試料と出土状況が異なることから、量比の比較については今後の課題である。

古代の大型土坑SK6062・SK6063については、微細物分析の結果、埋土に炭化物が多く混じる土層(SK6062 5層、SK6063 4層)から、炭化したイネの穎やアカザ科、アカネ科の種実、クヌギ節やコナラ節、サクラ属、トネリコ属の炭化材、さらに微量の焼骨が検出された。種実は人里の雑草として普通にみられる種類であり、炭化材に確認された分類群は2次林や河畔林を構成する種類を含む。

比較対照として調査を行った堅穴住居跡(SB0067、SB5022、SB5047、SB7071)の炉・カマドでは、炭化したイネの穎や胚乳、ヒエ近似種、イネ科、アカネ科の種実、クヌギ節やコナラ節などの炭化材、魚類や鳥類、哺乳類の焼骨が検出された。

種実や炭化材、動物依存体の検出状況が比較的良好であった弥生時代後期の超大型堅穴住居跡SB0067の炉や平安時代の堅穴住居跡SB5022のカマドとSK6062 5層やSK6063 4層とを比較すると、栽培植物のイネの穎とともに可食部となる胚乳の検出という特徴が指摘される。

これらのことから弥生時代後期から古代にかけて、イネを主体とし、ヒエ、アワ、等の栽培植物を食糧に利用していたと推測できる。

また、燃料材については、大型土坑の炭化微細物の検出状況からわかるように、栽培植物のイネや遺跡周辺に生育した草本・樹木などが燃料材として利用されたと考えられる。

中世については、SK0005の試料を種実同定した結果、井戸底付近から検出された種実は大部分が栽培植物であり、イネの穎、胚乳が多く検出された。栽培植物は、イネの穎や胚乳をはじめとして、アワ、ヒエ、キビ近似種、コムギ、ムギ類の胚乳、マメ類の種子が検出された。これらの種実は、いずれも炭化が認められたことから、利用時に被熱の影響を受けたことが推測される。

中世の堅穴状遺構であるSB0006炭化物層(06土13)では、微細物分析において、イネの穎や胚乳、アワ(近似種)、ヒエ(近似種)、キビ(近似種)、ムギ類等の栽培種と、栽培種の可能性があるマメ科が検出された。これらの植物質食糧の利用が示唆されるとともに、弥生時代後期および古代の各試料と比較して検出される分類群が多いという傾向が窺われる。栽培種を除く分類群では、イネ科やホタルイ属、カヤツリグサ科、タデ属、スベリヒユ科、アカザ科等が検出された。これらは、いずれも明るく開けた場所を好むことから、遺跡周辺の草地環境を反映すると考えられ、ホタルイ属は周辺の水湿地等に生育した植物に由来すると考えられる。

また、時期不明とされる土坑SK0054は、イネの穎と胚乳、および多量のアワ、ヒエ、キビの胚乳に、イネとマメ類が伴うという特徴を示した。種実構成としては中世の堅穴状遺構SB0006と類似する。

**SB5006 カマド灰層の骨片** 古墳時代の堅穴住居跡SB5006のカマド灰層内から検出した骨片を同定した結果、コイ科の胸鰭棘片が1点、サケ目の椎骨片が1点、魚類(種類不明)の鰭棘片が3点、鳥綱(種類不明)の左手根中手骨近位端片1点、鳥綱部位不明破片7点、獣類の頭蓋片1点、獣類部位不明破片4点が確認される。他22点の骨片が確認されたが、種類および部位ともに不明である。

いずれも微細な破片であるが、白色を呈し、焼骨の特徴を示す。このことから、食料等として利用された後の残滓がカマド内に廃棄されたことが推定される。魚類については、コイ科、サケ目など淡水性の魚類であることから遺跡周辺を流れる河川などより漁獲したと考えられ、周辺の山野などに棲息したとみられる鳥類や獣類も食料として利用されたと考えられる。

引用・参考文献

石川茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』 石川茂雄図鑑刊行委員会

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会

第25表 微細物分析結果 (1)

時代			弥生後期					古墳時代	古墳時代以降	古代					
遺構・地点・層位			SB0033 炉1	SB0155 炉内	SB0004 炉内	SB0036 炉 土器内側	SB7067 炉体内土	SB6028 炉1内	SK3080	SK6293	SB0051 カマド 覆土	SB0164 pit1 1層	SB0164 pit1 4層	SB0137 カマド 4層	SB0141 カマド内
分類群	部位	状態	06±06	06±08	06±12	06±22	08±14	07木64	07±370	07±235	06±07	06±10	06±11	06±18	06±19
<炭化/炭化の可能性がある分類群>															
<木本類>															
オニグルミ															
アカマツ	葉・先端	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<草本類>															
イネ	穎・基部	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	83	-	-
		破片	-	-	1	-	-	-	-	-	-	39	53	-	1
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	1	-	-	-	1	4	-	3	3	-	-
アワ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
ヒエ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-
キビ近似種	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オオムギ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ムギ類	胚乳	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
コムギ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ホタルイ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
テンツキ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	3	-	6	-	-	-
タデ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スベリヒユ科	種子	完形	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	1	-	2	3	1	-	-	-
マメ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
<炭化が認められない分類群>															
グンバイナズナ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	種子	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明炭化物	[g]		<0.01	-	<0.01	<0.01	15.40	<0.01	<0.01	0.07	-	0.01	0.<0.01		
炭化材	[g]		0.39	0.99	0.44	0.03	0.09	0.30	0.02	0.04	0.05	0.66	0.05	1.54	0.01
	最大 [mm]		6.1	11.2	11.6	5.3	7.9	12.6	3.8	3.7	3.4	9.1	4.6	7.3	3.4
炭化物主体残渣	[cc]		-	-	-	-	8.0	-	-	-	-	-	3.0	3.0	-
動物遺存体	[g]		0.11	9.99	0.17	1.36	-	0.01	-	-	<0.01	0.05	-	<0.01	0.02
	最大 [mm]		7.9	18.7	6.9	24.5	-	5.1	-	-	1.7	7.8	-	0.9	5.5
土器	[個]		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
砂礫主体残渣	[g]		62.94	118.90	110.43	63.63	52.07	14.47	124.74	43.45	95.42	65.94	69.01	42.40	104.93
分析量	[g]		354.89	500.02	500.22	400.66	500.43	206.11	502.26	504.36	500.89	500.67	501.53	509.90	503.26

第26表 微細物分析結果 (2)

時代			古代						古代(奈良)	中世	時期不明				
遺構・地点・層位			ST7001 pit9	SB313 カマド内 灰	SB3045 カマド	SB3056	SB5006 カマド内	SB5035	SB6030 カマド 灰層(4層)	SB0070 pit1内	SB0006 炭化物層	SK4235 2層	SK4235 4層	SK4235 10層	SK4235 17層
分類群	部位	状態	08±18	06木21	07±289	07±290	07±328	07±329	08±05	06±25	06±13	07±366	07±367	07±368	07±369
<炭化/炭化の可能性のある分類群>															
<木本類>															
オニグルミ															
アカマツ	葉・先端	破片	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
-----															
<草本類>															
イネ	穎・基部	破片	-	3	14	18	-	-	-	169	73	-	-	-	1
		破片	-	-	309	130	-	1	-	88	67	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	1	-	12	8	-	-	-	-
		破片	-	-	36	2	-	-	-	87	7	-	-	-	-
アワ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-
ヒエ近似種	穎・胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-
	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-
キビ近似種	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
オオムギ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
ムギ類	胚乳	破片	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
コムギ	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
イネ科	胚乳	完形	-	-	-	-	-	-	-	29	25	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
ホタルイ属	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
テンツキ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ属	果実	完形	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-
タデ属	果実	完形	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
スベリヒユ科	種子	完形	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アカザ科	種子	完形	2	1	10	-	1	-	-	-	11	1	-	-	-
		破片	3	-	37	-	-	1	-	1	13	-	-	-	-
マメ科	種子	完形	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
		破片	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
<炭化が認められない分類群>															
グンバイナズナ	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科	種子	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キク科	果実	完形	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
不明炭化物	[g]		-	<0.01	<0.01	<0.01	-	-	-	-	0.08	<0.01	-	0.01	<0.01
炭化材	[g]		0.04	0.05	0.22	0.01	0.01	0.04	-	0.01	1.22	0.01	<0.01	<0.01	0.01
	最大 [mm]		7.2	7.5	8.6	2.3	2.9	7.4	-	5.2	12.7	3.1	3.7	2.4	3.4
炭化物主体残渣	[cc]		-	-	2.8	1.0	1.2	9.0	-	1.0	-	-	-	-	-
動物遺存体	[g]		-	0.02	-	-	<0.01	-	0.03	-	<0.01	-	-	-	-
	最大 [mm]		-	4.4	-	-	4.5	-	4.4	-	2.8	-	-	-	-
土器	[個]		-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
砂礫主体残渣	[g]		35.82	63.56	51.47	21.34	85.42	91.45	7.01	37.40	70.58	17.90	63.50	201.89	153.38
分析量	[g]		150.61	301.14	500.22	100.34	503.53	500.65	52.54	504.13	500.34	70.62	150.18	503.30	301.02

第27表 微細物分析結果 (3)

時代				弥生後期				古代					
遺構・地点・層位				SB0067		SB5047	SK6062		SK6063	SB5022	SB7071		
分類群	部位	状態		炬2炭・灰層	炬3炬体土器内土	炬4炬内土	炬内3層	5層	4層	カマド5層	カマド内灰		
				06±23	06±05	06±24	07±330	07±22	07±23	07±129	07±130	07±325	08±17
種実遺体													
イネ	穎 (基部)	破片	炭化	13	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		破片	炭化	-	2	-	-	-	-	2	-	-	-
	胚乳	完形	炭化	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒエ近似種	胚乳	破片	炭化	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-
		完形	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
イネ科	胚乳	完形	炭化	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
アカザ科	種子	完形	炭化	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
		完形	炭化	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカネ科	核	破片	炭化	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-
		完形	炭化	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
炭化材													
コナラ亜属クヌギ節				1	-	-	-	-	1	-	-	1	-
コナラ亜属コナラ節				-	3	-	3	-	1	-	1	1	-
サクラ属				-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属				-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
広葉樹				2	-	3	-	1	-	2	-	1	1
樹皮				-	-	-	-	-	1	-	2	-	-
		重量 [g]		0.28	0.29	0.01	0.43	0.01	0.08	0.04	0.10	3.80	0.01
		最大径 [mm]		10	15.5	4	10.5	5	8	4.5	6.5	18	5.5
動物遺存体													
魚綱	椎骨	破片	焼骨	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
		破片	焼骨	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
鳥綱	四肢骨	破片	焼骨	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
		指骨	完形	焼骨	2	-	-	-	-	-	-	-	-
哺乳類綱	肋骨／四肢骨	破片	焼骨	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-
		不明	焼骨	2	2	-	-	-	-	-	-	7	-
脊椎動物門	不明	破片	焼骨	8	12	-	3	-	-	2	-	13	9
		重量 [g]		0.08	0.10	-	<0.01	-	-	<0.01	-	3.12	0.02
		最大径 [mm]		11.50	10.00	-	3.50	-	-	1.00	-	29.00	4.00
その他													
菌核				-	-	-	-	-	-	-	-	-	10
不明炭化物				+	+	-	-	+	+	+	-	+	-
昆虫				-	-	-	+	-	-	-	-	-	-
土器	個数			-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
		重量 [g]		-	1.45	-	-	-	-	-	-	-	-
		最大径 [mm]		-	22	-	-	-	-	-	-	-	-
高師小僧				-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
分析残渣													
植物片含む	土粒・岩片等	重量 [g]		0.33	0.88	-	0.46	0.66	0.14	0.68	0.26	1.99	0.38
		重量 [g]		19.25	18.43	36.87	16.14	27.71	30.89	24.11	20.19	11.28	12.14
分析量				150.11	150.37	150.58	150.27	150.59	150.36	150.65	150.48	150.16	150.56

第28表 微細物分析結果 (4)

時代				弥生後期		古代		古代(平安)	古代		時期不明	時期不明	古代
遺構・地点・層位				SB0110		SB0164		SB0165	SB0136		SK0054	SK0196	SB5006
分類群など	部位	状態		pit4土	炬2内	pit1	pit1	カマド土	カマド内炭		炭	炭	カマド灰層
				06±27	06±28	06±29	06±30	06±31	06±32	06±33	06±35	06±36	07±332
<種実遺体>													
木本	オニグルミ	核	破片	炭化	-	-	-	-	-	-	-	-	-
					-	-	1	2	-	-	-	-	-
草本													
イネ	胚乳	完形	炭化	-	8	-	-	-	-	-	-	-	1
				破片	炭化	-	-	-	-	-	-	14	6
アワ-ヒエ-キビ	胚乳	完形	炭化	-	-	-	-	-	-	-	33	9	-
				破片	炭化	-	-	-	-	-	-	693	-
マメ類	種子	完形	炭化	-	-	-	-	-	-	-	88	-	-
				破片	炭化	-	-	-	-	-	-	1	-
アカザ科	種子	-	-	-	-	-	-	-	5	16	-	-	
<その他>													
骨片				[g]	-	0.01	-	-	-	-	-	-	1.04
炭化材				[g]	0.19	1.69	0.29	0.10	0.20	-	0.19	0.01	0.10
土器				[g]	-	-	-	-	-	-	-	-	2.00
残渣				[g]	204.8	43.8	126.3	169.5	42.1	57.7	279.0	105.0	309.2
分析量				[cc]	500	100	500	500	150	200	900	250	39
				[g]	831	164	787	872	217	297	1274	412	42

第29表 種実同定結果

管理番号	遺構	時期	地点	分類群	部位	状態	数量 (個)	重量 (g)	備考	
06木64	SK0325	弥生後期以降		オニグルミ	核	破片	4	-		
07木19	SB5010	古墳時代		イネ	胚乳	完形	4	-		
				アワ近似種	胚乳	完形	6	-		
				マメ類		完形	848	-	107個臍確認 43個初生葉確認 (アズキグループ)	
					半分	315	-			
					種子	破片	472	-		
				エゴマ	果実	破片	1	-		
				炭化材			-	3.13	最大24.2mm	
				昆虫			2	8.93		
残渣			-	8.93	炭化材主体：φ1mm					
			-	16.72	炭化材主体：φ0.5mm					
			-	13.12	砂礫主体：φ1mm					
			-	57.63	砂礫主体：φ0.5mm					
07木21	SB8003	古代		オニグルミ	核	破片	139	-	計1個体未満	
07木30	SB4037	古代(平安)	カマド	オニグルミ	核	完形	32	-		
07木32	SB5002	古代(平安)	カマド内	モモ	核	完形	1	-	食痕、長さ20.78mm、 幅14.99mm、厚さ10.19mm	
	SK0005井戸跡	中世	井戸底付近湧水中	イネ	種子	破片	4	-		
					胚乳	炭化	7	-		
					穎	炭化破片	8	-		
				キビ近似種	胚乳	炭化	2	-		
				コムギ	胚乳	炭化	5	-		
				ムギ類	胚乳	炭化	5	-		
				マメ類	種子	炭化	1	-		
				井戸底付近 植物繊維集中	イネ	胚乳	炭化	41	-	
						穎	炭化破片	50	-	
					アワ・ヒエ	胚乳	炭化	15	-	
			マメ類		種子	炭化	1	-		
			ホタルイ属		果実		1	-		
			アカザ科		種子		2	-		
			キク科		果実		1	-		
			種実用	イネ	胚乳	炭化	6	-		
				アワ・ヒエ	胚乳	炭化	2	-		
				ムギ類	胚乳	炭化	2	-		
				カヤツリグサ科	果実		1	-		
				アカザ科	種子		3	-		
				ブドウ科	種子		1	-		

樹種同定試料中の種実試料

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

## 第6節 土壌に関する分析

土壌に関する分析では、植物珪酸体分析、灰像分析、花粉分析、珪藻分析、リン酸・腐食分析を行った。詳細は以下に記す。

なお、古代の大型土坑4基（SK6062、SK6063、SK8149、SK8210）の土壌試料は、埋土観察面において垂直、水平方向に約5cm単位で規則的に採取したものである。この土坑の土壌試料に限り、管理番号とは別に試料番号を付けている。分析結果はこの試料番号を用いている。試料番号と層位、管理番号との対照は分析試料一覧（第30表）に示す。なお、植物珪酸体分析は複数年にわたり委託した結果をまとめているため、統一的な管理番号に置き換えている（第31～34表）。

### 1. 土壌分析

#### (1) 分析の目的

遺跡周辺の環境や、遺跡内での植物利用の様相を明らかにするため、弥生時代後期から古代・中世の遺構から採取した土壌の分析を行った。

古代の大型土坑については、その利用および埋没状況を明らかにするため、珪藻分析、花粉分析を実施した。特にSK8149とSK8210は、覆土中より大型獣類の骨片や土器が出土しており、土坑機能の転用が推定された。埋納物の有無の検討のため、リン酸・腐食分析も行った。

#### (2) 対象資料

**植物珪酸体分析** 弥生時代後期の大型竪穴住居跡（SB0110）のピットや炉内から採取された土壌、古墳時代や古代の住居跡のカマドから採取された土壌、古代の大型土坑4基（SK6062、SK6063、SK8149、SK8210）の各遺構確認面から土坑底部まで連続して採取された土壌および比較試料の土坑底面や壁面を構成する堆積物を対象試料とした。

**灰像分析** 弥生時代後期の竪穴住居跡の炉内堆積物や、古代の竪穴住居跡のカマドやカマド周辺ピット、柱穴内の灰層、中世の竪穴状遺構の炭化物層、大型土坑および井戸跡埋積物から採取された土壌など27点を対象試料とした。

本試料はSB0156（06土09）、SB0141床下ピット6（06木09）を除いて、微細物分析を同時に行っている。詳細は前項に記した。

**珪藻分析** 古代の大型土坑4基（SK6062、SK6063、SK8149、SK8210）の各遺構確認面から土坑底部まで連続して採取された土壌および比較試料の土坑底面や壁面を構成する堆積物、古代の井戸跡の下部から採取された土壌SK4235 17層（07土369）を分析対象とした。

本試料はSK4235 17層の試料を除いて、植物珪酸体分析を同時に行っている。

**花粉分析** 古代の大型土坑2基（SK6062、SK6063）の各遺構確認面から土坑底部まで連続して採取された土壌および比較試料の土坑底面や壁面を構成する堆積物、中世の井戸跡（SK0005、SK0031）から採取した土壌を対象試料とした。

古代の大型土坑の試料については、植物珪酸体分析、珪藻分析を同時に行っている。また大型土坑の試料で、SK6062 5層（07土22、23）、6063 4層（07土129、130）は種実同定を同時に行っている。詳細は前項に記した。

**リン酸・腐食分析** 古代の大型土坑2基（SK8149、SK8210）の各遺構確認面から土坑底部まで連続して

採取された土壤を対象試料とした。

本試料はSK8149 6層 (07 土 342)、12層 (07 土 349)、SK8210 1層 (07 土 353、358) の4試料を除いて、植物珪酸体分析、珪藻分析を同時に行っている。

### (3) 分析の方法

**植物珪酸体分析** 各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集して乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量（第 31～34 表）で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個/g 未満は「<100」で表示する。

**灰像分析** 植物珪酸体分析と同様の手法を用いて、植物珪酸体含量と植物珪酸体を含む珪化組織片の産状を確認する。分析結果は第 35・36 表に示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示し、100 個/g 未満は「<100」で表示する。

**珪藻分析** 試料を湿重で 7g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法（4 時間放置）の順に物理・化学処理を施し、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈して乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入し、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986・1988・1991a・1991b）、渡辺ほか（2005）、小林ほか（2006）、Witkowski et al.（2000）などを参照し、分類基準は、Round, Crawford & Mann（1990）に従う。壊れた珪藻殻の計数基準は、柳沢（2000）に従う。

同定結果は、中心類（Centric diatoms; 広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け、羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms：広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms：広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また、有縦溝類は、単縦溝類、双縦溝類、管縦溝類、翼管縦溝類、短縦溝類に細分する。

各種類の生態性は、Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか、塩分濃度に対する区分は Lowe（1974）に従い、真塩性種（海水生種）、中塩性種（汽水生種）、貧塩性種（淡水生種）に類別する。貧塩性種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料は、産出率 2.0% 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり、海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）は小杉（1988）、淡水生種（貧塩性種）は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

**花粉分析** 試料を 10g 程度秤量し、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス（無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液）処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣の一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、検鏡を行う。結果は同定・計数結果を第 37 表に示す。

**リン酸・腐食分析** リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、腐植含量はチューリン法（土壤標準分析・測定法委員会 1986）でそれぞれ行う。

試料を風乾後、2mmの篩でふるい分けし、風乾細土試料とする。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

リン酸分析は、粉碎土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸（ $\text{HNO}_3$ ）約 5ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（ $\text{HClO}_4$ ）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ $\text{P}_2\text{O}_5$ ）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（ $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）を求める。

腐植含量は、粉碎土試料 0.100 ～ 0.500g を 100ml 秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を加え、約 200℃ の砂浴上で 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土 %）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

#### (4) 分析結果

**遺跡周辺の植生および植物資源利用** 弥生時代後期から古代の竪穴住居跡、土坑の植物珪酸体分析では、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などの分類群が検出され、特にススキ属を含むウシクサ族の含量が高いという傾向が確認された。

ススキは多年生の草本類で、開けた明るい場所に先駆的に侵入して草地を形成することから、遺跡周辺の丘陵上にはススキを主体とする草地が広がっていたと考えられる。このような植生は、自然災害によって、本来地表を覆っていた植生が失われた場合に生じることもあるが、本遺跡では弥生時代後期以降の多くの遺構が確認されていることから、集落などの形成に伴う植生干渉の結果生じたと考えられる。なお、このような草地は自然状態では長期にわたって存在することは稀であり、早い段階で低木が侵入し森林へと変化していく（乾性遷移）。そのため、草地を維持するためには、定期的な植生干渉が必要となる。植生干渉の一例として、資材としてのススキや、狩り場としての草地の維持、病害虫の駆除を目的として古くから行われている火入れなどがある。土壌中に多く見られるススキ属の植物珪酸体や微粒炭は、火入れにより長期にわたり草原が維持されてきた結果であるとする説もある（松井・近藤 1992）。

検出された植物珪酸体では、ススキ属ほか、タケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科なども認められた。これらは調査地周辺のイネ科植生を反映していると思われ、開けた場所などにはススキ属などが、水湿地など湿潤な場所にはヨシ属がそれぞれ生育していたと考えられる。

また古代の大型土坑埋土からは、栽培植物のイネ属の葉や籾に由来する植物珪酸体や、組織片（珪酸体が組織内に列をなした状態）が検出された。このことから、資材等に利用された稲藁や稲籾などの植物体、あるいは、これらを燃料材として使用した焼灰が土坑埋土中に混入していると考えられる。本節 4 に記した住居跡の炉やカマドの試料を微細物分析、種実同定した結果からも、炭化したイネの穎などが検出されており、本分析と同様の分析結果が得られている。

なおイネ属の植物珪酸体は、多くの試料より検出されたが、含量やその層位的変化は遺構毎にまちまちであり、SK6062 は 3 層（07 ± 15）・4 層（07 ± 20）、SK6063 は 4 層（07 ± 129）、SK8210 は埋土下部に相当する試料（07 ± 361 ～ 363）で含量が高くなるという特徴が確認された。

花粉分析の結果では、大型土坑の埋土からは花粉化石はほとんど検出されず、残渣のほとんどは微粒炭

であった。残渣の状況や上述した珪藻分析結果を考慮すると、好氣的環境下にあり花粉化石の大部分は分解・消失したと推定される。

**大型土坑の埋没状況** 大型土坑の埋土の珪藻分析の結果、化石が産出した大部分の試料において陸生珪藻が優占し、とくに耐乾性の強い A 群の *Hantzschia amphioxys* や *Luticola mutica* の多産が確認された。比較対照とした古代の井戸跡と推定される SK4235 17 層も、大型土坑と同様に陸生珪藻の優占および耐乾性の強い陸生珪藻 A 群の *Hantzschia amphioxys* や *Luticola mutica* の多産が認められた。これらの群集組成を考慮すると、土坑内は常時滞水するような環境ではなく、好氣的環境下にあったことや、土坑壁面から崩落した土砂や周辺の表層土壌などが埋積したことなどが推定される。

各遺構の珪藻化石群集の比較では、SK6062・SK6063 では低率ながら水生珪藻が伴ったのに対し、SK8149・SK8210 は陸生珪藻がより高い割合を示した。また、各遺構の試料間の比較では、覆土最下部で水生珪藻の割合がやや高くなる状況 (SK6062 9 層:07 土 30、10 層:07 土 32、SK8210 3 層:07 土 364) や、炭化物が多く混じる土層で水生珪藻の割合が高くなる状況 (SK6062 5 層:07 土 22、SK6063 4 層:07 土 129) が認められた。

SK6062 埋土では、*Cocconeis scutellum* が低率ながらも連続的に検出された。本種は、海水～汽水生種で塩分濃度 35～12‰の海域で海藻(草)に付着して生育する海水藻場指標種(小杉 1988)とされ、水質の富栄養化や塩類の増加などでは出現しない種である。本種の検出については、海成層などからの混入の可能性もあるが、現段階では明確な要因は不明である。

SK6063 4 層や SK8210 3 層では、水生珪藻の割合が高くなるという特徴とともに、水湿地などに生育する分類群を含むヨシ属やチゴザサ属の植物珪酸体含量が高い値を示すという特徴が指摘される。これらの産状や珪化組織片の検出状況などを考慮すると、土坑周辺より土壌と由来の異なる水湿地性の堆積物が埋積していることなどが想定される。

なお、今回と同様の大型土坑を対象とした分析調査として、上横田 A 遺跡(栃木県宇都宮市)の古代の大型(円形有段)土坑を対象とした事例がある。これらの分析結果においても、陸生珪藻が優占するという特徴が認められたことから、埋土は全般的に大気に曝された好氣的環境下で堆積したことが推定されている(パリーノ・サーヴェイ(株)1996)。上記した大型土坑の発掘調査所見や分析結果を比較すると、本遺跡の大型土坑覆土中に炭化物が混じる土層が確認されること、土坑埋土は陸生珪藻の多産、優占によって特徴付けられることなどの共通点が見出される。ただし、遺構の機能や性格、利用状況については、SK6063 4 層や SK8210 3 層を除き、珪藻化石群集に有意な変化や特徴が確認できないため、その特定には至らない。

リン・腐植分析の分析結果では、SK8149 は SK8210 に比べ全体的にリン酸および腐植含量が高いという特徴が認められたが、各遺構の試料は腐植含量とリン酸含量は相関する関係にあることから、土壌中に含まれるリン酸は腐植に由来する可能性が高い。また、各土坑ともに覆土上部に相当する試料でリン酸が高くなる状況が指摘されるが、今回の分析調査結果からは有意差として評価することは難しく、後代の施肥などの影響も考えられる。

**中世の井戸跡** 中世の井戸跡(SK0005・SK0031)からは、花粉化石はほとんど検出されず、保存状態も悪かった。わずかに検出された種類では草本花粉が多く、イネ科やクワ科、アカザ科、セリ科、ヨモギ属等が確認された。

引用・参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』 42
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』 6
- 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』 27
- 小林 弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲 保・長田啓五 2006 『林弘珪藻図鑑 第1巻』(株)内田老鶴圃
- 近藤錬三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』 48
- 土壤標準分析・測定法委員会編 1986 『土壤標準分析・測定法』 博友社
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998 『埼玉の藻類 珪藻類』埼玉県植物誌』 埼玉県教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1996 「第6章 理化学分析」『砂田東遺跡・上横田A遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第176集
- 松井 健・近藤鳴雄 1992 『土の地理学－世界の土・日本の土－』 朝倉書店
- 柳沢幸夫 2000 「II-1-3-2- (5) 計数・同定」『化石の研究法—採集から最新の解析法まで—』 化石研究会 共立出版株式会社
- 渡辺仁治・浅井一規・大塚泰介・辻 彰洋・伯耆晶子 2005 『淡水珪藻生態図鑑』 内田老鶴圃
- Krammer, K., 1992 PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1. Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2. Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae. 3. Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae. 4. Teil: Achnantheaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248p.
- Lowe, R. L., 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747p. Cambridge University Press, Cambridge.
- Vos, P. C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.
- Witkowski, A., & Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D., 2000, Iconographia Diatomologica7. Diatom flora of Marine coast I. A. R. G. Gantner Verlag K. G., 881p.

第30表 土壌分析試料一覧

遺構名	層名	試料		備考	分析項目					
		試料番号	管理番号		珪藻	花粉	植物珪酸体	灰象分析	種実	リン/腐植
SB0004	炉内		06±12		-	-	-	●	-	-
SB0006	炭化物層		06±13		-	-	-	●	-	-
SB0033	炉1		06±06		-	-	-	●	-	-
SB0036	炉		06±22		-	-	-	●	-	-
SB0051	カマド		06±07		-	-	-	●	-	-
SB0067	炉2		06±23	土器転用炉	-	-	-	-	●	-
	炉3		06±05	土器転用炉	-	-	-	-	●	-
	炉4		06±24	土器転用炉	-	-	-	-	●	-
SB0070	pit1内		06±25		-	-	-	●	-	-
SB0110	pit4		06±27		-	-	-	-	-	-
	炉2内		06±28		-	-	-	●	-	-
SB0136	カマド内炭		06±32		-	-	-	●	-	-
			06±33		-	-	-	●	-	-
SB0137	4層		06±18		-	-	-	●	-	-
SB0141	カマド内		06±19		-	-	-	●	-	-
	床下		06木09		-	-	-	●	-	-
SB0155	炉内		06±08		-	-	-	●	-	-
SB0156			06±09		-	-	-	●	-	-
SB0164	pit1 1層		06±10		-	-	-	●	-	-
	pit1 4層		06±11		-	-	-	●	-	-
	pit1		06±29		-	-	-	●	-	-
	pit1土		06±30		-	-	-	●	-	-
SB0165	カマド		06±31		-	-	-	●	-	-
SB0313	カマド内		06木21		-	-	-	●	-	-
SB3045	カマド		07±289		-	-	-	●	-	-
SB3056			07±290		-	-	-	●	-	-
SB5006	カマド灰層		07±332		-	-	-	●	-	-
	カマド内		07±328		-	-	-	●	-	-
SB5022	カマド5層		08±325		-	-	-	●	-	-
SB5035			07±329		-	-	-	●	-	-
SB5047	炉内3層		07±330	土器転用炉	-	-	-	-	●	-
SB6028			07木64		-	-	-	●	-	-
SB6030	4層		08±05		-	-	-	●	-	-
SB7067	炉		08±14		-	-	-	●	-	-
SB7071	カマド内灰		08±17		-	-	-	-	●	-
ST7001	pit9		08±18		-	-	-	●	-	-
SK0005					-	●	-	-	-	-
SK0031					-	●	-	-	-	-
SK0054	炭		06±35		-	-	-	●	-	-
SK0196	炭		06±36		-	-	-	●	-	-
SK3080			07±370		-	-	-	●	-	-
SK4235	2層		07±366		-	-	-	●	-	-
	4層		07±367		-	-	-	●	-	-
	10層		07±368		-	-	-	●	-	-
	17層		07±369	比較対照(土坑最下部)	●	-	-	-	-	-
SK6293			07±235		-	-	-	●	-	-
SK6062	1層	2	07±02		●	●	●	-	-	-
	2層	9	07±09		●	●	●	-	-	-
	3層	15	07±15		●	●	●	-	-	-
	4層	20	07±20		●	●	●	-	-	-
	5層	22	07±22	炭化物が多く混じる	●	-	●	-	●	-
	5層	23	07±23	炭化物が多く混じる	●	-	●	-	-	-
	7層	26	07±26		●	●	●	-	-	-
	8層	28	07±28		●	●	●	-	-	-
	9層	30	07±30		●	●	●	-	-	-
	10層	32	07±32		●	●	●	-	-	-
	底面	33	07±33	比較対照	●	●	●	-	-	-
壁面	83	07±66	比較対照	●	●	●	-	-	-	
SK6063	1層	5	07±117		●	●	●	-	-	-
	2層	10	07±122		●	●	●	-	-	-
	3層	14	07±126		●	●	●	-	-	-
	4層	17	07±129	炭化物が多く混じる	●	●	●	-	●	-
	4層	18	07±130	炭化物が多く混じる	●	-	-	-	-	-
	5層	22	07±134		●	●	●	-	-	-
	6層	26	07±138		●	●	●	-	-	-
	6層	29	07±141		●	●	●	-	-	-
	6層	31	07±143		●	●	●	-	-	-
	7層	33	07±145		●	●	●	-	-	-
壁面	82	07±179	比較対照	●	●	●	-	-	-	
SK8149	1層	2	07±334		●	-	●	-	-	●
	3層	5	07±337		●	-	●	-	-	-
	5層	7	07±339		●	-	●	-	-	-
	7層	8	07±340		●	-	-	-	-	●
	7層	10	07±342		●	-	●	-	-	●
	7・10層	12	07±344		●	-	●	-	-	-
	13層	14	07±346		●	-	●	-	-	●
	13層	16	07±348		●	-	-	-	-	●
	13層	17	07±349		●	-	●	-	-	-
	15層	18	07±350		●	-	●	-	-	-
	17層	19	07±351		●	-	●	-	-	●
	壁面	20	07±352	比較対照	●	-	●	-	-	-
SK8210	1層	1	07±353		●	-	-	-	-	●
	1層	2	07±354		●	-	●	-	-	-
	1層	5	07±357		●	-	●	-	-	-
	1層	6	07±358		●	-	-	-	-	●
	1層	7	07±359		●	-	●	-	-	-
	1・2層	9	07±361		●	-	●	-	-	-
	3層	10	07±362		●	-	●	-	-	●
	3層	11	07±363		●	-	●	-	-	-
	3層	12	07±364		●	-	●	-	-	●
	壁面	13	07±365	比較対照	●	-	●	-	-	-

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第31表 植物珪酸体含量 (1)

分類群	時期		古代 (平安)						不明		古墳
	弥生後期		SB0164		SB0165	SB0136		SK0054	SK0196	SB5006	
	pit4 06±27	炉2内 06±28	pit1 06±29	pit1± 06±30	カマド 06±31	カマド内炭 06±32	カマド内炭 06±33	炭 06±35	炭 06±36	カマド灰層 07±332	
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	-	-	100	-	100	-	-	-	100	-	
タケ亜科	-	-	-	-	-	200	-	-	-	-	
ヨシ属	700	-	500	<100	-	1,500	1,900	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	-	-	900	500	400	1,600	1,800	300	800	<100	
イチゴツナギ亜科	100	-	300	200	-	400	-	-	100	-	
不明	1,000	300	2,700	1,600	700	5,800	4,400	700	2,800	500	
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	-	-	200	-	300	-	-	400	1,100	-	
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	200	-	-	-	
ウシクサ族	-	-	-	-	-	300	-	400	-	-	
不明	100	100	300	200	1,300	500	200	500	-	-	
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	1,800	300	4,600	2,400	1,300	9,500	8,200	1,000	3,900	600	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	100	100	500	200	1,600	800	400	1,300	1,100	-	
合計	1,900	400	5,100	2,600	2,900	10,300	8,600	2,300	5,000	600	
珪化組織片											
イネ属穎珪酸体	-	-	*	-	*	-	*	***	*	-	
イネ属短細胞列	-	-	**	*	*	-	**	**	**	-	
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	*	-	-	*	-	-	
ススキ属短細胞列	-	-	*	-	*	-	*	*	*	*	

珪化組織片 - : 未検出。 \* : 検出。 \*\* : 多い。 \*\*\* : 非常に多い。

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第32表 植物珪酸体含量 (2)

分類群	古代										古代									
	SK6062										SK6063									
	1層	2層	3層	4層	5層	7層	8層	9層	10層	壁面	1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	壁面		
	07±02	07±09	07±15	07±20	07±22	07±26	07±28	07±30	07±32	07±66	07±117	07±122	07±126	07±129	07±134	07±138	07±141	07±143	07±145	07±179
イネ科葉部短細胞珪酸体																				
イネ族イネ属	500	100	1,000	700	200	200	-	100	200	-	100	-	700	1,600	-	-	200	100	-	-
キビ族ナゴザサ属	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	400	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	<100	-	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	200	400	500	-	500	600	<100	500	300	-	600	-	-	<100	300	<100	<100	500	<100	-
ヨシ属	700	900	1,400	800	900	1,400	300	<100	800	-	400	-	<100	5,400	200	-	200	<100	200	-
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	4,200	1,600	3,200	1,700	2,000	3,000	500	3,500	4,700	-	1,200	-	800	1,200	1,600	800	200	2,500	1,000	<100
イチゴツナギ亜科	-	<100	300	200	0	400	-	300	200	-	200	-	-	200	200	-	-	<100	200	-
不明キビ型	10,200	4,700	7,600	7,200	6,300	7,800	2,800	5,600	7,100	-	3,400	500	4,000	5,100	2,600	2,600	2,700	5,100	1,800	-
不明ヒゲシハ型	800	500	1,000	1,200	500	800	<100	600	300	-	400	-	<100	1,500	200	-	<100	200	-	-
不明ダンク型	5,300	1,500	2,600	2,800	1,100	1,800	1,000	1,800	3,400	<100	1,700	700	400	1,300	600	800	1,000	500	700	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体																				
イネ族イネ属	300	400	1,200	2,200	400	300	<100	200	200	-	600	-	200	2,800	-	-	<100	100	<100	-
タケ亜科クマザサ属	300	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	200	-	400	200	300	200	<100	400	200	-	300	<100	-	300	300	200	-	<100	-	-
ヨシ属	200	800	700	1,600	400	600	<100	200	300	-	100	-	-	1,900	500	<100	200	<100	200	-
ウシクサ族	5,800	1,900	3,500	4,800	3,700	4,300	1,100	2,900	3,000	-	1,700	-	1,400	1,600	2,300	200	700	1,300	<100	<100
不明	4,100	2,000	2,900	6,500	3,000	4,000	900	2,800	5,100	<100	2,600	<100	600	3,800	2,600	600	900	1,100	600	-
合計																				
イネ科葉部短細胞珪酸体	22,000	9,800	17,600	14,600	11,400	16,100	4,700	12,400	17,000	<100	8,000	1,200	6,000	16,600	5,600	4,300	4,300	9,000	3,900	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	11,000	5,100	8,700	15,300	7,800	9,400	2,200	6,500	8,700	<100	5,300	200	2,100	10,400	5,600	1,100	1,800	2,700	900	<100
総計	33,000	15,000	26,300	29,900	19,200	25,500	6,900	18,900	25,800	100	13,200	1,300	8,100	27,000	11,300	5,300	6,100	11,700	4,800	200
珪化組織片																				
イネ属穎珪酸体	-	+	-	-	+	+	-	+	-	-	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	-	+	+	++	+	+	-	-	+	-	-	-	+	++	-	-	+	+	-	-
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	-
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族機動細胞列	-	-	+	+	+	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-	-	+	-	-

<珪化組織片> +++ : 非常に多い。 ++ : 多い。 + : 検出。 - : 未検出

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第33表 植物珪酸体含量 (3)

分類群	古代									
	SK8149									
	1層 07±334	3層 07±337	5層 07±339	7層 07±340	7・10層 07±344	13層 07±346	15層 07±349	15層 07±350	17層 07±351	壁面 07±352
イネ科葉部短細胞珪酸体										
イネ族イネ属	100	700	500	<100	200	-	<100	<100	-	-
キビ族チゴザサ属	-	-	300	-	-	-	-	-	100	-
タケ亜科クマガザサ属	-	200	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	200	-	300	<100	<100	400	<100	-	-	-
ヨシ属	200	900	300	400	-	300	200	200	<100	-
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族ススキ属	2,200	3,100	1,900	1,300	1,800	2,200	2,300	1,600	1,100	-
イチゴツナギ亜科	<100	900	200	-	<100	300	<100	400	200	-
不明キビ型	5,000	7,700	7,300	3,400	4,300	4,100	3,100	4,700	3,800	-
不明ヒゲシバ型	200	400	1,000	-	300	1,600	300	500	400	-
不明ダンチク型	1,500	2,400	3,500	600	900	1,300	800	700	400	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体										
イネ族イネ属	500	400	1,000	500	200	-	400	200	-	-
タケ亜科クマガザサ属	<100	400	200	<100	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	200	-	500	<100	200	700	<100	-	-	-
ヨシ属	400	-	-	500	300	300	200	-	-	-
ウシクサ族	3,000	3,300	8,900	2,800	1,400	4,200	4,600	3,200	2,100	-
不明	1,500	4,900	5,500	1,900	800	2,800	3,000	1,900	1,400	100
合計										
イネ科葉部短細胞珪酸体	9,600	16,300	15,200	5,900	7,600	10,200	6,800	8,100	6,200	0
イネ科葉身機動細胞珪酸体	5,700	9,100	16,000	5,800	2,900	7,900	8,300	5,300	3,500	100
総計	15,300	25,400	31,200	11,700	10,500	18,100	15,100	13,400	9,700	100
珪化組織片										
イネ属珪酸体	+	+	+	+	+	+	+	+	+	-
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウシクサ族機動細胞列	+	-	-	+	-	-	-	-	-	-

<珪化組織片> +++ : 非常に多い, ++ : 多い, + : 検出, - : 未検出

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第34表 植物珪酸体含量 (4)

分類群	古代							弥生後期				古代(平安)	古墳	
	SK8210							SB0067			SB5047	SB7071	SB5022	
	1層		1・2層	3層			壁面	炉2炭、灰層	炉3炉体	炉4炉内	炉内第3層	カマド内灰	カマド5層	
	07±354	07±357	07±359	07±361	07±362	07±363	07±364	07±365	炭、灰層	炉体	炉内	第3層	灰	5層
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	-	400	600	2,100	1,200	2,200	500	-	4,300	500	200	-	-	900
キビ族チゴザサ属	-	-	200	-	-	-	3,300	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマガザサ属	-	-	-	-	-	-	0	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	-	200	<100	0	300	100	700	-	1,100	-	<100	200	<100	-
ヨシ属	-	200	500	100	600	700	1,500	-	500	-	<100	100	1,100	3,300
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200
ウシクサ族ススキ属	700	1,400	1,100	1,500	4,800	6,100	5,600	-	5,700	2,200	100	4,100	300	2,400
イチゴツナギ亜科	100	200	200	300	600	400	200	-	800	300	100	-	-	-
不明キビ型	1,800	2,400	5,300	5,600	10,600	14,200	13,500	-	15,900	1,600	200	3,000	2,800	7,600
不明ヒゲシバ型	<100	<100	400	700	1,200	900	2,500	-	-	-	-	500	-	900
不明ダンチク型	<100	800	600	1,200	2,800	5,100	3,500	-	3,200	-	<100	2,600	400	1,500
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	400	1,300	800	7,200	3,200	4,500	1,300	-	3,000	300	100	-	<100	300
タケ亜科クマガザサ属	<100	200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科	-	700	200	-	100	700	800	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ属	<100	200	400	700	1,200	100	300	-	300	-	-	-	400	2,100
ウシクサ族	1,200	1,800	1,800	5,800	4,500	5,300	8,700	-	1,100	1,100	100	800	200	1,800
不明	1,400	3,700	2,600	6,700	7,800	4,500	6,300	<100	5,700	1,600	700	<100	600	1,200
合計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,800	5,800	8,900	11,500	21,900	29,800	31,200	0	31,600	4,700	800	10,400	4,800	17,200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,100	8,000	5,900	20,400	16,900	15,200	17,500	<100	10,000	3,000	900	800	1,300	5,400
総計	5,800	13,800	14,700	31,900	38,800	45,000	48,600	<100	41,600	7,700	1,800	11,300	6,000	22,700
珪化組織片														
イネ属珪酸体	-	-	+	+++	+	+	+	-	+	+++	+	-	-	-
イネ属短細胞列	-	+	+	+	+	+	+	-	++	+	+	-	-	+
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+	-	-	-	-
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	-	-
ススキ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	++	+	-	+	+	+
ウシクサ族機動細胞列	+	-	+	-	-	+	-	-	+	-	-	+	+	+

<珪化組織片> +++ : 非常に多い, ++ : 多い, + : 検出, - : 未検出

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第35表 灰像分析による珪化組織片の産状および植物珪酸体含量 (1)

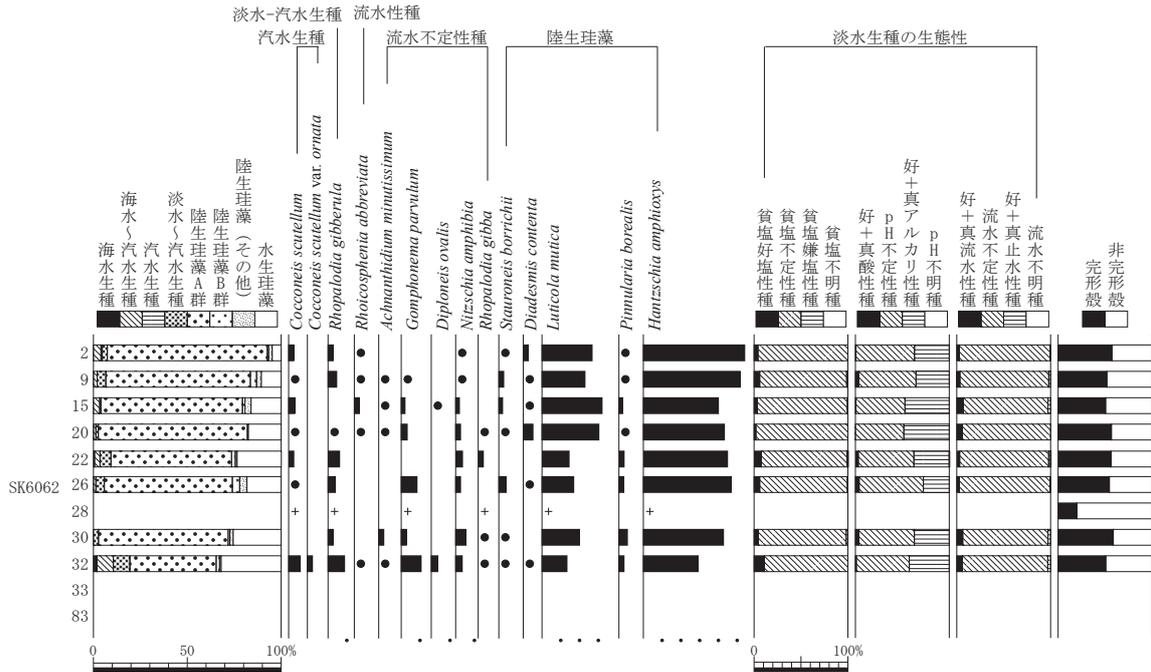
分類群	時期		弥生後期						古代						古代(奈良)		中世
	SB0033	SB0155	SB0156	SB0004	SB0036	SB6028	SB0051	SB0164	pit1	SB0313	SB0137	SB0141	SB0141	SB0070	SB0006		
	炉1 06±06	炉内 06±08	06±09	炉内 06±12	炉 06±22	07木64	カマド 06±07	1層 06±10	4層 06±11	カマド内 06木21	4層 06±18	カマド内 06±19	床下 06木09	pit1内 06±25	炭化物層 06±13		
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	-	<100	200	300	-	<100	1,200	9,400	2,400	100	2,100	600	300	2,400	1,700		
タケ亜科	800	<100	-	400	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
ヨシ属	1,100	600	-	500	-	-	2,400	2,000	100	400	232,700	-	-	-	-		
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8,500	-	-	-	-		
ウシクサ族ススキ属	12,400	5,700	-	4,100	-	200	24,300	2,300	3,500	1,100	-	200	-	-	2,600		
イチゴツナギ亜科	300	200	300	<100	-	200	800	-	-	100	-	-	-	-	100		
不明キビ型	9,000	5,200	900	7,700	600	800	18,600	5,700	5,500	3,100	16,900	1,800	300	1,200	5,100		
不明ヒゲシハ型	2,400	200	-	600	-	200	2,000	300	100	-	4,200	-	-	-	700		
不明ダンチク型	6,600	2,000	-	3,200	-	400	8,100	1,700	400	800	-	200	300	-	1,300		
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	-	<100	200	-	-	<100	2,000	9,700	1,700	-	10,600	300	1,600	7,900	3,000		
タケ亜科	300	200	-	300	-	-	-	-	-	-	-	-	300	-	-		
ヨシ属	500	200	-	200	-	-	800	700	-	100	175,600	-	-	-	100		
ウシクサ族	1,600	2,500	200	1,600	-	700	5,700	3,700	800	200	-	<100	-	-	800		
不明	5,800	3,700	300	3,500	500	1,300	14,600	3,700	700	200	14,800	600	500	1,200	3,200		
合計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	32,600	14,100	1,400	16,800	600	2,000	57,500	21,400	12,000	5,500	264,500	2,700	800	3,600	11,500		
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8,200	6,600	600	5,600	500	2,000	23,100	17,700	3,300	600	201,000	1,000	2,400	9,100	7,100		
総計	40,800	20,700	2,100	22,300	1,200	4,000	80,500	39,100	15,300	6,100	465,500	3,800	3,300	12,600	18,600		
珪化組織片*																	
イネ属類珪酸体	*	**	*	*	*	-	*	*	**	-	**	*	**	**	**		
イネ属短細胞列	-	*	-	*	-	-	-	**	**	-	-	*	**	**	**		
イネ属機動細胞列	-	-	-	*	-	-	-	**	*	-	-	*	*	**	*		
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-		
ススキ属短細胞列	-	*	-	-	-	-	-	*	**	*	-	-	-	-	**		
ウシクサ族機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	*	*	*	-	-	-	-	*		

\* [-]: 未検出 [\*]: 検出 [\*\*]: 多い [\*\*\*]: 非常に多い (バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第36表 灰像分析による珪化組織片の産状および植物珪酸体含量 (2)

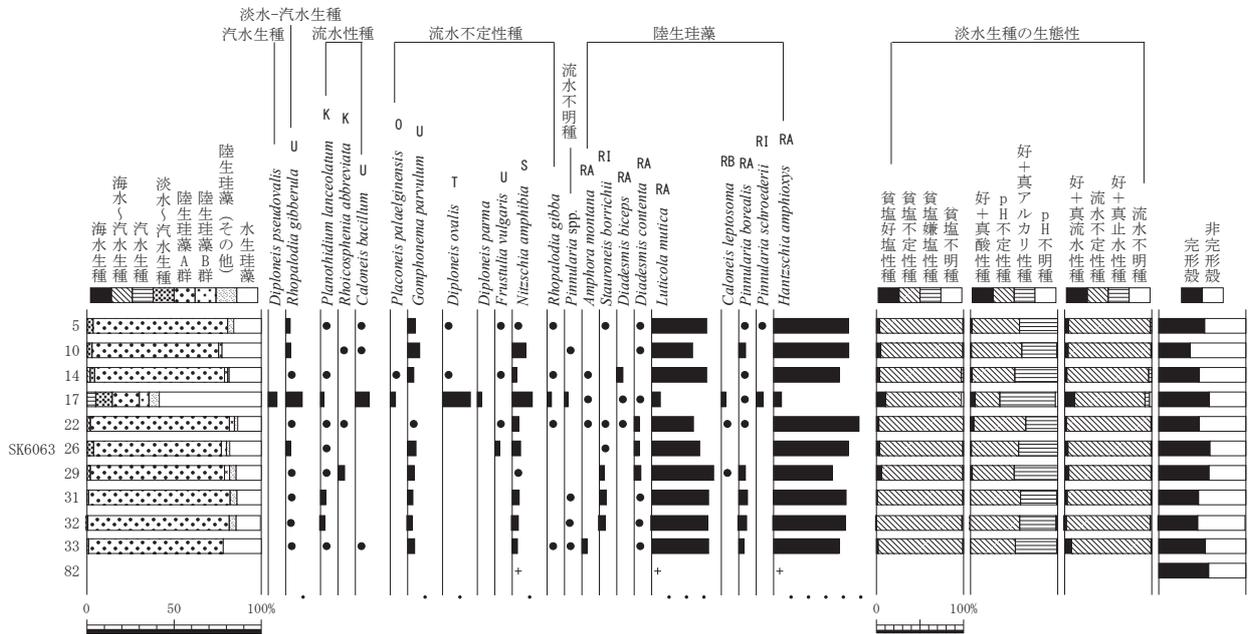
分類群	時期		弥生後期		古墳		古墳以降		古代					SK4235			
	SB7067	SK3080	SK6293	SE3045	SE3056	SB5006	SB5035	SB6030	ST7001								
	炉 08±14	07±370	07±235	カマド 07±289	07±290	カマド内 07±328	07±329	4層 08±05	Pit9 08±18	2層 07±366	4層 07±367	10層 07±368	17層 07±369				
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	-	-	2,800	5,100	1,400	200	500	-	800	500	-	-	-	2,300			
タケ亜科	400	-	-	-	-	-	-	-	800	-	<100	-	-	500			
ヨシ属	400	200	-	1,000	200	-	1,400	-	400	400	-	200	700				
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-	-				
ウシクサ族ススキ属	14,000	3,200	3,700	300	700	1,900	38,300	-	3,600	2,400	-	-	5,000				
イチゴツナギ亜科	-	<100	-	-	-	300	-	-	-	300	<100	<100	200				
不明キビ型	9,900	2,300	4,700	1,400	2,400	3,700	23,000	200	6,300	2,100	400	200	7,100				
不明ヒゲシハ型	2,100	400	-	-	-	100	900	-	2,300	<100	-	-	700				
不明ダンチク型	3,000	1,200	900	700	-	300	2,700	-	1,500	800	200	-	4,100				
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	-	-	26,200	4,800	5,400	<100	-	-	2,700	700	200	200	1,600				
タケ亜科	-	<100	-	-	-	<100	-	-	200	<100	-	-	-				
ヨシ属	400	100	-	700	200	200	900	-	600	100	<100	-	-				
ウシクサ族	9,500	400	1,900	-	500	1,300	3,600	-	10,900	1,100	-	-	2,100				
不明	12,200	1,900	13,100	3,100	3,800	2,100	2,300	200	7,100	1,400	500	300	4,800				
合計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	29,900	7,300	12,200	8,600	4,700	6,400	66,700	200	15,600	6,500	600	400	20,600				
イネ科葉身機動細胞珪酸体	22,100	2,500	41,200	8,600	9,900	3,800	6,800	200	21,400	3,300	800	400	8,500				
総計	52,000	9,800	53,400	17,100	14,600	10,200	73,500	300	37,000	9,800	1,400	800	29,100				
珪化組織片*																	
イネ属類珪酸体	-	*	**	*	**	*	-	-	-	*	-	-	-				
イネ属短細胞列	-	-	**	**	**	**	*	*	-	*	-	*	*				
イネ属機動細胞列	-	-	**	**	**	*	-	-	-	*	-	-	-				
ヨシ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	*	-	-	-	-	-	-				
ススキ属短細胞列	-	-	-	*	-	**	*	-	-	-	-	-	-				
ウシクサ族機動細胞列	-	-	-	*	*	*	*	-	*	-	-	-	-				

\* [-]: 未検出 [\*]: 検出 [\*\*]: 多い [\*\*\*]: 非常に多い (バリノ・サーヴェイのデータを編集)



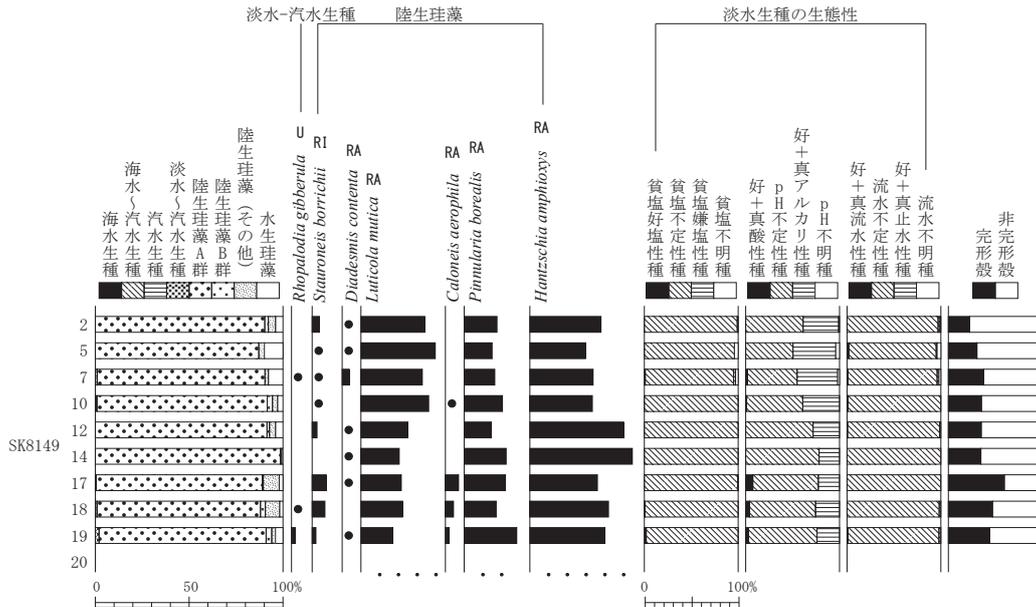
海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生産種の比率は淡水生産種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。  
 <環境指標種>  
 C1: 海水藻場指標種, K: 中~下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着性種, S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻

第 40 図 SK6062 の主要珪藻化石群集の層位分布



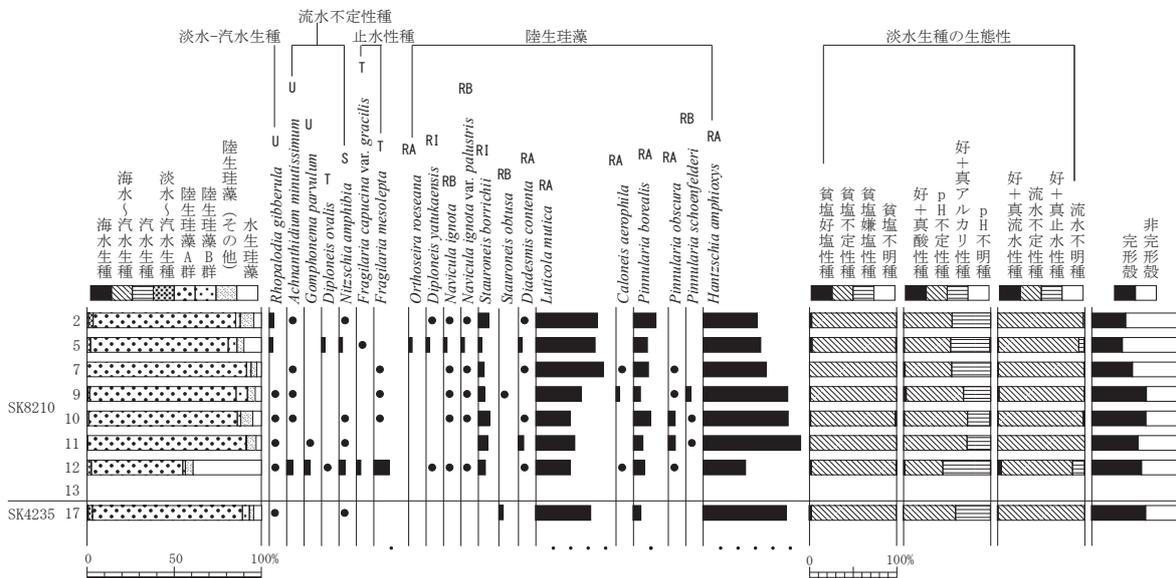
海水-汽水-淡水生産産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生産種の比率は淡水生産種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。  
 <環境指標種>  
 C1: 海水藻場指標種, K: 中~下流性河川指標種, O: 沼沢湿地付着性種, S: 好汚濁性種, U: 広域適応性種, T: 好清水性種, RA: 陸生珪藻A群, RB: 陸生珪藻B群, RI: 未区分陸生珪藻

第 41 図 SK6063 の主要珪藻化石群集の層位分布



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満を示す。  
 <環境指標種>  
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻

第 42 図 SK8149 の主要珪藻化石群集の層位分布



海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。●は2%未満を示す。  
 <環境指標種>  
 S:好汚濁性種, U:広域適応性種, T:好清水性種, RA:陸生珪藻A群, RB:陸生珪藻B群, RI:未区分陸生珪藻

第 43 図 SK8210 他の主要珪藻化石群集の層位分布

第37表 花粉分析結果

種 類	中世		古代																	
	SK0005	SK0031	SK6062									SK6063								
			1層	2層	3層	4層	7層	8層	9層	10層	壁面	1層	2層	3層	4層	5層	6層		7層	壁面
		07±02	07±09	07±15	07±20	07±26	07±28	07±30	07±32	07±66	07±117	07±122	07±126	07±129	07±134	07±138	07±141	07±143	07±145	07±179
木本花粉																				
ツガ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																				
イネ科	1	7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ属— ウナギツカミ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカサ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
シダ類孢子																				
他のシダ類孢子	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
合 計																				
木本花粉	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
草本花粉	2	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0
総計(不明を除く)	3	13	0	0	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

第38表 リン酸・腐植分析結果

遺構名	層位	試料番号	管理番号	土性	土色	腐植含量 (%)	P2O5 (mg/g)
SK8149	1層	2	07±334	SiL	7.5YR2/1 黒	3.01	2.02
	3層	5	07±337	SiL	7.5YR2/1 黒	3.22	1.62
	7層	10	07±342	-	7.5YR2/1 黒	3.19	1.69
	13層	14	07±346	-	7.5YR2/2 黒褐	3.56	1.67
	13層	16	07±348	SCL	10YR2/3 黒褐	3.66	1.80
SK8210	1層	1	07±353	SCL	10YR2/2 黒褐	2.81	1.92
	1層	6	07±358	SCL	10YR3/3 暗褐	1.69	1.02
	3層	10	07±362	-	10YR2/2 黒褐	2.76	1.50
	3層	12	07±364	SCL	10YR2/2 黒褐	2.56	1.40

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。  
 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。  
 SiL：シルト質壤土（粘土0～15%、シルト45～100%、砂0～55%）、SCL：砂質壤土（粘土15～25%、シルト0～20%、砂5～85%）、-：分析試料が少量のため、判定せず

(バリノ・サーヴェイのデータを編集)

## 第7節 出土骨に関する分析

出土骨に関する分析は、京都大学名誉教授 茂原信生氏、総合研究大学院大学准教授 本郷一美氏、独協医科大学技術職員 櫻井秀雄氏に調査指導、分析鑑定を依頼した。特に人骨については茂原信生氏、ウシ・ウマ骨については本郷一美氏、その他動物骨について櫻井秀雄氏が主導された。ここに3氏に賜った玉稿を掲載する。

また学術研究として北里大学特別研究員 覚張隆史氏は、西近津遺跡群出土ウマ骨の安定同位体分析と放射性炭素年代測定（AMS法）を行った。本報告書刊行にあたり、覚張氏からも玉稿を賜ったため、併せて掲載する。

土坑（SK0004、SK7719）出土のウマ骨、歯については、年代測定を（株）加速器分析研究所に委託した。詳細は本節5に記す。

なお、出土骨は調査年ごとに登録番号を付けている。表記は左から調査年（西暦年）の下2桁の次に、骨の英訳 Bone の頭文字 B を冠し、登録番号が並ぶ。本報告書においては、全ての分冊に共通してこの登録番号表記を用いている。（例）06B81 2006年調査の骨No.81

### 1. 西近津遺跡群出土の人骨について

茂原信生：京都大学名誉教授  
本郷一美：総合研究大学院大学  
櫻井秀雄：獨協医科大学

#### はじめに

西近津遺跡群は長野県佐久市にある遺跡で、中部横断自動車道の建設に関連した遺跡として、平成18（2006）年から20（2008）年にかけて長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査された。本報告はそのうちの人骨に関する報告である。

出土した人骨は、おもに平安時代に属する。保存状態は悪く、出土した状態では存在が確認できるものの、取り上げることが難しいものがほとんどであったが、なかには歯の残りがいいものもあった（第39表）。人骨が出土した場所は少数ながら比較的まとまっている。集落の周辺に埋葬されたものと考えられている。

#### (1) SB7035 出土人骨：平安時代（10世紀）[08B55 写真 PL302-1]

竪穴住居内で頭蓋骨の一部が出土しているが、顔面部は失われている。頭蓋冠の骨は非常に薄い。他に右大腿骨近位骨幹が出土している。

大腿骨の殿筋粗面はやや発達しており、骨幹の上部外側の殿筋隆起も見られる。後面の粗線はやや隆起している。大腿骨の殿筋隆起の直下で測った横径は30.8mm、矢状径は24.9mmである。断面示数は80.8でやや扁平で、扁平大腿骨に属すと考えてよからう。

成人と思われるが、詳細は不明で、性別も不明である。

**(2) SK4051 出土人骨**：平安時代（10世紀）[07B356 写真 PL147-9, 302-2]

土坑墓に伸展葬で埋葬されていたものと思われる。頭蓋の一部と歯、ならびに大腿骨片が残っている。

頭蓋骨は頭蓋冠が破損して出土している。骨は薄く、まだ若い個体であることを思わせる。歯は5本（上顎歯4本、下顎歯1本）と破片が1点出土している。歯の表面は侵食により軽度だが荒れている。咬耗はほとんどなく、下顎の第1大臼歯の近心頬側咬頭に小さな象牙質の露出があるだけである。上顎の第2大臼歯に磨耗がみられないので、萌出して間もない若い個体であろう。10歳代半ばと思われる。歯の大きさは縄文時代人の平均値（Matsumura 1989）より大きい、現代日本人の平均値（権田 1959）より小さい（第40・41表）。

20歳に達していない10代半ばの少年と思われる。性別は不明である。

**(3) SM4011 出土人骨**：平安時代 [07B242 写真 PL146-9・10, 302-3]

土坑墓から1体分の伸展葬と思われる人骨が出土している。頭蓋骨の一部と歯、および四肢骨片だけが確認できる。歯の残りはよく、歯根まで残るものがほとんどである。

頭蓋骨では、左右の側頭骨錐体部が出土している。頑丈な形である。他に下顎骨下顎枝の一部が出土している。右の筋突起から続く下顎体後部の外側結節までが残っており、非常に筋突起が厚い。外側結節はよく発達している。側頭筋が発達していたことを思わせる。

**歯** 上顎は、右第2大臼歯から左の第3大臼歯までの永久歯15本が残っている。左の第3大臼歯は矮小歯である。下顎歯は右が第2切歯以外は残っているが、左は第1・第2切歯、第1小臼歯、第2大臼歯だけが残っている。

上顎の中切歯（第1切歯）はシャベル型で、弥生時代以降に日本に渡来した人々の影響を受けている。この特徴は、平安時代～中世ではむしろ一般的な形質になっていたと思われる。他の歯は大きさが現代日本人（権田 1959）の男性および女性の平均値よりやや小さく、縄文時代人の男性および女性の平均値（Matsumura 1989）と比べるとやや大きめであるが、上顎の中切歯、側切歯は、どちらよりもかなり小さい。第3大臼歯が萌出しているため成人には達していると思われる。咬耗は全体にごく軽度で、象牙質の露出は上顎第1大臼歯の近心頬側咬頭のみである。若い個体である。第1・第2切歯の歯頸部近く、第1小臼歯の歯冠の中央よりやや歯頸部よりに、第2小臼歯の歯冠中央付近、第2大臼歯の歯冠中央からやや歯頸よりに線状のエナメル質減形成が認められる。性別は不明である。

**(4) SK8204 出土人骨**：平安時代（9世紀末か）[07B324 写真 PL302-4]

土坑墓に1体分が埋葬されていたものと思われるが、取り上げられたのは歯だけである。残りの悪いものが多い。土壌の右半分集中して出土している。下顎歯だけが出土しており、下顎の左犬歯、第2小臼歯、第2大臼歯（近遠心径10.4mm、頬舌径9.62mm）、右の犬歯、右第2小臼歯と歯種不明の歯根が1本残っている。どの歯でも咬耗は進んでいて、犬歯は歯冠の上部に象牙質の露出があり、また大臼歯では頬側半が摩耗し象牙質の露出がみられる。若い個体ではない。第2大臼歯の歯冠咬合面中央に齶蝕がある。またこの歯の近心歯頸部に大きな齶蝕がある。これ以外の歯の歯根は全体的に侵食されている。歯根が侵食によりやせ細っているので、歯頸部の齶蝕は生前のものかどうかは不明である。成人と思われるが、性別は不明である。

なお、この土坑墓に切られるSK8149から歯が1本出土している。下顎右第3大臼歯、あるいは上顎右第3大臼歯歯冠と思われるが、複雑な咬合面のパターンで、矮小歯である。咬耗がない点はSK8204から出土した歯とは異なっているが、矮小で複雑な咬頭パターンであるので同一個体であるかどうかは確定で

きない。

まとめ

西近津遺跡群の人骨はすべて平安時代の遺構から出土したものである。出土した人骨は保存状態が悪く、いずれも身体のごく一部しか取り上げることは出来なかった。そのなかでも歯の残りはよく、シャベル型切歯を持つ個体（SM4011）も含まれている。これらのうちSK4051は少年と思われるが、それ以外はその個体も成人には達していたと考えられる。性別などは不明である。

引用・参考文献

馬場悠男 1993 「人骨計測法」『人類学講座 別巻 1』雄山閣 Pp. 359.  
 藤田恒太郎 1949 「歯の計測規準について」人類学雑誌 61 1-6  
 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」人類学雑誌 43 (1) 151-163.  
 Matsumura, H. 1989 Geographical Variation of Dental Measurements in the Jomon Population. J.Anthrop. Soc. Nippon, 97(4); 493-512.

第 39 表 西近津遺跡群から出土した人骨と歯

出土遺構	標本番号		右	左
SB7035				大腿骨近位骨幹
SM4011	325 2 324		側頭骨錐体 下顎右筋突起	側頭骨錐体
	325 1, 3 325 3, 4	上顎 下顎	I1, I2, C, P1, P2, M1, M2 I1, C, P2, M1, M2, M3	I1, I2, C, P1, P2, M1, M2, M3 I1, I2, P1, M2
SK4051	308, 356	上顎 下顎	P片(右?)	P1, P2, M1, M2 M1
SK8149	365 12	上顎?	M3	
SK8204		下顎	C, P2	C, P2, M2

第 40 表 西近津遺跡群から出土したヒトの上顎歯の計測値と比較資料 (単位: mm)

		I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
		近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径								
SM 4011	右	7.7	7.4	6.4	7.3	7.8	8.4			6.8	9.5	9.7	11.2	9.0	11.1	7.4	8.8
	左	7.7	7.6	6.6	7.2	7.7	8.2	7.3	10.1	7.0	9.9	9.7	11.2	8.9	11.4		
SK 4051	右							7.5	10.0								
	左							7.8	10.2	7.1	9.5	10.9	12.3	10.2	11.1		
現代日本人 (権田 1959)	男性	8.67	7.35	7.13	6.62	7.94	8.52	7.38	9.59	7.02	9.41	10.68	11.75	9.91	11.85	8.94	10.79
	女性	8.55	7.28	7.05	6.51	7.71	8.13	7.37	9.43	6.94	9.23	10.47	11.40	9.74	11.31	8.86	10.50
縄文時代人平均 (Matsumura 1989)	男性	8.51	7.29	7.10	6.69	7.55	7.96	6.90	9.27	6.46	9.00	10.28	11.78	9.12	11.45	8.29	10.85
	女性	8.28	7.00	6.84	6.38	7.33	7.71	6.65	8.96	6.30	8.75	9.90	11.37	8.81	10.97	7.99	10.36

第 41 表 西近津遺跡群から出土したヒトの下顎歯の計測値と比較資料 (単位: mm)

		I1		I2		C		P1		P2		M1		M2		M3	
		近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径	近遠心径	頬舌径								
SM 4011	右	5.0	5.9			6.6	7.7	7.6	8.8	7.3	8.9	10.6	10.1	10.2	9.8	9.8	9.5
	左	5.0	6.0	5.5	7.1					7.5	9.1			10.3	9.7		
SK 4051	右																
	左											11.7	11.0				
現代日本人 (権田 1959)	男性	5.48	5.88	6.20	6.43	7.07	8.14	7.31	7.42	8.06	8.53	11.72	10.89	11.30	10.53	10.96	10.28
	女性	5.47	5.77	6.11	6.30	6.68	7.50	7.19	7.29	7.77	8.26	11.32	10.55	10.89	10.20	10.65	10.02
関東地方縄文人 (Matsumura 1989)	男性	5.28	5.94	5.78	6.27	6.85	7.66	6.93	6.98	7.95	8.40	11.59	11.19	10.94	10.51	10.47	9.94
	女性	5.19	5.70	5.69	6.19	6.58	7.33	6.71	6.76	7.74	8.24	11.26	11.01	10.65	10.24	10.15	9.65

## 2. 西近津遺跡群出土の動物骨について

獨協医科大学：櫻井秀雄  
 奈良文化財研究所：茂原信生  
 総合研究大学院大学：本郷一美

## はじめに

長野県佐久市にある西近津遺跡群は、中部横断自動車道の工事に伴って、長野県埋蔵文化財センターによって発掘された。出土した動物骨のほとんどをウシとウマが占めるが、それ以外の動物の骨も出土している。この項ではウシ・ウマ以外の動物骨について報告する。これらの動物骨の所属する年代は弥生時代後期から中世におよんでいる。ウシ・ウマ以外の骨の総点数は134点で、哺乳類は5種である（第42・43表）。同定には獨協医科大学所蔵標本を利用した。

同定された動物種は以下の通りである。

## 哺乳綱 Mammals

## 偶蹄目 Artiodactyla

## シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

## イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

## 食肉目 Carnivora

## イヌ科 Canidae

イヌ *Canis familiaris*

## 食肉類の一種

ホンドタヌキ *Nyctereutes procyonoides*

あるいはキツネ *Vulpes vulpes japonica*

## 食虫目 Insectivora

## モグラ科 Talpidae

モグラ *Mogera wogura*

(1) ニホンジカ (*Cervus nippon*)

ウシ・ウマ以外では最も多い点数が検出されており、106点である。時代ごとに出土分布を見ると弥生時代後期が最も多い（第44表）。骨の保存状態は悪く、脆いものが多い。したがって、現場では骨の種類などを確認できるものの、取り上げの際に破損してしまうことが多かった。同定できた骨は部位ごとにみると四肢骨、歯、角の順序で多い。角以外の頭蓋は少ない（第45表）。

下顎骨3点は歯が植立した状態で出土している（写真PL310）。遊離歯は34点みついているが、ほとんどが歯種の同定できない破片である。なお、歯片ではシカかカモシカかを正確には判定できない場合が多いが、カモシカの骨が出土していないのでここではシカの歯片として扱っている。遊離歯で同定できたのは上顎右第3大臼歯（M3）の1点と下顎左第1切歯（I1）の1点である。歯に次いで出土の多かった

角は23点あった。弥生時代後期の層から出土した鹿角では、3点の加工品と2点のカットマークを持つものがみつまっている。ほかにも加工の残骸とみられる破片も認められた。加工されている角は弥生時代後期に集中して出土している。

四肢骨では完全な状態の骨はなく、上腕骨、橈骨、大腿骨、脛骨では骨幹部が断片化して出土している。全身の構成骨がそれぞれ少量ずつ出土しており、特に偏っているようには思われない（第42表）。距骨の出土点数から判別できる最小個体数は3である。

焼けた骨が10点みつまっている。

## (2) イノシシ (*Sus scrofa*)

イノシシの骨は18点出土している。ニホンジカに比べるとかなり少ない。弥生時代後期からは12点が検出されている。このうち5点は歯で、歯種は上顎右第3大臼歯（M3）1点、下顎左第1大臼歯（M1）および第2大臼歯（M2）が各1点、他の2点は下顎右第3大臼歯（M3）で、このうち1点は未萌出の若い個体のものである。このほかに若い個体のもと思われる腰椎の破片があった。

最小個体数は歯から判断して2である。

焼けている骨は2点だけである。

## (3) イヌ (*Canis familiaris*)

中世の溝跡SD4002から出土している。イヌの左下顎骨体である。さほど頑丈ではない。下顎枝は基部以外は欠けており、下顎体も先端部は失われている。歯冠はどれも残っていないが、第3小臼歯（P3）から第3大臼歯（M3）にかけて歯槽は残っており、歯根の一部が残っているので歯は生前には植わっていたであろう。表面、特に発掘に際して上面だった外側面は侵食を受けている。咬筋窩は深そうである。長谷部（1952）の区分する小級犬よりやや大きめのイヌであろう。

計測値：下顎体高（1）27.9mm、下顎体高（2：M1中央部）24.0mm、下顎体高（3：P4とM1の間）23.8mm、下顎体厚10.7mm（侵食で実際よりも薄いと思われる）、第3小臼歯から第3大臼歯までの歯槽の長さ55.5mm。

## (4) 食肉類の一種

SB5006から第2頸椎（軸椎）と足根骨の距骨が出土している。どちらも破片であり、左右や種を確定できる情報が足りないため、タヌキあるいはキツネという同定にとどめた。

## (5) モグラ (*Mogera wogura*)

1区ⅢI-16炭分布面から焼けた骨と伴出した。左右上腕骨が同定された。地中の生活をする哺乳類なので時代を特定するのは難しい。

## (6) それ以外の動物骨

これらの動物骨以外にニワトリの左上腕骨が1点と、カエルの1個体分に近い骨が出土している。これらはどちらも新しい時代のものである可能性が高い。

## まとめ

西近津遺跡群から出土したウマ・ウシ以外の動物の出土量は、遺跡の広さを考えると非常に少ない。焼

骨はごく稀である。遺跡では一般的なシカとイノシシ以外はごく限られている。人為的につけられた傷や加工の痕跡はシカの角と中手骨、中足骨にみられるが他の骨にはみられない。

## 引用・参考文献

長谷部言人 1952 「犬骨」『埋蔵文化財発掘調査報告第一号 吉胡貝塚』文化財保護委員会, pp.146-150

松井章 (編) 2006 『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター, pp.152。

第42表 出土動物骨部位別一覧

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位		上下	備考
	07B305-1	SB4030		弥生後期	イノシシ?	上顎骨		上	
	08B32	SD8006	I X - 18	7C末~8C	イノシシ	頭蓋 後頭部 (左側頭骨+後頭骨)			
PL311-5	08B59	SB7022		7C前半	イノシシ	下顎+歯 下左M2, 下右M3	右		
	06B120-1	SB0036		弥生後期	イノシシ	左下顎(角部)下顎歯 (右M3[未萌出]) 右上顎骨破片			
	06B23	SB0102	SB102 椀内	弥生後期	イノシシ	側頭骨錐体			
	07B23	SB5006	SB5005. 5006 南北ベルト(北)	7C	イノシシ含む	側頭骨錐体含む			
	06B92	SB0019		弥生後期	イノシシ	歯M3	右	上	
	06B52	SB0033	Pit16	弥生後期	イノシシ	歯	M1左	下	
	06B85-1	SB0036	南西区	弥生後期	イノシシ	イノシシ臼歯	左	上	その他、大型動物の骨片
	06B114	SB0017		弥生後期	イノシシ	臼歯	不明	不明	臼歯
	07B283	SB4030		弥生後期	イノシシ	腰椎骨	破片		若い個体
	06B84-1	SB0036		弥生後期	イノシシ	上腕骨椎 種不明骨片			
	07B283-3	SB4030		弥生後期	イノシシ	腕骨遠位骨端	左		
	07B348-2	SB4030		弥生後期	イノシシ	中足骨Ⅲ	右		
	07B55	SB5022	カマド	6C中頃	イノシシ	中手骨か中足骨	不明		遠位半
	07B317	SB3072		8C前半	イノシシ	足根骨			T IV 焼
	06B138	SB0076	カマド	8C中頃 (=SB0173と合体)	イノシシ	踵骨	右 遠位端		
	06B49	SB0036		弥生後期	イノシシ(焼骨)	基節骨			焼骨
	07B350-2	SB4030		弥生後期	シカ	頸椎			
	07B284-3	SB4030		弥生後期	シカ	椎体(胸椎?)			
PL311-4	06B80	SB0036		弥生後期	シカ	腰椎			
	06B26	SB0121	カマド内	10C前半	シカ(焼骨)	椎骨(腰椎下関節突起)			焼骨
	07B283-5	SB4030		弥生後期	シカ	後頭部			
	06B119-1	SB0036		弥生後期	シカ	頭骨破片			
	07B57	SD5003	トレンチより南側	中世	シカ	上顎歯 dp4, M1, M2	左		
	07B57	SD5003	トレンチより南側	中世	シカ	下顎歯 P4, M1, M2	左		M2 わずかに摩耗
PL311-1	06B11	SB0010		10C前半	シカ(焼骨)	下顎骨	左		関節頭(焼骨)
PL310-6	07B303	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨	左	下	P2~M3
PL310-5	07B350-1	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨 M1-3	右		
PL310-4	07B349	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨 dp3-M1	右	下	幼獣
	07B347-1	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨?			
	07B347-2	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨?			
	06B178	SB0010	検出面	10C前半	シカ	肩甲骨			
	07B51	SB5022	カマド	6C中頃	シカ	腕骨	右		近位半
	07B304			弥生後期	シカ	尺骨	左右(左近位半 右骨幹部)		
	06B162	SB0175	カマド	8C以前	シカ(焼骨)	中手骨片, 右腕骨近位 関節他			焼骨
	06B85-1-3	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	中手骨 近位端	右		カットマークあり。近位関節面。
	06B38	SB0100		7C以前	シカ	手根骨			腕測手根骨
	08B1	SD6002	II D - 12	中世	シカ	大腿骨 遠位十骨幹		下	胎児
PL311-3	06B90-1	SB0015	北側	弥生後期	シカ	脛骨 遠位部	右		
	07B348-3	SB4030		弥生後期	シカ	右脛骨 遠位端	右		
PL301	06B121	SB0036	南西隅	弥生後期	シカ(骨製品未製品)	中足骨			骨製品(刺突具) 図版3-275
	07B326	SB4030		弥生後期	シカ	中足骨			中足骨 遠位破片
	08B95	SB7011		9C後半	シカ	中足骨			
	07B283-2	SB4030		弥生後期	シカ	骨幹片			シカ骨破片
	06B164	SK0031	南北先行トレンチ		シカ	中足骨片?			
PL301	06B120-3	SB0036		弥生後期	骨製品(刺突具)	種不明、中手骨または 中足骨か。			骨製品(刺突具) 図版3-275

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位		上下	備考
	06B71-1	SK0325		10C	シカ	足根骨			
	07B372-1	SB4030		弥生後期	シカ	足根骨 C + IV	左		
	07B53	SB5022	カマド	6C中頃	シカ	踵骨	左		一部焼骨
	07B305-2	SB4030		弥生後期	シカ	距骨	左右		
	06B18	SB0053	カマド	7C	シカ(焼骨)	距骨	左		焼骨
	07B12	SB5006		7C	シカ	距骨	右		
	07B283-1	SB4030		弥生後期	シカ	距骨	左		
	07B304	SB4030		弥生後期	シカ	基節骨(2)	不明		ともに近位部のみ
	07B369	SB4030	中央区	弥生後期	シカ	中節骨			
	07B341	SB5014		10C	シカ(焼骨)	末節骨	不明		焼骨
	07B348-1	SB4030		弥生後期	シカ	末節骨			
	07B385	SB6038		8C後半	シカ	種子骨			
	06B117-1	SB0036	(B)	弥生後期	シカ(焼骨)	頭、四肢骨破片			焼骨
PL310-2	06B170	SB0022		11C前半	シカ	角			
PL310-3	07B31	SB5006		7C	シカ	角基部			基部(自然脱落)
	06B113-1	SB0115		8C中頃	シカ	角座部	右		
	06B113-2	SB0115		8C中頃	シカ	06B113-1の破片			
	06B171	SB0050		10C前半	シカ	角			
	06B104-1	SB0161		10C	シカ	角			
	06B115	SB0017.0025	炭・骨分布面	弥生後期	シカ(焼骨)	角			焼骨
	06B67-1	SB0036	Pit3	弥生後期	シカ	角			
	06B82-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			
	06B82-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B82-1の破片			
	06B83-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			
	06B83-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B83-1の破片			
PL301	06B85-1-1	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	角(枝) 切断痕あり			図版3-275
PL301・310-1	06B81-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			カットマーク有り。 図版3-275
	06B81-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B81-1の破片			
PL301	06B85-1-2	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	角			カットマークあり。破片の端を丸く 囲む切込み。図版3-275
PL301	06B120-1-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 表面を一部残し切断。 図版3-275
PL301	06B120-1-2	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 表面は磨いてある。 図版3-275
PL301	06B120-1-3	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 縦に割ってある。 図版3-275
PL301	06B120-1-4	SB0036		弥生後期	シカ	角			破片 切断?特に加工なし。 図版3-275
PL301	06B120-1-5	SB0036		弥生後期	シカ	角			破片 切断?特に加工なし。 図版3-275
	07B276	SB3082 (HSEB3083)		弥生後期	シカ	角	破片		土製丸玉 抜き出し
	06B102	SB0030		弥生後期	不明 シカ	角			
	08B96	SB7026	カマド	9C前半	シカ	角			加工なし
	08B97	SB7028	南区	8C~9C	シカ	角			
	06B106	SK0043			シカ(焼骨)	角			焼骨
	08B76	SK7969			シカ	角			
	07B372-2	SB4030		弥生後期	シカ	歯	左	下 I 1	
	06B40	SB0121	カマド東(外)	10C前半	シカ	歯	右 M3	上	
	06B34	SB0112		7C末~8C前	シカ	歯			
	06B36	SB0100		7C以前	シカ	歯			
	06B37	SB0100		7C以前	シカ	歯			
	06B87	SB0002	北東区	弥生後期	シカ	歯			
	06B58	SB0015		弥生後期	シカ	歯			
	06B60	SB0015		弥生後期	シカ	歯			
	06B57	SB0019		弥生後期	シカ	歯			
	06B99	SB0024		弥生後期	シカ	歯			
	06B56	SB0027		弥生後期	シカ	歯			
	06B101	SB0030		弥生後期	シカ	歯			
	06B2	SB0035		弥生後期	シカ	歯			
	06B3	SB0035		弥生後期	シカ	歯			+ウマ下顎臼歯片
	06B4	SB0035		弥生後期	シカ	歯			
	06B46	SB0041	南西区	弥生後期	シカ	歯			
	06B124	SB0041	炉内	弥生後期	シカ(焼骨)	歯			焼骨
	06B125	SB0041	炉	弥生後期	シカ(焼骨)	歯			焼骨
	06B130	SB0067	北東の隅	弥生後期	シカ	歯			
	06B131	SB0067	南北ベルト中央	弥生後期	シカ	歯			
	06B132	SB0067		弥生後期	シカ	歯			
	06B134	SB0067	南北ベルト中央	弥生後期	シカ	歯			
	06B135	SB0067	炉1周辺	弥生後期	シカ	歯			
	06B5	SB0105		弥生後期	シカ	歯			
	06B28	SB0156	北区	弥生後期	シカ	歯			
	07B283-5	SB4030		弥生後期	シカ	歯片	不明		
	06B16	SB0035	南東区	弥生後期	シカ	歯?			
	06B107	SK0045			シカ	歯			
	06B30	SK0053		9C	シカ	歯			

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位	上下	備考
	06B108	SK0071		9C～10C	シカ	歯		
	08B60	SB7022		6C末～7C前	シカ	歯 不明		
	08B62	SB7023		7C前半	シカ	歯 不明		
	08B45	SB7001	南西区	7C後半	シカ	歯片 不明		
	06B89	SB0014		10C後半	不明 シカ歯	破片		
	06B1-2	SK0363 (HSEB0053)	Pit1		シカ	06B1-1の破片		
	06B117-2	SB0036	(B)	弥生後期	不明 シカ	破片		
	08B75	SB7027	Pit3	8C	シカ	破片		
	08B2	SD6002	II D-12	中世	鳥(ニワトリ)?	上腕骨	左	現住のもの
	07B382	SB5006		7C	キツネまたはタヌキ	距骨 軸椎		鳥の骨の破片含む。 07土327灰層サンプル4mm目から抽出
	06B144	①区 Ⅲ I-16	炭分布面		不明、モグラ	四肢骨片、モグラ上腕骨左右	左右	不明のものは焼骨、他にモグラ上腕骨左右あり カエル
PL311-7	06B150	SB0060		11C前半	カエル	骨		新しい時代の可能性
PL311-6	07B82-2	SD4002		中世	イヌ	下顎骨	左	
PL311-2	08B14	SD8003	I T-17	中世	不明 シカサイズ	四肢骨 骨幹	不明	風化が激しい、まっすぐ、断面円形、人骨ではない
	07B368-18	SD4002		中世	不明 中～大型哺乳類ウマかウシの可能性あり(サイズから)	椎骨(椎体)		
	07B309	SB3032	カマド	8C	イノシシまたはシカ	大腿骨?		後面 破片
	07B283-2	SB4030		弥生後期	焼骨	骨片		焼骨
	07B283-4	SB4030		弥生後期	不明	不明		

第43表 出土動物骨時代別一覧

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位	右左	上下	備考
	06B92	SB0019		弥生後期	イノシシ	歯M3	右	上	
	06B52	SB0033	Pit16	弥生後期	イノシシ	歯	M1左	下	
	06B85-1	SB0036	南西区	弥生後期	イノシシ	イノシシ臼歯	左	上	その他、大型動物の骨片
	06B114	SB0017		弥生後期	イノシシ	臼歯	不明	不明	臼歯
	07B305-1	SB4030		弥生後期	イノシシ?	上顎骨		上	
	06B23	SB0102	SB102 複炉内	弥生後期	イノシシ	側頭骨錐体			
	06B120-1	SB0036		弥生後期	イノシシ	左下顎(角部) 下顎歯(右M3[未萌出]) 右上顎骨破片			
	07B283	SB4030		弥生後期	イノシシ	腰椎骨	破片		若い個体
	06B84-1	SB0036		弥生後期	イノシシ	上腕骨椎種不明骨片			
	07B283-3	SB4030		弥生後期	イノシシ	挽骨遠位骨端	左		
	07B348-2	SB4030		弥生後期	イノシシ	中足骨Ⅲ	右		
	06B49	SB0036		弥生後期	イノシシ(焼骨)	基節骨			焼骨
	07B23	SB5006	SB5005、5006 南北ベルト(北)	7C	イノシシ含む	側頭骨錐体を含む			
PL311-5	08B59	SB7022		7C前半	イノシシ	下顎+歯 下左M2、下右M3	右		
	07B55	SB5022	カマド	6C中頃	イノシシ	中手骨か中足骨	不明		遠位半
	06B138	SB0076	カマド	8C中頃 (=SB0173と合体)	イノシシ	踵骨	右	遠位端	
	07B317	SB3072		8C中頃	イノシシ	足根骨			TIV 焼
	08B32	SD8006	I X-18	7C末～8C	イノシシ	頭蓋 後頭部 (左側頭骨+後頭骨)			
	07B283-5	SB4030		弥生後期	シカ	後頭部			
	06B119-1	SB0036		弥生後期	シカ	頭骨破片			
	06B117-1	SB0036	(B)	弥生後期	シカ(焼骨)	頭、四肢骨破片			(焼)
PL310-6	07B303	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨	左	下	P2～M3
PL310-5	07B350-1	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨 M1-3	右		
PL310-4	07B349	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨 dp3-M1	右	下	幼骨
	07B347-1	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨?			
	07B347-2	SB4030		弥生後期	シカ	下顎骨?			
	07B350-2	SB4030		弥生後期	シカ	頸椎			
	07B284-3	SB4030		弥生後期	シカ	椎体(胸椎?)			
PL311-4	06B80	SB0036		弥生後期	シカ	腰椎			
	06B115	SB0017、0025	炭・骨分布面	弥生後期	シカ(焼骨)	角			焼骨
	06B67-1	SB0036	Pit3	弥生後期	シカ	角			
PL301・310-1	06B81-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			カットマーク有り。 図版3-275
	06B81-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B81-1の破片			
	06B82-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			
	06B82-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B82-1の破片			
	06B83-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			
	06B83-2	SB0036		弥生後期	シカ	06B83-1の破片			
PL301	06B85-1-1	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	角(枝)			図版3-275
◇	06B85-1-2	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	角			カットマークあり。破片の端を丸く囲む切込み。

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位	右左	上下	備考
	06B102	SB0030		弥生後期	シカ	破片 角			
PL301	06B120-1-1	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 表面を一部残し切断。図版3-275
〃	06B120-1-2	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 表面は磨いてある。図版3-275
〃	06B120-1-3	SB0036		弥生後期	シカ	角			加工品 縦に割ってある。図版3-275
〃	06B120-1-4	SB0036		弥生後期	シカ	角			破片 切断? 特に加工なし。図版3-275
〃	06B120-1-5	SB0036		弥生後期	シカ	角			破片 切断? 特に加工なし。図版3-275
	07B276	SB3082 (HBSB3083)		弥生後期	シカ	角	破片		土製丸玉 抜き出し
	07B372-2	SB4030		弥生後期	シカ	歯	左	下 I 1	
	06B46	SB0041	南西区	弥生後期	シカ	歯			
	06B124	SB0041	炉内	弥生後期	シカ	歯			焼骨
	06B125	SB0041	炉	弥生後期	シカ	歯			焼骨
	06B130	SB0067	北東の隅	弥生後期	シカ	歯			
	06B131	SB0067	南北ベルト中央	弥生後期	シカ	歯			
	06B132	SB0067		弥生後期	シカ	歯			
	06B134	SB0067	南北ベルト中央	弥生後期	シカ	歯			
	06B135	SB0067	炉1周辺	弥生後期	シカ	歯			
	06B5	SB0105		弥生後期	シカ	歯			
	06B28	SB0156	北区	弥生後期	シカ	歯			
	06B4	SB0035		弥生後期	シカ	歯			
	06B87	SB0002	北東区	弥生後期	シカ	歯			
	06B58	SB0015		弥生後期	シカ	歯			
	06B60	SB0015		弥生後期	シカ	歯			
	06B57	SB0019		弥生後期	シカ	歯			
	06B99	SB0024		弥生後期	シカ	歯			
	06B56	SB0027		弥生後期	シカ	歯			
	06B101	SB0030		弥生後期	シカかカモシカ	歯			
	06B2	SB0035		弥生後期	シカ	歯			
	06B3	SB0035		弥生後期	シカ	歯			+ウマ下顎臼歯片
	06B16	SB0035	南東区	弥生後期	シカ	歯?			
	07B283-5	SB4030		弥生後期	シカ	歯片	不明		
	07B304			弥生後期	シカ	尺骨	左右 (左近位半 右骨幹部)		
PL301	06B85-1-3	SB0036	南西区	弥生後期	シカ	中手骨 近位端	右		カットマークあり。近位関節面。図版3-275
PL301	06B120-3	SB0036		弥生後期	骨製品 (刺突具)	種不明、中手骨または中足骨か。			骨製品 (刺突具)。図版3-275
PL311-3	06B90-1	SB0015	北側	弥生後期	シカ	脛骨遠位部	右		
	07B348-3	SB4030		弥生後期	シカ	右脛骨 遠位端	右		
PL301	06B121	SB0036	南西隅	弥生後期	シカ (骨製品未製品)	中足骨			骨製品 (刺突具)。図版3-275
	07B283-2	SB4030		弥生後期	シカ	骨幹片			シカ骨破片
	07B326	SB4030		弥生後期	シカ	中足骨			中節骨 遠位破片
	07B372-1	SB4030		弥生後期	シカ	足根骨 C+IV	左		
	07B305-2	SB4030		弥生後期	シカ	距骨	左右		
	07B283-1	SB4030		弥生後期	シカ	距骨	左		
	07B304	SB4030		弥生後期	シカ	基節骨 (2)	不明		ともに近位部のみ
	07B369	SB4030	中央区	弥生後期	シカ	中節骨			
	07B348-1	SB4030		弥生後期	シカ	末節骨			
	06B117-2	SB0036	(B)	弥生後期	シカ	破片			
	07B283-2	SB4030		弥生後期	焼骨	骨片			焼骨
	07B283-4	SB4030		弥生後期	不明	不明			
	06B18	SB0053	カマド	7C	シカ	距骨	左		焼骨
	07B53	SB5022	カマド	6C中頃	シカ	踵骨	左		一部焼骨
	07B51	SB5022	カマド	6C中頃	シカ	橈骨	右		近位半
PL310-3	07B31	SB5006		7C	シカ	角基部 (自然脱落)			基部 (自然脱落)
	06B38	SB0100		7C以前	シカ	手根骨			腕測手根骨
	06B36	SB0100		7C以前	シカ	歯			
	06B37	SB0100		7C以前	シカ	歯			
	06B34	SB0112		7C末~8C前	シカ	歯			
	08B60	SB7022		6C末~7C前	シカ	歯 不明			
	08B45	SB7001	南西区	7C後半	シカ	歯片 不明			
	08B62	SB7023		7C前半	シカ	歯 不明			
	07B12	SB5006		7C	シカ	距骨	右		
	07B341	SB5014		10C	シカ	末節骨	不明		焼骨
	06B162	SB0175	カマド	8C以前	シカ	中手骨片、右橈骨近位関節他			焼骨
	06B113-1	SB0115		8C中頃	シカ	角座部	右		
	06B113-2	SB0115		8C中頃	シカ	06B113-1の破片			
	08E75	SB7027	Pit3	8C	シカ	破片 (良)			
	07B309	SB3032	カマド	8C	イノシシまたはシカ	大腿骨?			後面 破片
	06B26	SB0121	カマド内	10C前半	シカ	椎骨 (腰椎下関節突起)			焼骨

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	時期	種名	部位	右左	上下	備考
	06B40	SB0121	カマド東(外)	10C前半	シカ	歯	右 M3	上	
PL311-1	06B11	SB0010		10C前半	シカ	下顎骨	左		関節頭(焼骨)
PL310-2	06B170	SB0022		11C前半	シカ	角			
	06B89	SB0014		10C後半	不明 シカ歯	破片			
SB311-7	06B150	SB0060		11C前半	カエル	骨			新しい時代の可能性
	06B171	SB0050		10C前半	シカ	角			
	06B104-1	SB0161		10C	シカ	角			
	07B57	SD5003	トレンチより南側	中世	シカ	下顎歯 P4, M1, M2	左		M2 わずかに摩耗
	07B57	SD5003	トレンチより南側	中世	シカ	上顎歯 dp4, M1, M2	左		
	08B1	SD6002	II D-12	中世	シカ	大腿骨 遠位十骨幹		下	胎児
	08B2	SD6002	II D-12	中世	鳥(ニワトリ)?	上腕骨	左		現住のもの
PL311-6	07B82-2	SD4002		中世	イヌ	下顎骨	左		
PL311-2	08B14	SD8003	I T-17	中世	不明 シカサイズ	四肢骨 骨幹	不明		風化が激しい まっすぐ 断面円形 人骨ではない
	07B368-18	SD4002		中世	不明 中~大型哺乳類 ウマカウシの可能性あり(サイズから)	椎骨(椎体)			
	06B178	SB0010	検出面	10C前半	シカ	肩甲骨			
	07B385	SB6038		8C後半	シカ	種子骨			
	08B95	SB7011		9C後半	シカ	中足骨			
	08B96	SB7026	カマド	9C前半	シカ	角			加工なし
	08B97	SB7028	南区	8C~9C	シカ	角			
	06B1-2	SK0363 (HBSB0053)	Pit1		シカ	06B1-1の破片			
	06B164	SK0031	南北先行トレンチ		シカ	中足骨片?			
	06B106	SK0043			シカ	角			焼骨
	06B107	SK0045			シカ	歯			
	06B30	SK0053		9C	シカ	歯			
	06B108	SK0071		9C~10C	シカ	歯			
	06B71-1	SK0325		10C	シカ	足根骨			
	08B76	SK7969			シカ	角			
	07B382	SB5006		7C	キツネまたはタヌキ	距骨 軸椎			鳥の骨の破片含む。 07土-327灰層サンプル4mm目から抽出
	06B144	I区 III I-16	炭分布面		不明, モグラ	四肢骨片, モグラ上腕骨左右	左右		不明のものは焼骨, 他にモグラ上腕骨左右あり カエル

第44表 時代別動物骨一覧(点数)

	シカ	イノシシ	イヌ	他
弥生	66	12		3
6世紀	2	1		
7世紀	9	2		1
8世紀	6	3		1
9世紀	4			
10世紀	10			
11世紀	1			1
中世	3		1	1
土坑 (時期不明)	5			
その他				2

106 18 1 9

合計  
134

第45表 イノシシとニホンジカの部位別出土状況(点数)

部位	イノシシ	ニホンジカ
頭部	8	12
角		27
歯(歯種不明)	2	32
椎骨	1	4
四肢骨	7	31
	18	106

歯(合計)					
		右	左	右	左
I1	上				
	下				1
I2	上				
	下				
I3	上				
	下				
P2	上				
	下				1
P3	上				
	下			1	1
P4	上				1
	下			1	2
M1	上				1
	下		1	2	2
M2	上				1
	下		1	1	2
M3	上	1		1	
	下	2		1	1
		3	2	7	13

### 3. 西近津遺跡群出土のウシ・ウマ骨について

本郷一美：総合研究大学院大学  
茂原信生：京都大学名誉教授  
櫻井秀雄：獨協医科大学

#### はじめに

長野県佐久市にある西近津遺跡群の古墳時代末～中世の遺構からは多数のウマ、ウシの骨が出土した。その多くは、中世の遺構、特に溝や土坑からの出土である。弥生時代とされる遺構からもごく少数の馬歯が出土しているが、単独の遊離歯や破片のみであり、混入と推定される。6世紀代のもものと推定される遺構からは、ウマまたはウシと確実に同定された出土骨がみつかっていないことから、この遺跡にウマ、ウシが導入されたのは早くも7世紀と考えられる。

出土骨は表面の風化が進み、脆い状態のものが多く、保存はあまり良くない。取り上げ後の分析により同定された骨にもとづき報告するが、土圧でつぶれ取り上げが難しかったものが多いので、出土時の所見に照らし可能なかぎり補足する。なお、西近津遺跡群からは種が特定できなかった破片骨も多く出土しており、住居跡内の炉やカマドからは焼けた骨の破片が出土している。

#### (1) ウシ (*Bos taurus*)

ウシの骨は95点同定された。出土地点と出土部位は表1に示す。出土時の状況と、歯のサイズや摩耗状態の観察から、同一個体に属すると推定される部位の数を補正した結果、これらは少なくとも34個体のウシに由来する骨と考えられる。大部分が平安時代末～中世の遺構からの出土であるが、古代に属する遺構からも数点出土している。出土数が少ないため、ウシのサイズや死亡年齢に時代的な変化があったかどうかはわからない。頭部や四肢の一部が比較的まとまって出土した例と、単独の部位や歯がウマなど他の動物の骨に混ざり出土した資料があるが、一体分が埋葬されたとみられる出土状況のものはなかった。以下に、体の一部がまとまって出土した資料について記述する。

##### SD4005 [写真 PL309-10, 13, 14, 16, 17]

遺跡内を北西から南東に走る平安時代末～中世にかけての溝の北西部から、一個体に属する左後肢の骨が出土した(07B285, 286, 287, 291)。脛骨は失われているが、骨盤の一部と仙骨から末節骨までほぼ全ての骨が含まれる。

##### SK8149 [写真 PL151-1, 305-1, 2, 3, 4, 5, PL306-2, 3]

ウシの頭部と四肢骨の一部を廃棄した土坑とみられ、一個体分の上下顎骨、頭部破片(07B223, 226, 365-1～13, 365-15)、左右の上腕骨(07B221, 225, 365-14)、左大腿骨(07B224, 346)、左脛骨(07B222, 346)が出土している。

##### SK8210 [写真 PL305-6]

一個体分のウシの頭部と下顎骨(07B295, 296, 345-1～3, 352-1, 2)を廃棄した土坑と思われる。M3が中程度に摩耗していることから5才以上の成獣であろう。この遺構からは左右の寛骨破片も出土しているが、頭部と同一個体かどうかは不明である。

##### SK7021 [写真 PL149-9, 306-5, 6]

右前肢の上腕骨、撓骨、中手骨(08B50～52)が出土している。関節部が破損しているため確実ではないが、おそらく同一個体に属し、前肢が土坑に廃棄されたものと推定される。サイズから、成獣と思わ

れる。

### ウシの大きさ

骨の計測は Driesch (1976) に准じた。四肢骨と歯をあわせ、23 点が計測された。四肢骨は骨の保存状態が悪く、関節部が残る計測可能な資料は少なかった。計測された資料数が少ないため、ウシのサイズの時代的な比較は難しいが、古代の層から出土したウシと平安時代～中世の層から出土したウシは同程度のサイズだった。SK8149 出土下顎骨 (07B365-13) の、歯列長、臼歯列長は在来種の口之島牛や見島牛のオスに近い (西中川 1991:166)。第3大臼歯の長さを比較すると、SB0112 (06B33)、SD8210 (07B345)、SB4039 (07B323)、SD4002 (07B353) 出土個体はこれと同程度の大きさか若干小さい。また、SD4005 出土 (中世) の中足骨近位端幅 (Bp) は在来種のウシより小さく、距骨、中節骨の計測値は、現生の在来種の口之島牛と同程度である。西近津遺跡のウシは、体高 120 センチ前後の小型ウシで、体格は日本在来種のウシと同等か、やや華奢であったと推定される。

### ウシの年齢

年齢推定は、歯の萌出と咬耗の状態および四肢骨関節部の癒合状態の観察により行った。年齢推定ができた資料のほとんどは 3～4 才以上の若成獣または成獣の骨で、6 カ月未満の幼獣の骨や歯はなかった。

下顎第4乳臼歯 (dp4)、第4前臼歯 (P4)、第1～3大臼歯 (M1, M2, M3) に関して Grant (1981) による咬耗段階により記録した (第46表)。年齢推定は Habermehl (1961)、Silver (1969)、Grigson (1981) の記述を総合して行った。歯の摩耗が観察できた資料は6点あった。第3大臼歯 (M3) の咬耗が中程度 (Grant による "M1" 段階) 以上に進んだ、4才半以上～老齢の個体が4点で、他の2点はこれより若い。SD4005 から出土した下顎骨 (07B365) は M3 が萌出完了し、わずかに摩耗しているが、咬耗が進んだ第4乳臼歯 (dp4) が残り、永久歯の第2～4前臼歯 (P2-P4) が萌出中である。現代の家畜ウシにおいては、前臼歯および M3 は 2～3 才で萌出が始まり、永久歯の歯列は遅くとも 4 才半までに萌出完了する (Habermehl, 1961) ことから、3 才～4 才の若成獣と推定される。もう1点 (08B16) は第1または第2大臼歯で、わずかに摩耗している。これが M1 であれば 6 カ月～1 才の若獣、M2 であれば 1 才半～2 才と推定される。

四肢骨の関節部の癒合状態が観察できたのは7点で、近位端骨頭が未癒合の大腿骨 (07B224) と遠位端が癒合した上腕骨 (08B51)、脛骨 (08B23)、近位端が癒合した基節骨 (07B285-1) 中節骨2点 (07B291-1) である。現代の家畜ウシで大腿骨近位端が癒合する年齢は、研究者や対象とした品種により異なるが、おおむね 3 才半～4 才とされ (Habermehl 1961, Silver 1969)、07B224 の大腿骨は同じく SD4005 から出土した上述の下顎骨とほぼ同年齢とみてよいだろう。したがって SD4005 出土の四肢骨と上下の顎骨は同一個体である可能性が高く、年齢は 3 才半程度の若成獣と推定される。他の6点はどれも骨端が比較的早く癒合する部位で、上腕骨遠位端は 15～18 カ月、脛骨遠位端は 24～30 カ月、基節骨は 18～24 カ月、中節骨はそれ以前に癒合する。しかし、これらも骨幹のサイズから成獣または成獣に近い年齢の個体の骨と推定される。

### 解体痕、焼骨

SB3055 からウシの下肢の焼骨2点が出土しているが、カマドからの出土で、廃棄後に火を受けたものと考えられる。解体痕が観察された骨は3点あり、SD4005 から出土した基節骨 (07B285, PL309-17) の前面と SK5002 から出土した大腿骨 (07B37-1) の骨幹に切痕がみられた。また、SD8006 から出土した大腿骨 (08B38) の骨幹部分には刃物で切断されたような痕がある。基節骨の切痕は、皮を剥く際についた可能性がある。

**(2) ウマ (*Equus caballus*)**

ウマの頭部や関節した四肢骨がまとまって出土した地点が多いが、土圧により割れているため原位置での観察のみ可能だった場合がほとんどで、四肢骨の全長や関節部のサイズが計測できた骨は限られる。一方、歯の保存は比較的良好で、歯列が全て残ったものが多数出土した。解体痕が残る骨はなかった。全体的に骨の保存が悪く、骨幹の表面が風化している資料が多いことが、解体痕が観察されなかった一因であろう。

2006年度、2007年度、2008年度発掘区から出土したウマを第47～49表に示す。大半は中世の溝跡に廃棄された骨だが、8世紀～11世紀に属する遺構からも出土している。出土した動物骨のうち、2006年度調査区では15点、2007年度調査区では201点、2008年度調査区では42点がウマと同定された。明らかに同一個体に属する歯と、出土状況と部位の分布から関節する可能性が高い四肢骨の数を補正すると、それぞれ10点、115点、15点だった。

**2006年度調査区 (1・2区) (第47表)**

住居址内から出土したものの多くは、遊離歯や歯の破片である。弥生時代後期とされるSB0024、SB0035からもウマの歯が出土しているが、単独の出土なので後代からの混入と推定される。他の出土ウマ骨で時期がわかるものはすべて古代に属するが、年代は7世紀末から10世紀と幅広い。SB0112からはほぼ完形の上顎骨と頭部が出土している。

**SK0004**

長方形の土坑から、ウマの頭部と四肢骨が出土し、位置関係から1個体が埋葬されたと思われる。土坑の北側から上下顎骨と歯が出土し、南側から後肢が出土している。骨の保存状態は悪い。顎骨は歯列と一部の骨が残るのみだが、上下の歯が噛み合わされた状態で出土したことから、もともと頭部全体があったと思われる(写真 PL303-1, 2)。後肢も出土時には関節した状態の位置関係で複数の部位が確認されたが、取り上げ後に同定が可能だったのは寛骨の一部と左脛骨のみでほかは破片化している。土坑中央部から前肢の一部と思われる骨幹部が出土したが、保存状態が悪く、種と部位の同定はできなかった。埋葬された個体と別個体由来と思われる下顎切歯も2点出土している。

**2007年度調査区 (3～6・8区) (第48表)**

出土したウマの大半は中世の溝に廃棄されたものである。数点の歯や四肢骨破片が古代の住居跡内や土坑から出土している。以下に、古代末～中世の溝からウマの骨がまとまって出土した地点の資料について記述する。

**SD8003**

遺跡内を北西から南東に走る溝跡で、ウマの右後肢の大腿骨、脛骨、中足骨がまとまって出土した(07B60～65)。1個体の足がそのまま廃棄されたもので、脛骨近位端が癒合していることから、成獣の骨と推定される(写真 PL308-8)。この遺構からは15～17才のウマの下顎骨も出土しているが、足と同一個体のものかどうかは不明である。

**SD4002**

遺跡内を北東から南西に走る溝跡で、北東部に骨が集中して出土した地点が複数ある。1個体の上下の顎や四肢の一部分の骨がまとまって出土している地点と、年齢が異なる複数個体の骨が混在したり、ウシの骨が混ざっていたりする地点がある。ウマやウシが解体後に溝に廃棄されたもので、比較的原位置を保って残った場合と、バラバラになったものが流されるなどして数カ所にたまった場合があったと考えられる。A区：左前肢の上腕骨、撓尺骨(07B71～73, 写真 PL307-12)、基節骨(07B74, 写真 PL309-7)が出土した。寛骨(07B76、77, 写真 PL308-2)、中足骨、下顎骨も出土したが、同一個体のものかどうかは不明である。

B区：寛骨、右後肢の大腿骨、脛骨（写真 PL308-9）、距骨（写真 PL309-5）、踵骨、中足骨が近接して出土した（07B81, 85, 89, 91, 97, 101）。脛骨遠位端に癒合線がみられることから、1才半程度の子ウマのものと推定される。未萌出の臼歯も出土しており、これも同程度の年齢のウマのものである。これら以外に、年齢が異なる複数の個体の骨が混在しており、左後肢の中足骨、年齢が4才以上と推定される下顎骨、歯が出土している。

E区：（写真 PL161-4・5）前肢、後肢の骨の一部と下顎骨が散乱した状態で出土し、ウシの骨も混じっていることから、廃棄されバラバラになった骨が流れ込んでたまった地点と思われる。左中手骨（07B114, 写真 PL309-1）の出土地点付近は、出土時の所見から上腕骨、手根骨など前肢の骨が折り重なって出土していたようである。この付近でもう一カ所、左前肢の上腕骨、撓尺骨などが重なって出土した（07B116, 写真 PL307-10, 11）。07B117でも前または後肢の骨の骨幹部がまとまって出土したが、部位の特定はできなかった。

F区：（写真 PL161-6）若いウマの1頭分の上顎歯が出土した（07B119～132, 138）。切歯を含む左右の歯がほぼそろっており、頭部が廃棄されたものだろう。第4前臼歯（P4）と第3大臼歯（M3）の萌出が始まっていることから、3.5才～4才と推定される。この地点からは他に頭部の骨の破片や後肢の骨がバラバラになった状態で出土している。

G区：F区に隣接する地点で、ウマの骨が07B148～151と07B151～161の2つのまとまりで出土した。前者には肩甲骨、脛骨、仙骨など前後の足の骨が含まれている。後者は大腿骨から末節骨まで右後肢のほぼ全部の骨と、左後肢の一部が含まれ、同一個体に由来する可能性が高い（写真 PL308-10, 12, 309-3, 6, 8）。踵骨の近位骨端が癒合しているため、少なくとも3才以上の若成獣か成獣である。

J区：四肢骨と頭部がまとまって出土している。成獣の左前後肢の骨が重複なく存在し（07B168, 169, 176, 177, 179, 182, 183, 185, 368-2, 5, 9, 31, 写真 PL308-13, 309-2, 4, 308-3）、右も脛骨、撓尺骨、手根骨、中手骨、基節骨が出土している（07B173, 174, 184, 186, 366-9, 写真 PL307-8）。頸椎、腰椎などの破片（07B368-1, 3, 4, 6, 9, 20）も出土していることから、1個体分の骨がまとまっていた可能性がある。しかし、14～5才以上のメスの上下顎（07B360-1, 2, 361）、15才前後のオスの下顎骨（07B366-1）、12～16才と推定される下顎骨（07B366-7）に加え、17才以上と思われる老齢の下顎切歯、臼歯、抜け落ちた第2乳臼歯（2才ぐらいか）も出土しており、年齢が異なる少なくとも5個体の骨が混在している可能性がある。ウマの骨に混じってウシの骨も出土していることから、J区の出土骨の中には溝に廃棄された後に流れ込んだ骨も混じっていると思われる。

L区：（写真 PL161-7）少なくとも3個体分の下顎骨と上顎骨1点が散乱した状態で出土し（写真 PL307-1, 4, 5, 6）、四肢骨も混在する（写真 PL308-4）。07B344の下顎骨が上顎骨（07B362）と最も近い地点から出土しており、これら2点の推定年齢は他の2点の下顎骨より少し若いことから、同一個体の上下顎の可能性はある。

## II W-25区

年齢が異なる複数個体の上下顎、歯、四肢骨がまとまって出土した（写真 PL308-6, 7）。歯の萌出状態と歯冠高による年齢推定から、2才程度、3～4才、5才、10才、12～13才の数個体の骨が混在していると思われる。四肢骨の多くは成獣のサイズであるが、若い個体の大腿骨骨幹部も出土している。

## 2008年度調査区（7区）（第49表）

### SK7719

長方形の土坑から、同一個体に由来する四肢骨が出土した（08B78～94、写真 PL150-3・4, 304-1～8）。

後肢は寛骨を含む左右の足がほぼ解剖学的位置を保っている。前肢は中手骨と指骨のみ出土した。前肢の上部、胴部、頭は調査範囲外に埋まったままになっていると考えられ、ウマ1頭を埋葬した遺構と推定される。出土したウマは、大腿骨の近位端、遠位端ともに癒合しているが、踵骨の近位端が癒合していないことから、3才ぐらいの若獣と推定される。

### SD7002

遺跡内を北東から南西に走る溝の南西部で、中層から上層より、ウマの骨がまとまって出土した（写真 PL162-8）。少なくとも2個体の頭部が同定された。1個体（07B11）は下顎左右と右上顎の乳歯列が残るのみだが、もともと完形の頭部があったと思われる。乳歯列 dp2～dp4 は生後8週ぐらいで生えそろうが、この個体はすでに咬耗が進んでいる。永久歯の M1 がいないので、数ヶ月～1才の子ウマであろう。もう1個体（07B17, 18）は、臼歯の咬耗がかなり進んでおり、犬歯があることからオスと同定された（PL307-2, 3, 7）。西中川による歯冠高を用いた年齢推定式にあてはめると、15～16才以上の老齢と推定される。上顎の前臼歯の歯冠は咬耗によりエナメル質がほとんどなくなっており、20才近い可能性もある。脛骨の破片、椎骨や仙骨の破片も出土しているが、これらが頭部と同一個体に由来するものかどうかは不明である。

### ウマの年齢、性別

出土したウマの年齢は、現生の西洋のウマの、歯が萌出する年齢（Habermehl 1961）、および四肢骨の骨端が癒合する年齢（Habermehl 1961；Silver 1969）に関するデータにもとづき推定した。また、切歯に関しては、Habermehl（1961）による摩耗段階の写真（p.51-53）を参照した。

萌出が完了し、咬耗が進んでいる前臼歯、臼歯の歯冠高を計測し、西中川・山元（1991, Table 4）による数式から月齢を推定した。この際、Total Height（cent.P.）に相当する、歯根分岐部から咬合面中央部の高さを用いた（植月 2011, 図 1）。歯列が残り、複数の月齢推定値が得られた場合は、P3-M2 の計測値から算定した月齢を優先し、年齢に換算して表に記入した。同一個体と思われる上下顎歯で、得られた推定年齢が2～3才異なる場合もあった。

歯にもとづく年齢推定ができたのは31個体で、乳歯のみの子ウマから永久歯の臼歯列がはえそろう前後（4～4.5才）の若いウマ（15個体、48%）と、歯の咬耗がかなり進んだ13～15才以上（11個体、35%）の年齢群に大別された。5才～10才と推定されたものは5個体だけだった。このことは、西近津遺跡群の近くにウマの生産地があり子ウマがいたことを示している。働き盛りの5～10才のウマの多くが他所に出荷された可能性がある。繁殖に使われなくなった15才前後以上の個体と、何らかの原因で死亡した幼・若獣が主にこの遺跡に廃棄または埋葬されたのであろう。犬歯の有無で性別を特定できたのはわずか3個体で、2個体がメス、1個体がオス、いずれも13～17才の個体だった。

四肢骨の骨端癒合状態にもとづく年齢推定では、骨の保存状態が悪く骨端が破損している資料が多いため、死亡年齢の傾向をとらえることが難しかった。骨端の状態が観察できた骨は33点（同一個体に由来するものを含む）で、その大半は骨端が癒合していた。骨端が癒合する時期が最も遅い部位は、大腿骨、脛骨の近位端、上腕骨の近位端、撓骨の遠位端、尺骨の近位端で、3.5才～4才である。若い個体の骨は、脆いため破片化しやすく、とくに癒合していない骨端は損傷を受けやすい。そのため、比較的保存がよいものでも骨幹部だけが残存した場合が多いと思われる。この結果、資料中に若年齢個体と同定できる四肢骨は少なく、歯から推定した年齢の分布との食い違いが生じた。

### ウマの大きさ

歯および四肢骨の計測は、Eisenmann（1986）に準拠して行った。

上顎歯、下顎歯の歯冠高、長さ、幅を（第51・52表）に示す。下顎の前臼歯列長（第52表の4）は72～85mm、臼歯列長（第52表の4b）は70～84mmで、大きさにややばらつきがあるが、西中川・山元（1990）によ

る日本在来馬の計測値と比較すると、トカラ馬、与那国馬、御崎馬などとおおむね同程度の大きさで、体高110～120cmの小型馬だったと推定される。

四肢骨の計測値は第50表①～⑭に示す。骨端が破損している資料が多く、体高との相関が最も高いと思われる全長（GL）が計測できた骨は少なかった。GLが計測できたのは中手骨2点（07B173、08B83）がそれぞれ220mm、201.1mm、中足骨が258.7mm、前肢基節骨（08B85）が73.4mm、後肢基節骨（07B157）が76.5mm、前肢中節骨（07B154-2）が43.8mm、距骨4点（07B157、07B191、08B82、08B94）が53.3～54.8mm、踵骨1点が89.9mmだった。やはり御崎馬程度かやや小さめの、体高110～120cmの体格だったと推定される。

SK0004出土とSK7719出土のウマは、一頭がそのまま埋葬されたとみられ、解体・廃棄された他のウマと異なった扱いを受けたウマであった可能性がある。これら2頭と他の出土馬の体格が異なるかどうかを検討した。SK0004出土馬は、上下の歯の計測値しか得られなかったが、それぞれの歯の全長をみると、出土したウマの中では大きめの個体だったと推測される。SK7719出土馬は大腿骨、中足骨、距骨、踵骨、中手骨、基節骨の計測値にもとづく比較が可能だったが、こちらは他の出土馬よりむしろ小さめの体格だったと推定される。

## まとめ

ウシ、ウマはともにおそらく7世紀ごろに西近津遺跡群に導入され、出土数はウマのほうがウシより多い。現生の在来種のウシ、ウマに近い小型のものだった。ウシの場合も、四肢の一部の骨がまとまって出土し、廃棄時には関節した状態だったと推定されるものはあるが、同一個体に属する骨がまとまって出土した例はウマの方が多い。しかし、明らかに一個体がそのまま埋葬されたとみられるのは、SK0004から出土したウマだけであった。また、解体痕はウシの骨には観察されたが、ウマの骨にはみられなかった。もともと、解体痕が全般的に少ないのは骨の保存状態の影響もあると思われる。ウマは4～4.5才以下の若い個体と繁殖年齢を終える13才以上の老齢個体が多く、1才以下の幼獣も出土している。ウシも、若獣と成獣の両方が出土している。このことは、西近津遺跡群または近隣でウマとウシの繁殖が行われていたことを示す。

ウマに関しては、働き盛りの年齢の成獣を欠く年齢構成から、4～5才に達すると他所に出荷されていた可能性もある。

## 引用・参考文献

- Driesch, A. von den (1976) A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1. Peabody Museum, Harvard University, Cambridge.
- Eisenmann, V. (1986) Comparative osteology of modern and fossil horses, half-asses, and asses. In Meadow R.H. & Uerpmann, H.-P (eds.) Equids in the Ancient World, pp.67-116. Wiesbaden: Dr.Ludwig Reichert Verlag.
- Grant, A. (1982) The use of tooth wear as a guide to the age of domestic ungulates. In Wilson, B., Grigson, C. & Payne, S. (eds.) Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, pp. 91-108. BAR British Series 109. British Archaeological Reports, Oxford.
- Habermehl, K.-H. (1961) Die Alterbestimmung bei Haustieren, Pelztieren und beim jagdbaren Wild. Berlin-Hamburg: Paul Parey.
- Grigson, C. (1982) Sex and age determination of some bones and teeth of domestic cattle: a review of the literature. In Wilson, B., Grigson, C. & Payne, S. (eds.) Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, pp. 7-23. BAR British Series 109. British Archaeological Reports, Oxford.
- 西中川駿・松元光春 1990「遺跡出土骨同定のための基礎的研究」西中川駿（編）『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究 平成2年度文部科学省科学研究費補助金 一般B 成果報告書』, pp.164-188.

Silver, I. A. (1969) The ageing of domestic animals. In Science in Archaeology, 2nd edition, edited by D. Brothwell and E.S. Higgs, pp. 283-302. Thames and Hudson, London.

植月 学 2011 「出土馬歯計測値の比較のための基礎的研究」『動物考古学』28：1-17.

第46表 西近津遺跡群出土のウシ

2006年度 (1・2区)

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	種名	部位	部位詳細	右左	備考	計測 (mm)	歯の咬耗段階 (Grant 1981) 四肢骨癒合状態
	06B19	SB0073		10C前半	ウシ	上顎歯	M2/3	右			
	06B33 -1, 2, 3	SB0112		7C IV, 8C I	ウシ	下顎骨	左 M2, 左右 M3 あり	左右		M3 (左) L : 38.8, B : 15.6 ; M3 (右) L : 38.5, B : 15.1	M3 : M1段階
	06B77 -1, 2, 3	SB0112		7C IV, 8C I	ウシ	上顎骨	M2, M3 あり	左		M3 (左) L : 32.5, B : 24.3	

2007年度 (3~6・8・9区)

	07B313	SB3055	カマド	8C中頃	ウシ	中手または中足骨	骨幹部			焼骨	
	07B314	SB3055	カマド	8C中頃	ウシ?	(指骨) 基節骨				焼骨	
	07B58	SD0007	(4区) 1層	平安末~中世	ウシ	歯片					
	07B323 -1, 2	SD3002 (SB4039)	SD3002 分流部	〃	ウシ	下顎骨	M1, M2, M3 あり	左		M3 L : 36.0, B : 15.7	M3 : M1段階
	07B133	SD4002	F区⑮	〃	ウシ	中足骨	骨幹部破片				
	07B139	SD4002	F区21	〃	ウシ	中足骨	前側 破片	左			
	07B174	SD4002	J区23	〃	ウシ	手根骨	中間, 撓側, 尺側, 第三	右			
	07B353	SD4002	E区⑥	〃	ウシ	下顎骨	P2-M3 あり	右		M3 L : 37.4, B : 14.1	
	07B368 -14	SD4002	J区29	〃	ウシ?	頭骨	上顎歯あり				老齢
	07B368 -16	SD4002	J区29	〃	ウシ	中節骨 近位部破片					
	07B216	SD4004		〃	ウシ	中足骨		左		基節骨破片もあり	
	07B217	SD4004		〃	ウシ	踵骨		右			
	07B230	SD4005		〃	ウシ?	中手骨	近位部				
PL309-17	07B285 -1	SD4005		〃	ウシ	後肢基節骨		左	285~291は同一個体 前面にカットマーク	Bp : 25.8, Bd : 22.6, Dp : 28.0, Dd : 19.7, GLPe : 54.6	近位端癒合
PL309-13	07B285 -2	SD4005		〃	ウシ	中足骨		左		Bp : 43.2	
PL309-16	07B285 -3	SD4005		〃	ウシ	足根骨 (中心, 第四)		左		中心足根骨 B : 46.9	
PL309-10	07B286	SD4005		〃	ウシ	大腿骨	ほぼ完形	左		風化激しく計測不可	
PL309-14	07B287	SD4005		〃	ウシ	踵骨		左		GB : 36.2	
	07B291 -1, 3	SD4005		平安末~中世	ウシ	寛骨・仙骨 距骨 中節骨2コ		左		距骨 GL1 (概測) : 59.6, Bd : 38.2, 末節骨 Bp : 21.8 : MBS : 20.2, 中節骨1 Bp : 26.9, Bd : 21.2, Dp : 26.7, Dd : 22.9, GLPe : 35.9 ; 中節骨2 Bp : 26.7, Bd : 21.5, Dd : 24.0, GLPe : 37.7	中節骨近位端癒合
	07B291 -2	SD4005		〃	ウシ	末節骨				Bp : 21.8, MBS : 20.2	
PL309-12	07B68	SD8006		7C末~8C	ウシ	中足骨	近位部 骨幹	左?		SD : 32.6	
PL306-4	07B330	SK4168		8Cか	ウシ	中足骨	骨幹	右			
PL306-1	07B37-1	SK5002		8C	ウシ	大腿骨	ほぼ完形、骨端は破片化	右	骨幹にカットマーク	SD : 45.3	
	07B37-2	SK5002		〃	ウシ?	指骨	破片				
PL305-5	07B221	SK8149		7C末~8C前	ウシ	上腕骨	骨幹	右	225, 365-14と同一?		
	07B225	SK8149		〃	ウシ?	上腕骨	遠位 内側関節部		221, 365-14と同一?		
	07B222	SK8149		〃	ウシ?	脛骨	骨幹中央部 後面	左	346脛骨と同一?		

第7節 出土骨に関する分析

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	種名	部位	部位詳細	右左	備考	計測 (mm)	歯の咬耗段階 (Grant 1981) 四肢骨癒合状態
PL306-3	07B346	SK8149		〃	ウシ	脛骨		左	222と同一？ 若獣		
	07B224	SK8149		〃	ウシ	大腿骨	骨頭		346大腿骨と同一		未癒合
PL306-2	07B346	SK8149		〃	ウシ	大腿骨	骨幹部のみ	左	224 骨頭と同一		
	07B223	SK8149		〃	ウシ	歯片			365と同一個体由来？		
	07B226	SK8149		〃	ウシ	下顎頭		左	365と同一個体由来？		
	07B226	SK8149		〃	ウシ	錐体		左右	365と同一個体由来？		
PL305-3	07B365-1	SK8149		〃	ウシ	上顎歯	P3	右	365-1~13は1個体分の上下顎歯すべてあり		
〃	07B365-2	SK8149		〃	ウシ	上顎歯	P3	左			
〃	07B365-3	SK8149		〃	ウシ	下顎歯	dp4	左			dp4摩耗, P4 未崩出
〃	07B365-4	SK8149		〃	ウシ	下顎歯	P3	左			
〃	07B365-5	SK8149		〃	ウシ	下顎歯	dp4	左？			dp4摩耗, P4 未崩出
〃	07B365-6	SK8149		〃	ウシ	下顎歯	I	左右			
〃	07B365-7	SK8149		〃	ウシ	下顎歯	I1, P2	左			I1未崩出
〃	07B365-8	SK8149		〃	ウシ	上顎歯	P3, P2?	左			P2, 3萌出中
〃	07B365-9	SK8149		〃	ウシ	上顎歯	M1, M2, M3	右			M3崩出完了、少し摩耗
〃	07B365-10	SK8149		〃	ウシ	上顎歯	M1, M2, M3	左		M3L : 30.5 ; B : 22.5	M3崩出完了、少し摩耗
〃	07B365-11	SK8149		〃	ウシ	下顎骨	下顎枝	右			
PL305-1, 2	07B365-13	SK8149		〃	ウシ	下顎骨、歯	P2-M3 (右P3, P2欠)	左右		左 M3L : 39.8, B : 13.7; 歯列長 (P2-M3) : 154.0 ; 臼歯列長 : 96.8	M1 : h, M2 : g, M3 : b/c (M3の萌出完了)
PL305-4	07B365-14	SK8149		〃	ウシ	上腕骨	骨幹	左	221, 225と同一？		
	07B365-15	SK8149		〃	ウシ？	下顎筋突起					
	07B295	SK8210		8C	ウシ	頭蓋骨	錐体	左	345と同一個体？		
	07B296	SK8210		〃	ウシ	歯	不明	不明	345と同一個体？		
	07B345-1	SK8210		8C	ウシ	上・下顎歯	上顎左不明M, P2, 上顎右 P4, M1, M2, M3, 下顎右 M3	左右	295, 296と同一個体？	右 M3L : 39.6, B : 16.6	M1段階
	07B345-2	SK8210		〃	ウシ	下顎骨			295, 296と同一個体？		
	07B345-3	SK8210		〃	ウシ	歯	歯根		295, 296と同一個体？		
PL305-6	07B352-1	SK8210		〃	ウシ	寛骨	寛骨臼	左	右恥骨部分もあり		

2008年度 (7区)

	08B10	SD7002	II D-09	中世以降	ウシ	距骨		左		GLm : 60.5	
	08B7	SD7002	II D-13	中世以降	ウシ？	脛骨？	破片	左	7.18-6, 7は同一個体由来？		
	08B18-6	SD7002	II D-13	〃	ウシ	中心足根骨	破片		7.18-6, 7は同一個体由来？		
PL309-15	08B18-7	SD7002	II D-13	〃	ウシ	踵骨		左	7.18-6, 7は同一個体由来？		
PL309-9	08B19	SD7002	II D-13	〃	ウシ	大腿骨	骨幹	右			
	08B16	SD8006	I X-09 B層	7C末~8C	ウシ	上顎歯	M1かM2	左		L : 32.2, B : 21.5	わずかに摩耗
PL309-11	08B23	SD8006	I T-18 C層	中世以降	ウシ	脛骨	ほぼ完形 (近位端欠)	左	38と同一個体？	SD : 31.6 ; Dd (概測) : 47.0 ; Bd : 62.7	遠位端 癒合
	08B34	SD8006	I X-06 C層	〃	ウシ	下顎歯	M2	左			
	08B38	SD8006	I X-10	〃	ウシ	大腿骨		左	23と同一個体？ 切断痕あり		
	08B42	SK7020		平安	ウシ	踵骨 中足骨 (骨幹)		左			

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	種名	部位	部位詳細	右左	備考	計測 (mm)	歯の咬耗段階 (Grant 1981) 四肢骨癒合状態
	08B42	SK7020		々	ウシ	基節骨、末節骨	破片				
	08B49	SK7023	II D - 19, 20	8C	ウシ	中手骨	遠位端と骨幹破片		前後につぶれている		
	08B50	SK7021		々	ウシ	中手骨					
PL306-5	08B51	SK7021		々	ウシ	上腕骨		右		SD : 41.5	遠位端癒合
PL306-6	08B52	SK7021		々	ウシ	橈骨		右		Dd (概測) 43.9	

第47表 西近津遺跡群出土のウマ (1・2区)

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	計測
	06B98-1, 2	SB0022 SB0024	検出面	11C前半 (SB0024は弥生後期)	上顎歯	臼歯 (M3)	右			4-5才								1	有
	06B100	SB0029	カマド内	10C前半	下顎歯	破片													
	06B3	SB0035		弥生後期	下顎歯	臼歯破片													
	06B22	SB0074		9C後半	下顎歯	臼歯 (M3)	右			未萌出、3.5-4才								1	有
	06B76-1, 2	SB0112		7C IV, 8C I	上・下顎骨	P2-M3	右			5-7才		1	1	1	1	1	1	1	有
	06B79-1, 2, 3	SB0112		7C IV, 8C I	上顎骨	左右とも P4, M1-3	左右			15-17才					1	1	1	1	
	06B6-1, 2	SK0004	検出	古代か	側頭骨 下顎歯	切歯1本		ウマ埋葬		172-1, 2と同一個体か		1							
	06B7-1, 2	SK0004	南ブロック	々	寛骨	白部		ウマ埋葬											
	06B172-1, 3	SK0004	馬塚墓北ブロック	々	上顎骨	P2-M3あり	左右		172-2と同一個体	4才 P2, 3わずかに咬耗, P4萌出中, M3萌出開始			2	2	2	2	2	2	有
PL303-1, 2	06B172-1, 3	SK0004	馬塚墓北ブロック	古代か	下顎骨	P2-M3あり	左右		172-2と同一個体	4才 P2, 3わずかに咬耗, 乳臼歯dp4が残る, P4萌出中, M3萌出開始			2	2	2	2	2	2	有
	06B172-2	SK0004	馬塚墓北ブロック	々	上顎骨	切歯	左右		172-1の歯	I1 はわずかに咬耗, 4才		I1-3							
	06B172-2	SK0004	馬塚墓北ブロック	々	下顎歯	切歯	右		他の切歯と別個体	わずかに咬耗		I3							
	06B173	SK0004	馬塚墓中央ブロック	々	下顎歯	切歯	右?			老		1							
	06B174-1	SK0004	馬塚墓南ブロック	々	脛骨	骨幹 中央部	左		172-1, 2と同一個体										
	06B174-2, 3, 4, 5, 6, 7, 8	SK0004	馬塚墓南ブロック	々	四肢骨	骨幹部破片				174-1の破片? 172-1, 2と同一個体か。									
	06B110-1, 2	SK153			上顎歯		右						1						有

第48表 西近津遺跡群出土のウマ (3~6・8区)

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
	07B1	SD5001		古代末~中世	上顎歯	M1/M2	右			3-5才									1	有
	07B2	SD5001		々	椎骨		-		おそらくウマ											
	07B5, 6	SD5001		々	上腕骨	遠位部 骨幹	右													
	07B5	SD5001		々	橈骨	骨幹	右													
PL308-5	07B342-1	SD5001		々	寛骨	白部	左													
	07B342-2	SD5001		々	下顎骨	P2-M3 (破片)	右			18才 (歯根近くまで摩耗)			1	1	1	1	1	1		有
	07B59	SD8003		々	下顎骨	歯あり	左	象牙質風化	同一個体	15-17才				1	1	1	1	1	1	有
	07B59	SD8003		々	下顎骨	歯あり	右	象牙質風化	同一個体				1	1	1	1	1	1	1	有
	07B59	SD8003		々	歯	切歯		象牙質風化	同一個体											
	07B60	SD8003		々	脛骨	骨幹	左													
	07B61-1	SD8003		々	中足骨	骨幹、遠位端	右		67と同一?	遠位端 癒合										有

第7節 出土骨に関する分析

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
PL308-8	07B61-2	SD8003		◇	脛骨	ほぼ完形	右			近位端 癒合?										
	07B61-3	SD8003		◇	大腿骨	遠位	右													
	07B63	SD8003		◇	大腿骨	遠位端内側	右			成獣										
	07B64	SD8003		◇	中足骨	近位端, 骨幹	右?		61-1と同一?											有
	07B65	SD8003		◇	大腿骨	近位部骨幹	-													
	07B67	SD8006		7C末~8C	下顎歯		右													
	07B70	SD4002	A区①東	古代末~中世	上腕骨	遠位骨幹	左		70-75, 355は近接											有
PL307-12	07B71, 72, 73	SD4002	A区①西	◇	橈尺骨	骨幹	左		70-75, 355は近接											
PL309-7	07B74	SD4002	A区⑤	◇	基節骨		左?		70-75, 355は近接	近位端 癒合										有
	07B75	SD4002	A区⑥	◇	下顎歯	切歯	左		355と同一?	比較的若い(おそらく10歳以下)										
	07B355-1	SD4002	No4 A区④	◇	下顎骨	P2-M3	左		75と同一?	10才前後		1	1	1	1	1	1			有
	07B355-2	SD4002	No4 A区④	◇	下顎骨	破片			70-75, 355は近接											
PL308-2	07B76, 77	SD4002	A区⑧	◇	寛骨	臼部	左													有
	07B78, 79	SD4002	A区⑨	古代末~中世	中足骨	骨幹	右													有
	07B80	SD4002	A区⑩	◇	下顎歯	未崩出のM2, M3	左			1歳半~2歳										
PL308-9	07B81	SD4002	B区①	◇	脛骨	遠位部	右		81-101近接	遠位端癒合線あり、1歳半ぐらい										有
	07B82-1	SD4002	B区②西	◇	中足骨	ほぼ完形	左		81-101近接	遠位端癒合										有
	07B84	SD4002	B区④	◇	下顎歯	M3	右		81-101近接	4-8才							1			有
PL309-5	07B85	SD4002	B区⑤北ブロック	◇	距骨		右		81-101近接											有
	07B89	SD4002	B区⑧	◇	中足骨		右?		81-101近接											
	07B90	SD4002	B区⑨	◇	寛骨	臼部	-		81-101近接											
	07B91	SD4002	B区⑩	◇	踵骨		右		81-101近接											
	07B92	SD4002	B区⑪	◇	下顎歯	臼歯(M1/M2)	左		81-101近接	未崩出, 1-2才									1	
	07B95	SD4002	B区⑭	◇	下顎骨	P2~M2	左		81-101近接	4才		1	1	1	1	1				有
	07B96	SD4002	B区⑮	◇	下顎歯	M2~M3	左		81-101近接	4才						1	1			有
	07B97, 101	SD4002	B区⑯	◇	大腿骨	近位端	右		81-101近接	近位端癒合										有
	07B98	SD4002	B区⑰	◇	肩甲骨	関節部	右		81-101近接											
	07B99	SD4002	B区⑱	◇	脛骨骨幹部		右		81-101近接											有
	07B106	SD4002	C区⑤	◇	上腕骨	遠位部	左													
	07B107	SD4002	D区①	◇	橈尺骨	破片	右													
	07B109	SD4002	E区②	◇	脛骨?		不明		108-114近接, 115-118はその下											
	07B111	SD4002	E区④	◇	下顎骨歯あり		左		108-114近接, 115-118はその下	2才未満 M2, P4, M3未崩出, P2, P3, M1崩出, (摩耗少し)		1	1	1	1	1	1			有
	07B113	SD4002	E区⑦	◇	橈尺骨	破片	右		108-114近接, 115-118はその下											
PL309-1	07B114	SD4002	E区⑧	◇	中手骨	ほぼ完形(遠位部欠)	左	出土時は上腕骨あり	108-114近接, 115-118はその下	遠位端 癒合										
	07B115	SD4002	E区⑫	◇	脛骨	遠位部 破片	右		108-114近接, 115-118はその下											
PL307-10	07B116-1	SD4002	E区⑨	◇	上腕骨	ほぼ完形(近位部欠)	左		108-114近接, 115-118はその下	遠位端 癒合										有

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
PL307-11	07B116-2	SD4002	E区⑨	◇	桡尺骨	骨幹	左		108-114近接、115-118はその下											有
	07B117	SD4002	E区⑩	◇	骨幹				108-114近接、115-118はその下											
	07B119	SD4002	F区①	◇	上または下顎歯	切歯 破片				乳歯の可能性	1									
	07B120	SD4002	F区②	◇	上顎歯	I 2	左		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	摩耗 少ない 4-5才										有
	07B121	SD4002	F区③	◇	上顎歯	I 2	右		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	摩耗 少ない 4-5才										有
	07B122	SD4002	F区④	◇	上顎歯	I 3	左		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	摩耗少ない 歯根が開いている										有
	07B123	SD4002	F区⑤	◇	上顎歯	I 3	右		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	I 3, 摩耗少 歯根が開いている 4-5才										有
	07B124	SD4002	F区⑥	古代末~中世	上顎歯	I 3	左			未崩出歯冠 4才										有
	07B125	SD4002	F区⑦	◇	上顎歯	M1	右		125-130は同一						1					有
	07B126	SD4002	F区⑧	◇	上顎歯	M2	右		125-130は同一							1				有
	07B127	SD4002	F区⑨	◇	上顎歯	P 2	右		125-130は同一			1								有
	07B128	SD4002	F区⑩	◇	上顎歯	P 3	右		125-130は同一				1							有
	07B129	SD4002	F区⑪	◇	上顎歯	P 4	右		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	萌出開始 3.5才				1						有
	07B130	SD4002	F区⑫	◇	上顎歯	M3	右		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	萌出前 3.5-4才							1			有
	07B131	SD4002	F区⑬	◇	上顎歯	M2	左		131, 132, 138 は同一							1				有
	07B132	SD4002	F区⑭	◇	上顎歯	M3	左		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	萌出開始 4才							1			有
	07B138	SD4002	F区⑳	◇	上顎歯	P 2-M1	左		同一個体 (#120-123, 125-132, 138)	P 4 わずかに摩耗		1	1	1	1					有
	07B134	SD4002	F区⑯	◇	踵骨		左													
	07B135	SD4002	F区⑰	◇	椎骨		-													
	07B136	SD4002	F区⑱	◇	寛骨?		-													
	07B141	SD4002	F区23	◇	破片															
	07B142	SD4002	F区24	◇	側頭骨	錘体部	左右													
	07B144	SD4002	F区26	◇	中足骨		左	おそらくウマ	148, 157と同一個体の可能性あり											
	07B148	SD4002	G区①	◇	肩甲骨		-		148~151は近接											
	07B149	SD4002	G区②	◇	脛骨		左		148~151は近接											
	07B151	SD4002	G区③-2	◇	仙骨		-		148~151は近接											
	07B153	SD4002	G区⑤	◇	脛骨		右		152-159近接											
	07B154-1	SD4002	G区⑥	◇	大腿骨		右		152-159近接											
	07B154-2	SD4002	G区⑥	◇	中節骨		右		152-159近接	近位端癒合										有
PL308-10	07B155-1, 2	SD4002	G区⑦	◇	中足骨	ほぼ完形	右		152-159近接	遠位端 癒合										有
PL308-12	07B156-1, 2	SD4002	G区⑧	◇	中足骨	ほぼ完形 (近位部欠)	左		152-159近接	遠位端 癒合										有
PL7309-6	07B157	SD4002	G区⑨	◇	距骨		右		152-159近接											有
PL309-8	07B157	SD4002	G区⑨	◇	基節骨	後肢	左		152-159近接	近位端癒合										有
	07B158	SD4002	G区⑩	◇	距骨		左		152-159近接											
	07B158	SD4002	G区⑩	◇	脛骨	遠位端			152-159近接											
	07B158	SD4002	G区⑩	◇	指骨	2点			152-159近接											
PL309-3	07B159	SD4002	G区⑪	◇	踵骨		右		152-159近接	近位端癒合 成獣										有
	07B159	SD4002	G区⑪	◇	膝蓋骨				152-159近接											

第7節 出土骨に関する分析

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
	07B160	SD4002	G区⑫	◇	手根ある いは足根		-													
	07B161	SD4002	G区⑬	◇	末節骨	後肢?	右?													有
	07B166	SD4002	J区⑤	◇	肩甲骨				164-166は近接 179-181前肢と 同一か											
	07B167	SD4002	J区⑥	◇	上顎歯	臼歯	左													
	07B168	SD4002	J区⑧	◇	肩甲骨?				168-169, 179- 183近接 164-166と同一 か?											
	07B169	SD4002	J区⑩	◇	古代末~ 中世	脛骨?	遠位端	左	168-169, 179- 183近接 164- 166と同一か?											
	07B179 -1, 2	SD4002	J区⑪	◇	上腕骨		左		168-169, 179- 183近接 164- 166と同一か?											
	07B180, 181	SD4002	J区⑫	◇	側頭骨	錘体 頭骨 片少々	左		168-169, 179- 183近接 164- 166と同一か?											
	07B172	SD4002	J区⑰	◇	頸椎	第3-4														
	07B172	SD4002	J区⑱	◇	上顎歯	乳臼歯 dp2	左			抜けたもの。 若い										
	07B176	SD4002	J区⑦-2 (⑦-1下)	◇	脛骨		左													
PL308 -3	07B177	SD4002	J区⑰	◇	寛骨	白部	左													有
PL309 -2	07B182	SD4002	J区⑮	◇	中手骨	2点	左			遠位端癒合										有
	07B183	SD4002	J区⑬	◇	大腿骨	骨頭	左			近位端癒合										有
	07B183	SD4002	J区⑬	◇	側頭骨	錘体	右													
	07B185	SD4002	J区26	◇	中足骨	遠位端欠	左													有
	07B189	SD4002	J区32	◇	下顎歯	切歯	左			11才以下										
	07B173	SD4002	J区22	◇	中手骨		右		173-4, 178近接	遠位端癒合										有
	07B174	SD4002	J区23	◇	基節骨 (前肢)	前肢	右		173-4, 178近接	近位端癒合										有
	07B178 -1, 2	SD4002	J区⑳	◇	脛骨		右		173-4, 178近接	遠位端癒合										有
	07B184	SD4002	J区21	◇	桡尺骨		右													
	07B186	SD4002	J区27	◇	手根骨	第三	右													
	07B360 -1, 2	SD4002	J区24	◇	上顎骨	P2~M3	左右		360, 361は同一 個体	15-17才			2	2	2	2	2	2		有
	07B361	SD4002	J区25	◇	下顎骨 はは完形		左右		360, 361は同一 個体	13-4才	メス?		1	1	1	2	2	1		有
	07B366 -1	SD4002	J区31	◇	下顎骨	P2~M3, 犬歯あり	左	左M1-M2 咬耗異常	同一個体左右	15才前後	オス		1	1	1	1	1	1		有
	07B366 -1	SD4002	J区31	◇	下顎骨		右		同一個体左右	15才前後	オス	3				1	1			有
	07B366 -1	SD4002	J区31	◇	下顎歯	M1, 2	右			17才						1	1			有
	07B366 -2	SD4002	J区31	◇	下顎骨	底部														
	07B366 -3	SD4002	J区31	◇	側頭錐体 部		左													
	07B366 -3	SD4002	J区31	◇	下顎骨		左右													
	07B366 -4	SD4002	J区31	◇	末節骨		不明													有
	07B366 -5	SD4002	J区31	◇	下顎骨	角部	左													
	07B366 -6	SD4002	J区31	◇	下顎骨	正中部														
	07B366 -7	SD4002	J区31	◇	下顎骨	M2, M3 あり	右			12-16才							1	1		有
	07B366 -8	SD4002	J区31	◇	下顎骨 関節突起 (2点)		左右													
PL307 -8	07B366 -9	SD4002	J区31	◇	上腕骨	骨幹	右													有
	07B366 -10	SD4002	J区31	◇	下顎歯	切歯	左			老(20才超?)		1								

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
	07B368-1	SD4002	J区29	＊	頭骨			おそらくウマ												
	07B368-1, 18, 27	SD4002	J区29	古代末～中世	椎骨破片			おそらくウマ												
PL308-13	07B368-2	SD4002	J区29	＊	中足骨	ほぼ完形(近位部欠)	左			遠位端 癒合										有
	07B368-3, 4	SD4002	J区29	＊	軸椎			おそらくウマ												
PL309-4	07B368-5	SD4002	J区29	＊	踵骨		左			近位端癒合										有
	07B368-6, 9	SD4002	J区29	＊	頸椎			おそらくウマ												
	07B368-7	SD4002	J区29	＊	歯破片															
	07B368-8	SD4002	J区29	＊	寛骨(恥骨)		右													
	07B368-9	SD4002	J区29	＊	肩甲骨		左?		168の一部?											
	07B368-15	SD4002	J区29	＊	上顎歯	前臼歯	右		172乳臼歯と同一?	永久歯形成中, 3才以下										
	07B368-17	SD4002	J区29	＊	上顎歯	乳臼歯 dp3, 4	左右		172乳臼歯と同一?	3才以下										有
	07B368-19	SD4002	J区29	＊	寛骨白破片			おそらくウマ												
	07B368-20	SD4002	J区29	＊	椎骨(腰椎)			おそらくウマ												
	07B368-21	SD4002	J区29	＊	中手or中足			おそらくウマ												
	07B368-22	SD4002	J区29	＊	上腕骨															
	07B368-23	SD4002	J区29	＊	下顎?		右													
	07B368-31	SD4002	J区29	＊	寛骨		左													
	07B190	SD4002	K区①	＊	橈尺骨		右													
	07B191	SD4002	K区②	＊	距骨		左													有
	07B205	SD4002	K区 II X-07	＊	上顎歯	臼歯破片	右													
	07B207	SD4002	K区 C-D パルト内	＊	上顎歯	dp3またはdp4	右			3-4才 歯根が吸収され始めている										有
	07B193	SD4002	M区①	＊	中足骨 距骨		右													有(距骨)
	07B195	SD4002	M区③	＊	下顎歯	破片														
	07B197	SD4002	N区②	＊	腕・尺骨		右													
PL308-4	07B200	SD4002	L区④	＊	寛骨	臼部	左													
	07B201	SD4002	L区⑦	＊	上顎歯	乳切歯破片	右			2才前後?										有
	07B202	SD4002	L区⑧	＊	中足骨		左													
PL307-1	07B344	SD4002	L区⑤	＊	下顎骨, 歯下顎体部	右の歯あり, 別個体の歯の破片1点あり	左右		344(右), 358(左), 367(左) 362(上顎)はほぼ同地点で出土。	13才		1	1	1	1	1	1			有
PL307-4	07B358	SD4002	L区③	＊	下顎骨	ほぼ完形	左			16才	メス	1	1	1	1	1	1			有
PL307-6	07B362	SD4002	L区⑥	＊	上顎骨	P3～M3	左右		344と同一個体か?	15才			2	2	2	2	2			有
PL307-5	07B367	SD4002	L区②	＊	下顎骨	P3, M1～M3	左			17才	メス		1		1	1	1			有
	07B203	SD4002	トレンチ SP. I-J	＊	脛骨		右			B区の骨に近接										
	07B204	SD4002	トレンチ SP. G-H	＊	顎骨破片?			おそらくウマ		B区の骨に近接										
	07B206	SD4002	SP. I-J付近	古代末～中世	下顎歯	臼歯破片				B区の骨に近接										
	07B208	SD4002	パルト内 SP. I-J	＊	上顎歯	I2, 破片3ヶあり	右			B区の骨に近接										

第7節 出土骨に関する分析

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	右左	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
	07B245-1	SD4002	II W-25	◇	下顎骨 歯あり	P2-M3	左右		253と同一個体	P、M2、M3の 歯根が開いている。 4-5才			2	2	2	2	2	2		有
	07B245-2, 3, 4	SD4002	II W-25	◇	手根骨Ⅲ ほか		左		246, 263, 273 と同一個体?											
	07B246-1	SD4002	II W-25	◇	上腕骨	骨幹遠位部	左		245, 263, 273 と同一個体?											
	07B246-2	SD4002	II W-25	◇	上顎歯	M1 dp4	右		252と同一個 体?	3-4才					1				dp4	有
	07B246-2	SD4002	II W-25	◇	上顎歯	dp4	左		252と同一個 体?	3-4才 歯根が吸収され 始めている									dp4	有
	07B251	SD4002	II W-25	◇	上顎骨	臼歯破片あ り	左													
	07B252	SD4002	II W-25	◇	上顎骨	dp3/dp4	右			3-4才以下									dp3/4	有
	07B255 ~ 258, 260	SD4002	II W-25	◇	上顎歯	P2~M2	左		259と同一個 体?	M2崩出中 2才			1	1	1	1	1			有
	07B259	SD4002	II W-25	◇	上または 下顎歯	切歯破片			乳切歯を含む少 なくとも2点 260と同一個 体?	幼										
	07B249	SD4002	II W-25	◇	肩甲骨															
	07B250	SD4002	II W-25	◇	大腿骨		左		269と同一?											
	07B253	SD4002	II W-25	◇	下顎歯	切歯 I1-3			245-1と同一個 体	5才前後		3								有
	07B254	SD4002	II W-25	◇	上または 下顎歯	切歯破片														
	07B263	SD4002	II W-25	◇	桡尺骨		左		273, 245, 246 と同一個体?											
	07B264	SD4002	II W-25	◇	大腿骨	骨幹	右		267, 268と 同一個体?	若										
	07B265	SD4002	II W-25	◇	上顎歯、 下顎歯	M1	左	上顎歯は破損		12-3才						2				有
	07B266	SD4002	II W-25	◇	脛骨		右													
	07B267, 268	SD4002	II W-25	◇	大腿骨	遠位部 骨 幹	右		264と 同一個体?											
	07B269	SD4002	II W-25	◇	大腿骨		左?		250と 同一個体?											
	07B270	SD4002	II W-25	◇	寛骨		左													有
PL308 -7	07B271	SD4002	II W-25	◇	脛骨	骨幹	左													有
PL308 -6	07B272	SD4002	II W-25	◇	脛骨	骨幹	右													有
	07B273	SD4002	II W-25	◇	桡尺骨	近位部	左		263, 245, 246 と同一個体?											有
	07B274	SD4002 SD4007	II W-25 合流地点	◇	距骨	他に寛骨臼 破片あり	右													有
	07B275 -1, 2	SD4002 SD4007	II W-25 合流地点 上層	◇	中手骨	骨幹	不明													有
	07B275 -3	SD4002 SD4007	II W-25 合流地点 上層	◇	下顎骨	M3	左			10才										有
	07B277	SD4002	II W-25	◇	脛骨	骨幹	右	おそらくウマ												有
	07B320	SD4002	II W-25	◇	上顎歯	P4	左	M1/2の可能 性も		4才				1						有
	07B211	SD4004		◇	脛骨?	骨幹部		おそらくウマ												
PL307 -13	07B212	SD4004		◇	古代末~ 中世	腕・尺骨	近位半	左												有
	07B214	SD4004		◇	上腕骨	遠位部	左													
PL308 -1	07B218	SD4004		◇	肩甲骨		左													有
	07B328	SD4004		◇	上腕骨	遠位骨幹	左													
	07B229	SD4005		◇	脛骨	骨幹部	右													
	07B231	SD4005		◇	上腕骨?			おそらくウマ												
	07B232 ~ 236	SD4005		◇	上顎歯	P3?, P4?, M1-3	左		同一個体	4才			1	1	1	1	1	1		有
	07B237 ~ 241	SD4005		◇	上顎歯	P3~M3 (M2は破片)	右		同一個体	4才			1	1	1	1	1	1		有

第9章 科学分析・鑑定

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置層	時期	部位	部位詳細	左右	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測
	07B316	SB3060		10C前半	下顎歯	M2	右										1			有
	07B297	SB4004	B区 トレンチ	10C前半	下顎歯	破片		破片												
	07B322	SB4020		7C前半	上腕骨	遠位部 骨幹 破片	左													
	07B339	SB5005 SB5006	南北 トレンチ北	7~8C	下顎歯	M3	右			8才								1		有
PL303 -3	07B38	SK5002		8C	上腕骨	ほぼ完形 (近位端欠)	左			遠位端 癒合										有
	07B222	SK8149		7C末~ 8C	脛骨	中央部後面	左	おそらくウマ												
	07B352 -2	SK8210		8C	中足骨															有

第49表 西近津遺跡群出土のウマ (7区)

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	層	時期	部位	部位詳細	左右	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測	
	08B11-1	SD7002	II D-10		古代末 ~中世	下顎歯	乳白歯 dP2~4	左右		11-1, 2は同一 個体	1才未満			2	2	2					有	
	08B11-2	SD7002	II D-10		〃	上顎歯	乳白歯 dP2~4	右		11-1, 2は同一 個体	1才未満		1	1	1						有	
PL307 -2	08B17-1	SD7002	II D-13		〃	下顎骨 歯あり	ほぼ完形	右		17, 18は同一 個体	成獣, 15-20才		1	1	1	1	1	1	1		有	
PL307 -3	08B17-2	SD7002	II D-13		〃	下顎骨 歯あり	ほぼ完形	左	犬歯 (遊離歯) 有	17, 18は同一 個体	成獣, 15-20才	オス	1	1	1	1	1	1	1		有	
PL307 -7	08B18-1	SD7002	II D-13		〃	上顎骨 歯あり		右		17, 18は同一 個体	15才前後 エナ メル質咬耗で無 くなっている				1	1	1	1	1	1	有	
PL307 -7	08B18-2	SD7002	II D-13		〃	上顎骨 歯あり		左		17, 18は同一 個体	15才前後 エナ メル質咬耗で無 くなっている		1	1	1	1	1	1	1		有	
	08B18-3	SD7002	II D-13		〃	頭頂骨																
	08B18-4	SD7002	II D-13		〃	左右側頭骨 錐体		左右														
	08B18-5	SD7002	II D-13		〃	右側頭骨																
	08B18-8	SD7002	II D-13		〃	頭部 椎骨 胸椎 仙骨	破片		多くは18-1, 2 の頭蓋破片か													
	08B4	SD8003	I Y-17		〃	四肢骨	骨幹	不明	焼骨, おそらく ウマ													
PL308 -11	08B22	SD8006	I X-14		7C末 ~8C	中足骨	ほぼ完形	左			遠位端 癒合										有	
	08B26	SD8006	I X-23	B層	〃	上顎歯	P3/P4	左													P3 /4	有
	08B29	SD8006	I X-05	C層	〃	上顎歯	M1	左			11才						1				有	
	08B30	SD8006	I X-09	C層	〃	橈骨	近位半	右													有	
	08B33	SD8006	I X-18	C層	〃	下顎歯	乳白歯 dP2~4	左右			幼 1才ぐらい										有	
	08B35	SD8006	I Y-22	C層	〃	大腿骨	後面遠位部	左														
	08B37	SD8006	I X-09	C層	〃	中手骨	骨幹															有
PL307 -9	08B39	SD8006	I X-18	C層	〃	上腕骨	遠位半	右			遠位端 癒合										有	
PL303 -4	08B40	SK7020			平安	下顎骨	歯あり 右 P2-M3, 左 P3-M3	左右	右M1-2, 左M 1摩耗異常		12-3才			1	2	2	2	2	2		有	
	08B43	SK7020			〃	寛骨		右	白部あり46, 44 は同一													
	08B44	SK7020			平安	寛骨 白部 座骨		右 破片	白部あり46, 44 は同一													
	08B56, 57	SB7035			10C 後半	橈骨		左	おそらくウマ。 肢骨破片あり													
	08B70	SB7063			9C 中頃	上顎歯	M3	左											1		有	
	08B78 -1, 2	SK7719			古墳 以降	大腿骨	近位	左	骨端癒合		癒合											
PL304 -4	08B79 -1, 2	SK7719			〃	脛骨	骨幹	左														
	08B80 -1, 2	SK7719			〃	中足骨		左													有	
	08B81	SK7719			〃	末節骨+基 節骨			中節骨の破片も 含まれる												有	

写真番号	管理番号	出土遺構	出土位置	層	時期	部位	部位詳細	左右	備考1	備考2	年齢	性別	I	P2	P3	P4	M1	M2	M3	P/M	計測	
	08B82	SK7719			〃	距骨+足根骨(中心)		左														(距骨)有
	08B83	SK7719			〃	中手骨	ほぼ完形	左			遠位端	癒合										有
PL304-5	08B84	SK7719			〃	中手骨	ほぼ完形	右			遠位端	癒合										有
	08B85	SK7719			〃	基節骨、中節骨、末節骨破片		左	前肢		基節骨、中節骨近位端	癒合										(基節骨、中節骨)有
PL304-1	08B86-1	SK7719			〃	寛骨	白部	左														有
	08B86-89	SK7719			〃	寛骨	白部	右														
	08B87-1, 2	SK7719			〃		破片															
	08B88	SK7719			〃	基節骨右、中節骨、末節骨破片			前肢													有
PL304-1	08B89	SK7719			〃	大腿骨	骨頭	左			癒合											有
	08B90	SK7719			〃	中手骨 IV	近位端	?	種子骨1あり													
	08B91-1, 2	SK7719			〃		破片															
PL304-2	08B92-1, 2	SK7719			〃	大腿骨	ほぼ完形	右			近・遠位端	癒合										有
PL304-3	08B93-1, 2	SK7719			〃	脛骨	骨幹、遠位端	右			遠位端	癒合										
PL304-8	08B94-1, 2, 3	SK7719			〃	距骨		右														有
PL304-6, 7	08B94-1, 2, 3	SK7719			〃	踵骨		左右			近位端	未癒合										有

第50表 西近津遺跡群出土のウマ四肢骨計測値(単位mm)  
計測点の数字は Eisenmann (1986) 計測番号 ( ) は概測

①肩甲骨

管理番号	遺構	左右	備考	4 (関節窩最大長)
07B218	SD4004	L		(47.9)

②上腕骨

管理番号	遺構	左右	備考	3 (骨幹最少幅)	骨幹最小前後径	5 (近位端 前後径)	7 (Dd: 遠位端前後径)	8 (滑車最少高)	滑車内側最大高
07B38	SK5002	L					84.5	35.8	47.8
07B70	SD4002	L		(27.7)					
07B116	SD4002 E区	L		28.7		38.6	(66.7)		39.5
07B366-9	SD4002 J区	R		29.2	39.1				
08B39	SD8006 I X-18	R		36.3	40.4				

③橈尺骨

管理番号	遺構	左右	備考	3 (骨幹最少幅)	4 (Bp: 近位端幅)	5 (Bfp: 近位端関節面幅)	6 (近位端関節面前後径)
07B116	SD4002 E区	L		33.3	24.6		
07B212	SD4004	L	風化	(34.7)	(19.9)		
07B273	SD4002 II W-25	L					32.6
08B30	SD8006 I X-09	R		(42.1)			(37.1)

④寛骨

管理番号	遺構	左右	備考	寛骨白長 (LA)	寛骨白幅 (BA)
07B77	SD4002 A区			60.6	
07B177	SD4002 J区	L		59.7	54.2
07B270	SD4002 II W-25	L		(61.2)	
08B89	SK7719	L	08B78~94は同一個体	62.6	56.3

⑤大腿骨

管理番号	遺構	左右	備考	6 (骨頭前後径)
				DC
07B97	SD4002 B区	R		48.5
07B183	SD4002 J区	L		(44.8)
08B89	SK7719	L	08B78~94は同一個体	47.9
08B92	SK7719	R	08B78~94は同一個体	46.0

⑥脛骨

管理番号	遺構	左右	備考	3 (骨幹最少幅)	4 (骨幹最少前後径)	7 (遠位端前後径Dd)	遠位端関節面幅 (Bfd)
07B81	SD4002	R	遠位端 癒合線				33.6
07B99	SD4002	R		36.5	27.9		
07B178-1	SD4002 J区	L	同一個体左右				61.2
07B178-2	SD4002 J区	R		37.0	27.6		60.4
07B271	SD4002 II W-25	L		36.8	27.5		
07B272	SD4002 II W-25	L		37.2	28.8		
07B277	SD4002 II W-25	L		37.4	27.5		
08B79-1	SK7719	L	08B78~94は同一個体	38.0			(69.6)

⑦距骨

管理番号	遺構	左右	備考	1 (最大長)	2 (滑車 内側長)	3 (最大幅)	滑車 最大幅	4 (滑車 中央の幅)	5 (遠位関節面幅)	6 (遠位関節面 前後径)	7 (内側 前後径)
07B85	SD4002 B区 北ブロック	R			(49.0)	36.3		48.1			(39.2)
07B157	SD4002 G区	R		53.3	51.0		51.3	45.8	42.2	30.6	
07B191	SD4002 K区	L		54.8							
07-193	SD4002 M区	R				36.9	45.3				
07B274	SD4002・SD4007 II W-25合流地点	R	風化		(44.5)	36.3	(47.5)	46	47.0		
08B82	SK7719	L	08B78~94は同一個体	54.5		35.1			43.2	30.8	
08B94	SK7719	R	08B78~94は同一個体	54.1	52.8	35.1		47.8	(42.0)	30.8	

⑧踵骨

管理番号	遺構	左右	備考	1 (最大長)	2 (踵骨隆起 長さ)	3 (最大幅)	4 (踵骨隆起 最小幅)	5 (近位端幅)	6 (近位端前後径)	7 (最大前後径)
07B368-5	SD4002 J区	L		(102.0)	78.6	49.7	39.1	43.1	44.1	47.4
08B94	SK7719	R	08B78~94は同一個体	89.9	65.0		23.8	37.6	42.3	

⑨中手骨

管理番号	遺構	左右	備考	1 (最大長)	2 (外側長)	3 (骨幹中央幅)	4 (骨幹中央前後径)	5 (近位端幅)	6 (近位端関節面前後径)	7 (第Ⅲ手根骨との関節面幅)	8 (第Ⅳ手根骨との関節面幅)	10 (遠位端骨幹部幅)	11 (遠位端関節面幅)	12 (遠位端縦後径)	13 (遠位端内側 最小前後径)	14 (遠位端内側 最大前後径)
07B114	SD4002 E区	L				29.7	22.8									
07B173	SD4002 J区	R		220.0	215.6	30.8	23.8	45.7	(25.5)	41.3	8.3	43.3	44.4	(32.4)	25.3	27.4
07B182	SD4002 J区	L				30.7	23.5		(27.4)							
07B275-1	SD4002・SD4007 II W-25 合流地点 上層					30.6	23.0									
08B37	SD8006 C層 I X-09					35.9	25.6									
08B83	SK7719	L	08B78~94は同一個体	201.1	194.5		24.6		27.5			39.5	41.5	32.4	26.8	
08B84	SK7719	R	08B78~94は同一個体						26.8					33.0	25.0	

⑩手根骨

管理番号	遺構	左右	備考	幅	前後径	最大長
07B245-2	SD4002 II W-25		第Ⅲ手根骨	39.6	33.8	19.2

①中足骨

管理番号	遺構	左右	備考	1 (最大長)	2 (外側長)	3 (骨幹中央幅)	4 (骨幹中央前後径)	5 (近位端幅)	6 (近位端関節面前後径)	7 (第Ⅲ足根骨との関節面幅)	8 (第Ⅳ足根骨との関節面幅)	9 (第Ⅱ足根骨との関節面幅)	10 (遠位端骨幹部幅)	11 (遠位端関節面幅)	12 (遠位端縦稜前後径)	13 (遠位端内側最小前後径)	14 (遠位端内側最大前後径)
													Bd	Bfd	Dd		
07B61	SD8003	R													31.34		
07B64	SD8003	R ?	風化			25.3	24.8										
07B78	SD4002 A区	R				25.7	(22.0)										
07B82-1	SD4002 B区	L			(243.1)	27.6	24.9						38.0	(36.3)			(22.1)
07B155-1, 2	SD4002 G区	R	同一個体 左右?	259.1	258.7	27.5	25.3						43.9	43.5	31.6	24.5	25.5
07B156-1, 2	SD4002 G区	L				28.4	25.6						41.3	42.5	32.5	23.6	26.4
07B185	SD4002 J区	L				28.6	28.5	44.5	36.4	41.2	13.3	7.4					
07B352	SK8210					23.9	23.0										
07B368-2	SD4002 J区	L				29.0	28.9						45.5	47.1	35.9	27.7	30.2
08B22	SD8006 B層 I X-14	L		(278.0)	(275.7)	30.9	30.3							43.7	32.4	24.6	27.0
08B80	SK7719	L	08B78～ 94は同一個体	(245.0)				40.5	38.1	39.0	15.0	6.8	39				

②基節骨

管理番号	遺構	左右、前後肢	備考	最大長*	2 (前面長)	3 (最小幅)	4 (近位端幅)	5 (近位端前後径)	6 (遠位端骨幹部幅)	7 (基節骨三角最大長)	8 (基節骨三角最小長)	9 (掌側最小長)	10 (内側近位端～粗面)	11 (外側近位端～粗面)	12 (内側遠位端～粗面)	13 (外側遠位端～粗面)	14 (遠位端関節面幅)
07B74	SD4002 A区	L ?					29.5		40.2								39.5
07B157	SD4002 G区	L 後		76.5		29.8		(31.7)	40.5				58.5	60.7	16.1	13.1	37.5
07B174	SD4002 J区	R 前		(82.0)	72.8	31.8	48.6		42.6		52.5	72.0	62.8	60.9	13.9	13.0	42.3
08B85	SK7719	L 前	08B78～94 は同一個体	73.4	66.6		38.3	30.2		49.3	49.0	65.5					
08B88	SK7719	R 前	08B78～94 は同一個体		67.1			30.9		(47.3)							

\*骨幹に平行に計測

③中節骨

管理番号	遺構	左右、前後肢	備考	最大長*	2 (前面長)	3 (最小幅)	4 (近位端幅)	5 (近位端前後径)	6 (遠位端関節面幅)
07B154-2	SD4002 G区	R 前		43.8	36.6	39.4	47.5	29.2	44.6
08B85	SK7719	L 前	08B78～94は同一個体					24.8	

\*骨幹に平行に計測

④末節骨

管理番号	遺構	左右、前後肢	備考	3 (最大長)	4 (最大幅)
07B161	SD4002 G区	R 前?			(41.5)
07B366-4	SD4002	F			(46.0)
08B81	SK7719		08B78～94は同一個体	29.1	

第51表 西近津遺跡群出土のウマ上顎歯計測値

写真番号	管理番号	遺構	左右	備考	dpH	dpL	dpB	I1H	I1B	I2H	I2B	I3H	I3B
	06B79-1	SB112	左										
	06B79-1	SB112	右										
	06B98	SB22, 24検出面	右										
	06B110-1~2	SK153	右										
PL303-1	06B172	SK0004	右			26.0	23.2	60.9	19.0	(56.0)	21.6		
	06B172	SK0004	左					60.7	19.3	20.8			21.0
	07B1	SD5001	右	M1またはM2									
	07B120~124	SD4002	左右							57.4	18.4		16.7
	07B125~130	SD4002	右	P4萌出開始, M3未萌出									
	07B132	SD4002	左	M3未萌出									
	07B138	SD4002	左										
	07B201	SD4002	右	乳切歯(部位不明)				33	13.3				
	07B207	SD4002	右	dp3またはdp4	28.1	27.8	25.0						
	07B232~236	SD4005	左										
	07B237~239	SD4005	右										
	07B246-2	SD4002	右										
	07B246-2	SD4002	左	dp4	24.5	22.0	23.4						
	07B252	SD4002	右	dp3	30.9	23.8	24.8						
	07B255~258, 260	SD4002	左										
	07B320	SD4002	左										
	07B360	SD4002	左										
	07B360-2	SD4002	左										
PL307-6	07B362	SD4002	右										
	07B362	SD4002	左										
	07B368-17	SD4002	右										
	08B11-2	SD7002	右	dp4			20.2						
PL307-7	08B18-1	SD7002	右										
	08B18-2	SD7002	左										
	08B26	SD8006	左	P3またはP4									
	08B29	SD8006	左										
	08B70	SB7063	左										

H : 歯冠高, L : 最大長, B : 頬舌幅  
( ) は概測値

第52表 西近津遺跡群出土のウマ下顎歯計測値

写真番号	管理番号	遺構	左右	備考	Eisenmann 計測番号					dp2H	dp2L	dp2B	dp3H	dp3L
					2 (下顎角の 最大長)	3 (槽間縁 長)	4 (前臼歯 列長)	4b (臼歯列 長)	5 (歯列長)					
	06B22	SB0074	右	M3未萌出										
	06B76-1	SB0112 no.1	右											
PL303-2	06B172	SK0004 北ブロック	右	同一個体の左右 上顎あり										
	06B172	SK0004 北ブロック	左											
	07B59	SD4002	左	同一個体の左右										
		SD4002	右	M1はエナメル質が全て咬耗										
	07B84	SD4002	右											
	07B95	SD4002	左											
	07B96	SD4002	左											
	07B111	SD4002	左	M2, P4, M3未萌出										
		SD4002	左											
		SD4002	右	同一個体の左右										
	07B253	SD4002	左	同一個体の左右				181.3						
		SD4002	右											
	07B265	SD4002	左											
	07B275	SD4002	左											
	07B339	SB5005, 5006	右											
	07B342-2	SD5001	右											
PL307-1	07B344	SD4002	右			74.1	72.5	147.4						
	07B355-1	SD4002	左											
PL307-4	07B358	SD4002	左			(53.0)	72.1	69.9	143.9					
	07B360	SD4002												
	07B361	SD4002	右				81.3	77.3	(158)					
		SD4002	左	同一個体の左右										
		SD4002	右											
	07B366-1	SD4002	右	別個体のM2										
	07B366-7	SD4002	右											
PL307-5	07B367	SD4002	左			(127)		78.2	(200)					
		SD7002	左	同一個体の左右						33.2	9.9		32.7	
		SD7002	右	乳臼歯dp2, 3, 4						30.8	9.4		29.8	
PL307-2	08B17-1, 2	SD7002	右	オス同一個体の左右		120.2	84.9	84.4	170.2	(190)				
PL307-3		SD7002	左					84.4						
	08B33	SD8006C層	左	同一個体の左右			100.7			21.2	30.0	11.1	25.8	30.3
		SD8006C層	右	乳臼歯dp2, 3, 4						23.3	30.3	11.7	26.6	30.7
PL303-4	08B40	SK7020	右	M1, M2咬耗異常										
	08B40	SK7020	左											

計測番号はEisenmann1986, p.84, Fig.4による。

H : 歯冠高 西中川・松元(1991)のTotalHeight (cent.P), 植月2011のHCに相当, L : 最大長, B : 頬舌幅  
( ) は概測値

第7節 出土骨に関する分析

P2H	P2L	P2B	P3H	P3L	P3B	P4H	P4L	P4B	M1H	M1L	M1B	M2H	M2L	M2B	M3H	M3L	M3B	
						10.5	20.6	25.7		21.3	24.5							
												18.7	21.4	24.7	23.2	27.5	22.8	
															73.0	25.9	21.3	
58.7	24.1																	
(65.9)	34.8	23.7	(74.3)	30.1	24.6	(75.4)	27.3	25.7	75.1	28.8	24.8	83.0	28.3	23.7	(69.1)	(28.2)	20.5	
69.0	36.2	24.4	(74.2)	30.3	24.2	(72.0)	28.0	23.1	77.0	29.2	25.9	83.0	28.1	23.6	(68.7)	(26.6)	20.7	
												64.5 +	33.4	25.8				
61.0	34.9	22.3	69.8	28.1	23.3	72.5	27.6	25.0	71.9	26.6	23.9	81.8	28.5	21.9	68.0	21.8	17.8	
60.8	29.3	22.3	69.9	29.1	23.7	71.3	26.4	23.3	70.8	25.9	23.5	78.1	26.9	22.6	(70.0)	23.6	22.0	
				27.8	22.2		25.6	20.6	64.4	24.1	22.6	75.6	24.5	21.0		22.5	17.1	
			67.6	23.8	23.0	74.5	26.6	24.0	73.4	25.4	23.8							
										29.4								
50.6	36.0	22.9	67.9	29.6	26.3	58.8	25.6	26.2	55.3	28.3	24.8			25.0	21.7			
						71.6	24.7	23.6										
			14.2	23.3	24.5	13.9	22.3	25.1	17.1	25.9	26.3	19.7	27.1	25.2	21.7	27.0	23.2	
			25.2	27.8	25.2	28.8	25.8	26.3	18.5	22.3	25.1	28.8	23.5	24.3	23.6	26.9	22.5	
			19.0	22.5	23.6	20.1	23.3	25.2		19.0	23.1		21.2	22.5		26.1	21.7	
			17.9	23.4	23.0	e20	23.4	25.4	(19.6)	20.3	23.5		21.0	22.5		25.5	21.2	
			20.4	29.0	21.3	23.3	32.0	20.4										
			24.8	27.5	25.1	19.4	26.3	27.1	19.3	24.1	24.8	21.7	23.9	25.8	23.7	31.5	23.0	
22.94	34.56	20.76														21.2	31.8	23.7
								28.9	21.3									
									35.1	26.3	23.9							
																58.8	(26.7)	23.5

dp3B	dp4H	dp4L	dp4B	P2H	P2L	P2B	P3H	P3L	P3B	P4H	P4L	P4B	M1H	M1L	M1B	M2H	M2L	M2B	M3H	M3L	M3B	IH	
																				56.5		9.5	
				39.8	30.7	12.5	61.8	24.0	11.9	70.8	22.8	11.7	57.6	26.3	13.8	59.3	26.7	13.5	57.5	27.0	9.6		
		28.1	13.0	53.5	33.2	13.0	69.0	26.3	13.4	60.9	25.2	12.0	79.0	28.5	13.8	82.7	28.4	12.8	61.0	27.4	10.2		
		27.8	12.9	58.2	(34.1)	12.4	71.5	26.2	14.0	(66.0)		(12.5)	78.8	28.5	14.1	85.4	29.5	11.6	(63.1)		10.2		
							(31.3)	(26.4)	(16.1)	(22.3)	(24.4)	(15.8)	(17.9)	(21.6)	(14.3)	(26.4)	(21.8)	(12.7)	(31.9)	(31.1)	(13.7)		
				18.1	29.7	14.1	24.3	26.5	16.1	24.4	24.6	15.7	20.9	22.1	14.4	25.6	22.2	11.9					
																			(50.0)			12.8	
				49.4	30.2	12.9	71.5	27.9		70.7	27.1	13.1	78.5	25	11.7		26.3	13.4					
																	28.4	14.6		30.7	13.3		
				50.1	33.6	13.0	66.2	30.3	13.1		30.1	13.2	72.1	28.6	12.8	79.7	(26.5)	12.4		29.1	11.5		
					32.4	16.1	70.9	27.9	18.2	77.5	28.0	18.7	67.2	26.3	16.5	73.9	27.3	15.9	72.3	31.1	13.7		
				50.5	31.5	14.5	69.2	28.1	16.5	75.1	28.1	16.1	69.9	26.2	14.9	73.4	25.7	15.1	72.0	30.8	12.6		
					32.7	11.7	58.0	28.0	14.8	68.2	28.3	15.0	58.9	25.5	14.4	62.0	26.2		65.8	31.1	11.8		
				42.2	31.0		57.5	28.5	15.2	70.8	27.8	14.9	61.7	25.7	14.4	65.3	25.0	13.4	69.2	30.6	11.8		
													32.9	23.1	13.5								
																			39.7	28.9	12.4		
																			52.9	31.0			
					30.3	11.5	11.5	20.8	12.3	11.7	19.7	13.8	10.0	23.0	13.4	10.1	23.2	14.7	16.1	32.0	14.8		
					27.4	11.7		22.5	13.4	31.3	21.7			20.1	13.5		21.6	13.1		26.6	11.7		
				29.4	32.0	11.6	41.5	26.2	15.2	49.3	24.2	14.5	38.2	23.5	12.6	43.2	22.0	12.9	44.8	27.2	11.4		
					29.7	e12.36		23.1	14.2	(14.6)	21.6	14.9		19.8	13.7		22.9	13.9		27.7			
				21.8	(28.2)	14.2		26.0	15.9	(20.0)	25.3	16.1	29.2	22.3	14.1		23.9	13.9	41.4	30.7	13.5		
				19.1	29.4		21.3	26.7	15.0	30.3	25.0	14.7		23.7	12.8		23.1	14.6	32.0	31.0	12.1		
														26.3	23.0	12.8		23.7	24.6	14.4			
																		18.5	26.3	14.0			
																		21.5	22.8	13.8	31.6	31.2	11.7
10.1		31.9	12.0				13.3	25.5	12.9				18.0	23.4		15.9	23.9	11.7		32.1	11.7		
10.2		31.9	11.2																				
					28.6	14.6		26.7	14.7		26.3	15.7		22.4	14.2		25.2	13.5		32.8	12.6	1351.7	
				(18.5)	28.4		19.3	28.6	15.9	(18.2)	26.9	15.2		21.7	13.7		25.8	14.0	13.6	33.0	13.4		
11.1	27.6	33.8	10.7																				
10.5	26.6	35.1	9.9																				
				23.4	30.6	13.9	30.6	26.1	15.2	37.0	25.8	15.3	(13.3)	25.1	14.5	37.0	24.8	13.5	34.3	32.2			
							23.5	26.3	15.6	33.8	25.2	15.5	32.2	23.2	14.1	37.5	25.1	13.0	13.7	32.3			

## 4. 西近津遺跡群出土ウマの安定同位体分析

覚張隆史：北里大学医学部

## はじめに

長野県佐久市は古墳時代の遺跡から金銅製の馬具飾りが出土するなど、古くから家畜馬と関わりの深い地域である。本分析で取り扱った西近津遺跡群は佐久市長土呂に位置する集落跡を中心とした遺跡であるが、ウマに関連した遺物だけでなく、ウマの遺存体自体も多数検出されている。西近津遺跡群から出土するウマ遺存体を用いた動物考古学的研究は、当時の西近津遺跡群におけるウマの飼育形態に関する情報を評価できるだけでなく、ウマを飼育していた人々の生業活動を評価する上でも重要な位置づけにある。

近年、骨中に含まれるコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比に基づいて、遺跡出土動物遺存体からその動物が生存時に摂取した食物を復元し、野生動物と家畜を識別する研究が精力的に行われてきた。家畜が摂取する食物は人為的に給餌された食物に依存する 경우가多く、栽培植物を摂取した動物は特徴的な同位体比の兆候を示すことが知られている。日本列島における代表的な先行研究において、Minagawa et al. (2005) は遺跡出土イノシシおよびブタ遺存体の炭素・窒素安定同位体比を試みており、栽培植物である雑穀類の摂取割合の高いブタの検出に成功している。近年では、コラーゲンだけでなく、歯エナメル質の hidroキシアパタイトに含まれる炭素の同位体比を測定することで、より精度の高い食物推定が可能となっている。

一方、コラーゲンの炭素・窒素同位体分析の様な摂取食物の推定と異なり、ストロンチウム (Sr) や鉛 (Pb) など重元素の同位体比を用いた動物遺存体の産地復元・移動復元も欧米を中心に精力的に行われている (Viner 2010)。重元素の中でも、特にストロンチウムはカルシウムと化学的な挙動が類似しており、骨や歯の主要成分である hidroキシアパタイトに微量に含まれている。その起源は、その動物が摂取した植物や飲み水のストロンチウムに由来する。ストロンチウムを含有する体組織の中で、特に歯のエナメル質は0歳齢から5歳齢で形成された後は成長および代謝が止まるため、5歳以降に摂取したストロンチウムの供給が止まる。したがって、歯エナメル質は0歳齢から5歳齢に摂取した地域のストロンチウムをそのまま保持している。さらに、歯エナメル質のストロンチウムの供給源となる植物や飲み水のストロンチウム同位体比は、地質の性質に応じて多様な値を示す。この性質を利用することで、遺跡出土動物遺存体の歯エナメル質のストロンチウム同位体比は、その個体が比較的若い時期に生息していた生息地域を評価する上で有効な指標となり得る。

そこで本分析は、西近津遺跡群を形成した人々の馬飼育に関する新たな情報を提示することを目的として、安定同位体分析を実施した。西近津遺跡群出土馬遺存体からコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比と、歯エナメル質の炭素同位体比およびストロンチウム同位体比を求め、これらの結果に基づいて馬の飼育形態を評価することを試みた。これに合わせて、遺跡出土馬自体の生存年代を評価するために、安定同位体分析に用いた同じ骨コラーゲンから放射性炭素年代測定を実施した。

## (1) 試料と方法

**分析試料** 長野県埋蔵文化財センターが発掘した西近津遺跡群出土ウマ遺存体5点、07B245 (SD4002)、08B82 (SK7719)、08B40 (SK7020)、08B17-1 (SD7002)、07B253 (SD4002) は炭素・窒素安定同位体分析に用いた (第53表)。また、炭素・窒素同位体分析に用いた個体のうち1点、08B40 (SK7020) はストロンチウム同位体分析に用いた (第54表)。したがって、同位体分析に用いた分析試料は合計6点である。  
**コラーゲン抽出前の前分析** 遺跡出土ウマ遺存体のコラーゲン抽出は0.5gの骨片試料の採取が伴う。し

かし、分析試料に残存するコラーゲンの保存状態によっては、炭素・窒素安定同位体分析に十分なコラーゲンが抽出できない可能性もある。このため、コラーゲン抽出を実施する前に、極微量の骨片からコラーゲン残存の有無を評価することは、むやみな資料破壊を未然に防ぐ上で必須の対処である。遺跡出土動物遺存体のコラーゲン残存率は、骨中の窒素含有率で評価できる。その分析に必要な試料量は0.005gで、骨コラーゲン抽出に必要とされる試料量に比べて極めて微量である。本分析では、西近津遺跡出土ウマ遺存体のうち07B253 (SD4002)、08B17-1 (SD7002)、08B82 (SK7719) を分析し、骨片中の窒素含有率はそれぞれ0.5%、1.6%、0.3%を示した。これら窒素含有率の範囲はコラーゲンが残存している可能性が示唆することから、骨コラーゲン抽出が可能と判断した。また、前分析試料中の窒素含有率は比較的に高い値を示しており、炭素・窒素安定同位体比に必要とされる骨コラーゲンが骨片0.5g以下からでも十分に抽出可能と判断されたため、骨コラーゲン抽出における骨片採取量は0.5gよりも少ない量で実施した。

**骨コラーゲン抽出** 分析用の骨片約0.2～0.4gは、工学用ドリル (Dremel社製) を用いて採取した。採取した骨の表面はサンドブラスターで土壌物質を除去した。超純水中で超音波洗浄し、表面の微細な汚染を除去した。洗浄した試料は0.2N NaOHに浸し、4℃下で12時間反応させ、表面に付着する有機物汚染の影響を除去した。0.2M NaOHを除去し、超純水で洗浄する。試料を浸した超純水の酸性度が中性になったことを確認し、凍結乾燥器にて12時間乾燥させた。乾燥させた試料は粉碎器具にて粉末化した。粉碎した試料はセルロースチューブ内で1.2M HClに反応させ、炭酸カルシウムを除去した。反応が終わったことを確認し、1.2M HCl内にて4℃下で12時間の脱灰反応を行った。脱灰後は、1.2M HClを除去し、セルロースチューブ内が中性に戻るまで超純水を繰り返し交換した。中性に戻した後に、12時間超純水内に入れた。脱灰後の試料溶液をガラス管に移し、遠心分離して上澄みを凍結保存した。沈殿物に超純水を加え、ブロックバスにて90℃で12時間の反応を行い、コラーゲンをゼラチン化させた。ガラス管を遠心分離し、上澄みに溶解しているゼラチン化したコラーゲンをガラスフィルターにて濾過した。濾過された試料溶液は2日間凍結乾燥させた。

**炭素・窒素安定同位体測定** 抽出されたコラーゲンは東京大学放射性炭素年代測定室の元素分析計—安定同位体比質量分析計 (EA-IRMS) を用いて $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ 、炭素・窒素含有率および炭素・窒素比 (C/N) を測定した。EA-IRMSの測定系は、まず、元素分析計 (FLASH2000, Thermo) において試料の燃焼・還元され、生じたガスはキャピラリーガスクロマトグラフによって二酸化炭素・窒素ガスに分離される。分離されたそれぞれのガスを安定同位体比質量分析計 (DELTA V, Thermo) に導入するために、ガスの流量を調節するインターフェイス (ConFlo III, Thermo) を接続することで、元素分析計で分離したガスから直接的に安定同位体比の測定が可能になった実験系である。安定同位体比の測定は測定用の精製コラーゲン0.5mgをスズ箔に包み、上述したEA-IRMSで測定を実施した。

測定された安定同位体比は国際標準物質の値を基準に補正した値を後の解析に用いる。炭素同位体比の標準物質はPDB、窒素同位体比は現代大気 (AIR) を基準とし、これらの標準物質の同位体比からの差分を千分率 (%:パーミル) で表記する。この値は $\delta$  (デルタ) と表記する。安定同位体比の補正計算は式1の通りである。また、本分析における安定同位体比の測定精度は、炭素同位体比は標準偏差 $\pm 0.1\%$ 、窒素同位体比は標準偏差 $\pm 0.2\%$ であった。

$$\delta *X = \left[ \left( \frac{(*X/X)_{\text{sample}}}{(*X/X)_{\text{standard}}} - 1 \right) \times 1000 (\%) \right] \dots (\text{式1})$$

Xは同位体,  $*X > X$ , (例)  $^{15}\text{N}/^{14}\text{N}$

土壌由来の有機物汚染の影響がある分析試料を除外するために、生体のコラーゲンがもつC/N=2.9～3.6、%Cが30%以上、%Nが10%以上の基準から逸脱した試料は、安定同位体比の比較には用いなかった (Deniro 1985)。

**骨コラーゲンの放射性炭素年代測定** 精製されたコラーゲンの放射性炭素年代測定を実施するため、二重封管法でコラーゲンを燃焼し (Minagawa et al. 1984)、真空ラインで精製した二酸化炭素を、鉄触媒および水素ガスとともに封入して、650°Cに加熱することでグラファイトを精製した (Kitagawa et al. 1993)。一連の前処理は東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室で行った。精製グラファイトは株式会社パレオ・ラボ (PLD) の AMS を使用し、骨コラーゲン中の  $^{14}\text{C}$  濃度を測定した (Kobayashi et al. 2007)。また、AMS における放射性炭素濃度のスタンダード試料は IAEA C1、SRM4990C、IAEA C8 および ANU C6 を用い、未知試料の補正を実施した。AMS によって測定された  $\delta^{13}\text{C}$  に基づいて AMS 測定時に伴う  $^{14}\text{C}$  に生じる同位体分別を補正した。

算出された放射性炭素濃度は、BP 単位とともに記される conventional  $^{14}\text{C}$  年代 (Before present; 1950 年を起点とした、放射性炭素の理論的な放射壊変を仮定した物理化学年代を示し、暦年代とは異なる) に変換した。これを IntCal13 に基づく較正曲線に当てはめて暦年代 (calBP) を算出するために、各試料から得られた  $^{14}\text{C}$  年代は、解析用ソフトウェアの OxCal 4.2 を用いて暦年代に較正した (Reimer et al. 2013, Bronk Ramsey 2009)。

**歯エナメル質の採取および前洗** 歯エナメル質の炭素・ストロンチウム同位体分析用の試料は、工学用ドリル (Dremel 社製) にタングステンカーバー (松風社製) を装着し、歯エナメル質からエナメル質粉末を約 10mg 採取した。採取したエナメル質粉末は、超純水で 3 回すすぎ、2.5% 次亜塩素酸ナトリウムで 16 時間反応させ有機物を除去した。次亜塩素酸処理後、中性に戻した後に、0.1M 酢酸緩衝液 (pH4.5) を加えて 12 時間反応させ、埋没中に生じる可能性のある二次的なハイドロキシアパタイト沈着による汚染を除去した。反応後に中性に戻し、洗浄した試料は 70°C オープン 16 時間で乾燥させた。

**歯エナメル質の炭素同位体比測定** 乾燥させた試料の一部は、国立科学博物館地学研究部のキールデバイス型安定同位体比質量分析計 (Kiel Device-IRMS) を用いて、炭素同位体比を測定した。測定条件は、リン酸反応時間 6 分、リン酸ドロップ数 5 滴とした。測定における国際標準物質は炭酸カルシウムの NBS19、NBS18 および JCp1 を用いて補正し、歯エナメル質のワーキングスタンダード (TE) を用いて、測定精度をモニタリングした。歯エナメル質の炭素同位体比は  $\delta$  上述した式 1 で  $\delta^{13}\text{C}$  を求めた。測定精度は  $\pm 0.1\%$  であった。

**ストロンチウム同位体比測定** 乾燥させた試料の一部は、総合地球環境学研究所実験施設内のクリーンルーム内に持込み、陽イオンカラム樹脂を用いてストロンチウムを精製した。精製したストロンチウム溶液は、3% 硝酸溶液で 2 倍希釈した後に、マルチコレクター型誘導プラズマ同位体比質量分析計 (MC-ICP-MS) を用いて、ストロンチウム同位体比 ( $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ ) を求めた。ストロンチウム同位体比は  $^{88}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$  の自然存在比で規格化し、国際標準物質の NBS987 ( $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr} = 0.70125$ ) で補正し算出した。測定精度は  $\pm 0.00001$  であった。

## (2) 結果

西近津遺跡群出土ウマ遺存体のすべての試料はコラーゲン抽出された。安定同位体分析では、骨中のコラーゲン含有率が 1% 以上であれば、生体時におけるコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比を用いた食物推定が可能である。本分析では、この基準を満たさない 07B245 (SD4002) は安定同位体分析に用いなかった (第 53 表)。また、哺乳動物の生体コラーゲンは元素比である炭素・窒素比 (C/N) が 2.9 ~ 3.6 の範囲におさまるため、この基準から逸脱した 08B82 (SK7719) は食物推定に用いなかった。

上記の基準を満たした遺跡出土馬遺存体 3 個体の炭素・窒素同位体比は、炭素同位体比は -17.8% ~ -15.3% (平均値 -16.7%、標準偏差 1.1)、窒素同位体比は 3.2% ~ 5.5% (平均値 4.1%、標準偏差 1.0) であつ

た（第53表）。

なお、骨コラーゲンの抽出量が比較的多かった07B253（SD4002）および08B17-1（SD7002）は<sup>14</sup>C年代が得られたため、暦年代を算出した。その結果、それぞれの暦年代（1 $\sigma$ ）は、07B253（SD4002）で1223AD-1255AD（68.2%）、08-17-1（SD7002）で1047AD-1091AD（42.6%）、1121AD-1140AD（17.0%）、1149AD-1159AD（8.5%）であった（第55表）。

また、歯ハイドロキシアパタイトの分析において、炭素同位体比は-8.6%を示し、ストロンチウム同位体比は0.70566を示した（第54表）。

### (3) 考察

本分析では、3個体の西近津遺跡群出土ウマ遺存体から保存状況が良好な骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比が得られたため、当時のウマの食物推定を実施した。食物の炭素・窒素安定同位体比と本分析で得られた遺跡出土ウマの炭素・窒素安定同位体比を比較した（第44図）。その結果、雑食動物および肉食動物などとは異なり、草食動物に特徴的な低い窒素安定同位体比を示した。また、西近津遺跡群出土ウマの炭素安定同位体比は、野生の草食動物であるシカおよびイノシシのそれよりも有意に高い値を示した。草食動物は食生態の違いから、枝葉食者（ブラウザー）と下草食者（グレイザー）に大別され、炭素安定同位体比も両者間で異なる値を示す。これは、下草としてしか茂らず、炭素同位体比が高いC4植物の摂取割合が、ブラウザーに比べてグレイザーの方が高いためである。したがって、西近津遺跡群出土ウマの骨コラーゲンの炭素安定同位体比は、グレイザー特有の食生態を良く反映していると考えられる。本分析の中で注目される点として、08B17（SD7002）の炭素同位体比が-15%を示しており、他の2個体と比べてC4植物摂取率が相対的に高い可能性が挙げられる。放射性炭素年代測定に基づくと、これらの資料は中世および古代に位置づけられる。中世および古代の他の遺跡出土ウマは-20%～-17%の範囲にほぼ収まるが（覚張未発表データ）、08B17（SD7002）は明らかにその範囲を逸脱していることが指摘でき、ウマがC4植物のアワなどを摂取していた可能性も想定されうる。炭素同位体比の高い08B17（SD7002）は炭素同位体比の低い個体よりも100年ほど古いことから、時代間でC4植物摂取率が異なっていた可能性も考えられる。

次に、08B40（SK7020）の若い成長期において形成される歯ハイドロキシアパタイトの炭素安定同位体比では、哺乳動物がC3植物を約80%以上摂取した際の基準値（Uno et al. 2011）である-8%以下を示した。この結果は、同一個体である08B40（SK7020）の骨コラーゲンの炭素安定同位体比が約-18%と低い値を示していることとも整合的であった。また、08B40（SK7020）歯ハイドロキシアパタイトのストロンチウム同位体比では0.705を示し、火山性地質に特有の低い値を示した。変性岩体、付加体および海成堆積の地質上に生息する哺乳動物のストロンチウム同位体比は0.707-0.710の範囲を示すが（Kusaka et al. 2009）、本分析で得られた同位体比はそれよりも明らかに低い。このことから、08B40（SK7020）は火山性地質が存在する地域で飼育管理されていた可能性が示唆される。

最後に、上記すべての分析結果を考慮した場合に想定されるウマの飼育形態の評価を試みた。日本列島における大部分の自然植生はC3植物が80%以上とC4植物よりも優占しており、自然植生下で生育した下草食者であれば、植物の選好みが無い限りC3植物を主に摂取する。本分析結果のうちで、歯ハイドロキシアパタイトの炭素安定同位体比は0歳～5歳で摂取した食物の炭素安定同位体比の特徴を保持しており、08B40（SK7020）はC3植物を主に摂取していたことから、西近津遺跡群出土ウマは0～5歳においては日本列島の一般的な自然植生下において半野生的な放牧がおこなわれていた可能性が考えられる。

一方、生存時における平均的な食性情報を反映する骨コラーゲンの炭素安定同位体比では、2個体が

C3植物を主に摂取していたものの、1個体(08B17(SD7002))でC4植物の摂取割合が高い傾向にあった。08B17(SD7002)が5歳以降に斃死した個体であれば、5歳以降に摂取した食物の影響を反映していると考えられ、5歳以降のC4植物の摂取割合が上昇した可能性が示唆される。この結果から、西近津遺跡群出土ウマは年齢によっては与えられた環境下において得られる食物が異なっていたと推察される。ただし、C3植物の中でもイネなどの栽培植物があるため、これらの給餌割合を減らした可能性もある。ウマに稲わらなどを多量に与えていた場合にはシカ・イノシシの炭素安定同位体比と近似した値をとることが予想されるが、本分析結果はその様な兆候を示さなかった。このことから、ウマにC3植物の栽培植物を積極的に与えていた可能性は低いと思われる。

また、ストロンチウム同位体比の結果から、ウマは火山性地質上に生息していたことが示唆されたが、長野県佐久市では火山性地質が多くを占めることから在地に生息していたウマの可能性が考えられる。しかし、ストロンチウム同位体比は長野県外の火山性地質におけるストロンチウム同位体比と近似する可能性があるため、積極的なウマの持込みの証拠がないという言葉に留めておきたい。仮に、在地のウマであれば、古代および中世における西近津遺跡群周辺域のウマの飼育形態は、ウマに与えるC4植物(アワなど)の程度を個体ごとに変えていたと推察される。

本研究では西近津遺跡群遺跡出土ウマの安定同位体分析に基づいて、当時のウマ飼育形態について考察を試みた。しかし、これらの分析例はまだ限られた地域でのみ実施されており、更なる情報の蓄積が求められる。各地域における炭素・窒素同位体比の分析例を増やしていくことで、今後、人とウマの関わりに関連した飼育文化圏の違いをとらえることができると期待され、さらなる類例の蓄積が求められる。

#### 引用・参考文献

- Barton L., S. D. Newsome, F. Chen, H. Wang, T. P. Guilderson, and R. L. Bettinger (2009) Agricultural origins and the isotopic identity of domestication in northern China, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 106, pp. 5523-5528
- Deniro M. J. (1985) Postmortem preservation and alteration of in vivo bone collagen isotope ratios in relation to palaeodietary reconstruction, *Nature*, 317, pp. 806-809
- Kitagawa H., T. Masuzawa, T. Nakamura, and E. Matsumoto (1993) A batch preparation method for graphite targets with low background for AMS 14C measurements, *Radiocarbon*, 35, pp. 295-300.
- Kobayashi K., E. Niu, S. Itoh, H. Yamagata, A. Lomtadze, I. Jorjoliani, K. Nakamura, and H. Fujine (2007) The compact 14C AMS facility of Paleo Labo Co., Ltd., Japan, *Nuclear Instruments and Methods in Physics Research Section B*, 259, pp. 31-35
- Kusaka, S., A. Ando, T. Nakano, T. Yumoto, E. Ishimaru, M. Yoneda, F. Hyodo, K. Katayama (2009) A strontium isotope analysis on the relationship between ritual tooth ablation and migration among the Jomon people in Japan, *Journal of Archaeological Science*, 36, pp. 2289-2297
- Minagawa M., A. Matsui, and N. Ishiguro (2005) Carbon and nitrogen isotope analyses for prehistoric *Sus scrofa* bone collagen to discriminate prehistoric boar domestication and inter-islands pig trading across the East China Sea, *Chemical Geology*, 218, pp. 91-102
- Minagawa M., D.A. Winter, and I.R. Kaplan (1984) Comparison of Kjeldahl and combustion methods for measurement of nitrogen isotope ratios in organic matter, *Analytical Chemistry*, 56 pp. 1859-1861.
- Ramsey B. C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 51, pp. 337-360
- Reimer P. J., E. Bard, A. Bayliss, J. W. Beck, P. G. Blackwell, C. Bronk Ramsey, P. M. Grootes, T. P. Guilderson, H. Hafidason, I. Hajdas, C. HattĹ, T. J. Heaton, D. L. Hoffmann, A. G. Hogg, K. A. Hughen, K. F. Kaiser, B. Kromer, S. W. Manning, M. Niu, R. W. Reimer, D. A. Richards, E. M. Scott, J. R. Southon, R. A. Staff, C. S. M. Turney, and J. van der Plicht (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP, *Radiocarbon*, 55, pp. 1869-1887.
- Viner, S., J. Evans, U. Albarella, M. P. Pearson (2010) Cattle mobility in prehistoric Britain : strontium isotope analysis of cattle teeth from Durrington Walls (Wiltshire, Britain), *Journal of Archaeological Science*, 37, pp. 2812-2820
- Uno, K. T., T. E. Cerling, J. M. Harris, Y. Kunitatsu, M. G. Leakey, M. Nakatsukasa, H. Nakaya (2011) Late Miocene to Pliocene carbon isotope record of differential diet change among East African herbivores, *Proceedings of the National Academy of Sciences*, 108, pp. 6509-6514

第53表 骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体分析結果一覧

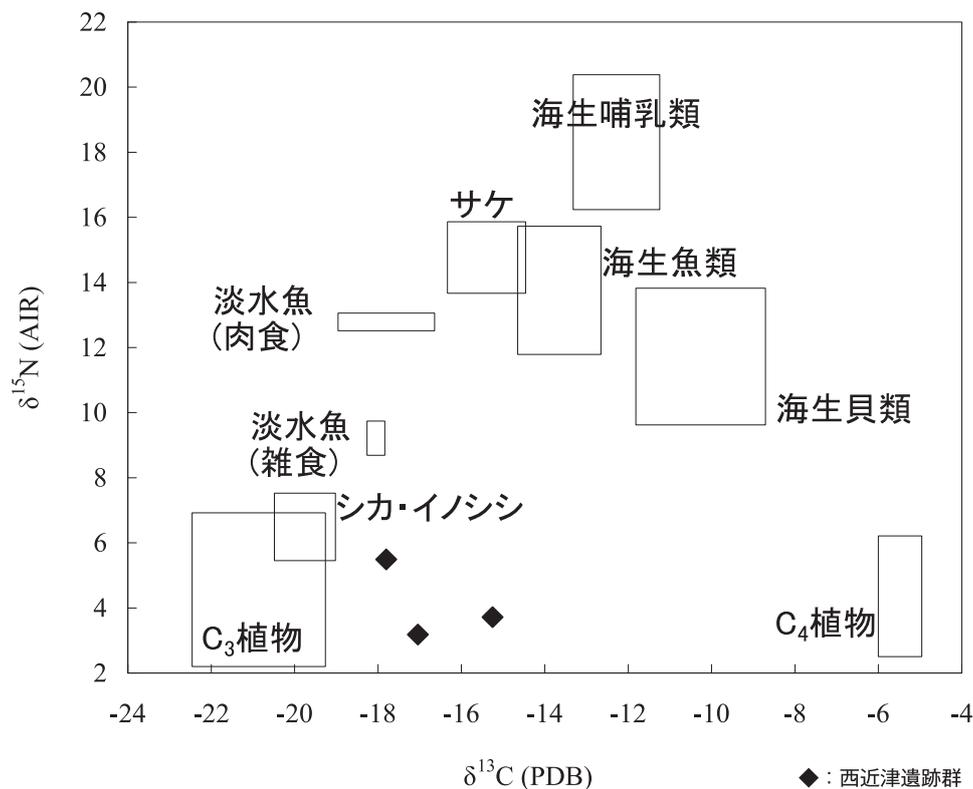
サンプル名	分析番号	発掘年次	出土遺構	遺物番号	部位	コラーゲン抽出率(%)	炭素%	窒素%	炭素・窒素比	$\delta^{13}\text{C}_{\text{collagen}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{collagen}}$
SD4002(07B245)	NTT1	2007	SD4002	245	下顎骨	0.8	-	-	-	-	-
SK7719(08B82)	NTT2	2008	SK7719	82	距骨	1.1	35.5	9.1	4.6	-	-
SK7020(08B40)	NTT3	2008	SK7020	40	下顎骨	4.3	36.6	12.6	3.4	-17.8	5.5
SD7002(08B17)	NTT4	2008	SD7002	17	下顎骨	4.9	42.4	14.8	3.4	-15.3	3.7
SD4002(07B253)	NTT5	2007	SD4002	253	切歯	5.5	44.3	15.8	3.3	-17.0	3.2

第54表 歯ハイドロキシアパタイトの炭素・ストロンチウム同位体分析結果一覧

サンプル名	分析番号	発掘年次	出土遺構	遺物番号	部位	$\delta^{13}\text{C}_{\text{enamel}}$	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$
SK7020(08B40)	NTT3	2008	SK7020	40	下顎臼歯	-8.6	0.70566

第55表 骨コラーゲンの放射性炭素年代測定結果一覧

測定番号	遺物ID	管理ID	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代範囲	
						1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-24074 試料No. NTT5	SD4002 07B253	TKa-15523	-16.96 $\pm$ 0.11	805 $\pm$ 17	805 $\pm$ 15	1223AD (68.2%) 1255AD	1213AD (95.4%) 1265AD
PLD-24073 試料No. NTT4	SD7002 08B17-1	TKa-15522	-16.45 $\pm$ 0.13	916 $\pm$ 17	915 $\pm$ 15	1047AD (42.6%) 1091AD 1121AD (17.0%) 1140AD 1149AD ( 8.5%) 1159AD	1039AD (95.4%) 1164AD



第44図 西近津遺跡群出土ウマの炭素・窒素安定同位体比

## 5. 西近津遺跡群出土ウマ骨の年代測定

### (1) 分析の目的

西近津遺跡群では、大型土坑2基からそれぞれウマ1頭分の骨がみついている。これはウマが埋葬(埋納)された土坑として考えられ、遺跡の性格に関わる重要な遺構と判断した。ただし、大型土坑2基からは時期を推定できる土器は出土していない。大型土坑の時期を明らかにするために、出土したウマの骨を試料として放射性炭素年代測定を実施した。

### (2) 対象資料

大型土坑SK0004から出土したウマ骨のうち切歯(06B172-2)1点、SK7719は左脛骨片(08B79-1)1点をそれぞれ選出した。対象資料を含む大型土坑出土ウマ骨は、初期整理段階で補強のため接着剤(セメダインC)を塗布した。

なお、分析は(株)加速器分析研究所に委託した。(株)加速器分析研究所には、骨の分析と同時に竪穴住居跡と土坑から出土した炭化材の年代測定および樹種同定も委託した。詳細は第5節に記した。

### (3) 分析の方法

補強のために塗布された接着剤(セメダインC)の成分を除去するため、アセトンで処理を行った後、超純水でブラシ、超音波洗浄器を用いて付着物を取り除く。その後、コラーゲン抽出(Collagen Extraction)を行う。コラーゲンの抽出では、0.2Mの水酸化ナトリウム水溶液を試料の入ったビーカーに入れ、試料の着色がなくなるまで、1時間ごとに水酸化ナトリウム水溶液を交換し、試料を凍結乾燥させて粉砕する。リン酸塩除去のために試料を透析膜に入れて1Mの塩酸で酸処理を行い、透析膜の内容物を遠心分離する。得られた沈殿物を濾過し、濾液を凍結乾燥させてコラーゲンを得る。抽出したコラーゲンからグラファイト(C)を生成させ、測定試料とする。

測定装置は加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置(NEC社製)を用いる。標準試料米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸( $\text{HOx II}$ )を用いる。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1,950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。暦年較正はIntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.2較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を用いる。暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ ( $\sigma$ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。

### (4) 分析結果

土坑から出土した馬の骨・歯試料の $^{14}\text{C}$ 年代は、06B172-2が $1620 \pm 20\text{yrBP}$ 、08B79-1が $940 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、06B172-2が古墳時代中期から後期頃、08B79-1が古代頃に相当する(佐原真 2005)。

骨・歯試料の保存状態を検討すると、コラーゲン回収率は06B172-2が0.2%、08B79-1が0.9%、炭素含有率は06B172-2が18%、08B79-1が34%で、2点ともコラーゲンの保存状態が良くないと判断される(van Klinken 1999)。またこれらの試料には、整理作業時に補強を目的として溶剤で薄めた接着剤が塗布されている。この成分を除去するために、コラーゲン抽出に先立ってアセトン処理を行ったが、接着剤の成分を完全に除去できたかどうか確認するのは難しい。このことから、これらの試料の測定結果は試料本来の年代を示していない可能性があり、注意を要する。

## 引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1),

Reimer, P.J. et al. (2013) IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

佐原真 2005「日本考古学・日本歴史学の時代区分」『ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻』佐原真, ウェルナー・シュタインハウス監修, 奈良文化財研究所編集 学生社,

van Klinken, G.J. (1999) Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements, Journal of Archaeological Science, 26,

第56表 放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果

管理番号	出土地点	試料形態	補正年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
06B172-2	SK0004 底面	ウマの歯	1,620 $\pm$ 20	-20.07 $\pm$ 0.76	1,624 $\pm$ 24	393calAD - 429calAD (53.6%) 495calAD - 508calAD (10.0%) 520calAD - 527calAD (4.6%)	382calAD - 475calAD (67.2%) 485calAD - 535calAD (28.2%)
08B79-1	SK7719 底面	ウマの骨	940 $\pm$ 20	-18.40 $\pm$ 0.64	936 $\pm$ 23	1040calAD - 1051calAD (9.7%) 1082calAD - 1151calAD (58.5%)	1032calAD - 1156calAD (95.4%)

(加速器分析研究所のデータを編集)

## 第10章 総括

本報告書は中部横断自動車道建設に伴って実施した佐久市西近津遺跡群の調査成果である。ここでは、今回得られた成果を時代ごとに整理するとともに、今後の調査研究における課題を提示して、総括とした。

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構は少なく、竪穴住居跡2軒のほか屋外埋設土器1基などが検出されている。竪穴住居跡は出土土器や住居形態からいずれも縄文時代中期後葉に帰属すると考えられる。屋外埋設土器は後期前葉に属する深鉢形土器がほぼ正位で埋設されている。また縄文時代の遺物としては縄文土器のほかに土器片加工板、土偶、石器が出土している。縄文土器の時期は草創期から後期にまで及び、出土量は中期後葉から後期前半の土器が大半を占める。近年、本遺跡群については中部横断自動車道建設用地以外でも佐久市教委が複数地点で発掘調査を実施している。そのうち中部横断自動車道地点の西側にある2カ所（西近津遺跡Ⅳ・Ⅷ）で縄文時代後期の集落跡が確認されている（第4章第7図、佐久市教委2009a・2013）。

今回の調査では草創期まで遡る縄文土器が発見されたことから、ごく早い段階から本遺跡群が生活領域の一部として利用されていた可能性が高まった。また佐久市教委の調査した縄文時代後期の集落範囲が本地点にまで及んでいることも確認されるとともに、後期集落より一、二段階古い中期後葉には、すでに竪穴住居跡を伴う集落が営まれていたという新知見が得られた。

### 2. 弥生時代

竪穴住居跡110軒をはじめ、集落を区画する東西大溝、円形・方形周溝墓などの墓域などが発見され、弥生時代後期における大規模な集落遺跡の中核部を調査したといえる。

**竪穴住居跡** 全長を計測できる住居跡60軒では、調査時から注目された全長18.1m（SB0067）と13.6m（SB0110）の超大型竪穴住居跡2軒を最大として、8～11mの大型19軒、5～8mの中型31軒、5m以下の小型8軒に分類され、比較的大型の住居跡が多い集落であることがわかる（付表1参照）。

住居形態をみると、主軸線は概ね南北方向を基本として、2軒のみ東西方向に主軸線を持つ住居跡がある（SB0002・56）。平面形は長方形を基本とし、時期的に古い段階（SB0015・33・66・110ほか）では隅部が丸みを持つ場合が多く、新しい段階（SB0041・67・4038ほか）になると隅部が角張ってほぼ直角になる傾向がみられる。壁面はほぼ垂直で、床は地山のⅣ層土を整地して敲き締めている場合と凹凸のある掘方を整地して貼床としている場合がある。

主柱穴は基本的に4基が長方形に配置されている。例外的に主柱穴6基を持つ大型住居跡が4軒（SB0027・33・3069新・4030）、柱穴を持たない小型の住居跡が5軒（SB0149・3087・4008・5051・6067）ある。主柱穴の上部平面形は、梁方向に長軸を持つ長楕円形または楕円形が主体で、底面の平面形は長方形や長楕円形が多い。また長短辺比が大きく、非常に細長い長方形となる柱穴もある（SB8005・29ほか）。こうした柱穴の形状から、当集落の竪穴住居では主柱にいわゆる五平材（断面長方形の建築材）または板材を利用することが一般的であったことが推察される。

また主軸線上の北壁際に、屋内棟持柱を据えたと考えられる柱穴を有する住居跡が30軒ある。重複遺構によって北壁付近を大きく破壊されている住居跡もあり、屋内棟持柱を有する住居軒数はさらに増すと

考えられる。棟持柱の柱穴形状は主軸線方向（棟方向）に長い楕円形であることから、柱材には主柱と同様に五平材または板材を使用し、材の長辺は主柱長辺に対し直交方向にある。棟持柱を持つ住居規模は長軸長が6 mに満たない中型から大型、超大型までばらつきがあり、規模と棟持柱には関連性を見出せない。また古い段階の住居跡では屋内棟持柱を有する場合、棟持柱に近い北壁が他の壁に比べてやや外側に膨らむ傾向がある（SB0049・66ほか）。

炉は北側主柱穴（東西軸の場合、西側）間の床面に1基設けられることが通例で、大型～超大型住居跡では南西側、まれに南東側の主柱穴付近に副次的な炉を伴う場合がある（SB0011・27・49・67・75・102・110・3069・4030）。炉形態は土器埋設炉が主体をなし、土器敷炉や地床炉、炉縁石が据えられていることは少ない。

出入口施設としては南壁際（東西軸の場合、東壁際）中央に軸方向に細長いピットが2基並ぶ。2基の断面形は壁側から住居内側に向かって傾斜している。こうしたピット形状は平行する板材2枚を斜めに差し込んだ痕跡と理解され、階段の段板を支える登り桁の一種を出入口に設置していたと考えられる。桁材自体が残存していないため種類は特定できないが、段板を下側から支える彫桁（ささらげた）あるいは段板の両側を差し込んで支える側桁（がわげた）などが想定される。また出入口施設の東脇に隣接して検出されることの多い円形の小形ピットは、貯蔵穴として機能していたと考えられる。

**超大型竪穴住居跡** 超大型竪穴住居跡 SB0067 の平面規模は主軸長 18.13 m × 副軸長 9.46 m、床面積 155 m<sup>2</sup>で主軸方向は N13° E、SB0110 は 13.6 m × 9.14 m、119m<sup>2</sup>、N14° E である。超大型住居跡であっても主柱は4本で、最大規模の SB0067 では棟方向の主柱間に、支柱穴が2基ずつ並置されている。屋内棟持柱については SB0067 で確認されているが、SB0110 は北壁際中央を大形の土坑によって床面下位まで破壊されていて存否を問えない。主柱穴は2軒とも深さは約 100cmを測り、柱穴底面の平面形状からどちらも幅 50cm、厚さ 25cm規模の五平材を使用していた可能性が高い。なお大型～超大型の住居跡（SB0041・67・110ほか）の壁際に並ぶ極細かい小ピット群について、現地指導を仰いだ宮本長二郎氏は木舞（小舞）などの壁体構造に伴う支柱穴群と想定され、規模の大きな住居跡は壁立ちの構造であった可能性を指摘された。

大阪府和泉市池上曾根遺跡の、「弥生神殿」とも称される大型掘立柱建物跡（主軸長 19.2 m × 副軸長 6.9 m、床面積 133m<sup>2</sup>）に匹敵する床面積でありながら、炉や出入口施設などは一般の竪穴住居跡と同規模、同数であるといった建物のあり方から、超大型竪穴住居跡の建築目的をどう考えるべきか。構造や規模からみて、当時の最高水準の技術を結集して建築された建造物であることに間違いはないだろう。集落や地域において特別な建造物であったとも推察されるが、例えば首長クラスの居宅、特別な祭礼や儀礼行為を執り行う祭殿、あるいはその兼用施設などといった使用目的を想定できる決定的な調査成果は得られていない。

**超大型竪穴住居跡の柱穴** 主柱穴の断面形状を梁方向で見ると、SB0067 は4基とも住居内側はほぼ垂直に立ち上り、外側の掘り込み部が階段状を呈している。SB0110 は内外両側の掘り込み部が階段状となっている。両住居跡とも埋土に柱痕跡は観察されず、主柱穴周囲の床面にIV層土を主体とした褐色土ブロックが低丘状に広く分布している状態が検出されている。階段状の掘り込みと床面の褐色土ブロック分布を関連付けて考察し、住居解体などに伴う主柱の抜き取り行為により、柱穴壁面は階段状に掘削され、掘削排土が柱穴周囲の床面に放置されている状況と推定している。弥生時代後期ではこの2軒以外に、SB0041（長軸長 9.38 m × 短軸長 6.66 m）に主柱穴の階段状掘り込みと床面に柱材抜取りの排土が検出されている。また床面に排土は検出されないものの、主柱穴の階段状掘り込みを確認できる SB4029（長軸長 7.55 m × 短軸長 5.2 m）、SB5047（長軸長 9.42 m × 短軸長 5.66m）がある。こうした調査事例は神奈川県三浦市赤坂遺跡における弥生時代中期後半期の竪穴住居跡、5a号住居址（長軸長 15.0 m × 短軸長 12.0 m）

や福岡県筑紫野市以来尺遺跡における弥生時代後期の17号竪穴住居跡（長軸長9.7 m×短軸長7.0 m）など、大型～超大型の類にある竪穴住居跡において確認されている（桐生2012）。

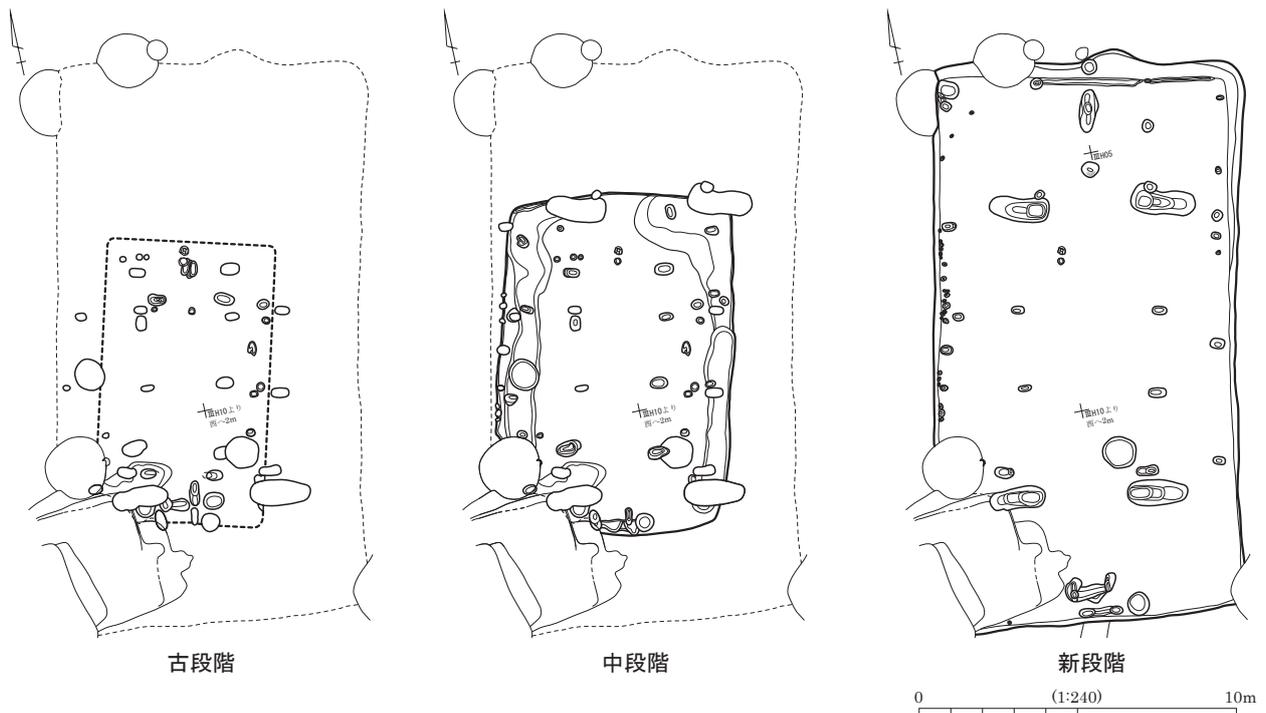
**五平材を使用する建物** 弥生時代の五平材を主柱に使用する建物跡については村田文夫氏によって具体的な集成研究が行われている（村田2006a・b・2010）。それによると長野県の東信地域（佐久市）、中信地域（塩尻市）、南信地域（岡谷市、茅野市、駒ヶ根市、伊那市、上伊那郡、下伊那郡）、山梨県、群馬県、埼玉県、東京都、千葉県、神奈川県に調査事例がある。土器分布圏としては弥生時代中期末から後期における中部高地型と称される櫛描文様の分布域、その系譜下にある簾状文様や波状文様を指標とする北関東の樽式や南関東の朝光寺原式の分布域に良好な事例が集中するとされる。また五平材の主柱を有する竪穴住居跡は集落内でも大型住居跡に偏向するとも指摘されている。しかしながら、西近津遺跡群では超大型や大型の住居跡ばかりでなく、通常規模の住居跡についても五平材あるいは板材を主柱に使用していることが明らかとなっている。こうした住居形態が集落単位の特徴なのか、地域性などのまとまりをもつのか、検証すべき課題である。

**超大型竪穴住居跡の年代** 出土土器の編年的な位置づけでは、小山岳夫氏が2014年に発表された編年案（小山2014b）に当てはめると、SB0110が弥生時代後期のⅢ期古段階（箱清水式期前半）、SB0067が同Ⅲ期新段階～Ⅳ期古段階（箱清水式期前半～後半）と理解できる。佐久地域における竪穴住居跡の平面形状は、円形から楕円形（弥生時代中期後半）、楕円形から隅丸長方形（後期前半）、長方形（後期後半）、長方形から方形（古墳時代前期）という変遷を遂げている。SB0110の平面形状は隅丸長方形、SB0067が長方形であり、住居平面形の変遷においてもSB0110が先行すると推察される。

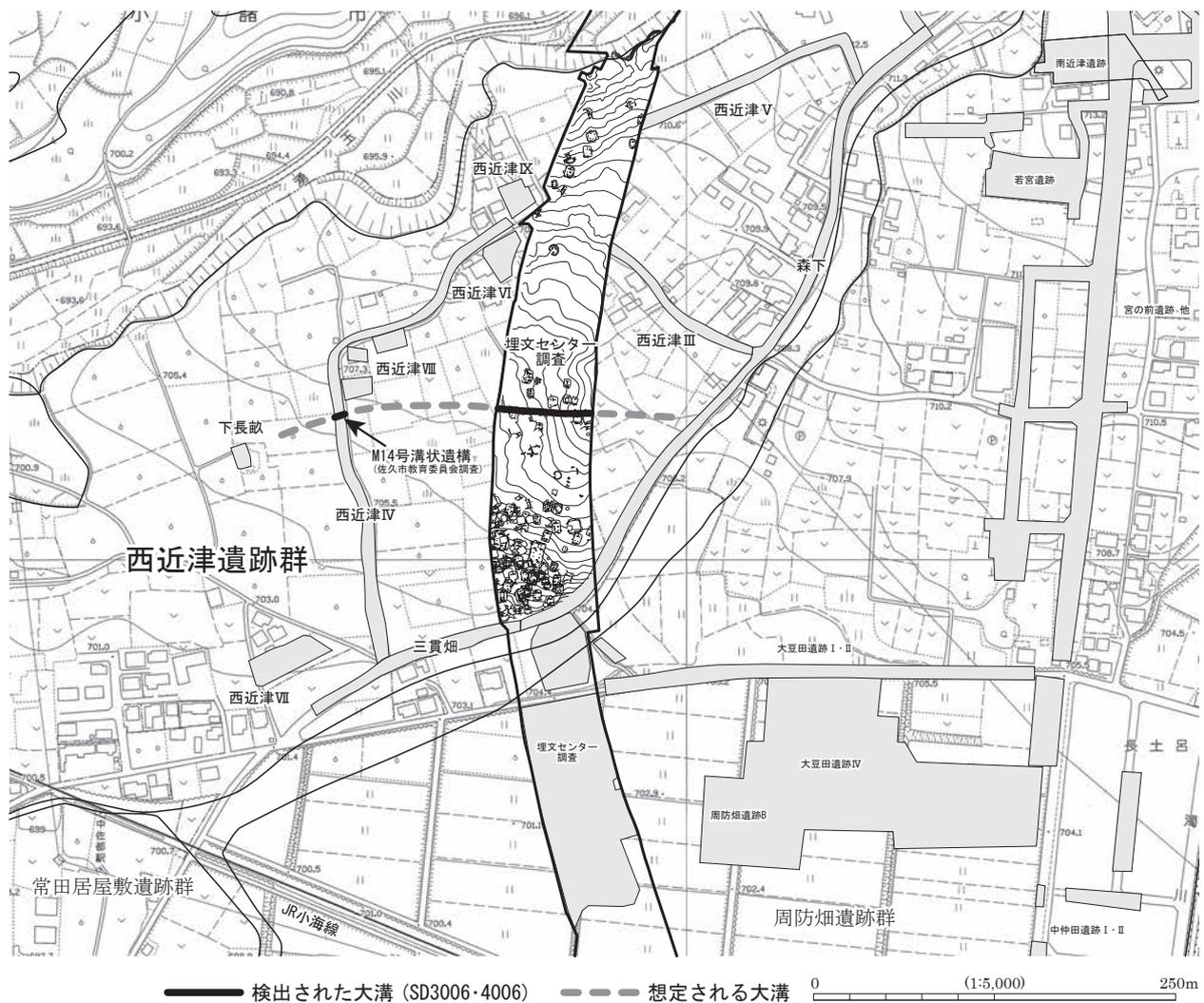
また今回の調査では住居内から採集した炭化物について放射性炭素年代測定を実施している。その結果、SB0067では補正年代として $1,905 \pm 20\text{yrBP}$ （試料No:06木28、ピット3、クリ）、SB0110では $2,030 \pm 20\text{yrBP}$ （06木04、床面、コナラ）、 $1,995 \pm 25\text{yrBP}$ （06木43、炉内、コナラ）、 $2,080 \pm 20\text{yrBP}$ （06木70、ピット9、コナラ）という測定値が得られている。採取試料は柱材などの構築材ではないが床面や炉、ピット内といった住居の存続期間内にある可能性の高い試料を選択している。こうした年代測定によってもSB0110がSB0067に先行する傾向がみられる。

あわせてSB0067は床下調査から2回の建替え・拡張が確認されている（第45図）。住居は当初の古段階（長方形、主軸長推定8.97 m×副軸長推定5.31 m）、中段階（長方形、主軸長10.85 m×副軸長7.35 m）、新段階（長方形、主軸長18.13 m×副軸長9.46 m）と、ほぼ軸線を変えずに東側へ拡大するように建替えられている。各段階の存続期間を導き出す調査成果は得られていないが、SB0067の場合、当初から巨大な住居建築を計画されたのではなく、段階を経て最大規模の住居として建築されていく過程を捉えられたといえよう。この時間差と、SB0067より先行した可能性があるSB0110の建築時期をどう考えていくかは今後の課題としたい。

また近年、群馬県安中市小日向瀧遺跡において弥生時代後期の竪穴住居跡33軒が検出されている。そのうち9号住居跡（短軸長7.98 m、長軸は調査区外に大半があって不明）では主柱穴に断面長方形（30 cm×13 cm）のクリ材が残存し、放射性炭素年代測定から $1,830 \pm 30\text{yrBP}$ という測定値が得られている（安中市教委2010）。2010年の企画展にて実見したところ、側面および底面には全体に加工痕が鮮明に残り、断面長方形の柱材（五平材）として整形されていることは明らかである（安中市学習の森ふるさと学習館2010）。小日向瀧遺跡では平面長方形で主柱が4本、棟持柱を有する住居跡が全体の三分の一を占めている。また調査者は炉形態に着眼し、棟持柱と土器敷炉を有する住居跡6軒について、長野県佐久地方の影響を受けた住居形態として考えている。そして天竜川流域に特徴的な櫛描円弧文を施す壺の出土から、佐久地域を介した天竜川流域との交流の可能性も指摘している。



第 45 図 超大型竪穴住居跡 SB0067 建替え状況



第 46 図 弥生時代後期の大溝 (SD3006・4006) 想定方向

五平材を使用した竪穴住居跡や大型（超大型）竪穴住居跡の佐久地域への伝播経路については今後、より詳細な検討を必要とする。ここでは前掲の村田文夫氏による集成研究の成果を踏まえ、今回の調査成果や群馬県の事例などから、弥生時代中期後半に位置付けられる南関東地方の住居跡を端緒として、山梨県と諏訪地域を経由して佐久地域へ伝播し、更に碓氷峠を越えて群馬県の南西地域に分布していく経路を想定しておきたい。そして佐久地域と同様に濃密な箱清水式土器圏である千曲川の中下流域、例えば上田地域や長野地域において、同様な構造を有する住居形態が伝播しているのかどうか、調査成果に注意を払っていく必要がある。

**大規模な溝跡** 弥生時代後期の溝跡 SD3006・4006 は調査区をほぼ直線的に東西方向に横断する。調査部分の長さは 63.6 m。底面の縦断勾配は東から西に向かって 2.3% と検出面の地形傾斜とほぼ同数値である。断面形状は通して逆台形で、上端幅 3.2 ～ 3.4 m、下端幅 1.7 ～ 1.8 m、深さ 0.97 ～ 1.24 m を測る。

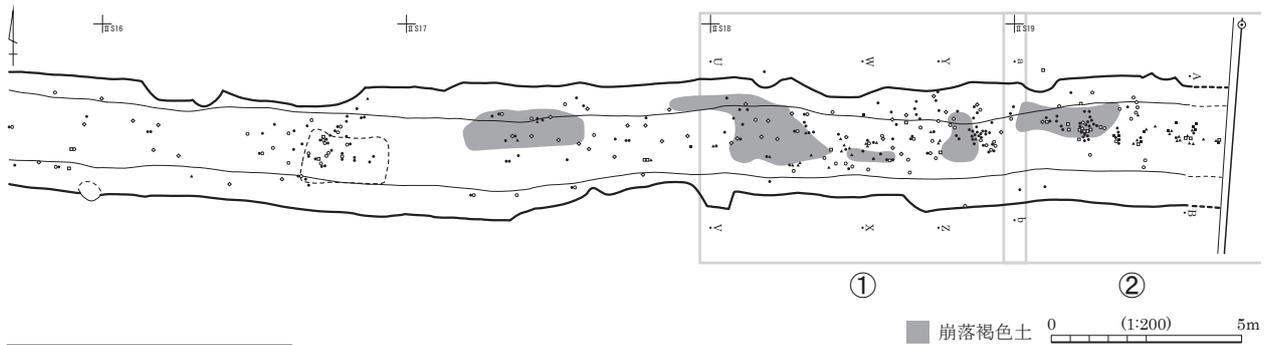
溝跡はすでに埋没した弥生時代後期前半期の竪穴住居跡 4 軒 (SB3029・3036・4016・4070) を壊して掘削されている。また出土土器の編年的な位置づけからみると、溝跡出土土器は超大型竪穴住居跡 2 軒 (SB0067・0110) も埋没し、集落規模が縮小していく弥生時代後期終末の段階と考えられる。

溝跡の堆積時期は大きく三段階に分かれる。まず底部壁際には地山起因の黄褐色シルトが薄く堆積する。次に土壌化した褐色シルトが厚く堆積し、最後に東側からの自然流水が埋土を浸食し、そこに砂層土や砂質シルトを残している。下位二段階の土質は竪穴住居跡の埋土とよく似ていて、周囲の土が段階的に埋没していった状況と捉えられる。こうした堆積状況から溝跡は水路としての機能を持たないこと、また一定期間は開口した状態を維持していたことが推測される。

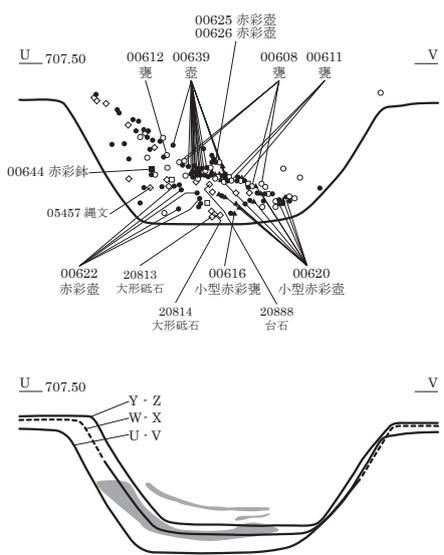
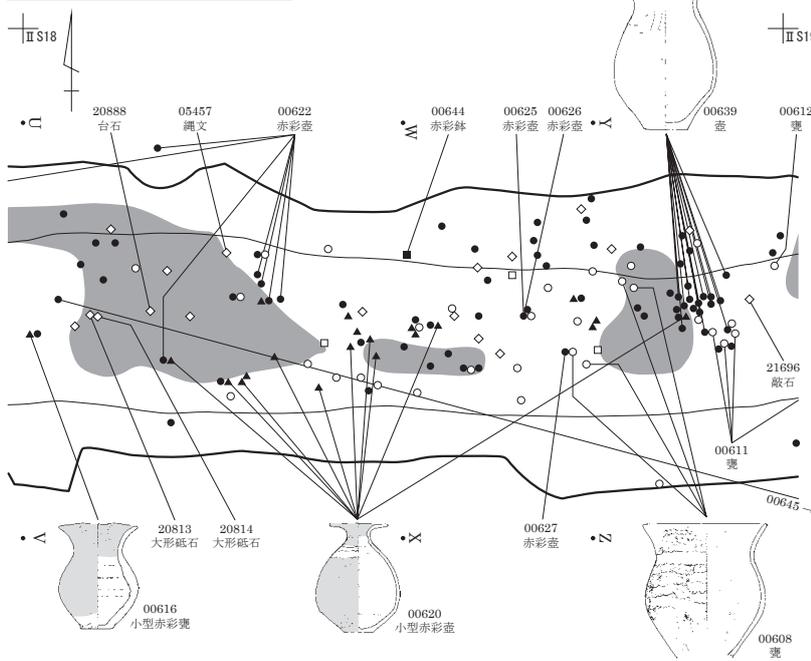
溝跡全体にわたって二段階目の埋土から弥生時代後期の土器が多数出土した。完形の個体は少ないが、いずれも磨滅はなく、ある程度のまとまりをもって出土している。土器の器種としては小型の赤彩土器が目立つ。重量割合でみると、溝埋土の総土器量のうち小型赤彩土器は 10% を占めている。ちなみに土器を多量出土した住居跡 (SB4002) であっても、小型赤彩土器は 0.8% しかない。他の住居跡でも同程度の割合と考えられ、溝跡からの小型赤彩土器の出土割合が極めて突出しているといえる。器種は壺、甕、高杯、鉢があり、いずれも住居跡から出土する一般的な土器の 4 分の 1 以下の大きさであるが、形や文様は丁寧に整えられ、赤く磨かれている。

溝跡の東側では広範囲にわたって、地山主体の褐色土ブロックが北側から溝跡内部に向かって分布している。そして褐色土ブロックより上位に小型赤彩土器が分布する特徴がある。褐色土ブロックは溝北側から崩落または流れ込んだような堆積状況を示している。こうした褐色土ブロックと小型赤彩土器の調査状況は、溝の掘削土を溝北側の肩部に堤状に積み上げていたこと、その付近で小型赤彩土器を用いた祭祀や儀礼行為があったことを推察させる (第 47 図)。

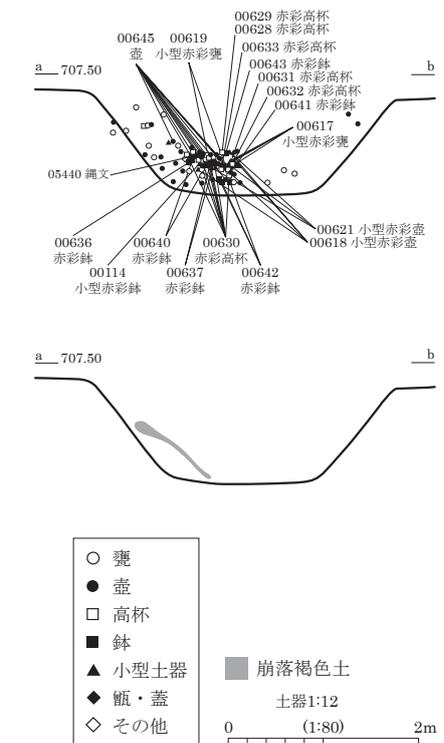
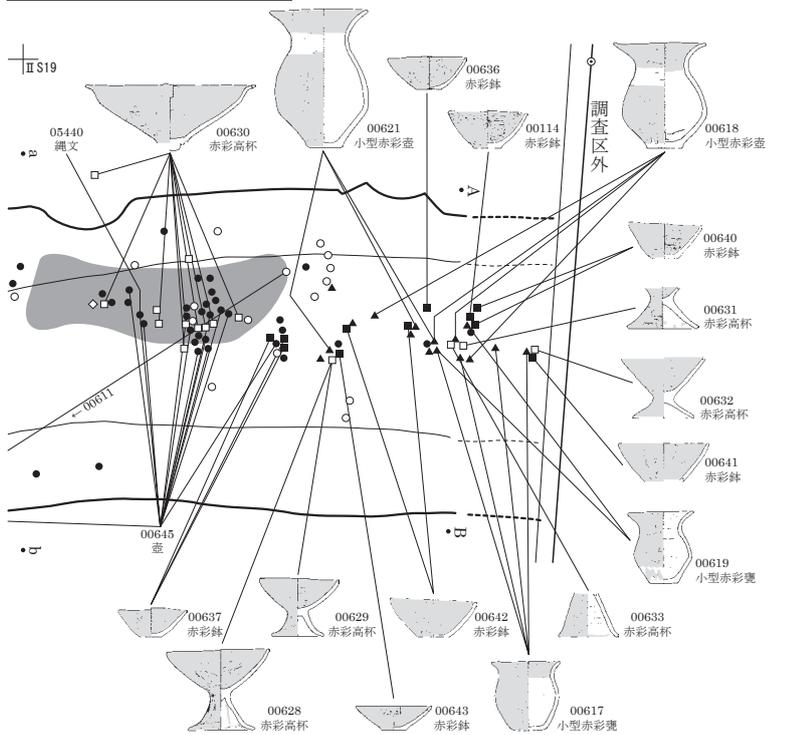
**大溝の範囲** 当初の集落空間を断つような位置に設計された直線的な大溝は、はたして調査区外でどのような規模と形態で延びていくのだろうか。佐久市教委が 2007・08 年に行った市道工事に先立つ調査では、当センター調査区における溝西端から 99 m 西の地点 (西近津遺跡Ⅳ) から東西方向の溝状遺構 (M14 号) が確認されている (佐久市教委 2014a)。市教委調査の溝跡は当センター調査の溝跡に形状や規模が合致していることから、同一の溝跡と推測される (第 46 図)。また佐久市教委の調査地点では溝の方向は東西方向からやや南に向きを変えている。なお東側の延長線上にある森下遺跡において溝跡は検出されていないが、狭隘なトレンチ調査であったため、捉えきれていない可能性もある (佐久市埋文センター 1989)。また森下遺跡の南西側には現在、西近津遺跡群と周防畑遺跡群とを画する小規模な田切り地形がみられる。溝のあり方と合わせて、現在の田切り地形が果たして弥生時代後期にまで遡るのかどうかという課題も残されている。



① II S18<sup>7</sup> リット 遺物分布図(1:80)



② II S19<sup>7</sup> リット 遺物分布図(1:80)



第 47 図 弥生時代後期の大溝 (SD3006・4006) 遺物出土状況

弥生時代後期前半に形成され、超大型竪穴住居を中心として地域最大規模に発展した集落が、世代交代を進めていくなかで、後期後半から終末になって大溝で区画あるいは圍繞する、新たな設計に基づく集落形成が行われていった状況が想定される。ただ本調査区内において、溝跡と同時期と考えられるのは溝跡の南にある木棺墓群であり、竪穴住居跡は検出されていない。東西に広がる未調査範囲において、どのような集落形態がみられるのか、今後の調査進展に期待が寄せられる。

### 3. 古墳時代

調査区最北端の湧玉川によって形成された段丘崖際に古墳時代前期に築造された可能性が高い方形周溝墓2基（SM8001・8003）を確認した。2基は東西に隣接し、西側に位置するSM8003の大半は調査区西側境界外にあり、調査部分は少ない。東側のSM8001は全体について調査可能であったが、後世の削平や攪乱行為が著しく主体部は残っていない。周溝と溝内から当該期の土師器類が一定量出土している。この2基からやや東側に離れた地点にL字状の溝跡SD8018が検出されている。この溝跡は調査区東側境界外に延びていて、佐久市教委の市道改良工事に先立つ調査（西近津遺跡V）で延長部が発見されている（佐久市教委2014a）。その部分と合わせてみると、他の2基とほぼ同規模の方形周溝墓の周溝部であると判断される。出土遺物が少ないため時期決定は困難であるがおおよそ古墳時代前期とし、中期まで下る余地も残している。こうした古墳時代前期の方形周溝墓群は佐久地域でも類例が少なく、当地方の古墳時代研究にとって重要な発見となった。

### 4. 奈良・平安時代

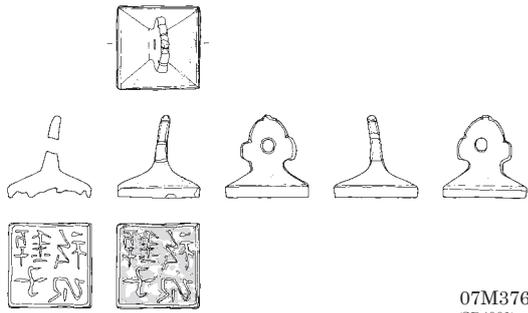
古墳時代後期から奈良時代、平安時代には調査区内に多くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が建造されている。そうした遺構内からは多くの土器が出土し、加えて弥生時代までは出土量が少ない金属製品の出土も増す。奈良時代から平安時代には、そうした土器や金属製品のなかに文字の記された資料が含まれている（第48図）。金属製品でいえば銭貨、焼印、銅印がある。土器には墨書土器、ヘラ書き土器、刻書土器、刻印土器がある。こうした文字資料は当時の社会構造や生活様式を考察する上で貴重な出土品である。

**皇朝十二銭** 今回出土した皇朝十二銭2点のうち、「隆平永寶」は台地最北端の8区で検出された奈良時代の大型土坑SK8210より出土している。SK8210は南北2.36×東西1.98m、深さ1.18mときわめて大形で、底面は小さく楕円形を成す。銭は埋土中層より出土し、解体されたウシ・ウマ骨、須恵器横瓶片や杯片なども一緒に出土している。同様の大型土坑は集落全体で9基あり、出土土器から奈良時代から平安時代初め頃に掘削、利用されていたと考えられている。こうした大型土坑は、県内では佐久地方の奈良・平安時代の集落遺跡から40基以上検出されている。埋土からは本土坑のように土器や金属製品、石製品、動物遺体などが出土するケースが多く、その性格については呪術的な農耕祭祀に関わるという説と塵芥処理目的とする説がある（花岡1995）。また土坑の形状規模から同時期に栃木県などで報告されている「氷室」と想定される円形有段遺構と同じ性格であるという指摘もある（中山1996）。

次に出土銭貨の集成研究からみると、皇朝十二銭は県内でこれまでに101点出土し、そのうち佐久地域（佐久市・小諸市・御代田町）では19遺跡34点の出土例がある（西山2011）。特に浅間山南麓の台地に繁栄した古代集落からの出土が多く、当遺跡もその範囲にある大規模な集落遺跡である。この地域の集落遺跡では皇朝十二銭のほかに、陶硯、石製腰帯飾具などといった地方官衙に関連するような遺物の出土が豊富であることや、東国への玄関口に位置することから佐久郡衙や東山道の所在を推定する論考が多い。

佐久地域におけるこれまでの調査では郡家（郡衙）跡や道路跡は明確に発見されていない。当遺跡についても古墳時代後期から平安時代まで竪穴住居跡を中心として、比較的小規模な掘立柱建物跡が伴う集落

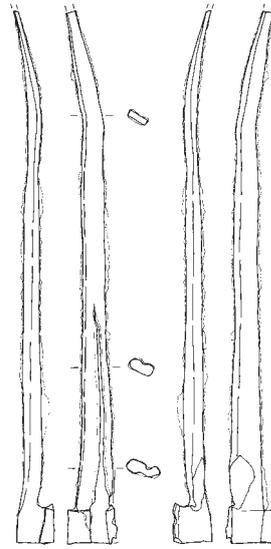
銅印



07M376  
(SB4001)

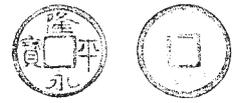
0 1(1:3) 10cm

焼印



07M218  
(SB4025)

銭貨 (皇朝十二銭)



07M305 隆平永寶  
(SK8210)

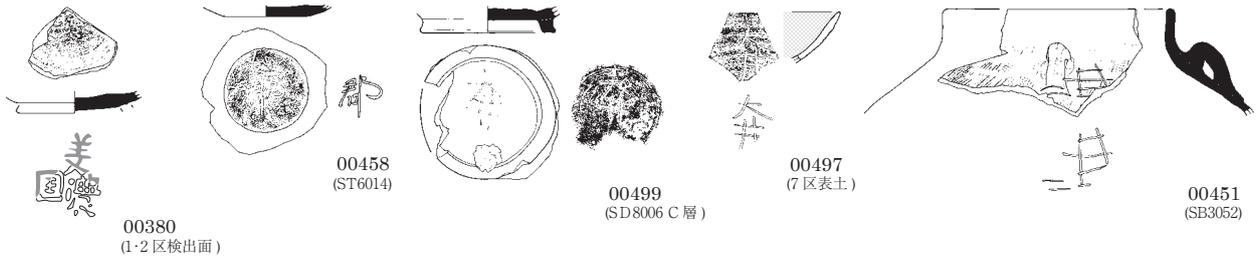


08M022 神功開寶  
(SD8006 I Y01)

0 1(1:2) 5cm

刻印土器

刻書(ヘラ書)土器



00380  
(1・2区検出面)

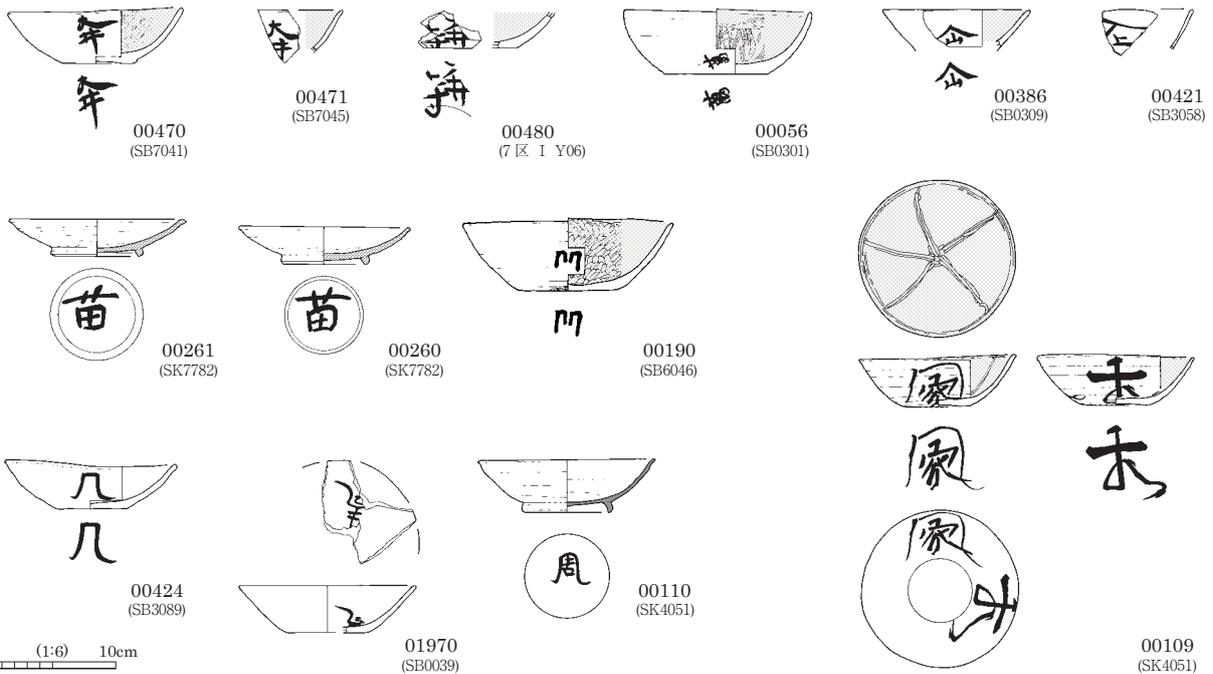
00458  
(ST6014)

00499  
(SD8006 C層)

00497  
(7区表土)

00451  
(SB3052)

墨書土器



00470  
(SB7041)

00471  
(SB7045)

00480  
(7区 I Y06)

00056  
(SB0301)

00386  
(SB0309)

00421  
(SB3058)

00261  
(SK7782)

00260  
(SK7782)

00190  
(SB6046)

00424  
(SB3089)

01970  
(SB0039)

00110  
(SK4051)

00109  
(SK4051)

0 1(1:6) 10cm

第 48 図 古代の主な文字資料

形態であり、他地域にみられるような郡家施設の発見は得なかった。ただ隆平永寶が出土した大型土坑と似た円形有段遺構も官衙遺跡や官衙関連遺跡あるいはそれらに近接した集落遺跡からみつかるという特徴を持つ。こうした特殊な遺構の性格について、形態や規模、銭貨などの出土状況など、多方面からの観察を加えることは、結果、遺構を保有した集落自体の評価にもつながっていく作業と考えられる。

**文字の記された土器** 文字の記された土器のうち多数を占める墨書土器の文字は、主に消費地である集落内で書かれていると考えられている。明確に判読できる文字で最も多いのが縦書きされた「大井」(00470・471ほか)である。この「大井」は佐久郡にあったとされる八郷のうち「大井郷」を指しているという指摘がある(井出1995)。本調査区以外でも長土呂地区で実施された佐久市教委の調査で「大井」墨書土器の出土点数は増加していて、この一帯が大井郷の中心地にあたる可能性がより高まってきている。また「大井寺」と判読された墨書土器(00480)は、調査区東に近在する定額寺(妙楽寺)推定地との関係性が問われる新発見といえよう(井出1995・小林2014)。

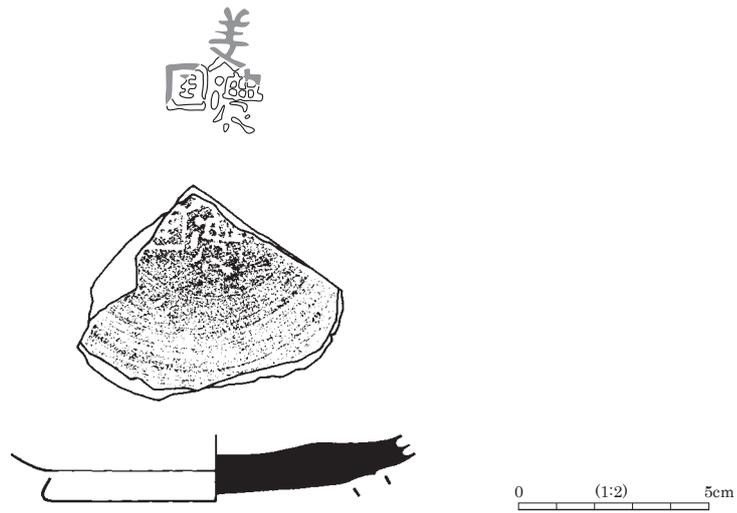
墨書だけでなく、「大井」とヘラ書きされた土師器(00497)や須恵器(00499)も複数確認されている。文字を焼成前にヘラ書きすることは窯業生産を行う場所に限定されるため、同じ郡内の生産地から大井郷向けに製作された土器類が流通していたことを推察させる資料である。同じように「郡」とヘラ書きされた須恵器(00458)についても、当時の佐久郡家(郡衙)に対して郡内の須恵器生産地で製作された須恵器であると理解できる。この「郡」ヘラ書須恵器は佐久郡家の比定地の一つとされている当地周辺において、今後の調査でその存在を確かめられることを期待させる資料である。

**特殊文字と焼印** 墨書土器には現在の漢字には当てはまらない特殊な文字も多い。こうした文字を理解するにあたり、整理作業において平川南氏を招聘し、一文字一文字判読を進めていただいた。そのなかで「吉」という文字に部首の「几」(つくえ)や「凡」(かぜかんむり・かぜかまえ)に似た字形が変則的に組み合わせられている例(00110・01970)、「家」という字を「几」・「凡」が囲んでいる例(00109)のほか、単に「几」・「凡」だけが記されている文字も確認された(00424)。長野県ばかりでなく、全国各地の古代集落ではしばしば「几」・「凡」が組み込まれた文字が墨書されている。そうした特殊文字は則天文字や篆書体、道教の呪符の影響によると平川氏は指摘されている(平川2000)。

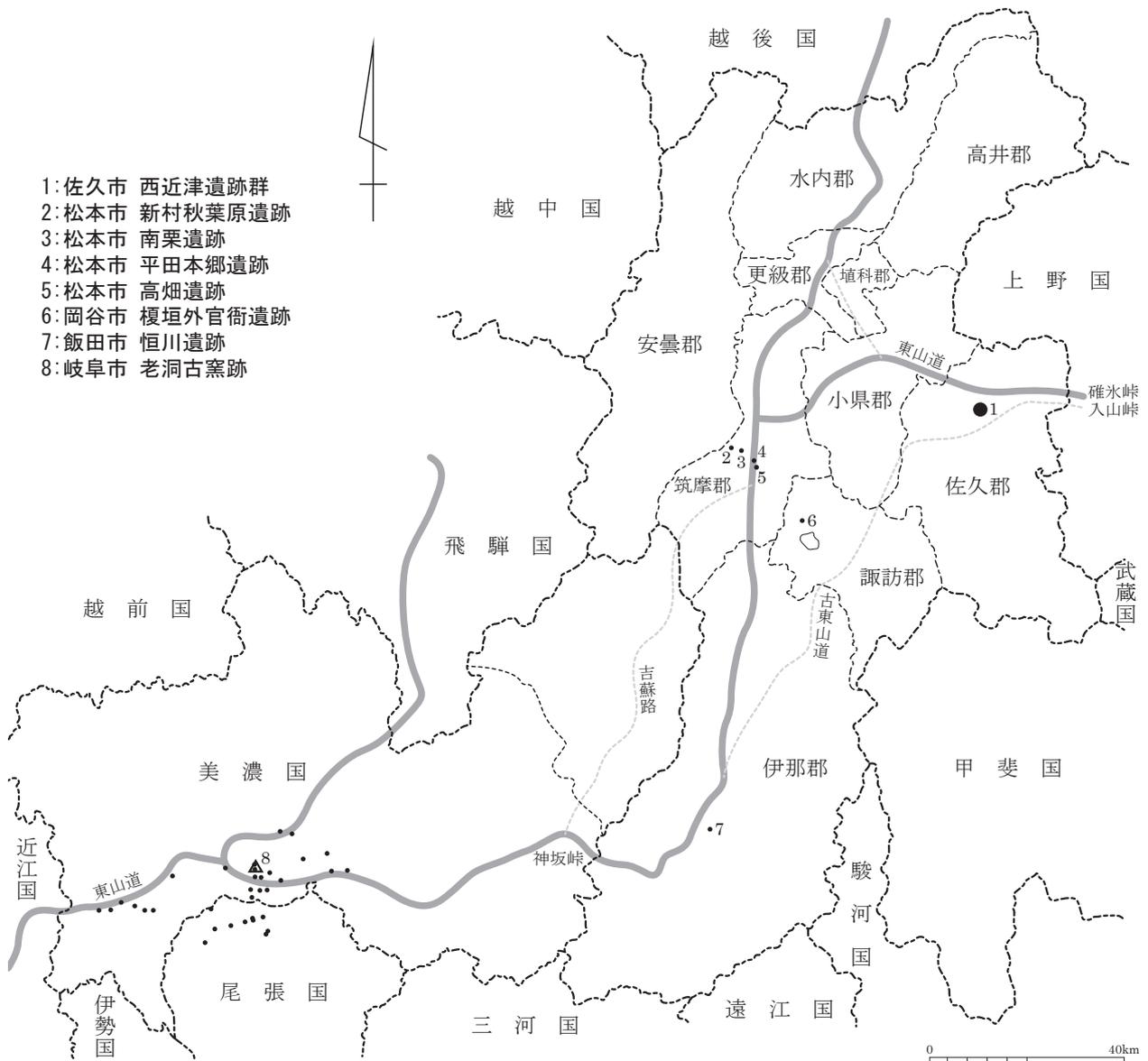
さらに墨書土器に加えて鉄製の焼印(07M218)の印字についても、「几」・「凡」と判読できることが明らかになった。この焼印自体は小型品で造りも華奢であることから、ウマやウシに使用する畜産印ではなく、集落内で使用される木椀などの木製品に印を付ける道具と考えられる。

「几」・「凡」自体が穢れを祓う呪術的な意味合いを持ち、そうした文字を吉祥文字などと組み合わせたり、土器や木器に記したりすることで、モノ自体や使用者、家族、集落内においてその効力を期待していたことが想像されてくる。「吉」を「几」・「凡」で囲んだ文字を底部に墨書された灰釉陶器碗(00110)と「我家(家のみ「几」・「凡」で囲む)」と大きく側面に墨書された土師器杯(00109)は平安時代10世紀前半の木棺墓(SK4051)内から出土している。調査状況から灰釉陶器と土師器は棺外に並べられていたと考えられる。こうした事例は「我家」に起る災いから逃れるために「几」・「凡」で囲んだ文字や吉祥句を記した食器を故人の納められた木棺と共に副葬する、当時の葬送儀礼の様相を映し出しているといえよう。そしてまた、こうした特殊な文字群の発見は、地方社会において文字を用いた信仰や儀式などの行為が盛んに行われていたことを具体的に示してくれている。

**「美濃国」刻印須恵器** 「美濃国」と刻印された須恵器(00380)は調査範囲南端の検出面から出土した。高台のつく杯の破片で推定される法量は底形9.0cm、口径14～15cm、高さ5cm内外である。焼成は良好、灰白色で緻密な質感は美濃産須恵器の特徴である。そうした杯の底部内面に「美濃国」と刻印がある(第48・49図)。文字は凹み、「美」の下半一部、「濃」のほぼ全部、「国」の右下部が残存する。刻印がややか



第 49 図 「美濃国」刻印須恵器と刻印部の復元



第 50 図 「美濃国」刻印土器の分布状況（岐阜県・愛知県・長野県）

すれているのは、押印後に表面をナデ調整したためか。生産遺跡である岐阜市老洞1号窯の報告書実測図との照合から、同じ形状の資料が確認できている（岐阜市教委1981）。全体形としては上に「美」、下右に「濃」、下左に「国」を置き、頂点を上にした三角形内に配字されている。

「美濃国」刻印土器は、岐阜市や各務原市の須恵器窯で、8世紀前葉に限って生産された、全国で唯一、国名が刻印された須恵器である。岐阜県を中心に6県55地点に分布していて、遠く奈良県の藤原宮跡や平城宮跡、三重県の斎宮跡での出土例から、中央へ税として納めていたとする説もある。

長野県内ではこれまでに飯田市、岡谷市、松本市の3市6遺跡から7点みつまっている。いずれも郡家（郡衙）推定地や東山道沿いの拠点集落である。今回出土した西近津遺跡群は、生産地から北東方向に直線距離で170kmも離れ、出土地としては最も遠く、北東限にあたる（第50図）。こうした希少品がどのような目的と経路から佐久地域の当地にもたらされたのか、所有する集落をどう評価すべきか、課題は尽きない。

**銅印の発見** 銅印は平安時代（9世紀末～10世紀前半）の小さな竪穴住居跡SB4001から無傷の状態で出土した。印面には四文字が刻まれ、個人が所有した私印であることは明らかである。銅印の印字判読についても平川氏の指導を仰いだ。平川氏によると印文は、右上の一文字目は金偏で、旁はこれまで類例が見当たらない文字であるが「辛」と想定された。二文字目は「子」、左一行は「私印」である。そして右一文字目については「からかね」と理解できないかと推察されている。

また印面にはベンガラを主成分とした赤色顔料が明瞭に残存していたことから、当印の所有者が行政上用いた書類などに押印する行為に際して使用された可能性も充分考えられる。奈良時代から平安時代の初めに統制された律令国家とその行政機能が弱まっていく過程で地方社会において製作され、利用されたことを示す重要な文字資料といえる。

## 5. 中世

古代の集落は遅くとも11世紀には途絶え、当地から集落は消失する。その後12世紀頃から規格性をもった複数の区画溝が軸線を北東—南西方向とその直角軸方向に持って掘削されている。それらの断面形は逆台形であり、深度は深い場合もある。部分的に重複する部分もあることから、一定期間使用された後埋没し、再度位置をずらして掘削されていることも分かっている。溝内の埋土からは流水のあったことを示す根拠は得られていない。今のところ、これらの溝の用途や性格は捉えられていない。区画された区域に竪穴状遺構などの生活施設はなく、溝の時期と合致する可能性のある中世集落は調査区南端にあり、井戸跡3基と竪穴状遺構4軒、他に掘立柱建物を構成する可能性が高い小ピット群が多数検出されている。また溝が埋没する過程で廃棄されたウマやウシ骨が多数出土している。廃棄された地点は調査区全体で複数確認されている。

出土骨の分析・鑑定を依頼した本郷一美氏によれば、骨が出土する地点には1個体の上下の顎や四肢の一部の骨がまとまって出土している地点と、年齢が異なる複数個体の骨が混在したり、ウシの骨が混ざっていたりする地点がある。ウマやウシが解体後に溝に廃棄されたもので、比較的原位置を保って残った場合と、バラバラになったものが流されるなどして数カ所にたまった場合があったと考えられる。

またウマの体高は110～120cmで、小型馬だったと推定されている。歯にもとづく年齢推定ができた31個体は、乳歯のみの子ウマから永久歯の臼歯列がはえそろった前後（4～4.5才）の若いウマ15個体（48%）と、歯の咬耗がかなり進んだ13～15才以上11個体（35%）の年齢群に大別された。5才～10才と推定されたのは5個体だけである。

このことは、西近津遺跡群の近くにウマの生産地があり子ウマがいたことを示している。また働き盛りの5～10才のウマはおそらく他所に出荷され、繁殖年齢を終える15才前後以上の個体と、何らかの原因

で死亡した幼・若獣が主に溝内へ廃棄されたのではないかと推察されている。犬歯の有無で性別を特定できたのはわずか3個体で、2個体がメス、1個体がオス、いずれも13～17才の個体である。またウシの基節骨にみられる切痕は、皮を剥ぐ際についた可能性も指摘されている（第9章第7節参照）。

こうしたウマやウシの骨は佐久市教委の調査区でも同様の溝跡から発見されていて、今後広域的な溝区画の復元や出土骨の総合的な分析によって、大規模に展開した古代集落の終焉と、再開発された中世の土地利用を明らかにし得ることが期待される。

また今回の調査で得られた中世の溝跡配置図と明治25年（1892年）に作成された旧公図について、照合作業を行った（図版2-544）。それによれば、明治時代には遺跡全体が畑地として利用され、道や筆境の方向は中世の溝跡とほぼ合うこと、一部の道や筆境は溝跡とよく合致することがわかる。調査前の遺跡は自然地形に沿った緩斜面であり、表土掘削においても中世の溝跡埋没以後、大規模な開発行為の痕跡はみられていない。以上の点から、明治時代の畑地区割りが中世の段階まで遡る可能性も出てきている。

## 引用・参考文献

- 青木一男 1993「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70
- 青木一男・山下誠一・小山岳夫「長野県の後期弥生土器 編年案の提示」『東日本弥生時代後期の土器編年（第1分冊）』第9回東日本埋蔵文化財研究会
- 浅科村教育委員会 1993『砂原遺跡』浅科村文化財調査報告第6集
- 浅科村教育委員会 2002『海戸田A遺跡』浅科村文化財調査報告第14集
- 安中市学習の森ふるさと学習館 2010『発掘された安中の遺跡 2010』平成22年度春季企画展展示解説書
- 安中市学習の森ふるさと学習館 2014『古代碓氷の馬と牧』平成26年度夏季企画展展示解説書
- 安中市教育委員会 2010『小日向地区遺跡群』
- 飯田市上郷考古博物館 2010『古代の役所—律令時代のイナとシナノ—』平成22年度秋季企画展図録
- 飯田市教育委員会 1988『恒川遺跡（田中・倉恒外地籍）』
- 飯田市教育委員会 2007『恒川遺跡群（官衙編）』
- 石井良助 1991『印判の歴史』明石書店
- 市川健夫 2007「千曲川流域の気候風土と地域文化」『千曲川大紀行』一草舎
- 市原市埋蔵文化財調査センター 2004「刑房私印」『市原市埋蔵文化財調査センター報 埋文いちばら』14
- 井出正義 1995「第5章佐久の奈良・平安時代 第1節律令制社会と佐久」『佐久市志』歴史編（一）原始古代
- 稲田 愿 2013『梯子・階段の文化史』井上書院
- 上田市教育委員会 2006『史跡信濃国分寺跡』上田市文化財調査報告書第100集
- 上田市立信濃国分寺資料館 2007『古代信濃の文字』特別展展示解説
- 植月 学 2011「動物考古学からみた牛の利用」『牧と考古学—牛をめぐる諸問題—』山梨県考古学協会 2011年度研究集会資料
- 植月 学 2014「古代東国における牛肉職の動物考古学的検討」『山梨県考古学論集Ⅶ』
- 植月 学 2014「遺跡出土馬に見られる銜痕」『山梨県立博物館研究紀要』8
- 植月 学 2014「馬骨から探る甲斐の馬」『甲斐の黒駒—歴史を動かした馬たち—』企画展図録
- 宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2
- 宇賀神誠司 1993「4世紀を中心とした土器編年表」『長野県考古学会誌』69・70
- 牛山佳幸 1989「第三章 第二節 四 信濃の郡と郷」『長野県史』通史編第1巻原始・古代
- 白居直之 2000「再生される銅釧一帯状円環型銅釧に関する一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
- 白田町教育委員会 2005『白田町の文化財 追録』
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器』平成17年度冬季企画展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 2001『弥生クロロード—再考・信濃の農耕社会』平成13年度秋季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 2002『王の居館を探る』平成14年度秋季特別展図録
- 大阪府立弥生文化博物館 2009『弥生建築—卑弥呼のすまい—』平成21年度春季特別展図録
- 岡谷市教育委員会 2008『榎垣外官衙遺跡』郷土の文化財 29
- 小川貴司 2001『美濃国』刻印須恵器の研究』美濃百踏記第二巻 言叢社
- 覚張隆史・山崎京美・米田穰 2012「同位体生態学からみたヒトと動物の関わり」『月刊考古学ジャーナル』No.625
- 金関 恕監修 2001『弥生時代の集落』大阪府立弥生文化博物館編 学生社
- 加納俊介・石黒立人編 2002『弥生土器の様式と編年—東海編—』木耳社
- 唐古・鍵考古学ミュージアム 2005『唐古・鍵考古学ミュージアム関連用語辞典』
- 川崎 保 2009「〔禾〕（アワ）墨書土器に関する小考」『信濃』第61巻第4号
- 川村和正 2005「都祁水室の成立と変遷について」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』第10集
- 菊井佳弥 2002「中空円面硯小考」『大阪文化財論集Ⅱ』
- 岐阜市教育委員会 1981『老洞古窯跡群発掘調査報告書』
- 桐原 健 2003「古代信濃の私印所有者」『信濃』第55巻第11号
- 桐原 健 2009「弥生の注口土器」『博古研究』第37号
- 桐生直彦 2012「たかが柱穴、されど柱穴（その壱）—堅穴建物の柱抜取小考—」『土壁』第12号

久保浩一郎 2014 「第Ⅳ章まとめ」『西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡』佐久市教育委員会  
工楽善通 1989 「木製高杯の復元」『弥生人の造形』古代史復元 5  
倉澤正幸 2014 「遺構・遺物から考察した信濃の古代寺院跡」『法政考古学』第 40 集  
黒坂周平 1989 「第三章 第五節 東山道」『長野県史』通史編第 1 巻原始・古代  
小葉一夫 1990 「土製円板の機能的側面について」東京の遺跡No.28  
国立歴史民俗博物館 1996 『日本古代古印集成 非文献資料の基礎的研究—古代—報告書』  
国立歴史民俗博物館 1999 『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集  
小高哲茂・坂口 一 2006 「第 5 章 考察 4 張出し部をもつ古墳時代の竪穴住居について—6 区 19 号住居—」『高源地東 I 遺跡』群馬県  
埋蔵文化財調査事業団  
小林真寿 2014 「3 東城公人氏寄贈の長土呂字渋谷工門 1078 表採遺物」『佐久市文化財年報』22  
小諸市 1986 『小諸市誌』自然編  
小諸市教育委員会 1984 『久保田遺跡』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集  
小諸市教育委員会 1988 『鋳物師屋』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 集  
小諸市教育委員会 1989 『和田原 鎌田原遺跡』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 13 集  
小諸市教育委員会 1994 『東下原 大下原 竹花 舟窪 大塚原』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集  
小諸市教育委員会 1994 『大塚原 (第二次)』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 20 集  
小諸市教育委員会 1995 『古屋敷』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集  
小諸市教育委員会 2002 『油久保』小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第 31 集  
小山岳夫 1994 「素描 弥生社会解体に伴う集落の拡散」『長野県考古学会誌』74  
小山岳夫 1999 「佐久地方の弥生土器」『長野県の弥生土器編年』1998 年度長野県考古学会冬季大会発表資料  
小山岳夫 2001 「長野県後期弥生土器の地域圏」『長野県考古学会誌』93・94  
小山岳夫 2014a 「佐久地域北部で最大級の環濠集落を有する北一本柳遺跡」『佐久考古通信』No.113  
小山岳夫 2014b 「佐久地域後期弥生土器の編年と北一本柳遺跡の年代」『佐久考古通信』No.113  
小山岳夫 2014c 「西一本柳遺跡一帯の弥生後期集落の変遷—長野県佐久地域北部の一例—」『長野県考古学会誌』149  
小山岳夫 2014d 「佐久地域北部の弥生集落の変遷—主として栗林期～箱清水期—」『熊谷市前中西遺跡を語る～弥生時代の大規模集落  
～』考古学リーダー 23 関東弥生文化研究会・埼玉土器観会編 (株)六一書房  
坂下 実 2009 「滋賀県出土の土器記号文について—弥生時代～古墳時代前期を中心として—」『滋賀県文化財保護協会紀要』第 22 号  
佐久考古学会 1990 『赤い土器を追う』佐久考古 6 号  
佐久市 1988 『佐久市志』自然編  
佐久市 1995 『佐久市志』歴史編 (一) 原始古代  
佐久市教育委員会 1972 『北近津 戸坂』郷土の文化財 3  
佐久市教育委員会 1975 『今井西原緊急発掘調査概要』  
佐久市教育委員会 1981 『下小平遺跡』  
佐久市教育委員会 1984 『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』  
佐久市埋蔵文化財センター 1986 『西裏 竹田峯』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 1 集  
佐久市埋蔵文化財センター 1986 『池畑 西御堂』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987a 『宿上屋敷 下川原 光明寺』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 5 集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987b 『北西の久保』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 8 集  
佐久市埋蔵文化財センター 1987c 『瀧の峯古墳群』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 14 集  
佐久市教育委員会 1988 『鋳師屋遺跡Ⅱ』  
佐久市教育委員会 1989 『前田遺跡』  
佐久市埋蔵文化財センター 1989 『腰巻 西大久保 曲尾Ⅱ』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集  
佐久市埋蔵文化財センター 1989 『森下』佐久埋蔵文化財センター調査報告書第 18 集  
佐久市教育委員会 1991 『大ふけ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 4 集  
佐久市教育委員会 1992 『三貫畑』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 7 集  
佐久市教育委員会 1992 『国道 141 号関係遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 9 集  
佐久市教育委員会 1994 『藤塚古墳群 藤塚遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 26 集  
佐久市教育委員会 1995 『曾根新城遺跡 上久保田向遺跡 西曾根遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 41 集  
佐久市教育委員会 1996 『権現平遺跡 池端遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 43 集

引用・参考文献

- 佐久市教育委員会 1994『池端城跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 48 集
- 佐久市教育委員会 1994『藤塚遺跡Ⅲ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 50 集
- 佐久市教育委員会 1997『円正坊遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 53 集
- 佐久市教育委員会 2001『榛名平遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 84 集
- 佐久市教育委員会 2001『宮添遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 87 集
- 佐久市教育委員会 2001『川原端遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 89 集
- 佐久市教育委員会 2001『西一本柳遺跡Ⅴ・Ⅵ 中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ 松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 91 集
- 佐久市教育委員会 2001『辻の前遺跡Ⅱ 中仲田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 92 集
- 佐久市教育委員会 2002『深堀遺跡Ⅵ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 101 集
- 佐久市教育委員会 2002『円正坊遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 102 集
- 佐久市教育委員会 2003『佐久駅周辺土地区画整理事業埋蔵文化財発掘調査報告書』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 110 集
- 佐久市教育委員会 2004『西一本柳遺跡Ⅸ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 113 集
- 佐久市教育委員会 2004『東近津遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 118 集
- 佐久市教育委員会 2005『聖原遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 126 集
- 佐久市教育委員会 2008『周防畑遺跡群大豆田遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 156 集
- 佐久市教育委員会 2008『寄塚遺跡群寄塚遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 157 集
- 佐久市教育委員会 2009a『西近津遺跡群 西近津遺跡Ⅵ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 161 集
- 佐久市教育委員会 2009b『西近津遺跡群 西近津遺跡Ⅶ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 162 集
- 佐久市教育委員会 2009c『下宮原遺跡Ⅰ・Ⅱ 周防畑遺跡群』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 163 集
- 佐久市教育委員会 2009d『森平遺跡 北近津遺跡Ⅱ 西一里塚遺跡Ⅲ 大豆田遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 165 集
- 佐久市教育委員会 2010『岩村田遺跡群 西八日町遺跡Ⅳ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 172 集
- 佐久市教育委員会 2010『岩村田遺跡群 西八日町遺跡Ⅴ・Ⅵ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 173 集
- 佐久市教育委員会 2010『周防畑遺跡群南近津遺跡Ⅱ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 177 集
- 佐久市教育委員会 2013『西近津遺跡群 西近津遺跡Ⅷ・Ⅸ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 207 集
- 佐久市教育委員会 2014a『西近津遺跡群 西近津遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 208 集
- 佐久市教育委員会 2014b『西近津遺跡群・常田居屋敷遺跡群 上大豆塚遺跡』佐久市埋蔵文化財発掘調査報告書第 217 集
- 滋賀県立安土城考古博物館 2009『大型建物から見えてくるもの—弥生時代のまつりと社会—』平成 21 年度春季特別展
- 静岡市立登呂博物館 2012『赤い土器の世界—登呂式土器の赤彩を探る—』特別展図録
- 白井久美子 2002「第 7 章考古学的考察 3 (2) 金銅製毛彫馬具」『印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県史料研究財団
- 末木 健 2011「甲斐国出土の苧引金について」『山梨県考古学協会誌』20 号
- 末木 健 2013「古代中部地方における苧引金—考古資料としての紡織縫具—」『紡織の考古学—紡ぐ・織る・縫う—』山梨県考古学協会 2012 年度研究集会資料集
- 杉山和徳 2014「東日本における鉄器の流通と社会の変革」『久ヶ原・弥生町期の現在—相模湾／東京湾の弥生後期の様相—』西相模考古学研究会記念シンポジウム資料集
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鎌について」『檀原考古学研究所論集』第八
- 鈴木敏則 2006「東海・関東における大型建物・方形区画の出現と展開」『弥生の大型建物とその展開』日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム 1 サンライズ出版
- 高崎市市史編さん委員会 2000「墨書・刻書土器等一覧」『新編高崎市史』資料編 2 原始古代Ⅱ 高崎市
- 高島英之 1999「古代の私印について」『日本古代印の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 79 集
- 高島英之 2010「郡名記載墨書・刻書土器小考—群馬県内出土事例を中心に—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』28
- 高遠町誌編纂委員会 1983『高遠町誌 上巻 歴史—』
- 田口 勇・齋藤 努編『考古資料分析法』考古学ライブラリー 65
- 竹内 恒・土屋長久「佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告」『長野県考古学会誌』13
- 田中一穂 2009「則天文字「天」墨書土器の再検討—西部遺跡出土墨書土器の前提的考察—」『新潟考古』第 20 号
- 田中広明 1990「律令時代の身分表象 (Ⅰ) 一帯飾具の生産と変遷—」『土曜考古』第 15 号
- 田中広明 1991「律令時代の身分表象 (Ⅱ) 一腰帯をめぐる人々の奈良・平安時代—」『土曜考古』第 16 号
- 田中広明 1993「腰帯の一考察」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第 10 号
- 田中広明 2006『国司の館—古代の地方官人たち—』学生社
- 田中広明 2007「古代の官衙や集落と陶硯」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第 22 号

田中広明 2008 『豪族のくらし』 すいれん舎

田中広明 2008 「北関東の郡家と集落」『北関東の郡家と地域社会』2008 年度国史学会大会 古代シンポジウム資料

田中広明 2009 「信濃の道後、坂東の道口—小諸市宮ノ反A 遺跡の可能性」『佐久考古通信』No.102

千賀 久・村上恭通編 2003 『弥生・古墳時代 鉄・金銅製品』考古資料大観第7巻 小学館

土屋長久 1975 『信濃佐久平古代氏族の性格とまつり』

堤 隆・藤森英二・小山岳夫・富沢一明・櫻井秀雄・森泉かよ子 2008 『考古学が語る 佐久の古代史』

堤 隆 1991 「住居廃絶時における竈解体をめぐる一竈祭祀の普遍性の側面」『東海史学』第25号

堤 隆 2012 「赤彩された弥生顔面—佐久市中佐都小学校所蔵資料—」『佐久考古通信』No.110

津野 仁 2011 『日本古代の武器・武具と軍事』吉川弘文館

寺内隆夫 2007 「弥生時代における国内最大級の堅穴住居跡の発見—西近津遺跡群の調査より—」『佐久考古通信』No.98

鳥取県埋蔵文化財センター 2005 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告1 木製容器・かご』

鳥取県埋蔵文化財センター 2010 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告5 骨角器(1)』

鳥取県埋蔵文化財センター 2011 『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』

鳥羽英継 2001 「古代のあかり」『長野県考古学会誌』96

富沢一明 1996 「佐久平における古墳時代の土器編年表」『長野県考古学会誌』79

富沢一明 2004 「長野県 東信地域の古墳時代前期土器様相と外来系土器について」『専修考古学』第10号

富沢一明 2005 「佐久における古墳時代前期土器の理解にむけて—所謂 外来系土器群を中心に—」『佐久』第44号・第45号

富沢一明 2012 「第IX章 まとめ」『周防畑遺跡群若宮遺跡Ⅳ・道常遺跡・南近津遺跡Ⅲ・宮の前遺跡Ⅰ・Ⅱ』佐久市埋蔵文化財調査報告書第198号

富沢一明 2014 「佐久地域における弥生時代の出土金属製品について」『佐久考古通信』No.113

富沢一明・広田和穂 1999 「長野県における古墳時代中期の土器様相」『東国土器研究』第5号

中沢 悟 2013 「紡錘車について」『紡織の考古学—紡ぐ・織る・縫う—』山梨県考古学協会 2012 年度研究集会資料集

永嶋正春 1999 「非破壊手法による銅印の科学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集

長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書1—』

長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業内遺跡—遺跡詳細分布調査2—』

長野県教育委員会 2003 『大規模開発事業内遺跡—遺跡詳細分布調査3—』

長野県教育委員会 2007 『大規模開発事業内遺跡—遺跡詳細分布調査4—』

長野県考古学会 1992 『中部高地における弥生集落の現状』長野県考古学会 30 周年記念大会資料集

長野県考古学会 1993 「科野における古墳出現期研究の現状と課題」長野県考古学会誌 69・70

長野県考古学会 1999 『長野県の弥生土器編年』1998 年度長野県考古学会冬季大会発表資料

長野県考古学会 2008 『信濃の古代郡衙—飯田市恒川遺跡群・岡谷市榎垣外遺跡の調査とその成果—』2007 年度研究大会資料

長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』

長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 南栗遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書1 下茂内遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 1992 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 栗毛坂遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1993 『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 向六工遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1996 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7 大星山古墳・北平1号墳』

長野県埋蔵文化財センター 1997a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13 飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1997b 『中央自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16 篠ノ井遺跡群』

長野県埋蔵文化財センター 1998a 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 松原遺跡 弥生総論6』

長野県埋蔵文化財センター 1998b 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1 砂原遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1998c 『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2 国分寺周辺遺跡群ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12 榎田遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17 野火附遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18 芝宮遺跡群 中原遺跡群』

長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19 石神遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 古代2・中世・近世編』

長野県埋蔵文化財センター 2009 『上信越自動車道佐久ジャンクション建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 野火附遺跡ほか』

長野県埋蔵文化財センター 2012 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 濁り遺跡 久保田遺跡 西一里塚遺跡群』

引用・参考文献

- 長野県埋蔵文化財センター 2014a 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 周防畑遺跡群』
- 長野県埋蔵文化財センター 2014b 『中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5 森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』
- 長野市埋蔵文化財センター 2001 『南宮遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第 96 集
- 中山 晋 1996 「古代日本の「氷室」の実体—栃木県下の例を中心として—」『立正史学』第 79 号
- 中山 晋 2001 「氷室研究の現状と課題」『とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター研究紀要』第 9 号
- 奈良県立橿原考古学研究所 2007 『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告第 122 集
- 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2002 『報告書作成の手引』
- 奈良文化財研究所 2007 『古代地方行政単位の成立と在地社会』古代官衙・集落研究会研究報告資料
- 奈良文化財研究所 2008 『日本古代木簡字典』八木書店
- 成瀬正和・本田光子 1988 「Ⅷ自然科学と考古学(3) 長野県における赤色顔料の分析」『長野県史』考古資料編全 1 巻(4) 遺構遺物
- 新潟県立歴史博物館 2008 『ハンコ今昔』平成 20 年度秋季企画展図録
- 西山克己 2011 「信濃出土の古代銭貨の用いられ方とそれが意味すること」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号
- 西山克己 2013 『シナノにおける古墳時代社会の発展から律令期への展望』雄山閣
- 日本貨幣商協同組合 2004 『日本貨幣カタログ 2005 年版』
- 日本考古学協会 2013 「信州における弥生社会の在り方」『2013 年度長野大会 文化の十字路信州 研究発表資料集』
- 野澤誠一 2002 「銅釧・鉄釧からみた東日本の弥生社会」『長野県立歴史館研究紀要』第 8 号
- 花岡 弘 1995 「特異な土坑について—佐久平に見られる奈良・平安時代の塵芥処理用土坑—」『長野県考古学会誌』75
- 花岡 弘・西山克己 1995 「信州の 6 世紀・7 世紀の土器様相—現時点での概略として—」『東国土器研究』第 4 号
- 林 幸彦 1982 「周防畑 B 遺跡」『長野県史』考古資料編 主要遺跡(北・東信)
- 原 明芳 2001 「墓に埋められた品々」『中世土器研究論集—中世土器研究会 20 周年記念論集—』
- 原 明芳 2009 「平安時代に出現する木棺墓からみえる信濃の在地社会」『信濃』第 61 巻第 4 号
- 原 明芳 2011 「研究報告 信濃の陶硯」『長野県立歴史館研究紀要』第 17 号
- 原 明芳 2011 「甲信地方の古代生業」「長野県の古代生業」『日本考古学協会 2011 年度栃木大会研究発表資料集』シンポジウムⅢ 古代社会の生業をめぐる諸問題
- 東村純子 2011 『考古学からみた古代日本の紡織』六一書房
- 兵庫県埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧 1996 年版』
- 平川 南 2000 『墨書土器の研究』吉川弘文館
- 平川 南 2002 「長野県内出土・伝世の古代印の再検討」『長野県考古学会誌』99・100
- 平川 南 2003 『古代地方木簡の研究』吉川弘文館
- 平川 南 2014 『律令国郡里制の実像 上・下』吉川弘文館
- 平林大樹 2013 「信濃における後期・終末期古墳副葬品の変遷」『物質文化』93 号
- 平林大樹 2014 「信濃における後期・終末期古墳副葬品の生産と流通」『信濃』第 66 巻第 9 号
- 広瀬和雄・伊庭 功編 『弥生の大型建物とその展開』日本考古学協会 2003 年度滋賀大会シンポジウム 1 サンライズ出版
- 福島正樹 1995 「信濃国印の復原制作について」『長野県立歴史館研究紀要』第 1 号
- 文化庁文化財部記念物課監修 2010 『発掘調査のてびき』(株)同成社
- 北條朝彦 2008 「研究余録 古代「石印」小考」『日本歴史』第 721 号
- 埋蔵文化財研究会 1997 『古代寺院の出現とその背景 第 1 分冊発表要旨・資料(東日本編)』第 42 回埋蔵文化財研究会
- 松井 章編 2006 『動物考古学の手引き』奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- 松井 章 2008 『動物考古学』京都大学学術出版会
- 松井田町教育委員会 2002 『人見大谷津遺跡』松井田町埋蔵文化財調査報告書第 12 集
- 松本市教育委員会 1983 『新村秋葉原遺跡』松本市文化財調査報告 No. 26
- 松本市教育委員会 1988 『三間沢川左岸遺跡(Ⅰ)』平安時代集落址の緊急発掘概報
- 松本市教育委員会 1994 『平田本郷遺跡』松本市文化財調査報告 No. 113
- 松本市教育委員会 2000 『大輔原遺跡』松本市文化財調査報告 No. 146
- 松本市教育委員会 2002 『川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ』松本市文化財調査報告 No. 162
- 松本市教育委員会 2008 『高畑遺跡 第 2・3・4・5 次』松本市文化財調査報告 No. 194
- 南相木教育委員会 2013 『大師遺跡 平安時代編』南相木村誌編纂調査報告第 1 集
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

- 宮本長二郎 2001 『原始・古代住居の復元』日本の美術No.420
- 宮本長二郎 2004 「日本古代尺度論考—弥生・古墳・律令時代—」『歴史遺産研究』No.2 東北芸術工科大学
- 宮本長二郎 2007 『出土建築部材が解く古代建築』日本の美術No.490
- 御代田町教育委員会 1987 『前田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
- 御代田町教育委員会 1988 『鋳師屋遺跡群 十二遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
- 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
- 御代田町 1995 『御代田町誌』自然編
- 御代田町 1998 『御代田町誌』歴史編上
- 御代田町教育委員会 1993 『細田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
- 御代田町教育委員会 1993 『塩野西遺跡群塚田遺跡』御代田町埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
- 村田文夫 2006a 「竪穴住居から発掘される五平（状）柱に関する研究序説—弥生時代・南関東地方を中心とした事例から—」『考古学の諸相Ⅱ』坂詰秀一先生古希記念論文集刊行会
- 村田文夫 2006b 「竪穴住居跡から発掘される五平（状）柱に関する研究—弥生時代を中心とした事例から—」『列島の考古学Ⅱ』渡辺誠先生古希記念論文集刊行会
- 村田文夫 2010 「弥生時代竪穴住居に据えられた五平（状）柱考—調査・研究の現状から学ぶ—」『長野県考古学会誌』131・132
- 森泉かよ子 2014 「板状鉄斧を出土した北一本柳遺跡ⅢとH 33号住居の概要」『佐久考古通信』No.113
- 柳澤 亮 1991 「第4章第2節 土製品」『於下貝塚発掘調査報告書』麻生町教育委員会
- 柳澤 亮 2008 「「郡」刻書土器と銅印の発見—西近津遺跡群の調査から—」『千曲』第137号
- 山梨県考古学協会 2010 『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』2010年度研究集会資料集
- 山梨県埋蔵文化財センター 1987 『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚古墳）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集
- 横浜市歴史博物館 2008 『古代のムラの神・仏』企画展図録
- 横浜市歴史博物館 2010 『古代の役所と地域社会—誕生！古代よこはまの郡家—』特別展図録
- 横浜市歴史博物館 2012 『火の神生命の神—古代のカマド信仰をさぐる—』企画展図録
- 渡邊 晶 2014 『大工道具の文明史 日本・中国・ヨーロッパの建築技術』(株)吉川弘文館
- 渡辺 誠 2011 「中部地方における編物石について」『旃檀林の考古学—大竹憲治先生還暦記念論文集—』

付表1 竪穴居跡一覧 (縄文時代・弥生時代)

図版番号	PI番号	遺構番号	地区	形跡・規模			竪			柱穴			構築柱	遺物	その他	時代	
				平面形状	主軸方向	主軸長 (m)	副軸長 (m)	位置	形態	構築	主柱穴数	平面形状					平面形状
2	2-1, 2	SB7067	IX-17, 22	不明	-	-	-	-	柱穴間	土器埋没跡	深部下半部, 正位	2	円形	なし	円体土器	床面下まで削平	縄文時代後期 後葉
2	2-3~5	SB7076	IX-12, 17	略円形	N14° E	(2.80)	(3.25)	-	中央や北寄り	石積跡	角縁5枚 短縁状に並ぶ	-	-	なし	ほとんどない	-	縄文時代後期 後葉前半
24	3-1, 2	SB0002	III-02, 03	隅丸長方形	N84° W	(8.16)	5.94	46.08	床面中央	地床跡?	掘り込みがない	4	上面:長楕円形 下面:長楕円形	なし	床面または10cm位高い位置に 掘れた溝や, 土器	主柱穴以外に円柱状の跡 あり	弥生時代後期
25	3-3~5	SB0004	III-03, 04	隅丸長方形	N16° W	(4.33)	(4.83)	-	北側柱穴2基の間	土器埋没跡	赤彩蓋上半部正位	4	底面:楕円形	なし	円体土器	中世の?ナリ基	弥生時代後期
26	17-5, 6	SB0007	III-25, N-01	隅丸長方形	N20° E	(6.70)	5.44	33.72	床面を横すSK0005の位置	土器敷	赤彩蓋杯の杯部正位	4	上:ナリと?ナリH上部が漏斗状に広がる	なし	住居全体から土器片	-	弥生時代後期
27	3-8, 9	SB0011	III-18, 22, 23	(矩形状)・H 13° W 隅丸長方形	N13° W	8.03	5.63	42.21	南西床面	土器埋没跡 新:主たる柱は北側柱穴 旧:土器埋没跡	赤彩蓋杯の杯部, 正位	新:4 旧:4	新:長楕円形 旧:楕円形から楕円形	なし	新:円体土器, 土器, 管玉, 鉄製 品 旧:貯蔵穴から土器片	新:南側中央 柱穴2基, その東側・貯 蔵穴1基 旧:柱穴2基, 貯蔵穴1基	弥生時代後期
28	3-10	SB0015 (上位)	III-19, 20, 24, 25	隅丸長方形	N3° W	7.64	(5.88)	40.41	北側主柱穴間	不明	柱の痕跡の可能性あり 不明	-	上面:楕円形 下面:楕円形または長方形	あり	弥生時代後期土器片 床面から鉄線・鉄製品	柱穴2基, 貯蔵穴1基	弥生時代後期
29	-	SB0015 (下位)	III-19, 20, 24, 25	上段住居跡 と輪廊跡 長方形	N4° W	(7.58)	(5.86)	-	北側主柱穴間	土器埋没跡	伊と考えるか不明	-	-	あり	柱下から弥生時代後期の 土器片	柱穴, 貯蔵穴が居住居 上段住居跡よ り1段階前の構 築	弥生時代後期
30, 31, 32	4-1~3	SB0017	III-17, 21, 22	中央寄りだ 長方形	N3° E	6.74	5.33	33.02	主柱穴間	土器埋没跡	大型の赤彩蓋 底部や骨片に設置	4	楕円形	あり	床面以上に灰化材・灰化物 等重なりあり 出土	南側中央に柱穴の跡 に並ぶ その東側に貯蔵穴	弥生時代後期
33	4-6, 7 5-1~3	SB0019	III-18, 23	北端がやや 狭い長方形	N14° W	7.35	5.30	36.33	伊1:主柱穴間 伊2:中央や南側の東端寄	土器埋没跡伊1, 土器埋没跡伊2	伊1:赤彩蓋底部 2個体分, 正位 伊2:赤彩蓋底部, 正位	4	楕円形	なし	円体土器 赤彩蓋 土器片, 土製勾玉	平面形状の?ナリは貯蔵 穴	弥生時代後期
34, 35	5-4	SB0024	III-14, 15, 19, 20	隅丸意味の 長方形	N6° W	8.30	(5.53)	0.00	主柱穴間	土器敷 (土器埋没跡)	伊蔵に土器片密着	4	楕円形	あり	円体土器 赤彩蓋, 赤彩高杯(貯蔵穴) 伊体土器	南側中央より北側に すくまに貯蔵穴	弥生時代後期
30, 31, 32	4-1, 4	SB0025	III-11, 16	隅丸意味の 長方形	N4.5° E	(7.02)	5.13	34.80	主柱穴間	土器埋没跡	赤彩蓋底部を斜めに設置	4	楕円形	あり	伊体土器 赤彩蓋, 赤彩高杯(貯蔵穴) 伊体土器	南側中央に柱穴2基	弥生時代後期
29	-	SB0026	III-19, 20	隅丸意味の 長方形	-	-	-	-	主柱穴間	地床跡 土器埋没跡伊	赤彩蓋底部を斜めに設置 底部を八字状に重なる	4	楕円形	なし	伊体土器	南側中央より北側に すくまに貯蔵穴	弥生時代後期
36	5-8~10	SB0027	III-16, 17, 21, 22	隅丸意味の 長方形	N1° W	8.55	6.16	49.25	伊1:北側主柱穴間 伊2:南側主柱穴 伊3:南側	土器埋没跡伊2	赤彩蓋口縁部を斜め, 別の赤彩蓋 底部を八字状に重なる	6	長楕円形	あり	高杯部 土器・楕円形 赤彩蓋 赤彩蓋	柱穴, 貯蔵穴各2個 旧:新住居に?ナリ2は具 可能はあり	弥生時代後期
37	6-1~3	SB0030	III-12, 16, 17, 22	長方形	N19° E	8.63	5.67	44.17	北側 主柱穴間	土器埋没跡伊	赤彩蓋底部, 正位	4	楕円形	なし	土器 赤彩蓋	中央寄りには柱穴 東側には貯蔵穴	弥生時代後期
38	6-4~7	SB0033	III-19, 23, 24	隅丸意味の 長方形	N9° W	7.93	(5.81)	44.53	伊1:主柱穴間 伊2:主柱穴 伊3:主柱穴と伊1伊2の間	土器埋没跡伊1, 土器埋没跡伊2 緑石	伊1:赤彩蓋底部, 正位 伊2:土器埋没跡, 正位	6	長楕円形	あり	土器 伊体土器	中央寄りには柱穴 東側には貯蔵穴	弥生時代後期
39	7-1, 2	SB0035	III-18, 19	長方形	N4° W	4.97	3.86	17.90	主柱穴中央	土器埋没跡緑石	掘下半部, 正位 北側部に河原礫の中継石を置く	4	長楕円形	なし	土器片, 骨片 伊体土器	中央寄りには柱穴 東側には貯蔵穴	弥生時代後期
40, 41	7-3~7	SB0036	III-20, 1-16	長方形	N17° E	4.66	4.04	16.24	主柱穴間	土器埋没跡緑石	赤彩蓋底部, 正位 伊体部に河原礫の中継石を置く	4	楕円形	あり	動物骨片 骨角製品 瓦工器のある土製品 瓦工器の赤彩蓋 と接合	柱穴2基その東に貯蔵 穴が1個 柱穴2基間に斜線する土器 片は伊体本体の赤彩蓋	弥生時代後期
25	3-6, 7	SB0037	III-03, 04	隅丸長方形	N14° W	(4.66)	(3.8)	-	主柱穴間	土器敷 土器埋没跡伊	底面に掘の破片が内面を上に 敷かれていて	4	長楕円形	なし	円体土器	長楕円形の柱穴2基 貯蔵穴1基	弥生時代後期
42, 43	8-4, 5	SB0041	III-14, 15, 19	長方形	N14° E	9.38	6.66	57.89	主柱穴間	土器埋没跡緑石	掘下半部正位, 内側に赤彩蓋上半 部正位に重なる	4	底面:楕円形 底面より浮いた状態で土器片 上面:楕円形	なし	赤彩蓋土器 伊体土器	柱穴2基 貯蔵穴1基	弥生時代後期
34, 35	5-3~7	SB0047	III-14, 15	隅丸長方形	N18° E	6.12	(4.80)	28.85	主柱穴間	土器埋没跡緑石	掘の土器片が八字状に重なる	4	楕円形	あり	円体土器	柱穴2基	弥生時代後期
40, 41	8-1~3	SB0048	III-15, 20	長方形	N12° E	5.81	4.03	22.33	主柱穴間	土器埋没跡緑石	赤彩蓋土器片 南側に河原礫の中継石	4	楕円形	あり	伊体土器 伊体土器	柱穴2基	弥生時代後期
44	8-6~8	SB0049	III-12, 13, 17, 18	長方形	N4° W	8.90	6.03	49.73	伊1:北側主柱穴間 伊2:南側主柱穴 伊3:南側	土器埋没跡伊 伊2:土器埋没跡伊1	伊1:赤彩蓋上半部, 逆位, 裏片と 別の赤彩蓋底部を重なる 伊2:河原礫と接して掘底部片, 正 位	4	楕円形	なし	伊体土器 伊体土器	柱穴2基 上段の?ナリは伊体土器 と接合する	弥生時代後期
45	-	SB0052	III-11, 16	長方形	N4° E	(7.80)	(2.80)	-	床面中央	地床跡伊	-	-	-	-	赤彩蓋 伊体土器(赤彩蓋)の可能性あり	貯蔵穴1基	弥生時代後期
45	-	SB0056	III-06, 07, 11, 12	長方形	N3° W	(6.43)	4.34	26.80	床面中央	土器埋没跡伊	-	2	-	なし	赤彩蓋 伊体土器(赤彩蓋)の可能性あり	貯蔵穴1基	弥生時代後期

図面番号	凡番号	遺構番号	地区	形状・規模			炉			構築	主柱穴数	柱穴		遺物	その他	時代
				平面形状	主軸方向	主軸長 (m)	副軸長 (m)	位置	形態			平面形状	構造柱			
46	-	S80057	IH-08, 13, 14	長方形	N <sup>8</sup> E	4.37	<3.37>	-	主柱穴間	土器埋設炉	赤砂土、正位	4	長方形	なし	伊体土器 (赤砂土、正位) 弥生時代後期の土器片	弥生時代後期
46	-	S80059	IH-09, 23, 24	長方形	N <sup>8</sup> W	5.75	<4.22>	23.24	炉1:北側主柱穴間 炉2:炉1の南側	土器敷炉1、地床炉1 (炉2) 炉2:灰い地方	炉1:伊体土器 炉2:灰い地方	4	楕円形	なし	伊体土器 弥生時代後期の土器片	弥生時代後期
30, 32	4-1	S80061A	IH-15	長方形	N22 <sup>o</sup> E	(5.13)	(2.86)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
31	4-5	S80061B	IH-16, 217	長方形	N19 <sup>o</sup> E	(4.38)	(3.18)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
47	-	S80062	IH-10, 15, 1-06, 11	長方形	N20 <sup>o</sup> E	6.31	4.51	25.20	炉1:主柱穴間 炉2:中央床面	伊1:河原橋土器 伊2:灰い地方	伊1:河原橋土器 伊2:灰い地方	4	長楕円形	あり	伊体土器 弥生時代後期の土器片 主柱穴2基 (炉1以外) 編 貯蔵穴1基	弥生時代後期
48	8-9, 10 9-1, 2	S80066A(上位) S80066B(下位)	IH-10, 15	隅丸長方形	N <sup>4</sup> W	<8.32>	5.56	47.51	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
48	9-3	S80066B(下位)	IH-10, 15	隅丸長方形	N <sup>2</sup> W	<6.80>	3.43	26.11	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
49~52	9-4~10 11-1~9 12-1~7 13-1	S80067(新設附)	IH-C-24, 25, 1-04, 05, 09, 10	長方形	N13 <sup>o</sup> E	18.13	9.46	154.76	炉1:北側主柱穴間 炉2:3, 7, 11の南側に南北之差 炉3:7, 11北西側の床	伊1:灰い地方 伊2:赤砂土、正位 伊3:土器埋設炉1 伊4:土器埋設炉2	伊1:灰い地方 伊2:赤砂土、正位 伊3:土器埋設炉1 伊4:土器埋設炉2	4	長方形 北側2基、縦横比小さく厚みのある 長方形 南側2基、縦横比大きく扁平な長方形	あり	伊体土器 赤砂土 伊1:土器埋設炉1 伊2:土器埋設炉2	弥生時代後期
53, 54	-	S80067(中段附)	IH-C-04, 05, 09, 10	長方形	N13 <sup>o</sup> E	10.85	7.35	77.46	炉2~4:新設路と同じ	土器埋設炉2 (新設)	-	-	-	-	-	弥生時代後期
53, 55	-	S80067(古設附)	IH-C-24, 25, 09, 10	長方形	N16 <sup>o</sup> E	<8.37>	<5.33>	-	北側主柱穴間	伊5:中段附居住居跡の構 築時に埋戻し	-	-	-	-	-	弥生時代後期
56, 57	-	S80075	IH-02, 03, 07, 08, 13	隅丸長方形	N20 <sup>o</sup> W	9.63	6.64	58.88	炉1:土器埋設炉 炉2:土器埋設炉	伊1:土器埋設炉 伊2:土器埋設炉	伊1:赤砂土、正位 伊2:灰い地方	6 6	底面:長楕円形 上面:楕円状に開く	なし	伊体土器 土器片 伊体土器 土器片	弥生時代後期
58	13-2~5	S80077	IH-14, 19	長方形	N11 <sup>o</sup> E	<7.64>	4.46	32.49	北側主柱穴間	土器埋設炉2	北側、灰い地方 南側、赤砂土、正位	4	楕円形 隅丸長方形	あり	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
59, 60	13-6, 7 15-5	S80102	IH-02, 07	長方形または長方形	N <sup>3</sup> E	<8.83>	4.91	44.13	北側主柱穴間 北側、中央床面	土器埋設炉1 (副炉)、地床 伊1	北側、灰い地方 南側、赤砂土、正位	4	長楕円形	なし	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
61, 62	14-5, 6	S80105北	IH-06, 11	長方形	N <sup>2</sup> E	(3.16)	(4.24)	-	主柱穴間	地床炉	灰い地方	2	長楕円形	なし	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
61, 62	-	S80105南	IH-06, 11	長方形	N <sup>2</sup> W	(5.30)	(4.14)	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期
61, 62	-	S80106(新設附)	IH-06, 11	長方形	N <sup>2</sup> E	8.01	(4.44)	-	北側主柱穴間	土器埋設炉1	大きな土器破片	2	長楕円形	あり	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
61, 62	-	S80106(古設附)	IH-06, 11	長方形	N <sup>2</sup> E	(3.75)	(2.70)	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期
63~66	14-7~10 15-1~6 16-1~7	S80110	IH-C-16, 17, 21, 22, 1-01, 02	長方形	N14 <sup>o</sup> E	13.60	9.14	119.33	炉1:南側主柱穴の南側 炉2:北側主柱穴間の北寄り	土器埋設炉2 地床炉?	伊1:集の南側より土器、正位 伊2:大ぶりの赤砂土、正位	4	長楕円形 底面:隅丸長方形 東側面:有段状	なし?	伊体土器 土器片 伊内田土器 土器片	弥生時代後期
63~66	-	S80111	IH-C-22, H-02	長方形	N10 <sup>o</sup> E	<6.60>	(3.63)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
63~66	-	S80113	IH-C-22	長方形	N13 <sup>o</sup> W	(2.67)	(1.03)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
63~66	-	S80117	IH-C-16, 21	長方形	N <sup>9</sup> W	(5.89)	(3.86)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
67	17-1	S80122	IH-01	長方形	N20 <sup>o</sup> W	(1.14)	(3.26)	-	-	別遺構に覆される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
67	17-1	S80123	IH-01	長方形	N <sup>8</sup> W	6.88	(4.14)	-	-	調査区外	-	-	-	-	-	弥生時代後期
63~66, 172	47-5	S80127	IH-25	長方形または隅丸長方形	N15 <sup>o</sup> W	(2.76)	(0.57)	-	-	調査区外	-	-	-	-	-	弥生時代後期
67	17-3, 4	S80128	IH-05, 10, 11	長方形	N11 <sup>o</sup> W	(2.67)	(2.85)	-	-	土器敷炉+緑石	同じ赤砂土の土器片2枚を重ねる 伊1:灰石として河原橋、その内側に 土器片埋設の1片が立つ	1	断面:上面が大きく広がる漏斗状 内底面は上面が漏斗状に広がる	なし	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
68	-	S80129	IH-25, 1-21	隅丸長方形	N18 <sup>o</sup> E	(4.56)	(2.64)	-	北側主柱穴間	土器敷炉?	灰い地方に埋片あり	4	楕円形 内底面は上面が漏斗状に広がる	なし	伊体土器 伊内田土器 土器埋設炉	弥生時代後期
68	17-7, 8	S80130	IH-23, 24, 4-03, 04	北側(古)南側(新)不整長方形	N <sup>4</sup> W	4.69	(4.22)	-	南側住居跡、西側床面	土器埋設炉	灰い地方に赤砂土、正位 その内部に別の土器片平らに置く	-	-	-	-	弥生時代後期
69	17-9, 10 18-1	S80134	IH-12, 17	長方形	N21 <sup>o</sup> E	(7.86)	5.24	-	北側主柱穴間	土器埋設炉	赤砂土、正位	3	2段、長楕円形 上段:不整長方形	なし	伊体土器 伊内田土器 伊体土器 伊内田土器	弥生時代後期
69	18-2~4	S80149	IH-22, III-02	隅丸長方形	N30 <sup>o</sup> E	3.88	2.91	9.63	中央や北寄り	土器埋設炉	半割した土器、逆位	-	-	-	-	弥生時代後期
67	17-2	S80151	IH-01, 02	-	N10 <sup>o</sup> W	(1.26)	(3.5)	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期
59, 60	14-1~4	S80155	IH-01, 02, 06, 07	長方形	N11 <sup>o</sup> W	(8.00)	<5.60>	-	北側主柱穴間 南側主柱穴北側(副炉)	土器敷炉2	北側:灰い地方に赤砂土、正位 副炉片埋設 断面:小さく六角状の落ち込みに覆される	4	不整形楕円形 断面:やや漏斗状 ヒコ1:有段	あり	伊体土器 伊内田土器 伊体土器	弥生時代後期
70	18-5~10	S80156	IH-13, 14	隅丸長方形	N11 <sup>o</sup> W	6.97	4.97	32.37	北側主柱穴間	土器埋設炉	大断面、正位	4	長楕円形 上面:漏斗状に開く	あり	伊体土器 伊内田土器 伊体土器	弥生時代後期
-	-	S80168	IH-21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期

付表1

図面番号	凡番号	遺構番号	地区	形状・規模			炉			柱穴			遺物	その他	時代	
				平面形状	主軸方向	主軸長 (m)	副軸長 (m)	位置	形状	構築	主柱穴数	平面形状				構柱
-	-	SB0169	III-06	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期	
71	19-1	SB0306	III-01-06	隅丸長方形	N24° W	6.88	5.42	33.29	-	別遺構に属される	-	3	長方形 底面:長方形	なし	柱穴:北側面に1基あった 南側面に長方形の柱穴あり 南側面に長方形の柱穴あり	弥生時代後期
71	19-2~5	SB0307	III-06-11	長方形	N11° W	<5.04>	4.43	19.07	土器埋設炉:北側・柱穴 地味炉:住居中央床面	残い地方に遺・蓋・跡などの土器片 を認め合わせている 北側面に小さな河原礫	-	4	楕円形または長方形	なし	出入口:埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
72	19-6~9	SB0310	III-11	長方形	N11° E	7.22	(3.89)	-	埋設土器+緑石 地味炉1	土器埋設炉+赤褐色の灰層+土器片 半面・地味炉の両面に赤褐色の土器片を 認め合わせている	2	隅丸長方形	あり	主柱穴:本米・蓋あつたと 判断される 出入口:埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期	
72	-	SB0312	III-06-11,12	隅丸長方形	N10° W	(5.80)	(3.79)	-	SB0309に属載	-	3	土器埋設土器片	なし	出入口:埋設土器片	弥生時代後期	
73	19-10	SB0315	III-07-11,16	正方形	N7° W	(3.70)	(3.92)	-	土器埋設炉+土器貯蔵炉	無形遺物より上半・正位	3	楕円形	なし	出入口:埋設土器片	弥生時代後期	
73	20-1,2	SB0316	III-12,16,17	方形	N9° E	4.88	(4.11)	-	土器埋設炉+土器貯蔵炉	無形遺物より上半・正位	4	楕円形	なし	出入口:埋設土器片	弥生時代後期	
73	-	SB0329	III-11	隅丸長方形 または長方形	N10° E	(5.49)	(1.14)	-	調査区外	-	-	なし	なし	小型赤彩・蓋	弥生時代後期	
74	20-3,4	SB0336	III-07-18	隅丸長方形	N9° E	<8.46>	6.32	50.05	-	調査区外	-	2	西側:円形 東側:長方形	なし	貯蔵穴:1基	弥生時代後期
74	20-5~8	SB0341	III-09-14	隅丸長方形	N3° E	<6.34>	<4.45>	24.63	土器埋設炉 地味炉	大形赤彩漆器杯部・正位	2	楕円形	あり	土器 貯蔵穴:1基(横されてい る)	弥生時代後期	
75	-	SB0369新住居	III-07-08 12	隅丸長方形	N29° E	8.98	5.96	47.04	炉1:北側・柱穴 炉2:南側床面	炉1:土器片・酒取つた無形遺物・ 内蔵の破片散く	6	楕円形	あり	土器 貯蔵穴:1基 赤彩土器	弥生時代後期	
75	-	SB0369旧住居	III-07-08 12	長方形	N29° E	(8.94)	(5.93)	-	調査区外	新居の跡に属される	-	1	なし	なし	-	-
76	20-9	SB0371	III-22-23	長方形または 長方形	N12° E	(2.54)	(4.43)	-	主柱穴	地味炉?	残い地方	2	楕円形 西側:1基 東側:1基	なし	出土遺物 平安時代の土器 遺構からの取入	弥生時代後期
-	-	SB0374	III-12	-	-	-	-	0.00	-	別遺構に属される	-	-	-	-	-	弥生時代後期
77	-	SB0375	III-07	-	-	(0.47)	(1.98)	-	-	-	-	-	-	-	-	弥生時代後期
76	20-10 21-1	SB0382	III-22- 28, H-02-03	長方形	N12° E	8.90	6.24	51.15	北側 主柱穴	土器埋設炉	土器 貯蔵穴:1基	4	不整形な長方形 断面:住居内側に有段状	あり	土器 貯蔵穴:1基 赤彩土器	弥生時代後期
77	21-2,3	SB0384	III-08- 13,14	長方形	N19° E	<6.48>	4.79	28.67	北側 主柱穴	土器埋設炉	土器 貯蔵穴:1基	2	長方形	なし	赤彩漆器 土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
78	21-4~7	SB0387	III-08	隅丸長方形	N2° E	(3.33)	(2.88)	-	土器埋設炉	土器埋設炉	土器 貯蔵穴:1基	-	なし	なし	赤彩土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
78	22-1,2	SB0388	III-13-14 18,19	長方形	N9° E	<6.82>	<4.68>	-	北側 主柱穴	土器埋設炉	土器埋設炉+土器 貯蔵穴:1基	4	長方形	あり	出入口:埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
79	22-3	SB0391	III-08-01 36,39	長方形	N4° W	<6.05>	(2.90)	-	別遺構に属される	-	-	2	不整形な横長長方形	なし	貯蔵穴:1基	弥生時代後期
79	22-4	SB0395	III-09	長方形	N6° W	(5.92)	(1.14)	-	土器埋設炉	無形遺物	-	2	円形	なし	土器	弥生時代後期
78	-	SB0397	III-18	楕円形	N15° W	(4.21)	4.67	-	土器埋設炉	土器埋設炉	-	4	楕円形	なし	ほとんど確認できない	弥生時代後期
77	-	SB0399新住居	III-07-08 12,13	長方形	N7° W	<5.95>	(3.40)	-	-	-	-	3	長方形	なし	-	弥生時代後期
77	-	SB0399旧住居	III-07-08 12,13	長方形	N1.5° W	(2.94)	(2.25)	-	-	-	-	3	なし	なし	-	-
80~83	22-5~9 23-1~3	SB4002	III-18-22 23	隅丸長方形	N21° E	7.31	5.17	33.79	北側 主柱穴	土器埋設炉+土器貯蔵炉	土器 貯蔵穴:1基	4	円形及び楕円形 断面:内側壁がやや内傾気味	あり	土器 貯蔵穴:1基 赤彩土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
79	-	SB4003	III-19-24	長方形	N28° E	<6.08>	(3.34)	-	調査区外	調査区外	-	1	なし	なし	出入口:埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
84	23-4,5	SB4008	III-01	長方形	N5° E	(4.02)	3.26	11.48	住居中央やや北寄り 地味炉+緑石?	炉中央から砂岩系の礫	-	-	なし	なし	土器埋設土器片	弥生時代後期
84	23-6,7 24-1	SB4016	III-18-23	隅丸長方形	N3° W	(6.18)	<5.46>	-	土器埋設炉:北側・主柱穴 地味炉:中央床面	土器埋設炉+土器貯蔵炉	土器 貯蔵穴:1基	4	楕円形	あり	土器埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
85	24-2~4	SB4029	III-20-25 III-19-21	長方形	N30° E	7.55	5.20	36.49	土器埋設炉+土器貯蔵炉 地味炉:住居中央床面	土器埋設炉+土器貯蔵炉	土器 貯蔵穴:1基	4	不整形な長方形 断面:内側に有段状	あり	土器埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
86, 87	24-5~8	SB4030	III-11-16	長方形	N3° W	9.02	5.66	49.02	炉1:北側・主柱穴 炉2:東側・主柱穴 2段目:3段目の間	炉1:赤彩漆器埋設土器 炉2:蓋の噴筒を重ね合わせる	6	楕円形 断面:遠側面がやや内傾している	あり	土器埋設土器 貯蔵穴:1基 赤彩土器 貯蔵穴:1基 金属製品	弥生時代後期	
88	24-9,10	SB4032	III-15-20 III-11-16	長方形	N7° E	6.71	4.08	30.07	北側・主柱穴 地味炉:北側床面の取置	土器埋設炉 地味炉	土器 貯蔵穴:1基	4	楕円形	なし	土器埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期
89	-	SB4035	III-14-15 19,20	長方形	N6° E	6.76	4.65	26.96	北側・主柱穴	土器埋設炉?	残い地方	4	楕円形 断面:上より外側より斜状	あり	土器埋設土器 貯蔵穴:1基	弥生時代後期



付表2 竪穴住居跡一覧（古墳時代～古代）

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築	その他			
138	37-1, 2	SB0001	ⅢM02・07	方形	N4° W	4.00	4.40	17.60	北壁中央	石		2		平安 (10C前半)
138	37-3, 4	SB0003	ⅢM03	方形	N5° W	3.04	2.80	8.51	北壁中央	粘土	焚口部に土器他集中	0		平安 (10C前半)
139	37-5～8	SB0005	ⅢM04・05	方形	N3° W	2.64	2.96	7.81	北壁中央	粘土	煙道はSKによって破壊されている	0		平安 (10C前半)
139	37-9, 10	SB0008	ⅢI21・22	(方形)	N1° W	2.80	(1.84)	(5.15)	(北壁中央)	石		0		平安
—	—	SB0009	ⅢM02	—	—	—	—	—	—	—		0		不明
140	38-1, 2	SB0010	ⅢH22・M02	(方形)	N85° E	2.56	4.16	10.65	東壁南隅寄り	石		1		平安 (10C前半)
140	—	SB0012	ⅢH22	方形	N1° W	3.60	3.20	11.52	—	—		0	カマドの無い小竪穴か。中世の可能性有り。	平安か中世
141	38-3, 4	SB0013	ⅢH24・M04	方形	N13° E	3.44	3.84	13.21	北壁中央	石・粘土	煙道急傾斜で立上る	4		古墳～奈良 (7C末～8C前)
142	38-5～7	SB0014	ⅢH23・24	方形	N79° E	5.12	5.68	29.08	東壁南隅寄り	石・粘土	煙出部円形にくぼむ	0		平安 (10C後半)
143	38-8, 9	SB0016	ⅢH25	方形	N15° E	2.72	2.64	7.18	北壁中央	石・粘土	天井石崩落	0		平安 (9C後半)
142	38-10	SB0018	ⅢH22・23	方形	N1° E	3.44	3.36	11.56	北壁中央	石	袖廻り残し	0		平安 (9C後半)
143	—	SB0020	ⅢH23・24	長方形	N3° W	3.84	2.72	10.44	北壁中央 やや東寄り	—		0		平安 (11C前半)
142	—	SB0021	ⅢH23・24	方形	N60° E	4.64	3.28	15.22	東壁南隅寄り	—	火床のみ検出	0		奈良
144	39-1～3	SB0022	ⅢH20・25	長方形	N84° E	3.44	4.16	14.31	東壁南隅寄り	石	燃焼部やや突出	4		平安 (11C前半)
145	39-4	SB0023	ⅢI16・17・21・22	方形	N78° E	3.52	3.92	13.80	東壁南隅寄り	—		0		平安 (10C中頃)
145	39-5	SB0028	ⅢH21・22	方形	N1° W	3.76	4.32	16.24	北壁中央 やや東寄り	石		0		古墳後期 (7C後半)
145	39-6, 7	SB0029	ⅢH17・22	方形	N86° E	3.04	3.44	10.46	東壁南隅寄り	—	支脚石残存	0		平安 (10C前半)
146	—	SB0031	ⅢH16・17・21・22	方形	N1° E	4.72	5.12	24.17	なし	—	東側床面に焼土・灰分布あり	0		平安 (10C前半)
146	39-8, 9	SB0034	ⅢH18・19	方形	N72° E	2.96	3.36	9.95	東壁南隅寄り	石	上部削平	0		平安 (10C中頃)
147	39-10	SB0038	ⅢH19・24	方形	N7° W	2.88	3.20	9.22	北壁中央	—	焼土のみ	0		平安 (10C前半)
147	40-1	SB0039	ⅢH18・19	(長方形)	N2° W	2.48	3.20	7.94	なし	—		0		平安 (10C前半)
146	—	SB0040	ⅢH18・19	(方形)	N72° E	1.60	3.04	4.86	—	—	SB0034に壊される	—		平安 (10C前半)
147	—	SB0042	ⅢH16	—	N90° E	(1.08)	(3.60)	(3.89)	東壁南隅	—		1	調査区外	平安 (10C前半)
148	40-2	SB0043	ⅢI06・07・11・12	長方形	N77° E	2.40	3.52	8.45	東壁南隅寄り	石	燃焼部中央突出	0		奈良 (8C後半)
—	—	SB0046	ⅢH15・20	不整形 長方形	—	—	—	—	—	—		0		不明
148	40-3～5	SB0050	ⅢH11・12	方形	N1° E	5.36	4.80	25.73	東壁中央	—	SK00711に壊される	0		平安 (10C前半)
149	40-6～9	SB0051	ⅢH07・11・12	方形	N15° W	5.76	5.76	33.18	北壁中央	粘土	半円状に掘り込み「かた」材を貼る	4		古墳～奈良 (7C末～8C前)
150	40-10	SB0053	ⅢH16・17	方形	N8° W	4.40	4.96	21.82	北壁中央	石・粘土	支脚石据え置き	0		古墳後期 (7C)
147	—	SB0054	ⅢH18・19	(方形)	—	—	—	—	なし	—		0		平安 (9C)
151	41-1	SB0055	ⅢH11・12・16・17	方形	N1° E	4.68	3.36	15.72	なし	—		(1)		平安 (10C前半)
151	41-2	SB0058	ⅢH08・13	方形	N16° E	2.56	2.80	7.17	北壁中央 東寄り	石・IV層土	略半円形に燃焼部突出	0		奈良 (8C後半)
151	41-3～6	SB0060	ⅢH15	隅丸方形	N85° E	2.96	3.12	9.24	東壁中央 南寄り	石(軽石)・粘土	「かた」張出し	(2)		平安 (11C前半)
151	41-7, 8	SB0063	ⅢH04・05・09・10	方形	N79° E	3.84	4.40	16.90	東壁南隅寄り	石	燃焼部張出し	0		平安 (10C前半)
152	41-9, 10	SB0065	ⅢH10・15	方形	N39° W	3.84	3.44	13.21	北壁中央	石・粘土	煙道つぶれ	4		古墳～奈良 (7C末～8C前)
153	42-1, 2	SB0068	ⅢI01	長方形	N36° W	2.00	2.96	5.92	北壁中央	粘土	地山削り残し 支脚石残存	0		古墳後期 (7C後半)
153	42-3, 4	SB0070	ⅢC24・25・H04・05	長方形	N3° W	3.60	4.48	16.13	北壁中央 東より	粘土		0		平安 (9C後半)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築	その他			
154, 155	42-5~8	SB0073	ⅢH08・09	方形	N83° E	3.68	3.60	13.25	北壁中央 やや東寄り	石・粘土	石組良好	0		平安 (10C前半)
156	43-1~4	SB0074	ⅢH08・09	方形	N20° W	3.76	3.52	13.24	北壁中央	石・粘土	カマド廃棄行為痕跡あり 地山削り残し	6		平安 (9C後半)
155	43-5~7	SB0076	ⅢH08	方形	N8° W	(3.92)	4.48	(17.56)	北壁中央 西寄り	石・粘土		4	SB0173を統合	奈良 (8C中頃)
157	43-8~10	SB0078	ⅢH03・07・08	方形	N4° E	(3.84)	4.48	17.20	北壁中央 東寄り	石・粘土	支脚石あり 煙道突出	4		古墳後期 (7C後半)
158	44-2~4	SB0079	ⅢH03・04・08・09	方形	N23° W	3.52	3.04	10.70	北壁中央	石・粘土		0		平安 (10C中頃)
159	44-5, 6	SB0091	ⅢC17・18・22・23	方形	N77° E	3.04	2.88	8.76	東壁南隅 寄り	石・粘土	ソバ状煙道か?	0		平安 (10C前半)
159	44-7	SB0096	ⅢH07・08・12・13	方形	N8° W	4.96	(4.56)	(22.62)	北壁中央	粘土	カマド材のみ検出	4		古墳後期 (7C後半)
160	—	SB0097	ⅢH12	(方形)	N4° W	—	4.40	—	北壁中央	石?	袖石 支脚抜取痕あり	0		奈良 (8C中頃)
161	—	SB0098	ⅢH06・11	方形	N15° W	4.24	4.88	20.69	北壁中央 やや東寄り	石	床面カマド前庭部に炭 化物・灰・焼土分布	0		平安 (10C後半)
157, 158	44-1	SB0100	ⅢH03・07・08	長方形	N6° E	(4.32)	5.04	(21.77)	(北壁付 近)	—	火床のみ	1	SB0078床下	古墳後期 (7C後半)
162	44-8, 9	SB0101	ⅢH07	長方形	N3° W	2.24	2.64	5.91	北壁中央 東寄り	石・粘土	煙道急傾斜	0		古墳後期 (7C前~ 中)
162	44-10 45-1	SB0103	ⅢH01・06・07	方形	N7° W	3.36	3.44	11.56	北壁中央	石?・粘土	地山前残	0		平安 (10C中頃)
161	—	SB0104	ⅢH06・11	方形	N14° W	3.44	3.52	12.11	北壁中央	—	火床のみ	2		平安 (9C前半)
163, 164	—	SB0107	ⅢG05・10・H01・ 06	方形	N15° W	4.80	(4.88)	(23.42)	北壁中央	石・粘土	残り良好	4		古墳後期 (7C後半)
165	45-2~4	SB0112	ⅢC21・22	方形	N11° W	4.16	4.32	17.97	北壁中央	石・粘土	カマド解体行為痕跡あり 煙道急傾斜	0		古墳~奈良 (7C末~8C 前)
166	45-7, 8	SB0114	ⅢC16・17・22	長方形	N35° W	3.12	4.16	12.98	北西壁 ほぼ中央	粘土		0		古墳後期 (7C後半)
167	45-9, 10	SB0115	ⅢC17・22	方形	N24° W	5.52	5.44	30.03	北壁中央	石・粘土	旧カマドあり?	4		奈良 (8C中頃)
168	46-3, 4	SB0116	ⅢC17・22	方形	N68° E	3.20	2.96	9.47	東壁中央 南寄り	石・粘土		0		平安 (9C中頃)
168	1-3 46-5, 6	SB0119	ⅢM01・02	長方形	N29° W	(3.44)	(4.40)	(15.14)	—	—		0		奈良 (8C)
169	46-7, 8	SB0120	ⅢH21・22・M01・ 02	方形	N29° W	5.84	(5.92)	(34.57)	北壁中央	粘土	煙道不明	6		奈良 (8C中頃)
170, 171	46-9, 10 47-1, 2	SB0121	ⅢH21・M01	(方形)	—	—	—	—	北壁中央	石・粘土	両袖良好に残存	1	調査区外	平安 (10C前半)
140	—	SB0124	ⅢH22・M02	方形	—	—	—	—	(東壁中 央)	—		0		不明
171	47-3, 4	SB0125	ⅢM03・08	長方形	N88° E	2.56	(3.20)	(8.19)	東壁南隅 寄り	—	1ヶ所で最低 3回造り替え	0		平安 (10C中頃)
172	—	SB0126	ⅢH22・M02	長方形	N87° E	2.64	3.36	8.87	東壁南寄 り	石	壁から突出	0		平安 (10C中頃)
173	47-9, 10	SB0132	ⅢI12・13・17・18	隅丸方形	N69° E	3.92	3.28	12.86	東壁中央 やや南寄 り	石・粘土	炭化物・焼土分布 袖部地山削り残し	0		奈良 (8C中頃)
173	48-1, 2	SB0133	ⅢI12・17	長方形	N14° W	(3.28)	4.40	(14.43)	北壁中央 やや左寄 り	石・粘土		2		古墳~奈良 (7C末~8C 前)
148	40-2	SB0135	ⅢI07・12	長方形	N80° E	2.56	2.00	5.12	なし	—		0		奈良以前
174	48-3, 4	SB0136	ⅢI13・14・18・19	(方形)	N1° E	(3.60)	(4.24)	(15.26)	北壁中央	石・IV層土	支脚抜取痕あり	3		平安 (10C前半)
175	48-5~7	SB0137	ⅢI08・09・13・14	長方形	N2° W	6.64	5.68	37.72	北壁中央	(石?)・粘 土	支脚抜取痕あり 袖芯材すえたビット	4		奈良 (8C中頃)
175	—	SB0138	ⅢI08・13	—	—	—	—	—	不明					不明
176	48-8, 9	SB0139	ⅢI08・09	方形	N88° E	(2.48)	2.96	(7.34)	東壁中央 南寄り	石・粘土		0		平安 (10C前半)
176	48-10 49-1, 2	SB0140	ⅢI02	方形	N9° W	3.04	3.12	9.48	北壁中央	石	残り良好	0		平安 (9C)
177	49-3~5	SB0141	ⅢI03	方形	N13° W	3.28	4.00	13.12	北壁中央 やや東寄 り	石	残り良好	4		奈良 (8C中頃)
178~180	49-6, 7 50-1~4	SB0143	ⅢD23・24・I03・ 04・09	方形	N36° W	8.24	7.68	63.28	北西壁中 央	石・粘土	煙道長い	—		奈良 (8C中頃)
180	50-5, 6	SB0144	ⅢD24	—	N20° W	—	—	—	(北壁中 央)	石	支脚石あり	—	調査区外	不明
180	50-7	SB0145	ⅡD19・24	—	—	—	—	—	—	—		0	調査区外	古墳後期 (6~7C)
—	—	SB0146	ⅢI12	不整形	—	—	—	—	—	—		0		不明

付表2

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド			主柱穴数	その他	時期	
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築				その他
182	—	SB0148	ⅢI06・07・11・12	方形	N85° E	3.44	3.52	12.11	東壁中央	—	壁から燃焼部突出	0		平安 (10C前半)
181	50-8~10	SB0150	ⅢD21・22	方形	N9° W	4.72	4.72	22.28	北壁中央 やや西寄り	石・粘土	地山削り残し 支脚抜取痕あり	4	SB4013を統合	奈良 (8C後半)
182	51-1,2	SB0152	ⅢH17	方形	N81° E	3.52	3.44	12.11	東壁南寄り	粘土	燃焼部やや張り出す	0		平安 (10C前半か)
182	51-3,4	SB0153	ⅢH13・18	(隅丸方形)	—	—	—	—	北壁中央 東寄り	—	炭化物・灰分布のみ	0	重機により削平	平安
154, 155	—	SB0157	ⅢH08・09	(方形)	—	—	—	—	—	—	—	0	SB0073とSB0164と同一	—
148	—	SB0159	ⅢH11・12	方形?	—	—	—	—	—	—	—	0		不明
148	—	SB0160	ⅢH11・12	方形?	N2° W	(4.24)	—	—	—	—	—	0		不明
170, 171	—	SB0161	ⅢH21	—	—	—	—	—	(北壁中央)	—	—	0	調査区外	不明
—	—	SB0162	ⅡM01	—	—	—	—	—	—	—	—	—		不明
163, 164	—	SB0163	ⅢG05・10	長方形	N14° W	(3.52)	(4.00)	(14.08)	なし	—	—	0		不明
154, 155	42-9, 10	SB0164	ⅢH08・09	方形	N84° E	(3.52)	4.76	16.76	東壁中央 やや南寄り	—	半紡垂形に燃焼部突出	0		平安 (10C前半)
183	51-5~7	SB0165	ⅢH09	方形	N78° E	2.88	2.56	7.37	東壁中央 南寄り	石・粘土	燃焼部突出 支脚軸石据え跡	0		平安 (10C前半)
165, 166	45-5, 6	SB0166	ⅢC21・22	方形	N10° W	3.28	4.08	13.38	北壁中央	—	火床のみ	(4)	SB0112主柱穴と位置重複	不明
168	46-1, 2	SB0167	ⅢC17・22	方形	N66° E	2.80	2.72	7.62	東壁中央 南寄り	—	火床のみ 廃棄行為痕跡	0		平安 (10C前半)
183	51-8	SB0170	ⅢH11	—	N74° E	(0.74)	(2.03)	(15.02)	東壁南隅	石	支脚石残存	0	調査区外	平安 (10C前半)
172	47-6~8	SB0171	ⅢB25・C21	(方形)	N13° W	3.28	—	—	北壁中央 やや東寄り	—	支脚石残存 袖部地 山削り残し	0	調査区外	古墳~奈良 (7C末~8C前)
184	—	SB0172	ⅢI06・07・11・12	方形	N39° W	5.28	4.96	26.19	北壁中央	粘土	—	4	SB0044を統合	平安 (9C後半~10C前半)
185	51-9, 10	SB0174	ⅢC17・18・22・23	方形	N22° W	3.44	—	—	(北壁中央)	石・粘土	—	0		古墳後期 (7C後半)
185	—	SB0175	ⅢH08	方形	N7° W	2.96	3.52	10.42	北壁中央	粘土	—	0		奈良 (8C中頃) 以前
156	—	SB0176	ⅢH09	—	—	—	—	—	—	—	—	0		不明
146	—	SB0201	ⅢH16・17・21・22	不整形	—	—	—	—	—	—	SB0031接点に 焼土・灰分布あり	3		平安
186, 187	52-1~4	SB0301	ⅡR21・22・W01・02	方形	N20° W	6.80	6.40	43.52	北壁中央	石・粘土	支脚抜取痕あり	4	SB3001を統合	奈良 (8C中頃)
188	1-4 52-7	SB0303	ⅡW11	—	—	—	—	—	—	—	—	0	調査区外	奈良 (8C)
188	52-8	SB0304	ⅡW21	—	—	—	—	—	—	—	—	2	調査区外	古墳後期 (6C)
189	52-9, 10	SB0305	ⅡB05・10・C01・06	—	—	—	—	—	—	—	—	1	調査区外	古墳後期 (7C前半)
189	53-1, 2	SB0309	ⅢC11	(隅丸方形)	N75° E	3.52	2.88	10.14	東壁東寄り	石	—	1		平安 (10C前半)
190	53-3	SB0311	ⅢC11・12	(方形)	N70° E	3.28	4.24	13.91	東壁中央 南寄り	石	—	3	SB3078を統合	平安 (10C前~中頃)
190	53-4~6	SB0313	ⅢB15・20・C11・16	方形	N61° E	(3.68)	2.96	10.89	東壁中央	石・粘土	袖部地山削り残し 天井石 支脚跡 煙道	3		古墳後期 (6C中頃)
190	—	SB0314	ⅢB20	—	—	—	—	—	—	—	—	0		古墳後期 (6・7C中頃)
186, 187	—	SB0317	ⅡR21・22・W01・02	(方形)	N31° W	—	—	—	(北壁中央)	—	—	4		古墳~奈良
191, 192	53-7, 8	SB3002	ⅡR22・23・W02・03	方形	N14° W	(8.48)	8.24	(6.88)	北壁中央	—	火床のみ	4	SB0302を統合	奈良 (8C前半)
193	—	SB3008	ⅢC02・07	不整形	N76° E	3.68	3.44	12.66	東壁中央 よりやや 南側	石	地山削り残し	4	SB0308を統合	平安 (10C)
193	53-9	SB3020	ⅡM22・23・R02・03	方形	N32° W	4.96	5.68	28.17	北西壁 ほぼ中央	石	SB3005に横される	4		古墳後期 (7C後半)
194	53-10 54-1, 2	SB3022	ⅡM22・R02・07	方形	N26° W	7.12	(6.80)	(48.42)	北西壁 ほぼ中央	粘土	—	4		古墳後期 (7C中頃)
194	54-2	SB3023	ⅡR02	方形	—	—	—	—	—	—	—	4		古墳後期 (7C)
195	54-3, 4	SB3024	ⅡR02・03	(長方形)	—	—	—	—	北壁	石・粘土	支脚石残存 石組煙道	2		奈良 (8C前半)
195	54-5	SB3025	ⅡR03・08	方形	N24° W	2.56	(2.88)	(7.37)	北西壁 ほぼ中央 付近	粘土	—	0		古墳後期 (6・7C)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド				主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築	その他			
196	54-6~8	SB3026	ⅡR07・08	方形	N31° W	2.72	2.80	7.62	北西壁中央	石・粘土	支脚石残存 地山削り残し	0		古墳後期 (7C後半)
196	54-8	SB3027	ⅡR07	方形	N25° W	2.72	2.72	7.40	北西壁中央よりやや東側	粘土	地山削り残し	0		古墳後期 (6Cか)
196	54-9, 10 55-1~3	SB3028	ⅡR08	方形	N30° W	2.40	2.64	6.34	北西壁中央よりやや北東	石・粘土	—	0		古墳後期 (7C中頃)
196	55-4	SB3030a	ⅡR12・13	方形	N33° W	4.88	5.12	24.99	北西壁ほぼ中央	—	火床のみ	4		古墳後期 (6C)
196	—	SB3030b	ⅡR08・12・13	—	—	—	—	—	北西壁中央付近?	—	煙道のみ	0		SB3032より古い
197	55-5	SB3031	ⅡR12・17	(方形)	N18° W	5.20	(3.44)	(17.89)	北壁	石・粘土	残存良好 煙道・支脚石残存	3		古墳後期 (7C後半)
198	55-6, 7	SB3032	ⅡR12・13・17・18	方形	N20° W	5.60	6.48	36.29	北壁ほぼ中央	粘土	—	4		奈良 (8C中頃)
199	55-8	SB3034	ⅡR16・17	(方形)	—	—	—	—	北壁	—	支脚石残存 燃焼部張り出し	0		古墳後期 (6・7C)
199	55-9	SB3035	ⅡR16・17・21	(方形)	—	—	—	—	北壁	石	—	2	調査区外	古墳後期 (6・7C)以降
200	—	SB3038	ⅡR17・18・22・23	長方形	N1° E	3.04	3.92	11.92	北壁中央	石・粘土	—	0		奈良 (8C中頃)
201	55-10 56-1~4	SB3042	ⅡR18・19	方形	N6° W	(4.80)	4.80	(23.04)	北壁ほぼ中央	石・粘土	残存良好 天井石あり	2		古墳後期 (7C前半)
202	56-1	SB3043	ⅡR17・18	方形	N12° W	6.56	5.84	38.31	北壁中央やや西寄り	石	—	4		平安 (9C前半)
202	56-5	SB3044	ⅡR22・24・W03・04	(長方形)	—	—	—	—	北壁ほぼ中央	—	—	0		古墳後期 (6・7C)
203	56-6, 7	SB3045	ⅡW04・09	長方形	N20° W	4.16	3.68	15.31	北壁ほぼ中央	石	煙道石組良好	0		平安 (10C前半)
203	57-1, 2	SB3046	ⅡW03・04	長方形	N17° W	(5.60)	5.12	(28.67)	北壁ほぼ中央	石・粘土	支脚石?残存	0		奈良 (8C中頃)
204, 205	57-3~6	SB3047	ⅡW03・04・08・09	方形	N18° W	6.64	6.24	41.43	北壁ほぼ中央(1)やや東寄り(2)	(1)石(2)粘土	—	5	カマド2基あり	奈良 (8C中頃)
205	57-6~8	SB3048	ⅡW03・08	(方形)	N30° W	(5.36)	5.44	(29.16)	北壁中央よりやや西寄り	粘土	—	2		古墳後期 (7C後半)
206	—	SB3049	ⅡR14・19	方形	N28° W	2.96	(3.52)	10.42	北壁ほぼ中央か?	石・粘土	煙道先ビツ痕跡	2		古墳後期 (7C中頃)
207	—	SB3050	ⅡR08・09・13・14	方形	N1° E	5.36	5.20	27.87	北壁中央	石・粘土	—	4		奈良 (8C前半)
207	—	SB3051	ⅡR08・09・13・14	(方形)	—	—	—	—	—	—	—	0		奈良か
208	57-9, 10	SB3052	ⅡR24・25・W04・05	方形	N33° W	5.76	5.60	32.26	北壁ほぼ中央	—	燃焼部張り出し	4		奈良 (8C前半)
208	—	SB3054	ⅡW04	長方形	N23° W	2.16	3.04	6.57	なし	—	—	0	住居跡としての様相は薄い	SB3046・SB3052より古い
209	58-1, 2	SB3055	ⅡC23, ⅢH03	方形	N30° W	4.80	5.36	25.73	北壁ほぼ中央	石	煙道張り出し	4		奈良 (8C中頃)
210	58-3, 4	SB3056	ⅢC19・20・24	方形	N75° E	4.24	4.00	16.96	東壁中央よりやや南寄り	石	残存良好	3		平安 (10C前半)
210	—	SB3057	ⅢC19	(長方形)	N73° E	2.72	—	—	東壁中央か?	石	燃焼部張り出し	0		平安 (9Cか)
209	—	SB3058	ⅡW17・18・22	不整形	—	—	—	—	—	—	—	4		平安 (10C)
211, 212	21-7 58-5~7	SB3059	ⅡC02・03	方形	N22° W	4.72	4.96	23.41	北壁中央	石・粘土	煙道あり	9		奈良 (8C中頃)
212	59-1, 2	SB3060	ⅢC18	方形	N81° E	2.64	3.12	8.24	東壁ほぼ中央	石・粘土	—	0		平安 (10C前半)
213	59-3, 4	SB3061	ⅡC22・23・H02・03	長方形	N82° E	3.28	2.24	7.35	東壁中央やや南	石	残存良好	0		平安 (10C前半)
213	59-5	SB3062	ⅢC18・23	方形	N16° W	5.68	5.68	32.26	北壁中央よりやや南	石	—	4		奈良 (8C)
—	—	SB3063	ⅢH02・03	—	—	—	—	—	不明	不明	—	0		不明
214	—	SB3064	ⅡW18・19・23・24	方形	N31° W	2.72	2.72	7.40	北壁中央よりやや東寄り	粘土	煙道あり	0		奈良 (8C)
215, 216	59-6~9	SB3065	ⅡW23・24・C03・04	方形	N15° W	4.96	5.04	25.00	北壁中央やや東寄り	粘土	燃焼部張り出し削り残し 袖かた'両脇にビツ	4		古墳後期 (7C前半)
216	59-10 60-1	SB3066	ⅡC23・24, ⅢH03	方形	N34° W	3.68	(3.36)	(12.36)	—	—	—	4		古墳後期 (7C)
217	60-2, 3	SB3067	ⅢC13・18	方形	N11° W	4.88	5.36	26.16	—	石	火床のみ	4	北壁ほぼ中央と推定	平安 (10C)
217	—	SB3068	ⅢC12	(長方形)	N34° W	(3.28)	(4.08)	(13.38)	—	—	—	0		古墳後期 (6・7C)
218	60-4, 5	SB3070	ⅢC19・20・24	方形	N25° W	4.16	4.80	19.97	北壁ほぼ中央	石・粘土	—	4		古墳後期 (7C後半)

付表2

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド			主柱穴数	その他	時期	
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築				その他
219	60-6,7	SB3072	ⅢC13・14・19	方形	N18° W	4.80	4.64	22.27	北壁 ほぼ中央	—	煙道張り出し	4		奈良 (8C前半)
218	—	SB3073	ⅢC14・19	方形	N46° W	3.52	3.28	11.55	なし	—		0		不明
220	60-8,9	SB3077	ⅢC22・H02・03	方形	N38° W	2.32	2.88	6.68	北西壁 ほぼ中央	—	煙道突出部のみ	0		古墳後期 (6・7C)
220	60-10	SB3079	ⅢC07・08	(方形)	—	(5.20)	—	—	北壁	—		0		奈良 (8C)
221	61-1~3	SB3080	ⅢC12・13	方形	N26° W	2.08	2.56	5.32	北壁 ほぼ中央	粘土	煙道突出部	0		奈良 (8C)
221	61-4~6	SB3081	ⅢC12・13・17・18	(方形)	N16° W	(5.60)	(5.20)	(29.12)	北壁 ほぼ中央	石・粘土		11		平安 (10C前半)
222	61-7	SB3086	ⅢC09・14	方形	N9° W	3.84	3.60	13.82	北壁 ほぼ中央	石・粘土		2		奈良 (8C後半)
220	61-8,9	SB3089	ⅢC03・08・09	方形	N19° W	5.20	5.20	27.04	北壁中央 よりやや 東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (6C・7C 前半)
221	61-10	SB3090	ⅢC03・04・08・09	(方形)	N90° E	(3.04)	(3.60)	(10.94)	東壁南寄 り	石		0		平安 (10Cか)
222	—	SB3093	ⅢC07・08・13	(長方形)	N69° W	(6.48)	(5.60)	(36.29)	—	—		4		奈良 (8C)
221	—	SB3098	ⅢC17	—	—	—	—	—	—	—		0		古墳後期 (7C)
223	62-1~5	SB4001	ⅢD22・23	(方形)	N1° W	(3.44)	(2.96)	(10.18)	—	—		0		平安 (9C末~10C 前半)
223	62-6~9	SB4004	ⅢD17	方形	N89° W	3.44	3.28	11.28	東壁中央	石	袖部 地山削り残し	0		平安 (10C前半)
224	62-10 63-1,2	SB4005	ⅢD12・17	方形	N89° W	2.72	2.80	7.62	東壁中央	石	袖部 地山削り残し	0		平安 (10C前半)
224	—	SB4006	ⅢD13	方形	N77° E	2.56	2.32	5.94	南東壁隅	石		0		平安 (9C後半)
225	63-3,4	SB4007	ⅢC05・D01・06	長方形	N85° E	3.60	(4.40)	(15.84)	東壁中央 よりやや 南寄り	石		0		平安 (10C前半)
225	63-5,6	SB4009	ⅡX23・24,ⅢD03・04	方形	N26° W	2.96	2.88	8.52	北壁 ほぼ中央	石		0		平安前期 (9C前半)
226	63-7~10	SB4010	ⅡW25,ⅡX21	方形	N83° E	(3.12)	3.36	(10.48)	東壁中央 よりやや 南寄り	石		7		平安 (10C前半)
226	64-1,2	SB4011	ⅡX06・07・11・12	方形	N69° E	2.64	2.96	7.81	東壁東隅 付近	石		0		平安 (10C前半)
227	64-3~6	SB4012	ⅡW25,ⅡX21	方形	N31° W	6.16	6.72	41.40	北壁中央	—		8		古墳後期 (6C)
228	64-7,8	SB4014	ⅢD16・17	長方形	N29° W	2.64	3.44	9.08	北壁中央 より東寄 り	粘土		0		古墳後期 (7C前半)
229	64-9,10 65-1~3	SB4015a	ⅡS17・18・23・24	方形	N17° W	4.64	4.72	21.90	北壁 ほぼ中央	粘土		7	旧カマド、北壁東寄りに 一基	古墳後期 (7C後半)
230	65-4	SB4015b	ⅡS17・18・23・24	方形	N13° W	3.52	3.20	11.26	北壁 ほぼ中央	粘土		0		古墳後期 (7C後半)
228	—	SB4017	ⅡX02・03	(方形)	N16° E	3.28	(3.60)	(11.81)	—	—		1	SDに削られて詳細不明	不明
230	66-3	SB4019	ⅢX18・19・23・24	長方形	N17° W	3.84	4.56	17.51	北壁 ほぼ中央	石		2		平安 (9C前半)
231	65-5~7 66-1~3	SB4020	ⅡX18・19・23・24	(方形)	N24° W	—	6.40	—	北壁 ほぼ中央	石・粘土		5		古墳後期 (7C前半)
232	—	SB4021	ⅢD03・04	(長方形)	N10° W	3.84	(5.04)	(19.35)	なし	—		0		奈良・平安 (8,9C)
232	—	SB4022	ⅡX22・23,ⅢD03	(長方形)	N26° W	(3.52)	2.00	(7.04)	なし	—		0		奈良・平安か
232	—	SB4023	ⅢD02・03	—	—	—	—	—	なし	—		2		奈良 (8C)
233	66-4,5	SB4024	ⅡX11・12・16・17	方形	N21° W	4.64	4.80	22.27	北西壁 ほぼ中央	—	地山削り残し	4		平安 (9C前半)
234	—	SB4025	ⅢD04・09	(長方形)	—	—	—	—	北壁	粘土(石)	左袖に袖石の抜取痕あり	3	調査区外	平安 (9C前半)
235	66-6~8	SB4026	ⅡX07・08・12・13	方形	N18° W	5.04	4.80	24.19	北壁 ほぼ中央	石		4		古墳後期 (6C中頃)
236	—	SB4027	ⅡX22	方形	N8° W	3.68	3.36	12.36	なし	—	ビット2床下から焼 土検出	3		平安 (10C前半)
237	66-9,10	SB4028	ⅢD16・21	方形	N38° W	2.64	2.72	7.18	北西壁中 央よりや や西寄り	—		0		古墳後期 (7C)
236	—	SB4034	ⅢC15・20・D11・16	方形	N47° W	3.84	3.92	15.05	北壁壁中 央よりや や北寄り	粘土(石)	袖石抜取痕あり	1		奈良 (8C)
237	67-1,2	SB4036	ⅢC09・10・14・15	長方形	N22° W	2.48	3.12	7.74	北西壁よ りやや北 寄り	石・粘土	地山削り残し	3		古墳後期 (6C中頃)
238	67-3~8	SB4037	ⅢC10・D06	方形	N89° W	4.48	4.24	19.00	東側中央 より南寄 り	石		0	鍛冶炉2基、鉄製品、鉄 滓、羽口等出土。工房跡 か?	平安前期 (10C中頃)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド			主柱穴数	その他	時期	
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築				その他
239, 240	—	SB4039	ⅢC04・05・09・10	方形	N17° W	7.20	6.72	48.38	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4		奈良 (8C中頃)
241	67-9, 10 68-1	SB4040	ⅡW15・20	方形	N73° E	5.44	4.16	22.63	東壁中央 よりやや 南寄り	—	地山削り残し	3		古墳後期 (7C中頃)
242	68-2~4	SB4041	ⅡS16・21	方形	N18° W	4.56	5.20	23.71	北壁 ほぼ中央	粘土		4		古墳後期 (7C後半)
243	—	SB4042	ⅡX16	長方形	N1° E	2.72	2.08	5.66	—	—		0		奈良以降か
243	—	SB4043	ⅢD14	—	—	—	—	—	—	—		0	調査区外	古代か
243	68-5	SB4044	ⅢC05	方形	N21° W	3.04	(2.64)	(8.03)	—	—		0		平安 (9C)
244	64-3	SB4045	ⅡW24・25, ⅢC04・05	方形	N28° W	4.72	4.80	22.66	—	—		5		古墳後期 (7C)
245	68-6~8	SB4047	ⅡW14・19・20	長方形	N22° W	2.96	4.40	13.02	北壁中央 より東寄 り	—	地山削り残し	4		不明
246	—	SB4057	ⅢR19・20・24・25	方形	N22° W	5.44	5.28	28.72	北壁中央 より東寄 り	不明		4		古墳後期 (7C)
247	—	SB4058	ⅢD17	方形	N5° W	3.44	3.60	12.38	北壁 ほぼ中央	石		0		平安 (10C前半)
248	68-9, 10	SB4059	ⅡW20, ⅡX16	方形	N27° W	5.60	6.00	33.60	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4	SB4060を統合	奈良 (8C初)
250	69-1, 2	SB4061	ⅡW25	—	—	—	—	—	東壁中央 より南寄 り	石		0		平安 (10C前半)
244	64-3	SB4062	ⅡW24・25, ⅢC05	—	—	—	—	—	—	—		2	SB4069を統合	不明
249, 250	69-3~6	SB4063	ⅢD06・07・11	方形	N28° W	5.76	5.92	34.10	北壁 ほぼ中央	石		4		古墳後期 (7C)
250	69-7~10	SB4064	ⅡR20	方形	N9° W	3.04	3.44	10.46	北壁 ほぼ中央	石		0		奈良 (8C)
251	25-3	SB4065	ⅢD06	—	—	—	—	—	—	—		0		平安か
251	—	SB4068	ⅡW25	—	—	—	—	—	—	—		0		古墳 (6・7Cか)
251	70-1	SB5001	ⅡM17	—	—	—	—	—	—	—		1		古墳後期 (7Cか)
252	—	SB5002	ⅡM17・18・22・23	方形	N40° W	3.68	3.76	13.84	北西壁中 央	石・粘土		4		奈良 (8C前半)
253	70-2~8	SB5003	ⅡM12・13・17・18	方形	N33° W	3.84	4.08	15.67	北壁 ほぼ中央	石・粘土		6		古墳後期 (7C後半)
252	—	SB5004	ⅡM12	—	—	—	—	—	—	—		0	大半が調査区外	不明
254	70-9, 10	SB5005	ⅡM07・08・13	方形	N23° W	5.44	6.24	33.95	北壁中央 付近	粘土		7		奈良 (8C中頃)
255~257	1-6 71-1~10	SB5006	ⅡM07・08・12・18	方形	N24° W	6.64	(7.20)	(47.81)	北壁 ほぼ中央	石・粘土		0		古墳後期 (7C後半)
257	72-1, 2, 4	SB5007	ⅡM18・19	長方形	N12° W	4.96	4.16	20.63	北壁中央	石		4		奈良 (8C後半)
258	72-3, 4	SB5008	ⅡM18・19・23・24	方形	N45° W	4.48	4.56	20.43	北東壁中 央よりや や東寄 り	石・粘土		4		奈良 (8C)
259	—	SB5009	ⅡM24・25	方形	N30° W	2.48	2.72	6.75	北東壁中 央より東 寄り	粘土(石)	地山削り残し 袖石抜取痕あり	1		古墳後期 (6Cか)
260	72-5~7 73-1~10	SB5010	ⅡH04・05	長方形	N26° W	3.44	4.40	15.14	北壁中央 よりやや 東寄り	石・粘土		0		古墳 (5C末~6C 前)
261	74-1, 2	SB5011	ⅡC24・25	方形	N30° W	5.44	5.76	31.33	北壁 ほぼ中央	石	地山削り残し	4		古墳後期 (7C)
262	74-3~7	SB5012	ⅡC24・H04	(方形)	N24° W	6.32	—	—	北壁中央 部	—		3		古墳後期 (7C後半)
263	74-8	SB5013	ⅡH18・19	方形	N12° W	5.04	5.60	28.22	北壁 ほぼ中央	粘土		4		古墳後期 (7C末)
264	74-9	SB5014	ⅡH23	方形	N28° W	3.60	3.84	13.82	—	—		1		不明
264	74-10 75-1, 2	SB5015	ⅡH23・24・M03・04	方形	N31° W	5.20	5.04	26.21	北壁中央 よりやや 東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (6C後半)
267	75-3, 4	SB5016	ⅡH23・24・M03・04	方形	N28° W	4.16	3.84	15.97	北壁 ほぼ中央	粘土		3		奈良 (8C前半)
265	75-5~8	SB5017	ⅡM13・14・18	方形	N26° W	5.28	5.60	29.57	北壁 ほぼ中央	石・粘土		6		奈良 (8C中頃)
266	75-8	SB5018	ⅡM13・14・18・19	方形	N25° W	4.80	4.72	22.66	北壁中央 よりやや 東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (7C後半)
267	75-9, 10 80-2	SB5019	ⅡM14・15	方形	N23° W	2.24	2.96	6.63	北壁中央 よりやや 東寄り	石		0		奈良 (8C前半)

付表2

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築	その他			
267	80-2	SB5020	II M14・15	長方形	N23° W	4.64	3.20	14.85	なし	—	—	0		SB5019
268	76-1~6	SB5021	II C19	方形	N26° W	4.16	4.56	18.97	北壁中央よりやや東寄り	石・粘土	地山削り残し	2		古墳後期(7C中頃)
269, 270	76-7~10 77-1~4	SB5022	II C15・20・D11・16	方形	N14° W	6.56	6.64	43.56	北壁中央	石・粘土	地山削り残し	6		古墳後期(6C中頃)
271, 272	—	SB5023	II H14・15・19・20	方形	N25° W	5.36	5.20	27.87	北側ほぼ中央	石・粘土		4		古墳(6C後半)
273	—	SB5024	II M23・24・R03・04	方形	N19° W	3.92	4.00	15.68	北壁ほぼ中央	石・粘土		5		奈良(8C前半)
274	—	SB5025	II H18・23	—	—	—	—	—	—	—		2		平安(9Cか)
274	—	SB5026	II H08・09・13・14 (長方形)	(長方形)	N23° W	(3.60)	(5.60)	(20.16)	北壁ほぼ中央	石		2		古墳後期(7C後半~末)
275, 276	77-5~8	SB5027	II M20・N16	方形	N16° W	4.88	4.88	23.81	北壁中央よりやや東寄り	石・粘土		4		古墳後期(7C後半)
276	77-9	SB5028	II M15	方形	N19° W	2.72	3.20	8.70	北壁中央よりやや東寄り	粘土		0		古墳後期(7C前半)
276	77-10 78-1, 2	SB5029	II M10・15・N06・11	隅丸方形	N12° W	3.20	3.36	10.75	北壁中央よりやや東寄り	—		2		古墳後期(7C)
277	78-3~5	SB5030	II M04・05・09・10	方形	N24° W	4.72	4.80	22.66	北壁中央よりやや東寄り	石・粘土		5		古墳後期(7C後半)
278	—	SB5031	II M05・10	方形	N24° W	3.44	3.20	11.01	北壁中央よりやや東寄り	石		0		平安(9C後半)
278	78-6	SB5032	II M04	(長方形)	N46° E	2.48	—	—	東壁南側に片寄る	石・粘土		3		古墳後期(6・7C)
279	78-7	SB5033	II C25・H05・D21	方形	N23° W	4.88	4.96	24.20	南東、南西隅に2基	—		0	隅に構築されているカマドは稀である	平安(11C)
279	78-8, 9 127-5	SB5034	II H25・I21・M05・N01	方形	N23° W	4.88	4.80	23.42	北壁中央よりやや西寄り	粘土	地山削り残し	4		古墳後期(7C前半)
280, 281	78-10 79-1, 2 127-5	SB5035	II I16・17・21・22	方形	N21° W	6.32	6.24	39.44	(旧)北壁ほぼ中央(新)やや西寄り	(旧)石(新)石・粘土		2		古墳後期(7C後半)
281	—	SB5036	II M23・24	(長方形)	N11° W	(2.72)	—	—	北壁	石・粘土		0		奈良(8C前半)
258	72-4	SB5037	II M18・19	—	—	—	—	—	—	—		5		古墳後期(7C後半)
274	—	SB5038	II H08・09	長方形	N58° E	2.80	2.32	6.50	東壁北寄り	—		0		不明
282	79-3, 4	SB5039	II I11・16	方形	N11° W	2.16	2.24	4.84	北壁西寄り	粘土		0		古墳(7C後半か)
282	79-5	SB5040	II I06	方形	N21° W	3.04	3.28	9.97	北壁中央より東寄り	石・粘土	袖石抜取痕あり	0		古墳後期(6C中頃)
283	—	SB5041	II H10	隅丸方形	N61° E	1.92	1.76	3.38	東壁ほぼ中央	—		0		不明
283	—	SB5043	II H10・101・06	方形	N22° W	2.88	3.28	9.45	北壁中央	粘土		1		古墳(6C後半か)
283	—	SB5044	II H10・101・06	方形	N25° W	(3.60)	3.68	(13.25)	—	—		0		SB5043以前
284	—	SB5045	II M10・N06	隅丸長方形	N20° W	2.56	3.36	8.60	北壁中央	石・粘土		0		古墳(6Cか)
278	—	SB5046	II M04	—	—	—	—	—	—	—		0		不明
285	79-6~8	SB5048	II M23・24	方形	N20° W	3.20	4.00	12.80	北壁中央よりやや東寄り	粘土		2		古墳後期(7C後半)
266, 267	—	SB5050	II M13・14・18・19	—	—	—	—	—	—	—		4		SB5018以前
278	—	SB5052	II H24・M04	—	—	—	—	—	東壁	—		0	カマド北半分が切られている。SB5032と同一	古墳後期(7C)
286	79-9, 10 80-1, 2	SB5053	II M14・15	(長方形)	—	—	—	—	北壁中央より西寄り	—		0	SB5057と同一	古墳後期(6・7C)
287	80-3~6	SB5054	II M05・10	長方形	N29° W	3.36	4.56	15.32	北壁ほぼ中央	石・粘土		1		古墳後期(7C前半)
287	80-3, 5	SB5055	II M05	(方形)	—	—	—	—	—	—		0		不明
278	—	SB5056	II M04	—	—	—	—	—	—	—		2		不明
286	80-1, 2	SB5057	II M14・15	長方形	N31° W	2.88	4.80	13.82	北壁中央よりやや東寄り	—		1		古墳後期(7C後半)
266, 267	—	SB5058	II M13・14・18・19	—	—	—	—	—	—	—		4		SB5050以前
288	1-7 80-7~10	SB6001	II S14	(方形)	N6° W	2.72	—	—	北壁	—	地山削り残し	0		古墳後期(7C前半)
288	81-1, 2	SB6002	II N24・S04	(長方形)	N64° E	—	2.88	—	—	—		2		古墳後期(6C)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築	その他			
289	81-3~7	SB6003	II S03・04	方形	N10° W	3.76	4.48	16.84	北壁 ほぼ中央	粘土・(石)	袖石抜取痕あり	4		古墳後期 (6 C後半)
290	82-1~3	SB6004	II N23・24	長方形	N66° E	6.00	3.20	19.20	東壁中央 より南寄り	石・粘土	地山削り残し	2		古墳後期 (6 C)
291	—	SB6005	II D11・12・16・17	方形	N1° W	5.20	(5.28)	(27.46)	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4	煙道口ピットあり	古墳後期 (6 C初)
292, 293	82-4~8	SB6006	II S07・08	方形	N27° W	4.80	4.56	21.89	北西壁 ほぼ中央	石・粘土		4		古墳後期 (6 C後半)
293	82-9, 10	SB6007	II I11・12	方形	N21° W	4.72	4.80	22.66	北壁 ほぼ中央	石・粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (7 C)
294	—	SB6008	II I08・12・13	方形	N25° W	4.24	4.40	18.66	北東壁 ほぼ中央	石・粘土		4		古墳後期 (6 C)
295, 296	83-1~5	SB6009	II N22・S01・02	長方形	N64° E	4.56	2.72	12.40	北東壁中央 より南寄り	石・粘土	地山削り残し	2		古墳後期 (6 C中頃)
296	83-6, 7	SB6011	II S07・12・13	方形	N8° W	3.84	3.84	14.75	北壁 ほぼ中央	—		4	焼失住居の記載あり	古墳後期 (7 C)
297	83-8, 9	SB6013	II I01・02	方形	N25° W	4.16	4.08	16.97	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4		古墳後期 (7 C)
298	83-10 84-1, 2	SB6014	II N09・10・14	—	—	—	—	—	北壁	石・粘土		1		奈良 (8 C前半)
299	84-3	SB6015	II M22・23	隅丸方形	N20° W	(4.00)	4.24	(16.96)	北壁 ほぼ中央	粘土		4		古墳後期 (6 C後半)
300	—	SB6016	II R03・04・09	方形	N25° W	4.08	4.32	17.63	北壁 ほぼ中央	石		4		奈良 (8 C)
303	84-4, 5	SB6018	II N14	—	—	—	—	—	北壁	石・粘土		2		古墳後期 (6 C後半)
301	84-6~8	SB6019	II N11・12・16・17	方形	N20° W	3.36	3.44	11.56	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		0		古墳後期 (7 C後半)
302, 303	84-9 85-1, 2	SB6020	II N06・07・11・12	方形	N11° W	5.84	5.68	33.17	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (7 C初)
304~306	85-3~5 91-7	SB6021	II N02・03・07・08・12・13	方形	N29° W	8.40	8.48	71.23	(旧)北壁中央 (新)中央より西寄り	石・粘土		4		古墳後期 (7 C中頃)
307, 308	—	SB6022 (新)	II R04・05・09・10	長方形	N33° W	5.52	6.56	36.21	—	—	SB6065に壊される	4		古墳後期 (6 C中頃)
307, 308	—	SB6022b (旧)	II R04・05・09・10	長方形	N35° W	5.04	6.00	30.24	北西壁 ほぼ中央	(石)	地山削り残し 袖石抜取痕あり	4		古墳後期 (6 C中頃)
309	85-6, 7 86-1, 2	SB6023	II R05・10・S06・11	方形	N5° W	5.12	5.04	25.80	北壁 ほぼ中央	粘土(石)	支脚石2点残存	4		奈良 (8 C中頃)
310	86-3~6	SB6024	II R14・15・20	(方形)	N38° W	5.68	(4.08)	(23.17)	北壁 ほぼ中央	粘土・(石)	地山削り残し 袖石抜取痕あり	4		古墳後期 (7 C前半)
311	—	SB6026	II S06・07	隅丸方形	N8° W	4.32	4.88	21.08	北壁中央 より西寄り	粘土		4		古墳後期 (6 C後半~ 7 C初)
312	—	SB6027	II S01・02・06・07	長方形	N39° W	2.72	3.76	10.23	北西壁 ほぼ中央	石・粘土	地山削り残し	1		古墳後期 (7 C)
312	—	SB6029	II S12	(長方形)	N6° W	2.56	(2.16)	(5.53)	—	—		0		古墳後期か
313	86-10 87-1~3	SB6030	II D13・18・19	方形	N37° W	4.96	5.36	26.59	北壁中央 主軸線上	石・粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (6 C末~7 C初)
314	—	SB6031	II D19・23	長方形	N30° W	2.40	3.76	9.02	北西壁 ほぼ中央	—	地山削り残し	0		古墳後期か
314	—	SB6032	II D23	—	N5° W	1.68	—	—	—	—		0		古墳後期か
315	87-4 88-1~4	SB6033	II D 19・24	長方形	N27° W	3.60	4.80	17.28	北壁中央 より東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (6 C中頃)
316	—	SB6034	II D20・25	長方形	N38° W	3.44	4.64	15.96	北壁中央 より西寄り	石・粘土		2		古墳後期 (6 C中頃)
317	—	SB6035	II D25・I05	方形	N38° W	3.36	3.60	12.10	北西壁中央 より北寄り	粘土		2		古墳後期 (6 C後半)
318	88-5~7	SB6036	II D23・24・I03・04	(長方形)	N34° W	(3.12)	(4.00)	(12.48)	北西壁 ほぼ中央	粘土		0		古墳後期
320	—	SB6037	II D24・25・I04・05	方形	N57° E	4.40	4.24	18.66	北東壁 ほぼ中央	—		0		古墳後期
321	88-8, 9	SB6038	II I04	長方形	N30° W	2.72	4.24	11.53	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		0		奈良 (8 C後半)
322	88-10	SB6039	II I04・05・09・10	方形?	N43° W	2.40	2.40	5.76	北西壁 ほぼ中央	粘土	地山削り残し	5		古墳後期 (6 C後半)
322	89-1~3	SB6040	II I09	方形	N38° W	2.40	2.00	4.80	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		0		古墳後期 (6 C以前)
323	89-4, 5	SB6041	II I04・05・09・10	方形	N38° W	5.84	5.36	31.30	北壁中央 よりやや西寄り	粘土		4		古墳後期 (7 C後半)
324, 325	89-6, 7 90-1~3 95-5	SB6042	II I10・15	方形	N47° W	(4.56)	4.64	(21.16)	北西壁	(石)・粘土	袖石抜取痕あり	4		古墳後期 (6 C後半)
324	89-7 90-2, 3	SB6043	II I15	(方形)	—	—	—	—	—	—		0	北東側半分は調査区外	古墳 (7C以降)

付表2

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド			主柱穴数	その他	時期	
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築				その他
325	90-6,7	SB6045	II R03・04	方形	N17° W	4.40	5.28	23.23	なし	—		5		古墳後期 (7C中頃)
326	90-8~10	SB6046	II I13	長方形	N35° W	2.64	3.44	9.08	北東壁中央より東寄り	粘土		2		奈良 (8C中頃)
326	90-10	SB6047	II I13	長方形	N28° W	2.88	3.76	10.83	北東壁側?	—	SB6008・6046に切られる	2		古墳後期か
327,328	91-1~5	SB6048	II I13・14・18・19	方形	N47° W	6.80	6.72	45.70	北西壁ほぼ中央	石		4		奈良 (7C末~8C初)
328		SB6049	II I14・19	方形	N40° W	3.28	3.52	11.55	—	—	SB6048に切られる	0		古墳 (7C以前)
329,330	91-6,7 92-1~4	SB6050	II N04・05・09・10	方形	N22° W	8.16	8.32	67.89	北壁中央よりやや東寄り	(石)・粘土	袖石抜取痕あり 地山削り残し	4		古墳後期 (6C後半)
331	92-5~10	SB6051	II I24・25	(長方形)	N26° W	(4.48)	—	—	北壁ほぼ中央	粘土		3		古墳後期 (7C前半)
332	93-1,2	SB6052	II I13・17・18	方形	N53° W	2.88	2.48	7.14	北東壁ほぼ中央	(石)	袖石抜取痕あり	0	煙道ロケットあり	古墳後期 (6C後半)
333	93-3~5	SB6053	II I17・18・22・23	方形	N25° W	4.96	5.04	25.00	北壁ほぼ中央	—		4		古墳後期 (6C中頃)
332	93-5	SB6054	II I18・23	方形	N25° W	3.20	3.52	11.26	北壁中央東寄り	—		3		古墳後期 (7C)
334	—	SB6055	II I17・22	方形	N19° W	3.28	3.68	12.07	北壁中央よりやや東寄り	粘土	地山削り残し	7	煙道ロケットあり	古墳後期 (7C)
335	93-6	SB6056	II I23	長方形	N18° W	2.24	3.20	7.17	北壁中央よりやや東寄り	(石)	袖石抜取痕あり 地山削り残し	2		古墳後期 (7C)
321	93-7	SB6057	II I04・09	方形	N28° W	4.56	4.24	19.33	北壁ほぼ中央	—		4		古墳後期 (7C)
336	93-8~10 94-1	SB6058	II I21,N01・02	方形	N25° W	4.24	4.00	16.96	北壁中央よりやや東寄り	(石)・粘土	袖石抜取痕あり	4		奈良 (8Cか)
337	94-2	SB6059	II D23・24	方形	N22° W	3.92	4.56	17.88	北壁ほぼ中央	粘土(石)	袖石抜取痕あり	1		古墳後期 (7C)
338	94-3~6	SB6061	II N16・21・22	方形	N35° W	5.12	5.44	27.85	北壁ほぼ中央	石・粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (6C後半)
335	93-6	SB6062	II I23	(方形)	—	—	—	—	なし	—		0		古墳後期 (6C・7C)
339	94-7,8	SB6063	II N16・21	方形	N24° W	3.28	3.52	11.55	北壁中央より西寄り	石		1		平安 (9C後半)
339	94-9,10	SB6064	II N17・22	長方形	N19° W	2.56	1.76	4.51	なし	—		0		不明
339	95-1~3	SB6065	II R04・05	方形	N5° W	3.68	3.52	12.95	北壁ほぼ中央	石・粘土		4		奈良 (8C前半)
340	95-4	SB6066	II R04・05・09・10	方形	N41° W	3.20	2.80	8.96	北西壁ほぼ中央	粘土		0		古墳後期 (7C)
340	—	SB6068	II R09	(方形)	—	—	—	—	北壁ほぼ中央	石・粘土		0		不明
324,325	90-2~5	SB6069	II I09・10・14・15	(方形)	N51° W	2.40	(1.76)	(4.22)	北西壁中央より東寄り	—		1		古墳後期 (6C後半)
318,319	—	SB6070	II D24・I04	方形	N35° W	5.68	4.80	27.26	北西壁ほぼ中央	(石)・粘土	擾乱により壊される	8		古墳後期 (6C後半)
320	—	SB6071	II D24・25・I04・05	長方形	N57° E	(3.76)	4.24	(15.94)	—	—		8		古墳か
340	95-5~8	SB6072	II I10・15	方形	N50° W	1.84	2.16	3.97	北西壁中央より北寄り	—		0		古墳後期 (7C以前)
341,342	—	SB7001	I X25,Y21, II D05・E01	方形	N21° W	4.56	5.60	25.54	北壁中央	(石)・粘土	袖石抜取痕あり	4		古墳後期 (7C後半)
343	95-9,10	SB7002	I X19・20・24・25	方形	N52° W	4.64	4.64	21.53	北西壁中央	石・粘土		4		古墳後期 (7C後半)
344	96-1,2	SB7003	I X24, II D03・04	方形	N45° W	4.64	4.72	21.90	北西壁中央北寄り	粘土		4		古墳後期 (7C後半)
345	105-3	SB7004	II D08・09	長方形	N30° W	3.44	4.64	15.96	北西壁の北隅	石		0		平安 (9C前半)
345	96-3	SB7005	II D07・08	方形	N26° W	(4.80)	(4.96)	(23.81)	北壁中央東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (7C)
346	97-3	SB7006	II D11・12	方形	N20° W	4.80	5.20	24.96	—	石・粘土		4		古墳後期 (6C中頃)
347	96-4~6	SB7007	II D13・14	方形	N22° W	(4.32)	(4.08)	(17.63)	北壁東寄り	石・粘土		4	煙道ロケットあり	古墳後期 (6C中頃か)
348	96-7,8	SB7008	II D04・05・09・10	方形	N22° W	(4.40)	4.88	(21.47)	北壁中央	砂質シルト		3	煙道ロケットあり	古墳後期 (6C後半)
349	96-9 97-3	SB7009	II D11・12・17	方形	N18° W	(5.04)	(4.96)	(25.00)	—	—	SB7006に壊されている	4		古墳 (5C後半)
349	96-10 97-1	SB7011	I Y11・12	方形	N103° E	4.00	3.60	14.40	東壁北寄り	石		1		平安 (9C後半)
350	97-2,3	SB7012	II D17・18	方形	N23° W	3.68	(3.68)	(13.54)	北壁中央	粘土		4		古墳後期 (7C末)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模				カマド			主柱穴数	その他	時期	
				平面形	主軸方向	主軸長(m)	直交軸長(m)	床面積(m <sup>2</sup> )	位置	構築				その他
350	—	SB7013	II D13・14・18	方形	N27° W	(4.04)	(4.32)	(17.45)	北西壁中央	石・粘土		0		古墳後期(7C後半)
351, 352	1-8 97-4~7	SB7014	I W25・X21・II C05・D01	方形	N14° W	7.64	7.36	56.23	北壁中央	粘土		4		古墳後期(7C末)
353	98-1~3	SB7015	I X18・19・23・24	方形	N22° W	4.48	4.16	18.64	北壁中央	粘土		4		古墳後期(7C中頃)
353	98-4, 5	SB7016	I X19・20・24・25	方形	N25° W	2.20	2.48	5.46	北壁中央	石・粘土		0		古墳後期(7C)
354	—	SB7017	II E11・16	長方形	N0° W	2.56	(3.28)	(8.37)	北壁中央	石・粘土	地山削り残し	0		奈良(7C末~8C初)
355	—	SB7018	II D15・20・E11・16	方形	N21° W	2.88	3.36	9.68	北壁中央	石・粘土	地山削り残し	2		古墳後期(6C後半)
356	98-6, 7 99-1	SB7019	II D14・15	方形	N3° W	4.72	(4.72)	(22.28)	北壁中央	石・粘土		4		古墳後期(6C中頃)
356	—	SB7020	II D09・14	方形	N33° W	(3.84)	(3.68)	(14.13)	—	—	SB7054に切られる	0		奈良(8C)
357	99-2~4	SB7021	II D10・15・E06・11	(方形)	N21° W	4.00	—	—	北西壁	粘土		4		古墳後期か
358	99-5~7	SB7022	II D10・15・E06・11	方形	N19° W	5.08	5.52	28.04	北西壁中央東寄り	粘土		4		古墳後期(6C後半~7C初)
359	—	SB7023	I X21, II E01	方形	N52° W	4.00	4.24	16.96	北西壁中央東寄り	粘土		4		古墳後期(7C前半)
359	100-1, 2	SB7024	I Y21, II E01	方形	N23° W	3.84	4.52	17.36	北壁中央やや東寄り	粘土		4		古墳後期(6C後半)
360	—	SB7025	I Y21・22, II E01・02	方形	N30° W	5.56	(5.44)	30.25	北壁中央	粘土	地山削り残し	4		古墳後期(6C中頃)
361	—	SB7026	I Y16・21	長方形	N3° W	5.36	4.36	23.37	北壁中央やや東寄り	石・粘土		4		平安(9C前半)
362	—	SB7027	I Y16・21	方形か	N31° W	—	4.36	—	—	—	SB7026・7036に壊されている	4		奈良(8Cか)
364	100-3	SB7028	I Y16・17・21・22	方形	N24° W	(5.12)	5.36	27.44	北壁中央	石・粘土		4		奈良(8C後半~9C初)
363, 364	100-4~6	SB7029	I Y17・21・22	不明	N24° W	—	—	—	北壁中央	粘土	一部地山削り残し	1	SB7010を統合カマド3基並ぶ	奈良(8C中頃)
364	100-7	SB7030	I Y17・22	(方形)	N40° E	3.04	—	—	なし	—		0		奈良(8C後半以降)
365	100-8, 9	SB7031	I Y16・17	方形	N9° W	4.08	4.08	16.65	北壁中央	石・粘土		4		平安(9C前半)
366	—	SB7032	I Y17	(方形)	N4° W	3.28	—	—	北壁	石		0		平安(9C中頃)
367	100-10 101-1, 2	SB7033	I X20・25・Y16・21	方形	N18° W	3.92	4.40	17.25	北壁中央東寄り	粘土	地山削り残し	4		古墳後期(7C)
368	—	SB7034	I X15・20	方形	N17° W	3.12	3.20	9.98	北壁中央	粘土		2		平安(9C中頃)
369	101-3~6	SB7035	I X15・20	方形	N54° W	3.92	4.40	17.25	北東壁の東隅	石		4	焼失家屋	平安(10C後半)
370	101-7 102-1	SB7036	I X15・20・Y11・16	方形	N22° W	5.36	4.56	24.44	北壁中央	石・粘土		4		平安(8C末~9C前半)
371	—	SB7037	I X15・20・Y11・16	方形	N28° W	(4.56)	(4.96)	22.62	北壁東寄り	粘土		4		古墳後期(7C前半)
371	—	SB7038	I Y11・12・16・18	方形	N75° E	(4.64)	4.48	20.79	東壁中央	粘土		4		平安か
372	102-2, 3	SB7039	I Y12	方形	N32° W	4.40	4.72	20.77	北壁中央	石・粘土		4		平安(9C後半)
373	102-4 103-1	SB7040	I X10・15・Y06・11	方形	N24° W	5.04	—	—	北壁中央	石・(粘土の地山削り残しかは不明)		4		平安(9C前半)
374	103-2	SB7041	I X10・15	方形	N24° W	(3.60)	4.00	14.40	北壁中央	石・粘土		0		平安(9C中頃)
375, 376	103-3~6	SB7042	I X10・15・Y06・11	方形	N25° W	5.52	5.52	30.47	北壁中央	石・粘土		4		古墳後期(7C前半)
377	—	SB7043	I Y06・07・11・12	方形	N26° W	5.76	7.04	40.55	北壁中央やや東寄り	石・粘土	地山削り残し	4		古墳後期(7C後半)
376	103-7 104-1	SB7044	I Y06	方形	N70° E	3.84	3.64	13.98	東壁中央南寄り	石・粘土		0		平安(9C後半)
378	—	SB7045	I Y03・07・08	隅丸方形	N23° W	3.36	(3.92)	13.17	北西壁中央	石		1		平安(9C中頃)
379	104-2~4 105-1	SB7046	I Y02・03	方形	N19° W	4.08	4.56	18.60	北壁中央	石		0		平安(9C中頃)
380	—	SB7048	II D03	長方形	N28° W	2.40	2.88	6.91	北壁中央	—		0		奈良(8C中頃)
380	—	SB7049	II E16	不明	N53° W	—	—	—	西壁中央	粘土		1		平安(8C末~9C前半)
381	—	SB7050	II D08	方形	N33° W	3.44	(3.84)	13.21	北壁西寄り	石・粘土		4		平安(9C前半)

付表2

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築	その他			
350	—	SB7051	II D12・17	—	—	—	—	—	—	—	—	0		古墳 (5 C後半)
381	105-2, 3	SB7052	II D08・09	隅丸方形	N24° W	2.56	(3.12)	7.99	北壁中央 やや東寄り	石		0		平安 (9 C前半)
381	—	SB7053	II D08	方形	N28° W	(3.44)	(2.40)	8.26	なし	—		0		平安か
356	—	SB7054	II D09・14	—	N33° W	3.12	—	—	北西壁	石・粘土		0		不明
382, 383	105-4~8	SB7055	I X21・22	方形	N84° E	(5.60)	5.60	31.36	(旧)北壁中央 (新)東壁中央	(旧)粘土 (新)石・粘土		4		古墳 (5 C後半)
383	—	SB7056	I X17	隅丸方形	N41° W	2.56	2.60	6.66	北壁中央	石		0		平安 (9 C前半か)
384	105-9, 10 106-1~3	SB7057	I Y01・02・06・07	方形	N30° W	6.32	6.04	38.17	北壁中央	粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (7 C)
385	104-4 105-1 106-4~7	SB7058	I Y02・03・08	方形	N23° W	(5.52)	—	—	北壁中央	粘土 沙質		3		古墳後期 (6 C中頃)
386	—	SB7059	I X03・08	(方形)	N64° E	2.32	—	—	北東壁 ほぼ中央	石		0		奈良・平安
386	107-1, 2	SB7060	I Y11・12・16・17	隅丸方形	N65° E	3.52	3.44	12.11	東壁中央 やや南寄り	—		4		平安 (8 C末~9 C前半)
387	—	SB7061	I Y11・12	方形	N34° W	—	(4.40)	—	北壁中央	石・粘土		4		平安 (9 C前半)
356	—	SB7062	II D14・15	—	—	—	—	—	—	—	SB7019にほとんど切られる	0		不明
386	107-3, 4	SB7063	I Y06	方形	N67° E	3.28	2.88	9.45	東壁中央	石		0		平安 (9 C中頃)
—	—	SB7064	II D18	—	—	—	—	—	北東壁中央	—		0		平安 (10 C後半か)
388	107-5, 6	SB7065	I Y01・02	方形	N33° W	2.88	3.08	8.87	北壁中央	(石)・粘土	袖石採取痕あり	1		平安 (9 C前半)
—	—	SB7066	I Y11・16・17	—	—	—	—	—	—	—		4		平安 (9 C前半)
388	107-7	SB7068	I Y06・07・11・12	方形	N65° E	5.36	—	—	東壁中央 やや南寄り	粘土		4		古墳か
389	108-1	SB7069	I Y16・17	方形	N49° W	3.08	2.96	9.12	北壁中央	粘土		2		平安 (9 Cか)
389	108-2~4	SB7070	I X06・07	方形	N31° W	3.84	3.04	11.67	北西壁中央	石・粘土		0		平安 (9 C前半)
390	109-1	SB7071	I X06・11	方形	N51° E	3.68	(3.44)	12.66	東隅	(旧)粘土 (新)石		0	カト 新旧2基	平安 (11 C前半)
391	109-2~4	SB7072	I X16	長方形	N28° W	5.20	3.84	19.97	北壁中央	石・粘土		0		古墳後期 (7 C)
391	109-5	SB7073	I W20・X16	—	N26° W	—	—	—	—	—		0		古墳後期 (7 C前半か)
392	109-6, 7	SB7075	I W25, II C05	—	—	—	—	—	—	—		0		不明
381	—	SB7078	II D08・13	—	N22° W	—	(2.88)	—	—	—		0		平安
392	110-1	SB8003	I X03・08	隅丸方形	N28° W	4.48	4.88	21.86	—	—		0		不明
392	110-2	SB8004	I X02・03・07・09	方形	N29° W	4.80	4.76	22.85	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4		平安 (9 C後半)
393	110-3, 4 111-1, 2	SB8006	I S19・20・24・25	方形	N25° W	6.08	6.32	38.43	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		4		古墳後期 (7 C後半)
394	111-3~7 112-3	SB8007	I S14・19	方形	N17° W	4.88	5.28	25.77	北壁 ほぼ中央	粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (7 C前半)
395	112-1~3	SB8008	I S13・14・18・19・23・24	方形	N16° W	8.96	8.88	79.56	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4		古墳 (5 C後半~末)
396	112-4~7	SB8009	I T06・07	方形	N12° W	4.32	4.24	18.32	北壁 ほぼ中央	石・粘土		4		古墳後期 (7 C末)
396	113-1, 2	SB8010	I T06・07	方形	N23° W	(3.84)	3.88	14.90	北壁中央 よりやや東寄り	粘土		4		奈良 (8 C)
397	113-3~6	SB8011	I S22・23・X02・03	方形	N19° W	(6.00)	(6.44)	38.64	北壁ほぼ中央	石・粘土		4		古墳後期 (7 C後半)
398	113-7 114-1	SB8012	I S22, I X02	方形	N38° W	2.72	2.88	7.83	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土		0		平安 (9 C前半)
398	114-2~4	SB8013	I T11	方形	N35° W	3.76	3.76	14.14	北壁 ほぼ中央	石・粘土		1		奈良 (8 C後半)
399	115-2	SB8014	I T06・07・11・12	方形	N31° W	(3.68)	(4.00)	14.72	北壁中央 よりやや東寄り	粘土	地山削り残し	5		奈良 (8 C前半)
400	114-5	SB8015	I T07・12	隅丸方形	N62° E	2.72	3.88	10.55	南東隅付近	石・粘土		4		平安 (11 C前半)
401	—	SB8016	I S10・15・T06・11	(方形)	N30° W	(7.68)	(7.84)	60.21	—	—		14		古墳 (5 C末~6 C前半か)

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	形態・規模					カマド			主柱穴数	その他	時期
				平面形	主軸方向	主軸長 (m)	直交軸長 (m)	床面積 (㎡)	位置	構築	その他			
400	—	SB8017	I T12	隅丸長方形	N62° E	2.72	1.76	4.79	なし	—	—	0		平安か
402	—	SB8018	I T02・07	方形	N23° W	2.72	—	—	北壁 ほぼ中央	石・粘土	—	0		奈良 (8 C後半)
403, 404	114-6, 7	SB8019	I T01・02・03・06・07・08	方形	N25° W	8.88	9.04	80.28	なし	—	—	26		古墳 (5 C後半～末)
404	115-1～3	SB8021	I T06・07・11・12	方形	N13° W	3.36	3.60	12.10	北壁 ほぼ中央	(石・粘土)	—	0		平安 (9 C前半)
405	—	SB8022	I S15	隅丸方形	N25° W	3.28	3.68	12.07	北壁 ほぼ中央	粘土	—	4		古墳後期 (7 C後半)
406	115-4～6	SB8023	I S15・20・T11・16	方形	N27° W	4.08	4.72	19.26	北壁 ほぼ中央	(石)・粘土	—	4		奈良 (8 C)
407, 408	115-7 116-1～5	SB8024	I S20・25・T16・21	方形	N71° E	8.24	8.56	70.53	(旧)北壁中央 (新)車壁中央 中央空南より	(旧)不明 (新)石・粘土	—	4		古墳 (5 C後半)
409	116-6, 7 117-1	SB8025	I S09・10・14・15	方形	N0°	5.20	(5.84)	30.37	北壁中央 よりやや西寄り	石・粘土	地山削り残し	4		古墳後期 (7 C後半)
406	117-2	SB8026	I S13・17・18	—	N30° W	—	—	—	—	—	—	1		古墳 (7 C)
410, 411	117-3, 4	SB8028	I S08・09・13・14・18	方形	N22° W	7.28	7.52	54.75	北壁 ほぼ中央	粘土	—	4		古墳後期 (7 C)
412	117-5	SB8030	I S09・10	方形	N32° W	4.80	4.24	20.35	北壁中央 よりやや東寄り	石・粘土	—	10	カマド構築材の礫に石皿を転用	奈良 (8 C前半)
411	—	SB8031	I S09	(長方形)	N2° W	(3.84)	—	—	北壁中央 よりやや西寄り	石・粘土	—	2		古墳後期 (7 C前半)
413	—	SB8034	I S03・04・0.8・09	—	N26° E	—	—	—	—	—	—	1	調査区外	古墳か
414	—	SB8036	I S23・X03	—	N21° W	4.16	—	—	—	—	—	4		古墳後期 (6～7 C)
414	—	SB8037	I S23・X03	(方形)	N21° W	1.92	—	—	北壁 ほぼ中央	石・粘土	—	0		古墳後期 (6～7 C)
413	—	SB8038	I S09・10	(方形)	N0°	—	—	—	北壁 ほぼ中央	石・粘土	—	0		古墳後期 (6・7 C)
415	117-6, 7 118-1, 2	SB8039	I 023・24・T04	—	N24° W	6.24	5.36	33.45	北壁 ほぼ中央	石・粘土	—	6		古墳 (5 C末～6 C前半)
416	—	SB8040	I 023	方形?	N33° W	3.84	—	—	北壁中央 よりやや西寄り	—	地山削り残し	7		古墳 (5 C後半)
417	1-9 118-3, 4	SB8041	I 020・25	方形?	N14° W	(5.08)	—	—	北壁	石・粘土	—	2		古墳 (5 C末～6 C前半)
418	118-5, 6	SB8042a	I 024・25	—	N20° W	(3.52)	—	—	北壁 ほぼ中央	(石)	抜取痕の可能性ある 凹みあり	3		古墳後期 (6 C前半)
418	118-5	SB8042b	I 024	—	—	—	—	—	西壁	—	—	0	南側が切られている為、 詳細不明	古墳 (5 C後半)
418	118-5, 6	SB8042 c	I 024・25	—	N21° W	—	—	—	北壁 ほぼ中央	—	—	1		古墳 (5 C後半)
419	118-7 119-1, 2	SB8044a	I 019	方形	N33° W	4.68	(4.68)	21.90	北壁中央	(石)	袖石抜取痕の可能性あり 地山削り残し	3		古墳 (5 C後半)
419	119-2	SB8044b	I 019	長方形	N21° W	2.92	—	—	なし	—	—	0		古墳 (5 C後半か)
417	119-4	SB8045	I 014・15	—	N32° W	—	—	—	北壁中央 か?	粘土	地山削り残し	1		古墳 (5 C後半～6 C初)
419	119-3	SB8046	I S17・22	—	N7° W	—	—	—	—	—	—	0		不明

付表3 掘立柱建物跡一覧

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方			重構関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)	柱痕		
420	120-1	ST0001	III M04・05	N0°	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.43	3.27	11.22	1.64 ～ 1.80	3.20 ～ 3.22	凹形, 楕円形, 不 整形, 方形	0.52 ～ 0.66	凹形	△SD0006(SK0043含む) △SK0051△SK0052 ▼SB0005	
420	120-2	ST0002	III H17・18	N88° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.26	3.69	19.41	1.64 ～ 1.86	1.74 ～ 1.96	凹形, 不整形	0.44 ～ 0.68	—	△SB0030△SB0152 ▼SB0029	
421	120-3	ST0003	III I12・13	N90° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.11	3.73	19.06	1.61 ～ 1.91	1.74 ～ 2.02	凹形, 楕円形, 不 整形, 方形, 不 明	0.16 ～ 0.33	凹形	△SB0134 ▼SB0132? ▼SK0150	
422	120-4	ST0004	III I04・09	N12° W	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.43	4.18	22.70	1.63 ～ 2.14	2.04 ～ 2.20	凹形, 楕円形, 不 整形	0.23 ～ 0.66	—	△SB0143	
423	120- 5～9	ST0005	III D24・I04	N14° W	総柱	坪掘・ 布掘	方形	2間×2間	4.08	3.57	14.57	1.81 ～ 2.18	1.53 ～ 1.99	楕円形, 不整形, 方形, 不明	0.86 ～ 1.09	凹形	△SB0143 △SB0144	
424	120-10	ST0006	III I02	N34° W	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.02	2.56	7.73	1.56 ～ 1.66	2.56	楕円形, 不整形	0.30 ～ 0.48	—		
425	121- 1～4	ST0007	III H19・20	N3° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.91	3.41	13.33	1.86 ～ 2.08	1.58 ～ 1.82	凹形, 不整形, 方形, 不明	0.67 ～ 0.82	凹形, 楕円 形	△SB0077△SB0041△SB0024 △SB0048△SK0327 △SK0328 ▼SK0128▼SK0207▼SK0213L	
424	121- 5～7	ST0008	III H10・15・I06	N85° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	4.55	6.06	27.57	2.16 ～ 2.46	1.74 ～ 2.44	方形	0.35 ～ 0.66	—	△SB0062△SB0065△SB0066 △SK0240△SK0241	
426	122- 1～3	ST0009	III I11・16	N8° W	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	6.27	4.50	28.22	1.62 ～ 2.64	2.08 ～ 2.54	楕円形, 長方形	0.27 ～ 0.52	凹形	△SB0025△SB0017△SB0061 ▼SQ0001 (灰分布龍洞)	
427	—	ST0010	III H12・17	N82° E	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.34	1.60	5.34	1.60 ～ 1.76	2.66	凹形, 不整形	0.16 ～ 0.40	—	△SB0030△SB0049△SB0050 △SB0152	
—	—	ST0011	III H11・16	N30° W	側柱?	坪掘	長方形	3間×?	7.90	—	—	—	—	凹形, 楕円形, 隅 丸方形	—	—	△SB0053, △0105, △0042 ▼SQ0002 不明SK0215, SK0230	
428	122-4 123-1, 2	ST0301	II W21・22, III C01・02	N15° W	側柱	坪掘	方形	5間×5間	6.86	7.10	48.71	1.10 ～ 1.82	1.06 ～ 2.92	凹形, 楕円形, 不 整形, 不整形 凹, 方形	0.12 ～ 0.63	凹形	△SB0304 ▼SB03059	
429	123-3, 4	ST0302	III C01・02・06・ 07	N14° W	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.91	3.10	12.12	1.72 ～ 1.94	1.34 ～ 1.60	凹形, 楕円形, 不 整形	0.16 ～ 0.55	—	△SB0308 (=SB3008)	
429	123- 5～7	ST0303	II W16・21	N72° W	側柱	坪掘	方形	2間×1間	3.45	3.59	12.39	1.68 ～ 1.78	3.49 ～ 3.68	凹形, 不整形	0.37 ～ 0.55	凹形	混乱により不明	

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模			柱間間隔(m)			柱六通り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)		
430	124-1	ST0304	IIW01・02・06・07	N74° E	側柱	坪掘	方形	3間×3間	4.99	4.34	21.66	1.52 ～ 1.80	1.22 ～ 1.66	凹形, 楕円形, 不 整形	0.30 ～ 0.70	円形	
431	—	ST0305	IIW02・07	N13° W	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	6.35	4.69	29.78	1.94 ～ 2.28	2.20 ～ 2.68	凹形, 不整形	0.36 ～ 0.56	円形	
432	—	ST0306	IIIC11	N77° E	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.80	4.10	23.78	1.80 ～ 2.10	1.80 ～ 2.20	凹形, 楕円形, 不 整形, 方形	0.40 ～ 0.66	円形	△SB0310, △SB0313, △SB0315 △SB0316, △SK3037, △SK3039 △SK3040, △SK3042 ▼SB0309
433	—	ST0307	IIIE20・C16	N73° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	(3.85)	4.30	16.56	1.80	2.00 ～ 2.30	不整形, 楕円 形, 方形	0.24 ～ 0.66	—	△SB0110, △SB0117, △SB0313 △SB0315
434	124-2	ST4001	IIID18・19・23・24	N14° W	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.04	2.82	8.57	1.28 ～ 1.66	1.28 ～ 1.60	凹形, 不整形	0.27 ～ 0.42	—	△SB4003, △SK4018, △SK4080 (このSKIは、別のSTの可能性 もある)
435	124-3, 4	ST4002	IIID08・13・14	N59° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	6.45	4.04	26.06	1.86 ～ 2.60	1.92 ～ 2.09	凹形, 不整形	0.49 ～ 0.78	円形	△SK4088, △SK4126, △SK4129 △SK4172 ▼SB4006
434	125-1	ST4003	IIIX13・18・19	N67° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.63	3.66	20.61	1.42 ～ 2.50	1.81 ～ 2.05	凹形, 不整形	0.27 ～ 0.62	—	△SM4008
436	125-1 ～ 3	ST4004	IIIX17・18・23	N70° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.88	4.46	26.22	1.46 ～ 2.38	2.11 ～ 2.20	凹形, 不整形, 不 整形	0.23 ～ 0.67	円形	△SM4007, △SM4008
—	—	ST4005	IIIX03・04・08・09	N63° E	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	4.59	2.46	11.26	1.92 ～ 2.80	2.46 ～ 2.60	凹形, 楕円形	0.24 ～ 0.39	—	不明SK4062, SK4064, SK4065
437	125-4, 5	ST4007	IIID21・101	N32° W	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.80	1.90	7.22	1.75 ～ 2.12	1.75 ～ 1.95	凹形, 不整形	0.38 ～ 0.58	円形	▼SB0150
438	125-6	ST4008	IIID16・17	N54° E	総柱	坪掘	長方形	2間×2間	3.83	3.13	11.99	1.74 ～ 2.05	1.34 ～ 1.72	凹形, 楕円形, 不 整形, 不整形	0.29 ～ 0.58	円形	△SB4014, △SM4001 ▼SD0007, △SK4166, △SK4237
439	—	ST4011	IIID02・03	N29° W	側柱	坪掘	方形	2間×1間	3.66	4.14	15.15	1.52 ～ 2.24	4.04 ～ 4.25	凹形, 楕円形, 不 整形, 不整形 長方形	0.47 ～ 0.83	—	△SM4002 ▼中世のPit 不明SB4021, SB4023, SK4119, ST4011
437	—	ST4013	IIIW19・20・24・25	N75° E	側柱	坪掘	方形	3間×3間	4.24	4.08	17.30	1.32 ～ 4.52	1.24 ～ 1.58	凹形, 楕円形, 不 整形	0.27 ～ 0.45	—	△SB4046
—	—	ST4014	IIID08・09・14	N27° W	側柱	坪掘	長方形	4間× (2間)	8.40	(4.30)	-36.12	—	—	方形, 長方形	—	—	

付表3

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六廻り方		重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)		
—	—	ST4015	IID08・09・14	N26° W	側柱	坪掘	長方形	3間× (2間)	7.10	(2.50)	17.75	—	—	凹形, 楕円形, 不 整形	—	—	—
—	—	ST4016	IID18・19・23・ 24	—	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	ST4017	IID10・14・15・ D11	—	側柱	坪掘	長方形	4間×1間	—	—	—	—	—	—	—	—	—
440	126- 1~3	ST5001	IIC15・20・D06	N29° W	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.23	4.60	33.26	1.48 ~ 2.38	1.48 ~ 2.96	凹形, 方形, 長方 形	0.37 ~ 0.70	—	△SB5022△SB5004△SB5005
441	127-5	ST5002	IID24・25・N05	N67° E	側柱	坪掘	長方形	5間×3間	6.62	4.68	30.98	1.20 ~ 1.50	1.40 ~ 1.64	凹形, 楕円形, 不 整形	0.18 ~ 0.71	凹形 ▼ST5007	△SB5034
441	—	ST5003	IID20・25	N5° W	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.92	2.13	8.35	1.94 ~ 2.02	2.04 ~ 2.46	凹形, 楕円形	0.14 ~ 0.41	—	—
442	—	ST5004	IIH10・15・I11	N42° E	側柱	坪掘・ 布掘	長方形	4間×2間	6.58	4.17	27.44	1.18 ~ 2.26	1.88 ~ 2.36	凹形, 不整形, 不 整形	0.48 ~ 0.81	凹形, 楕円 ▼SB5041(所見より)	—
443	126-4 127-1, 2	ST5005	IID21・22・I01・ 02	N64° E	側柱	坪掘・ 布掘	長方形	4間×3間	6.27	4.43	27.78	1.40 ~ 1.84	1.32 ~ 1.66	凹形, 楕円形, 方 形, 長方形	0.48 ~ 0.86	—	△SB6013
444	127-3, 4	ST5006	IIH04・05・I0・ I01・06	N60° E	側柱	布掘	長方形	4間×3間	6.89	5.34	36.79	1.36 ~ 2.08	1.66 ~ 1.92	凹形, 楕円形, 不 整形, 長方形, 方 形, 不整形	0.34 ~ 0.85	—	△SB5043△SB5010 ▼SK5118
445, 446	127-5	ST5007	IID24・25・N05・ I0・N01	N14° W	側柱・東 柱	坪掘	長方形	5間×2間	13.48	10.86	146.39	2.52 ~ 2.92	2.34 ~ 2.98	凹形, 楕円形, 不 整形	0.48 ~ 0.83	凹形, 楕円 △SB5034△SB5031△SB5054 △ST5002	—
447	—	ST5008	II M18・23	N75° E	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.57	3.12	11.14	1.62 ~ 1.96	1.38 ~ 1.78	凹形, 楕円形, 不 整形	0.48 ~ 0.91	凹形 ▼SB5002△SK5123 ▼SB5007	△SB5002△SK5123 ▼SB5007
—	—	ST5009	II M10・N06	—	側柱	坪掘	方形	2間×2間	—	—	—	—	—	—	—	—	△SB5045
—	—	ST5010	II M15・20・N11	—	側柱	坪掘	方形	3間×1間	—	—	—	—	—	—	—	—	△SB5029
448	127-6, 7	ST6001	II N23	N22° W	側柱	坪掘	方形	1間×1間	2.26	2.38	5.38	2.25 ~ 2.26	2.36 ~ 2.40	凹形, 不整形	0.42 ~ 0.51	—	△SB6001

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)	柱痕		
449	128-1, 2	ST6002	II S08・09・13・ 14	N75° E	側柱	坪掘	長方形	4間×3間	6.70	5.44	36.45	1.48 ～ 2.38	1.72 ～ 1.92	円形, 不整形	0.24 ～ 0.53	—	▼SB6001	
450	128- 3, 4, 7	ST6003	II S02・03・07・ 08	N10° W	側柱	坪掘	方形	3間×3間	4.72	4.53	21.38	1.34 ～ 1.70	1.38 ～ 1.66	円形, 楕円形, 不 整形	0.46 ～ 0.64	円形, 楕円 形	△SB6006△SB6012△SK6064 ▼SD4005	
451	128-5, 6 129-1	ST6004	II N23・S03	N8° E	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.44	3.75	12.90	1.65 ～ 2.02	1.65 ～ 2.22	円形, 楕円形, 不 整形	0.28 ～ 0.79	—	△SK6064 ▼SK6056	
448	—	ST6005	II I07	N72° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	4.99	3.52	17.56	1.46 ～ 1.80	1.48 ～ 2.06	円形, 楕円形	0.25 ～ 0.45	—		当初、SKとして調査、途中 でSTと認定する
452	129- 2～4 130-1	ST6006	II N12・13	N33° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.31	3.37	11.15	1.54 ～ 1.76	1.64 ～ 1.74	隅丸方形, 不整 長方形	0.41 ～ 0.85	円形, 楕円 形, 方形	△SB6021△SK6116	
453, 454	129-2 130- 2～4	ST6007	II N11・12・17	N27° W	総柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.05	4.99	35.18	1.46 ～ 2.11	2.41 ～ 2.78	円形, 楕円形, 不 整形	0.13 ～ 0.53	円形	△SB6019	
454	—	ST6008	II N11・16・17	N27° W	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.81	4.14	24.05	1.55 ～ 2.47	1.95 ～ 2.18	円形, 楕円形	0.36 ～ 0.59	—	▼SB6063	
455, 456	130-1 131- 1～5	ST6009	II N02・07	N30° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.69	2.93	10.81	1.70 ～ 1.96	1.36 ～ 1.70	方形, 長方形, 不 整形	0.30 ～ 0.95	円形	△SB6021	
456	—	ST6010	II I22・23・N01・ 02・03	N63° E	側柱	坪掘	長方形	5間×2間	8.68	4.01	34.81	1.52 ～ 2.24	1.98 ～ 2.03	円形, 楕円形, 不 整形	0.21 ～ 0.58	—	△SB6058△ST6011△SK6383	
457, 458	—	ST6011	II I22・N02	N16° W	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.87	4.90	38.56	1.52 ～ 2.32	2.24 ～ 2.67	円形, 楕円形, 不 整形	0.38 ～ 0.80	—	△SK6383△SK6389△SK6466 △SK6385 ▼ST6010	
458	134-3	ST6012	II I23・24・N03・ 04	N61° E	側柱	坪掘	長方形	4間×3間	4.88	4.05	19.76	1.04 ～ 1.35	1.30 ～ 1.42	円形	0.14 ～ 0.46	—	▼ST6020	
459, 460	131-6, 7 132-1	ST6013	II N01・02・06・ 07	N19° W	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	8.23	5.26	43.29	1.96 ～ 2.19	2.61 ～ 2.72	円形, 楕円形, 不 整形	0.46 ～ 0.66	円形	△SB6058△SB6020	
460	132- 2～4	ST6014	II D24・25・I04・ 05	N59° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.55	4.44	33.48	1.32 ～ 2.47	1.80 ～ 2.75	円形, 楕円形, 不 整形, 隅丸正方形	0.32 ～ 0.74	円形	△SB6035△SB6037△SB6071 △SB6070 ▼SK6132	
461	133- 1～4	ST6015	II I24・25・N04・ 05	N34° W	総柱?	布掘	方形	2間× 2間?	3.49	3.16	11.03	1.63 ～ 1.85	3.13 ～ 3.18	布掘り	0.39 ～ 0.58	—	△SB6051△ST6018	

付表3

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方		重複関係 △(旧)▼(新)	その他	
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)			柱痕
462	133-5, 6	ST6016	II 122・23・N03	N25° W	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	6.48	4.24	27.48	2.02 ～ 2.58	1.92 ～ 2.37	円形, 楕円形	0.46 ～ 0.71	円形	△SB6053△SB6056△SB6062	
463	133-7 134-1	ST6017	II 124・N03・04	N60° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	8.21	4.56	37.44	1.79 ～ 2.12	2.16 ～ 2.50	円形, 楕円形	0.34 ～ 0.55	円形	△SB6050△ST6018 ▼SD6001	
461	134-1	ST6018	II 124・25・N04	N23° W	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.57	3.55	12.66	1.66 ～ 1.85	1.68 ～ 1.78	円形, 楕円形, 不 整形	0.24 ～ 0.60	—	▼ST6015▼ST6017	
464	—	ST6019	II 119・24	N31° W	側柱	坪掘	方形	3間×3間	4.59	4.92	22.58	1.43 ～ 1.68	1.48 ～ 1.80	円形, 楕円形	0.41 ～ 0.65	円形	△SB6049△SK6414△ST6026	
465	134-2, 3	ST6020	II 124・N03・04	N63° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	6.69	4.94	33.02	1.27 ～ 1.94	2.33 ～ 2.64	円形, 楕円形, 不 整形	0.31 ～ 0.51	—	△ST6012△SB6050 ▼SD6001	
466	134-4, 5	ST6021	II D24・I03・04	N53° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.91	4.21	24.85	1.72 ～ 2.34	1.96 ～ 2.25	円形, 楕円形, 長 方形	0.51 ～ 0.68	円形, 楕円 形	△SB6036△SB6070△SB6057 △SB6038△SK6267 ▼SD6002	
467	134-6, 7	ST6022	II 109・10・14・ 15	N32° W	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	4.33	3.63	15.70	1.26 ～ 1.60	1.68 ～ 2.07	楕円形, 不整形 円形, 隅丸長方 形, 隅丸長方形	0.17 ～ 0.52	円形, 楕円 形	△SK6217△ST6038△SB6042 △SB6039△SB6069△ST6037	
468	135- 1～3	ST6023	II 115	N57° E	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.82	3.62	13.83	1.86 ～ 2.30	1.68 ～ 1.90	楕円形, 不整形 形, 隅丸長方形, 不整形隅丸長方形	0.32 ～ 0.58	円形	△ST6024△SB6042△SB6043 △SK6344△SK6320	ST6024と構造が類似、建て 替えの可能性あり
468	135- 1～3	ST6024	II 115	N57° E	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.96	3.62	14.34	1.47 ～ 3.08	1.72 ～ 1.83	楕円形, 隅丸長 方形, 不整形隅丸 長方形	0.26 ～ 0.74	円形	△SB6042△SB6043△SK6320 ▼ST6023	
469	135-4 136-1, 2	ST6025	II 116・17・18・ 22	N69° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	6.78	4.57	30.98	1.38 ～ 2.00	2.12 ～ 2.48	円形, 楕円形, 不 整形隅形, 長方 形, 隅丸長方形	0.23 ～ 0.47	円形, 半円 形, 楕円 形, 方形	△SB6053△SB6055 ▼SB5035	
470	136-3, 4	ST6026	II 118・19	N34° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.75	3.14	11.78	1.75 ～ 1.92	1.48 ～ 1.66	円形, 楕円形, 不 整形隅形, 隅丸長 方形, 隅丸正方 形	0.17 ～ 0.71	楕円形	△SB6048 ▼ST6019▼ST6039	
471	136- 5～7	ST6027	II N18・19・23	N20° W	側柱	坪掘	方形	2間×1間	3.51	3.44	12.07	1.73 ～ 1.83	3.28 ～ 3.45	円形, 楕円形, 不 整形	0.34 ～ 0.59	—		
472	137- 1～5	ST6028	II M24・25・R01・ 05	N16° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	4.51	4.20	18.92	1.50 ～ 1.68	2.02 ～ 2.18	円形, 楕円形, 不 整形隅形, 隅丸長 方形, 隅丸正方 形	0.36 ～ 0.68	円形	△SB6067△SB6065△SB6022 ▼SK6124	
471	137-6, 7	ST6029	II N17・18・22・ 23	N20° W	側柱	坪掘	方形	1間×1間	2.86	3.05	8.69	2.75 ～ 2.84	2.74 ～ 2.94	円形, 不整形隅 形	0.56 ～ 0.66	円形		

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁行	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ(m)	柱痕		
473	—	ST6032	II D19・20・24・25	N60° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.06	4.17	29.44	1.33 ～ 2.08	1.86 ～ 2.32	凹形, 楕円形, 不整形	0.18 ～ 0.70	円形	△SB6034?	
474	—	ST6033	II D20・25・E16・21	N46° E	側柱	坪掘	長方形	3間×1間	5.30	2.78	14.73	1.60 ～ 2.62	—	凹形, 楕円形, 不整形	0.27 ～ 0.77	円形	▼SB7049	
474	—	ST6035	II I03・04・09	N37° W	総柱小	坪掘	長方形小	2間×1間	4.93	2.28	11.24	2.26 ～ 3.03	—	隅丸長方形	0.17 ～ 0.58	—	△SB6057△SB6038△SK6268 ▼SD6002▼SK6439▼SB6036?	
475	138-1,2	ST6037	II I14・15・19・20	N44° E	側柱	坪掘	長方形	1間×1間	3.04	2.50	7.58	2.98 ～ 3.10	2.22 ～ 2.77	凹形, 長方形	0.27 ～ 0.53	円形	△SB6042△SB6069△SB6072 ▼ST6022	
476	—	ST6038	II I14・15・19・20	N51° E	側柱	坪掘	長方形	3間×3間	4.94	3.78	18.67	1.25 ～ 2.10	0.94 ～ 1.53	凹形, 楕円形	0.14 ～ 0.46	楕円形	△SB6042△SB6072△SB6043 △SB6069 ▼ST6022▼ST6023▼ST6024	
475	—	ST6039	II I18・19	N41° W	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	3.78	3.02	11.42	1.84 ～ 1.95	1.42 ～ 1.60	凹形, 楕円形, 不整形	0.21 ～ 0.40	方形	△SB6048△ST6026 ▼ST6019	
—	—	ST6040	II R09・10	—	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	—	—	—	—	—	—	—	△SB6022		
477	138-3	ST7001	I X08・12・13	N43° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	6.38	3.95	25.15	1.48 ～ 1.85	1.73 ～ 2.30	凹形, 楕円形, 隅丸方形, 隅丸長方形	0.42 ～ 0.80	円形, 楕円形	△SB8001△SK7918 ▼SD7001▼SB8002	
478	138-4	ST7002	I X14・15・19・20	N39.5° W	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	5.24	3.59	18.79	1.23 ～ 1.41	1.75 ～ 1.85	凹形, 楕円形, 隅丸方形, 隅丸長方形, 不整形	0.11 ～ 0.42	—	△ST7003△SK7520? ▼ST7004▼SK7522?▼SK7515	
478	138-4,5	ST7003	I X14・15・19	N34° W	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.88	3.64	14.10	1.48 ～ 2.57	1.55 ～ 2.37	凹形, 楕円形, 隅丸長方形, 不整形	0.14 ～ 0.44	—	△SK7520? ▼SK7515▼ST7002▼ST7004	ST7023を統合
478	138-4	ST7004	I X14・15	N30° W	側柱	坪掘	長方形	1間×1間	2.14	2.59	5.53	1.97 ～ 2.06	2.41 ～ 2.46	凹形	0.30 ～ 0.38	—	△ST7002△ST7003△SK7520? ▼SK7515	
479	138-6	ST7005	I X02・07・08・12	N34° W	側柱	坪掘	長方形	4間×3間	6.80	4.82	32.78	1.56 ～ 1.92	1.24 ～ 1.92	凹形, 楕円形, 不整形	0.30 ～ 0.84	—	△SM8002△SK8010△SB8001 △SB8004△ST7009△SK7793 △SK7929 ▼SD7001▼SB8004▼SK8151 ▼SK8144	
480	—	ST7006	I S25・X04・05	N57° E	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	6.78	5.28	35.76	1.18 ～ 3.70	2.52 ～ 2.90	凹形, 楕円形	0.23 ～ 0.53	—	△SB8005 ▼SD7001▼SK7549	
481	138-7 139-1	ST7007	I X07・08	N78.5° W	側柱	坪掘	長方形	3間×1間	5.62	2.67	15.01	1.76 ～ 2.04	1.80 ～ 1.96	凹形, 楕円形, 不整形	0.52 ～ 0.76	円形	△SB8002△SK7819 ▼SD7001▼SK8144	

付表3

図版番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁行	桁行長(m)	梁行長(m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ(m)	柱痕		
482	—	ST7008	I S24・Y04	N72° E	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.13	3.01	9.42	1.62 ～ 1.76	1.34 ～ 1.67	凹形、楕円形	0.13 ～ 0.44	—	△SB8005 ▼SD7001	
483	138-6 139-2,3	ST7009	I X03・07・08	N60° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.19	5.12	36.75	1.43 ～ 2.00	2.10 ～ 2.87	凹形、楕円形、不整形	0.44 ～ 0.66	—	△SM8002(弥生) △SB8001 ▼SD7001 ▼SB8004 ▼SB8003	
484	139-4 4~7	ST7010	I X11・12・16・17	N48° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	7.49	5.20	38.92	1.69 ～ 2.16	2.58 ～ 2.62	凹形、楕円形、隅丸長方形	0.41 ～ 0.71	凹形、楕円形	△SB7056 △SK7708 △SK7781 △SK7949 △SK7891 △SK7999 △SB7076 (縄文) △SB8001(弥生)	
485	140-1 1~4	ST7011	I W20・X11・16	N27.5° W	側柱	坪掘・布掘	長方形小	3間×2間	4.79	—	—	1.57 ～ 1.62	1.05 ～ 1.75	凹形、楕円形、方形、隅丸方形	0.73 ～ 1.06	凹形、長方形、不整形	▼SB7073?	
486	140-5 5~7	ST7012	I X06・07・11	N63° E	側柱	坪掘	長方形	4間×3間	6.76	4.60	31.10	1.16 ～ 2.18	1.52 ～ 1.53	凹形、楕円形、不整形	0.52 ～ 0.87	凹形、楕円形	△SB8002 ▼SB7071 ▼SB7070 ▼SB8001	
487	—	ST7013	I X06・11・12	N32° W	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	6.64	4.50	29.88	0.83 ～ 2.38	2.17 ～ 2.36	凹形、楕円形	0.21 ～ 0.59	—	△SB7072 ▼SD7003 ▼SB7071	
488	141-1 1~3	ST7014	I X20・25	N70° E	側柱	坪掘	長方形	2間×1間	3.90	2.27	8.82	1.75 ～ 2.15	2.26	凹形、楕円形	0.31 ～ 0.40	凹形	△SB7033	
488	—	ST7015	I T23・Y03	N7° W	側柱	坪掘	長方形小	3間×2間	4.05	—	—	1.16 ～ 1.65	1.54	凹形、楕円形	0.28 ～ 0.58	—	△SB7047(弥生) △SB7046 △SB7068 △SK7718	
489	—	ST7016	I T22・Y02・03	N36° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	5.15	4.53	23.33	2.52 ～ 2.84	1.80 ～ 2.72	凹形、楕円形	0.19 ～ 0.43	—	△ST7018 ▼SB7046 ▼SB7058? ▼SK7920	
490	—	ST7017	I T22・Y01・02	N63° E	側柱	坪掘	長方形	4間×2間	5.80	5.58	32.36	1.32 ～ 1.72	2.28 ～ 2.92	凹形、楕円形、不整形、凹形	0.23 ～ 0.48	—	△SB7046 △SB7057 △SK7730 △SK7903 △SK7565 ▼SK7576	
491	—	ST7018	I Y02・03・07・08	N62° E	側柱	坪掘	方形	3間×3間	3.50	5.27	18.45	1.65 ～ 1.77	1.55 ～ 2.10	凹形、楕円形	0.18 ～ 0.49	—	△SB7045 △SB7046 △SB7057 △SB7068 △ST7018 ▼ST7016 ▼SK7584 ▼SK7652 ▼SK7653 ▼SK7882	
492	141-4	ST7019	I Y07・08・12	N72° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.20	4.06	21.11	1.18 ～ 2.06	1.85 ～ 2.22	凹形、楕円形、不整形、凹形	0.42 ～ 0.64	—	△SB7045 △ST7020 △SK7639 △SK7751 ▼ST7022 ▼SK7645 ▼SK7667 ▼SK7644	
493	141-5	ST7020	I Y07・12	N57° E	側柱	坪掘	長方形	3間×3間	4.46	4.03	17.97	1.34 ～ 2.20	1.29 ～ 1.65	凹形、楕円形、不整形、凹形	0.41 ～ 0.60	—	△SB7039 △ST7022 △SK7639 △SK7749 △SK7751 △SK7653 ▼SB8003 ▼ST7019 ▼SK7331 ▼SK7638 ▼SK7876	
494	141-6	ST7021	I X08・09	N69° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	4.94	3.11	15.34	1.28 ～ 2.13	1.22 ～ 1.72	凹形、楕円形	0.15 ～ 0.56	—	▼SD7001 ▼SK7811	

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六通り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)	柱痕		
—	—	ST7022	I Y07・12・13	N28° W	側柱	坪掘	方形	2間×2間	3.84	3.12	11.98	1.65	1.19 ~ 1.93	0.31 ~ 0.49	—	△ST7019△SB7039△SK7644 △SK7751△SK7646 ▼SD8003▼SK7649		
495	141-7	ST7025	I X19・20・24・ 25	N69° E	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.25	3.40	17.81	1.58 ~ 2.10	1.42 ~ 2.06	0.10 ~ 0.51	円形	△SB7002△SB7015△SB7016 ▼SK7293		
496	142-1,2	ST7026	I X24	N27° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.76	3.47	13.05	1.62 ~ 2.22	1.44 ~ 2.05	0.24 ~ 0.42	円形	△ST7027△SK7165△SK7855 △SB7002△SB7015		
—	—	ST7027	I X19・24・25・ II D04	N41° E	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	6.86	5.45	37.39	3.28 ~ 4.05	1.65 ~ 3.93	0.13 ~ 0.82	—	△SB7016△SB7002△SB7015 △SK7165 ▼ST7026		
—	—	ST7028	I X24・II D04	N25° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	4.56	4.00	18.24	2.23 ~ 2.31	1.92 ~ 2.12	0.18 ~ 0.33	—	▼ST7026▼SD5005		
—	—	ST7029	II D05・10・E01	N21° W	総柱	坪掘	長方形	3間×2間	7.34	4.47	32.81	1.48 ~ 2.92	2.02 ~ 2.76	0.26 ~ 0.54	—	△SK7119 ▼SK7418▼SK7416▼SD7002	P114はSK7416へ変更	
—	—	ST7030	I Y21・22, II E01・02	N30.5° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	5.78	5.55	32.08	1.38 ~ 2.43	2.73	0.11 ~ 0.54	—	△SB7023△SB7024△SB7025		
—	—	ST7031	II E06・07	—	側柱	坪掘	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	一部調査区外	
—	—	ST7032	II D10・E06・11	N53° E	側柱	坪掘	方形	(3間×2 間)	5.60	—	—	1.71 ~ 2.07	2.88	0.21 ~ 0.44	—	▼SB7022		
—	—	ST7033	II D10・15・E06・ 11	—	側柱	坪掘	長方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
—	—	ST7034	II D15・E11	N34° W	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	4.25	3.75	15.94	1.18 ~ 3.05	1.16 ~ 2.46	0.19 ~ 0.41	—	—		
497	142-3,4	ST7035	II D15・20	N36° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.08	3.39	10.44	1.46 ~ 1.81	1.54 ~ 1.80	0.27 ~ 0.69	円形	△SB7018 ▼SK7033▼SK7020? ▼SK7036		
—	—	ST7036	II D09・10	N13° W	側柱 ひさし 付?	坪掘	方形	(3間×3 間)	4.32	3.16 (4.53凸 さし付)	—	1.61 ~ 1.74	1.04 ~ 1.08	0.22 ~ 0.68	—	—		
—	—	ST7037	II D04・09	N18° W	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	4.20	3.96	16.63	1.49 ~ 2.30	1.96 ~ 2.02	—	—	—		

付表3

図版 番号	PL番号	遺構番号	地区	棟方向	構造		規模				柱間間隔(m)			柱六廻り方			重複関係 △(旧)▼(新)	その他
					形態	掘方	平面形	桁行×梁 行	桁行長 (m)	梁行長 (m)	面積(m <sup>2</sup> )	桁行	梁行	平面形	掘方深さ (m)	柱痕		
498	142-5,6	ST7038	II D09・14・15	N36° W	側柱	坪掘	長方形	2間×2間	6.47	4.55	29.44	3.13 ～ 3.27	2.02 ～ 2.53	凹形, 楕円形, 不 整形	0.30 ～ 0.68	円形	△SK7756△SB7007? △SB7020 △SB7054△SB7219 ▼SK7368▼SD7002	
499	142-7	ST7039	II D12・13・17・ 18	N26° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	3.94	3.62	14.26	1.71 ～ 2.18	1.40 ～ 1.81	凹形, 楕円形	0.48 ～ 0.71	凹形 楕円形	△SB7013 ▼SD6002▼SD7002▼SK7211 ▼SK7306▼SK7599	
500	—	ST7040	II D12・17	N25° W	総柱	坪掘	方形	2間×2間	4.47	4.27	19.04	1.97 ～ 2.58	1.87 ～ 2.46	凹形, 楕円形, 不 整形	0.55 ～ 1.01	円形	△SB7009△SB7012△SB7051 △SB7200△SK7202△SK7674? ▼SK7153▼SK7299▼SD6002	
502	—	ST7041	I X24・25, II D05	N67° E	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	—	3.50	—	1.20 ～ 1.72	1.65 ～ 1.84	円形	0.27 ～ 0.42	—	△SK7394	
501	—	ST7042	I Y17	N13° W	側柱	坪掘	長方形小	1間×1間	4.50	2.60	11.70	—	—	長方形, 不整方 形	0.60 ～ 0.76	—	△SB7032△SB7030	
502	142-8	ST8001	I S23・24	N24° W	側柱	坪掘	長方形	3間×2間	4.25	3.40	14.43	1.35 ～ 1.50	1.53 ～ 1.87	凹形, 楕円形, 不 整形	0.15 ～ 0.41	—	△SB88037△SK8065	
503	142- 9,10	ST8002	I S04・05	N83° E	側柱	坪掘	方形	2間×1間	3.11	2.96	9.18	1.43 ～ 1.68	2.79 ～ 3.12	凹形, 楕円形	0.49 ～ 0.69	凹形 楕円形	△SK7756△SB7007? △SB7020 △SB7054△SB7219 ▼SK7368▼SD7002	
503	143-1,2	ST8004	I T03・04・09	N25° W	側柱	坪掘	方形	2間×1間	3.64	3.42	12.43	1.72 ～ 1.93	3.38 ～ 3.45	凹形, 楕円形	0.24 ～ 0.50	—	△SB88003△SB88005 ▼SB7059▼SB88004▼SD7001 ▼SD88006	ST8003を統合
504, 505	143- 9-8	ST8006	I X03・04・08・ 09・14	N38° W	側柱・ 束柱	坪掘	長方形	5間×2間	12.95	5.04	65.27	1.63 ～ 2.84	2.09 ～ 2.82	楕円形, 長方形, 隅丸長方形	0.38 ～ 1.02	凹形 楕円形	△SB88003△SB88005 ▼SB7059▼SB88004▼SD7001 ▼SD88006	ST8003を統合

付表4 弥生時代後期土器一覽(報告書掲載分)

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考				
			地区	遺構・地点						注記番号 (所属遺構・地点名は省 略)	省	口径cm	底径cm								器高cm	重量g	肩部 最大径cm	
6	-	01466	1-2	SB0002	北No.3	弥生後期	弥生土器	台付甕	台部	10%	-	8.0	(6.0)	120.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/6 橙	混入少なめ	良好	縁ミガキ	底縁斜ミガキ、脚台部 横ミガキ	-		
6	-	01467	1-2	SB0002	北No.1上	弥生後期	弥生土器	台付甕	台部	10%	-	7.2	(5.0)	95.0	-	7.5YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR7/6 橙	径1mmの礫	良好	縁ミガキ、斜ハケ 横ナデ	底縁斜ミガキ、脚台部 横ナデ	-		
6	-	01469	1-2	SB0002	床	弥生後期	弥生土器	壺	胴上半部	5%	-	-	(5.0)	33.0	-	10R5/8赤 橙	7.5YR6/6 橙	白色粒混	良好	斜筋突指縹唐文 ハケナデ	ハケナデ	外面		
6	-	01470	1-2	SB0002	-	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	-	-	(3.7)	12.0	-	10R4/8赤 橙	10R4/8赤 橙	白色粒混	良好	口縁部縹波状文	-	内外面		
6	165	01471	1-2	SB0002	No.4、北東	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	50%	<14.8>	<4.3>	7.2	153.0	-	10R3/6暗 赤	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	脚部縹ミガキ、底面縹 耗	縹ミガキ	内外面		
6	-	01472	1-2	SB0002	No.8、北東、北東区炭層、東 西T	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～脚 下半部	40%	<16.8>	-	(6.7)	88.0	-	10R6/8赤 橙	10R5/8赤 橙	径1mm以下 の礫混	良好	縹ミガキ	縹ミガキ	内外面	口縁部2孔1対 の孔(割れた方 は孔の中も赤彩 が観察される)	
6	165	01473	1-2	SB0002	北西No.1、床上	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	40%	<19.6>	5.0	12.9	336.0	-	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR6/6 橙	白色粒混	良好	ナデ後縁ミガキ、底面 ナデ	口縁部ナデ、脚部横ナ デ、縹ミガキ	-		単孔
6	165	01474	1-2	SB0004	No.10、北東	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～頸 部	30%	<17.9>	-	(10.5)	417.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/6 橙	白色粒少し 混	良好	口縁部縹波状文 一輪縹波状文	口縁部ナデ、脚部横ナ デ、縹ミガキ	-		
6	165	01475	1-2	SB0004	No.15、No.16、No.17、No.18、No. 20、床下、南東区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～脚 下半部	30%	<23.1>	-	(26.8)	959.0	<27.4>	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	口縁部縹波状文 一輪縹波状文	口縁部縹ハケ後縹ミガ キ、脚部縹ミガキ	-		
6	-	01476	1-2	SB0004	No.2、No.11	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～脚 上半部	20%	<21.5>	-	(18.0)	449.0	<25.9>	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	口縁部縹波状文 一輪縹波状文	斜ハケ後縹ミガキ	-		
6	165	01477	1-2	SB0004	No.17、北東	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～脚 上半部	30%	<14.7>	-	(9.5)	100.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙	7.5YR5/4 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	口縁部縹波状文 一輪縹波状文(1.3本)	縹ミガキ	-		
6	165	01478	1-2	SB0004	No.19	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴上 半部	30%	-	-	(17.3)	1808.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	斜筋縹ナデ→縹縹 羽状文、脚部縹ミガキ	横ハケナデ	外面	内面一部縁付 着	
6	-	01479	1-2	SB0004	No.6	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	20%	<14.1>	<4.5>	6.2	69.0	-	10R4/6 赤、 10YR8/4 浅黄橙	10R4/6赤 橙	白色粒混	良好	縹ミガキ、底面ナデ	口縁部縹ミガキ、脚部 斜ミガキ	内外面		
6	165	01481	1-2	SB0007	No.10、北東区、ク	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～脚 上半部	40%	14.8	-	(10.8)	298.0	-	7.5YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	脚部縹波状文→縹 縹波状文	縹ミガキ	-		
6	-	01483	1-2	SB0007	No.2、No.30、No.31	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	60%	11.9	4.8	5.3	128.0	-	10R3/6暗 赤	10R3/6赤 橙	白色粒混	良	脚部縹ミガキ、底面ミ ガキ	脚上半部脚離、脚下半 部縹ミガキ、底面ミ ガキ	内外面		
6	165	01484	1-2	SB0007	北西区、床	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	60%	13.0	4.1	6.3	155.0	-	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	白色粒混	良好	脚部縹ミガキ、底面ミ ガキ	脚部縹ミガキ、底面ミ ガキ	内外面	口辺部2孔1対 の孔	
6	-	01485	1-2	SB0007	北西区	弥生後期	弥生土器	甗	底部	5%	-	<3.6>	(3.0)	19.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	ナデあり	横ハケナデ	-		単孔
7	-	01459	1-2	SB0007	No.18、No.19、No.20、No.21、東 西T、北東区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～脚 下半部	80%	19.7	-	(19.3)	895.0	-	10YR4/2 灰黄橙	10YR4/1 灰黄橙	白色粒混	良好	口縁部縹縹縹羽 状文(9本)→縹縹縹羽 状文(10本)	縹ミガキ	-		
7	-	01460	1-2	SB0007	No.4、No.5、No.8、No.56、No.59、 No.69、南西北北、東西T、北 東区、南東区、南西区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	30%	<20.0>	<6.5>	27.0	988.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	口縁部縹縹縹羽 状文→縹縹縹羽 状文(10本)	口縁部縹ミガキ、脚部 ナデ	-		
7	165	01462	1-2	SB0007	No.3、No.22、Pit11、南西区、南 西北北、SK05西區	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	30%	<17.5>	<6.6>	23.3	337.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙、 10YR5/2 灰黄橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒混	良好	口縁部縹縹縹羽 状文→縹縹縹羽 状文	脚上半部縹、斜ハケナ デ後ナデ、脚中央、下 半部ナデ	-		折返口縁

付表 4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								重量g
7	165	01571	1・2	SB0007	No.42, No.46, 北西区, SK32 No.1	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴部	20%	-	-	781.0	-	7.5YR7/4 灰黄橙	7.5YR7/8 黄橙	-	斜ハケ	-	-		
7	165	01480	1・2	SB0011	No.7	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	95%	10.3	4.4	310.0	-	10YR7/3 にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄	-	胴上半部縦ミガキ、胴下半部縦ミガキ、底面ミガキ	-	-	小型	
7	-	01482	1・2	SB0011	西床	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	10%	-	-	42.0	-	7.5YR7/4 にぶい黄	7.5YR7/4 にぶい黄	-	横ミガキ	-	-	折返口縁	
7	-	01484	1・2	SB0011	北西区カ'	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	10%	-	-	80.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄	7.5YR6/4 にぶい黄	-	-	-	-	-	
7	-	01485	1・2	SB0011	炉, 南東区, 南西区, 南西区カベ	弥生後期	弥生土器 甕	頸部	20%	-	-	582.0	-	10YR7/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	-	横・斜ミガキ	-	-	-	-
7	165	01487	1・2	SB0011	炉	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	40%	28.0	-	972.0	-	10R4/8赤	10R4/8赤	-	横ミガキ	内外面	-	-	
7	165	01488	1・2	SB0011	No.18	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	40%	<15.1>	<7.0>	158.0	-	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	-	ケズリ後横ミガキ、磨耗	内外面	-	底面赤彩磨耗	
7	166	01551	1・2	SB0015	No.26, 北西区, ケ	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	30%	13.4	-	229.0	-	7.5YR6/4 灰褐	7.5YR6/4 灰褐	-	口辺部・胴部描述状文一横描筆状文、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	-	-
7	-	01558	1・2	SB0015	No.23, Pt.3, 南西区	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	10%	-	-	283.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	-	杯部横ミガキ、脚部縦ミガキ	杯部横ミガキ	杯部内外面, 脚部外面	-	-
7	166	01559	1・2	SB0015	No.34, Pt.1, 床下	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～胴部	80%	<27.5>	-	856.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	-	口縁部横ミガキ、胴部横ミガキ	横ミガキ	内外面	-	-
7	166	01560	1・2	SB0015	No.29, No.30, No.40, No.45, No.46	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	50%	<17.7>	5.0	292.0	-	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	-	胴部斜ノケ後横ミガキ、胴下半部縦ミガキ、底面ナデ	胴部横ミガキ、底面ナデ	内外面 (磨耗)	-	-
7	166	01561	1・2	SB0015	No.21, 北東, ケ	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	50%	<11.6>	<3.4>	74.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	-	胴部横ミガキ、底面ミガキ	胴部横ミガキ、底面ミガキ	内外面	-	底面一部赤彩付着
8	-	01550	1・2	SB0015	No.18, No.38, No.39, 南東区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	20%	<15.7>	-	306.0	-	7.5YR2/1 黒	7.5YR2/1 黒	-	胴部横描波状文一横描筆状文、口辺部節	横ミガキ	-	-	-
8	-	01552	1・2	SB0015	No.16, No.17, 南東区, 南西区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	20%	<13.0>	-	165.0	<13.6>	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	-	胴部横描波状文一横描筆状文、口辺部節	口辺部横ミガキ、胴部ハケ後横ミガキ	-	-	-
8	-	01553	1・2	SB0015	No.35, SB15・38床下	弥生後期	弥生土器 甕	胴部～底部	30%	-	6.7	350.0	<13.3>	7.5YR7/3 にぶい黄	7.5YR7/3 にぶい黄	-	胴中央部横描波状文、胴下半部縦ミガキ	横・斜ミガキ	-	-	内面に赤彩の付着あり
8	166	01426	1・2	SB0017	No.17	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴下半部	90%	19.0	-	1190.0	18.4	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	-	口縁～胴中央部横描波状文(7本)、胴下半部縦ミガキ	ハケ後横ミガキ	-	-	-
8	-	01427	1・2	SB0017	No.14, 下層	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～底部	50%	-	8.7	816.0	<19.1>	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	-	胴中央部横描波状文(12本)、胴下半部縦ミガキ、底面横ミガキ、底面木葉痕	胴部横ミガキ、底面ナデ	-	-	胴部輪積痕
8	-	01428	1・2	SB0017	No.29	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴上半部	60%	20.4	-	1225.0	21.1	7.5YR7/4 にぶい黄	7.5YR7/4 にぶい黄	-	口縁～胴部横ミガキ、胴上半部ナデ、胴部斜ハケ後横ミガキ	口縁～胴部横ミガキ、胴上半部ナデ、胴部斜ハケ後横ミガキ	-	-	-
8	166	01429	1・2	SB0017	No.18, No.30, T, SE23床下	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	<14.3>	5.9	552.0	-	7.5YR5/3 にぶい黄	7.5YR5/3 にぶい黄	-	口縁部ナデ、口辺部・胴部横描波状文(口辺部13本)、胴下半部縦ミガキ	胴部横ミガキ、底面ナデ	-	-	-

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm							
8	167	01431		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～胴 下半部	40%	<25.0>	-	(39.2)	1511.0	<27.7>	10R4/6 赤、 10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	頸部輪廓状文、胴 上半部輪廓状文、 口縁部・胴下半部縦 ミガキ、口縁部・体部横 ミガキ	口辺～頸部磨耗、胴 部ハナナデ、磨耗	口辺部 内外面、 胴上中央 ～中央 部外面、 頸部内 面	
8	-	01438		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	19.6	(12.2)	673.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	横ハケ	横ハケ	外面	
8	166	01441		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	40%	13.6	5.2	7.4	197.0	-	10R4/6赤	石英 混	良好	横ミガキ、底面ナデ	横ミガキ一部磨耗	内外面	
8	166	01442		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	30%	<19.8>	5.8	9.6	207.0	-	10R4/6赤	混入少なめ	良好	脚部横ナデ・斜ミガキ、 底面ナデ	横ミガキ	内外面	底面赤彩一部 残る
8	166	01443		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	30%	<23.9>	5.2	12.5	504.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	脚部横ミガキ、底面ナ デ	横ハケ後横ミガキ	-	単孔
9	166	01432		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～胴 上半部	20%	<19.8>	-	(16.7)	349.0	-	10R4/4赤 褐、 7.5YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	口縁部・口辺下半部横 ミガキ、口辺部・脚部縦 ミガキ、頸部輪廓線 ～胴部輪廓線 文→輪廓垂下文	口辺部 内外面、 胴部外 面		
9	166	01433		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	(14.3)	447.0	-	10R5/6 赤、 7.5YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	頸部輪廓羽状文、 口辺部・胴部磨耗	口辺部横ミガキ、脚部 磨耗	内外面、 胴部外 面	
9	-	01434		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	20%	-	7.6	(12.2)	590.0	-	10YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	胴中央部縦ミガキ、 胴下半部縦ミガキ、底 面ナデ	胴下半部縦ハケ、底部 ナデ	胴中央 部外面	
9	167	01436		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	50%	-	14.7	(17.3)	2307.0	<43.4>	2.5Y7/4 浅黄	赤褐色粒 混	良	胴下半部・底下半部横 ミガキ、底上半部縦 ミガキ、底上半部縦 ミガキ、底面ナデ	胴部輪廓、底面ミガキ	胴部外 面	
9	-	01437		1・2 SB0017	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸 部	10%	<13.8>	-	(8.6)	249.0	-	7.5YR7/6 橙	径1mm以下 の鐵屑	良好	横ハケ後ナデ	横ハケ後ナデ	-	頸部輪廓痕
9	167	00009		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	70%	9.4	4.2	11.4	319.1	9.5	5YR7/8橙	白色粒 混	良好	口縁～胴上半部輪廓 波状文、胴中央部縦 ハナ、胴下半部縦ミ ガキ	横ミガキ、工具によるナ デ	内外面	小型
9	-	01495		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 部	20%	15.7	-	(8.3)	254.0	-	10YR4/2 灰黄褐	白色粒 混	良好	口縁部・胴部輪廓波状 文→輪廓状文	口縁～頸部縦ミガキ、 胴上半部縦ミガキ	-	-
9	167	01497		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 部	70%	9.6	-	(9.0)	256.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口辺部ナデ、頸部輪 廓状文(5本)→頸部 輪廓状文(7本)、胴上 半部輪廓状文(3本)、 胴中央部縦 ミガキ	横ミガキ	-	小型、輪廓痕、 口辺部内面赤 彩少し付着
9	-	01498		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 甗	頸部～底部	70%	-	4.5	(11.0)	261.0	9.6	7.5YR5/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	胴上半部輪廓波状文 (7本)→輪廓波状文(7 本)、胴下半部縦ミガ キ、底面ミガキ	胴部横ハケ後横ミガ キ、底面ミガキ	-	小型
9	-	01499		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 上半部	20%	<10.9>	-	(5.3)	68.0	-	7.5YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口辺部・胴部輪廓羽 状文→輪廓状文	横・斜ミガキ	-	小型
9	167	01511		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 無頸壺	口縁部～胴 部	30%	<10.1>	-	(4.3)	143.0	-	2.5YR5/6 明赤褐	白色粒 混	良	横ミガキ、刺離	横ミガキ	外面	口縁部2孔対 の孔
9	-	01512		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	<17.2>	(14.0)	554.0	-	10R3/6暗 赤	白色粒 混	良好	接合部・裾部縦ミガキ、 脚部縦ミガキ	脚部横ナデ、裾部刺 離	脚部外 面、底 部内面	-
9	-	01513		1・2 SB0019	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	10%	<28.7>	-	(5.8)	133.0	-	10R4/8赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	横ミガキ	内外面	口唇部突起



図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								
11	168	01503	1・2	SB0019	No.79 No.112, No.117, No.129, 北西区, 中砂ノ北, 北西区, 北北西外	弥生後期	弥生土器	壺	口辺部~胴部	30%	-	-	-	10YR6/4 にごい黄 10R4/8赤	10YR6/4 にごい黄 10R4/8赤	白色粒・赤色粒混	良好	頸部描線文(3本3段), 口辺部縦ミガキ, 胴部縦ミガキ	口辺~頸部剥落, 一部ハケ残る	口辺部, 内外面, 胴部外面(内面剥離)	頸部内面赤彩付着
11	-	01505	1・2	SB0019	炉1	弥生後期	弥生土器	壺	胴下半部~底部	20%	-	8.0	-	5YR5/8明赤 10R4/8赤	2.5Y8/3 淡黄	白色粒混	良好	胴中央部斜ハケナデ, 胴下半部縦ハケナデ	胴中央部外面	胴中央部外面	
11	-	01506	1・2	SB0019	炉1	弥生後期	弥生土器	壺	胴部~底部	20%	-	10.5	-	10YR7/4 にごい黄 10R4/8赤	10YR7/4 にごい黄 10R4/8赤	白色粒混	良好	胴下半部ハケナデ後縦ミガキ, 底面ナデ	斜ハケナデ, 底面ナデ	胴中央部外面	
11	-	01508	1・2	SB0019	No.133炉2	弥生後期	弥生土器	壺	胴部~底部	20%	-	10.6	-	10YR7/4 にごい黄 10R4/8赤	10YR7/2 にごい黄 10R4/8赤	白色粒・黒色粒混	良好	胴部縦ミガキ, 底部横ミガキ, 底面ミガキ	胴部横ミガキ, 底部ナデ	-	底部焼成後穿孔, 胴下半部内面煤付着
11	168	01330	1・2	SB0024	SB45 PH1 No.1	弥生後期	弥生土器	高杯	口縁部~脚部	80%	<9.6>	<7.5>	-	5YR6/3 にごい黄 10R4/6赤	5YR6/3 にごい黄 10R4/6赤	白色粒・赤褐色粒混	良	杯上半部横ミガキ, 口辺部縦ミガキ, 胴下半部縦ミガキ, 裾部縦ミガキ, 裾部剥離	杯上半部横ミガキ, 口辺部縦ミガキ, 胴下半部縦ミガキ, 裾部縦ミガキ, 裾部剥離	杯部内外面, 脚部外面(裾部剥離)	-
11	-	01331	1・2	SB0024	-	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部~底部	20%	<14.6>	<5.0>	7.5	10YR7/4 にごい黄 10R4/6赤	10YR7/4 にごい黄 10R4/6赤	白色粒やや多い	良好	横ミガキ, 底面ナデ	横ミガキ, 底部剥離	外面, 胴部内面	-
11	-	01332	1・2	SB0024	SB45 No.2	弥生後期	弥生土器	壺	胴下半部~底部	20%	-	<4.1>	-	10YR7/4 にごい黄 10R4/6赤	10YR7/4 にごい黄 10R4/6赤	白色粒やや多い	良好	斜ミガキ, 底面ナデ	ナデ, 斜ミガキ	外面	小型
11	168	01333	1・2	SB0024	SB45 No.1	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部~底部	100%	8.4	4.2	3.9	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	白色粒少し混	良	胴部横ミガキ, 底面ナデ	胴部横ミガキ, 底面ナデ	内外面(剥離・磨耗あり)	小型
11	-	01414	1・2	SB0025	-	弥生後期	弥生土器	甕	頸部~胴上半部	20%	<15.0>	-	(12.3)	7.5YR7/6 黄	7.5YR7/6 黄	白色粒混	良好	横ミガキ	横ミガキ	-	-
11	-	01416	1・2	SB0025	No.2, 南北T, 西区, 床, 東区, 床, 西区床, 八	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部~胴部	40%	<19.3>	-	(12.4)	10YR8/3 淡黄	10YR8/3 淡黄	白色粒混	良好	口縁部~頸部横ミガキ, 胴部斜ミガキ	口縁部~頸部横ミガキ, 胴部斜ミガキ	-	口縁部内面の一部赤彩付着
11	-	01418	1・2	SB0025	南北T, 八	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部~胴上半部	10%	<15.0>	-	(7.7)	7.5YR7/3 黄	7.5YR7/3 黄	白色粒混	良好	横ミガキ	横ミガキ	-	-
11	-	01423	1・2	SB0025	ケ	弥生後期	弥生土器	甕	頸部~胴下半部	20%	-	(8.1)	51.0	10YR6/6 明黄	10YR6/6 明黄	白色粒混	良	頸部剥離	頸部剥離	胴部外面	小型, 内面赤彩付着
11	-	01424	1・2	SB0025	東区床	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部	20%	-	(ツマミ部) 3.2	(2.6)	10YR3/1 黒	10YR3/1 黒	白色粒混	良好	天井部・ツマミ部指圧痕, 体部ナデ, ミガキ	天井部指圧痕あり, 天井部ナデ後ミガキ	-	天井部後から貼り合わせた跡あり
12	169	01415	1・2	SB0025	No.2, 西区, 上層	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部~底部	70%	<19.7>	7.4	30.0	10YR7/4 にごい黄 10YR5/2 灰黄	10YR7/4 にごい黄 10YR5/2 灰黄	白色粒混	良好	口辺部縦羽状文(6本)~胴部縦羽状文(6本), 胴下半部縦ミガキ, 底面ナデ	胴部ハケ後横ミガキ, 底面ナデ	-	-
12	-	01420	1・2	SB0025	No.7	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部~頸部	5%	<25.7>	-	(11.6)	10R5/6赤	10R5/6赤	赤褐色・白色粒混	良好	頸部描線文, 口縁部, 口辺下半部横ミガキ, 口辺部縦ミガキ	横ミガキ	口辺部, 内外面	-

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	底径cm	器高cm	重量g							
12	-	01421	1・2	SE0025	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	30%	-	11.0	(13.2)	1332.0	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR6/2 灰黄褐	白色粒 混	良好	10YR6/2 にぶい黄 橙	脱落・磨耗	-	外面ミガキの一 部に赤彩付着
12	168	01280	1・2	SB0026	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	20%	<30.9>	-	802.0	10R6/6赤 7.5YR7/4 にぶい橙	10R5/6赤	白色粒 混	良好	10R6/6赤 7.5YR7/4 にぶい橙	横ミガキ・剥離	口縁部 外面、内 面		
12	-	01281	1・2	SB0026	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	5%	-	<12.3>	290.0	10YR6/4 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	10YR6/4 にぶい黄 橙	斜ハケ、剥離	-	外面赤彩ハ ケ	
12	-	01386	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 高杯	脚上半部	20%	-	-	282.0	10R5/8 7.5YR7/3 にぶい橙	10R5/8 7.5YR7/3 にぶい橙	白色粒少な め	良好	10R5/8 7.5YR7/3 にぶい橙	杯部ミガキ、脚部横ハ ケ	杯部内 外面、脚 部外面		
12	-	01393	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	底部	10%	-	4.7	81.0	7.5YR7/6 にぶい橙	7.5YR7/6 にぶい橙	白色粒 混	良好	7.5YR7/6 にぶい橙	横ミガキ	-	単孔	
12	169	01396	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	60%	<16.0>	<5.4>	579.0	10YR5/3 にぶい黄 褐	10YR6/2 灰黄褐	白色粒 混	良好	10YR6/2 にぶい黄 褐	口縁部・胴部縮描波状 文(9本)・胴部縮描波状 文(12本)、胴下半部縦ミ ガキ、底面ミガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	-	
12	-	01397	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 上半部	20%	<18.4>	-	177.0	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	黒色粒 混	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部・胴上半部縮描 波状文・縮描波状文	横ミガキ	-	
12	169	01398	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	80%	12.4	4.7	446.0	7.5YR6/1 褐灰	5YR6/4に ぶい橙	白色粒 混	良好	7.5YR6/1 褐灰	口縁～胴中央部縮描 波状文(7本)、胴下半 部縦ミガキ、底面ミガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	-	
12	-	01399	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	40%	10.6	4.6	174.0	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部縮描波状文→ 縮描波状文(12本)・胴 部縮描波状文、胴下 半部縦ミガキ	横・斜ハケ後ナデ	-	
12	-	01405	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	20%	-	5.4	110.0	7.5R4/8 赤	2.5YR5/4 にぶい赤 褐	白色粒 混	良好	7.5R4/8 赤	横ミガキ	内外面		
12	169	01408	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	40%	26.1	-	996.0	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/3 浅黄褐	径1mm以下 の塵 混	良好	10YR8/3 浅黄褐	横ミガキ	横ミガキ、底面ナデ	外面、杯 部内面	割れ口滑らか
12	-	01409	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	10.0	194.0	2.5YR6/6 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒・角 閃石 混	良	2.5YR6/6 にぶい橙	縦・斜ミガキ、磨耗	斜ハケ	外面	
13	169	01400	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 上半部	20%	<14.8>	-	193.0	10YR6/4 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	10YR6/4 にぶい黄 橙	縮描波状文→口縁部・ 胴部縮描波状文→口 唇部ナデ	横ミガキ	-	
13	169	01401	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	60%	24.9	9.5	34.5 2052.0	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	10YR7/4 にぶい黄 橙	口縁部縮描羽 状文(9本)・縮描波状 文(9本)、口唇部刻み、 胴下半部縦ミガキ、底 部縮描波状文、底 部・底面ナデ	口縁部縮描羽 状文(9本)・縮描波状 文(9本)、口唇部刻み、 胴下半部縦ミガキ、底 部縮描波状文、底 部・底面ナデ	口縁部 外面、内 面(内面 剥離)	折返口縁、胴下 半部内面煤付 着
13	169	01403	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸 部	30%	<28.7>	-	1419.0	10R4/6 赤	7.5YR4/2 灰褐、 10R4/6赤	白色粒・黒 色粒 混	良	7.5YR4/2 灰褐、 10R4/6赤	口縁部縮描ミガキ、口 縁部縮描ミガキ、頸部 横線文・縮描垂下文	口縁部縮描ミガキ、口 縁部縮描ミガキ	口縁部 外面、内 面(内面 剥離)	垂下文2本1組 で4単位
13	-	01406	1・2	SB0027	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	30%	-	9.9	1594.0	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	10YR7/4 にぶい黄 橙	胴下半部縦ミガキ、底 部縮描波状文	横ハケ	-	
13	169	01373	1・2	SB0030	弥生後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	60%	17.5	-	593.0	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	白色粒 混	良好	7.5YR5/4 にぶい褐	口縁部縮描波状 文(6本)・胴下半部縦ミ ガキ	口縁部縮描ハケ後 ナデ、胴部縮描ハケ後 縦ミガキ	-	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号・地点名は省略	口径cm	底径cm	器高cm							
13	-	01374	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	30%	<21.2>	-	339.0	-	7.5YR4/3 褐	10YR8/4 浅黄橙	白色粒 混	良好	口辺部・胸部縮描波状文→縮描縹文、口縁部縮文	-	ナデ後横ミガキ、胴部縮描波状文→縮描縹文
13	170	01375	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	30%	<15.6>	-	246.0	-	7.5YR7/4 灰褐	7.5YR6/2 灰褐	白色粒 混	良好	口辺部・胸部縮描波状文→縮描縹文	-	口辺部横ミガキ、胴部縮描波状文→縮描縹文
13	-	01378	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	20%	7.4	-	23.0	-	7.5YR6/4 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	白色粒 混	良好	口辺部・胸部縮描波状文→縮描縹文	-	横ミガキ
13	-	01379	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	20%	<7.0>	-	28.0	-	10YR3/1 黒褐	10YR2/2 黒褐	角閃石 混	良好	口辺部縮描波状文、胴部縮描波状文	-	横ナデ後ミガキ
13	169	01388	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	片口鉢	口縁部～底部	100%	14.7	3.3	253.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、胴部縮描波状文	-	横ミガキ
13	169	01389	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	60%	16.2	5.0	248.0	-	10R4/8赤、 10YR8/4 浅黄橙	10R4/8赤、 10YR8/4 浅黄橙	白色粒 混	良	ナデ後横ミガキ、底部縮描縹文	-	横ミガキ、底部縮描縹文
13	-	01390	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	60%	<14.5>	4.2	148.0	-	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	胴部横ミガキ、底面ミガキ	-	胴上半部横ミガキ、胴下半部横ミガキ
13	-	01391	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	50%	<16.4>	5.8	201.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒 混	良好	横ミガキ、底面ミガキ	-	胴部横ミガキ、底面ミガキ
13	169	01392	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	80%	18.4	<4.0>	353.0	-	10YR7/6 明黄橙	10YR7/6 明黄橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	口辺部横ミガキ、胴部縮描縹文
14	-	01372	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	50%	<22.2>	7.2	830.0	<22.8>	10YR5/4 灰	10YR7/3 黄	白色粒 混	良好	口縁部縮描波状文→縮描縹文、胴部縮描波状文、胴下半部横ミガキ、底面ミガキ	-	横ミガキ
14	-	01377	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	160.0	-	10YR7/6 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	白色粒 混	良好	口縁部・胴上半部縮描縹文	-	横ミガキ
14	170	01380	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～胴上半部	50%	24.5	-	1580.0	<27.1>	10R3/6暗赤	10YR7/3 黄	径2mm以下の白色粒 混	良好	頸部縮描縹羽状文、口縁部・胴部横ミガキ、胴部縮描縹文、胴部縮描縹羽状文	-	口辺部横ミガキ、頸部・胴中央部横ミガキ、胴上半部横ミガキ、胴部縮描縹羽状文、胴部縮描縹文
14	170	01381	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	壺	胴下半部～底部	50%	-	14.8	3040.0	-	10YR7/4 赤	10YR7/4 赤	白色粒 混	良	胴部縮描縹羽状文、胴下半部横ミガキ、胴部縮描縹文	-	胴部縮描縹羽状文
14	-	01382	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	10%	-	-	610.0	-	10R5/6赤、 10YR8/3 浅黄橙	10R5/6赤、 10YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、頸部縮描縹羽状文、縮描縹文、胴部横ミガキ	-	胴部縮描縹羽状文、胴部縮描縹文
14	170	01383	1-2	SB0030	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴下半部	60%	-	-	380.0	12.7	10R4/8赤	7.5YR7/3 黄	白色粒 混	良	頸部縮描縹文、口縁部・胴部横ミガキ	-	口辺部横ミガキ、胴部縮描縹羽状文、口縁部・胴部縮描縹文
15	17	01527	1-2	SB0033	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～頸部	30%	20.6	-	670.0	-	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	径1～2mmの白色粒 多く 混	良好	口辺部・胴部縮描波状文→縮描縹文、口縁部・胴部縮描縹文	-	横ミガキ
15	170	01528	1-2	SB0033	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴部	40%	14.9	-	577.0	15.7	7.5YR6/6 赤	7.5YR6/6 赤	赤褐色粒 混	良好	口唇部横ミガキ、口縁部・胴部縮描縹羽状文	-	横ミガキ
15	17	01530	1-2	SB0033	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20%	<24.7>	-	716.0	-	10R6/6赤、 7.5YR7/4 黄	10R6/6赤、 7.5YR7/4 黄	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、口縁部縮描縹羽状文	-	口辺部横ミガキ、口縁部縮描縹羽状文、胴部縮描縹文
15	171	01531	1-2	SB0033	弥生後期	弥生土器	壺	胴部～底部	40%	-	9.8	1870.0	-	10YR6/4 黄	10YR7/4 黄	白色粒 混	良好	胴中央部横ミガキ、胴部縮描縹羽状文、胴下半部横ミガキ、胴部縮描縹文	-	胴中央部横ミガキ、胴部縮描縹羽状文、胴下半部横ミガキ

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点						注記番号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								重量g
15	17	01532	1・2	SB0033	No.19,東区,東西T,北西区, SE34北東区床下, SE34東区床下, SE34東区床下, SE35No.11,SB35床下	弥生 後期	弥生土器 壺	頸部～底部	60%	-	5.5	(12.6)	294.0	10.0	7.5YR5/4 にぶい,濁	白色粒 混	良好	胴部横ナズ、底面ミガキ	口辺部 内面、胴 部外面		
15	171	01533	1・2	SB0033	No.40	弥生 後期	弥生土器 壺	頸部～底部	80%	-	6.5	(30.8)	2400.0	20.2	10YR7/2 にぶい,黄 橙	白色粒 混	良	横ナズ	-	胴下半部被熱 のため赤化、 粘土組織	
15	-	01536	1・2	SB0033	No.38, No.43, No.44, 北西区	弥生 後期	弥生土器 鉢	口縁部～胴 部	30%	25.3	-	(11.2)	565.0	-	10R4/8 赤、 10YR7/3 にぶい,黄 橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面		
15	-	01537	1・2	SB0033	No.41, Pt.16, 南西区	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	40%	<18.5>	5.6	12.1	280.0	-	10YR7/3 にぶい,黄 橙	白色粒 混	良好	ハケナズ後横ミガキ、 底面ミガキ	-	単孔	
15	171	00025	1・2	SB0035	No.43	弥生 後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	90%	8.5	4.3	5.1	98.4	-	2.5Y6/3に ぶい,黄 橙	径1mm位の 小粒 混	良	口縁部ナズ、胴部縦 割(一部ミガキ)、底部 削り	口縁部ナズ、一部横ミガ キ、底部削り	-	小型、底部外面 黒
15	-	01547	1・2	SB0035	No.20, No.21, 南北へ南	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	30%	<22.5>	<5.0>	10.6	290.0	-	10YR7/2 にぶい,黄 橙	径1mm以下 の白色粒少 し 混	良好	斜ミガキ	-	単孔	
15	-	01548	1・2	SB0035	No.13	弥生 後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～体 部	20%	-	(ツマミ部) 3.8	(6.4)	128.0	-	7.5YR7/4 にぶい,橙	径1mm以下 の白色粒 混	良好	天井部ナズ、体部縦 割ハケ後ナズ	天井部横ハケ、一部横 ミガキ	-	天井部5孔か
15	171	01549	1・2	SB0035	No.1, No.3, No.6, 北東区, 南東 区	弥生 後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～極 部	20%	<24.7>	(ツマミ部) <5.2>	9.6	259.0	-	7.5YR6/3 にぶい,濁	径1～3mmの 疎 混	良好	ナズ、縦ミガキ	天井部ナズ、体部ナズ 斜ミガキ	-	天井部5孔(浅 存)
16	171	01538	1・2	SB0035	No.7, No.24, 南北へ南, 南東 区, 東西T	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	40%	14.6	-	(19.7)	381.0	<15.3>	10YR7/3 にぶい,黄 橙	径1mmの白 色粒 混	良好	斜ミガキ	-	輪積真	
16	171	01539	1・2	SB0035	No.22, No.33, No.34, 北東区, 南東区	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 部	50%	16.1	-	(15.5)	480.0	-	7.5YR6/4 にぶい,橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	-		
16	171	01540	1・2	SB0035	No.18, No.22, 南東区, SB34・ 35?	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	60%	11.8	5.4	11.9	348.0	-	7.5YR5/2 にぶい,橙	白色粒 混	良	胴部横ミガキ、底面ナ ズ	胴部横ミガキ、底面ナ ズ	-	
16	171	01543	1・2	SB0035	No.42, 戸	弥生 後期	弥生土器 甗	胴部～底部	40%	-	6.9	(18.5)	1045.0	-	10YR7/3 にぶい,黄 橙	径1mmの白 色粒 混	良好	横ミガキ	-	焼成後底部穿 孔、外面黒斑	
16	-	01544	1・2	SB0035	No.7, 北東区, SD02	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 部	10%	<15.4>	-	(8.9)	85.0	-	10R4/6 赤、 7.5YR5/4 にぶい,濁	径1mm以下 の白色粒多 く 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部 横ミガキ、胴部横 割ナズ	口縁部横ミガキ、胴 部ナズ	口辺部 内外面、 胴部外 面	
16	171	01545	1・2	SB0035	No.28	弥生 後期	弥生土器 壺	口縁部～頸 部	30%	18.0	-	(11.7)	533.0	-	10YR7/4 にぶい,黄 橙	黒色粒 混	良好	口縁部横ミガキ	-		
16	171	01782	1・3	SB0035	No.31, 北東区	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 部	50%	17.7	-	(14.0)	732.0	19.2	7.5YR3/1 黒褐	白色粒多く 混	良好	口縁部ハケ後横ナズ、 胴部ハケ後横ナズ、胴 部斜ハケ後横ナズ、 横割	口縁部ハケ後横ミガキ か、胴部横割前、横 割	-	
16	172	01282	1・2	SB0036	No.37, No.41, No.45, No.46, No. 47, No.50, No.51, No.52, No.56, No.61, No.71, No.74, カマツノ 72, B区	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	70%	18.2	-	(20.1)	878.0	18.7	10YR6/2 にぶい,黄 橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	-		

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	高さcm						
16	172	01283	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴下半部	60%	16.5	-	(15.4)	570.0	7.5YR5/3 にぶい	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	
16	-	01284	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	40%	13.5	-	(10.7)	251.0	7.5YR6/2 灰褐色	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	
16	-	01285	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	20%	<23.3>	-	(8.8)	212.0	5YR5/1褐 灰	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	
16	-	01287	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	<9.8>	-	(4.7)	32.0	10YR7/4 にぶい 黄 褐色粒・ 黒色粒 混	白色粒 混	良好	横ナデ	-	小型、粗製
16	172	01288	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	壺	胴上半部～底部	30%	-	6.6	(20.1)	792.0	7.5YR6/6 移(2.5YR 4/8赤)	白色粒 混	良好	胸中央部斜ヘケナデ、 胸下半部横ナデ	胸中央 部外面	外面底部意図的に赤彩を刷がしているが、口縁部21孔の孔
16	172	01283	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	80%	<21.4>	5.8	9.2	550.0	10R3/6暗 赤	混入少なめ	良好	横ミガキ	-	
16	172	01295	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～縁部	40%	<20.3>	(ツマミ部) 5.1	9.1	303.0	7.5YR6/6 灰褐色	白色粒 混	良好	ツマミ部指圧痕、体部 ナデ・縦・横ミガキ	-	天井部ナデ、体上半 部ナデ、体下半部横ミ ガキ
16	-	01296	1・2	SB0036	弥生後期	弥生土器	甕	底部	5%	-	<4.6>	(3.4)	39.0	5YR7/4に ぶい	白色粒 混	良好	縦・横・斜ミガキ、底面 ミガキ	-	単孔
17	-	01297	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	甕	胴下半部	30%	-	(17.8)	1745.0	7.5YR6/6 灰褐色	白色粒 混	良好	横ナデ、縦ミガキ、磨耗	-	内面縁付着	
17	172	01298	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴下半部	70%	11.6	-	(11.1)	281.0	10YR5/2 灰黄褐色	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	小型
17	-	01299	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	10%	<14.6>	-	(6.9)	66.0	7.5YR7/3 にぶい	白色粒 混	良好	横ナデ、縦ミガキ	-	
17	172	01304	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴上半部	30%	-	-	(18.5)	1103.0	10R5/6 赤 7.5YR7/3 にぶい	白色粒 混	良好	剥離	口辺部・ 胸部外 面	
17	-	01305	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴上半部	20%	-	-	(11.2)	461.0	10YR7/4 にぶい 黄 褐色 10R4/6赤	白色粒 混 (10R4/6赤)	良好	胸上半部横ヘケナデ	口辺部 内外面、 胸部外 面	頸部輪積痕
17	-	01306	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	甕	胴下半部～底部	40%	-	6.0	(11.6)	510.0	10YR5/2 灰黄褐色	白色粒・石 英・角閃石 混	良好	胸中央部、底面ミガキ、 胸下半部横ミガキ	胸中央部 外面	小型
17	-	01307	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	壺	胴下半部～底部	20%	-	9.3	(9.8)	623.0	10YR7/3 にぶい 黄 褐色	白色粒 混	良好	縦ミガキ、底面ナデ	-	剥離か、 赤彩は外面一 部に見られるの み
17	-	01308	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	20%	-	(11.4)	249.0	7.5YR6/4 赤、 7.5YR6/4 にぶい	白色粒 混	良好	横ミガキ	口辺・胸 部外面		
17	172	01315	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	40%	<31.0>	-	(10.7)	853.0	10R4/6赤 混	白色粒・石 英・角閃石 混	良好	斜ミガキ	外面、杯 部内面	
17	-	01317	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	20%	-	(3.8)	40.0	10YR7/4 にぶい 黄 褐色	白色粒 混	良好	横ミガキ	ハケナデ、底面工具に よる横ナデ	内面一部赤彩 付着	
17	-	01318	1・2	SB0041	弥生後期	弥生土器	片口鉢	口縁部～底部	90%	16.5	4.3	7.6	325.0	10R3/6暗 赤	径1mm以下 の黒 混	良好	横ミガキ、底面ミガキ	内外面 (底面剥 離)	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考		
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								重量g	胴部 最大径cm
17	-	01319	1-2	SB0041	No.68	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	100%	15.9	4.3	6.9	320.0	-	10R4/6赤	白色粒 混	良	脚部横ミガキ、底部削り後横ミガキ、底面ミガキ	口辺部横ミガキ、脚部剥離、底面ミガキ	内外面		
17	172	01320	1-2	SB0041	No.70	弥生後期	弥生土器 片口鉢	口縁部～底部	100%	15.9	4.6	6.8	271.0	-	10R3/4暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	横ミガキ	内外面	口縁部2孔1対の孔	
17	-	01322	1-2	SB0041	南西区	弥生後期	弥生土器 内湾鉢	口縁部～胴下半部	20%	<9.0>	-	(6.5)	49.0	<14.2>	7.5YR6/4にぶい橙	白色粒 混	良	横ミガキ、磨耗	横・斜ミガキ、磨耗	内外面	口縁部孔1対の孔、内湾	
17	172	01323	1-2	SB0041	北西区	弥生後期	弥生土器 片口土器	口縁部～底部	60%	<9.6>	5.2	10.8	221.0	<11.6>	10YR6/3にぶい黄	白色粒 混	良好	脚中央～底部縦ナデ、底面ナデ	口縁～胴下半部横ナデ、底部指さえ、底面ナデ	内外面		
17	-	01325	1-2	SB0041	南西区	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部	10%	-	(ツマミ部)<5.5>	(2.9)	47.0	-	10YR8/2にぶい黄	白色粒 混	良好	ナデ、横ミガキ	天井部ハナ、部部ナデ	-	天井部4孔	
17	-	01326	1-2	SB0041	南西区	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部	10%	-	(ツマミ部)<2.7>	(3.8)	21.0	-	5YR6/3にぶい橙	混入少なめ	良好	縦ミガキ、剥離	天井部・体上半部ナデ、体下半部横ミガキ	外面一部		
17	-	01327	1-2	SB0041	北東区、SB48・607	弥生後期	弥生土器 甕?	胴部	10%	-	-	(8.3)	36.0	-	5YR4/8赤	白色粒・角閃石 混	良	ミガキ	頸部ミガキ、脚部ナデ	内外面		
18	-	01258	1-2	SB0047	No.55、No.56、No.58、床、SB60 南北1、SB60東西1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	40%	14.7	-	(11.0)	343.0	-	7.5YR6/2にぶい黄	白色粒 混	良好	10YR5/3赤褐	口辺部、脚部横波状文(口辺部8本)→横波状文(8本)	横ミガキ	-	
18	-	01259	1-2	SB0047	No.23、No.24、No.25、No.30、SB48・60南北1	弥生後期	弥生土器 甕	胴上半部～底部	50%	-	6.3	(14.3)	484.0	17.2	7.5YR6/3にぶい黄	混入少なめ	良好	脚中央～底部横波状文(6本)、脚中央～下半部縦ミガキ、底部横ミガキ、底面ミガキ	脚中央～底部横ミガキ、底面ミガキ	-	輪積痕	
18	173	01261	1-2	SB0047	No.52、No.69、Pt.9	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴上半部	30%	16.5	-	(12.3)	346.0	-	4.5YR5/4にぶい黄	混入少なめ	良好	横波状文	横ミガキ	-		
18	173	01262	1-2	SB0047	No.10、No.58、No.60	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	80%	12.7	5.1	11.4	311.0	-	7.5YR6/2にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部、脚部横波状文(7本)→横波状文(11本)、胴中央～下半部縦ミガキ、底面ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	-	小型	
18	-	01263	1-2	SB0047	No.12、No.16、7、SB66S区上層、SB66ST	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	20%	<24.9>	-	(5.5)	296.0	-	10YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部横波状文→口縁部横波状文	横ミガキ	-	折返口縁	
18	173	01264	1-2	SB0047	炉	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～底部	80%	<19.3>	8.9	35.5	2392.0	<24.0>	10YR6/4にぶい黄	角閃石 混	良好	頸部横波状文→横波状文、脚部横ミガキ、磨耗、底面ナデ	口縁部横ミガキ、脚部横ナデ	-		
18	-	01266	1-2	SB0047	炉	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	30%	-	12.4	(13.5)	1304.0	-	10YR8/3にぶい黄	白色粒 混	良	脚下半部縦ミガキ、底部削り後ナデ	脚下半部横・斜ミガキ、底面ナデ	-		
18	-	01267	1-2	SB0047	No.21、No.45、No.46、No.50、Pt.3	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～胴上半部	20%	-	-	(13.1)	342.0	-	10R4/6赤	白色粒 混	良	脚上半部横波状文→横波状文、脚中央部ミガキ、磨耗	横・斜ナデ	口辺部内外面(内面剥離)、胴部外面		
18	-	01268	1-2	SB0047	Pt.8、SB36N.29、SB36B区、SB36床、SB36床西、SB36北西、SB36・47・35	弥生後期	弥生土器 壺	口辺部～胴上半部	20%	-	-	(14.1)	382.0	-	10YR6/4にぶい黄	白色粒 混	良好	頸部縦横波状文→凹形窪文、口辺部縦ミガキ、胴部横ミガキ	口辺部横ミガキ、脚部横ナデあり	口辺部内外面、胴部外面		
18	173	01269	1-2	SB0047	Pt.8、N.23、B区、床、床西、北西、ク	弥生後期	弥生土器 有段口縁壺	口縁部	5%	-	-	-	14.0	-	10R5/6赤	径2mmの白色粒 混	良	口縁部ナデ、口辺部横ミガキ	横ミガキ	内外面		
18	173	01274	1-2	SB0047	No.7	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	90%	13.0	3.9	5.7	163.0	-	7.5R4/6赤	白色粒 混	良	脚部横ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	全面(剥離)		
18	173	01277	1-2	SB0047	No.67、No.71	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	90%	18.0	6.9	21.3	1088.0	-	10YR6/2にぶい黄	白色粒 混	良好	口唇部ナデ、口辺部・脚部横波状文(7本)→横波状文(12本)、胴下半部縦ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	-		

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g							
18	-	01279	1・2 SB0047	戸 SB26F	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	20%	-	13.5	(11.0)	896.0	5YR6/6橙 ぶい橙	5YR6/4に ぶい橙	白色粒 混	良好	胴部横ハケナデ、底面ナ ナデ	胴部横ハケナデ、底面 ナデ	-		
18	173	01336	1・2 SB0048	No.19, 南北T, SB36, SB47	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	80%	13.6	5.4	373.0	5YR5/3に ぶい赤褐	5YR2/4黒 褐	径1～2mmの 白色粒 混	良	口縁部横ミガキ、底面ミ ガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	-		小型	
18	-	01337	1・2 SB0048	No.18	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	10%	<15.2>	-	79.0	7.5YR5/2 灰褐	7.5YR7/4 にぶい橙	角四石 混	良好	口縁部横ミガキ、底面ミ ガキ	斜ミガキ	-			
18	-	01338	1・2 SB0048	-	弥生後期	弥生土器 甕	頸部	5%	-	(3.6)	9.0	10YR7/3 にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄	石英 混	良好	胴上半部横ミガキ、底面ミ ガキ	横ミガキ	-			
18	-	01339	1・2 SB0048	戸	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上 半部	10%	-	(10.4)	316.0	10R4/6 赤	5YR6/6橙	白色粒少な め 混	良好	頸部斜ミガキ、胴 上半部横ミガキ	横・斜ハケナデ	胴部外 面			
19	173	01353	1・2 SB0049	No.8, No.9, No.10, No.11, 南区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	70%	<19.2>	7.5	1310.0	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	白色粒 混	良好	口縁部・胴部横ミガキ、 底面ミガキ	口縁部横ナデ、口縁 部横ミガキ、胴 部横ミガキ、底面ミガキ	-			
19	-	01354	1・2 SB0049	No.12, 南区, 中47	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	30%	<21.5>	-	594.0	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	胴部横ミガキ	横ミガキ	-			
19	-	01356	1・2 SB0049	No.6, 南区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 下半部	40%	14.7	-	305.0	10YR5/3 にぶい黄	10YR6/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	口縁部・胴上半部横ミ ガキ、胴下半部横ミ ガキ	ナデ	-		輪種底小	
19	-	01357	1・2 SB0049	No.1	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～ 底部	30%	-	<6.7>	301.0	10YR6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	胴中央部斜ハケナデ→横 波状文(11本)、口縁 部横波状文(12本)	横ミガキ	-			
19	-	01358	1・2 SB0049	No.121F2, No.122F2, No.123F2, No.124F2, No.125 F2, No.126F2, F1, No.116	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～ 底部	40%	-	9.1	850.0	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/3 浅黄橙	混入少なめ	良好	胴中央部横波状文、 胴下半部横ミガキ	剥離・磨耗	-			
19	-	01359	1・2 SB0049	No.120F1	弥生後期	弥生土器 壺	胴部	30%	-	(17.4)	1698.0	10R5/8赤	5YR6/6橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	横・斜ハケ、一部剥離	外面	外面黒班、内面 煤付着		
19	-	01361	1・2 SB0049	戸 No.114	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	10%	-	12.8	825.0	7.5YR6/6 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	白色粒 混	良好	縦ミガキ、底面削り	横ハケ	-			
19	-	01363	1・2 SB0049	No.104	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	30%	-	(7.5)	117.0	10R6/6赤 にぶい灰白	10YR8/2 灰白	径～2mmの 白色粒 混	良	縦ミガキ、磨耗	底面ナデか	外面		輪種底小	
19	-	01365	1・2 SB0049	南区	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	30%	-	(7.4)	58.0	10R4/8赤 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	混入少なめ	良好	縦・横・斜ミガキ	横・斜ミガキ、底面ナデ	外面、杯 部内面			
19	173	01367	1・2 SB0049	No.13, SB96床, SB51, 北東 床下	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	50%	<17.5>	9.3	266.0	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	白色粒少し 混	良好	口縁部・胴上半部横ミ ガキ、口縁部・胴部横ミ ガキ、底面ミガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	全面			
19	173	01368	1・2 SB0049	-	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	60%	<8.5>	2.8	42.0	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、胴部 横ミガキ、底面ナデ	胴部横ミガキ、底面ナ デ	内外面	小型		
19	-	01370	1・2 SB0049	No.111	弥生後期	弥生土器 蓋	ツツミ部～体 上半部	20%	-	(ツツミ部) 4.6	92.0	7.5YR4/2 灰褐	10YR7/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	縦ミガキ	天井部ナデ、体部横・ 斜ミガキ	-		天井部単孔	
19	-	01371	1・2 SB0049	-	弥生後期	弥生土器 蓋	ツツミ部～体 上半部	20%	-	(ツツミ部) 4.7	82.0	10YR7/3 にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄	白色粒少し 混	良好	削り後ナデ	ナデ	-		天井部4孔(未貫 通)	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g								
19	-	01135	1・2 SB0056	№3, №4, 床下№37	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上半部	10%	-	-	(12.7)	570.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙、 7.5R4/8 赤	10YR7/4 にぶい黄 橙	混入少なめ	良好	頸部裝飾横波状文、 胴部横ミガキ	ナデ	胴部外 面、胴部 内外面		
19	173	01136	1・2 SB0056	北東(SB102床下)、 SB56(SB102壇)、 SB102南東区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	80%	<13.1>	5.3	9.4	215.0	-	5YR3/6暗 赤褐	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	胴部横ミガキ、胴下半 部～底部、底面横ナデ	口辺部横ミガキ、胴部 底面横ナデ	外面、口 辺部内 面	小型、口辺部2 孔1対の孔が2カ 所、口縁部に小 穴1ヶ、実測図2 枚	
19	173	01137	1・2 SB0056	№2, 南東区	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	90%	16.2	4.6	7.7	317.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒 混	良好	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	全面		
19	-	01138	1・2 SB0056	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	30%	-	(6.5)	246.0	-	10R5/8 赤	10R5/8 赤	径1～2mmの 白色粒 混	良好	縦ミガキ	杯底部横ミガキ、脚部 ナデ	外面、杯 部内面			
20	-	01343	1・2 SB0057	№13, №15, №17, №18, №19, №22, №23, SB156北西 区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴上半部	30%	<23.1>	-	(15.9)	420.0	-	10YR3/2 黒褐	10YR3/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口辺部・胴部飾横波状 文→飾横波状文	横ミガキ	-		
20	174	01344	1・2 SB0057	南北1, SB156北東区, SB156北西区	弥生後期	弥生土器 台付甕	口縁部～胴下半部	60%	<12.2>	-	(10.8)	217.0	-	7.5YR5/3 にぶい褐	7.5YR5/3 にぶい褐	白色粒少し 混	良好	飾横波状文(8本)→口 辺部・胴部飾横波状文 (6本)、胴下半部横ナ デ後縦ミガキ	横ミガキ	-	小型	
20	174	01345	1・2 SB0057	SB156№24, SB156№24-2	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	40%	-	8.1	(18.7)	2383.0	-	10R4/8 赤、 7.5YR7/6 橙	7.5YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	胴中央部・底部横ミガ キ、胴下半部縦ミガ キ、底面ナデ	胴下半部横ミガキ、斜 面、底部ナデ	胴中央 部外面		
20	-	01346	1・2 SB0057	SB156北西区	弥生後期	弥生土器 無頸壺	口縁部～胴上半部	10%	<11.7>	-	(4.8)	29.0	<16.2>	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	混入少なめ	良好	横ミガキ	ナデ後横ミガキ	外面	口縁部単孔	
20	-	01347	1・2 SB0057	々	弥生後期	弥生土器 高杯	胴部	5%	-	(2.7)	24.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙	10YR6/4 にぶい黄 橙	角四石 混	良好	脚部ミガキ、裾部ナデ おさえ	脚部ナデ、裾部ナデ・ おさえ	脚部外 面			
20	-	01348	1・2 SB0057	SB156№31, SB156北西区	弥生後期	弥生土器 台付甕	頸部～胴上半部	30%	-	(7.8)	98.0	-	10R4/8 赤、 5YR5/6明 赤褐	10R4/8 赤、 5YR5/6明 赤褐	混入少なめ	良好	横ミガキ	頸部横ミガキ、脚部ハ ケナデ	外面、頸 部内面		小型	
-	-	01563	1・2 SB0059	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴部	10%	-	(22.6)	475.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙、 10R5/6赤	7.5YR6/6 にぶい黄 橙	径1～3mmの 白色粒 混	良好	頸部飾横波状文、 脚部横ミガキ	剥離・不明	胴部外 面		内面被熱、写真 図版のみ	
-	-	01564	1・2 SB0059	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴部	10%	-	(22.7)	334.0	-	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	径1～2mmの 白色粒多く 含む	良好	頸部飾横波状文、 脚部斜ハケ後横ミガキ	頸部横ミガキ、胴上半 部斜ハケ、中央部ナデ	-		写真図版のみ	
20	-	01444	1・2 SB0061B	№5, №6	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	20%	<16.6>	-	(7.7)	137.0	-	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	横ミガキ	-		
20	-	01445	1・2 SB0061B	№3, №4, №7, 床下SB61-B	弥生後期	弥生土器 壺	底部	10%	-	14.0	(7.1)	1182.0	-	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	白色粒 混	良好	胴下半部縦ミガキ、底 面ミガキ	横ハケ	底部内 面		
20	-	01447	1・2 SB0061B	床下SB61-B	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	20%	-	8.0	(11.3)	298.0	-	10R5/3 にぶい黄 褐	10R5/3 にぶい黄 褐	白色粒 混	良好	胴下半部横、縦ミガキ、 底面ミガキあり	斜ナデ	外面(剥 離気味)		
20	-	01449	1・2 SB0061B	№2, 床下SB61-B	弥生後期	弥生土器 高杯	杯底部～脚部	50%	-	11.3	(11.2)	231.0	-	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	白色粒 混	良好	杯底部・胴下半部横ミ ガキ、接合部横ナデ、 脚上半部縦ミガキ	杯底部横ミガキ、脚部 横ハケ	外面、杯 部内面		
20	174	01224	1・2 SB0062	南北区T	弥生後期	弥生土器 甕	脚部	5%	-	-	33.0	-	10YR4/2 にぶい黄 褐	10YR4/2 にぶい黄 褐	白色粒 混	良好	飾横波状文	ミガキ	-	外面、杯 部内面	外面布状圧痕 有	
20	-	01226	1・2 SB0062	々	弥生後期	弥生土器 甕	胴上半部	5%	-	(5.9)	22.0	-	7.5YR7/6 灰黄褐	7.5YR7/6 灰黄褐	白色粒 混	良好	飾横格子状文	ミガキ	-			

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g								胴部 最大径cm
20	174	01227	1-2	SB0062	No.21, No.22, No.25, Pt4, 西区	弥生後期	弥生土器	壺	胴上半部	30%	-	-	(13.1)	370.0	-	10YR7/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	胴中央部横ミガキ、胴 下半部縦ミガキ	横・斜ハケナデ	胴中央 部外面	
20	-	01229	1-2	SB0062	上層、東区、ク	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴上 半	20%	-	-	(11.7)	286.0	-	7.5YR6/8 明褐	白色粒 混	良好	頸部横ミガキ、胴上半 部横ハケナデ	頸部横ミガキ、胴上半 部横ハケナデ	-	
20	-	01230	1-2	SB0062	No.10	弥生後期	弥生土器	高杯	杯底部～脚 上半部	10%	-	-	(8.1)	297.0	-	10R5/6 赤、 10YR8/3 浅黄橙	径1mmの礫 混 厚手	良好	杯部横ミガキ、脚部縦 面ナデ	杯部横ミガキ、脚部底 面ナデ	外面、杯 部内面	
20	174	01233	1-2	SB0062	No.4	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	90%	17.0	4.7	-	370.0	-	10R4/8赤 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	縦・横・斜ミガキ、底面 ミガキ	縦・横・斜ミガキ	内外面	補修孔3対
20	-	01234	1-2	SB0062	西区	弥生後期	弥生土器	壺	胴下半部～ 底部	40%	-	4.4	(5.3)	69.0	-	10R4/6赤 色粒 混	角四石・白 色粒 混	良	胴下半部斜ミガキ、底 部磨耗	横ミガキ	全面(外 面底部 磨耗)	小型
21	174	00038	1-2	SB0066A	No.2, SB65No.5	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底 部	80%	21.8	7.0	(24.8)	1659.0	22.2	7.5YR5/4 にぶい、褐	赤色粒 少 混	良好	口辺部・脚部磨擦羽 状文(8本)→一掃描 ハケ後縦ミガキ、底 部縦ミガキ、底面削り・庄 痕	胴上半部ハケ後横ミ ガキ、胴中央～底部横 ナデ、底面削り・庄 痕	-	
21	-	01236	1-2	SB0066A	Pt2	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴 上半部	20%	<10.7>	-	(5.9)	44.0	-	10YR7/4 にぶい、黄 橙	混入少ない	良好	口辺部・脚部磨擦羽 状文(9本)	横ミガキ、胴中央縦 ミガキ	-	小型
21	174	01237	1-2	SB0066A	No.1	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底 部	60%	8.7	4.9	12.6	272.0	9.6	7.5YR3/2 黒褐	白色粒 混	良好	口辺部・脚部磨擦羽 状文(8本)→一掃描 斜状文 縦ミガキ、底面ナデ	口辺部磨削の後横ミ ガキ、脚部横ナデ	-	小型、粘土結痕
21	-	01238	1-2	SB0066A	SB65北区床下	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	(2.5)	-	18.0	-	10YR5/2 灰黄褐	白色粒・赤 褐色粒 混	良	口唇部・口縁部磨擦 状文	横ミガキ	-	折返口縁
21	-	01240	1-2	SB0066A	N区	弥生後期	弥生土器	台付甕	頸部～胴下 半部	20%	-	(6.7)	-	38.0	-	7.5YR3/1 黒褐	径～4mmの 白色粒 混	良好	磨擦状文→口辺部・ 脚部磨擦状文、脚 下半部横・斜ミガキ	口辺部・脚部横ミガキ、 頸部剥落	-	小型
21	175	01241	1-2	SB0066A	No.5	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～底 部	95%	<28.2>	11.0	59.4	4610.0	34.9	10YR7/4 にぶい、黄 橙	0.2～0.6mm 黒色粒子、1 mm以下石 莖、1.5mmク チリ礫全体 に多く含む	良好、 胴下半部縦 ミガキ、胴上 半～中央部 に黒斑 あり	頸部磨擦羽状文、 脚部磨擦状文、脚 下半部横・斜ミガキ	口縁部横ミガキ、脚部 磨耗	口辺部、 胴上半 部外面	口辺部は厚く、 胴上半部は薄 く、胴中央部 厚みをたせて いる。丸みのある 底部
21	175	01242	1-2	SB0066A	No.4, No.5, No.6, N区	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～胴 上半部	30%	23.7	-	(22.7)	1576.0	-	10YR7/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	頸部磨擦線文(7段) →一掃描垂下文(4 本)、口縁部横ミガキ、 口辺部・脚部縦ミガキ	口縁～頸部横ミガキ、 脚部横ミガキ、胴上半 部部分的な横ナデ	-	粘土結痕
21	-	01244	1-2	SB0066A	No.3	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	70%	-	<6.5>	(19.2)	754.0	16.5	10YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒・黒 色粒 混	良好	頸部磨擦線文(7 本)、脚部縦ミガキ、 口辺部・脚部横ミガキ	頸部・胴下半部ナデ、 胴部横ハケ、底面ミ ガキ	-	小型
21	-	01246	1-2	SB0066A	No.9	弥生後期	弥生土器	高杯	脚上半部	20%	-	(7.2)	-	182.0	-	10R6/8赤 、 7.5YR6/4 にぶい、黄 橙	白色粒・赤 褐色粒 混	良好	杯部横ミガキ、脚部縦 面横・斜ハケ	杯部横ミガキ、脚部底 面横・斜ハケ	外面、杯 部内面	
21	-	01250	1-2	SB0066A	No.8(Pt)	弥生後期	弥生土器	鉢	胴下半部～ 底部	30%	-	5.0	(4.4)	122.0	-	10R5/8 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良	横・斜ミガキ、底面磨 耗	脚部横ミガキ、底部剥 離	内外面	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								
21	-	01251	1-2	SB0066A	No.7	弥生後期	弥生土器	注口鉢	口縁部～底部	60%	9.1	14.4	692.0	<15.7>	7.5YR5/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	径1mm以下 の礫混	良好	口縁部横ミガキ、底面ナデ	-	輪襷痕
21	-	01252	1-2	SB0066A	SB65南半床下	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～体上半部	30%	-	(4.8)	90.0	7.5R4/6 赤	10YR6/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	ツマミ部横ミガキ、体部ナデ	外面、ツマミ部内面	天井部単孔、ツマミ部側面2孔	
21	-	01253	1-2	SB0066A	SB66H-15スミ	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	10%	-	(3.4)	10.0	10YR6/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	混入少ない	良好	口縁部刻み2段、口内面ナデ	ミガキ	-	
21	-	01254	1-2	SB0066A	SB66H-15スミ	弥生後期	弥生土器	甕	胴上半部	5%	-	(2.1)	7.0	10YR7/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	角閃石少し	良好	口縁部刻み2段、口内面ナデ	ナデ	-	
21	175	01245	1-2	SB0066B	Pt3 No.2	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	50%	-	(10.7)	379.0	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	杯底部横ミガキ、脚部斜縁ハケ後横ナデ、杯内面	杯底部、杯内面	口辺部2孔1対の孔、底面若干赤い	
21	175	01249	1-2	SB0066B	Pt3 No.1	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	80%	13.7	6.2	213.0	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面	-	
22	175	01164	1-2	SB0067	P4, 4F4, 7	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴上半部	30%	-	(12.1)	537.0	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	径～2mmの礫混	良好	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	-	
22	176	01166	1-2	SB0067	No.43, No.46, No.48	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	50%	22.4	(17.4)	1021.0	10YR7/4 にぶい黄	10YR7/6 明黄褐	白色粒 混	良好	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	-	
22	-	01167	1-2	SB0067	No.103	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	50%	<18.0>	(13.2)	576.0	10YR3/2 黒褐	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	-	
22	175	01168	1-2	SB0067	No.12, No.14, No.15, No.20, No.35, No.38	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	70%	17.1	23.5	1085.0	10YR7/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄	径1mm以下 の礫混	良好	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	-	
22	-	01169	1-2	SB0067	南T	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴下半部	50%	<14.0>	(16.0)	294.0	10YR6/3 にぶい黄	10YR5/3 褐	白色粒 混	良好	口唇部刻み、口内面ナデ	横ミガキ	-	
22	-	01171	1-2	SB0067	No.33	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	30%	<17.0>	(12.1)	308.0	10YR7/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	-	
22	175	01172	1-2	SB0067	No.32, No.51, C24, SK312中～下層, SK315	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	60%	11.5	11.8	291.0	10YR7/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良	口辺部、胴部横ミガキ、杯内面	横ミガキ	小型	
22	-	01174	1-2	SB0067	No.19	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	20%	<11.5>	(6.6)	65.0	10YR6/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	口唇部ナデ、口内面ナデ	横ハケ後横ナデ	小型	
22	175	01185	1-2	SB0067	-	弥生	弥生土器	台付甕	口縁部～胴上部	10%	-	(5.6)	82.0	7.5YR5/6 明褐	10YR4/6 褐	混入少なめ	良好	口唇部刻み、ハケナデ	ナデ	-	
22	-	01186	1-2	SB0067	-	弥生後期	弥生土器	台付甕	脚部	5%	-	(4.0)	16.0	10YR8/4 にぶい黄	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	-	-	-	
22	-	01187	1-2	SB0067	-	弥生後期	弥生土器	台付甕	脚部	5%	-	(2.3)	14.0	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/3 浅黄褐	白色粒 混	良好	-	-	-	
22	-	01195	1-2	SB0067	No.28	弥生後期	弥生土器	高杯	杯底部	10%	-	(4.2)	109.0	10R4/6赤	10R4/6赤	混入少なめ	良好	杯底部横ミガキ、脚部縦ミガキ	杯底部、杯内面	-	



付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm							
23	-	01170	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴下半部	50%	<25.9>	-	(25.2)	961.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙、 10YR4/2 灰黄橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	-	-	折返口縁
23	-	01175	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上半部	50%	-	-	(16.8)	752.0	-	10R4/8赤 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	頸部横溝状文、胴部横溝状文	頸部横溝状文、胴部横溝状文	外面、頸部内面	外面、頸部内面	胴中央部内面 輪襷痕
23	-	01176	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上半部	30%	-	-	(12.8)	409.0	-	10YR8/3 にぶい黄 橙、 10R5/6赤	10YR8/3 にぶい黄 橙、 10R5/6赤	頸部横溝状文、胴部横溝状文	頸部横溝状文、胴部横溝状文	胴部外面	胴部外面	-
23	-	01178	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	(2.9)	35.0	-	10R4/8赤	10R4/8赤	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	内外面	内外面	-
23	-	01179	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	20%	-	-	(7.8)	101.0	-	10R4/8赤、 7.5YR7/6 橙	10R4/8赤、 7.5YR7/6 橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部内外面	口縁部内外面	-
23	-	01181	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	(5.8)	32.0	-	2.5YR4/8赤 赤橙	10R4/8赤 赤橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	内外面	内外面	-
23	-	01182	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(3.0)	18.0	-	5YR6/6 赤橙	5YR6/6 赤橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	胴上半部外面	胴上半部外面	-
23	-	01183	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	10%	<18.8>	-	(5.1)	103.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	口縁部外面、口縁部内面	口縁部外面、口縁部内面	-
23	-	01184	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	(2.2)	7.0	-	2.5YR5/6 明赤橙	2.5YR5/6 明赤橙	横溝状文	横溝状文	内外面	内外面	小型、口辺部2 孔
23	-	01190	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	(7.7)	75.0	-	5YR6/6 赤橙、 5YR5/3に ぶい赤橙	5YR6/6 赤橙、 5YR5/3に ぶい赤橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	-	-	口辺部輪襷痕
23	-	01191	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(4.8)	31.0	-	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	口縁部外面、口縁部内面	口縁部外面、口縁部内面	頸部外面赤彩 付着
23	-	01192	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～頸部	5%	<14.0>	-	(3.5)	45.0	-	10R4/4赤 赤、 10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR8/4 浅黄橙、 10YR7/3 にぶい黄 橙	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部内外面	口縁部内外面	小型
23	-	01217	1-2	SB0067	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(4.1)	15.0	-	10R5/6 赤	10R5/6 赤	頸部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	胴部外面	胴部外面	-
23	176	01188	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	50%	<26.2>	-	(15.0)	1159.0	-	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	杯部横溝状文、胴部横溝状文	杯部横溝状文、胴部横溝状文	外面(剥離)、杯部内面	外面(剥離)、杯部内面	脚部切断後破 断面を整えてい る
23	176	01189	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	13.1	(11.9)	405.0	-	7.5R3/6 暗赤	7.5R3/6 暗赤	脚部横溝状文、胴部横溝状文	脚部横溝状文、胴部横溝状文	脚部外面	脚部外面	-
23	-	01182	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	90%	18.0	4.9	9.6	473.0	-	7.5YR6/3 にぶい黄 橙	7.5YR6/3 にぶい黄 橙	横溝状文	横溝状文	-	-	単孔
24	176	01192	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴上半部	30%	17.0	-	(10.4)	272.0	-	7.5YR6/6 灰黄	7.5YR6/6 灰黄	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	口縁部内外面	口縁部内外面	円形浮文4単位 (残存部には3単 位あり)
24	-	01183	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	10%	<17.9>	-	(6.7)	121.0	-	7.5YR4/3 灰褐	7.5YR4/3 灰褐	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	口縁部外面	口縁部外面	折返口縁
24	-	01194	1-2	SB0075	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	30%	8.9	-	(7.3)	77.0	-	10YR5/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	口縁部横溝状文、胴部横溝状文	横溝状文	口縁部内外面	口縁部内外面	折返口縁

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								重量g
24	-	01160	1-2	SB0075	No.3	弥生土器 蓋	ツマミ部～ 肩部	60%	-	(ツマミ部) 3.7	(6.5)	165.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄 褐	10YR5/3 にぶい黄 褐	白色粒 混	良好	ツマミ部ナデ、体部横 ハケ	ツマミ部ナデ、体部横 ハケ	-	天井部単孔
24	-	01161	1-2	SB0075	No.2	弥生土器 蓋	ツマミ部～ 体 上半部	30%	-	(ツマミ部) 6.7	(5.7)	164.0	-	10R4/8赤 褐色粒・白 色粒 混	10R4/8赤	褐色粒・白 色粒 混	良好	ツマミ部斜ミガキ、体部 ミガキ	ツマミ部斜ミガキ、体部 ミガキ	内外面	天井部孔の他 に2孔
24	-	01266	1-2	SB0075	SB78, 75掘方No.52	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(7.2)	92.0	-	2.5Y6/3に ぶい黄 褐色	10R4/8赤	混入少なめ	良好	頸部横羽状文→ 沈線、胴上半部縦ミガ キ	胴上半 部外面	頸部赤彩付着	
24	-	01334	1-2	SB0077	No.1, No.2, No.3, No.4, No.8, No.9, No.10, 尹	弥生土器 壺	口辺部～ 胴 上半部	20%	-	-	(7.9)	649.0	-	10R4/6赤 褐色	10R4/6赤	白色粒 混	良	縦ミガキ	内外面 (内面剥 離)	内外面	内面被熱
24	177	01139	1-2	SB0102	No.48, No.49, No.50, 南北T, 南 西区	弥生土器 甕	口縁部～ 胴 上半部	40%	22.2	-	(17.4)	936.0	-	7.5YR7/6 褐色	5YR7/6褐色	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、胴上 半部横ハケ後縦ミガ キ、中央部ナデ後横 ミガキ	口縁部横ミガキ、胴上 半部横ハケ後縦ミガ キ、中央部ナデ後横 ミガキ	-	
24	-	01140	1-2	SB0102	No.38, 南西区	弥生土器 甕	口縁部～ 胴 上半部	20%	15.3	-	(8.8)	184.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄 褐色	10YR6/4 にぶい黄 褐色	白色粒 混	良好	口縁部・胴部横羽状 文→横ミガキ	口縁部・胴部横羽状 文→横ミガキ	-	
24	-	01141	1-2	SB0102	No.15, No.23, No.27, No.39, 南 西区, SB105, 北区, SB106, 北 床, SB108, 中ノ床	弥生土器 甕	胴下半部～ 底 部	20%	-	<7.1>	(11.7)	390.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄 褐色	7.5YR7/4 にぶい黄 褐色	白色粒 混	良好	斜ナデ後縦ミガキ、底 面ナデ	斜ナデ後縦ミガキ、底 面ナデ	-	
24	177	01142	1-2	SB0102	No.37	弥生土器 壺	胴下半部～ 底 部	40%	-	4.6	(17.8)	1123.0	<26.0>	10R4/6赤 褐色	7.5YR7/6 褐色	径1mm以下 の雑混。や や厚い	良好	胴中央部、底部横ミガ キ、底面ナデ	胴中央部、底部横ミガ キ、底面ナデ	外面	
24	-	01143	1-2	SB0102	北カ～P18, SE98, 北東 区, SB102, 155, 北西区	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	(5.0)	39.0	-	10R4/6赤 褐色	5YR5/8明 赤褐	混入少なめ	良	縦文	胴部外 面		
24	-	01144	1-2	SB0102	No.56	弥生土器 壺	底部	20%	-	6.4	(9.2)	1098.0	-	7.5YR8/4 浅黄緑 灰白	10YR8/2 灰白	混入少なめ	良	脚部斜ハケ後縦ミガ キ、底面ナデ	脚部斜ハケ後縦ミガ キ、底面ナデ	-	
24	-	01146	1-2	SB0102	No.26	弥生土器 高杯	ツマミ部～ 頸 部	20%	-	-	(7.4)	215.0	-	2.5YR4/8 赤褐	7.5YR7/6 褐色	径1mm以下 の雑混	良好	縦ミガキ	ハケナデ、底面ナデ	外面、杯 部内面	天井部単孔
24	-	01148	1-2	SB0102	No.5, 北西区	弥生土器 蓋	ツマミ部	40%	<23.0>	(ツマミ部) 7.2	9.5	279.0	-	7.5YR6/6 褐色	10YR4/4 褐色	白色粒 混	良好	体部ナデ、縦ミガキ、裾 部横ミガキ・磨耗	横・斜ミガキ、磨耗	-	天井部単孔
24	-	01149	1-2	SB0102	No.12	弥生土器 蓋	ツマミ部	10%	-	(ツマミ部) 5.9	(4.0)	96.0	-	10YR7/3 にぶい黄 褐色	10YR4/3 にぶい黄 褐色	白色粒 角 閃石か混	良好	縦ミガキ	ナデ	-	天井部単孔
24	-	01104	1-2	SB0105	南	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	(2.8)	18.0	-	5YR5/8明 赤褐	7.5YR4/6 褐色	白色粒 混	良好	口縁部横羽状文、口辺 部横斜状文	横ミガキ	-	折返口縁
24	-	01112	1-2	SB0105	南北T, 北区	弥生土器 高杯	杯部	30%	<27.1>	-	(10.8)	284.0	-	10R4/8赤 褐色	10R4/8赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	横・斜ミガキ、底面ナデ	内外面	
24	-	01116	1-2	SB0105	北東区	弥生土器 無頸壺	口縁部	10%	<8.8>	-	(3.1)	14.0	-	5YR4/8赤 褐	5YR4/8赤 褐	白色粒 混	良好	横ミガキ	ナデ	外面、口 縁部内 面	小型
25	-	01101	1-2	SB0105南	No.9, No.18, No.23, P11, 南カ～ 7, 南, SB106床	弥生土器 甕	口縁部～ 胴 部	30%	18.1	-	(13.3)	547.0	-	10YR5/3 にぶい黄 褐色	10YR6/3 にぶい黄 褐色	混入少なめ	良好	横ミガキ	横ミガキ	-	
25	-	01103	1-2	SB0105南	No.55	弥生土器 甕	口縁部～ 頸 部	10%	-	-	(9.6)	115.0	-	10YR7/3 にぶい黄 褐色	10YR5/3 にぶい黄 褐色	径1-2mmの 白色粒 混	良好	口唇部ナデ、口辺部 横羽状文→横 ミガキ	口唇部ナデ、口辺部 横羽状文→横 ミガキ	-	折返口縁
25	-	01105	1-2	SB0105南	No.2, No.3, No.4	弥生土器 壺	口縁部	10%	<28.9>	-	(11.3)	449.0	-	7.5R4/8 赤	7.5R4/8 赤	白色粒 混	良	口縁部横ナデ、口辺 部縦ミガキ	横ミガキ	内外面	内外面 (内面 部剥離)
25	-	01109	1-2	SB0105南	No.15, P15	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	(8.7)	109.0	-	10YR6/4 にぶい黄 褐色	10YR6/4 にぶい黄 褐色	白色粒 混	良好	口辺部ハケ後縦ミガ キ、頸部ハケ後器横 羽状文	口辺部ハケ後縦ミガ キ、頸部ハケ後器横 羽状文	-	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								重量g
25	177	01110	1-2	SB0105南	No.17	弥生後期	弥生土器 高杯	口縁部～脚部	70%	10.8	6.0	11.2	187.0	-	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ	杯部横ミガキ、脚部縦ナデ	外面(剥離)、杯部内面	
25	-	01111	1-2	SB0105南	No.11,南区	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	<17.5>	-	7.5R7/8	195.0	-	7.5R7/8	白色粒やや多い	良好	縦ミガキ	横ハケ、裾部横ナデ	外面	
25	-	01113	1-2	SB0105南	No.30	弥生後期	弥生土器 台付甕?	台部	40%	-	-	5YR6/6橙	99.0	-	5YR6/6橙	径1mmの礫	良好	縦ミガキ	ナデ	-	小型
25	177	01114	1-2	SB0105南	No.19,南カ<7>	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	60%	<11.1>	4.0	6.2	122.0	-	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ、底面ナデ	脚部横ミガキ、底面ナデ	内外面	口辺部2孔の孔
25	-	01115	1-2	SB0105南	No.16	弥生後期	弥生土器 鉢	脚下半部～底部	20%	-	5.0	3.1	88.0	-	7.5R4/6赤	白色粒 混	良好	縦ミガキ	横ミガキ	全面(剥離あり)	
25	-	01117	1-2	SB0105南	No.14	弥生後期	弥生土器 甕	底部	10%	<6.2>	-	3.4	68.0	-	10YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	縦ミガキ	横ミガキ	-	単孔
25	-	01102	1-2	SB0105北	No.6	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～頸部	10%	<16.0>	-	6.5	77.0	-	7.5YR5/4にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ、脚部縦ミガキ	横ミガキ	-	
25	-	01121	1-2	SB0105北	No.10, No.36, 床	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～脚上半部	10%	<13.8>	-	6.8	120.0	-	7.5YR7/4にぶい黄	混入少なめ	良好	口辺部横ミガキ、底面ナデ	横ミガキ	-	
25	-	01122	1-2	SB0105北	No.37, 北床, 南床, 南北T, 北東区	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～脚上半部	20%	-	-	19.9	689.0	-	10R5/6赤、10YR8/3にぶい黄、浅黄橙	白色粒・赤褐色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ、脚部縦ミガキ	剥離カ	口辺部・脚部外面	
25	177	01130	1-2	SB0105北	No.35, SB105南カ<7>	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	60%	11.0	5.0	4.4	101.0	-	10R4/6赤	白色粒、角閃石 混	良好	脚部横ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	全面	口辺部2孔の孔
25	177	01133	1-2	SB0105北	No.18, No.24, No.25, No.26, No.31, 床, 南床, 北区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	23.3	5.2	12.2	645.0	-	10YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ、底面ミガキ	口辺部・底面横ミガキ、脚部縦ミガキ、底面ミガキ	-	単孔
25	-	01120	1-2	SB0106新	No.32	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～脚上半部	10%	<18.4>	-	11.2	111.0	-	10YR7/4にぶい黄	混入少なめ	良好	口縁部横ナデ、口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ	横ミガキ	-	
25	-	01127	1-2	SB0106新	No.1	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	-	10.5	257.0	-	10YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	縦ミガキ	杯部横ミガキ、脚部ナデ	外面、杯部内面	
25	-	01129	1-2	SB0106新	床	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	10%	-	-	4.7	70.0	-	10R5/8赤	白色粒 混	良好	縦ミガキ	杯底部ミガキ、脚部底面ナデ	外面、杯部内面	
25	177	01131	1-2	SB0106新	No.15, 北東区, 北床	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～榫部	70%	<22.0>	6.7	8.8	456.0	-	7.5YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	ツマミ部・榫部横ミガキ、体部縦ミガキ	ツマミ部一部横ミガキ、体部ナデ後横ミガキ	-	天井部5孔、輪積真
25	-	01132	1-2	SB0106新	No.11, 床, 北床, 南床, 北東区, SB105南カ<7>, SB104南西区床下	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～榫部	60%	-	4.6	7.2	311.0	-	10R4/8赤	白色粒 混	良好	縦ミガキ	天井部ミガキ、体部横ミガキ	内外面	天井部単孔、ツマミ部側面3孔
26	-	01054	1-2	SB0110	炉1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～頸部	20%	26.8	-	11.0	823.0	-	7.5YR7/6にぶい黄	混入少なめ	良好	口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ	横ミガキ	-	折返口縁、内面煤付着
26	177	01055	1-2	SB0110	No.28	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～脚部	10%	-	-	14.7	162.0	-	7.5YR6/6にぶい黄	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ	-	
26	-	01056	1-2	SB0110	No.28	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～脚上半部	30%	<13.5>	-	9.6	146.0	-	10YR4/2にぶい黄	径5mm以下の白色粒やや多い	良好	口辺部横ミガキ、脚部縦ミガキ	横ミガキ	-	小型
26	178	01059	1-2	SB0110	No.1, No.3, No.4, No.16, 南西底面, 南東区	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸部	20%	29.8	-	13.3	1037.0	-	7.5YR7/6にぶい黄	白色粒多め	良好	縦ミガキ、剥離	横ミガキ	-	内面一部煤付着
26	-	01060	1-2	SB0110	No.1, No.3, No.4, No.16, 南西底面, 南東区	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	5.5	31.0	-	10YR8/4にぶい黄	白色粒少なめ	良好	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ	口辺部横ミガキ、頸部縦ミガキ	口辺部外面	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm							
26	-	01062	1・2	SB0110	伊2	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	30%	-	15.0	2690.0 (18.2)	2.5Y5/4 黄褐色 7.5R4/6 赤	2.5Y6/4に ぶい黄	白色粒 混	良	横ハケ・磨耗	胴部外 面		
26	178	01063	1・2	SB0110	No.10, Pt.4, Pt.7, 南西底面, 南東1南, 中オウ南区	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～底部	70%	-	11.0	2257.0 (35.8)	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4	良好	口辺部ナデ後ミガキ・ 頸部ナデ後ミガキか、 頸下部横ナデ、胴上 半～中央部横ハケ、胴 下半部ナデ	口辺部・ 胴部～ 外面(大 半剥離)			
26	-	01064	1・2	SB0110	Pt.4	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	16.0	626.0 (13.7)	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の礫 混	良好	脚部縦ミガキ、裾部横 ミガキ	外面、杯 部内面			
26	177	01065	1・2	SB0110	No.7	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	40%	15.7	-	255.0 (8.8)	10R4/6赤 褐	白色粒 混 ぶい黄橙	良好	横ミガキ	内外面			
26	-	01066	1・2	SB0110	No.19	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	12.9	159.0 (3.5)	10R5/4赤 褐	径2mmまでの 白色粒 混	良	縦ミガキ、裾部斜ハケ 後横ミガキ	外面(大 半剥離)			
26	-	01067	1・2	SB0110	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	10%	-	-	82.0 (8.2)	7.5R3/4 暗赤	径1mm以下 の白色粒微 量	良好	縦ミガキ	外面	長方形の透かし 孔		
26	-	01069	1・2	SB0110	Pt.2	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	6.9	156.0 (7.7)	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mmの礫 混	良好	縦ミガキ	-			
26	-	01071	1・2	SB0110	SB1177	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	5.7	45.0 (4.2)	7.5YR6/4 赤	径1mm以下 の礫 混	良好	杯底部縦ナデ、脚部 横ミガキ	杯底部横ハ ケ	外面、杯 部内面	小型	
26	177	01072	1・2	SB0110	No.26	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	60%	<13.2>	4.5	156.0 (7.3)	10R3/6暗 赤	径1mm以下 の礫 混	良好	脚部横ミガキ、底面ミ ガキ	脚部横ミガキ、底面ミ ガキ	全面		
26	177	01073	1・2	SB0110	No.2	弥生後期	弥生土器 蓋	ソツミ部～裾 部	40%	<14.2>	ソツミ部) 4.3	146.0 (7.3)	7.5YR7/6 橙	径1～2mmの 礫 混	良好	ナデ、縦ミガキ	体部横ミガキ	-	天井部7孔	
26	177	01075	1・2	SB0110	No.24	弥生後期	弥生土器 蓋	ソツミ部～裾 部	30%	<23.6>	ソツミ部) 5.1	382.0 (9.9)	7.5YR7/6 にぶい黄 橙	径1mm以下 の礫 混	良好	天井部ミガキか体部縦 ミガキ、裾部横ミガキ	体部横ミガキ	-	天井部7孔	
26	-	01078	1・2	SB0110	No.27	弥生後期	弥生土器 瓠	胴下半部～ 底部	20%	-	5.0	135.0 (4.7)	10YR7/4 明黄褐	白色粒少な め	良好	縦・斜ミガキ、底面ナデ 横ミガキ	横ミガキ	-	単孔	
27	178	01080	1・2	SB0111	No.1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	90%	19.4	8.1	1551.0 (25.7)	5YR4/1褐 灰	5YR4/1褐	白色粒 混	良好	口唇部・底面ミガキ、口 辺部・胴上半部縦ハケ 後口辺部・脚部縦横 羽状文(11本)→脚部縦 状文(11本)、胴下半部 縦ミガキ	口唇部・底面ミガキ、口 辺部・胴上半部縦ハケ 後口辺部・脚部縦横 羽状文(11本)→脚部縦 状文(11本)、胴下半部 縦ミガキ	-	
27	-	01081	1・2	SB0111	No.3, No.5, 南東区, SB110	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	30%	<15.6>	-	199.0 (10.7)	10YR5/3 にぶい黄 褐	白色粒やや 多い	良好	口辺部・脚部縦横羽 状文→横描状文	横ミガキ	-		
27	-	01082	1・2	SB0111	No.9, 北東区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	20%	12.8	-	120.0 (8.5)	7.5YR4/2 灰褐	径1～2mmの 礫 混	良好	脚部縦横羽状文、 脚部磨耗	口辺部・縦ミガキ、胴 部横ミガキ	-		
27	-	01084	1・2	SB0111	-	弥生後期	弥生土器 甕	底部	10%	-	5.4	74.0 (3.7)	10YR6/4 にぶい黄 赤褐	径1～2mmの 白色粒 混	良好	斜ナデ後縦ミガキ、底 面ナデ	横ミガキ、底面ミガキ も	-	小型	
27	-	01086	1・2	SB0111	北東区	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上 半部	5%	-	-	32.0 (6.8)	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	頸部縦斜状文→沈 線、胴部横ミガキ	頸部縦斜状文→沈 線、胴部横ミガキ	胴部外 面		
27	-	01087	1・2	SB0111	北東区, SB112No.12	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上 半部	10%	-	-	69.0 (7.5)	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の礫 混	良	頸部縦横羽状文、胴 部横ミガキ	頸部縦横羽状文、胴 部横ミガキ	胴部外 面		
27	-	01091	1・2	SB0117	No.1	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～ 底部	30%	-	4.4	86.0 (5.2)	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒やや 多い	良好	脚中央部縦横波状 文、胴下半部縦ミガキ	脚部縦ミガキ	-	小型	

付表 4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm							
27	-	01093	1・2	SB0117	-	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～胴上半部	10%	-	(8.0)	91.0	-	10R4/8赤、10YR6/3にぶい、黄にぶい、黄にぶい	良好	頸部縮描波状文、口辺部縮描波状文	口辺部ミガキ、胴部縮描波状文、胴部外内面	口辺部・胴部外内面		
27	-	01095	1・2	SB0117	西かへ7	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	(2.5)	17.0	-	10YR7/4にぶい、黄にぶい、黄にぶい、黄にぶい、黄にぶい	良好	口唇部縮描波状文、横ミガキ	ミガキ	内外面		
27	-	01099	1・2	SB0128	床北東	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	(3.9)	20.0	-	2.5YR8/4淡黄、10R4/6赤	良好	口唇部縮描波状文、口辺部縮描波状文	横ミガキ	内外面		
27	178	01524	1・2	SB0130	No.6, 東西～東, 東西T	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	30%	10.8	-	139.0	-	7.5YR6/6白、7.5YR5/2灰黄褐	良好	胸中央部斜ハケ後継ミガキ	口辺部・胴部縮描波状文、胴上半部縮描ミガキ、胴下半部ナデ	-	小型	
27	-	01525	1・2	SB0130	No.1, No.10, 西, No.11, 西, 南西	弥生後期	弥生土器 壺	胴部～底部	20%	-	8.9	576.0	-	10R4/6赤、2.5YR6/6灰褐	良好	縮描ミガキ、剥離、底面ナデ	横・斜ハケナデ、一部剥離	胴中央部外面		
27	-	01526	1・2	SB0130	北東区	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～体部	30%	-	(ツマミ部) 3.5	58.0	-	7.5YR7/2明褐色	良好	削り、天井部少しナデ	天井部ナデ、斜ミガキ	-	天井部4孔	
27	-	01453	1・2	SB0134	No.2, 北東	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	40%	12.5	-	248.0	-	10YR6/4にぶい、黄にぶい、黄にぶい	良好	口辺部縮描波状文→縮描波状文(8本)→胴部縮描波状文	横ミガキ	-		
27	-	01454	1・2	SB0134	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	(5.3)	46.0	-	7.5YR5/2灰褐	良好	口唇部刻み、口縁部縮描波状文、口辺部縮描波状文	横ミガキ	-	折返口縁	
27	-	01455	1・2	SB0134	No.3, SK106	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸部	10%	<20.6>	-	185.0	-	7.5YR8/4浅黄褐	良好	口辺部縮描波状文、頸部縮描波状文	斜ハケ後継ミガキ	-		
27	178	01456	1・2	SB0134	炉体内、炉体外	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴上半部～底部	30%	-	(10.9)	1270.0 500.0	-	10R4/8赤、2.5Y7/3浅黄、10YR7/3にぶい、黄にぶい	良	口辺部縮描波状文、頸部縮描波状文、胴部縮描波状文、底面ナデ	ナデ・磨耗	口辺部内外面(内面剥離)、胴部外面		
27	178	01457	1・2	SB0134	No.1	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	(6.0)	129.0	-	7.5YR7/3にぶい、黄にぶい	良好	脚上半部沈線、縦・斜ミガキ	ミガキ	外面(磨耗あり)	脚部底面に記号文あり。	
27	-	01458	1・2	SB0134	南区	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～楕部	20%	<20.0>	(ツマミ部) 5.7	197.0	-	10YR6/4にぶい、黄にぶい	良好	縦・横・斜ミガキ	天井部ナデ、体部横・斜ミガキ	-	天井部単孔	
27	-	07448	1・2	SB0134	南東	弥生後期	弥生土器 甕	胴部～底部	30%	-	4.2	135.0	<10.7>	10YR7/4明黄褐	良好	胸中央部縮描波状文、胴下半部斜ミガキ、底面ミガキ	横・斜ミガキ	-		
28	179	00846	1・2	SB0149	No.6, No.9, A区, A, E, K, T, C区, T, SP, A-C, T	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴上半部	30%	21.2	-	712.0	-	10YR7/4にぶい、黄にぶい	良好	口辺部縮描波状文、胴上半部縮描波状文(14本)	ナデ後継ミガキ	-	口縁部少し受け口気味	
28	-	00847	1・2	SB0149	No.4, No.6	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～底部	40%	-	8.6	1413.0	29.9	10YR6/3にぶい、黄にぶい	良好	縮描波状文→口辺部縮描波状文、胴部縮描波状文、胴下半部縮描波状文、斜ハケ後継ミガキ	頸部横ハケ、胴上半部ナデ、胴下半部横ミガキ	-	外面黒斑	
28	179	00848	1・2	SB0149	No.1, C区	弥生後期	弥生土器 甕	口辺部～胴下半部	30%	-	(20.5)	488.0	<18.8>	7.5YR6/6白、5YR6/6黒雲母混	良好	縮描波状文→口辺部縮描波状文、胴部縮描波状文、胴下半部縮描波状文、縦ミガキ	横ナデナデミガキ	-		
28	-	00850	1・2	SB0149	No.3, D区	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	30%	-	9.4	864.0	-	7.5YR5/4にぶい、黄にぶい	良好	脚下半部縮描ミガキ、底面磨耗	斜ハケ	-		
28	-	01349	1・2	SB0156	□No.1	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	30%	-	11.0	1578.0	-	10YR8/2灰白、2.5Y8/4淡黄	良	斜ハケ、縦ミガキ・磨耗	磨耗	-		
28	-	01351	1・2	SB0156	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	7.8	85.0	-	7.5YR6/4にぶい、黄にぶい	良好	縦ミガキ	ハケナデ、底面横ナデ	外面		

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm (ソマリ部) 4.3	高さcm	重量g							
28	-	01352	1・2	SB0156	床	弥生後期	弥生土器	壺	ソマリ部～裾部	60%	14.5	6.7	197.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	7.5YR6/3 にぶい褐	白色粒 混	良好	ソマリ部ナデ、指おさえ、体部縦ミガキ、裾部縦ミガキ	-	天井部車孔・粘土の段差 輪襷痕あり
28	-	00991	3	SB0306	No.2	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	40%	14.0	(10.0)	306.0	-	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 にぶい橙	白色粒 混	良好	口縁部、胴部縦波状文→一掃描縦波状文	-	小型
28	-	00992	3	SB0306	Pit.4 No.1	弥生後期	弥生土器	台付甕	口縁部～台部	60%	10.7	(11.2)	265.0	-	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙	径1mm以下の白色粒 混	良好	口縁部、胴部縦波状文(胴部10本)→一掃描縦波状文(10本)、胴下半部縦ミガキ	-	小型
28	179	00993	3	SB0306	No.9, No.16, Pit.2, SB305床, SB307上層	弥生後期	弥生土器	台付甕	口縁部～台部	60%	<13.2>	(15.2)	459.0	-	7.5YR5/3 にぶい褐	5YR6/4に ぶい橙	白色粒 混	良	口縁部、胴部縦波状文(胴部10本)→一掃描縦波状文(10本)、胴下半部縦ミガキ	-	小型、外面剥離あり
28	-	00995	3	SB0306	No.1, No.1下, No.10	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴上半部	20%	-	(14.3)	537.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙、 10R4/6赤	10YR7/4 にぶい黄 橙	混入少なめ	良好	頸部～胴上半部ナデ、胴中央部斜ハケ	胴部外面	
28	-	00996	3	SB0306	No.12, SB305	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	5%	-	(9.8)	171.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙、 10R4/6赤	2.5Y7/4 にぶい黄 橙、 10R4/6赤	白色粒 混	良	口縁部縦ミガキ、剥離、頸部ナデ	口縁部内外面	
28	-	00997	3	SB0306	No.11, No.12, SB305	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	40%	-	<15.5>	367.0	-	10YR6/6 にぶい黄 橙	5YR5/4に ぶい赤褐	径1mm以下の黄褐色、赤味混入胎土	良好	ケズリ、裾部クロコナデ	脚部外面	厚手
28	-	00998	3	SB0306	No.5	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	30%	-	(8.8)	170.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙、 脚部2.5Y7/4 黄	10YR7/4 にぶい黄 橙	混入少なめ	良好	ナデ	脚部内外面(内面一部)	杯部内外面剥離、輪襷痕
28	179	01001	3	SB0306	No.6, No.8, No.11, No.13, Pit.4 No.2	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	60%	17.2	11.4	457.0	-	7.5YR6/6 にぶい黄 橙	7.5YR6/8 にぶい黄 橙	白色粒少し 混	良好	縦ミガキ、底面ミガキ	-	単孔
28	-	01002	3	SB0306	No.15	弥生後期	弥生土器	壺	ソマリ部～裾部	70%	<13.3>	6.9	131.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒少し 混	良好	ソマリ部縦指押さえ、体部縦ミガキ、裾部縦ミガキ	-	天井部車孔、輪襷痕
29	179	01004	3	SB0307	No.1, 上層	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	90%	18.1	21.9	1032.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙	7.5YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部、胴部縦波状文(9本)、胴下半部縦ミガキ、底面ミガキ	-	
29	179	01005	3	SB0307	No.12	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	90%	<18.3>	6.7	1750.0	19.4	5YR4/1褐 灰	5YR4/1褐 灰	白色粒 混	良好	口縁部縦波状文→一掃描縦波状文(11本)、胴下半部縦ミガキ	-	
29	-	01006	3	SB0307	No.4, 炉1層, 上層, SB305	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	60%	15.1	<6.2>	729.0	-	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR5/3 にぶい黄 褐	白色粒 混	良好	口縁部縦ナデ、胴部ナデ後縦ミガキ	-	
29	-	01007	3	SB0307	No.11	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	30%	<13.7>	-	115.0	-	10YR5/4 にぶい黄 褐	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部、胴部縦波状文→一掃描縦波状文、胴下半部縦ミガキ	-	
29	179	01008	3	SB0307	炉No.1-1, 炉No.1-2	弥生後期	弥生土器	甕	頸部～胴上半部	30%	-	(14.4)	581.0	<24.3>	7.5YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	斜ハケ後、一部縦ミガキ	-	
29	179	01010	3	SB0307	炉No.1-1, 炉No.1-2	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	30%	<22.4>	-	505.0	-	10YR7/6 明黄褐	10YR7/6 明黄褐	混入少なめ	良好	口縁部縦ミガキ、胴部縦ハケ後縦ミガキ	-	厚手で重量感あり
29	-	01011	3	SB0307	上層, SB306, SB310	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胴上半部	20%	<18.2>	-	336.0	-	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/4 浅黄褐	白色粒 混	良好	横ミガキ	-	折返口縁
29	-	01014	3	SB0307	No.15	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20%	-	(13.2)	252.0	-	10R4/8 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	口縁部縦ミガキ、頸部縦指押波状文	口縁部外面、口縁部～胴上半部内面剥離	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm								
29	-	01015	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(6.7)	50.0	10R5/6赤、 10YR7/4に ぶい、黄 橙	10R5/6赤、 10YR7/4に ぶい、黄 橙	混入少なめ	良好	横ミガキ、頸部ナデ	横ミガキ、頸部ナデ	口辺部 外面、口 辺部～ 頸部内 面	
29	-	01016	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	(7.2)	50.0	2.5YR6/6 橙、 10YR7/4に ぶい、黄 明黄褐	2.5YR6/6 橙、 10YR7/4に ぶい、黄 明黄褐	混入少なめ	良好	口辺部横ミガキ、頸部 縹描羽状文→凹形 浮文	横ミガキ、胸上半部縹 ナデ	口辺部 内外面		
29	-	01017	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胸上 半	10%	-	(10.9)	159.0	7.5YR8/4 にぶい、黄 橙	7.5YR8/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	頸部縹斜線文→胸 上半部縹斜線文、 胸上半部縹・横ミガキ	横ハケ	胸部外 面		
29	-	01018	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	(2.2)	4.0	10YR7/4 にぶい、黄 橙	10YR7/4 にぶい、黄 橙	混入少なめ	良好	頸部縹斜線文→枕 線、胸部ナデ	-	-		
29	-	01019	3	SB0307	No.3	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	30	<22.8>	-	(8.0)	186.0	10R4/8赤	10R4/8赤	白色粒 混	良好	ミガキ	ミガキ	内外面	
29	-	01020	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	(7.7)	209.0	10R4/8赤 にぶい、黄 橙	7.5YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	縹ミガキ・縹耗	杯部縹耗、胸部ハケナ デ、底面ナデ	外面、杯 部内面	外面一部破付 着	
29	-	01022	3	SB0307	Pt1	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	<7.8>	129.0	10YR6/3 にぶい、黄 橙	5YR6/6橙 にぶい、黄 橙	径1mm以下 の礫混	良好	ナデ後、縦ミガキか ナデ	ナデ	-		
29	-	01024	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	60%	<13.7>	5.5	6.3	210.0	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	白色粒 混	良好	胸部縹ミガキ、底面ミ ガキ	胸部縹ミガキ、底面ミ ガキ	内外面	
29	-	01025	3	SB0307	炉1層、炉No.2	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	80%	13.0	<4.7>	7.3	237.0	7.5YR5/3 にぶい、褐 橙	7.5YR5/3 にぶい、褐 橙	白色粒 混	良好	口辺部縹ミガキ、胸部 縹ミガキ、底面ミガキ	横ミガキ	-	
29	-	01026	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部	10%	-	(ツマミ部) 5.6	(3.3)	109.0	10YR6/4 にぶい、黄 橙	10YR6/3 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	ツマミ部工具によるナ デか体部ナデ	天井部工具によるナ デ、底面ナデ	-	天井部5孔
29	-	01028	3	SB0307	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	(2.2)	21.0	10YR8/4 にぶい、黄 橙	10YR8/4 にぶい、黄 橙	混入少なめ	良好	口辺部縹斜線文→ 口縁部縹文	ナデ	-	折返口縁	
30	-	01030	3	SB0310	炉体	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～胸上 半部	20%	-	(10.0)	78.0	5YR5/4に ぶい、赤褐 橙	10YR6/4 にぶい、黄 橙	白色粒 や 多い	良好	胸部縹斜線文→ 縹斜線文	ハケ後ナデ	-		
30	-	01031	3	SB0310	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胸 上半部	20%	<14.8>	-	(9.0)	113.0	10YR6/3 にぶい、黄 灰黄褐	10YR6/2 にぶい、黄 灰黄褐	白色粒 混	良好	口辺部・胸部縹斜線 文→縹斜線状 文	横ミガキ	-	
30	180	01032	3	SB0310	No.1, No.2, No.3, 7	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸 部	30%	<31.6>	-	(22.5)	1129.0	10R6/6赤 にぶい、黄 橙	10R6/6赤 にぶい、黄 橙	白色粒 混	普通	口辺部縹ミガキ、頸部 縹斜線文、胸部ミガ キ	口縁部縹ミガキ・縹 体部縹	口辺部 内外面 (内面に 縹、胴部 外面)	
30	-	01033	3	SB0310	炉No.1, 炉No.2, 炉No.3, 炉No.4, 炉体, 炉	弥生後期	弥生土器 壺	口辺部～胸 上半	30%	-	(22.2)	1884.0	10YR6/3 にぶい、黄 橙 (10R5/6 赤)	10YR6/3 にぶい、黄 橙	径1mm以下 の礫・赤褐 色粒 混	良好	口辺部縹ミガキ、頸部 縹斜線文、胸部 縹斜線文、縹 ミガキ	口辺部縹ミガキ・縹 、胸部 縹斜線文、縹 斜線文	口辺部・ 胸部外 面、口辺 部～頸 部内面		
30	-	01036	3	SB0310	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	(3.8)	17.0	10R4/6 赤、 10YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 にぶい、黄 橙	径1mm以下 の礫混	良好	頸部縹斜線文、縹 斜線文、胸部縹	ハケ目	胸部外 面(剥離 あり)		
30	-	01037	3	SB0310	-	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	(3.4)	16.0	10R5/6 赤、 7.5YR7/6 橙	10R5/6 赤、 7.5YR7/6 橙	径1mm以下 の礫混	良好	口唇部縹ミガキ、口縁 部縹斜線文	横ミガキ	内外面		
30	-	01038	3	SB0310	No.5	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	(5.7)	181.0	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	径1mm以下 の礫混	良好	縹ミガキ	杯部ミガキ	外面、杯 部内面		
30	-	01040	3	SB0310	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	(4.1)	64.0	10YR6/4 にぶい、黄 橙	10YR6/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	縹ミガキ	杯部縹ミガキ、脚部ナ デ	外面、杯 部内面		



付表 4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g						
31	-	00659	3	SE3036	No.11	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	20%	<13.2>	-	(10.0)	130.0	-	2.5YR6/6 橙	白色粒 混	良好	口縁部ナデ、胴部横ミガキ	-	口唇部面取り状
31	180	00660	3	SE3036	北区	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	30%	7.9	-	(7.5)	81.0	-	10YR7/4 明黄褐色	白色粒 混	良	口縁部横ミガキ、胴部ナデ	-	小型
31	-	00662	3	SE3036	No.8	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸部	20%	<24.5>	-	(9.0)	487.0	-	10R4/6 赤、 10YR6/4 にぶい黄 にぶい黄 橙	径1mmの礫 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部縦ミガキ、頸部縦波状文	口縁部、口縁部剥離	口唇部に突起あり(4単位と見られる)
31	-	00663	3	SE3036	No.3	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸部	20%	<30.8>	-	(10.5)	459.0	-	7.5YR7/6 橙 (10R5/8 赤)	径1mmの礫 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部縦ミガキ、頸部縦波状文	口縁部、口縁部剥離	
31	181	00524	3	SE3041	d, e'	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	60%	<11.3>	4.6	13.6	207.0	-	10YR7/2 にぶい黄、 灰黄褐色	白色粒少な め	良好	口縁部横ミガキ、胴部横ミガキ、胴部斜ハエ後横ミガキ	-	小型
31	181	00525	3	SE3041	a, Pt1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	<11.0>	5.7	13.7	318.0	-	10YR7/3 にぶい黄、 黒褐色	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、底部斜ミガキ、底面ナデ	-	小型、折返口縁
31	-	00527	3	SE3041	d	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	10%	-	(5.6)	32.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄、 赤褐色	混入少な め	良好	口唇部、口縁部縦波状文、 胴部縦波状文	-	折返口縁	
31	181	00529	3	SE3041	a, e', Pt1	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	50%	<29.0>	-	(11.4)	1053.0	-	7.5YR7/6 橙、 10R5/8 赤	白色粒 混	良	横・斜・縦ミガキ	内外面	
31	181	00530	3	SE3041	SB6045床下	弥生後期	弥生土器 高杯	杯底部～脚部	50%	-	17.1	(14.5)	645.0	-	10R4/6 赤 10R4/8 赤	白色粒 混	良好	杯底部横ミガキ、脚上 部横ミガキ、下部斜ハ エ、 杯部横ミガキ	外面、杯 部内面	脚部輪積痕
31	-	00532	3	SE3041	No.5-1.a, e'	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	30%	-	<12.7>	(11.2)	150.0	-	7.5YR7/3 にぶい黄、 橙	白色粒 混	良	斜ハケ	外面	脚上輪積痕、 杯部内面一部 赤彩
31	-	00533	3	SE3041	b	弥生後期	弥生土器 高杯	杯上半部	10%	<23.2>	-	(3.4)	70.0	-	7.5R4/6 赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面	
31	-	00534	3	SE3041	e'	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	40%	<16.4>	<6.0>	(4.8)	88.0	-	10R4/8 赤 7.5YR6/4 にぶい黄、 赤褐色	白色粒 混	良好	脚部横・斜ミガキ、底面 ナデ	内外面	
31	-	00535	3	SE3041	No.1	弥生後期	弥生土器 櫃	口縁部～底部	80%	<15.4>	5.5	9.7	442.0	-	5YR5/6明 赤褐色	角四石 混	良好	脚部縦ミガキ、底部横 ミガキ、底面ミガキ	-	単孔
31	181	00536	3	SE3041	No.2	弥生後期	弥生土器 蓋	ツツミ部～ 杯部	70%	<21.6>	(ツツミ部) <5.6>	10.3	446.0	-	10YR7/4 にぶい黄、 橙	白色粒 混	良好	ツツミ部横ナデ、体部 横ミガキ、天井部ナデ	-	天井部孔、体 部輪積痕
32	181	00523	3	SE3041	No.6, b	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	90%	21.8	9.4	29.3	1892.0	22.8	5YR5/4に ぶい赤褐色	径2～3mmの 白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、口縁 部、胴部縦波状文(8 本)→ 胴部縦波状文(11 本)、 脚下半部縦ミガ キ、 底面ミガキ	-	
32	-	00528	3	SE3041	No.3, No.4, a	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	20%	<32.0>	-	(8.4)	797.0	-	7.5YR7/6 橙	白色粒、赤 色粒 混	良	剥離	内外面	
32	181	00079	3	SE3069	Pt1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	100%	20.6	8.5	27.5	2000.0	20.8	7.5YR6/4 にぶい黄、 橙	白色粒 混	良好	口縁部、胴部縦波状 文(11本)→ 胴部縦波状文(11 本)、 脚下半部縦ミ ガキ	-	胴部粘土紐痕
32	-	00903	3	SE3069	No.10, Pt2	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	30%	21.9	-	(10.3)	845.0	-	7.5YR7/4 にぶい黄、 橙	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部 縦ミガキ、 胴部縦波状文	-	
32	181	00909	3	SE3069	No.1	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	20%	27.7	-	(12.3)	975.0	-	10R4/8 赤、 7.5YR7/4 にぶい黄、 橙	径1mmの礫 混	良	口縁部横ミガキ、下 部剥離	内外面 (内面下 半部剥 離)	頸部穿孔コナ
32	-	00910	3	SE3069	No.13	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	20%	<24.0>	-	(14.8)	240.0	-	10R5/6 赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g								
32	-	00911	3 SE3069	No.2	弥生後期	弥生土器	壺	胸下半部～底部	10%	-	<7.4>	372.0 (15.5)	-	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	胸中央部横ミガキ、胸下半部～底部縦ミガキ	横ハケナナデ	-	胸内部面疎付着	
32	-	00912	3 SE3069	1No.14, 1No.16	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胸上半部	40%	-	-	1285.0 (15.5)	-	7.5YR6/4 褐色粒 混	7.5YR6/4 褐色粒 混	白色粒・赤褐色粒 混	良好	頸部横線文、胸上部横ミガキ	横ハケナナデ	-	胸内部面疎付着	
32	-	00913	3 SE3069	床炉上7	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	41.0 (5.3)	-	7.5YR6/8 橙	7.5YR7/6 橙	混入少なめ	良好	口縁部横線波状文、口縁部縦線波状文→横線波状文(12本)	横ミガキ	-	折返口縁	
32	181	06920	3 SE3069	-	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	<40.2>	-	37.0 (6.1)	-	10R5/6赤 径1mm位の白色粒 微量	10YR7/4 にぶい、黄	径1mm位の白色粒 微量	良好	赤彩ミガキ ナデ	内外面	-	折返口縁、口唇部押圧による凹み	
32	-	00930	3 SE3071	-	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	40.0 (6.1)	-	10YR6/2 灰黄橙	10YR6/3 にぶい、黄	白色粒 混	良好	横線波状文	-	-	折返口縁	
32	-	00951	3 SE3071	-	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	5.0 (2.7)	-	10YR7/4 にぶい、黄	2.5Y7/3 浅黄	白色粒 混 (断面 10Y5/1灰)	良好 (堅緻)	横線波状文	ナデ	-	折返口縁	
32	-	00953	3 SE3071	-	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	-	-	13.0 (4.1)	-	7.5YR6/6 赤褐	2.5YR4/6 赤褐	径1mm以下の礫 混	良好	口縁部横線波状文、口縁部縦線波状文	ミガキ	-	内面	
32	-	00956	3 SE3071	-	弥生後期	弥生土器	鉢	胸部～底部	10%	-	4.6 (3.4)	72.0 (3.4)	-	赤、浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	径1mmの礫 混入	良	剥離・磨耗	剥離・磨耗	-	内外面	
32	-	00957	3 SE3071	-	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	30%	<12.5>	4.1 (6.9)	95.0 (6.9)	-	10YR6/4 にぶい、黄	10YR7/3 橙	白色粒 混	良	胸部縦・横ミガキ	口唇部ナデ、胸部磨耗	-	-	
33	-	00936	3 SE3082	No.H	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸上半部	30%	<17.0>	-	238.0 (13.2)	-	7.5YR7/3 にぶい、黄	7.5YR7/4 にぶい、黄	白色粒 混	良好	口縁部、胸部横線波状文→横線波状文	縦・横ミガキ	-	-	
33	-	00937	3 SE3082	No.I	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～底部	20%	17.9	-	369.0 (6.8)	-	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/1 褐灰	白色粒 混	良好	口縁部刻み、口縁部横線波状文	ナデ、横ミガキ	-	-	
33	182	00939	3 SE3082	Pt.8	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸下半部	70%	11.8	-	303.0 (10.3)	-	5YR4/4にぶい、赤褐	10YR7/3 にぶい、黄	白色粒多く 混	良	口縁部ナデ、胸部横線波状文(8本)→胸部横線波状文(9本)、口縁部横線波状文、胸中央部剥離、胸下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	小型、粘土結痕	
33	182	00940	3 SE3082	No.J, No.K	弥生後期	弥生土器	台付甕	口縁部～台部	70%	<15.5>	-	628.0 (18.4)	-	5YR5/2灰 褐	7.5YR6/4 にぶい、黄	白色粒 混	良好	口縁部、胸部横線波状文(7本)→横線波状文(8本)、胸中央下部横ミガキ、胸下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	-	
33	-	00943	3 SE3082	炉	弥生後期	弥生土器	壺	胸下半部～底部	30%	-	10.0 (11.0)	1031.0 (10R4/8 赤)	-	10YR7/4 にぶい、黄	10YR7/2 にぶい、黄	径1mmの礫 混	良	胸中央部、底部横ミガキ、胸下半部縦ミガキ、底面削り後ナデ	横ハケナナデ、磨耗、一部剥落	胸中央部外面	-	
33	-	00945	3 SE3082	No.L	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	50%	-	-	113.0 (5.5)	-	10R4/8赤 褐	10R4/8赤 褐	径1mmの礫 混	良	杯上半部横ミガキ、杯下半部縦ミガキあり	杯上半部横ミガキ、杯下半部縦ミガキあり	杯部内外面(剥離あり)	-	
33	182	00946	3 SE3082	No.G	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～唇部	80%	<12.0>	(ツマミ部) 4.9	197.0 (5.7)	-	10R3/6暗 赤	10YR7/2 にぶい、黄	白色粒 混	良好	体部縦ミガキ	体上半部横ミガキ、体下半部縦ミガキ	外面、ツマミ部内面	天井部単孔	
33	182	00947	3 SE3082	No.J	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～唇部	40%	<25.8>	(ツマミ部) 7.0	381.0 (11.0)	-	5YR6/6橙	7.5YR5/2 にぶい、褐	白色粒 混	良好	ツマミ部横ナデ、胸上半部縦ミガキ、胸下半部横ミガキ、天井部ナデ	天井部ナデ、体部横ミガキ	-	天井部孔	
33	-	00958	3 SE3082	-	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	14.6 (3.3)	-	7.5YR5/2 灰褐、単褐色、7.5YR6/4 にぶい、黄	7.5YR3/2 単褐色、7.5YR7/4 にぶい、黄	白色粒 混	良好	横線波状文	ハケナナデ	-	折返口縁	
33	-	00960	3 SE3082	-	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	-	3.0 (2.4)	-	7.5YR6/6 橙	10YR6/4 にぶい、黄	径1～2mmの白色粒 混	良好	口縁部横線波状文→口縁部横線波状文	ナデ	-	-	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g								胴部 最大径cm
33	-	00902	3	SE3082	-	弥生 後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	(1.7)	3.0	-	7.5YR7/6 橙	径1mm以下 の褐色	良	銘描斜線文、刺突文 ナデ	-	-	-	単孔	
33	-	00904	3	SE3082	-	弥生 後期	弥生土器 甗	底部	5%	-	(3.1)	69.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の褐色	良好	胴下半部縦ミガキ、底 面ミガキ	横ミガキ	-	-	-	
33	182	00917	3	SE3084	No.9, No.14, No.23, No.25, No. 27, No.29, No.33, No.35, No. 37, SE3067床下, SE3084・ 85	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	50%	<18.8>	-	797.0	<19.7>	10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混 黒褐	良好	口辺部・胴部縮描羽状 文(7本)→縮描波状 文(10本)、胴下半部縦 ミガキ	横ミガキ	-	-	-	
33	182	00918	3	SE3084	No.41, No.42, SE3067床 下, SE3060	弥生 後期	弥生土器 甗	胴上半部～ 底部	40%	-	6.3	635.0	<20.7>	10YR6/4 にぶい黄 橙	石灰粒少し 混	良好	胴上半部縮描羽状 文(13本)、 胴下半部～底部ハケ 後縦ミガキ	横ミガキ	-	-	-	
33	182	00920	3	SE3084	No.4戸	弥生 後期	弥生土器 壺	頸部～胴上 半部	40%	-	(17.8)	1340.0	-	10R4/8 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	頸部縮描波状文、 口辺部・胴部横ミガキ	口辺部 ナデ、胴部横ミガキ	口辺部 内外面、 胴部外 面	-		
33	-	00923	3	SE3084	No.24	弥生 後期	弥生土器 壺	底部	20%	-	14.4	1151.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	胴下半部縦ミガキ、底 面削り 後ナデ	ナデ・剥落	-	-	外面赤彩付着	
33	182	00924	3	SE3084	No.1, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6, No.7, No.8, No.10, No.11, No.12, No.13, No.14, No.15, No.16, No. 17, No.18, No.20, No.21, No.22	弥生 後期	弥生土器 台付甗	口縁部～胴 下半部	60%	<19.4>	-	757.0	-	7.5YR6/4 にぶい黄 褐色粒 混	白色粒、赤 褐色粒 混	良	頸部縮描波状文(10 本)、口辺部・胴上半部 縮描ミガキ、胴中央部削 り	横ミガキ、剥離	口辺部・ 胴部外 面(剥 離)、口 縁部内 面	小型、口辺部2 孔1対の孔、ほ ぼ反対側にもあ り	-	
33	-	00925	3	SE3084	No.38	弥生 後期	弥生土器 台付壺	胴下半部～ 底部	20%	-	(8.3)	541.0	-	5YR5/6明 赤褐	径1mmの赤 色粒 混	良好	縦ミガキ	ナデ・剥落	-	-	外面黒斑、内面 赤彩剥落か、	
34	183	00081	3	SE3087	No.1(1), No.1(2)	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	100%	24.5	9.0	36.6	28.9	7.5YR5/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	縮描波状文(11本)→口 辺部・胴部縮描波状文 (8本)、胴下半部斜ハ ケ後縦ミガキ、底部縦 削り痕	口縁部 ナデ、胴部横ミガ キ、胴部縮ハケ	-	-	口縁部中央 部外面縁付着	
34	-	00885	3	SE3087	No.3, No.6, No.7, No.8, No.9, No. 10, No.11, No.14, No.15, a, b, d, e,	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	40%	22.0	-	765.0	<28.9>	10YR7/3 にぶい黄 橙	径1mm以下 の褐色	良好	縮描波状文→口辺部・ 胴部縮描波状文、胴半 部縦ミガキ	口縁部 ナデ、胴部横ミガ キ、胴部縮ハケ後縦ミ ガキ	-	-	-	
34	-	00886	3	SE3087	No.7, No.13, b, c,	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～頸 部	30%	21.6	-	798.0	-	10YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	縮描波状文→口辺部・ 胴部縮描波状文	ナデ	-	-	-	内面みこみに赤 色顔料付着
34	-	00891	3	SE3087	No.6	弥生 後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	10%	-	9.5	770.0	-	10R5/6 赤、 7.5YR7/4 にぶい黄 橙	径1mmの赤 色粒 混	良好	胴下半部縦ミガキ、底 面縦ミガキ	磨耗	-	-	-	
34	183	00892	3	SE3087	No.2, e,	弥生 後期	弥生土器 台付甗	口縁部～台 部	60%	(12.7)	-	369.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	頸部縮描波状文(8 本)、口縁部・胴上半部 ナデ後縦ミガキ、胴下 半部縮描ミガキ、胴半 部→胴部ナデ後縦ミ ガキ	口縁部 ナデ後縦ミガ キ、頸部～胴上半部ハ ケ後縦ミガキ、底部 (胴部)横ナデ	口縁部、口 面	小型、口唇部突 起、胴部輪積痕		
34	183	00894	3	SE3087	No.3	弥生 後期	弥生土器 注口土器 甗	口縁部～底 部	90%	11.5	7.6	14.8	15.4	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口辺部縮ナデ、胴部 縦ミガキ、底面削り後 ナデ	口辺部縮ハケ、胴部横 斜ミガキ	-	-	-	
34	183	00927	3	SE3088	No.1, SB167南西区SB116 下, SE3082	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～胴 下半部	40%	17.6	-	766.0	18.2	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口辺部縮描波状 文→縮描波状文、胴 上半部縦ミガキ	口辺部縮ナデ、頸部 ～胴部縦ミガキ	-	-	-	
34	183	00928	3	SE3088	No.5	弥生 後期	弥生土器 甗	口縁部～底 部	80%	16.0	5.5	18.8	870.0	10YR6/3 にぶい黄 灰	白色粒 混	良好	口辺部縮描波状文→ 縮描波状文(7本)→胴 部縮描波状文(7本)、 胴下半部縦ミガキ、底 面削り後ナデ	口縁部 ナデ、底部横ミ ガキ、胴中央～下半部 縦ミガキ	-	-	-	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記番号 (所属遺構・地名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g						
34	-	00929	3	SE3088	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	20%	<13.1>	-	(8.2)	175.0	-	7.5YR5/3 灰褐色	混入少なめ	良好	横ミガキ	-	
34	-	00930	3	SE3088	No.3, No.4	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～胴上半部	20%	<33.3>	-	(15.4)	588.0	-	10R6/8赤 橙	混入少なめ	良	口辺部横ミガキ、頸部剥離	口辺部内外面	胴部外面赤彩、頸部内面赤彩
34	-	00931	3	SE3088	炉	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	40%	-	8.8	(14.2)	1146.0	-	10R7/4 赤、7.5YR7/4 橙	径1mm以下の礫混	良好	ナデ	胴中央部外面	輪縁痕、胴下半部内面残付着
34	183	00934	3	SE3088	SE3068上、SE3062、SE3072、SE3097	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	50%	<13.3>	4.2	6.6	187.0	-	2.5YR3/6 暗赤褐色	白色粒混	良好	胴部横ミガキ、底面ナデ	内外面	小型
35	-	00971	3	SE3091	No.1	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～胴下半部	30%	<18.9>	-	(7.7)	156.0	-	10R4/8赤	白色粒混	良好	横ミガキ	内外面	
35	-	00972	3	SE3091	No.2	弥生後期	弥生土器 鉢	胴下半部～底部	40%	-	5.2	(6.2)	164.0	-	10R6/8赤 橙	径1～3mmの白色粒混	良	横・斜ミガキ	内外面	
35	-	00973	3	SE3091	No.4	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	20%	<10.3>	<2.4>	4.7	40.0	-	10R3/6暗赤	白色粒混	良好	横ミガキ(一部剥離)	内外面	小型
35	-	00949	3	SE3095	SE3096 炉	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	20%	-	10.8	(10.2)	879.0	-	10YR7/4 橙	白色粒混	良	横ハケナデ	-	
35	-	00976	3	SE3097	-	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	(3.3)	11.0	-	10R5/6赤	白色粒混	良好	横ミガキ	内外面	
35	-	00895	3	SE3099	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴下半部	40%	<13.6>	-	(12.9)	278.0	-	7.5YR6/6 橙	白色粒混	良好	横ミガキ	-	
35	-	00897	3	SE3099	No.5, No.6, No.7	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～底部	20%	-	14.5	(23.4)	1023.0	-	7.5YR7/6 浅黄褐色	径1mmの礫混	良	ナデ、剥離	-	外面黒班
35	-	00899	3	SE3099	No.2	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	40%	<17.0>	5.5	7.8	187.0	-	10R4/8赤、10YR8/4 浅黄褐色	径1mmの礫混	良好	横・斜ミガキ	内外面	
35	-	00900	3	SE3099	一層上	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～頸部	20%	<13.6>	-	(6.4)	173.0	-	7.5YR7/3 橙	混入少なめ	良好	口辺部・胴部横ミガキ、頸部横ミガキ	-	
35	183	00773	4	SB4002	No.201, No.778, No.1224, No.1225, No.1226, No.1258, No.1259, No.1260, No.1261, No.1262, No.1263, No.1490, A区, D区, D区T, 炉体内	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	90%	24.7	<13.1>	24.3	1160.0	-	10YR6/3 橙	黒色粒・白色粒混	良好	杯部・胴部横ミガキ、脚部横ミガキ	外面、杯内面	脚部粘土紐痕、三角形の透かし孔(四方)
35	-	00774	4	SB4002	No.432, No.1043, No.1065, No.1369, No.1428, No.1574	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	50%	18.1	-	(10.3)	518.0	-	10R3/6暗赤	白色粒混	良好	横ミガキ	外面、杯内面	脚部切断後破断面を極く整形
35	-	00778	4	SB4002	No.65, No.72, B区, B区T	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	<15.0>	(11.9)	303.0	-	2.5YR4/8 赤褐色	白色粒混	良好	縦ミガキ	脚部外面	
35	-	00779	4	SB4002	No.38, B区	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	40%	-	8.8	(6.9)	194.0	-	10YR8/3 浅黄褐色	白色粒混	良好	縦ミガキ	脚部外面	
35	-	00780	4	SB4002	No.679	弥生後期	弥生土器 高杯	杯底部～脚部	10%	-	-	(6.4)	157.0	-	10YR7/4 橙	径1mm以下の礫混	良好	縦ミガキ	外面、杯内面	脚部三角形の透かし孔あり
35	-	00783	4	SB4002	No.1230	弥生後期	弥生土器 高杯	杯底部～脚部	40%	-	11.2	(11.5)	320.0	-	7.5YR7/6 橙	径～2mmの礫混	良好	縦ミガキ	外面(杯内面)	外面(杯内面)に以て、杯内面
35	-	00785	4	SB4002	D区	弥生後期	弥生土器 高杯	杯底部～脚部	10%	-	-	(5.1)	70.0	-	10R5/6赤、10YR7/3 橙	白色粒混	良好	杯部横ミガキ、脚部縦ミガキ	外面、杯内面	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考				
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm							重量g	胸部 最大径cm	外面色調	内面色調
35	-	00786	4	SB4002	No.596	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	5%	-	-	10R4/6赤 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	杯部縦ミガキ	杯部横ミガキ、底面ナ テ	杯部内 外面				
35	183	00787	4	SB4002	No.1319,C区	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底 部	20%	<14.6>	4.2	5.8	150.0	-	10R4/6 赤 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の黒粒 混	良	横ミガキ、底面磨耗	剥離	内外面	
35	-	00792	4	SB4002	No.1056	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	70%	18.3	4.4	11.6	425.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒・赤 褐色粒少し 混	良好	口辺部横ミガキ、胴部 縦ミガキ、底面ミガキ	胴部横ミガキ、底面ミ ガキ	-	単孔
35	-	00797	4	SB4002	No.1143	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～唇 部	60%	-	4.95	348.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	径1mmの黒 粒 混	良好	天井部ナテ、ツマミ部 横ミガキ、体部縦ミガキ	体部横ミガキ	-	天井部単孔	
35	183	00798	4	SB4002	No.1055	弥生後期	弥生土器	蓋	ツマミ部～唇 部	80%	<11.2>	3.2	5.6	120.0	-	10R4/6赤 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	黒色粒・白 色粒 混	良好	ツマミ部縦ミガキ、体部 横ミガキ	天井部ミガキ・剥離、体 部横ミガキ	内外面 (ツマミ 部内面 一部)	
36	184	00724	4	SB4002	No.495, No.468, No.1058, No. 1094, No.1071, No.1073, No. 1076, No.1252, No.1376, No. 1514, No.1575, B区, B区T	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	18.0	7.8	26.5	1480.0	19.1	10YR7/8 黄褐	7.5YR7/6 橙	白色粒 混	良好	口辺部・胴部筋波状 文(胴部6本)→胴部縦 状文(10本)、胴下半部 縦ミガキ	口辺～頸部横ミガキ、 胴部ナテ後縦ミガキ (荒い)	-	
36	-	00725	4	SB4002	No.1401	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	<19.2>	6.8	26.1	1420.0	20.4	10YR5/2 灰黄褐	10YR3/1 黒褐	白色粒 混	良好	口辺部・胴部筋波状 文(胴部7本)→胴部縦 状文(9本)→胴部筋波 垂下文(2対4ヶ所)、胴 下半部縦ミガキ、底面 ミガキ	口縁～頸部、底部ナテ 後縦ミガキ、胴部ナテ 後縦ミガキ、底面ミガキ	-	
36	-	00729	4	SB4002	No.356, No.387, No.384, No. 985, No.988, No.989, No.992, No.998, 1002, No.1310, No. 1311, No.1321, No.1326, 1No. 1327, No.1329, No.1518, C区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	<17.4>	6.5	24.3	1175.0	-	10YR6/4 にぶい黄 橙	5YR5/6明 赤褐	白色粒 混	良好	口辺部・胴部筋波状 文→胴部縦ミガキ、胴 下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	
36	-	00730	4	SB4002	No.1095, No.1097, No.1380, No.1473, No.1541, No.1583, No.1586, No.1590, C区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	80%	15.0	6.3	16.7	525.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR4/2 灰黄褐	白色粒 混	良好	口辺部剥離、胴下半 部縦ミガキ、底部横ミ ガキ、底面ミガキ	横ミガキ・剥離、底面ミ ガキ	-	
36	184	00731	4	SB4002	No.1054	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	14.8	5.9	16.6	700.0	-	10YR3/1 黒褐	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	胴部筋波状文(14本)→口 辺部・胴上部筋波状 文(9本)、胴下半部縦 ミガキ、底部ナテ、底面 剥離	横ミガキ	-	胴部輪積痕
36	-	00732	4	SB4002	No.885, No.886, No.887, No. 888, No.1163, No.1165, No. 1166, No.1167, No.1168, No. 1280, No.1282, No.1283, No. 1449, D区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	<13.8>	5.6	15.6	538.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良	口辺部・胴部筋波状 文(胴部5本)→胴部縦 状文(7本)、胴下半部縦 ミガキ、底面ミガキ	口縁～胴上半部横ミガ キ、胴下半部剥離、底 面ミガキ	-	
36	184	00733	4	SB4002	No.510, No.515, No.517, No. 518, No.1066, No.1098, No. 1099, No.1104, C区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	80%	13.8	6.0	16.8	680.0	14.1	7.5YR4/1 褐灰	10YR5/3 褐	径1mmの黒 粒 混	良好	口辺部・胴部筋波羽 状文→胴部縦ミガキ、 胴下半部縦ミガキ	ハケ後横ミガキ	-	輪積痕
36	184	00734	4	SB4002	No.1254, B区, B区T, C区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	70%	13.2	5.3	17.2	600.0	-	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR7/2 にぶい黄 橙	径1mmの黒 粒 混	良	口縁～胴中央部筋波 状文(剥離あり)単位 7本、胴下半部縦ミガ キ、底面ミガキ	口縁～胴上半部横ミガ キ、胴部横ナテ、底面 ミガキ	-	輪積痕
36	-	00735	4	SB4002	No.1200, No.1201, D区	弥生後期	弥生土器	甗	口縁部～底 部	90%	12.3	5.1	13.4	313.0	-	10YR4/1 褐灰	5YR5/6明 赤褐	白色粒多く 混	良	口辺部・胴部筋波状 文(口辺7本)→胴部縦 筋波状文(7本)、胴下 部縦ミガキ・磨耗	口辺部横ナテ、胴部横 後縦ミガキ	-	輪積痕
36	184	00737	4	SB4002	No.1052	弥生後期	弥生土器	台付甗	口縁部～脚 部	100%	15.0	9.5	17.6	755.0	-	10YR5/3 にぶい黄 褐	10YR6/4 にぶい黄 褐	白色粒 混	良好	口辺部筋波状文(3 本)→胴部筋波羽状文 (7本)、底部縦ミガキ ナテ、接合部縦ミガ キ、脚上部ナテ後縦ミ ガキ	胴部ナテ後横ミガキ、 脚上部横ナテ	-	小型



付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm						
37	-	00749	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部	20%	<23.0>	-	258.0	-	10YR7/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部横線羽状文 →横線横線文	-	
37	184	00752	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	甕	胴上半部～ 底部	50%	-	<7.5>	1082.0	23.6	10YR7/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混 入	良好	胴上半部横線羽状文、中央部刻線、下半部ミガキあり	-	
38	-	00755	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～胴下 半部	50%	-	-	1190.0	-	10YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	口縁部縦ミガキ、頸部横線羽状文、胴中央部刻線、下半部横ミガキ	口縁部 内外面、 胴部外面	
38	185	00757	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸 部	20%	<30.0>	-	1279.0	-	2.5Y8/4 淡黄 (2.5YR5/8明赤帯)	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部横線羽状文→口縁部横線文	口縁部 内外面、 胴部外面	
38	185	00758	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	60%	-	8.8	3420.0	34.3	10YR8/3 浅黄橙	径～4mm以 下の白色粒 多い	良	口縁部・胴上半・胴下半部横ミガキ、頸部横線文(7本)、胴中央部横ミガキ、底面ナデ	口縁部 内外面、 胴上半 ～中央 部外面	
38	185	00759	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	60%	-	8.4	2454.0	24.4	10YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部縦ミガキ、頸部横線文(8本)3段、胴上半～中央部横ミガキ、胴下半部横ミガキ、底面ナデ	口縁部 内外面、 胴上半 ～中央 部外面	外面一部に煤 附着
38	185	00760	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～底 部	80%	<22.2>	-	1842.0	-	10YR7/4 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部横ミガキ、胴上半部ハケ後ナデ	口縁部 内外面、 胴上半 ～中央 部外面	口縁部突起4単 位(1ヶ文)
38	185	00763	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	胴上半部～ 底部	50%	-	6.6	634.0	15.5	10YR7/4 にぶい、黄 橙	径1～3mmの 礫、白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、底面ナデ	外面(剥 離)	内面赤彩附着
38	-	00764	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～胴 上半部	30%	-	-	559.0	-	10R3/8 赤、 7.5YR6/6 橙	白色粒 混	良	口縁部縦ミガキ、頸部横線文(15単位)、胴部横ミガキ	口縁部 内外面、 胴部外面	
38	185	00772	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	有政口 縁壺	口縁部～頸 部	10%	<13.8>	-	82.0	-	10R4/6赤 橙	径2～3mmの 白色粒多く 混	良好	横ミガキ(頸部削り後横ミガキ)	内外面	口縁部2孔あり、 胎土中の白色 粒が赤彩しても 目立つ
39	-	00751	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	-	-	25.0	-	7.5YR6/6 橙	径1mm以下 の礫 混	良好	口縁部横線羽状文、 口縁部ナデ	-	
39	186	00756	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～胴 下半部	70%	<30.4>	-	3639.0	<40.6>	10YR7/3 浅黄橙	白色粒少な め	良好	口縁部縦ミガキ、頸部横線文(6本4段)→ 胴上半部刻線、胴中央部横ミガキ	口縁部 内外面、 胴部外面	
-	-	00761	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸 部	20%	-	-	790.0	-	10R5/6赤 橙 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良	口縁部縦ミガキ、頸部横線文、胴上半部横ミガキ	口縁部 内外面、 胴上半 部外面	
39	-	00766	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	-	18.0	-	10YR8/3 浅黄橙	径1mm以下 の礫 混	良好	頸部銘格字状文、 胴上半部横ミガキ	-	
39	-	00767	4	SB4002	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	-	8.0	-	10YR8/4 浅黄橙	混入少ない	良好	頸部銘格字状文	胴上半 部外面	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g							
39	-	00708	4	SB4002	No.1403	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	-	-	-	10R3/8赤、 10YR8/4赤、 10YR8/4浅黄橙	径1mm以下の織入	良好	口縁部縮波状文、 口辺部縦ミガキ	横ミガキ	口辺部 内外面		
39	-	00709	4	SB4002	No.1347,B区	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	-	-	-	2.5YR6/6 5YR7/6橙	白色粒 混	良好	口縁部縮波状文、 口辺部縦ミガキ	横ミガキ	口辺部 内外面		
39	-	00771	4	SB4002	No.308	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	-	-	10YR8/3 7.5YR7/4浅黄橙	白色粒 混	良好	刺突文一覽描線文	ナデ	外面 上半部		
39	-	00853	4	SB4003	A区,B区,b区,ヶ	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20%	<24.5>	-	-	7.5YR6/4 にぶい橙	白色粒 混	良好	口縁部縮波状文、 頸部縮波状文、口辺部縮波状文、 口辺部縦ミガキ、 磨耗ナデ	ナデ後横ミガキ	-	口縁部内面赤彩、 煤片着	
39	-	00854	4	SB4003	A区,B区,T	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～頸部	20%	<21.4>	-	-	7.5YR6/3 にぶい橙	径1～3mmの礫や多い	良	頸部縮波状文、 口辺部縮波状文、 口辺部縦ミガキ、 磨耗	ナデ	-	他の蓋と比へ粘土異なる	
39	-	00671	4	SB4008	No.1,SB4007No.1	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸上半部	20%	<17.8>	-	<20.0>	10YR6/4 にぶい黄	白色粒 混	良好	口縁部縮波状文、 胸中央部縮波状文、 胸中央部縮波状文、 胸中央部縮波状文、 下半部縮波状文、 下半部縦ミガキ	胸上半部横ミガキ、 下半部斜ハゲナデ	-		
39	-	00672	4	SB4008	No.3,No.4,No.7,No.8	弥生後期	弥生土器	甕	胸下半部～底部	30%	-	8.3	840.0	10YR6/4 にぶい黄	白色粒少なめ	良好	胸中央部縮波状文、 胸下半部斜ハゲ後横ミガキ、 底面ナデ	胸部横ハゲ後横ミガキ、 底面一部ナデ	-		
39	186	00675	4	SB4008	No.1,No.5	弥生後期	弥生土器	台付甕	口縁部～底部	50%	<15.3>	-	288.0	10YR7/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	口縁部縮波状文(10本)、 胸中央部縮波状文(10本)、 胸中央部斜ハゲ、 下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	胸部輪襷痕	
40	-	00571	4	SB4016	炉体	弥生後期	弥生土器	壺	胸下半部～底部	40%	7.6	12.4	677.0	7.5YR7/4 にぶい橙	白色粒 混	良好	胸下半部磨耗・ 縦ミガキ、 底面横ミガキ	横ミガキ	-	胸部輪襷痕	
40	-	00576	4	SB4016	No.6,No.7,南区Pt5,T	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸下半部	70%	15.4	-	543.0	10YR5/3 にぶい黄	径～3mm以下の白色粒 混	良好	口縁部縮波状文(9本)、 胸下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	胸部輪襷痕	
40	186	00577	4	SB4016	No.12,No.13,No.15	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸下半部	50%	20.8	-	622.0	7.5YR6/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	口縁部縮波状文(口辺部6本)→ 縮波状文(9本)、 胸下半部縦ミガキ	横ミガキ	-		
40	186	00578	4	SB4016	No.7,Pt5	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～頸部	20%	16.8	-	257.0	7.5YR7/3 にぶい橙	白色粒 混	良好	口唇部・ 口縁部縮波状文、 胸部縮波状文	横ミガキ	-		
40	-	00580	4	SB4016	南区Pt5,東南区カ',上層	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	40%	<24.0>	-	365.0	7.5R4/6 赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	横ミガキ	内外面		
40	-	00582	4	SB4016	-	弥生後期	弥生土器	高杯	胸部	5%	-	6.0	16.0	7.5YR7/4 にぶい橙	径1～2mmの	良好	縦・横・斜ミガキ	ナデ	外面	内面一部に赤彩片着	
40	-	00583	4	SB4016	-	弥生後期	弥生土器	鉢	底部	5%	-	3.5	44.0	7.5YR7/3 にぶい橙	径1mmの礫 混	良	胸部横ミガキ、 底部削り後ナデ	横ミガキ、 磨耗	全面		
40	-	00585	4	SB4016	No.5,No.10	弥生後期	弥生土器	甗	胸部～底部	40%	<4.9>	-	178.0	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良	口縁部横ミガキ、 胸部斜ハゲ、 底面ナデ	口辺部横ミガキ、 斜ハゲ、 底部ナデ	-	単孔	
40	186	00805	4	SB4029	No.1	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～胸上半部	40%	21.1	-	980.4	7.5YR5/4 にぶい黄	径1mm以下の織 混	良好	口縁部縮波状文、 胸部斜ハゲ	口辺部横ミガキ、 胸部縦ミガキ	-		
40	186	00811	4	SB4029	床,中4/南区	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～胸上半部	30%	<16.3>	-	181.6	10R4/6赤、 10YR7/4赤、 7.5YR7/4にぶい黄	径1～2mmの白色粒・礫 混	良好	頸部縮波状文(15本位)、 口辺部・ 胸部横ミガキ	横ミガキ	口辺部 内外面、 胸部外面		
40	186	00812	4	SB4029	No.8,南区	弥生後期	弥生土器	片口鉢	口縁部～底部	70%	16.9	3.7	335.1	10R4/6赤	白色粒 混	良	横ミガキ	横ミガキ	内外面		

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm									重量g
40	187	00815	4 SB4030	No.1,北西区1層,北西区床,南東区床,中ノ西区床	弥生後期	弥生土器	口縁部～胴上半部	50%	17.6	-	(18.4)	732.0	<20.8>	7.5YR6/3 黒褐	7.5YR3/1 黒褐	白色粒 混	良好	口辺部・胴部輪郭波状文(8本)→胴部輪郭波状文(10本)、胴部縦ハケ	横ハケ	-	胴部内面輪郭 痕	
40	-	00816	4 SB4030	No.5,北西区床,北東区,中ノ西区床	弥生後期	弥生土器	口縁部～胴上半部	30%	13.5	-	(9.6)	261.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/6 橙	径1mmの小白色粒 混	良好	胴部輪郭波状文→口辺部・胴部輪郭波状文	横ミガキ	-	胴部内面輪郭 痕	
40	-	00817	4 SB4030	No.5,北西加,黒縄床	弥生後期	弥生土器	口縁部～胴下半部	30%	13.7	-	(13.6)	317.4	-	7.5YR5/4 にぶい褐	10YR4/2 灰黄褐	径1mm以下の白色粒 混	良好	口辺部・胴部輪郭波状文→胴部輪郭波状文(9本)、胴部輪郭波状文(9本)、胴下半部縦ミガキ後削り	横ミガキ	-	胴部輪郭痕	
40	-	00820	4 SB4030	床,北西区床,中ノ西区床,中ノ西区床	弥生後期	弥生土器	頸部～底部	30%	-	<5.6>	(9.9)	191.6	<9.8>	10YR6/3 にぶい黄	10YR7/3 にぶい黄	径1mm以下の白色粒 混	良好	口辺部・胴部輪郭波状文→胴部輪郭波状文、胴下半部縦ミガキ後削り	横ミガキ	-	小型	
40	187	00821	4 SB4030	No.5,北西区床,南西区床	弥生後期	弥生土器	口縁部～台部	50%	13.7	-	(15.0)	342.0	<14.8>	7.5YR2/1 黒	10YR5/2 灰黄褐	白色粒 混	良好	胴部輪郭波状文(8本)→胴部輪郭波状文(8本)→口辺部・胴部輪郭波状文、胴中央～底部斜ハケ、ミガキ	口縁～胴中央部横ハケ後ナデ、胴下半部縦ミガキ	-	輪郭痕	
40	-	00831	4 SB4030	No.18	弥生後期	弥生土器	杯底部～脚部	30%	-	<13.6>	(13.5)	394.0	-	7.5YR6/4 にぶい橙	10R4/8赤	径1mm以下の白色粒 混	良好	杯部斜ナデ、脚部縦ミガキ	杯部斜ナデ	外面	外面縁付着か	
40	-	00832	4 SB4030	No.1	弥生後期	弥生土器	杯底部～脚部	30%	-	8.1	(7.8)	139.4	-	10R4/8赤	10YR7/4にぶい黄	白色粒 混	良好	杯部斜ナデ	杯部斜ナデ	外面	胴部内面一部に赤彩付着	
40	187	00833	4 SB4030	No.10	弥生後期	弥生土器	口縁部～底部	60%	<20.1>	7.0	10.2	522.1	-	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	径1mm以下の黄 混	良好	胴上半部縦ミガキ、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	内外面		
40	-	00836	4 SB4030	No.19	弥生後期	弥生土器	底部	10%	-	4.9	(3.2)	113.0	-	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	径1mmの黄 混	良好	横・斜ミガキ、底面削り	横・斜ミガキ	-	単孔	
40	-	00837	4 SB4030	No.12	弥生後期	弥生土器	底部	10%	-	3.2	(1.5)	23.4	-	10YR6/4にぶい黄	10YR5/1褐灰	白色粒 混	良好	斜ナデか、底面削り後ナデ	ナデ	-	単孔	
40	-	00902	4 SB4030	No.5	弥生後期	弥生土器	口縁部～胴上半部	20%	<15.0>	-	(9.3)	211.6	-	7.5YR6/4にぶい橙	10YR6/3にぶい黄	白色粒 混	良好	口縁部横ナデ、口辺部・胴上半部輪郭波状文、胴部輪郭波状文	横ミガキか	-		
41	187	00822	4 SB4030	No.11	弥生後期	弥生土器	口縁部～底部	100%	11.9	5.5	24.5	1226.0	14.9	10YR7/3にぶい黄	10YR7/4にぶい黄	径1～2mmの白色粒 混	普通	口縁～頸部横ハケ後横ミガキ、胴上半～中央部ナデ後横ハケ、胴下半部ナデ	横ミガキ	-	小型、輪郭痕	
41	187	00823	4 SB4030	No.5	弥生後期	弥生土器	口縁部～頸部	20%	30.5	-	(13.3)	1108.6	-	10R5/6赤	10R5/6赤	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、頸部輪郭波状文	横ミガキ	口辺部・口外面、口縁部～頸部内面	口唇部突起4単位	
41	-	00825	4 SB4030	Pr18,中ノ西区床	弥生後期	弥生土器	胴下半部～底部	20%	-	10.9	(7.3)	575.6	-	10R5/6赤	10YR7/4にぶい黄	径1～3mmの白色粒・褐色粒 混	良	縦・横ミガキ、底面ナデ削離	縦・横ミガキ	底部外面		
41	-	00826	4 SB4030	ヶヶ北カ<7>	弥生後期	弥生土器	口縁部～頸部	20%	<23.2>	-	(13.0)	265.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒 混	良	口辺部縦ミガキ、頸部輪郭波状文	口辺部輪郭、頸部ハケ	口辺部内外面		
41	-	00827	4 SB4030	No.8,南区1層,南西区1層,中ノ西区床	弥生後期	弥生土器	口縁部	20%	<21.3>	-	(8.0)	260.4	-	10R5/8赤	2.5Y7/3浅黄	混入少ない	良好	縦ミガキ	ハケ後縦ミガキ、口辺下半部横・斜ハケ	口辺部内外面		
41	-	00828	4 SB4030	No.6,北区床,南西区1層	弥生後期	弥生土器	胴部	20%	-	-	(10.6)	295.9	-	10R4/6赤	2.5Y7/4浅黄	白色粒 混	良好	頸部輪郭T字文、胴上半部縦ミガキ	ハケナデ・ミガキ	口辺部内外面	T字文外面赤彩付着	

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g						
41	-	00829	4	SB4030	No.7	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	109.2	-	7.5R4/6 赤、 10YR6/4 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	頸部縮緋線文・縮 緋垂下文、胴上半部 縮緋文、胴上半部縮 緋文	口辺部・ 胴上半 部外面		
41	187	00838	4	SB4032	□	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	20%	17.9	-	416.8	-	5YR6/6橙	白色粒 混	良好	口辺部・胴部縮緋波状 文(12本)・胴部縮緋文 横ミガキ	-	輪轆痕	
41	187	00839	4	SB4032	No.10,南東区床	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	70%	15.6	6.0	854.0	16.1	7.5YR6/6 橙	白色粒 混	良好	口辺部・胴部縮緋波状 文(9本)・胴下半部縮 緋文(10本)・胴下半部縮 緋文、底面ミガキ	胴部ハネ後横ミガキ、 底面ミガキ	-	胴部粘土斑痕
41	-	00842	4	SB4032	ヶ北カハフ	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	30%	<13.0>	2.7	81.7	-	7.5YR6/4 にぶい 橙、 2.5YR4/6 赤褐	径1mmの礫 多い	良	胴部横・斜ミガキ、底部 斜ミガキ	全面		
41	-	00843	4	SB4032	No.6	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部～体 下半部	60%	-	(ツマミ部) 5.2	282.6	-	2.5YR5/6 明赤褐	長石・雲母 混	良好	ツマミ部横ナデ、体部 縦ミガキ	-	意図的に径の 小さな蓋になる 小加工した感 じ。天井部車孔	
41	-	00844	4	SB4032	-	弥生後期	弥生土器 蓋	ツマミ部	20%	-	(ツマミ部) 4.6	43.8	-	10YR8/4 浅黄橙	白色粒 混	良好	縦・斜ミガキ	-	車孔	
41	-	00845	4	SB4032	-	弥生後期	弥生土器 鉢	胴下半部～ 底部	5%	-	<6.0>	35.4	-	10R5/6赤	白色粒 混	良好	胴部ミガキ、底部一部 斜離	全面		
41	187	00714	4	SB4035	No.2, No.3, No.5, 北区床, 北区1 区1層, 北西区1層, Pt南西	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 下半部	70%	<21.8>	-	1837.0	22.3	7.5YR6/3 灰褐	白色粒 混	良好	口縁部列み、口辺部・ 胴部縮緋波状文(11本) ・胴部縮緋波状文(14本)、 胴下半部縮緋ミガキ	口辺部ナデ後横ミガ キ、胴部斜ナデ	-	粘土紐痕
41	-	00715	4	SB4035	No.4	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～ 底部	30%	-	6.4	297.0	-	7.5YR6/3 にぶい褐	径1mmの礫 多く混	良好	胴中央部縮緋波状 文、底面ナデ	-		
41	-	00717	4	SB4035	北西区1層	弥生後期	弥生土器 蓋	体部～裾部	10%	-	<23.4>	258.0	-	10YR3/3 暗褐	白色粒 混	良好	口縁部横・斜ミガキ、縦 横ミガキ	-		
42	187	00691	4	SB4038	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	90%	19.4	6.7	1774.0	20.8	2.5YR6/4 にぶい橙	白色粒 混	良好	口縁部縮緋ナデ、口辺 部・胴部縮緋波状文(8 本)・胴部縮緋波状文(8 本)・胴下半部縮緋ミガ キ、底上半部縮緋ミガ キ、底下半部・底面ナ デ	-		
42	187	00692	4	SB4038	No.16	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	70%	14.1	5.3	548.0	-	7.5YR6/3 にぶい褐	白色粒多く 混	良	口辺部縮緋波状文、 胴部縮緋波状文(9本)、 胴部縮緋波状文刺離、 胴部縮緋、底部縮緋ミガ キ、底面ミガキ	胴中央 部外面		
42	-	00695	4	SB4038	炉1	弥生後期	弥生土器 壺	胴下半部～ 底部	30%	-	7.2	1044.0	-	5YR6/4に ぶい橙、 (10R5/6 赤)	径1mm以下 の礫 混	良好	胴中央部縮緋波状文、 縮緋波状文(9本)、胴 部縮緋波状文刺離、 胴部縮緋、底部縮緋ミガ キ、底面ミガキ	胴中央 部外面		
42	-	00696	4	SB4038	Pt7	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～頸 部	30%	(20.6)	-	450.0	-	10R5/6 赤、 10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	胴中央部縮緋ミガキ、下 半部縮緋ミガキ、底上半 部縮緋ミガキ、底下半部 縮緋ミガキ、底面庄痕	口辺部 内外面、 胴部外 面		
42	-	00697	4	SB4038	No.4, No.5	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	30%	<28.9>	-	352.0	-	2.5YR6/6 明赤褐	白色粒 混	良	縦ミガキ	外面、杯 部内面		
42	-	00699	4	SB4038	No.3	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	-	13.8	392.0	-	10R4/6赤 (脚部) 10YR7/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	杯底部・裾部縮緋ミガキ、 斜・横ハネ	外面、杯 部内面		
42	-	00713	4	SB4038	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	(4.8)	14.0	-	7.5YR6/6 明黄褐	白色粒 混	良	裳縮緋線文、縮緋 波状文	-	外面縮緋部分 一部に赤彩付 着	
42	188	00589	4	SB4056	P4, Pt6, Pt7, Pt10, Pt11, Pt20, 上 層	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴部	30%	-	(28.8)	913.0	-	5YR6/6橙	白色粒 混	良好	裳縮緋線文、縮緋 波状文、縮緋羽状文、 口辺部・胴部縮緋ミガ キ	外面、杯 部内面	外面黒斑、内面 縮緋線文1ヶ所	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施工含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g							
42	188	00580		4 SB4056	P18,上層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	<16.7>	5.5	18.4	683.0		白色粒 混	良好	口辺部、胴部備波状文(7本)→備波状文(8本)、胴上半部縦ミガキ、下半部縦ミガキ	口辺部、胴上半部縦ミガキ、頸部ハケナデ、ハケ後縦ミガキ、胴下半部縦ミガキ、底面ミガキ	-	口辺部内面赤彩付着	
42	-	00592		4 SB4056	上層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	20%	13.9	-	(4.7)	85.0		白色粒 混	良好	口縁部ハケナデ、口辺部備波状文→備波状文	横ミガキ	-	折返口縁	
42	-	00593		4 SB4056	上層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	(6.1)	50.0		白色粒 混	良好	口唇部、口辺部備波状文	-	-	折返口縁	
42	-	07450		4 SB4056	上層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	(2.2)	8.0		白色粒 混	良好	備波状文	ナデ	-	折返口縁	
42	188	00594		4 SB4056	P2,P8,P12,P19	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	70%	<26.7>	(15.8)	23.8	987.0		白色粒・径1mmの礫 混	良好	杯部、杯底部縦ミガキ、脚部縦ミガキ	杯部縦ミガキ、杯底部(脚部)横ハケナデ	外面、杯内面	脚部内面赤彩付着	
42	-	00595		4 SB4056	上層	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底部	20%	<15.6>	4.5	7.5	103.0		白色粒 混	良好	縦・横・斜ミガキ、底面ミガキ	横・斜ミガキ	全面(底面剥離)		
42	-	00596		4 SB4056	P15,上層	弥生後期	弥生土器 蓋	胴部～杯部	20%	<18.3>	-	(8.1)	100.0		白色粒・径2mmの礫 混	良好	縦・斜ミガキ、杯部ナデ	横・斜ミガキ、杯部ナデ	-		
43	-	00701		4 SB4066	Pt.2	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	20%	<26.9>	-	(8.8)	218.0		白色粒少し 混	良好	口縁部縦ミガキ、口辺部縦ミガキ	横ミガキ	内外面		
43	-	00702		4 SB4066	南区	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	(5.8)	36.0		白色粒 混	良好	口縁部縦文、胴突カ、口辺部ハケ後、ミガキ	ミガキ	全面(底面剥離)		
43	-	00703		4 SB4066	No.2,南区	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	30%	-	-	(7.9)	258.0		白色粒 混	良好	杯底部縦ミガキ、脚部縦ミガキ	杯部剥落、脚部縦ミガキ	外面、杯内面(剥離)		
43	-	00704		4 SB4067	No.2	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～底部	80%	6.6	(25.4)	1.398.0	19.8		白色粒 混	良好	口辺部、胴部備波状文(8本)→備波状文(6本)、胴下半部縦ミガキ、底面ミガキ	口辺部、胴中央部ナデ後縦ミガキ、胴下半部ナデ後縦ミガキ、底面ミガキ	-	粘土紐痕、備波状文の工具が鑿状のものと思われる	
43	188	00705		4 SB4067	No.3	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	50%	18.2	(15.5)	1065.0		白色粒 混	良好	脚部縦ミガキ、杯部縦ミガキ、2段目脚部縦ミガキ	脚上半部ナデ、下半部縦ミガキ	外面	2段脚部		
43	188	00706		4 SB4067	No.4	弥生後期	弥生土器 無頸壺	口縁部～底部	70%	<10.7>	6.2	13.8	488.0	15.4		白色粒 混	良好	脚部縦ミガキ、底面縦ミガキ、底面ミガキ	脚部ナデ後縦ミガキ、底面ミガキ	外面	口縁部2孔対の孔
43	-	00800		4 SB4070	-	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	5%	-	-	(5.2)	28.0		白色粒 混	良好	頸部備波羽状文	-	-	単孔	
43	-	00861		4 SB4070	No.1	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	50%	<12.7>	-	(8.0)	202.0		白色粒 混	良好	杯部縦ミガキ、脚部縦ミガキ	杯部縦ミガキ	外面、杯内面		
43	-	00862		4 SB4070	-	弥生後期	弥生土器 台付甕	脚部	30%	5.0	(4.2)	59.0		径1mmの礫 混	良好	縦・横ミガキ	底面縦ミガキ、脚上部分部ナデ、下半部縦ミガキ、杯部ナデ	脚上部分部外面、脚上部分部内面	-		
43	189	00510		5 SB5047	No.2, No.3	弥生後期	弥生土器 台付甕	口縁部～脚部	40%	<15.0>	-	(14.5)	251.0		白色粒 混	良好	口縁部ナデ、胴上半部備波状文、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ、底面ナデ	-		
43	-	00511		5 SB5047	No.5, SB6045周溝	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～脚部	50%	14.4	-	(9.8)	368.0		白色粒 混	良好	口辺部、胴部備波状文(口辺部8本)→備波状文(8本)	横ミガキ	-		
43	189	00512		5 SB5047	SB6045周溝	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	<6.5>	22.8	1038.0		白色粒少し 混	良好	口辺部、胴部備波状文→備波状文、胴下半部縦ミガキ	脚部縦ミガキ、脚上半部一部ハケナデ	-	口辺部内面一帯赤彩付着		



付表 4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	高さcm								
45	-	00547	6	SB6044	No.6	弥生後期	弥生土器 蓋	ソマミ部～唇部	60%	-	マミ部) 4.1	(10.1)	342.0	-	7.5YR7/4 灰褐色	7.5YR5/2 白色粒 混	良好	天井部ナデ、ソマミ部指圧痕、体部ハケ後縦ミガキ	天井部ナデ、ナデ後縦ミガキ	-	体部外面輪積痕、天井部6孔
46	-	00537	6	SB6044	No.1, No.2, No.13, Pt12, T北	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴下半部	80%	18.6	-	(23.2)	1162.0	19.5	7.5YR6/6 橙	混入少なめ	良好	胴部斜ハケ後縦ミガキ、胴中央部縦ミガキ	胴部斜ハケ後縦ミガキ、胴中央部縦ミガキ	-	輪積痕
46	190	00538	6	SB6044	No.3	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	60%	16.0	6.6	20.3	825.0	-	10YR7/3 橙	白色粒少なめ	良好	口縁部・胴部輪積痕(6本)、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	輪積痕
46	-	00539	6	SB6044	No.7, No.12, Pt5, Pt7, c	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴下半部	50%	18.9	-	(24.6)	1092.0	(21.0)	7.5YR7/4 灰黄褐色	径～3mmの白色粒 混	良好	口縁部・胴部輪積痕(9本)、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	輪積痕
46	190	00540	6	SB6044	No.9, b, d	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	80%	18.8	7.5	28.4	1684.0	20.2	7.5YR6/4 橙	径1mm以下の砂 混	良好	口縁部斜ハケ後縦ミガキ(8本)、胴部輪積痕(8本)、口縁部輪積痕(9本)、胴中央部斜ハケ後下半部ナデ、胴下半部縦ミガキ	口縁部輪積痕(8本)、胴部輪積痕(8本)、胴下半部縦ミガキ、胴中央部斜ハケ後下半部ナデ	-	折返口縁、粘土紐痕
46	-	00542	6	SB6044	No.8	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴下半部	30%	-	-	(18.8)	622.0	24.4	7.5YR4/6 赤	白色粒やや多い	良好	頸部輪積痕(9本)、胴部輪積痕(9本)、胴下半部縦ミガキ	胴上半部ナデ、中央部輪積痕(9本)、胴下半部縦ミガキ	胴部外面	胴部外面煤付層、内面一部黒化・赤彩残
46	-	00548	6	SB6044	No.11	弥生後期	弥生土器 甕	胴下半部～底部	40%	-	3.9	(4.6)	101.0	-	7.5YR7/3 橙	褐鉄粒 混	良好	縦ミガキ、底面ナデ、波状文	ナデカ(剥離気味)	-	小型
46	190	00515	6	SB6067	No.1, A	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	90%	15.3	6.2	18.1	835.0	-	10YR5/3 橙	白色粒 混	良好	口縁部・胴部輪積痕(2本)、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	胴部輪積痕
46	190	00326	7	SB7047	No.1	弥生後期	弥生土器 高杯	口縁部～唇部	100%	21.5	12.2	19.9	948.0	-	10R4/6 赤	径1mmの砂 混	良好	口縁部斜ナデ後縦ミガキ、杯部・胴部ナデ後縦ミガキ、胴部ナデ後縦ミガキ	杯部ナデ後縦ミガキ、胴部ナデ後縦ミガキ、胴部ナデ後(胴部)杯接合部工具によるおさえ	外面、杯内面 (剥離)	口縁部突起(4ヶ所)
46	-	00328	7	SB7047	No.4, No.5, No.6, 南区、北西区、南北ハ、カ、床	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	60%	10.9	-	(14.0)	390.0	11.2	7.5YR5/2 灰褐色	白色粒 混	普通	胴部輪積痕(2本)→口縁部・胴部器面荒れ	口唇部剥離気味、横ミガキ	-	小型
46	190	00329	7	SB7047	No.7	弥生後期	弥生土器 台付甕	口縁部～底部	70%	14.5	-	(14.9)	636.0	-	5YR4/4に赤褐色	混入物わずか	良好、黒斑あり	輪積痕(2本)→口縁部・胴部輪積痕(2本)、胴下半部縦ミガキ	横ミガキ	-	頸部輪積痕
46	-	00330	7	SB7047	No.2	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴部	40%	13.8	-	(9.3)	326.0	-	7.5YR4/1 褐灰	白色粒 混	良好	胴部輪積痕(7本)→口縁部輪積痕(8本)→口縁部輪積痕(7本)	横ナデ	-	小型、頸部輪積痕
46	-	00348	7	SB7047	北西区、SB8024No.07	弥生後期	弥生土器 甕	胴部	10%	-	-	(9.2)	112.0	-	7.5YR4/1 褐灰	白色粒 混	良好	胴上部輪積痕(2本)→口縁部輪積痕(2本)	-	-	-
47	190	00327	8	SB8001	南東区、ケ	弥生後期	弥生土器 高杯	口縁部～唇部	100%	16.7	9.1	14.2	406.0	-	2.5YR4/8 赤褐色	白色粒・石英・角閃石 混	良	縦ミガキ	杯部縦ミガキ、胴部縦ミガキ	外面、杯内面	脚部輪積痕
47	190	00331	8	SB8001	No.1, 南東区、上層、ケ、SD8001	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴下半部	40%	-	-	(33.1)	1301.0	<25.7>	7.5R3/4 暗赤、10YR7/4 橙	白色粒 混	良	口縁部縦ミガキ、頸部文(縦、波交互に2部)、頸部中央、胴部縦ミガキ	口縁部縦ミガキ、胴上半部縦ミガキ、胴中央部横割り、下部斜ハケ	口内面、外面、胴部外面	-
47	190	00332	8	SB8001	ケ	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底部	70%	10.2	4.6	(12.9)	236.0	-	10YR5/4 橙	白色粒 混	良好	口縁部・胴部輪積痕(5本)→胴下半部縦ミガキ	胴部縦ミガキ、底面ナデ	-	小型、胴部輪積痕

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm						
47	-	00337		8 SB8001	弥生 後期	弥生土器	甕	胸部	20%	-	-	7.5YR7/4 にぶい燻	白色粒 混	良好	ナデ	-	胸部輪積真		
47	-	00338		8 SB8001	弥生 後期	弥生土器	壺	胸下半部～ 底部	10%	8.5	1016.0	5YR7/6 赤燻	径1mm位の 礫や多い	良	横ハケ	-	底部付近粘土 付着		
47	-	00343		8 SB8001	弥生 後期	弥生土器	甕	胸部	10%	-	14.0	5YR5/8明 赤燻	径1～3mmの 礫わずか	良好	-	-	-		
47	-	00345		8 SB8001	弥生 後期	弥生土器	甕	胸部	10%	-	9.0	7.5YR5/3 にぶい燻	白色粒 混	良好	-	-	小型		
47	191	00333		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	台付甕	口縁部～胸 下半部	70%	<14.0>	488.0	10YR7/4 にぶい燻	白色粒 混	良好	胸部横ミガキ、底面ナ デ	-	胸部輪積真		
47	191	00334		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	壺	口縁部～頸 部	20%	23.6	533.0	7.5YR7/6 赤燻	白色粒少し 混	良好	口縁部横ミガキ、斜ミガキ、 上半部斜ハケ	口縁部、 内外面、 脚部外			
47	191	00335		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	壺	口縁部～頸 部	20%	<28.3>	785.0	7.5YR8/3 浅黄燻	赤色粒少し 混	良、口 縁に黒 線あり	口縁部横ミガキ、剥離、 上半部斜ハケ	口縁部、 内外面、 脚部外			
47	-	00357		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	57.0	7.5YR6/4 にぶい燻	白色粒 混	良好	ハケ	-	-		
47	-	00359		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	-	22.0	7.5YR5/4 にぶい燻	混入少ない	良好	ミガキ	-	-		
47	-	00361		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	壺	口縁部～頸 部	20%	-	540.0	7.5YR6/6 赤燻	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、頸部 縦線、 上半部斜ハケ	口縁部、 内外面、 脚部外			
47	-	00363		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	17.0	7.5YR7/6 赤燻	径1mmの礫 や多い	良	磨耗	外面	一部内面漆付 着、接合しない 胸下半部の破 片に赤彩あり		
47	-	00365		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	高杯	杯底部～脚 部	20%	-	217.0	10R4/4赤 燻	白色粒 混	良好	杯部横ミガキ、底面ナ デ	杯部内 面	脚部一部黒化		
47	-	00366		8 SB8005	弥生 後期	弥生土器	高杯	杯底部～脚 部	20%	8.4	138.0	7.5YR7/4 にぶい燻	径1mmの礫 混入	良好	杯部横ミガキ、脚部縦 ミガキ	杯部、 内外面	台付脚部の 可能性あり		
48	-	00367		8 SB8006 (SB8027)	弥生 後期	弥生土器	高杯	杯底部～脚 部	40%	7.6	130.0	7.5YR7/6 赤燻	白色粒 混	良好	杯部横ミガキ	杯部、 内外面	-		
48	-	00368		8 SB8006 (SB8027)	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	-	16.0	10YR3/1 黒燻	白色粒 混	良好	口縁部横ミガキ、 上半部斜ハケ	杯部内 面	-		
48	-	00370		8 SB8006 (SB8027)	弥生 後期	弥生土器	壺	頸部	10%	-	9.0	5YR5/8明 赤燻	白色粒 混	良好	窩形横ミガキ→凹形 浮文	-	-		
48	-	00336		8 SB8029	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部～胸 部	30%	13.9	211.0	10YR4/2 灰黄燻	白色粒 混	良	横ミガキ、胸下半部斜 ハケ後、ミガキ	-	小型		
48	-	00375		8 SB8043	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	-	28.0	5YR3/1黒 燻	混入少ない	良好	横ミガキ	-	-		
48	-	00376		8 SB8043	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	10%	-	18.0	10YR4/2 灰黄燻	混入少ない	良好	口縁部横ミガキ	-	-		
48	191	00990		3 SM3003	弥生 後期	弥生土器	壺	胸上半部～ 底部	50%	6.6	903.0	10YR6/4 にぶい、 黄褐色	白色粒・赤 褐色粒 混	良好	胸中央上部横、下部 指ナデ、胸下半部縦・ 横ハケ	胸中央、 外部外	輪積真		
48	-	00876		4 SM4001	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	-	44.0	7.5YR4/2 にぶい燻	白色粒 混	良好	ハケ後、ミガキ	-	折返口縁		

付表 4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				外面色調	内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	赤彩	備考
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g							
48	-	00879	4 SM4001	No.5	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	26.0 (4.7)	23.0	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	径1mm以下の 礫 混	良好	口唇部刻み、口縁部 縞縞羽状文 口辺部縞ミガキ、頸部 ～胴上半部縞ナデ 縞ミガキ、胴上半～中 下半～底部縞ハケ、底 面刻削り	-	口辺部 内外面、 胴上半 部外面		
48	191	00883	4 SM4003	國中土器	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～底 部	95%	18.5	6.2	31.1	2022.0	10YR6/3 にぶい黄 橙	10YR6/3 にぶい黄 橙	白色粒 混	良好	口縁部縞ミガキ、頸部 縞ミガキ、胴上半～中 下半～底部縞ハケ、底 面刻削り	-	口辺部 内外面、 胴上半 部外面		
48	-	00884	4 SM4003	國中土器	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	17.7 (4.3)	-	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	白色粒 少 混	良好	縞縞波状文	-	-	三角形の透かし 孔	
48	-	01440	1-2 SQ0001	I16段々I16段集中面 (SQ01)SB17No.1	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	20%	-	<18.2>	289.0	-	2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	石英、角閃 石 混	良好	縞縞・縞ミガキ、縞部 縞ミガキ	-	外面		
48	-	01451	1-2 SQ0001	No.3	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	54.0 (5.1)	-	10R4/8赤	10R4/8赤	白色粒 混	良好	口縁部縞文	-	内外面		
48	-	01576	1-2 SQ0002	H-15段トキ	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部	5%	-	-	13.0 (5.2)	-	10YR4/1 褐灰、 10R5/6赤	10R5/8赤	白色粒少 混	良好	口縁部縞波状文、 口辺部縞ミガキ	-	内外面		
48	191	01572	1-2 SK0094	カノカNo.1,カNo.2,カNo.3, SK92(SB153)	弥生後期	弥生土器 壺	脚部	30%	-	-	2762.0 (28.1)	<42.3>	10YR7/4 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mmの白 色粒 混	良好	胴中央部縞ミガキ、胴 下半部縞ミガキ	-	胴中央 部外面		
49	-	06954	1-2 SK0235	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	8.0 (2.4)	-	10YR5/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	白色粒 混	良好	波状文	-	-		
49	-	01587	3 SK0310	No.2	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	75.0 (5.9)	-	7.5YR3/2 暗黄	7.5YR3/3 暗黄	白色粒 混	良好	口辺部縞波状文→ 縞縞波状文	-	-		
49	-	01585	3 SK0315	No.1	弥生後期	弥生土器 壺	底部	5%	-	14.2	548.0 (3.4)	-	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR7/3 にぶい橙	径1mm以下 の白色粒 混	良好	縞ミガキ、底面ミガキ、 磨耗	-	-		
49	192	01586	3 SK0315	No.2	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	70%	<28.2>	6.2	884.0 (11.9)	-	10R4/8赤	10R4/8赤	白色粒 混	良	縞縞ミガキ、底面刻 削	-	内外面	口辺部2孔1対 の孔	
49	-	01589	3 SK3018	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	12.0 (2.4)	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 にぶい黄 橙	混入少なめ	良好	縞縞波状文	-	-	折返口縁ハ口 縁肥厚	
49	-	01570	3 SK3018	No.1	弥生後期	弥生土器 壺	頸部	10%	-	-	194.0 (11.7)	-	10R4/8 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	10YR7/4 赤、 10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の白色粒 混	良好	縞縞羽状文、口辺 部縞ミガキ、頸部縞 ミガキ	-	口辺部・ 頸部一 部外面、 内面(割 離)		
49	-	00988	3 SK3246	No.1	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	20%	<11.7>	-	68.0 (7.0)	-	7.5YR6/2 灰褐	7.5YR7/3 にぶい橙	径1mmの礫 混	良好	縞縞波状文	-	口辺部縞ミガキ、胴部 縞ミガキ	-	
49	192	00989	3 SK3284	No.1	弥生後期	弥生土器 壺	口縁～頸部	20%	20.8	-	590.0 (12.3)	-	10R4/8 赤、 2.5Y8/4 淡黄	2.5Y8/3 淡黄、 10R4/8赤	白色粒 混	良好	頸部縞直線文、口 辺部縞ミガキ、口縁部・ 胴部縞ミガキ	-	口辺部 内外面、 胴部外 面		
49	192	00869	4 SK4145	SK4145,SK4259中層	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴部	30%	-	-	413.6 (11.2)	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	2.5Y7/3 淡黄	黒色粒 混	良好	縞縞波状文→胴部縞 縞波状文、T字文9/5 単位、胴中央部縞ハ ケ後、ミガキ	-	頸部縞ミガキ、胴部ナ デ	-	
49	-	00870	4 SK4145	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 上半部	20%	<15.2>	-	155.3 (11.5)	-	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	混入少なめ	良好	縞縞波状文→口辺部・ 胴部縞波状文	-	-		
49	-	00873	4 SK4145	-	弥生後期	弥生土器 高杯	脚部	30%	-	6.7	100.0 (4.5)	-	10R5/6赤	7.5YR7/4 にぶい橙	径1mm以下 の礫 混	良	ミガキ 脚部内面ナデ	-	外面(磨 耗)		
49	-	00874	4 SK4259	-	弥生後期	弥生土器 甕	頸部～胴上 半部	5%	-	-	35.0 (6.0)	-	5YR6/6 橙、 7.5YR5/4 暗赤褐	2.5YR3/3 暗赤褐	白色粒 混	良	頸部縞波状文、胴 上部刻削	-	頸部・胴 上半部 内面		
49	-	00598	3 SD3006	-	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部	5%	-	-	24.0 (4.4)	-	5YR4/4に ぶい赤褐	5YR4/4に ぶい赤褐	白色粒 混	良好	縞縞波状文	-	-	折返口縁	
49	-	00599	3 SD3006	-	弥生後期	弥生土器 甕	頸部	5%	-	-	45.0 (5.4)	-	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	白色粒 混	良好	縞縞波状文→縞縞 波状文	-	-		
49	192	00601	3 SD3006	上層	弥生後期	弥生土器 壺	頸部～胴下 半部	70%	-	-	2134.0 (37.3)	<30.7>	10YR7/3 にぶい黄 橙	10YR7/3 にぶい黄 橙	径1～2mmの 礫 混	良好	頸部縞縞線文→縞 縞垂下文(単位12本)、 口辺部・胴下半部縞ミ ガキ、胴上半～中央部 縞ミガキ	-	口辺部縞ミガキ、胴上 半～中央部縞ハケ	-	外面黒斑

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考		
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地名は省略)	底径cm	器高cm	重量g								脚部 最大径cm	外面色調
49	-	00607	3	SD3006	-	弥生後期	弥生土器 甌	胴下半部～ 底部	10%	-	5.0	(6.7)	116.0	-	7.5YR7/4 にぶい、黄 橙	10YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒・少し 混	良好	胴部縦ミガキ、底部縦 ハケ、底面ナデ	斜ハケ後、横ミガキ	-	単孔
50	192	00114	4	SD4006	No.8	弥生後期	弥生土器 鉢	口縁部～底 部	90%	11.8	4.3	5.8	186.9	10R4/6 赤、 2.5Y6/4に ぶい、黄	10R4/6赤	白色粒 痕	良好	胴部横ミガキ、底部ナ デ	横ミガキ、底部ナデ	全面	小型、底部黒斑	
50	193	00608	4	SD4006	No.215, No.220, No.223, No. 243, SP, A-B T	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～胴 下半部	50%	<19.0>	-	(21.1)	833.0	7.5YR7/4 にぶい、橙	7.5YR7/6 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	輪描葉状文(14本)→口 辺部・胴部輪描葉状文 (14本)・胴下半部ハケ 後縦ミガキ	横ミガキ	-	内面下部残付 着	
50	193	00610	4	SD4006	上層 西区東里土坑ギ集 中、西区東土坑集中下層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 上半部	30%	<21.5>	-	(16.4)	365.0	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	白色粒 混	良好	口辺部横ミガキ、胴部 削り後ミガキ	口辺部横ミガキ、胴部 削り後ミガキ	-	吉ヶ谷系、 口辺部輪描痕	
50	-	00615	4	SD4006	-	弥生	弥生土器 甕	口縁部	10%	-	-	(2.9)	20.0	10YR4/2 黒褐	10YR4/2 黒褐	極めて緻密	良	ミガキ	細文	-		
50	192	00616	4	SD4006	No.302, 東区黒土	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	70%	<11.9>	<5.2>	16.5	495.0	2.5YR3/6 暗赤褐 10YR7/3 にぶい、黄 橙	2.5YR3/6 暗赤褐 10YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良	口辺部ナデ後横ミガ キ、胴上半部横ナデ 胴下半部ナデ後縦ミガ キ、底部削り	口辺部ナデ後横ミガ キ、胴上半部横ナデ 胴下半部ナデ後縦ミガ キ、底部削り	口縁部 ～胴部 外面、口 辺部内 面	小型、胴部粘土 結痕	
50	192	00617	4	SD4006	No.55床, No.11, No.12, No.13, SP, A-B T, A-BT底, 上層	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	80%	<10.4>	4.9	10.8	283.0	10R3/6暗 赤 (10YR8/3 にぶい、黄 橙)	10R3/6暗 赤 (10YR8/3 にぶい、黄 橙)	白色粒・角 閃石 混	良好	横ミガキ、底面ミガキ	口辺部横ミガキ、胴部 ナデ	外面、口 辺部内 面	小型、輪描痕	
50	192	00618	4	SD4006	No.3床, No.5床, No.6, No.11, A- BT底, 上層、黒色土A-B へ、SP, A-B T	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～底 部	80%	13.8	5.5	16.6	602.0	10R3/4暗 赤 2.5YR7/3 淡赤橙	10R3/4暗 赤 2.5YR7/3 淡赤橙	白色粒 混	良好	頸部輪描線文、口 辺部・胴上半部横ミガ キ、胴下半部横ミガ キ、胴下半部横ミガ キ、底面ナデ	口縁部横ミガキ、胴中 尖部縦ナデ、胴下半 部横ハケ	口縁部 ～胴部 外面、口 辺部内 面	小型	
50	192	00619	4	SD4006	No.9	弥生後期	弥生土器 甕	口縁部～底 部	70%	9.8	4.5	11.1	231.0	10YR7/3 にぶい、黄 橙、 10R4/6赤	10YR7/3 にぶい、黄 橙、 10R4/6赤	白色粒 混	良好	口縁部・胴中央部横ミ ガキ、胴部・胴下半部 縦ミガキ、底面ナデ	口辺部横ミガキ、胴部 横ナデ	口縁部 ～胴部 外面、口 辺部内 面	小型、輪描痕、 胴下半部外面 赤彩付着	
50	193	00620	4	SD4006	No.232, No.236, No.237, No. 240, No.258, No.289, No.292, No.293, No.295, No.322, 東区 黒土	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～底 部	80%	<8.8>	4.5	17.2	359.0	2.5Y6/2 灰黄 2.5YR4/8 赤褐	2.5Y6/2 灰黄 2.5YR4/8 赤褐	径1mmの砂・ 白色粒・角 閃石 混	良	口辺上半部ナデ、口 辺下半部縦ミガキ、頸 部輪描線文→輪描 波状文(9本)、胴部横ミ ガキ、底面ミガキ	口辺部 ～胴部 外面、口 辺部内 面	小型、輪描痕、 外面黒斑		
50	193	00621	4	SD4006	No.4床, No.5床, No.112, 上 層A-BT底, SP, A-B T	弥生後期	弥生土器 壺	口縁部～底 部	80%	15.0	5.0	21.7	651.0	10YR7/3 にぶい、黄 橙	10YR7/3 にぶい、黄 橙	白色粒 混	良好	頸部輪描線文(2段8 本)、口辺部・胴部・底 部横ミガキ、胴下半部 縦ミガキ、底面ナデ	口辺部横ミガキ、頸～ 胴部横ナデ、胴下半 部横ハケ、底面ナデ	口辺部 内外面、 胴部～ 底部外 面	小型、胴下半部 外面赤彩付着	
50	192	00628	4	SD4006	No.112	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	90%	<15.8>	10.3	12.6	380.0	10R3/6暗 赤 (10YR7/3 にぶい、黄 橙)	10R3/6暗 赤 (10YR7/3 にぶい、黄 橙)	径1～2mmの 砂 混	良好	杯部・裾部横ミガキ、脚 部縦ミガキ	杯部横ミガキ、脚部横 ナデ	外面、杯 部内面	脚部輪描痕、脚 部内面赤彩付 着	
50	192	00629	4	SD4006	No.112	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部～脚部	100%	12.0	7.8	9.1	229.0	10R3/6暗 赤 (10YR4/1 褐灰)	10R3/6暗 赤 (10YR4/1 褐灰)	白色粒 混	良好	杯部・裾部横ミガキ	杯部横ミガキ、脚部ナ デ	外面、杯 部内面		
50	192	00630	4	SD4006	No.116, No.121, No.122, No. 129, No.130, No.136, No.137, No.138, No.139, 東区黒 土, SK4301	弥生後期	弥生土器 高杯	杯部	50%	25.7	-	(10.6)	533.0	10R3/6暗 赤	10R3/6暗 赤	白色粒 混	良	横ミガキ	横ミガキ	内外面	内面炭化物付 着、口唇部突起 4単位(7ヶ穴)	

付表4

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置		時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考
			地区	遺構・地点						注記記号 (所属遺構・地点名は省略)	口径cm	底径cm	器高cm							
50	-	00631		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	高杯	杯底部～脚部	50%	-	10.7	(6.5)	170.0	2.5Y3/6 暗赤褐 (10YR 7/3)こぶしい黄緑)	白色粒 混	良好	接合部縦ミガキ、脚部横ミガキ	杯底部、脚部横ミガキ	外面、杯部内面	杯部外面赤彩剥離、脚部内面赤彩付着
50	-	00632		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部～脚部	60%	-	<9.4>	(9.2)	101.0	10YR7/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	横ミガキ	杯部横ミガキ、底面ナデ	外面、杯部内面	
50	-	00633		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	高杯	脚部	40%	-	8.8	(6.8)	142.0	10YR7/3 にぶい黄	白色粒・石英 混	良好	脚部ナデ	脚部外面、杯部内面	粘土紐痕	
50	192	00635		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	14.9	4.5	8.4	328.0	2.5YR4/6 赤	径1mm以下の砂混、白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面		
50	50	00636		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	12.0	3.9	5.0	130.0	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	脚部横ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底部縦ミガキ	全面	
50	192	00637		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	10.4	3.1	4.5	116.0	7.5R3/6 暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	全面		
50	-	00638		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	11.1	3.6	5.2	149.0	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	全面	底面赤彩剥離	
50	193	00639		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	壺	頸部～底部	50%	-	6.9	(21.9)	718.0	7.5YR7/6 橙	白色粒 混	良好	横ミガキ	横ナデ	-	底面わずかに赤彩
50	192	00640		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	80%	11.3	3.8	5.6	149.0	10R3/6暗赤 (10YR6/3にぶい黄)	白色粒 混	良好	脚部横ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	内外面	
50	-	00641		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～脚部下半部	30%	<14.0>	-	(6.0)	78.0	10R3/6暗赤 にぶい黄	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面		
50	-	00642		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	100%	13.0	4.6	6.0	183.0	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面	底面わずかに赤彩	
50	192	00643		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	40%	<11.5>	3.8	3.7	71.0	10R4/6赤褐	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面	口辺部2孔	
50	-	00646		4 SD4006	弥生後期	弥生土器	高杯	杯部	50%	<12.7>	-	(7.0)	183.0	10R3/6暗赤	白色粒 混	良好	横ミガキ	内外面		
51	-	00814		4 区検出面	弥生後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	(3.7)	15.8	10YR7/4 にぶい黄	白色粒 混	良	剥離	脚部外面、口形浮文			
51	-	01573		1・2 区検出面	弥生後期	弥生土器	鉢	口縁部～底部	90%	18.6	5.1	8.5	443.0	10R4/6赤	径1～3mmの礫 混	良好	脚部横ミガキ、底面ミガキ	脚部横ミガキ、底面ミガキ	内外面	底面一部赤彩付着
51	-	01577		1・2 IIW-21	弥生後期	弥生土器	壺	口縁部～底部	70%	-	5.1	(14.2)	312.0	10YR7/4 にぶい黄	黒色粒 混	良好	横ミガキ	口辺部横ミガキ、脚上半部横ミガキ、脚中央部横ミガキ、脚下半部横ミガキ、底面ナデ	口辺部内外面、脚部外面	輪襷痕
51	-	01578		IIW21 表土	弥生後期	弥生土器	甕	口縁部～脚部	30%	12.7	-	(13.5)	146.0	10YR7/3 にぶい黄	白色粒 混	良好	横ミガキ	ナデ後部横ミガキ、脚部下半部横ミガキ	-	輪襷痕
51	193	02304		1・2 SB0100	弥生後期	弥生土器	甕	底部	5%	-	<7.1>	(2.2)	93.0	7.5YR7/4 にぶい黄	径1mm以下の白色粒 微量	良好	底面縦ミガキ	ミガキ	-	底面縦襷痕

図版 No.	PL No.	管理 No.	出土位置			時期	種類	器種	残存部位	残存率	法量				内面色調	胎土	焼成	外面調整 (施文含む)	内面調整	赤彩	備考	
			地区	遺構・地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)						口径cm	底径cm	器高cm	重量g								胴部 最大径cm
51	-	06932	5	SB5043	C区	弥生 後期	弥生土器	壺	口縁部	5%	<9.5>	-	(2.6)	10.0	-	7.5R4/6 赤	径1mm以下 の白色粒 微量	良好	ミガキ	ミガキ	内外面	
51	183	06946	1・2	SD0006 (SK43)	No.1	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部	5%	<19.4>	-	(6.9)	126.0	-	10YR6/3 にぶい黄 橙	径1mm位の 白色粒 微量	良好	口唇部・通線指頭圧痕 縞描状文、口辺部ミ ガキ	ナデ	-	
51	-	06947	1・2	SD0006 (SK0043)	-	弥生 後期	弥生土器	甕	口縁部～胴 部	10%	13.0	-	(7.6)	215.0	-	10YR7/3 にぶい黄 橙	径1～3mmの 白色粒 微量	良好	口縁部ナデ 口辺部・ 胴部縞描状文、頸 部輪画縞状文	横ミガキ	-	
51	183	06949	1・2	SK0065 (ST0006)	-	弥生 後期	弥生土器	高杯	杯部	5%	<22.5>	-	(5.9)	47.0	-	10R5/4赤 褐	径1mm以下 の白色粒 微量	良好	ミガキ	ミガキ	内外面	
51	183	06959	7	SK7021	-	弥生 後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	-	(2.6)	7.0	-	10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm以下 の白色粒 微量	良好	オオノコ文か	ミガキ	-	
51	-	06964	1・2	ST0001	Pr6No.1	弥生 後期	弥生土器	高杯	脚部	30%	-	<15.4>	(14.0)	400.0	-	杯淵10R 4/6赤 脚部10Y R8/3にぶ い黄橙	径1mm以下 の白色粒 微量	良好	縦ミガキ 裾部横ミガキ のちナデ 裾部ハケ	杯部ミガキ 脚部(ケズ) のちナデ 裾部ハケ	内外面	
51	-	06976	3	区表土	表土	弥生 後期	弥生土器	壺	頸部	5%	-	-	(8.4)	55.0	-	10R4/6赤 10YR7/4 にぶい黄 橙	径1mm位の 白色粒 少 量	良好	横羽状文 格子目文	ミガキ ナデ	口辺部 内外面、 胴部外 面	

付表5 弥生時代後期ミニチュア土器一覧（報告書掲載分）

図版No.	PL No.	管理No.	出土位置			器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	調整	赤彩
			地区	遺構地点	注記記号 (所属遺構・地点名は省略)				口径cm	底径cm	器高cm	重量g	胴部最大径cm						
15	171	00025	1・2	SB0035	No.43	杯	口縁部～底部	90%	8.5	4.3	5.1	98.4	-	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/2灰黄	径1mm位の 小礫混	良好	外：口縁部ナデ、体部～底部ケズリ（一部ミガキ）、底部外面黒班内：ナデ、ミガキ、底部ケズリ	-
52	194	00090	4	SB4002	No.1200	鉢	口縁部～底部	100%	7.1	3.7	5.8	116.5	-	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫微量	良好	外：ヘラナデ、一部黒班、輪積痕、指ナデ痕内：ミガキ、底部ミガキ痕	-
52	194	00098	4	SB4035	No.6	片口鉢	口縁部～底部	90%	9.7	4.0	4.4	124.8	-	2.5YR4/6赤褐、10YR7/4にぶい黄橙	2.5YR4/6赤褐、10YR7/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫混	良好	外：ミガキ内：磨滅	全面
52	194	00108	4	SB4066	No.1	鉢	口縁部～底部	100%	7.7	4.0	3.7	72.3	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫微量	良好	外：ミガキ内：ミガキ	-
52	194	00270	8	SB8005	No.2	甕	口縁部～底部	100%	6.6	4.1	7.4	159.9	6.8	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/4浅黄	径1mm以下の礫微量	良好	外：ミガキ、一部スス付着内：ミガキ、ナデ、一部スス付着	-
52	-	00372	8	SB8027	南角北角床	鉢	胴部～底部	30%	-	<3.2>	(3.3)	21.0	-	7.5YR3/1黒褐	10YR6/4にぶい黄橙	白色粒混	良好	外：ミガキ内：ナデ	-
52	-	00519	6	SB6067	B SB3041a	鉢	口縁部～底部	60%	<7.1>	<3.7>	4.1	50.0	-	2.5YR3/6暗赤褐	10R3/6暗赤	白色粒混	良好	外：ミガキ内：ミガキ	内外面
31	180	00660	3	SB3036	北区	甕	口縁部～胴部	30%	7.9	-	(7.5)	81.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	白色粒混	良好	外：ナデ？内：ミガキ	-
52	194	00736	4	SB4002	C区	甕	口縁部～底部	80%	7.7	4.6	11.9	225.0	-	10YR4/2灰黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	白色粒混	良好	外：ナデ、輪積痕内：輪積痕	-
52	-	00807	4	SB4029	No.1南区床	甕	口縁部～胴上半部	50%	8.2	-	(7.1)	83.5	-	10YR6/2灰黄褐	10YR7/2にぶい黄橙	白色粒混	良好	外：ミガキ内：ミガキ	-
52	-	00835	4	SB4030	No.21南区	鉢	口縁部～底部	80%	6.6	3.0	3.2	41.0	-	10R3/4暗赤	10R4/4赤褐	白色粒混	良好	外：ミガキ内：ミガキ	内外面
52	-	00875	4	SK4259	-	粗製鉢	胴部	5%	-	-	(1.8)	10.0	-	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR5/6明褐	径1mm位の礫微量	良好	外：ナデ、輪積痕内：ナデ、輪積痕	-
52	-	00888	3	SB3087	b c	甕	口縁部～底部	50%	<8.8>	4.9	11.1	150.0	-	7.5YR6/8橙	5YR5/6明赤褐	雲母混	良好	外：ナデ、ナデ後横ミガキ内：ナデ後ミガキ、紐痕	-
52	194	00941	3	SB3082	Pit9	甕	口縁部～底部	95%	6.7	3.3	7.6	148.0	-	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	白色粒混	良好	外：ミガキ、ハケ、ナデ、輪積痕内：ナデ、輪積痕	-
52	-	01027	3	SB0307	No.14	壺	胴上半部～底部	50%	-	4.1	(6.7)	89.0	-	5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/6橙	白色粒混	良好	外：ハケ、ミガキ内：ナデ、ミガキ	-
52	-	01219	1・2	SB0067	H-9 H-9・10	手捏ね土器	口縁部～胴下半部	5%	-	-	(2.8)	6.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	径1mm以下の礫混	良好	外：輪積痕内：輪積痕	-
11	168	01333	1・2	SB0024 (SB0045)	No.1	鉢	口縁部～底部	100%	8.4	4.2	3.9	94.0	-	10R3/6暗赤	10R3/6暗赤	白色粒少し混	良好	外：ミガキ、ナデ内：ミガキ、ナデ	内外面（剥離・磨耗）
19	173	01368	1・2	SB0049	南北ベ	鉢	口縁部～底部	60%	<8.5>	2.8	3.7	42.0	-	10R4/6赤	10R4/6赤	白色粒混	良好	外：ミガキ、ナデ内：ミガキ、ナデ	内外面
13	-	01378	1・2	SB0030	北東区	甕	口縁部～胴上半部	20%	7.4	-	(4.6)	23.0	-	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR3/2黒褐	白色粒混	良好	内：ミガキ	-
13	-	01379	1・2	SB0030	北東区	甕	口縁部～胴上半部	20%	<7.0>	-	(5.4)	28.0	-	10YR3/1黒褐	10YR2/2黒褐	角閃石混	良好	外：ミガキ？ 摩耗内：ナデ後ミガキ	-
52	-	01574	1・2	1.2区検出面	ケ	赤彩高杯	口縁部～脚部	20%	<5.6>	<2.9>	(3.6)	13.0	-	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/6明赤褐	白色粒混	良好	外：ミガキ内：ミガキ	外面、杯部内面

図版No.	PL No.	管理No.	出土位置			器種	残存部位	残存率	法量					外面色調	内面色調	胎土	焼成	調整	赤彩
			地区	遺構地点	注記記号 (帰属遺構・地点名は省略)				口径cm	底径cm	器高cm	重量g	胸部最大径cm						
52-		01579	1・2	ⅢH17検出面	H17ケ	鉢	口縁部～底部	30%	<1.6>	<1.9>	(2.5)	15.0	-	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/4浅黄橙	白色粒少し混	良好	外：ナデ 内：ナデ後指頭圧痕	-
52-		03412	3	SB3093	-	粗製鉢	胴部	5%	-	-	(2.3)	9.0	-	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	径1mm位の白色粒微量	良好	外：ナデ、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
52-		03414	4	SB4039	-	粗製鉢	口縁部～胴部	5%	-	-	(2.0)	6.0	-	7.5YR7/4にぶい橙	10YR8/4浅黄橙	径1mm以下の礫微量	良好	外：ナデ後指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ後指頭圧痕	-
52-		03416	5	SB5019	東区	粗製鉢	胴部	5%	-	-	(3.4)	10.0	-	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ後指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
52-		03418	5	SB5026	上カクン	粗製鉢	口縁部～胴部	10%	-	-	(2.5)	10.0	-	10YR5/1褐灰	10YR6/3にぶい黄橙	径1mm位の礫微量	良好	外：ナデ、輪積痕 内：ナデ後指頭圧痕	-
52	194	03419	5	SD5003～5005	II D-07	粗製鉢	胴部～底部	60%	-	5.4	(3.8)	126.0	-	7.5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ、ナデ後指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ後指頭圧痕、輪積痕、工具痕？	-
52-		03421	5	5区 II I-11	II I-11 フケ	粗製鉢	口縁部～胴部	10%	<6.2>	-	(3.3)	12.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	径1mm位の白色粒微量	良好	外：ナデ、指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
52-		03422	1・2	SB0002	北東角	-	口縁部～底部	90%	1.9	-	1.7	5.0	-	10R5/6赤 7.5YR5/1褐灰	10R5/8赤	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ 内：ナデ	内外面
-	-	03424	1・2	SB0065・0066	上層	-	口縁部～頸部	10%	<7.0>	-	(3.0)	10.0	-	7.5YR3/1黒褐	7.5YR7/6橙	径1mm位の白色粒微量	良好	外：ナデ 内：ナデ、輪積痕	-
52-		03426	1・2	SB0143	北西区	-	頸部～胴部	10%	-	-	(3.9)	13.0	<7.4>	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫微量	良好	外：ミガキ 内：ナデ、ミガキ、輪積痕	-
52-		03430	5	SD5007	-	-	口縁部～胴部	10%	<8.6>	-	(4.1)	8.0	-	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	径1mm以下の礫少量	良好	外：ナデ 内：ナデ	-
-	-	03411	1・2	SB0143	B区	粗製鉢	胴部	5%	-	-	-	6.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6にぶい黄橙	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ、輪積痕 内：ナデ後指頭圧痕、輪積痕	-
-	-	03413	4	SB4018	-	粗製鉢	胴部	5%	-	-	-	9.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6にぶい黄橙	径1～2mmの礫微量	良好	外：ナデ後指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ後指頭圧痕、輪積痕	-
-	-	03415	4	SB4039	-	粗製鉢	胴部	5%	-	-	-	4.0	-	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6にぶい黄橙	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
-	-	03417	5	SB5026	上カクン	粗製鉢	口縁部	5%	-	-	-	4.0	-	10YR5/2灰黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ後指頭圧痕、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
-	-	03420	5	SD5007	-	粗製鉢	口縁部～胴部	5%	-	-	-	8.0	-	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫微量	良好	外：ナデ、輪積痕 内：ナデ、輪積痕	-
-	-	03423	1・2	SB0047	-	-	口縁部～胴部	20%	-	-	-	1.0	-	10R4/6赤橙	2.5YR4/6赤褐	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ミガキ 内：ナデ	内外面
-	-	03425	1・2	SB0064・65	-	-	頸部	5%	-	-	-	3.0	-	10YR4/2褐灰	10YR4/1褐灰	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ヘラナデ 内：ナデ、ミガキ	-
-	-	03427	1・2	SB0172 (SB0044)	-	蓋	ツマミ部	5%	-	-	-	23.0	-	7.5YR6/6橙	5Y3/1オリープ黒	径1mm以下の白色粒微量	良好	外：ナデ 内：ナデ	-
-	-	03428	3	SB3069	-	-	胴部	5%	-	-	-	3.0	-	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫少量	良好	外：ナデ 内：ナデ後指頭圧痕	-
-	-	03429	4	4区検出面	ケ	-	胴部	10%	-	-	-	10.0	-	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	径1mm以下の礫少量	良好	外：ミガキ 内：ナデ	-



# 報告書抄録

ふりがな	にしちかついせきぐん							
書名	西近津遺跡群							
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2 - 佐久市内 2 -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	104							
著作者名	柳澤 亮、岡村秀雄、廣瀬昭弘、若林 卓、寺内貴美子、長谷川桂子、高津希望、茂原信生、櫻井秀雄、本郷一美、覚張隆史							
編集機関	(一般財団法人) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2015年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市 町 村	ド 遺跡番号	北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
にしちかついせきぐん 西近津遺跡群	ながのけんさくし 長野県佐久市 ながとろあざもりした 長土呂字森下	20217	29	36° 17' 03" (世界測地系)	138° 27' 25" (世界測地系)	20060622 ~ 20061222 20070410 ~ 20071220 20080602 ~ 20081222	23,950	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西近津遺跡群	集 落 跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古墳・奈良・平安時代 中世 近世 縄文時代～中世	竪穴住居跡 2、 屋外埋設土器 1 竪穴住居跡 110、円形・ 方形周溝墓 19、土坑墓 3、木棺墓 3、溝跡 1 方形周溝墓 3 竪穴住居跡 432、 掘立柱建物跡 122 方形区画状遺構 1、 木棺墓 3、溝跡 5 竪穴建物跡 4、 井戸跡 3、溝跡 14 土坑墓 1 土坑 2467 基	縄文土器、打製石鏃、打 製石斧、石匙、弥生土器、 人形土器、土器片加工板、 磨製石鏃、勾玉、みがき 石、磨石、敲石、刃器、 土師器、須恵器、黒色土 器、灰釉陶器、緑釉陶器、 紡錘車、帯飾具、砥石、 カマド材、鉄製品(焼印、 刀子、鉄鏃、鎌、苧引具、 鍬・鋤先ほか)、銅製品(銅 印、銭貨、耳環、帯先金 具)、骨製品・骨(ヒト、 ウシほか)		弥生時代後期の超大型竪 穴住居跡(全長18m超)。 同期の集落を区画する大 溝。古墳時代前期古墳 3 基。奈良時代から平安時 代の文字を記された土器 多数出土。「美濃国」刻 印・「郡」ヘラ書・「大井 寺」墨書・「大井」ヘラ書・ 墨書ほか。 平安時代の銅製私印、墨 書土器と印字が共通する 焼印の発見。 平安時代末～中世の区画 溝からウマ・ウシ骨多数 出土。		
要 約	<p>浅間山麓に形成された田切地形の末端近く、標高 705 ～ 711 m の台地上に立地する。北側は小諸市境を流れる湧玉川に切れ、南側は濁川の氾濫低地に向かって緩やかに傾斜する。表土は薄く、現日耕作土下の同一面上で全ての時期の遺構を検出する。検出面下は当地を厚く覆う浅間第一軽石流の堆積物である。</p> <p>集落は縄文時代から中世鎌倉時代まで複合する。縄文時代の集落は中期から後期、弥生時代は後期、古墳時代以降は古墳時代中期から奈良時代、平安時代まで連続し、中世集落は鎌倉時代に該当する。墓跡としては弥生時代後期の集落に伴う円形・方形周溝墓と土坑墓、木棺墓がある程度のみをもち、古墳時代前期には湧玉川南側の崖上に方形周溝墓 3 基が分布する。平安時代には木棺墓が散見され、近世には土坑墓が 1 基確認されている。</p> <p>弥生時代後期の集落は、佐久地域で最大規模である。特に全長 18 m を超える竪穴住居跡は、当該期の国内最大級である。集落後半期には、東西に区画する大溝が計画的に掘削され、集落構造の変化が捉えられる。また骨角製品の製作痕跡のある竪穴住居跡も発見されている。</p> <p>古墳時代中期には台地北側に小規模な集落が形成される。古墳時代後期以降、集落は台地全体に広がり奈良時代、平安時代まで継続する。集落の構成主体は竪穴住居跡と掘立柱建物跡である。出土遺物としては金属製品が増加し、銭貨、文具、武具、農具、工具など多岐にわたる。特に平安時代には青銅製の四文字私印、鉄製の焼印が出土している。土器には文字の記されたものも多く出土している。「美濃国」刻印須恵器、「郡」ヘラ書須恵器、「大井寺」墨書土師器、「大井」ヘラ書・墨書須恵器・土師器といった国名や郡郷などに関わる文字のほか、現在は判読できない特殊文字を記した墨書土器も多数出土している。</p> <p>銅印、焼印、文字のある土器によって、本跡が郡家や郡寺が設置された古代佐久郡の中心地に近い可能性がより濃厚となっている。また特殊文字を記した土器や焼印は、地方社会における文字を用いた儀礼行為の具体例を提示している。</p> <p>平安時代後期以降、集落は途絶え計画的な溝跡で区画する新たな土地利用がはじまる。溝内には解体廃棄された牛馬の骨が多数発見され、その分析から当地の牛馬利用の実績が見えてきている。旧公図との照合から区画溝は明治時代まで畑地区画として存続していた可能性がある。</p>							



平成 27 (2015) 年 3 月 27 日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 104

## 西近津遺跡群

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2

－佐久市内 2－

### 第 1 分冊 (本文編)

発行者 国土交通省 関東地方整備局  
(一財) 長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター  
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4  
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157  
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社  
〒 381-0037 長野県長野市西和田 1-30-3  
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494

